

奈良文化財研究所学報 第98冊

東アジア考古学論叢 II

—遼西地域の東晉十六国期都城文化の研究—

独立行政法人 国立文化財機構

奈良文化財研究所

中国遼寧省文物考古研究院

奈良文化財研究所学報 第98冊

東アジア考古学論叢 II

—遼西地域の東晉十六国期都城文化の研究—

独立行政法人 国立文化財機構

奈良文化財研究所

中国遼寧省文物考古研究院

序

奈良文化財研究所と中国遼寧省文物考古研究所は、1996年に協定書「東アジアにおける古代都城遺跡と保存に関する研究—三燕都城等出土の鉄器およびその他金属器の保存研究」を締結して以来、継続して共同研究に取り組んでまいりました。この間、三燕文物の調査研究（1998～2001年度）、3～6世紀日中古代遺跡出土遺物の比較研究（2002～2005年度）、朝陽地区隋唐墓の整理と研究（2006～2010年度）を遂行し、その成果は『三燕文物精粹』（中国語版2002年、日本語版2004年）、『東アジア考古学論叢』（2006年）、『朝陽地区隋唐墓の整理と研究』（2013年）などの出版物に結実しています。これらの成果は、日中の学会において高い評価を得ています。

本書は、両研究所の4期目の共同研究として2011年度から2015年度にかけておこなった「遼西地域の東晋十六国期都城文化の研究」の成果を論文集というかたちでとりまとめたものです。本書の中国語版は、既に2017年12月に遼寧省で刊行になっています。本書では、全体を日本語に翻訳するとともに、中国側の論文については原文もあわせて掲載し、『東アジア考古学論叢II』（奈良文化財研究所学報第98冊）として刊行することにしました。

遼西地域では曹魏代以降、騎馬民族である慕容鮮卑が盛んに活動し、東晋十六国期には三燕と総称される鮮卑系の国家が出現します。中国王朝の周縁に位置する東アジアの諸勢力の中でも、いち早く都城や仏教を導入して国家形成を進めた三燕の歴史や文化は、日本の古代国家の形成過程を理解する上でも大いに参考となるものです。またその独自の特色を持った騎馬文化は、朝鮮半島や日本列島に対しても大きな影響を与えていました。

今回の共同研究では、初期の慕容鮮卑の墓地と目される大板营子墓地や、瓦葺基壇建物がまとまって検出された金嶺寺遺跡を中心に取り上げ、調査・研究を進めてまいりました。本書では、その検討成果やそれに付随する諸問題が活発に論じられており、今後の研究において大いに活用されるものと期待します。

本書の刊行を機に、両研究所の共同研究がますます発展し、日中両国の文化・学術交流がより一層深化することを祈念いたします。

2020年3月

独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所 所長

松 村 恵 司

序

辽宁省文物考古研究所与日本独立行政法人——奈良文化财研究所自1996年起至今20多年来，连续进行合作研究。已先后完成了“亚洲古代都城遗迹研究与保护——三燕都城等出土铁器及其他金属器的保护与研究”“3—6世纪中日古代遗迹出土文物比较研究”和“朝阳地区隋唐墓的整理与研究”等三项课题。

2010—2015年，双方又以“辽西地区东晋十六国时期都城文化研究”为题，开展了第四次合作。

自20世纪90年代以来，辽西地区东晋十六国时期的都城考古陆续有了新的成果积累，主要是三燕都城——龙城的发现，确认了龙城的具体位置就在现朝阳老城区：揭露出龙城宫城三门道的南城门；探察出龙城大概轮廓；发现了一批以兽面纹瓦头状贴面、莲花纹瓦当、饰龙凤纹的覆斗式和覆盆式柱础等建筑构件为主的重要文物。同时在三燕活动中心区——辽西的朝阳地区中部以北、北票地区中部以南的大凌河流域，调查了三官营子和“龙腾苑”遗址，全面发掘出外圆环壕、内有两组对称建筑群的金岭寺遗址，还将1965年清理发掘的冯素弗墓资料结集出版。

这些考古成果为东晋十六国时期辽西地区作为东北亚的政治、经济、军事中心之一，作为这一时期东北亚地区文化传播与交流的重要地区和三燕文化对朝鲜半岛、日本列岛文化的影响等课题的进一步研究提供了条件。以“辽西地区东晋十六国时期都城文化研究”为题的中日合作，就是深入研究这一课题的项目之一。

在这次合作研究过程中，中日双方开展了多渠道、多角度的研究工作。合作期间，日方学者到访中国五次，先后实地考察了朝阳老城的三燕龙城遗址、朝阳北塔、“龙腾苑”遗址、三官营子遗址、金岭寺遗址等与三燕都城文化有关的主要遗址，观摩了诸多出土遗物，还进行了学术演讲和学术交流活动。中方学者四次出访日本，先后考察了奈良平成京遗址、飞鸟一藤原宫遗址等日本古代都城遗址以及高松塚古坟等日本古坟时代重要遗迹，并就相关学术问题举办了学术演讲和开展专题研讨。

合作期间，中日双方学者还收集汇总了多年来学术界关于东晋十六国时期辽西地区考古学研究的相关成果，系统整理了部分以往的发掘资料并重新发表，专题研究了三燕文化形成因素及其对周边文化的影响，探讨交流了对三燕出土遗物实施科学保护的技术性问题，形成了一些新的学术观点。2015年11月，合作双方在中国沈阳召开学术会议，对本期合作进行了总结，双方相关科研人员就合作期间的学术成果进行了专题交流。

2016年，经过中日双方磋商，决定将参与本期合作的双方有关学者的研究成果和学术论

文汇集在一起，分别在两国结集出版。

本集所收入的论文，以从新的考古学视角认识东晋十六国时期辽西地区在东西方文化交流方面所起的重要作用为重点。这既是本次中日合作“辽西地区东晋十六国时期都城文化研究”项目的成果汇总，也是三燕考古研究的一批最新成果。我们共同期望，包括三燕文化在内的东晋十六国时期都城考古继续有新的重要发现，能够有更多学者特别是青年学者参与相关研究，不断取得更为丰硕的成果。

2017年12月

辽宁省文物考古研究所 名誉所长
郭大顺
辽宁省文物考古研究所 所长
吴炎亮

序

1996年以来、20余年にわたり、遼寧省文物考古研究所と日本独立行政法人奈良文化財研究所は継続的に共同研究に取り組み、「東アジアにおける古代都城遺跡と保存に関する研究—三燕都城等出土の鉄器及びその他の金属器の保存研究」、「3～6世紀中日古代遺跡出土文物の比較研究」および「朝陽地区隋唐墓の整理と研究」という三つの研究課題を達成してきました。また、2010年から2015年にかけて、双方は「遼西地域の東晋十六国期都城文化の研究」をテーマにし、第4次の共同研究を実施してきました。

1990年代以来、遼西地域における東晋十六国期の都城文化は、新たな考古学的成果を絶えず累積してきました。主要なものとしては、まず、三燕の都城である龍城跡が発見され、龍城は朝陽老城区に位置することが確定しました。龍城の宮城門である南城門を検出し、城域のおおよその範囲が推察できるようになりました。獣面紋鬼瓦、蓮華紋瓦当、龍鳳紋を施した覆斗式および覆盆式の柱礎石などの建築部材が発見され、重要な資料となっています。一方、三燕の中心地である遼西の朝陽以北では、北票地域の南を流れる大凌河流域で、三官宮子と「龍騰苑」遺跡が調査されました。また、周囲を濠で囲まれた内部空間に建築群が対称的に配置された金嶺寺遺跡が発掘されました。さらに1965年に発掘された馮素弗墓に関する報告書も刊行されました。

これらの考古学的成果は、東晋十六国期の遼西地域が東北アジアの政治・経済・軍事の中心地の一つであったことを示すとともに、当該期における東北アジア地区の文化伝播と交流、とりわけ三燕文化の朝鮮半島や日本列島文化への影響などを課題とする研究に、新たな資料を与えるものです。「遼西地域の東晋十六国期の都城文化の研究」と題する今回の中日共同研究は、まさにこのテーマを探究するものといえます。

今回の共同研究の過程で、日中双方は様々な方向や角度から研究を遂行しました。日本側の研究者が5回にわたり訪問し、朝陽老城の三燕龍城跡、朝陽北塔、「龍騰苑」遺跡、三官宮子遺跡、金嶺寺遺跡など、三燕都城文化と関係のある遺跡を見学し、多くの遺物を調査しました。さらに講演会や学術交流も実施しました。中国側の研究者は4回にわたって訪日し、奈良の平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡など日本の古代都城遺跡や、高松塚古墳などの重要遺跡を見学し、そして関連する学術テーマに対し、講演会を開催して討論をおこないました。

また、共同研究の実施期間中に中日の研究者は、東晋十六国期における遼西地域の考古学研究に関する研究史を整理し、過去の発掘資料を改めて整理した上で刊行し、三燕文化

の形成および周辺文化に対する影響を研究し、三燕で出土した遺物に対する科学的な保護という技術的な問題を検討し、これにより新しい学術的な観点が生み出されました。2015年11月に今回の共同研究の総括として、中国瀋陽でシンポジウムを開催し、研究成果をめぐって意見を交換しました。

そして2016年、中日双方の協議の上で、今回の共同研究に参加した研究者の研究成果や関連する学術論文をまとめ、それぞれ両国で論文集として編集・出版することを決定しました。

本論文集に所収された論文は、新たな考古学視点から、東晉十六国期において遼西地域が東西文化交流の方面に発揮した作用を重点的に認識しつつ、今回の中日共同研究「遼西地域の東晉十六国期の都城文化の研究」についての成果を収録するだけではなく、三燕文化に対する考古学的研究の最新成果となっています。私たちは、三燕文化を含む東晉十六国期の都城文化の考古学的研究において新しい発見が続々現れ、さらに多くの研究者、とりわけ若い研究者がこの研究に参加し、さらなる豊かな成果を得ることを共に期待しています。

2017年12月

遼寧省文物考古研究所 名譽所長

郭大順

遼寧省文物考古研究所 所長

吳炎亮

例　　言

- ・本書は日本独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所と中国遼寧省文物考古研究所（2018年11月より遼寧省文物考古研究院に組織改編）との共同研究「遼西地域の東晉十六国期都城文化の研究」（2011～2015年度）の成果論文集である。
- ・本書の中国語版は、遼寧省文物考古研究所の王宇・李霞・郑宇の編集により『辽西地区东晋十六国时期都城文化研究』（辽宁人民出版社）として2017年12月に遼寧省において刊行されている。巻頭の中国側の序文は、中国語版のものを再録し、翻訳した。
- ・本書では、日本側論文については、中国語版編集時に提出した日本語原文のみを掲載し、中国側論文については、中国語原文と日本語訳文をあわせて掲載する。挿図は中国語原文中にのみ掲載し、日本語訳文中での再掲は省略する。
- ・両研究所以外に所属する執筆者とその所属先（共同研究遂行時）は以下の通りである。

赵志伟（北票市文物管理所）、刘发力（鞍作市博物馆）、田立坤（辽宁省文物保护中心）、

王飞峰（中国社会科学院考古研究所）、白云燕（首都博物馆）。

- ・翻訳は下記の方々に依頼した（敬称略・所属は依頼時）。ご芳名の後に、担当部分、論文を併記する。翻訳者の原文を踏まえつつ、編集者が全体の調整を図ったほか、日本語で理解しやすいように用語の置き換えや意訳をおこなった部分がある。

黄　　盼（京都府立大学大学院）：序

林　　佳美（東京藝術大学大学院）：「辽宁北票市大板营子墓地的勘探与发掘（续）」、「浅谈辽西地区前燕、后燕政权中的外族居民」、「朝阳北塔在东亚佛寺布局演变序列中的地位」、「三燕文化界格图案瓦当源流考」、「喇嘛洞墓地出土铜人面饰的再考察」

大谷有恵（日本学術振興会特別研究員）：「龙城新考」、「三燕龙城宫城南门遗址及其建筑特点」、「魅力与收获」、「北票大板营子墓地出土陶器研究」、「三燕、高句丽莲花纹瓦当的出现及其关系」、「辽宁北票市喇嘛洞墓地 I M17铁甲堆积的室内清理」、「喇嘛洞铁器整理随笔四则」

- ・翻訳文中の【】内は翻訳者による註を示す。

・本書掲載の写真のうち、日本側論文の文末図版、および挿図中の一部の（引用文献からの転載を除く）写真は、栗山雅夫の撮影による。

・307～312頁掲載の図版 1～6 は、宮内庁書陵部所蔵資料を同庁の許可を得て栗山雅夫が撮影したものである。

・本書の編集は、廣瀬　覚と松永悦枝がおこなった。

目 次

辽宁北票市大板营子墓地的勘探与发掘（续）	王 宇 万 欣	1
魅力与收获：三燕文化研究新进展略议 ——以北票境内的相关考古发现为例	赵志伟 王 宇 万 欣	47
浅谈辽西地区前燕、后燕政权中的外族居民	郑 宇 刘发力 李 霞	75
龙城新考	田立坤	87
三燕龙城宫城南门遗址及其建筑特点	万堆飞	107
朝阳北塔在东亚佛寺布局演变序列中的地位	郭大顺	139
初期慕容鮮卑の墓制と親族構造に関する予察 ——北票大板营子墓地の検討から—	廣瀬 覚	153
北票大板营子墓地出土陶器研究	王 宇	169
三燕文化界格图案瓦当源流考	李新全	189
三燕、高句丽莲花纹瓦当的出现及其关系	王飞峰	209
金嶺寺遺跡出土瓦の研究	清野孝之 川畠 純 今井晃樹 石田由紀子 森先一貴	243
三燕の金工品と倭の金工品	諫早直人	293
漢～唐代の遺跡で出土した指輪とその出現背景	大谷育恵	313
喇嘛洞墓地出土铜人面饰的再考察	郭 明 王 夷	327
辽宁北票市喇嘛洞墓地IM17铁甲堆积的室内清理	万 欣 白云燕 赵代道 肖俊涛	345
喇嘛洞铁器整理随笔四则	万 欣	411
彫金技術を資料化するMacro撮影	栗山智夫	431

辽宁北票市大板营子墓地的勘探与发掘（续）

王 宇 万 欣

1. 墓地概况

大板营子墓地位于辽宁省北票市大板镇波汰沟村大板营子村民组西的台地上，相对附近河套的高差为5—6米。东北部距大板镇（金岭寺）约6公里，西北距北票至朝阳的铁路约2.5公里。为配合白石水库工程建设，辽宁省文物考古研究所曾分别于1994年秋、1999年7月和9月进行了三次发掘。第一次发掘了墓葬5座^[1]；第二和第三次共清理墓葬23座（编号99BDM1—M23），面积约480平方米，出土陶、铁、铜等器物近200件。从1999年发掘区的墓葬布局来看，诸墓大致依西北—东南向排成西、中、东3列，其中西列计有M2、M11—M16、M19—M22共11座；中列包括M3—M10和M17共9座；东列只存M1、M18和M23，共3座。墓向除M1、M18和M23外，余皆为西南向（图一）。

该墓地1999年发掘资料曾于2010年发表过一部分^[2]，包括M2、M5、M6、M8、M10、M14、M18和M22共8座。鉴于该墓地的墓葬大多保持完整，对辽西乃至我国北方地区鲜卑墓葬形制和陶系有较高的研究价值，兹将其余15座墓葬中保存完整的12座墓（M1、M3、M4、M7、M11、M12、M13、M15、M16、M19、M20、M21）的相关资料再次简报如下，以供识者研究参考。

2. 墓例举要

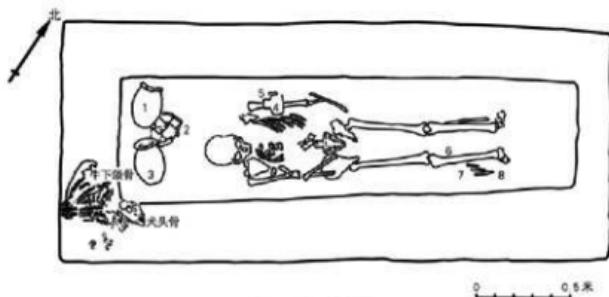
依已发表的大板营子墓地简报的墓葬形制^[3]，可将本简报所列的12座墓葬分为土扩竖穴木棺墓和土扩竖穴石椁墓2型：

A型 土扩竖穴木棺墓，共7座。木棺皆作前宽后窄状，留有熟土二层台，棺前外部多置有兽骨，未见壁龛，均无头厢。

M3 位于中列北部，其东、南、西和北侧分别为M9、M4、M12和M10，与诸墓相距0.12—1米。墓扩开口距地表0.25米左右，平面近长方形，长2.9、宽1.2—1.25、深1.54米。扩口以下1.1米左右即为熟土二层台，台宽0.18—0.36米。台上西南角随葬牛头骨和犬头骨各1具。棺长2.4、宽0.54—0.66、存高0.5米。墓主人为成年男性，单人仰身直肢葬，面向上。躯干骨残缺不全，手和脚趾骨不存。颅骨上方列置陶罐3件，铁器则在左尺骨和右胫骨处，有铲、削、鍼等。墓向234°（图二）。

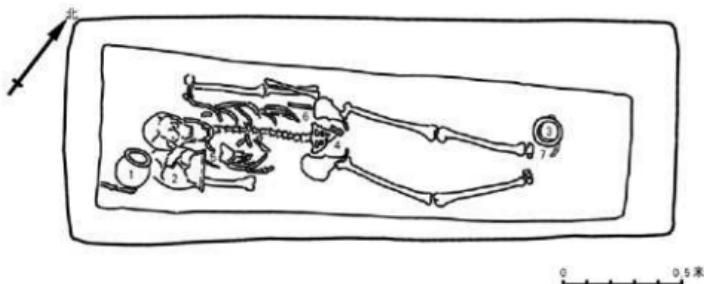


图一 大板营子基地平面图



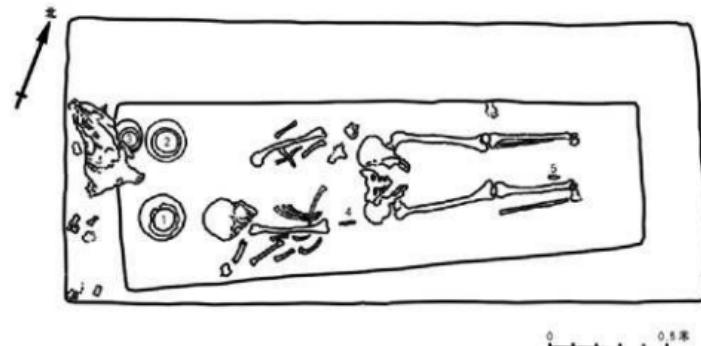
图二 M3 平面图
1-3. 陶罐 4. 铁铲 5. 铁削 6-8. 铁劍

M4 位于中列北部，其东南、西南和北侧分别为M5、M13和M3，与诸墓相距0.6-2.9米。墓扩开口距地表0.25米左右，平面呈长方形，长2.6、宽0.9、深0.8米。扩口以下0.45米左右即为熟土二层台，台宽0.09-0.3米。棺长2.2、宽0.5-0.66、存高0.08米。墓主人为成年男性，单人仰身直肢葬，面向上。人骨保存较好。下肢略斜屈，右尺骨和手、脚趾骨不存。颅骨右侧和左脚趾骨处分别置陶罐，削、铲、镰等铁器则主要散见于躯干骨部位。墓向237°（图三）。



图三 M4 平面图
1-3. 陶罐 4. 铁铲 5. 铁削 6-7. 铁劍

M11 位于西列之北，其东、南和北侧分别为M10、M12和M2，与诸墓相距0.4-3.2米。墓扩开口距地表0.3-0.34米，平面呈长方形，长2.72、宽1、深2.1米。扩口以下1.4米左右即为熟土二层台，台宽0.06-0.36米。台上西北角随葬牛头骨和牛距骨若干。棺长2.24、宽0.58-0.78、存高0.42米。墓主人为成年男性，单人仰身直肢葬，面向东南。人骨躯干部

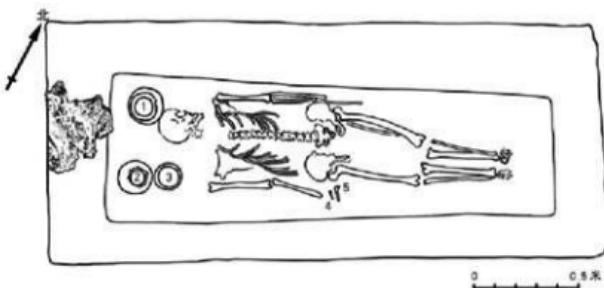


图四 M11 平面图
1. 骨盆 2、3. 陶罐 4、5. 铁器

分散乱不全。手和脚趾骨不存。颅骨上方列置陶罐及壶3件，其他部位有铁器2件。墓向252°（图四：图版一、1）。

M13 位于西列北部，其东、东南和西北侧分别为M4、M14和M12，与诸墓相距1.2-3米。墓扩开口距地表0.34米，平面呈长方形，长2.7、宽1.22、深1.6米。扩口以下0.96米左右即为熟土二层台，台宽0.18-0.45米。西南二层台中部堆放犬头骨和趾骨若干。棺长2.2、宽0.54-0.7，存高0.32米。墓主人为成年男性，单人仰身直肢葬，面向北。人骨保存尚好，但椎骨残缺。手和脚趾骨不存。颅骨上方列置陶罐及壶3件，其他部位有铁器2件。墓向252°（图五：图版一、2）。

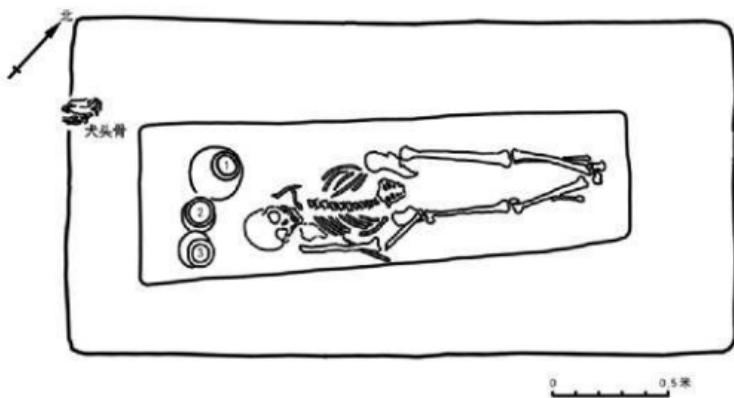
M15 位于西列中部，其东、南和北侧分别为M17、M16和M20，与诸墓相距1.3-5.6米。墓扩开口距地表0.26米左右，平面呈长方形，长2.9、宽1.45、深1.8米。扩口以下1.4米即为熟土二层台，台宽0.32-0.48米。西南二层台偏西部放置犬头骨1件。棺长2.16、宽



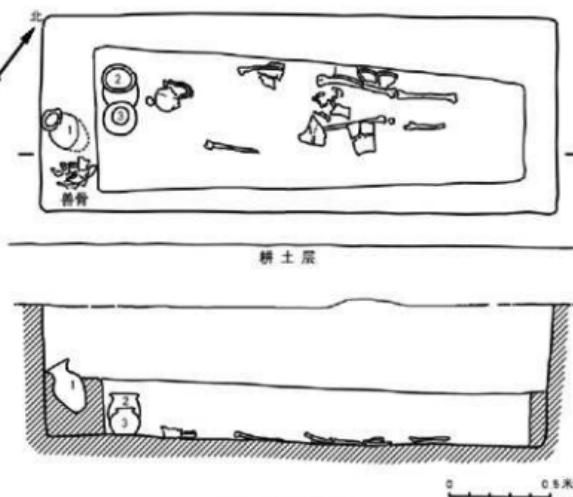
图五 M13 平面图
1、2. 陶盆 3. 陶罐 4. 铁劍 5. 铁劍

0.54-0.68，存高0.24米。墓主人为未成年男性，单人仰身直肢葬，面向上。人骨保存较好，但右股骨残缺，手和脚趾骨不存。颅骨上方列置陶罐及壶3件。墓向227°（图六）。

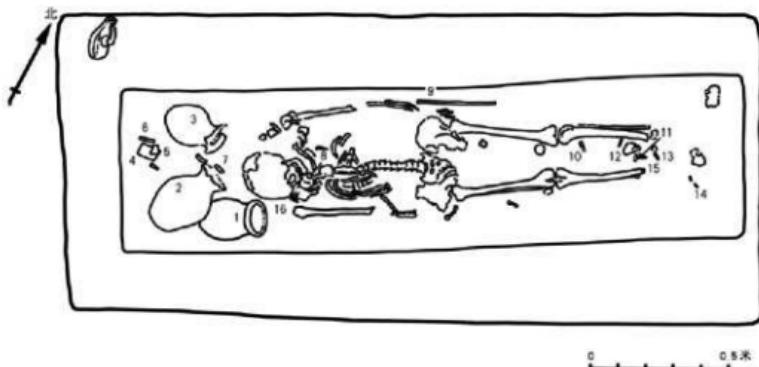
M19 位于西列中部，其东、南和北侧分别为M7、M20和M14，与诸墓相距1.3-3.8



图六 M15 平面图
1-3. 陶罐



图七 M19 平面图
1. 陶壶 2、3. 陶罐



图八 M20 平面图
 1. 陶罐 2、3. 陶壶 4. 铁斧 5. 铁铲状器 6. 铁甲片 7. 铁锤
 8. 铜附件 9. 铁削 10. 11. 12-14. 16. 铁镰 15. 铁锄

米。墓扩开口距地表0.3米，平面呈长方形，长2.55、宽0.98、深0.95米。扩口以下0.34-0.43米即为熟土二层台，台宽0.1-0.34米。西北二层台中部放置陶壶1件，在陶壶与西南角之间堆置兽骨。棺长2.55、宽0.43-0.72、存高0.95米。墓主人为成年男性，单人仰身直肢葬，面向上。人骨保存较差，除残存的颅骨和上、下肢骨外，其他皆不存。颅骨上方列置陶罐2件。墓向220°（图七）。

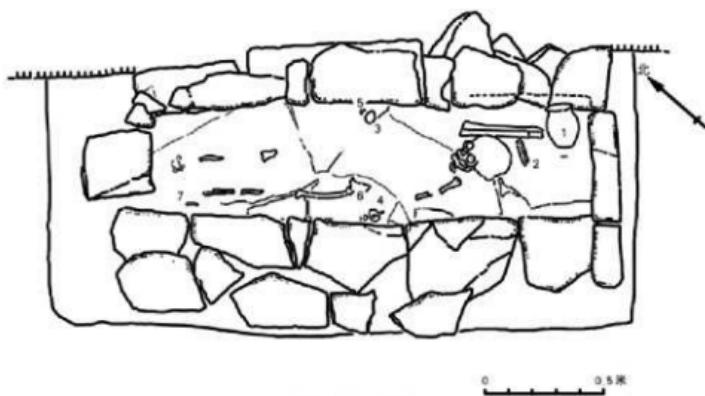
M20 位于西列中部，其东、南和北侧分别为M8、M15和M19，与诸墓相距1.2-5米。墓扩开口距地表0.28-0.32米，平面呈长方形，长2.5、宽1.16，深1.9米。扩口以下1.4米左右即为熟土二层台，台宽0.06-0.34米。二层台西北角陈放犬头骨1个。棺长2.26、宽0.62、存高0.16米。墓主人为成年男性，单人仰身直肢葬，面向上。人骨保存略差，骨骼残缺，指骨和趾骨不存。颅骨上方列置陶罐、陶壶和铁斧、铁镰等，右髋骨一侧及两胫骨之间则随葬铁削、铁镰等。墓向247°（图八：图版一，3）。

B型 土扩竖穴石椁墓，共10座。皆以形状不规则的石板和石块（黄白色或浅绿色砂岩质）砌筑而成。按照砌法不同和有无葬具可分为以下3个亚型：

Ba型 2座，石椁木棺墓，M8和M22，墓葬资料已发表^[4]。

Bb型 8座，石椁墓，无木棺。除了M1的石椁东壁为一块较大的立石板之外，其余诸墓的石椁四壁均以毛石平卧砌筑，石片铺底，椁口再以较大的石板和毛石封盖叠压。

M1 位于东列北部，其南侧和西侧分别为M18和M8，与此二墓相距3.4-4.1米。墓扩开口距地表0.3米左右，平面呈长方形，长2.5、深1.53米。因墓扩北壁已随断崖坍毁，故其宽不详。扩口以下0.4-0.6米左右即为熟土二层台，台宽0.2-0.4米左右。椁口长1.88、宽



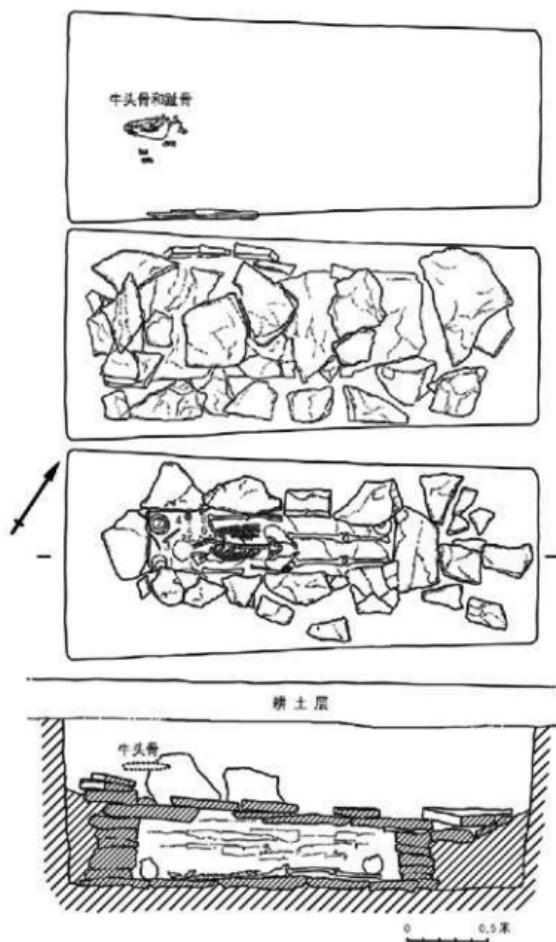
图九 M1 平面图
1. 陶罐 2. 骨笄 3、4. 铜圆 5、6. 铜环 7. 铁削

0.4-0.45、深0.6米。墓主人成年女性，仅存颅骨和少量肢骨，单人仰身直肢葬，面向上。颅骨右上方放置陶器1件，颅顶和尺骨处随葬有骨笄、铜镯等。墓向132°（图九）。

M7 位于中列中部，其东、南、西和北侧分别为M1、M8、M19和M6，与诸墓相距1-4.6米。墓扩开口距地表0.26米左右，平面呈长方形，长3、宽1.2、深1.3米。扩口以下0.34-0.52米左右即为熟土二层台，台宽0.38-0.88米左右。另在墓扩内西部距地表深约0.55米处随葬牛头骨1具和犬趾骨若干。椁长1.55、宽0.26-0.35、存高0.35米；椁底长1.65、宽0.3-0.4米。墓主人成年男性，单人仰身直肢葬。颅骨朽残严重，面向不详，左手骨和双脚趾骨不存，其余保存尚好。颅骨上方列置陶罐2件，左脚趾骨处置陶壶1件。颅骨左侧随葬铜耳环、玛瑙珠和陶纺轮等。墓向232°（图十；图版二，1）。

M12 位于西列北部，其东、东南和北侧分别为M3、M13和M11，与诸墓相距0.4-2.3米。墓扩开口距地表0.25-0.3米，平面呈长方形，长2.8、宽1.42、深1.64米。扩口以下0.9米左右即为熟土二层台，台宽0.26-0.58米左右。椁长2.14、宽0.38-0.52、高0.38-0.42米。墓主人成年男性，单人仰身直肢葬，面向上。人骨躯干部分散乱，手和脚趾骨皆不存。随葬陶器3件均置于左胫骨外侧和左趾骨处，右尺骨两侧有铁等铁器若干。墓向224°（图十一；图版二，2）。

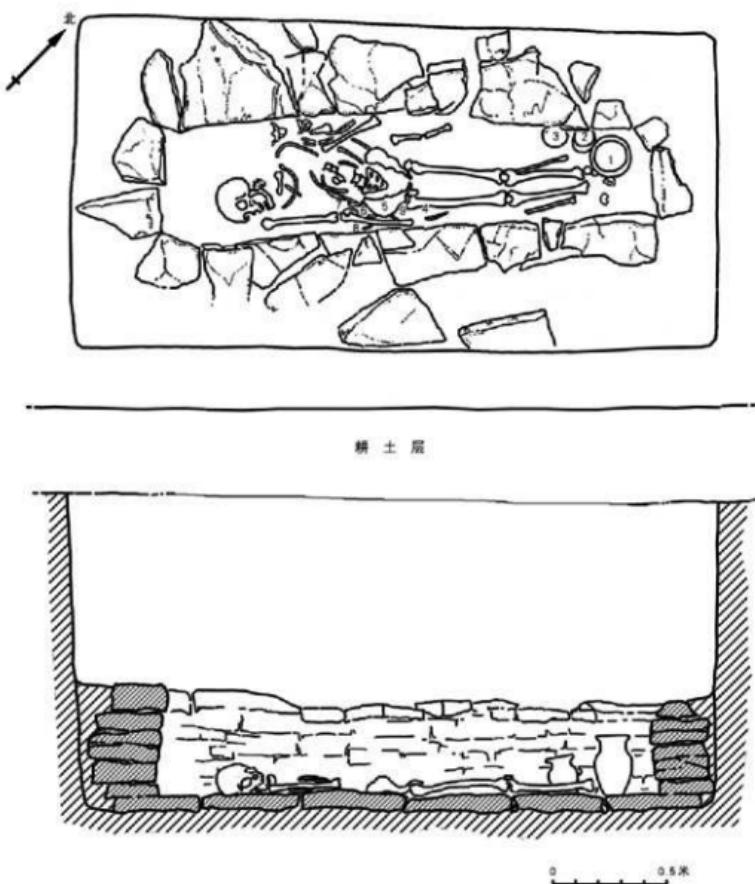
M16 位于西列南部，其东北、南和北侧分别为M17、M21和M15，与诸墓相距1.2-5.5米。墓扩开口距地表0.15-0.2米，平面呈长方形，长2.7、宽0.96-1.08、深1.15米。扩口以下0.5米左右即为熟土二层台，台宽0.3-0.5米左右。椁长2.08、宽0.18-0.32、存高0.34米。墓主人成年女性，单人仰身直肢葬，左胫搭于右胫之上，面向偏右。人骨保存较好。



图十 M7 平、剖面图
1、2、7. 陶罐 3. 骨笄 4. 陶纺轮 5. 铜耳环 6. 玛瑙珠 8. 铁锁

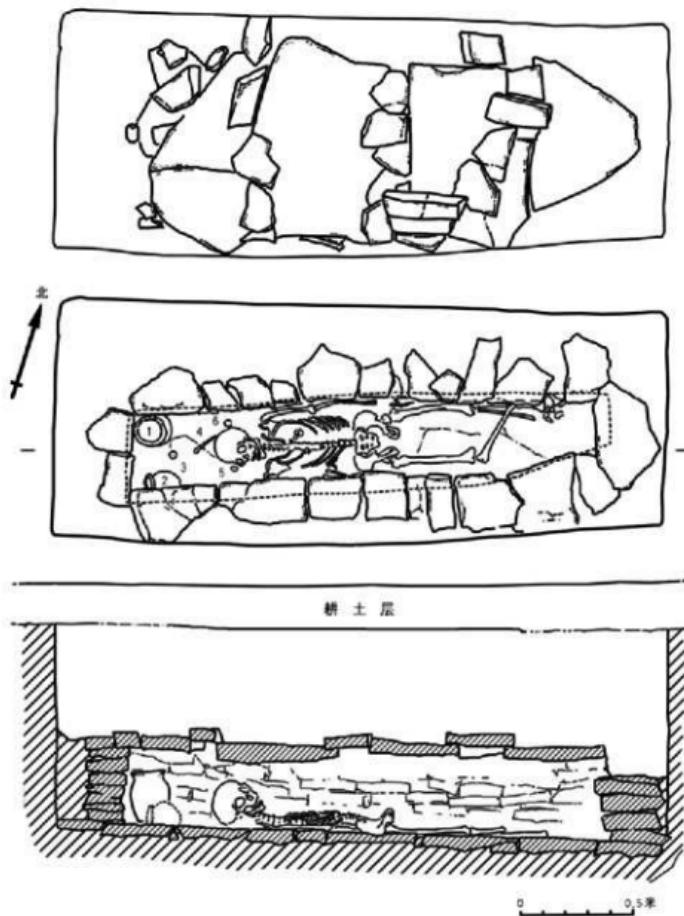
但手和脚趾骨皆不存。颅骨上方放置陶器2件，颅顶和两侧则随葬有骨笄和金、银耳环等。
墓向247°（图十二）。

M21 位于西列南部，其北和南侧分别为M16和M22，与诸墓相距1.3-1.9米。墓圹开



图十一 M12 平、剖面图
1. 陶罐 2、3. 陶盆 4. 铁削 5-9. 铁镜

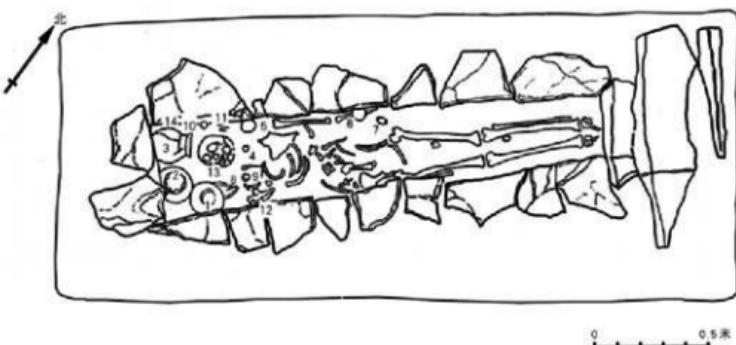
口距地表0.28-0.38米，平面呈长方形，长3、宽1.2、深1.3米。扩口以下0.4-0.6米左右即为熟土二层台，台宽0.38-0.88米左右。椁长1.95、宽0.24-0.4、存高0.32-0.38米。墓主人为成年女性，单人仰身直肢葬，面向上。人骨躯干部分散乱，左上肢骨残失，手和脚趾骨皆



图十二 M16 平、剖面图
1、2. 陶罐 3. 陶纺轮 4. 骨笄 5. 银耳环 6. 包金耳环

不存。颅骨上方及一侧列置陶器3件，颅骨右侧和颈、胸部则有玛瑙珠、铜耳环、陶纺轮和铜镯等。墓向248°（图十三）。

此外，M6资料已发表^[5]，M9为规格很小、结构简陋的儿童墓（随葬陶罐1件），M17则已被破坏，故此3座墓从略。



图十三 M21 平面图
1、2. 陶壶 3. 陶罐 4、12. 玛瑙珠 5、6. 铜镜 7. 铜指环 8、11. 铁削
9. 铜耳环 10. 青纺轮 13. 玛瑙管状饰 14. 陶纺轮

Bc型 2座，石板墓，即其四壁皆为立支的石板，无木棺。除了已发表的M5之外，M23亦属此型。因此墓位于东排的最北端的土崖边缘（与M1相距30多米，故在已发表的墓葬分布图中未能绘入），多半已坍毁，墓内仅存1件陶罐。

3. 器物综述

在上述11座墓葬中，出土各类随葬器物共94件，可分为陶器、铁器和其他类3类。

a. 陶器

共35件，除了2件纺轮（即M7：4和M21：14，已发表）之外，计有陶罐和陶壶共33件。多数墓内随葬3件，少数墓内随葬1件或2件（如M1和M16）。从随葬位置看，多置于颅骨的顶部或一侧，也有将3件陶器中的1件放在足侧者（如M4和M7），只有M12中将3件陶器均置于足侧。这些情况和已发表的8座墓葬是一致的^[6]。

壶 14件。皆为泥质陶，制法为套接轮修，有的颈部尚有轮修痕迹。展沿，多圆唇，有的唇下微出折棱；溜肩或圆肩，平底，有的壶底略内凹，个别还带有印记。器表以素面为主，有的饰暗纹、弦纹及压印几何纹。依据其器形差异可分

以下2型：

A型 10件。溜肩，腹较深，器形略显瘦高，一般高20厘米以上，且口部多有破茬现象。

M3：1，完整。舌状唇，束颈，溜肩，弧腹，平底。肩部饰竖向磨光暗纹，腹部饰压印席纹。口径11.2、腹径12.9、底径8.2、高20.5厘米。

M11：1，口沿残。圆唇，展沿，束颈，溜肩，深弧腹，平底。颈部饰竖向磨光暗纹，其下饰2周刻弦纹，弦纹间夹饰刻划水波纹。口径13.6、腹径21.5、底径10.2、高25.5厘米（图十四，2）。

M12：1，残，可复原。舌状唇，展沿，束颈，溜肩，深弧腹，平底。肩部饰2周刻划弦纹，腹部饰网格状磨光暗纹。口径7.1、腹径17、底径8.9、高25.6厘米(图十四，4；图版三，1)。

M13：1，残，可复原。圆唇，展沿，溜肩，弧腹，底部略呈圈足状。肩部饰2周刻划弦纹。口径13.3、腹径17.5、底径9.5、高23.6厘米(图十四，3)。

M13：2，口沿残。圆唇，展沿，束颈，溜肩，深弧腹，平底。肩部饰2周刻划弦纹。口径13.2、腹径17.6、底径10、高23.9厘米(图十四，1；图版三，3)。

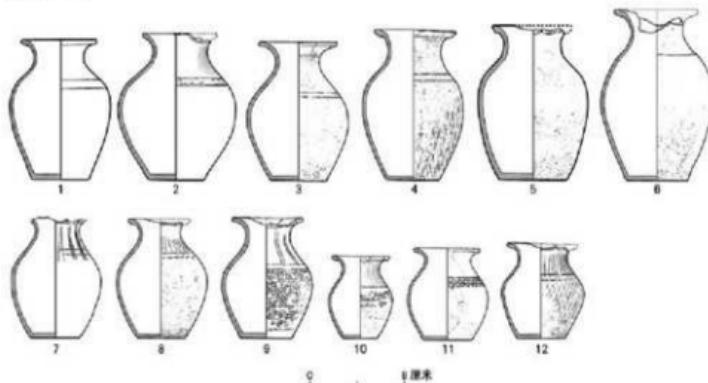
M19：1，口沿残。近底部有套接痕迹。圆唇，展沿，束颈，溜肩，深弧腹，平底。肩部饰1周刻划弦纹。口径14.1、腹径19.2、底径10.3、高29.8厘米(图十四，6；图版三，2)。

M20：2，口沿残。下腹部有打磨痕迹。舌状唇，展沿，束颈，溜肩，深弧腹，平底。素面。腹径18.6、底径11.5、高26厘米(图十四，5；图版三，4)。

M20：3，口沿残。近底部有刀削痕迹。舌状唇，展沿，束颈，溜肩，弧腹，平底，底部有模糊的方形压印痕迹。颈部饰2道为一组的竖向磨光暗纹，其下饰2周刻划弦纹。口径10.6、腹径15.4、底径8.1、高20.1厘米(图十四，9)。

M21：1，口沿残。舌状唇，展沿，束颈，溜肩，弧腹，平底。颈部饰竖向压印纹，肩部饰2周弦纹。口径10.8、腹径16.7、底径8.7、高21.1厘米(图十四，8)。

M21：2，口沿残。颈部有轮修轮纹，器内下腹部有套接痕迹。束颈，溜肩，长斜腹，平底，底部有圆形压印痕迹。颈部饰竖向磨光暗纹。腹径15.2、底径8.3、残高20.4厘米(图十四，7)。



图十四 出土陶壶

1-9. A型壶 (M13：2, M11：1, M13：1, M12：1, M20：2, M19：1, M21：2, M21：1, M20：3)
10-12. B型壶 (M12：3, M7：1, M15：3)

B型 3件。圆肩，腹较浅，器形相对A型壶较宽矮。

M7：1，残。圆唇，束颈，溜肩，弧腹，平底。肩部饰相间的2周刻划弦纹和刻划水波纹。口径11.3、腹径13.6、底径8.3、高15.6厘米(图十四，11；图版三，6)。

M12：3，口沿微残。近底部有刀削痕迹。舌状唇，展沿，束颈，溜肩，弧腹，平底。肩部饰竖向磨光暗纹，其下饰1周刻划弦纹，腹部饰压印席纹。口径9.8、腹径10.8、底径5.8、高15.4厘米(图十四，10)。

M15：3，口沿残。近底部有刀削痕迹。舌状唇，展沿，束颈，溜肩，弧腹，平底。肩部饰2周刻划弦纹，颈部及刻划弦纹上饰竖向磨光暗纹，腹部饰网格状磨光暗纹。口径12.5、腹径14.6、底径8.5、高16.8厘米(图十四，12；图版三，5)。

罐 共17件。多为夹砂灰褐陶。套接轮修为主，兼有少量手制者，多素面，平底。纹饰有暗纹、弦纹、波浪纹、截印纹等。按照质地和器形，可分为2型：

A型 15件。皆为夹砂灰褐陶。侈口，深腹，有的表面尚存烟炱痕迹。按照口径与腹径比例可分2个亚型。

Aa型 口径与腹径相近，本次发表的15件，均属此型。

M1：1，完整。夹砂灰陶。器内近底部可见套接痕迹。圆唇，唇缘略折，唇下有折棱，侈口，溜肩，弧腹，平底。素面。口径11.3、腹径12.1、底径7.8、高14.5厘米(图十五，1)。

M3：3，残。夹砂灰陶。器表有烟炱痕迹。舌状唇，近平沿，溜肩，弧腹，平底。肩部饰2周刻划弦纹，其间夹饰刻划水波纹。口径12.7、腹径12.5、底径7.6、高17厘米(图十五，2；图版三，8)。

M4：1，完整。夹砂灰陶。方唇，展沿，溜肩，弧腹，平底。素面。口径10、腹径11.3、底径6.7、高12.2厘米(图十五，3)。

M4：2，残。夹砂灰陶。方唇，侈口，溜肩，弧腹，平底。底部略凹，可见套接痕迹。素面。口径14.3、腹径14.2、底径9.1、高20.2厘米(图十五，4)。

M4：3，口沿残。夹砂灰陶。圆唇，侈口，溜肩，弧腹，平底。素面。口径11.7、腹径12.5、底径7、高14.2厘米(图十五，5)。

M7：2，口沿微残。尖唇，平沿，溜肩，弧腹，平底。素面。口径13.2、腹径13.5、底径8.5、高16.3厘米(图十五，6)。

M11：2，残。夹砂灰陶。器内有烟炱痕迹。近底部有刀削和套接痕迹。圆唇，展沿，弧腹，平底。肩部饰半周截印篦点纹。口径12.5、腹径14、底径8.1、高16.3厘米(图十五，7)。

M11：3，残。夹砂灰陶。圆唇，展沿，弧腹，平底。肩部饰1周刻划水波纹。口径11.8、腹径12.8、底径7.4、高14.1厘米(图十五，8；图版三，9)。

M13：3，残。夹砂灰陶。尖唇，展沿，弧腹，底部略呈圈足状。素面。口径13.1、腹

径12.7、底径7.6、高16.7厘米(图十五，9)。M15：2，微残。夹砂褐陶。近底部有套接痕迹。腹部有烟炱。尖唇，展沿，溜肩，弧腹，平底。肩部等距饰三组截印篦点纹。口径12.7、腹径13.8、底径8.5、高18.5厘米(图十五，10；图版三，10)。

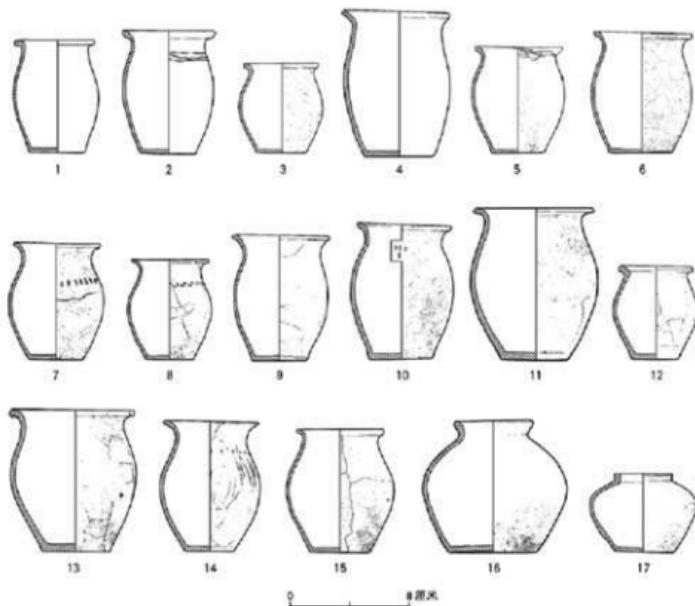
M16：1，残。泥质灰陶。近底部有套接痕迹。圆唇，侈口，溜肩，弧腹，平底。素面。口径16.1、腹径17、底径9、高19.7厘米(图十五，11)。

M16：2，残。夹砂灰陶。近底部有套接痕迹。方唇，侈口，溜肩，弧腹，平底。素面。口径10.1、腹径11.4、底径6.3、高12.5厘米(图十五，12)。

M19：3，残，腹部有三个铜孔。夹砂灰陶。口沿有烟炱痕迹。圆唇，展沿，弧腹，平底。素面。口径16.7、腹径17、底径9.1、高19厘米(图十五，13)。

M21：3，残。泥质灰陶。腹部有烟炱痕迹。圆唇，展沿，弧腹，平底。素面。口径11.8、腹径14.5、底径8.1、高16.5厘米(图十五，15)。

M20：1，残。泥质灰陶。腹部有烟炱。尖唇，展沿，弧腹，平底，颈部饰半周截印纹，腹部饰不规则的竖向磨光暗纹。口径12.7、腹径13.4、底径6.6、高17.5厘米(图十五，14)。



图十五出土陶罐
1-15. Aa型罐 (M1：1, M3：3, M4：1, M4：2, M4：3, M7：2, M11：2, M11：3, M13：3, M15：2, M16：1, M16：2, M19：3, M20：1, M21：3,) 16. Ba型罐 (M15：1) 17. Bb型罐 (M19：2)

图版三, 7)。

B型 2件。皆为泥质灰陶。制法为套接轮修。按照器形, 可分2个亚型。(本次发表无Bc型)

Ba型 1件。M15:1, 完整。器内底部有套接痕迹。圆唇, 侈口, 溜肩, 弧腹, 底部略凹。素面。口径10.6、腹径19.4、底径11.7、高17.9厘米(图十五, 16; 图版三, 11)。

Bb型 1件。M19:2, 完整。方唇, 直口, 圆肩, 斜腹, 平底。素面。口径7.8、腹径14.3、底径7.7、高11.5厘米(图十五, 17; 图版三, 12)。

残器 1件。M7:3, 残。自颈与肩衔接处被打断。泥质灰陶。套接轮修。圆肩,

腹壁斜直, 平底。素面, 肩部有钻孔。口径11.2、腹径16.1、底径7.8、高18.4厘米(图版三, 13)。

b. 铁器

除了已发表的之外, 多锈蚀较重, 但尚可辨出其器形者有:

镰 1件。M3:5, 残半。残存部分为直背, 自尾端向前端由宽渐窄, 尾端上卷成栏。长11.4、最宽3.1、背厚0.4厘米(图十六, 9; 图版四, 5)。

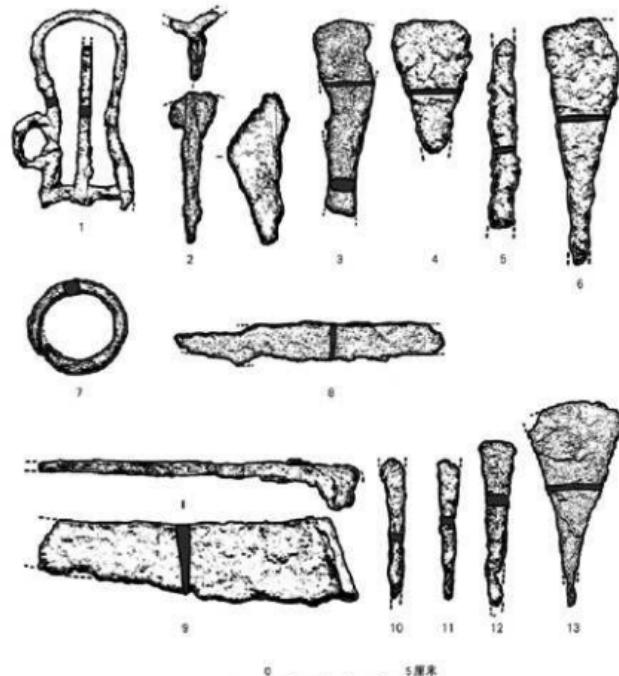
削 6件。体量差别虽较大, 但形制相同, 均为直背直刃, 板条状柄, 柄上多具朽木痕。M4:6, 两端及刃部均残, 存长9.6、宽1.3、背厚0.4厘米左右(图十六, 8)。M13:5, 两端均残, 存长17.4、最宽2.2、背厚0.4厘米左右(图十七, 1; 图版四, 7)。M7:13, 柄残失, 存长8.4、宽1.3、背厚0.4厘米左右(图十七, 2)。M1:7, 两端及刃部均残, 存长8.1、宽1.2、背厚0.2厘米左右(图十七, 3)。M21:8, 削体大部残失, 柄部有朽木痕, 存长4.3、最宽1.4、背厚0.8厘米左右(图十七, 4)。M14:4, 柄端残失, 存长13.5、宽1.9、背厚0.65厘米左右(图十七, 5; 图版四, 6)。

鎒 较完整者9件。铤部一般作四棱状。依鎒叶平面形状的不同分为3型。其中平面近柳叶形的A型鎒未见。

B型 4件。平面近铲型。M3:6-1, 铛残。鎒叶平面近三角形, 存长8.7、刃宽2.6、均厚0.3厘米左右(图十六, 4)。M3:6-2, 仅存鎒叶, 存长3.7、刃宽2.8、均厚0.2厘米左右(图十六, 6; 图版四, 3)。M4:5-1, 鎒叶、铤均残, 存长6.9、刃宽2.0、厚0.2—0.6厘米(图十六, 3)。M12:4, 刃、铤略残。弧刃。存长7.1、刃宽2.4、均厚0.3厘米左右(图十六, 13; 图版四, 2)。

C型 4件。均残。近条齿状, 扁四棱体, 铌至刃部由窄渐宽。M12:9, 存长5.6、刃宽1.2、厚0.5厘米(图十六, 12)。M12:5、6, 存长4.8、刃宽0.7、厚0.4厘米左右(图十六, 10、11)。M21:11, 刃部残失, 存长7.5、宽0.9、厚0.5厘米(图十七, 6)。

D型 1件。三翼鎒。M4:5-2, 为一块带有折角的残片, 一端侧面呈“丫”形, 似为三翼鎒的尾翼部分。存长5.3、存宽2.1、均厚0.3厘米左右(图十六, 2)。



图十六 随葬铁器

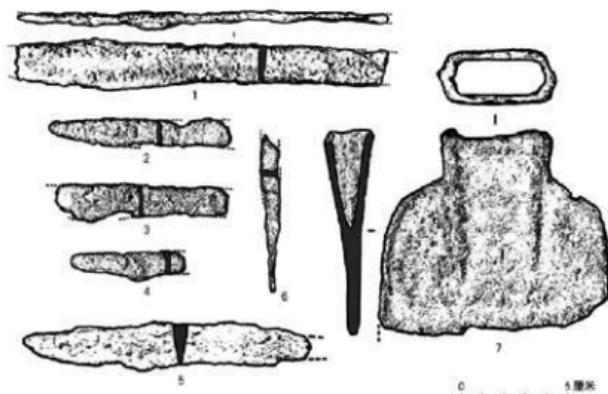
1. 带扣 (M4 : 4) 2. D型钩 (M4 : 5-2) 3、4、6、13. B型钩 (M4 : 5-1, M3 : 6-1, 6-2, M13 : 4) 5. 条状器 (M3 : 7) 7. 环 (M4 : 8) 8. 刀 (M4 : 6) 9. 钩 (M3 : 5) 10-12. C型钩 (M12 : 5, 6, M12 : 9)

带扣 1件。M4:4。以截径为0.5厘米的铁丝锻制而成。卡框作舌状，亚腰，一侧具一环状耳，尾端弯出环孔，再穿轴联一四棱体卡针，长7、宽4.4厘米；扣舌残长5.6、宽和厚0.4厘米左右(图十六，1)。

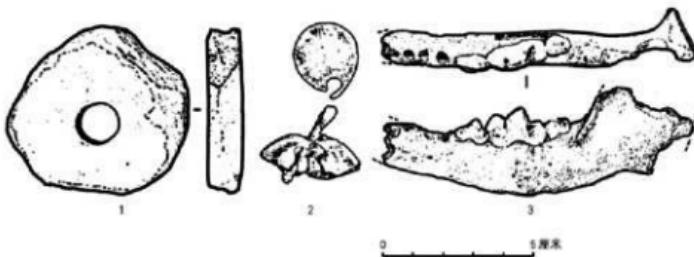
条状器 1件。M3:7。两端残断。片条状，存长6.8、均宽0.8、均厚0.2厘米左右(图十六，5)。

环 1件。M4:8。略残。圆柱体，环状。直径3.3、截径0.3厘米左右(图十六，7；图版四，4)。

除了上述11座墓内所出铁器之外，还有两件出自M8和M14内的未曾发表的铁器：铲1件。M8:6。銎口、肩、刃均残。铸制。竖銎，圆肩，六角形銎口，平刃。銎部侧面作楔状并各有一道合范缝痕。残高9.6、刃宽10.3、叶厚0.3厘米；銎口长5.0、宽2.2厘米(图



图十七 出土铁器
1-5. 刨 (M13 : 5, M7 : 13, M1 : 7, M21 : 8, M14 : 4) 6. C型饰 (M21 : 11) 7. 耙 (M8 : 6)



图十八 出土其他器物
1. 陶纺轮 (M16 : 3) 2. 鎏金铜泡饰 (M16 : 7) 3. 犬下颌骨 (M1 : 01)

十七、7, 图版四, 1)。

刨 1件。M14:4, 柄残, 尖锋, 直背, 直刃, 楔形截面, 板条柄有朽木痕。残长13.5、宽1.8、背均厚0.6厘米左右(图十七, 5; 图版四, 6)。

c. 其他

陶纺轮 1件。M16:3, 以陶片打制而成, 平面形状不规则, 中心一孔。长3.4、宽3.4、厚0.6、中心孔径0.7厘米(图十八, 1)。

鎏金铜泡饰 1件。M16:7, 残, 已变形。泡饰作伞状, 中心孔内有一穿钉, 穿钉对折处衔一摇叶, 摆叶已脱落。泡长2.1、高0.9、叶宽1.3-1.5、厚0.1厘米(图十八, 2)。

犬下颌骨 1块。M1:01, 两端均残, 牙床上残存三颗尖臼齿。存长10.4、最宽3.3、最厚1.1厘米。出土于石椁淤土中, 疑因椁顶坍落所致(图十八, 3)。

4. 几点认识

(1) 关于墓葬的年代、布局、葬俗和形制

作为大板营子墓地的一部分，本文所列的12座墓葬同先期发表的8座墓葬一样，其相对年代约为3世纪中晚期，是慕容鲜卑首领莫户跋率部进入辽西并定居于大棘城之北以后不久的遗存^[7]。从整个墓地来看，其布局和墓葬形制具有以下特点。

在墓地布局上，墓群排列较为有序，方向亦较一致，除了M1、M18和M23之外，均在北偏东220—258°之间。墓葬之间虽相隔较近，但基本无打破关系(M10和M9除外)。如此相对整齐划一的墓地布局不仅在辽西地区，而且包括内蒙古东部在内的整个东北地区的早期鲜卑遗存中也是罕见的。从墓地发展和形成的一般历史过程来看，类似这种带有一定的规划的部落公共草地性质的遗存只有在部落成员之间血缘关系较为紧密、社会结构相对稳定、贫富差别不甚明显的条件下才有可能出现。

从以往发现的三燕遗存来看，墓内殉牲的现象并非大板营子墓地所独有，但一般多以牛腿骨殉之，如十二台砖厂墓地的台M9022、田草沟晋墓M2等^[8]。而大板营子墓地则多以牛头骨或牛下颌骨与犬头骨同置一处，构成一种“牲殉组合”。如果说以牛腿骨作牲殉已属于一种仅具某种象征意义的葬俗遗的话，那么这种以牛和犬头骨构成的“牲殉组合”则是一种更多地保留了早期游牧民族丧葬传统的文化现象，而这一现象又多具有拓跋鲜卑的民族色彩^[9]。其中M11的牲殉现象值得注意，在该墓二层台上陈放的牛头骨一侧还散见有若干块牛蹄骨(图四)。史载“(夫余)有军事亦祭天，杀牛观蹄以占凶吉。蹄解者为凶，合者为吉《三国志》卷三十)”^[10]，这种现象亦见

于资料已发表的M2中，显然这是吸收了夫余文化因素的结果。在牲殉方面具有性别上的倾向性，即除了石椁墓M7之外，牲殉现象皆见于土扩竖穴木棺墓内，且墓主人皆为男性，反映出男性在游牧部落经济活动中的重要地位。

墓葬形制方面，土扩竖穴木棺墓与土扩竖穴石椁墓并存，这是东部鲜卑早期墓葬的一大特点。无论是土扩竖穴墓还是石椁墓皆作前宽后窄状。一般认为，在这种前宽后窄的鲜卑式墓葬中，其木棺墓的渊源可溯至东汉时期的扎赉诺尔墓；其石椁墓的年代则以房身村石板墓为最早(约当3世纪中叶)^[11]。在本篇所列12座墓中，石椁墓为5座，实际上，如果算上儿童墓M9，已被破坏的M17和M23，已发表的M5、M8和M22，以及1994年发现并发掘的M1和M2，则在大板营子发掘的全部28座墓葬中，石椁墓计有13座，近占半数。同房身村石板墓相比较，大板营子墓地中属于Bc型的M5和M23与之基本相同。这类石板墓在石椁墓中较少，似为其比较原始的简约形制。过去认为，在辽西地区鲜卑墓葬中，这两种形制不同的墓葬并存的现象出现于前燕时期^[12]，现在看来，这种现象的出现应提早到3世纪中晚期。

此外，在1994年发掘的M1和M2(均为石椁墓)和1999年发掘的M10(木椁墓)中，均见有

在墓底铺一层均匀的碎石块或小河卵石的做法，这是在以往所见的辽西地区鲜卑墓葬中所不曾有过的现象^[13]。根据以往的考古发现，这种以碎石铺底的做法只见于辽东地区浑江中游魏晋时期高句丽小石板墓中^[14]。二者之间可能的源流关系值得探讨。学界曾有一种观点认为，辽宁西部、内蒙古昭盟和河北幽燕之地为商人发祥地区，高句丽人很可能是商人建国前后或入主中原之时向东北方迁徙至浑江、鸭绿江流域的一支^[15]。有文认为，早在3世纪初，进入辽西后的慕容鲜卑就开始与高句丽有了接触。三燕文化墓葬中的石椁木棺墓约出现于3世纪中叶前后，北票北沟M8是其年代较早的墓例（约当3、4世纪之际）^[16]。大板营子墓葬中所见以碎石铺底的现象似乎表明，高句丽积石为葬的筑墓传统对辽西地区鲜卑石椁墓确实曾产生过影响。

（2）关于陶器组合

一般认为，慕容鲜卑自身发展的第一阶段是魏初其首领莫护跋率部迁到辽西至慕容廆从辽东再迁辽西徒河之青山。这一阶段的考古遗存以朝阳十二台砖厂墓群、科左后旗舍根墓群和新胜屯墓群为代表^[17]。根据我们对大板营子墓地相对年代的推定，该墓地亦应属于这一阶段的遗存之一。所出土陶器群的一个突出特点是A型罐（夹砂罐）和A型壶（泥质灰陶壶）共存一墓以及由此构成的单一的罐壶组合。还在上个世纪90年代初期，学界已注意到了这种轮制泥质灰陶与夹砂陶器共存一墓的现象，认为可能是在当时的鲜卑文化共同体中具有掌握制陶工艺的中原人的原因所致^[18]。此种观点可备一说。不过，这种现象在内蒙古地区鲜卑墓中多有不同程度的存在，其渊源可溯至南杨家营子墓地^[19]（约2世纪初至3世纪中叶）。大板营子陶器群的出土为这一文化现象的进一步探讨提供了新的线索。

曾有文将可能与慕容鲜卑活动有关的诸考古遗存中的陶壶与陶壶之间和陶罐与陶罐之间的关系做过初步考察，认为房身村晋墓、本溪晋墓、十二台砖厂墓群和大安渔场墓以及南杨家营子墓群和扎赉诺尔墓群出土的大口展沿壶（即A型壶）之间有着一定的演变关系：孝民屯墓地、本溪晋墓、十二台砖厂墓群、冯素弗墓和南杨家营子墓群出土的小口侈口罐（B型罐）等也有着一定的演变关系^[20]。显然，在缺少相关考古资料的条件下，这还只是一种粗线条的带有臆测性质的描述。因此，就北方地区鲜卑陶系的类型学研究而言，出土地点和随葬位置明确、组合形态和共存关系完整的大板营子陶器群无疑是一批新的重要资料。

在以朝阳十二台砖厂墓群、科左后旗舍根墓群和新胜屯墓群为代表的考古遗存中，新胜屯有2座墓有完整的陶器组合，但陶器数量有限。舍根遗存陶器的数量虽较多，但多为征集品。因此，可与大板营子陶器作整体比较者，只有十二台砖厂两晋墓出土的陶器群。据统计，在大板营子墓地出自23座墓内的58件陶容器中，壶类即有21件，尚不及总数的一半；十二台砖厂两晋墓共21座，出土陶壶和陶罐分别为21件和12件^[21]。如果将夹砂大口罐（A型罐）和泥质灰陶壶（A型壶）分别视为土著文化和受中原文化影响的两种文化因素的代表器物的

话，则这两个陶器群之间的相对早晚关系似已不难判明了。如果再考虑到大板营子墓葬的原始性（排列有序的墓葬布局、椁和棺皆作前宽后窄状，游牧民族色彩浓厚的牲殉现象等），所有这些都使得其陶器群在北方地区鲜卑陶系中占有更为重要的地位。

（3）关于随葬的铁器

据统计，在所发掘的23座大板营子墓葬中有16座墓随葬铁器，其中少则1件（如M5、M7），多则有10多件以上（M14）甚至20件（M2），铁器数量达百件左右（按可辨器形者计），占总数近一半，这在目前所见早期鲜卑墓葬中尚属罕见。从铁器种类来看计有铁铲、镰、削、矛、锥和带扣等，多为农具，同时也有一定数量的兵器。其中铁铲3件（M3：4、M8：6和M10：2），均为铸制，形制相同，皆为竖銎、圆肩、平刃略外弧；铁镰2件（M4：7和M3：5），均为锻制，完整者为弧背弧刃，尾端较宽并翻卷成栏^[22]。铲和镰分别为典型的锄草和收割工具，与中原地区汉代铁农具别无二致；出土的矛和削的形制也与汉式同类器完全相同。

内蒙古中部拓跋鲜卑墓中所随葬的铁器一般多为兵器和马具，如铁剑、刀、镰、马衔、带扣、环等。而作为农具的铁铲在三道湾铁器中仅见一例，铁和铁镰则全然不见^[23]。显然，同这些具有浓厚的游牧文化因素的铁器相比较，大板营子墓中随葬铁器凸显出农耕文化特点。铁镰也是内蒙古地区鲜卑铁器中较为多见的器物之一，所不同的是，见于大板营子墓内的铁镰则以平刃较宽的铲式为主，与用于实战和狩猎时的射杀那种镰叶似矛的铁镰不同，这种平刃镰一般被认为是一种用于某种射仪上的专用箭矢。总之，大板营子墓葬墓主人生前不仅比较普遍地使用了铁器，而且在对不同种类铁器的选择上也表现出更为明显的汉化倾向。

附记：本次发掘领队万欣，参加勘探、发掘的人员有万欣、顾英武、刘海东、袁功文。器物绘图、摄影由万欣、王宇完成。本文由王宇、万欣执笔。

注

- 〔1〕 武家昌：《辽宁北票市大板营子鲜卑墓的清理》，《考古》，2003年第5期。
- 〔2〕 辽宁省文物考古研究所编：《辽宁北票市大板营子墓地的勘探与发掘》，《辽宁考古文集》（二），225页，科学出版社，2010年7月。
- 〔3〕 同注〔2〕。
- 〔4〕 同注〔2〕。
- 〔5〕 同注〔2〕。
- 〔6〕 同注〔2〕。
- 〔7〕 同注〔2〕。
- 〔8〕 a. 辽宁省文物考古研究所等：《朝阳王子坟山墓群1987、1990年考古发掘的主要收获》，《文物》，1997年第11期； b. 辽宁省文物考古研究所等：《辽宁朝阳田草沟晋墓》，《文物》，1997年第11期。
- 〔9〕 关于这一点，可参见《内蒙古文物考古文集》（第一辑）中有关简报，中国大百科全书出版社，1994年。

- 8月第1版。
- [10]《三国志》，841页，中华书局，2005年。
- [11] a. 王成：《扎赉诺尔砾河古墓清理简报》，《北方文物》，1987年第3期；b. 陈大为：《辽宁北票房身晋墓发掘简报》，《考古》，1960年第1期。
- [12] 尚晓波：《朝阳地区两晋时期墓葬类型分析》，《青果集·吉林大学考古系建系十周年纪念文集》，知识出版社，1998年12月第1版。
- [13] 同注〔1〕和〔2〕。
- [14] 陈大为：《桓仁县考古调查发掘简报》，《考古》，1960年第1期。
- [15] 范犁：《〈高句丽探源〉驳议》，《高句丽渤海研究集成·高句丽卷(一)》53页，哈尔滨出版社，1997年。
- [16] 田立坤：《三燕文化与高句丽考古遗存之比较》，《青果集》，知识出版社，1998年12月。
- [17] 田立坤：《三燕文化遗存的初步研究》，《辽海文学月刊》，1991年第1期。
- [18] 刘观民：《不同文化之间特征品文叉现象释例》，《中国考古学论丛》，科学出版社，1993年。
- [19] 中国社会科学院考古研究所、内蒙古文物工作队：《内蒙古巴林左旗南杨家营子的遗址和墓葬》，《考古》，1964年第1期。
- [20] 许永杰：《鲜卑遗存的考古学考察》，《北方文物》，1993年第4期。
- [21] 同注〔8〕a。
- [22] 同注〔2〕。
- [23] 三道湾墓50座，出土铁器总数不详，主要为剑、矛、刀、锯和环等；北玛尼吐墓26座，铁器中可辨器形者80件，主要为锯和剑(削？)；拉布达林墓24座，铁器虽多(300多件)，但所列可辨器形者仅40件，主要为棺钉和环等；南杨家营子墓20座，多数墓内随葬有铁器，但多为棺钉，其他可辨出器形者仅削、锯和带扣等；参见乌兰察布博物馆：《察右后旗三道湾》；钱玉成等：《科右中旗北玛尼吐鲜卑墓葬》，《内蒙古文物考古文集》第一辑，中国大百科全书出版社，1994年8月第1版；中国科学院考古研究所、内蒙古工作队：《内蒙古巴林左旗南杨家营子的遗址和墓葬》，《考古》，1964年第1期。此外，出土铁马衔的墓葬有伊和乌拉鲜卑单墓和七卡鲜卑墓，参见《内蒙古文物考古文集》第二辑，中国大百科全书出版社，1997年7月第1版。

墓号	型	器物 长×宽×深(米)	木棺或石椁 长×宽×高(米)	人骨性别、葬式和保存状况	方向	随葬品(件、枚)	件数	备注
M1	B6	2.5×7-(1.5~1.55)	1.8×1.04~0.6	成年女性。仅存颅骨和少量肢骨等	132°	Aa型陶罐 1、铁刷 1、锯齿 2、 铜活环 4、骨骼 1、玛瑙珠 (1)、 大下颌骨 1	11	北扩壁已随土崩 坍毁，其要不平
M2	A3	2.8×(0.78~0.82)-1.86	2.46×0.8~0.5	成年男性。单人仰身直肢，躯干和 上肢骨不存	240°	Aa型陶罐 1、A型壹 1、B型壹 1、铁环 2、铁刷 1、B型锯 2、 铁钻 (?) 14、推形器 1	23	铁链 (7) 5件 未见
M3	A3	2.9×(1.2~1.25)-1.54	2.4×(0.54~0.55)-0.25	成年男性。单人仰身直肢，保存较 好	234°	Aa型陶罐 2、A型壹 1、铁铲 1、 铁锯 1、B型锯 1、条状器 1	7	棺外前置牛下 颌骨、犬头骨
M4	A3	2.6×0.9~0.8	2.2×(0.5~0.66)-0.08	成年男性？单人仰身。右下肢略曲	237°	Aa型陶罐 3、铁锯 1、剪 1、B 型锯、带扣 1、环 1	8	
M5	Bc	2.2×(1.3~1.4)-1.1	1.8×(0.3~0.4)-0.45	成年男性？单人仰身。右下肢略曲	238°	Aa型陶罐 1、A型壹 1、B型壹 1、铁刷 1	4	
M6	B6	2.6×1.1~0.96	1.9×(0.3~0.46)- (0.38~0.42)	成年女性。单人仰身直肢， 保存较好	237°	Aa型陶罐 1、Bob型陶罐 1、 B型壹 1、铁刷 1、C型锯 3	8	
M7	B6	3×1.2~1.3	1.55×(0.26~0.35)-0.35	成年女性。单人仰身直肢， 面朝左	222°	Aa型陶罐 1、A型壹 1、B型壹 2、骨骼 1、玛瑙珠 6	9	棺前上方置牛头 骨和犬头骨
M8	B6	2.75×1.42~1.52	1.92×(0.38~0.52)- (0.42~0.56)	成年男性。单人仰身直肢， 面向左	235°	Aa型陶罐 1、A型壹 1、B型壹 6、A型 锯 1、B型锯 1	19	棺外置牛下 颌骨 A型 1、铁矛 1、钉 2、A型锯 1
M9	B6	1.6×1~0.7	0.68×(0.24~0.28)-0.2	仅存颅骨。儿童。性别葬式 不详。	250°	A型陶罐 1	1	其西北角打破 M10
M10	A5	3.4×(1.7~1.8)-1.7	2.92×(0.7~1.1)-0.64	成年男性。单人仰身直肢，保存较 好	258°	Aa型陶罐 1、B型陶罐 1、A型壹 1、 铁铲 1、锯 1、矛 1、剪 1、B型 锯 3、锯 4、箭弓箭 1、残铜片 1	15	木棺外置兽牛、 犬下颌骨和牛足 骨等
M11	A4	2.7×1~2.1	2.24×(0.58~0.7)-0.42	成年男性。躯干和上肢骨残缺	252°	Aa型陶罐 2、A型壹 1、铁片和 锯各 1 件	5	棺前置牛头骨； 铁器 2 件未见

续附表

墓号	型	墓圹 长×宽—深(米)	木棺或石椁 长×宽×高(米)	人骨性别、葬式和保存状况	方向	随葬品 (件、枚)	件数	备注
M12	B ₀	2.0×1.42-1.64	2.14×(0.38~0.52)-0.4	成年男性。单人仰身直肢，躯干骨散乱。	224° Ab型陶罐1、A型壶1、B型壶 1、铁链6	9		
M13	A ₃	2.7×1.22-1.6	2.2×(0.54~0.7)-0.32	成年男性。单人仰身直肢，保存较好	243° A ₃ 型陶罐1、A型壶2、铁锹1、 铁钉1	8		棺前上的随葬大头骨和通脊骨
M14	A ₃	2.76×(1.5~1.6)-1.7	2.4×(0.7~0.82)-0.4	成年男性。单人仰身直肢，躯干和上肢骨多不存	243° 陶罐A型1、B型罐1、BC型罐 1、铁铲1、B型壶4、铁4、削 2、矛、环2	17		
M15	A ₃	2.9×1.45-1.8	2.16×(0.54~0.68)-0.24	未成年男性？单人仰身直肢，保存较好	227° Aa型陶罐1、B型壶1、 B型壶1	3		
M16	B ₀	2.7×(0.96~1.08)-1.15	2.08×(0.18~0.32)-0.34	成年男性？单人仰身直肢，左胫骨折于右胫上	247° Aa型陶罐2、陶纺轮1、骨簪 1、金耳环1、银耳环1	7		
M17	B ₀	约3×1.2-0.8	1.76×(0.34~0.6)-0.44	不详。	238° 残存少量夹砂黑陶片	?		已损坏坏，仅存 基座
M18	A ₃	2.68×(0.9~1.1)-1.74	2.18×(0.6~0.7)-0.45	成年男性？单人仰身，尺、胫骨叠置	135° Ab型陶罐2、B型罐1、铁削1、 C型罐2	7		"放骨牌"
M19	A ₃	2.55×0.98-0.95	2.1×(0.45~0.7)-0.3	成年男性。单人仰身直肢，颅骨和下颌骨骨质残缺	220° A ₃ 型陶罐1、B ₃ 型罐1	3		棺外置A型陶罐 1、普骨若干
M20	A ₃	2.5×1.16-1.9	2.26×0.62-0.16	成年男性。单人仰身直肢，保存较好	247度 A ₃ 型陶罐1、A型壶2、铁钎1、 铁1、附2、B型壶2、B型壶 3、C型锹1、三翼锹(?)1、 铜花饰1	17		棺前上的西北角 随葬大头骨
M21	B ₀	3×1.2-1.31	1.95×(0.26~0.4)- 0.32~0.38	成年女性。躯干骨散乱。	248度 A ₃ 型陶罐1、A型壶2、陶纺轮 1、铁削1、铜耳环2、铁锁2、 骨纺轮1、玛瑙珠和管饰(4)	13 [9] (4)未见		
M22	B ₃	2.5×0.9-1.7	2.05×(0.5~0.56)- (0.3~0.4)	未成年女性？单人仰身直肢，颅骨和下颌骨骨质残缺	232度 A ₃ 型陶罐1、B型壶1、 铜锹1	3		
M23	B ₃	长宽不详，深1.6米	约1.15×0.95-0.45	不详。	约 323度 B型陶罐1(已变形)	1		墨尔嘎大部随土 带仍留。

续附表

墓号	型	墓扩 长×宽—深 (米)	木棺或石椁 长×宽—高(米)	人骨性别、葬式和保存状况	方向	随葬品 (件、枚)	件数	备注
	Aa型10具 Ab型1具 Ba型2具 Bb型8具 Bc型2具			成年男性13具，成年女性3具，性 别未定者7具。	多在 220— 258度 之间	A型壶14、B型壶7、Aa型罐 25、Ab型罐3、Ba型罐5、Bb型罐 2、Bc型罐2，共56件（壶21、罐 37）；铁器98[91]件。	198 [190]	共8件（铁器7 件）整理中未见。
总计								

说明：1、该墓地部分骨标本曾委托吉林大学人类学专业研究生杨微青和朱海峰进行整理。谨此致谢。

2、圆括弧内的数字均反映1件计，方括弧内数字系研究时有数字。

3、另有少量铁器在整理中未见，疑在进行保护处理时因标签脱落而丢失。



1. M11 全景



2. M13 全景



3. M20 全景

图版一 北票大板营子墓地墓葬



1. M7 全景 (上: 封石; 下: 墓底)



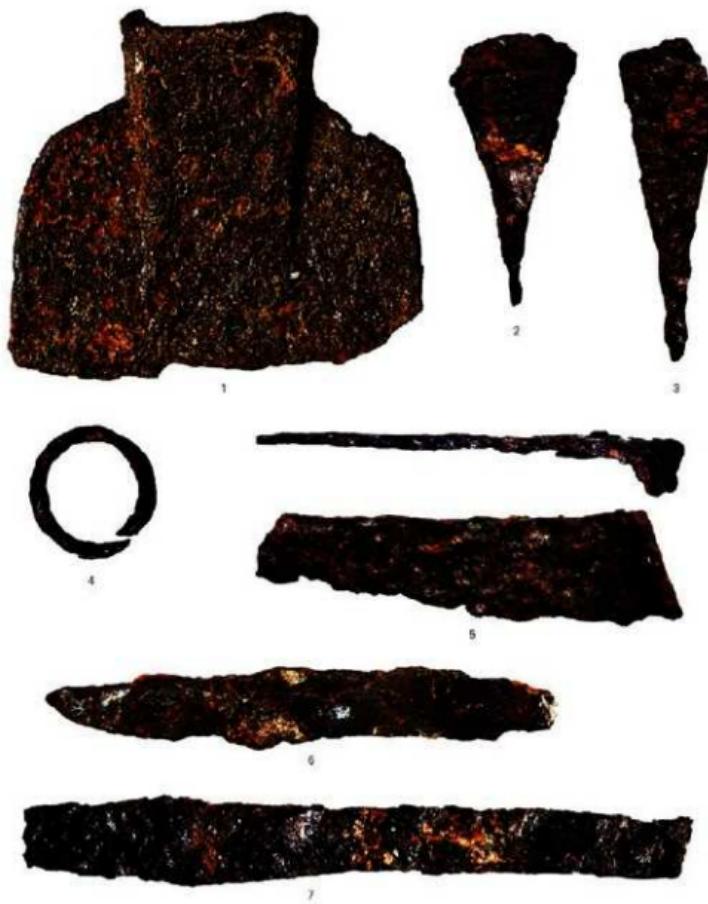
2. M12 全景

图版二 北票大板营子墓地墓葬



图版三 大板营子墓葬出土陶器

1-4. A型壶 (M12:1, M19:1, M13:2, M20:2) 5, 6. B型壶 (M15:3, M7:1)
7-10. A型罐 (M20:1, M3:3, M11:3, M15:2) 11,12. B型罐 (M15:1, M19:2) 13. 残器 (M7:3)



图版四 大板营子墓葬出土铁器
1. 铁 (M8:6) 2, 3. 铁 (M12:4, M3:6-2) 4. 环 (M4:8) 5. 铁 (M3:5) 6, 7. 铁 (M14:4, M13:5)

遼寧省北票市大板營子墓地の調査と発掘（続）

王 宇 万 欣

1. 墓地の概要

大板營子墓地は遼寧省北票市大板鎮波汰溝村大板營子村民組西の台地上に位置し、付近の河川との高低差は5~6mに相当する。東北部は大板鎮（金嶺寺）より約6km、西北部は北票から朝陽に至る鉄道より約2.5km離れている。白石ダムの建設工事にともない、遼寧省文物考古研究所は1994年の秋、1999年の7月と9月にかけて三度の発掘調査を実施した。第1次調査では墓葬5基⁽¹⁾、第2次と第3次調査で計23基の墓葬（整理番号99BDM1~M23）を発掘した。発掘面積は約480m²で、陶器、鉄器、銅器等の200点近い遺物が出土した。1999年の発掘調査区の墓葬分布をみると、墓葬はおよそ西北から東南にむかって西・中・東の3列に並んでいる。そのうち、西列にはM2、M11~M16、M19~M22の計11基、中列にはM3~M10、M17の計9基があり、東列はM1、M18、M23の3基のみである。M1とM18、M23を除き、墓はいずれも東南方向に主軸をとる（図一）。

1999年に発掘した当墓地の資料は2010年に一部報告しており⁽²⁾、M2、M5、M6、M8、M10、M14、M18、M22の8基がそこに含まれる。墓葬の多くが完形をとどめており、遼西ないし我が国北方地区の鮮卑墓葬の構造ならびに土器の系統に対する高い研究価値を有することを鑑み、その他の15基の墓葬うち完形を保つ12基（M1、M3、M4、M7、M11、M12、M13、M15、M16、M19、M20、M21）に関する資料を以下に報告し、今後の研究の一助とする。

2. 墓葬の概要

すでに報告されている大板營子墓地の墓葬構造にもとづき⁽³⁾、本稿で報告する12基の墓葬は土坑竪穴木棺墓と土坑竪穴石槨墓の2型に分けられる。

A型 土坑竪穴木棺墓 計7基。木棺はいずれも前方が広がり後方が窄まる形状である。熱土二層台【墓壙周囲に盛土によりつくりつけたテラス】を留め、棺前方の外部には獸骨を置くものが多い。墓龕、頭廂【頭部側の小部屋】はない。

M3 中列北部に位置する。東側にM9、南側にM4、西側にM12、北側にM10があり、これらの墓から0.12~1m離れている。墓坑上端は地表から約0.25m下に位置する。平面は長方形に近く、長さ2.9m、幅1.2~1.25m、深さ1.54m。墓坑の開口部下1.1mほどの

地点に熟土二層台を設ける。テラスの幅は0.18~0.36m。テラス西南隅に牛頭骨と犬頭骨各1体が副葬される。棺は長さ2.4m、幅0.54~0.66m、残高0.5m。墓主は成年男性で單人の仰臥伸展葬である。体幹部の骨に欠損があり、手足の指骨はない。頭蓋骨上方に陶罐3点を並べ、左尺骨と右脛骨に接して鍔、刀子、鎌等がある。頭位は234°（図二）。

M4 中列北部に位置する。東南側にM5、西南側にM13、北側にM3があり、これらの墓から0.6~2.9m離れている。墓坑上端は地表から約0.25m下に位置する。平面は長方形を呈し、長さ2.6m、幅0.9m、深さ0.8m。墓坑の開口部下0.45mほどの位置に熟土二層台を設ける。テラスの幅は0.09~0.3m。棺は長さ2.2m、幅0.5~0.66m、残高0.08m。成年男性、單人の仰臥伸展葬である。人骨の保存状態は比較的良好で、下肢をわずかに斜めに曲げる。右尺骨と手足の指骨はない。頭蓋骨の右側と左足指骨の位置に陶罐をそれぞれ置き、刀子、鎌、鐵鎌等の鉄器は主に体幹部に散見される。頭位は237°（図三）。

M11 西列北部に位置する。東側にM10、南側にM12、北側にM2があり、これらの墓から0.4~3.2m離れている。墓坑上端は地表から0.3~0.34m下に位置する。平面は長方形を呈し、長さ2.72m、幅1.0m、深さ2.1m。墓坑上端から下へ1.4mほどの位置に熟土二層台を設ける。テラスの幅は0.06~0.36m。テラス上の西北隅に牛頭骨と牛距骨数点が副葬される。棺は長さ2.24m、幅0.58~0.78m、残高0.42m。墓主は成年男性。單人の仰臥伸展葬で、顔を東南に向ける。人骨の体幹部は散乱して完全ではなく、手足の指骨はない。頭蓋骨上方に陶罐および壺3点を置き、その他の部位に鉄器2点がある。頭位は252°（図四、図版一-1）。

M13 西列北部に位置する。東側にM4、南側にM14、北側にM12があり、これらの墓から1.2~3m離れている。墓坑上端は地表から0.34m下に位置する。平面は長方形を呈し、長さ2.7m、幅1.22m、深さ1.6m。墓坑上端から下へ0.96mほどの位置に熟土二層台を設ける。テラス幅は0.18~0.45m。テラス西南部に犬の頭骨と趾骨数点を積み置く。棺は長さ2.2m、幅0.54~0.7m、残高0.32m。墓主は成年男性。單人の仰臥伸展葬で、顔を北に向ける。人骨の保存状態は良好であるが、椎骨に欠損があり、手足の指骨はない。頭蓋骨上方に陶罐および壺3点を置き、その他の部位に鉄器2点がある。頭位は252°（図五、図版一-2）。

M15 西列中部に位置する。東側にM17、南側にM16、北側にM20があり、これらの墓から1.3~5.6m離れている。墓坑上端は地表から約0.26m下に位置する。平面は長方形を呈し、長さ2.9m、幅1.45m、深さ1.8m。墓坑上端から下へ1.4mの位置に熟土二層台を設ける。台の幅は0.32~0.48m。テラス西南側に犬頭骨1点を置く。棺は長さ2.16m、幅0.54~0.68m、残高0.24m。墓主は未成年男性で、單人の仰臥伸展葬である。人骨の保存状態は比較的良好であるが、右肢骨に欠損があり、手足の指骨はない。頭蓋骨上方に陶罐

および壺3点を置く。頭位は227°（図六）。

M19 西列中部に位置する。東側にM7、南側にM20、北側にM14があり、これらの墓から1.3~3.8m離れている。墓坑上端は地表から0.3m下に位置する。平面は長方形を呈し、長さ2.55m、幅0.98m、深さ0.95m。墓坑上端から下へ0.34~0.43mの位置に熟土二層台を設ける。台の幅は0.1~0.34m。テラス西北部に陶壺1点を置き、陶壺と西南隅の間に獸骨を積み置く。棺は長さ2.55m、幅0.43~0.72m、残高0.95m。墓主は成年男性で単人の仰臥伸展葬である。人骨の保存状態はあまり良好ではなく、頭蓋骨および上下肢骨が残存するのを除き、他はみな欠損する。頭蓋骨上方に陶壺2点を並べる。頭位は220°（図七）。

M20 西列中部に位置する。東側にM8、南側にM15、北側にM19があり、これらの墓から1.2~5m離れている。墓坑上端は地表から0.28~0.32m下に位置する。平面は長方形を呈し、長さ2.5m、幅1.16m、深さ1.9m。墓坑上端から下へ1.4mほどの位置に熟土二層台を設ける。台の幅は0.06~0.34m。テラス西北隅に犬頭骨1個を置く。棺は長さ2.26m、幅0.62m、残高0.16m。墓主は成年男性の仰臥伸展葬である。人骨の保存状態はあまり良好ではなく、骨格に欠損があり、手足の指骨はない。頭蓋骨上方に陶壺、陶壺、鉄斧、鉄鎌等を並べ、右寛骨の傍および両脛骨の間には鉄製刀子、鉄鎌等を副葬する。頭位は247°（図八、図版一~三）。

B型 土坑堅穴式石槨墓。計10基。いずれも不規則な形状の板石と礫石（黄白色もしくは淡緑色の砂岩質）を積み上げて築かれている。壁体の構築方法と副葬品の有無によって次の3つに細分できる。

Ba型 2基。石槨木棺墓。M8、M22。墓葬資料はすでに報告している⁽⁴⁾。

Bb型 8基。石槨墓。木棺はない。M1では石槨東壁のみやや大きな一塊の板石を立てて築ぐが、それ以外の墓葬の石槨の四壁はいずれも礫石を平らに並べて積み重ねて構築する。石片を床に敷き、槨上端にはやや大きな板石と礫石を積み重ねて覆う。

M1 東列北部に位置する。南側にM18、西側にM8があり、この2基から3.4~4.1m離れている。墓坑上端は地表から約0.3m下に位置する。平面は長方形を呈し、長さ2.5m、深さ1.53m。墓坑の北壁が断崖の崩壊によって破壊されていたため幅は不詳である。墓坑上端から下へ0.4~0.6mほどの位置に熟土二層台を設ける。台の幅は0.2~0.4m程度。石槨は長さ1.88m、幅0.4~0.45m、深さ0.6m。墓主は成年女性で、頭蓋骨と少量の肢骨のみが残存する。単人の仰臥伸展葬である。頭蓋骨の右上に陶器1点を置き、頭蓋骨頂部と尺骨の部分に骨笄、銅鏡等を副葬する。頭位は132°（図九）。

M7 中列中部に位置する。東側にM1、南側にM8、西側にM19、北側にM6があり、これらの墓から1~4.6m離れている。墓坑上端は地表から約0.26m下に位置する。平面は

長方形を呈し、長さ3.0m、幅1.2m、深さ1.3m。墓坑上端から下へ0.34~0.52mほどの位置に熟土二層台を設ける。台の幅は0.38~0.88m程度。墓坑内の西部、地表から約0.55m地点に牛頭骨1点と犬の趾骨数個を副葬する。石櫛は長さ1.55m、幅0.26~0.35m、残高0.35m。石櫛底部は長さ1.65m、幅0.3~0.4m。墓主は成年男性で単人の仰臥伸展葬である。頭蓋骨の腐朽がはげしく、顔の向きは不詳である。左手の骨と両足の指骨はない。それ以外の骨は保存状態が良好である。頭蓋骨の上方に陶罐2点、左足指骨の位置に陶壺1点を置き、頭蓋骨左側に銅製耳環、瑪瑙製玉類、陶製紡錘車等を副葬する。頭位は232°(図十、図版二-1)。

M12 西列北部に位置する。東側にM3、東南側にM13、北側にM11があり、これらの墓から0.4~2.3m離れている。墓坑上端は地表から0.25~0.3m下に位置する。平面は長方形を呈し、長さ2.8m、幅1.42m、深さ1.64m。墓坑上端から下へ0.9mほどの位置に熟土二層台を設ける。台の幅は0.26~0.58m程度。石櫛は長さ2.14m、幅0.38~0.52m、高さ0.38~0.42m。墓主は成年男性で単人の仰臥伸展葬である。人骨の体幹部は散乱し、手足の指骨はすべてない。副葬品の陶器3点は左脛骨外側と左足指骨の位置に置き、右尺骨の両側には鉄鎌等の鉄器を数点副葬する。頭位は224°(図十一、図版二-2)。

M16 西列南部に位置する。東北側にM17、南側にM21、北側にM15があり、これらの墓から1.2~5.5m離れている。墓坑上端は地表から0.15~0.2m下に位置する。平面は長方形を呈し、長さ2.7m、幅0.96~1.08m、深さ1.15m。墓坑上端から下へ0.5mほどの位置に熟土二層台を設ける。台の幅は0.3~0.5m程度。石櫛は長さ2.08m、幅0.18~0.32m、残存高0.34m。墓主は成年女性で単人の仰臥伸展葬である。左脛を右脛の上に置き、顔をやや右に向ける。人骨の保存状態は比較的良好であるが、手足の指骨はない。頭蓋骨上方に陶器2点を置き、頭蓋骨の頂部と両側には骨製簪、金・銀製の耳環等を副葬する。頭位は247°(図十二)。

M21 西列南部に位置する。北側にM16、南側にM22があり、これらの墓から1.3~1.9m離れている。墓坑上端は地表から0.28~0.38m下に位置する。平面は長方形を呈し、長さ3m、幅1.2m、深さ1.3m。墓坑上端から下へ0.4~0.6mほどの位置に熟土二層台を設ける。台の幅は0.38~0.88m程度。石櫛は長さ1.95m、幅0.24~0.4m、残高0.32~0.38m。墓主は成年女性で単人の仰臥伸展葬である。人骨の体幹部は散乱し、左上肢骨に欠損があり、手足の指骨はない。頭蓋骨上方に陶器3点を並べ置き、頭蓋骨右側と頸、胸部に瑪瑙製玉類、銅製耳環、陶製紡錘車、銅鏡等を置く。頭位は248°(図十三)。

このほか、M6はすでに発表している⁽⁵⁾。M9は規模が小さく、構造も粗末な子供の墓である(陶罐1点を副葬する)。M17はすでに破壊されていた。そのためこの3基の墓については省略する。

Bc型 2基。板石墓。四壁に板石を立てて作られた墓で、木棺はない。既報のM5のほか、M23もこれに分類される。M23は東列の最北端にある崖際に位置するため（M23はM1と30m以上離れており墓葬分布図に示していない）、大半が破壊されており、墓内には陶罐1点が残るのみであった。

3. 遺物の概要

上述した11基の墓葬から、各種副葬品が計94点出土した。これらは土器、鉄器、その他の3種に分けられる。

a. 土器

計35件。2点の紡錘車（M7:4とM21:14、報告済み）以外に、陶罐と陶壺が計33点ある。多くは墓内に3点を副葬するが、墓内に1、2点を副葬する例も少数ある（M1、M16）。副葬位置としては、頭蓋骨の頂部もしくは片側に置くものが多いが、3点のうち1点を足側に置くものもあり（M4、M7）、M12では3点の土器をすべて足側に置く。これらの状況はすでに報告した8基の墓葬と一致する^{〔6〕}。

壺 14点。いずれも泥質。粘土紐巻き上げののち回転ナデにより形を整えており、頭部にその痕跡が残るものがある。口縁部は外側に広がり、多くは口縁端部を丸くおさめる。端部下部にわずかに折れた筋が認められるものもある。肩はなで肩もしくは丸みを帯びる。平底で、底部がやや内側に凹むものもあり、印を有するものもある。外面は素文のものが大部分であるが、暗文や弦文および印文による幾何学文がある。器形によって次の2型に分けられる。

A型 10点。なで肩、やや胴長で、器形は細身で高さがある。器高は一般に20cm以上で、口縁部は破損するものが多い。

M3:1 完形。口縁端部は先細る。頭部でしまり、なで肩で、胴部は丸みを帯びる。平底である。肩部は縦方向のミガキ暗文、胴部は布目文で装飾する。口径11.2cm、胴部最大径12.9cm、底径8.2cm、高さ20.5cm。

M11:1 口縁部欠損。口縁端部は丸くおさめる。頭部でしまり、なで肩で、胴部は縦長で丸みを帯びる。平底である。頭部は縦方向のミガキ暗文で装飾する。その後に弦文を2周めぐらせ、間を波状文で施文する。口径13.6cm、胴部最大径21.5cm、底径10.2cm、高さ25.5cm（図十四-2）。

M12:1 復元可能な破片。口縁部は外側に広がり、端部は先細る。頭部でしまり、なで肩で、胴部は縦長で丸みを帯びる。平底である。肩部に弦文を2周めぐらせ、胴部は網目状のミガキ暗文で装飾する。口径7.1cm、胴部最大径17cm、底径18.9cm、高さ25.6cm（図十四-4、図版三-1）。

M13:1 復元可能な破片。口縁部は外側に広がり、端部は丸くおさめる。なで肩で、胴部は丸みを帯び、底部はわずかに高台状を呈する。口径13.3cm、胴部最大径17.5cm、底径9.5cm、高さ23.6cm（図十四-3）。

M13:2 口縁部欠損。口縁部は外側に広がり、端部は丸くおさめる。頭部でしまり、なで肩で、胴部は綫長で丸みを帯びる。平底である。口径13.2cm、胴部最大径17.6cm、底径10cm、高さ23.9cm（図十四-1、図版三-3）。

M19:1 口縁部欠損。底部付近に粘土紐の痕跡がある。口縁部は外側に広がり、端部は丸くおさめる。頭部でしまり、なで肩で、胴部は綫長で丸みを帯びる。平底である。肩部に弦文を1周めぐらし装飾する。口径14.1cm、胴部最大径19.2cm、底径10.3cm、高さ29.8cm（図十四-6、図版三-2）。

M20:2 口縁部欠損。胴部下位に研磨痕がある。口縁部は外側に広がり、端部は先細る。頭部でしまり、なで肩で、胴部は綫長で丸みを帯びる。平底である。素文。胴部最大径18.6cm、底径11.5cm、高さ26cm（図十四-5、図版三-4）。

M20:3 口縁部欠損。底部付近にケズリ痕がある。口縁部は外側に広がり、端部は先細る。頭部でしまり、なで肩で、胴部は丸みを帯びる。平底である。胴下半部には不明瞭な方形印文の痕跡がある。頭部を2条一組の綫方向のミガキ暗文で装飾し、その下に弦文を2周めぐらす。口径10.6cm、胴部最大径15.4cm、底径8.1cm、高さ20.1cm（図十四-9）。

M21:1 口縁部欠損。口縁部は外側に広がり、端部は先細る。頭部でしまり、なで肩で、胴部は丸みを帯びる。平底である。頭部は綫方向のミガキ暗文で装飾し、肩部には弦文を2周めぐらす。口径10.8cm、胴部最大径16.7cm、底径8.7cm、高さ21.1cm（図十四-8）。

M21:2 口縁部欠損。肩部に回転ナデにより形を整えた痕跡があり、胴下半部の内面には粘土紐の痕跡がある。頭部でしまり、なで肩で、胴は長く斜めに伸び、平底である。胴下半部には円形印文の痕跡がある。頭部に綫方向のミガキ暗文がある。胴部最大径15.2cm、底径8.3cm、残高20.4cm（図十四-7）。

B型 3点。肩は丸みを帯び、胴部はやや短い。A型に比べて器形はやや幅広で小さい。

M7:1 破片。口縁端部は丸くおさめ、頭部でしまり、なで肩で、胴部は丸みを帯びる。平底である。頭部に弦文と波状文を交互にめぐらせて装飾する。口径11.3cm、胴部最大径13.6cm、底径8.3cm、高さ15.6cm（図十四-11、図版三-6）。

M12:3 口縁部がわずかに欠損。底部付近にケズリ痕跡がある。口縁部は外側に広がり、端部は先細る。頭部でしまり、なで肩で、胴部は丸みを帯びる。平底である。肩部に綫方向のミガキ暗文があり、その下に弦文を1周めぐらせて装飾する。胴部は莫蘿文で装飾する。口径9.8cm、胴部最大径10.8cm、底径5.8cm、高さ15.4cm（図十四-10）。

M15:3 口縁欠損。底部付近にケズリ痕跡がある。口縁部は外側に広がり、端部は先

細る。頭部でしまり、なで肩で、胴は丸みを帯びる。平底である。肩部に弦文を2周めぐらせ、頭部および弦文上を縱方向のミガキ暗文で装飾する。胴部は網目状のミガキ暗文で装飾する。口径12.5cm、胴部最大径14.6cm、底径8.5cm、高さ16.8cm（図十四-12、図版三-5）。

罐 計17点。多くは夾砂灰褐陶。粘土紐巻き上げのち回転ナデにより形を整えるものを主とする。手捏ねによるものも少量あり、そのほとんどは素文で平底である。文様は暗文、弦文、波状文、刺突文があり、材質と器形よって次の2型に分けられる。

A型 15点。いずれも夾砂灰褐陶。広口、長胴で、表面に煤の痕跡が残るものもある。口径と胴径の比率によって2つの亜型式に分けられる。

Aa型 口径と胴径がほぼ同じで、本稿で報告する15点はいずれもこの型式に属する。

M1:1 完形。夾砂灰陶。底部内面付近に粘土紐の痕跡が確認できる。口縁端部は丸くおさめるが、端部はやや折れ曲がり、下部にわずかに折れた筋がある。広口、なで肩で、胴部は丸みを帯びる。平底である。素文。口径11.3cm、胴部最大径12.1cm、底径7.8cm、高さ14.5cm（図十五-1）。

M3:3 破片。夾砂灰陶。表面に煤の痕跡がある。口縁端部は舌状で平縁に近い。なで肩で、胴部は丸みを帯びる。平底である。頭部に弦文を2周めぐらせ、その間を波状文で装飾する。口径12.7cm、胴部最大径12.5cm、底径7.6cm、高さ17cm（図十五-2、図版三-8）。

M4:1 完形。夾砂灰陶。口縁部は外側にひらき、端部は面をもつ。なで肩で、胴部は丸みを帯び、平底である。素文。口径10cm、胴部最大径11.3cm、底径6.7cm、高さ12.2cm（図十五-3）。

M4:2 破片。夾砂灰陶。広口で、口縁端部は面をもつ。なで肩で、胴部は丸みを帯び、平底である。底部はわずかに凹み、粘土紐の痕跡が確認できる。素文。口径14.3cm、胴部最大径14.2cm、底径9.1cm、高さ20.2cm（図十五-4）。

M4:3 口縁欠損。夾砂灰陶。広口で、口縁端部は丸みを帯びる。なで肩で、胴部は丸みを帯び、平底である。素文。口径11.7cm、胴部最大径12.5cm、底径7.0cm、高さ14.2cm（図十五-5）。

M7:2 口縁部がわずかに欠損。口縁端部は面をもち、端部下端は尖る。なで肩で、胴部は丸みを帯びる。平底である。素文。口径13.2cm、胴部最大径13.5cm、底径8.5cm、高さ16.3cm（図十五-6）。

M11:2 破片。夾砂灰陶。内面に煤の痕跡がある。底部付近にケズリ痕跡と粘土紐の痕跡がある。口縁部は外側に広がり、端部は丸くおさめる。胴部は丸みを帯び、平底である。肩部には刺突文が半周する。口径12.5cm、胴部最大径14.0cm、底径8.1cm、高さ16.3

cm (図十五-7)。

M11:3 破片。夾砂灰陶。口縁部は外側に広がり、端部は丸くおさめる。胴部は丸みを帯び、平底である。肩部を波状文が1周する。口径11.8cm、胴部最大径12.8cm、底径7.4cm、高さ14.1cm (図十五-8、図版三-9)。

M13:3 破片。夾砂灰陶。口縁部は外側に広がり、端部は先細る。胴部は丸みを帯び、底部はわずかに高台状を呈する。素文。口径13.1cm、胴部最大径12.7cm、底径7.6cm、高さ16.7cm (図十五-9)。

M15:2 わずかに欠損。夾砂灰陶。底部付近に粘土紐の痕跡があり、胴部には煤がみられる。口縁部は外側にひらき、端部は先細る。なで肩で、胴部は丸みを帯びる。平底である。肩部には3組の刺突文を等間隔に配して装飾する。口径12.7cm、胴部最大径13.8cm、底径8.5cm、高さ18.5cm (図十五-10、図版三-10)。

M16:1 破片。泥質灰陶。底部付近に粘土紐の痕跡がある。口縁部は外側にひらき、端部は丸くおさめる。なで肩で、胴部は丸みを帯び、平底である。素文。口径16.1cm、胴部最大径17.0cm、底径9.0cm、高さ19.7cm (図十五-11)。

M16:2 破片。夾砂灰陶。底部付近に粘土紐の痕跡がある。広口で、口縁部は角張り、なで肩、胴部は丸みを帯びる。平底である。素文。口径10.1cm、胴部最大径11.4cm、底径6.3cm、高さ12.5cm (図十五-12)。

M19:3 破片。胴部3ヶ所に孔がある。夾砂灰陶。口縁部に煤の痕跡がある。口縁部は外側にひらき、端部は丸くおさめる。胴部は丸みを帯び、平底である。素文。口径16.7cm、胴部最大径17.0cm、底径9.1cm、高さ19.0cm (図十五-13)。

M21:3 破片。泥質灰陶。胴部に煤の痕跡がある。口縁部は外側にひらき、端部は丸くおさめる。胴部は丸みを帯び、平底である。素文。口径11.8cm、胴部最大径14.5cm、底径8.1cm、高さ16.5cm (図十五-15)。

M20:1 破片。泥質灰陶。胴部に煤がある。口縁部は外側にひらき、端部は先細る。胴部は丸みを帯び、平底である。頭部には刺突文が半周し、胴部は不規則な縱方向のミガキ暗文で装飾する。口径12.7cm、胴部最大径13.4cm、底径6.6cm、高さ17.5cm (図十五-14、図版三-7)。

B型 2点。すべて夾砂灰陶。粘土紐巻き上げののち回転ナデにより形を整える。器形によって2つの型式に分けられる(本稿で報告する資料にBc型はない)。

Ba型 1点。M15:1。完形。内底部に粘土紐の痕跡がある。広口で口縁端部は丸くおさめる。なで肩で、胴部は丸みを帯び、底部はわずかに凹む。素文。口径10.6cm、胴部最大径19.4cm、底径11.7cm、高さ17.9cm (図十五-16、図版三-11)。

Bb型 1点。M19:2。完形。口縁部は垂直に立ち上がり、端部は面をもつ。肩は丸み

を帯び、平底の底部から斜めに立ち上がり、胴部へいたる。素文。口径7.8cm、胴部最大径14.3cm、底径7.7cm、高さ11.5cm（図十五-17、図版三-12）。

破片 1点。M7:3。頭と肩部の境界部分で割れる。夾砂灰陶。粘土紐巻き上げのち回転ナデにより形を整える。肩は丸みを帯び、平底の底部から斜めに立ち上がり、胴部へいたる。素文だが、肩部に孔が穿たれる。口径11.2cm、胴部最大径16.1cm、底径7.8cm、高さ18.4cm（図版三-13）。

b. 鉄器

すでに報告した資料以外の多くは錆化が著しいが、以下の器種が判別できる。

鎌 1点。M3:5。半損。残存部分は直背で、先端にむかって次第に細くなり、反対側の端部は折り返して基部とする。長さ11.4cm、最大幅3.1cm、背部の厚さ0.4cm（図十六-9、図版四-5）。

刀子 6点。大きさが多様であるが、形態は類似する。いずれも直背直刃で、板状の柄をもち、柄には木質が残る。M4:6、両端および刃部が欠損する。現存長9.6cm、幅1.3cm、背部の幅は0.4cm程度（図十六-8）。M13:5、両端が欠損する。現存長17.4cm、最大幅2.2cm、背部の幅0.4cm程度（図十七-1、図版四-7）。M7:13、柄が欠損する。現存長8.4cm、幅1.3cm、背部の厚さ0.4cm程度（図十七-2）。M1:7、両端および刃部が欠損する。現存長8.1cm、幅1.2cm、背部の幅0.2cm程度（図十七-3）。M21:8、大部分が欠損する。柄部に木質が残る。現存長4.3cm、最大幅1.4cm、背部の幅0.8cm程度（図十七-4）。M14:4、柄端部が欠損する。現存長13.5cm、最大幅1.9cm、背部の幅0.65cm程度（図十七-5、図版四-6）。

鎌 比較的完形に近いものは9点ある。茎は基本的に四稜状につくる。鎌身部の平面形状の違いによって3型に分類される。このうち、鎌身部の平面形状が柳葉形に近いA型鎌は確認されていない。

B型 4点。平面形は鎌に類似する。M3:6-1、茎は欠損する。鎌身部の平面形状は三角形に近い。現存長8.7cm、刃幅2.5cm、厚さは0.3cm程度で均一である（図十六-4）。M3:6-2、鎌身部のみが残る。現存長3.7cm、刃幅2.8cm、厚さは0.2cm程度で均一である（図十六-6、図版四-3）。M4:5-1、鎌身部と茎ともに欠損がある。現存長6.9cm、刃部幅2.0cm、厚さ0.2~0.6cm（図十六-3）。M12:4、刃部および茎がわずかに欠損する。刃部は弧状をなす。現存長7.1cm、刃部幅2.4cm、厚さは0.3cm程度で均一である（図十六-13、図版四-2）。

C型 4点。いずれも欠損がみられる。鎌に近い形状で、扁平な四稜形をなす。茎から刃部にかけて次第に幅が増す。M12:9、現存長5.6cm、刃部幅1.2cm、厚さ0.5cm（図十六-12）。M12:5・6、現存長4.8cm、刃部幅0.7cm、厚さ0.4cm（図十六-10・11）。M21:11、

刃部欠損。現存長7.5cm、幅0.9cm、厚さ0.5cm（図十七-6）。

D型 1点。三翼鎌。M4:5-2、角の折れた残片で、横断面は「Y」字形を呈し、三翼鎌の尾翼部分に類似する。現存長5.3cm、現存幅2.1cm、厚さは0.3cm程度で均一である（図十六-2）。

鉗具 1点。M4:4、径0.5cmに切断した鉄棒を鍛造して成形する。全体を舌状につくり出したのちに、腰をすばめて「亜」形に成形し、片側に環状の耳をそなえる。鉄棒の先端を曲げて環をつくり、軸に連結して四稜体の刺鉄とする。長さ7.0cm、幅4.4cm、刺鉄の現存長5.6cm、幅および厚さ0.4cm（図十六-1）。

棒状鉄器 1点。M3:7、両端が欠損する。薄い棒状をなす。現存長6.8cm、幅は等しく0.8cm、厚さも0.2cm程度で均一である（図十六-5）。

環 1点。M4:8、わずかに欠損する。断面円形で、環状を呈する。直径3.3点、断面径0.3cm程度（図十六-7、図版四-4）。

上述した11基の墓葬から出土した鉄器以外に、M8とM14より出土した未報告の鉄器が2点ある。

鎌【有袋鉄斧】 1点。M8:6、袋部、肩部、刃部がいずれも欠損する。袋部は縦形で、肩部は丸みを帯びる。袋部は六角形を呈する。平刃。袋部の側面は楔状で、各一条の合范線がある。現存高9.6cm、刃部幅10.3cm、刃部の厚み0.3cm。袋部の長さ5.0cm、幅2.2cm（図十七-7、図版四-1）。

刀子 1点。M14:4、柄が欠損する。鋒は尖り、直背直刃である。断面は楔形を呈する。板状の柄には木質が残る。現存長13.5cm、幅1.8cm、背の厚さは0.6cm程度で均一である（図十七-5、図版四-6）。

c. その他

陶製紡錘車 1点。M16:3、陶器片を打ち割って成形する。平面形は不規則で、中央に孔をひとつ穿つ。長さ3.4cm、幅3.4cm、厚さ0.6cm、中心の孔径0.7cm（図十八-1）。

菊形飾金具 1点。M16:7、欠損があり、変形する。飾金具は傘状につくり、中央の孔に釘が一本挿し込まれている。釘を折りたたんだ部分に歩描を取り付けるが、歩描はすでに脱落している。飾金具の長さ2.1cm、高さ0.9cm、歩描の幅1.3~1.5cm、厚さ0.1cm（図十八-2）。

犬下顎骨 1片。M1:01、両端が欠損する。尖った臼歯が3つ残存する。現存長10.4cm、最大幅3.3cm、最大厚1.1cm。石榔の細粒土中から出土しており、榔頂部から落下した可能性が考えられる（図十八-3）。

4. 考察

（1）墓葬の年代、配置、葬俗、構造について

大板營子墓地の一部分として本稿で挙げた12基の墓葬は、先に報告した8基の墓葬と同じく年代はおよそ3世紀中頃から末にあたり、慕容鮮卑の首領・莫護跋が部を率いて遼西に入り、大棘城の北に定住して間もない遺跡である⁽⁷⁾。墓地全体からみると、その分布と墓葬構造は以下の特徴を有している。

墓地の分布については、墓の配置は比較的秩序立っており、主軸もおよそ一致する。M1、M18、M23を除き、北東の220°-258°の間にある。墓葬の間隔はやや近いものの、基本的に重複による破壊はみられない（M10とM9を除く）。このように整然とした墓地分布は、遼西地区に限らず、内モンゴル自治区東部に位置するすべての東北地区初期鮮卑遺跡のなかでも稀である。墓地の発展と形成の一般的な史展開からみると、このような一定の規格を有する集落公共墓地と類似する性質の遺跡は、集落構成員間の血縁関係が比較的緊密で、社会構造が安定しており、貧富差が明確ではない条件下においてはじめて登場し得るものである。

これまでに発見されている三燕の遺跡からみると、墓内への殉葬は大板營子墓地独特のものではない。しかしながら、十二台磚廠墓地の台M9022や田草溝普墓M2等⁽⁸⁾のように、牛腿骨を殉葬する場合が多い。また、大板營子墓地は牛頭骨、もしくは牛下頸骨と犬頭骨を一箇所に置き、一種の「牲殉組合【殉葬組成】」をなしている。仮に、牛腿骨の殉葬がある種の象徴的な意味を有する遺跡とするならば、牛と犬の頭骨による「牲殉組合【殉葬組成】」は早期遊牧民族による喪葬伝統をより強くとどめており、拓跋鮮卑の民族色を多くそなえた現象といえる⁽⁹⁾。このうち、M11の殉葬は注目に値する。熟土二層台上に置かれた牛頭骨の片側には牛の蹄骨が数点散見された（図四）。史料には「（夫余）有軍事亦祭天、殺牛親蹠以占吉凶。蹠解者為凶、合者為吉」（『三国志』卷30）⁽¹⁰⁾とあり、同様の状況は既報のM2でもみられる。よって、これが扶余文化の要素を吸収した結果であることは明白である。殉葬には性別ごとの傾向が認められ、石櫛墓M7を除き、殉葬はいずれも土坑竪穴木棺墓内にみられ、被葬者はみな男性である。これは遊牧集落の経済活動における男性の重要な地位を反映している。

墓葬構造については、土坑竪穴木棺墓と土坑竪穴石櫛墓が並存することは、東部鮮卑の初期墓葬の大きな特徴である。土坑竪穴墓にせよ石櫛墓にせよ、いずれも平面形は前方が広がり、後方がすぼまる。一般に、このような平面プランの鮮卑式墓葬のなかで、木棺墓の淵源は後漢の孔賈諾爾墓まで遡ることができると考えられており、石櫛墓については房身村板石墓がもっとも古い（約3世紀中葉に相当）と考えられている⁽¹¹⁾。本稿で挙げた12

基の墓のうち、石槨墓は5基であるが、もし幼児墓の可能性のあるM9、すでに破壊されていたM17とM23、既報のM5、M8、M22、ならびに1994年に発見・発掘されたM1とM2も含めるならば、大板營子で発掘された全28基の墓葬中、石槨墓は計13基となり、実際にはほぼ半数を占める。房身村板石墓と比較すると、大板營子墓地のうちBc型に分類されるM5とM23はそれと基本的に共通する。このような板石墓は石槨墓のなかで比較的少なく、原始的かつ簡単な構造といえそうである。從来、遼西地区の鮮卑墓葬においてこの2種類の異なる構造の墓葬が並存してみられるようになるのは前燕期であると考えられてきたが^[12]、現在では、それを3世紀中頃から末に登場したとみることが可能である。

このほか、1994年に発掘されたM1とM2（ともに石槨墓）、1999年に発掘されたM10（木槨墓）には、墓壙底に均等な割石もしくは礫石を一層敷く方法が採られている。これはこれまでに発見された遼西地区的鮮卑墓にはみられなかったものである^[13]。既往の発見にもとづくならば、このように割石を床面に敷く方法は、遼東地区渾江中流の魏晋期の高句麗小石板墓で確認されている^[14]。両者の間に想定される源流関係は検討に値しよう。学界においては、遼寧西部と内蒙古昭烏達盟、そして河北幽燕は商人發祥の地であり、高句麗人は商人が建国前後、もしくは中原に住み始めたときに東北方面に移り、渾江や鴨綠江流域にいたった一支流であるという見方がすでにある^[15]。また、早くも3世紀初めには、遼西に入った慕容鮮卑が高句麗と接触を開始したという考えもある。三燕文化の墓葬における石槨墓と木棺墓はおよそ3世紀中葉前後に登場しており、北票北溝M8は時期的に早い墓のひとつである（およそ3、4世紀の境）^[16]。大板營子墓地に確認された割石を床面に敷くという方法は、高句麗の積石葬にみられる造墓の伝統が遼西地区的鮮卑石槨墓に對して影響を及ぼしたことと示すと考えられる。

（2）土器の組み合わせ

一般に、慕容鮮卑の發展の第一段階は、魏の初めに首領・莫護跋が部を率いて遼西にいたり、慕容廆が遼東から遼西徒河の青山に移るまでとみなされている。この第一段階を代表する考古遺跡は朝陽十二台磚廠墓群、科爾沁左翼後旗舍根墓群および新勝屯墓群である^[17]。我々が考える大板營子墓地の相対年代ににもとづくならば、当墓地もまた第一段階の遺跡のひとつに属する。当墓地から出土した土器群のなかで特筆すべき特徴は、A型罐（夾砂罐）とA型壺（泥質灰陶壺）が同一墓に並存する点と、それゆえに、單一の罐と壺が組合せを構成している点である。90年代初期、学界はすでに回転成形による泥質灰陶と夾砂陶がひとつの墓に共存する点に注目し、その原因は当時の鮮卑文化共同体に製陶技術を習得した中原人が含まれていたことにあると推定した^[18]。この見解については我々も考えがある。というのも、このような現象は内モンゴル地区の鮮卑墓において程度は異

なれ存在しており、その起源は南楊家營子墓地に遡ることができる（おおよそ2世紀初から3世紀中葉）⁽¹⁹⁾。大板營子における土器群の出土は、この文化現象を検討するにあたり、さらなる新たな手がかりを提供した。

かつて、慕容鮮卑の活動と関連するさまざまな考古遺跡にみられる陶壺と陶罐それぞれの関係性について基礎的な考察を加えた研究があり、そこでは房身村晋墓と本溪晋墓、十二台磚廠墓群、大安漁場墓、南楊家營子墓群、扎賚諾爾墓群より出土した、口縁部が大きくひらく広口壺（A型壺）の間に一定の変化関係があると指摘された。また、孝民屯墓地、本溪晋墓、十二台磚廠墓群、鴻素弗墓、南楊家營子墓群より出土した口縁部が短くひらく罐（B型罐）等にも一定の変化関係があるとみなされた⁽²⁰⁾。関連する考古資料が限られていた条件下において、これは明らかに憶測の域をでない描述にすぎなかった。それゆえ、北方地区の鮮卑陶器系統の類型学的な研究において、出土地点と副葬位置が明確で、器形の組み合わせと共存関係が明確な大板營子の土器群は、まちがいなく重要な新資料といえる。

朝陽十二台磚廠墓群、科爾沁左翼後旗舍根墓群、新勝屯墓群を代表とする考古遺跡のうち、新勝屯には明確な土器の組み合わせを有する墓が2基あるが、土器の数は限られている。舍根は土器の数量が比較的多いものの、多くは収集品である。したがって、大板營子の土器と全体的な比較ができるのは十二台磚廠兩晋墓出土の土器群のみである。統計によると、大板營子墓地の23基の墓から出土した58件の陶製容器のうち、壺類は21点で総数の半分におよばない。十二台磚廠兩晋墓には計21基の墓があり、出土した陶壺は21点、陶罐は12点である⁽²¹⁾。もし夾砂大口罐（A型罐）と泥質灰陶壺（A型壺）が、それぞれ土着文化と中原文化の影響を受けたという2種類の文化要素を代表する器物であるならば、この2つの土器群の間の相対的な前後関係の判断は難しくなかろう。あらためて大板營子墓葬の原始性（秩序立った墓葬分布、櫛と棺がいずれも前方が広がり後方がすぼまる平面形であること、遊牧民族の色彩が濃厚な殉葬等）を考慮するならば、同墓地の土器群は北方地区の鮮卑土器系統でより重要な位置を占めるといえよう。

（3）副葬された鉄器について

統計によると、発掘された23基の大板營子墓葬のうち16基に鉄器が副葬されていた。そのうち、少ないものは1点（M5、M7等）、多いもので10点以上（M14）、さらには20点（M2）にも及ぶ。鉄器の数は形態が判明するもののみで100点程度に達しており、出土遺物全体の半分近くにおよぶ。これは、現在までに発見されている初期鮮卑墓葬においては稀有なことである。鉄器の種類には、鍤、鎌、鋸、刀子、矛、鐵錐、鉗具等があり、多くは農具であるが、一定数の武器もある。このうち、鉄錐3点（M3:4、M8:6、M10:2）はいず

れも鋳造品で、形態も類似しており、袋部は堅形で、肩が丸く、平刃はわずかに外側に湾曲する。鉄鎌2点(M4:7, M3:5)はいずれも鋳造品で、完形のものは背と刃が湾曲し、基部側はやや幅広で、鉄板を折り返して基部をつくっている⁽²⁾。鍔は除草、鎌は草刈る典型的な工具であり、中原地区の漢代の農具と区別がつかない。出土した矛と刀子の形態も漢の同種の製品とまったく同じである。

内モンゴル中部の拓跋鮮卑墓に副葬された鉄器は、剣、刀、鎌、銜、釤具、鈎環等の武器と馬具が多い。また、農具としての鍔は三道溝墓地出土の鉄器に一例だけみることができるが、鍔と鎌はまったくみられない⁽³⁾。遊牧文化要素が濃い鉄器と比較すると、大板營子墓に副葬された鉄器は明らかに農耕文化の特徴を示している。鉄鎌も内モンゴル地区の鮮卑の鉄器中に比較的多くみられる器物のひとつであるが、異なるのは、大板營子墓の鉄鎌は平刃でやや幅広な鍔式を主とする点である。実戦や狩猟時に用い、相手を射殺す矛に似た鍔身とは異なり、このような平刃の鎌はなんらかの射儀専用の矢に使用されたものと考えられている。以上のことをまとめると、大板營子墓葬の墓主は生前かなり普遍的に鉄器を使用していただけではなく、鉄器の器種の選択において明確な漢化傾向を示していたといえる。

付 記 本発掘調査は万欣が隊長を務め、調査および発掘は万欣、顧英武、劉海東、袁功文が実施した。遺物の実測と撮影は万欣がおこない、王宇が完成させた。本稿の執筆は王宇と万欣による。

註

- (1) 武家昌「遼寧北票大板營子鮮卑墓の清理」『考古』2003年第5期。
- (2) 遼寧省文物考古研究所編「遼寧北票市大板營子墓地の勘探與發掘」『遼寧考古文集』(二)、225頁、科学出版社、2010年。
- (3) 同註(2)。
- (4) 同註(2)。
- (5) 同註(2)。
- (6) 同註(2)。
- (7) 同註(2)。
- (8) a. 遼寧省文物考古研究所ほか「朝陽王子墳山墓群1987、1990年考古發掘的主要收穫」『文物』1997年第11期。
b. 遼寧省文物考古研究所ほか「遼寧朝陽田草溝晉墓」『文物』1997年第11期。
- (9) この点については「内蒙古文物考古文集」第一輯、中国大百科全書出版社、1994年、に関連する簡報がある。
- (10) 『三国志』841頁、中華書局、2005年。
- (11) a. 王成「扎赉諾爾圍河古墓清理簡報」『北方文物』1987年第3期。
b. 陳大為「遼寧北票房身村晉墓發掘簡報」『考古』1960年第1期。

- (12) 尚曉波「朝陽地区兩晉時期墓葬類型分析」『青果集・吉林大學考古系建系十周年紀念文集』知識出版社、1998年。
- (13) 同註（1）・（2）。
- (14) 陳大為「桓仁縣考古調查發掘簡報」『考古』1960年第1期。
- (15) 危卓「高句麗探源」般議」『高句麗渤海研究集成・高句麗卷（一）』53頁、哈爾濱出版社、1997年。
- (16) 田立坤「三燕文化與高句麗考古遺存之比較」『青果集・吉林大學考古系建系十周年紀念文集』知識出版社、1998年12月。
- (17) 田立坤「三燕文化遺存的初步研究」『遼海文物學刊』1991年第1期。
- (18) 銅觀民「不同文化之間特征品交叉現象例」『中國考古學論叢』科學出版社、1993年。
- (19) 中國社會科學院考古研究所、內蒙古文物工作隊「內蒙古巴林左旗南楊家營子的遺址和墓葬」『考古』1964年第1期。
- (20) 許永傑「鮮卑遺存的考古學考察」『北方文物』1993年第4期。
- (21) 同註（8）a。
- (22) 同註（2）。
- (23) 三道溝墓からは50基の墓から鉄器が出土し、その総数は不明であるが、劍、矛、刀、鎗、環等を主とする。北瑪尼吐墓の26基からは形態が判明する鉄器が80点あり、主に鎗と劍（刀子？）である。拉布達林墓の24基では鉄器が非常に多いものの（300余点）、形態が判明するものは40点しかなく、槍頭と環等が主体を占める。南楊家營子墓の20基では大多数の墓に鉄器が副葬されるが、多くは槍頭で、ほかに形態が判明するものは刀子、鎗、鉗具等だけである。
- （参照）烏蘭察布博物館『察右後旗三道溝』『內蒙古文物考古文集』第一輯、中國大百科全書出版社、1994年。
- 錢玉成等「科右中旗北瑪尼吐鮮卑墓葬」『內蒙古文物考古文集』第一輯、中國大百科全書出版社、1994年。
- 中國科学院考古研究所、內蒙古工作隊「內蒙古巴林左旗南楊家營子的遺址和墓葬」『考古』1964年第1期。
- このほか、鉄製術が出土した墓葬として伊和烏拉鮮卑板墓と七卡鮮卑墓がある。
- 参照：『內蒙古文物考古論文集』第二輯、中國大百科全書出版社、1997年。

墓番号	型式	長×幅×高 墓塙	人骨性別、葬式、保存状況	方向	副葬品（点）	総数	備考
M1	Bb	2.5×?-(1.5 ~1.55)	1.8×1.04-0.6 成年女性。頭蓋骨と少量の 肢骨等のみが残存。	132°	Aa型陶罐1、鉢形2、鋤 頭1、骨指環1、合葬骨 1、下顎骨1	11	墓丸北壁が断崖の崩壊 によって破壊されてい たため幅は不詳。
M2	Aa	2.8×(0.78-0.82 -1.86)	2.46×0.8-0.5 成年男性。單人仰身直肢。 体幹部の骨と上肢骨なし。	240°	Aa型陶罐1、A型盆1、B型盆1、 鉢形【削】1、B型瓶2、鉢形 【削】14、 骨制鉈器1	23	後庭（？）5点は確認 できない。
M3	Au	2.9×(1.2-1.25 -1.54)	2.4×(0.54- 0.66)-0.25 成年男性。單人仰身直肢。 保存状態は比較的良好。	234°	Aa型陶罐2、A型盆1、鉢形1、 鉢形1、骨指環1、 骨指環1	7	棺前方外縁に牛下顎骨、 犬頭骨を置く。
M4	Au	2.6×0.9-0.8	2.2×(0.5- 0.66)-0.08 成年男性？單人仰身。右下 肢をわずかに曲げる。	237°	Aa型陶罐3、鉢形 1、鉢形1、壺1 【削】1、B型瓶1	8	
M5	Bc	2.2×(1.3-1.4 -1.1)	1.8×(0.3- 0.4)-0.45 成年男性？單人仰身。右下 肢をわずかに曲げる。	238°	Aa型陶罐1、A型盆1、 B型盆1、鉢形【削】1	4	
M6	Bb	2.6×1.1-0.96	1.9×(0.3- 0.46)-0.38 成年男性。單人仰身直肢。 保存状態は比較的良好。	237°	Aa型陶罐1、B型陶罐1、 B型壺1、鉢形1、 【削】1、B型瓶1、C型瓶3	8	
M7	Bb	3×1.2-1.3	1.55×(0.26- 0.35)-0.35 成年女性。單人仰身直肢。 頭部の骨なし。	232°	Aa型陶罐1、A型盆1、B型盆1、 鉢形1、骨指環2、骨製骨1、馬頭 骨1頭6	9	棺前方外縁に牛頭骨、 犬頭骨を置く。
M8	Ba	2.75×1.42-1.52	1.92×(0.28- 0.52)-(0.42 -0.56) 成年男性。單人仰身直肢。 頭を左に向ける。	235°	Aa型陶罐1、A型盆1、鉢形1、 鉢形1、B型釣6、A型瓶1、B型瓶1	19	櫛外部にA型陶罐1、 鉢形1、B型釣1、B 型瓶2、A型瓶1
M9	Bb	1.6×1-0.7	0.08×(0.24- 0.28)-0.2 頭蓋骨のみ残る。子供。性 別および年式不詳。	230°	A型陶罐1	1	西北隅がM10を破壊す る。
M10	Ab	3.4×(1.7-1.8 -1.7)	2.92×(0.7- 1.1)-0.64 成年男性。單人仰身直肢。 保存状態は比較的良好。	238°	Aa型陶罐1、B型陶罐1、A型壺1、 鉢形1、子供【削】1、B型瓶3、 頭骨1、骨製の刃1、鉢形片1	15	木棺外縁に牛・犬の下 顎骨と牛歯骨等を置く。

墓番号	型式	墓域 長×幅-深さ (m)	人骨性別、年式、保存状況	方向	副葬品 (点)	総数	備考	
M11	Aa	2.7×1-2.1	2.24×(0.58~ 0.7)-0.42	成年男性。体幹部と上肢骨 欠損。	232°	An型陶罐2、A型壺1、鉢片・瓶各1	5	棺前方に牛頭骨を置く。 頭部2点は確認できない。
M12	Bb	2.8×1.42-1.64	2.14×(0.38~ 0.52)-0.4	成年男性。単人仰身直肢。 体幹部の骨散乱。	224°	Ab型陶罐1、A型壺1、B型壺1、鉢皿6	9	
M13	Aa	2.7×1.22-1.6	2.2×(0.54~ 0.7)-0.32	成年男性。単人仰身直肢。 保存状況は比較的良好。	243°	Aa型陶罐1、A型壺2、鉢皿1、食器1個 【前刀】1	8	棺前方上部に犬の頭骨 と趾骨を副葬する。
M14	Aa	2.76×(1.5~1.6) -1.7	2.4×(0.7~ 0.82)-0.4	成年男性。単人仰身直肢。 体幹部の骨と上肢骨の多く がない。	243°	Aa型陶罐1、Bb型壺1、P型壺1、鉢皿1、 B型壺4、瓶4、前刀2、矛1、環2	17	
M15	Aa	2.9×1.45-1.8	2.16×(0.54~ 0.68)-0.24	未成年男性？単人仰身直肢。 保存状況は比較的良好。	227°	Aa型陶罐1、Bb型壺1、B型壺1	3	
M16	Bb	2.7×(0.96~1.08) -1.15	2.08×(0.18~ 0.32)-0.34	成年男性？単人仰身直肢、 左腰骨と右脛の上に置く。	247°	Aa型陶罐2、陶製粉盒1、骨製管1、金 耳環1、鎖製耳環1	7	
M17	Bb	約3×1.2-0.8	1.76×(0.34~ 0.6)-0.44	不詳。	238°	未診判副葬品が少量残存。	?	すでに破壊されており、 墓底のみが残る。
M18	Aa	2.68×(0.9~1.1) -1.74	2.18×(0.56~ 0.7)-0.45	成年男性？単人仰身直肢、尺 骨・脛骨を重ねて置く。	135°	Ab型陶罐2、Bb型壺1、鉢皿1、 C型壺2	7	「鍔骨形」
M19	Aa	2.55×0.98-0.95	2.1×(0.45~ 0.7)-0.3	成年男性。単人仰身直肢。 頭蓋骨および体幹部の骨に 欠損あり。	230°	Ab型陶罐1、Bb型壺1	3	棺外部にA型陶罐1点 と歯骨若干を置く。
M20	Aa	2.5×1.16-1.9	2.26×0.62~ 0.16	成年男性。単人仰身直肢。 保存状況は比較的良好。	247°	Aa型陶罐1、A型壺2、鉢皿1、壺1、前 刀1、三脚鏡1、鎖花飾1	17	棺前方上部西北隅に大 頭骨を副葬する。
M21	Bb	3×1.2-1.31	1.95×(0.26~ 0.4)-0.32~ 0.38	成年女性。体幹部の骨散乱。	248°	Aa型陶罐1、A型壺2、陶製手鏡2、鉢皿2、合耙 鉢1、頭部管類(4)	13[9]	馬鹿床と管類(4)は 確認できない。

墓番号	型式	墓域 長×幅-深さ (m)	木棺もしくは石棺 長×幅-高 (m)	人骨性別、葬式、保存状況	方向	副葬品 (点)	枚数	備考
M22	Ba	2.5×0.9-1.7	2.05×(0.5- 0.56)-(0.3- 0.4)	成年女性? 単人仰身直肢。 頭蓋骨および体幹部の骨に 欠損あり。	232°	Aa型陶罐 1、B型甕 1、銅鏡 1	3	
M23	Bc	長さおよび幅不詳 深さ1.6	約1.15×0.85- 0.48	不詳。	約223°	Ba型陶罐 1 (変形している)	1	墓坑壁の大部分が断崖 の崩壊によって破壊さ れている。
合計		Aa型10基、Ab型 1 基、Ba型 2 基、Bb型 8 基、 Bc型 2 基	成年男性13、成年女性3、 性別未確定7	多くは 223-258 の間にあ る。	A型陶甕14、B型甕7、An型罐25、Ab型甕3、 Ba型甕5、Bb型甕2、Bc型甕2、計58件 (6821、編37)。銅器98 [91] 件。	196 [190]	計8点 (銅器7点) は 整理中に確認できなか った。	

表注

1. 当墓地の人骨標本は吉林大学人類学考古研究学生であった韓曉雷氏と朱曉打氏に委託し、鑑定をおこなっていただいた。ここに深謝する。
2. 銅器の点数および他の間にあって、丸括弧内の数字はひとまとめとして数えた点数、角括弧内の数字は存在が確実を示す。
3. 整理中に確認できなかった少量の遺器がある。これらは保存処理を行う前にタベをかぶらし、遺失してしまった可能性がある。

魅力与收获：三燕文化研究新进展略议

——以北票境内的相关考古发现为例

赵志伟 王 宇 万 欣

在中国北方十六国时期，鲜卑族是当时最有作为的一个少数民族。其中的东部鲜卑慕容部从3世纪初迁居辽西到436年北燕灭亡的200多年间，在今之辽西地区先后建立了三个地方割据政权，即慕容皝所建之前燕(337—370年)、慕容垂所建之后燕(384—409年)和鲜卑化的汉人冯跋所建之北燕(409—436年)，在中国北方民族大迁徙和大融合、文化大碰撞和大交流的历史上写下了浓重的一笔，为后世留下了一批独具特色的文化史迹。三燕文化，即指主要发现于朝阳和北票境内大凌河流域的与前燕、后燕和北燕及前燕以前的慕容鲜卑有关的考古学文化，在辽宁全省境内的众多考古学文化中，属于最具地域色彩和民族特色的一支考古学文化。

1. 北票境内发现的三燕文化重要史迹

从目前的考古发现来看，与三燕文化相关的遗存大多分布在辽西地区偏北部，主要是北票境内南部和与之毗连的朝阳市东北部的大凌河流域。大凌河流域的水系与低缓的山峦纵横交错，地貌呈丘陵状，属于内蒙古草原与相对开阔的大凌河平原之间的过渡区域。这一带在历史上原属汉代所设辽西郡的一部分，自曹魏初年(约当3世纪初)东部鲜卑先祖莫户跋率部自塞外入居辽西后，这一带便成为鲜卑慕容部的世居祖地和“龙兴”之所。如果仅对发现于北票境内重要的三燕文化史迹做一下盘点，则不难发现会有如下之最。

(1) 辽西地区最早发现的鲜卑墓地——房身村墓地。该墓地位于北票市章吉营子乡房身村北山，被认为是慕容鲜卑自身发展的中期阶段——从慕容廆率部回迁徒河之青山(大致为大凌河中下游一带)后，至慕容皝建立前燕政权为止的一处具有代表性的墓地。此外，该墓地的M2和M8分别出土了2件金步摇饰，正是由于出自该墓地的金步摇饰的发现，学术界第一次将以房身村墓地为代表的这一类墓葬与史书上记载的慕容鲜卑联系起来^[1]。

(2) 国内最早发现的北燕将军墓——冯素弗墓。该墓位于北票市西官营镇梁杖子村馒头沟村民组将军山东麓，1965年9月发现并发掘，包括冯氏本人和其妻属的墓葬共2座。是迄今所见唯一的一座北燕纪年墓^[2]。

(3) 规模最大的一处三燕文化墓地——喇嘛洞墓地。该墓地位于北票市南八家乡四家板村喇嘛洞村民组西山坡上，1993年至1998年先后进行了5次勘探和发掘，占地面积约10000平方米，共清理出三燕文化墓葬416座。其年代约当3世纪末至4世纪中叶，是一处与前燕建国前后活动于大凌河流域的慕容鲜卑有关的大型墓地^[3]。

(4) 首次发掘的三燕早期建筑址——金岭寺建筑址。该建筑址位于北票市大板镇金

岭寺村西北的大凌河二级台地上，2000年7月至11月进行发掘，揭露面积3900平方米。属于一处可能与曹魏初年（3世纪中叶左右）慕容鲜卑先祖莫户跋率部自塞外入居辽西时，曾“始建国于棘城之北”这一历史事件有关的建筑址^[4]。

⑤ 出土具有早期鲜卑文化特征的成组陶器数量最多的墓地——大板营子墓地。该墓地位于北票市大板镇波汰沟村大板营子村民组西台地上，1994年和1999年共进行了3次勘探和发掘，共清理墓葬28座。其年代约当3世纪末至4世纪初，属前燕建国以前慕容廆时期的遗存^[5]。

北票境内的这些重要的三燕文化史迹同朝阳县境内的十二台乡两晋墓葬群、88M1、后燕崔通墓、袁台子壁画墓以及朝阳市内的三燕龙城宫城南门遗址一起，在大凌河中上游两岸及丘陵缓坡地带约650平方公里的范围内，形成了一个以慕容鲜卑遗存和三燕史迹相对集中的文化区域，其整体性、重要性、典型性和特殊性为北方十六国时期的考古发现所仅见^[6]。

2. 三燕文化研究的新进展和新启示

上述三燕文化遗存所具有的独特的历史内涵和鲜明的文化特征，使其在当今的考古文化中独具魅力，引人入胜。

魅力之一 以金步摇饰和铜鎏金镂空鞍桥包片这两种经典器物为代表，构成了一种独具地方特色的服饰风格和民族特色的马具文化。

魅力之二 北燕纪年墓冯素弗墓的确认，使其成为一个考古发现与史籍记载相互印证的经典墓例，也几乎成为现今通史、专史中逢论必引的重要墓例。

魅力之三 迄今所见规模最大的一处北方十六国时期的三燕文化墓地——喇嘛洞墓地将因其全面发掘、系统整理、综合研究及墓地资料的首次全景式发表而魅力无限。这些魅力表现在分布密集而又排列有序的墓葬布局，保存较好的大量具有鉴定价值的人骨标本、随葬的大量铁工和铁兵、形态多样化的陶器群、见于数座墓内的铁甲堆积以及首次据以复原的甲骑兵装模型等。

魅力之四 金岭寺建筑址是迄今所见唯一的一处经过考古发掘且年代早于燕都龙城的建筑址，由其规整的结构、对称的布局所反映出来的祭祀和礼仪性质给人以无限的遐想。

魅力之五 形制原始、组合完整、共生关系明确的大板营子墓地陶器群的出土，为中国北方鲜卑陶系的分期和类型学研究提供了一批重要标本。

此外，三燕文化本身还存在许多有史可据、令人企盼的待解之谜，诸如龙腾苑之谜、大棘城之谜和前燕纪年墓葬之谜等^[7]，显然，这些有待破解之谜也许是三燕文化的更大魅力所在。正是由于上述这些魅力的吸引，促进了以下相关研究的相继展开，并不断给人以新启示，引发新思考。

(1) 在考古学研究方面

① 关于鞍桥包片

作为三燕文化的两种最为经典和最具代表性的器物，金步摇饰和铜鎏金镂空鞍桥包片在北票和朝阳境内虽均有发现，但两相比较，后者与前者又有所不同：

就金步摇饰而言，发现于北票境内者在年代谱系上带有一定的序列性，即房身村步摇（3世纪末至4世纪初）—喇嘛洞IM7步摇（3世纪末至4世纪中叶）—冯素弗步摇（415年）。在形制上大致经历了一个从繁缛到简素再到以十字形框架取代“山题”式牌座的变化过程。日本学者认为在5世纪前半叶的朝鲜半岛开始出现的这种长着枝干的树木形装饰的新罗和伽耶金冠，均应是在慕容鲜卑的步摇文化和圣树思想的传播和影响下的产物。6世纪以后受百济的影响，日本的藤之木古坟中也出现了新式的步摇冠^[8]。

到目前为止，共发现鞍桥包片计有11件（副），分别出土或征集于8处不同地点，其中有5件（副）来自喇嘛洞墓地。这5件（副）包片有以下两个显著特点：

一是A型和B型并行。根据田立坤先生的研究，可将这些鞍桥包片划分为平面近铜钉形的A型和平面近椭圆形的B型两种，二者均属于一种高桥鞍^[9]。其中A型包片在北票市和朝阳县境内均有发现，而B型包片则仅见于北票喇嘛洞墓地。因此，如果将朝阳十二台乡砖厂88M1出土的2副铜鎏金镂空鞍桥包片视为最具代表性的A型包片的话，那么喇嘛洞II M101出土的1副铜鎏金镂空鞍桥包片无疑应是B型包片的典例。这种B型包片目前国内虽尚未见有其他出土例，但它在日本誉田丸山古坟中却见有出土，被日本学者称为“特异椭圆形包片”，并认为极有可能是慕容鲜卑制作的“舶来品”^[10]。

二是铜制和铁制兼备。在喇嘛洞鞍桥包片中，除了II M101出土的铜鎏金镂空鞍桥包片之外还见有铁制鞍桥包片，即II M202出土的素面并带有穿鼻的铁鞍桥包片和II M266出土的铁镂空贴金鞍桥包片，其形制分别与前述A型和B型铜制包片完全相同。显然，这是一个填补空白的重要发现，在中国两晋时期、朝鲜三国时期和日本古坟时代的马具发展史中占有重要地位。

除了上述两个特点之外，就目前所见出土鞍桥包片的墓例而言，喇嘛洞II M101和II M202是不多见的两个包片与人骨较为完整、相对位置关系明确的墓例^[11]。在这两座墓中皆随葬包片1副，各一大一小两件，且均置于死者足下。而值得注意之处在于两件包片皆是以上小下大（即距足部较近处置较小的包片，距足部较远处置较大的包片）的方式陈放的。若将这种陈放方式与人骨的葬式和面向联系起来考察，则似乎在向我们作出这样一种暗示，即较大的鞍桥应在人体之前，而较小的鞍桥应在人体之后，亦即鞍桥上的两件包片的安装方式应该是前大后小，而不是以前通常所认为的前小后大。这种安装方式不仅与马背前宽后窄的自然形状相适合，也便于骑乘者自鞍桥较低的后部跨腿跨越骑乘。

此外，从鞍桥包片和马蹬出土情况来看，这两种配套合用的马具随葬在一起的墓葬虽不

乏其例，诸如朝阳十二台乡砖厂 88M1、喇嘛洞 II M266 等。但在随葬有鞍桥包片的喇嘛洞 II M101 和 II M202 中，尽管其他马具诸如衔镳、带扣等一应俱全，然而却均不见有马镫随葬，这是一个多少有些令人费解的现象^[12]。对此，一种可能的解释似乎是与这些马鞍一起随葬的马镫或许还只是一种不易保存下来的皮质脚扣，这类脚扣有学者称之为“绳套式马镫”，曾见于晋宁石寨山西汉中期（前 2 世纪）墓葬出土的 1 件贮贝器上。在该器表现战争场面的模型中，一赤足骑士的脚每趾套在垂于马腹一侧的绳套内^[13]。由此则可推测，无论是十二台乡 88M1 的铜制马镫、还是喇嘛洞 II M266 的木芯铜包边马镫，其使用范围还仅限于那些身份等级较高者。在马镫普及应用的初期似乎经历过一个以木、铜制成的刚性马镫和以皮革制成的柔性脚扣并行互补的阶段。

② 关于北燕冯素弗墓的后续研究

在这方面，值得注意的有两点。

其一，据《晋书·冯跋载记》冯素弗为北燕燕王冯跋之弟，可谓皇族嫡亲，其高规格的墓葬形制和大量包含汉、鲜卑乃至西域文化因素的随葬器物是十六国时期这一特定历史条件下的民族关系和文化交流的重要物证。冯氏墓除了在石椁形制、墓向、祀牛、殉狗、高圈足炊器等方面保留了北方鲜卑文化传统外，在更多方面诸如塞印、金珰附蝉、铁旗座与安车、画棺与画壁、中原式的生活用具（铜凡本网等）和文具（石砚墨丸）以及兵器猎具等则表现了中原文化风格^[14]。

由这两种不同文化因素所涉及的对冯素弗本人族属判定的问题，随着相关研究的深入似乎也成了一个不是问题的“问题”。本来，冯氏的鲜卑化的汉人身份是根据史书上的相关记载确认的，并已被学术界普遍认可。然而，日本学者的研究结论却恰恰相反——冯氏应为汉化的鲜卑人^[15]。而由此联想到一个被忽略的现象是，在冯素弗墓、崔遁墓和李廆墓这三座墓葬中，崔氏和李氏墓的纪年均是直接通过随葬的刻有年号的墓表或墓砖确定的，唯独身份和墓葬规格最高的冯氏墓不见有文字纪年刻记，该墓纪年是根据随葬的“范阳公章”和“辽西公章”等 4 方汉文官印及《晋书·冯跋载记》上相关的对死者身份以及卒年的记载才得以确认的^[16]。这与身份级别不高的崔氏和李氏刻意以墓表或墓砖的形式来表明自己的汉族身份和卒年的做法明显不同，而这一点是否会与作为鲜卑人的冯氏不谙汉字、抑或是有意掩盖自己的鲜卑祖籍而不留刻字纪年于墓内有关？再者，同那些随葬器物所表现出来的诸多汉文化因素相比，表现在葬制和葬俗上的鲜卑文化因素更是一种渊源深远、根深蒂固、不易改变的文化因素。因此，从这一点上来看，这位通常被认为是鲜卑化汉人的冯氏，似乎仍难以完全排除疑似汉化程度很深的鲜卑人之嫌。

其二，从首次发表的出自该墓的马铠甲片资料来看，多为由若干锈结在一起的甲片组成的残块。由于这类残块上往往保留有甲片组合原状和联缀痕迹，因而在铠甲的研究中，它们显然要比大量的散片更具典型意义，故相对于散片而言，一般将其称之为“典型块”。其

中片长7-8厘米以上者应为马身甲上的甲片。这类甲片的片孔较多，有的达30多个以上（如I、II型片），其联缀工艺亦相应复杂和罕见，由此可窥见与冯氏的将军身份相匹配的铁马铠甲的结构和制作工艺确非一般^[17]。这些零散的典型块虽已失去据以对其进行整体复原的价值，但就甲片上的皮条连缀和包边痕迹的保存状况以及由此保留的制作工艺信息而言，显然要比喇嘛洞IM5铁马铠甲好得多和丰富得多。

③ 金岭寺建筑址的发掘和研究

金岭寺建筑址的发掘及发掘报告的发表是三燕文化研究新进展的重要标志之一。一般认为，这处建筑遗址应是慕容部始定居于辽西大凌河流域的一处早期高等级建筑遗存，具有前燕早期都邑的性质。在其建筑格局上，沿着纵轴线和横轴线采取均衡的对称方式，以“间”为单位构成单座建筑及院落进而以奇数形式组合的院落组群构成若干建筑单元。这种经过精心设计的建筑格局明显具有中国古代社会的宗法和礼教性质；而建筑外围环绕的带有防护作用的壕沟的出现，则又使得该处建筑与封建性的集权政治有关^[18]。田立坤先生通过对该建筑址布局特点的分析，及《晋书·慕容廆载记》上的相关记载，首次提出其是一处特殊的礼制性建筑“廆庙”的假说，指出“廆庙”即“慕容廆庙”，此庙应为慕容廆于357年所建，沿用至后燕末年，废于北燕^[19]。从这一假说对该建筑遗存复原的平面结构来看，该建筑遗存应由5组建筑组成（现存3组，另2组已被河水冲毁），其中北侧中部和东西两厢各1组，均由3个并列的院落构成，共9个院落；北侧西部和东部各1组，均由5个并列的院落构成，共10个院落，如此组成一个坐北朝南、平面呈“凹”字形的建筑群体。这样无论是在总体布局上还是在局部结构上，都可形成以正中一间的中轴线为中心的左右对称的模式，其最大特点是它的奇数对称布局。这种在建筑格局上刻意追求均衡和对称的现象，与汉长安城南郊礼制建筑——王莽九庙较为相似^[20]。在中国古代北方少数民族中，慕容鲜卑既然属于汉化最早、最深的一个民族，则在这种祭祀性和礼仪性建筑的设计和营建上，是否也会植入某些诸如“三路三重”“五方五色”和“九五之尊”等有某种“数字化”的汉文化传统礼制观念色彩的寓意呢？在这方面，金岭寺建筑遗址的奇数对称布局的确为我们留下了再作进一步思考的空间^[21]。

④ 喇嘛洞铁器的系统整理和研究

从中国治铁史的角度来看，喇嘛洞墓地出土的十六国时期的大量铁器是其最大魅力所在。这批铁器的数量之大、种类之多、随葬之普遍，皆为目前国内所见其他地区铁器时代的大型墓地所未有。据初步统计，在随葬铁器的310座墓中，共出土各类铁器2740多件（副、套、枚、组），每座墓葬平均随葬铁器8件以上，包括生产工具、兵器、马具和其他器类共5大类80多种，其中铁工（农具和手工工具）、铁兵和铁马具是喇嘛洞铁器的主要部分。从东亚地区范围来看，喇嘛洞铁器与在朝鲜半岛发现的三国时期的铁器和在日本九州地区发现的古坟时代的铁器，在形制、种类、组合以及所反映的总体文化面貌上具有明显的一致性，因

而可将此三者合为一体，其视为4至6世纪东亚地区的一个独具特色的完整的铁器系统。鉴于这一铁器系统主要是由8种铁工（铧、耰、镢或铲、镰、斧、锛、凿、削）、4种铁兵（剑、刀、矛、铍）和4种铁马具（鞍桥包片、镫、衔镳、带扣）共16种代表性器物构成的，故我们曾将其归结为“三铁十六器东亚铁器系统”^[22]。由于该系统内的铁器都是作为随葬品被有意识地置于当时的墓葬或古坟内的，因而所反映的各种历史文化信息更为丰富，研究价值也就更高。从这一点上来说，即便是作为东亚地区铁器发源地的中国中原地区也难以与之比拟。因此可以说，以喇嘛洞铁器为主要组成部分的4至6世纪的东亚铁器系统在整个古代人类社会历史上的铁器时代中都占据着重要地位。

⑤ 大板营子墓地墓葬资料的再整理

该墓地曾经过3次发掘，共清理墓葬28座。其中部分墓葬的资料曾分别于2003年和2010年进行过发表^[23]。鉴于该墓地的墓葬大多保持完整，对研究三燕文化墓葬的形制和陶器价值影响重大，故于最近又将其余尚未发表的保存完整的12座墓的相关资料进行了整理，并编写出简报^[24]。从目前已发表的资料来看，在以朝阳十二台乡两晋墓群、科左后旗舍根墓群和新胜屯墓群为代表的早期鲜卑遗存中，新胜屯仅2座墓，陶器数量有限，舍根陶器的数量虽较多，但多为征集品。因此，可与大板营子陶器作整体比较者，只有十二台乡两晋墓葬出土的陶器群。但据统计，在出自大板营子墓地23座墓内的58件陶器中，陶罐和陶壶分别为37件和21件，陶壶的数量不及总数的一半；十二台乡两晋墓共21座，出土陶壶和陶罐分别为21件和12件^[25]，陶壶数量已远超陶罐。

从东汉时期开始，内蒙古东北部向南至大凌河流域，从北向南，由早及晚，先后出现了夹砂大口罐和泥质灰陶壶，并逐渐形成了以这两种陶器为代表的陶器组合。这种陶器组合是早期慕容鲜卑最典型的遗存，流行于东汉晚期至西晋时期的西拉木伦河流域和大凌河流域。大板营子墓地就是这种陶器组合在辽西地区的代表，也是这种陶器组合进入辽西地区的原始状态^[26]。慕容鲜卑进入辽西后，开始快速汉化，陶器组合也发生了变化，夹砂大口罐与泥质灰陶壶先后消失，这些都使得大板营子陶器群在北方地区鲜卑陶系的研究中作用更为重要。

（2）科技考古研究

以北票喇嘛洞墓地的考古发现为契机，中日合作研究和科技考古研究亦相继展开。

① 铁器的保护处理、金相鉴定及人骨研究

其一，喇嘛洞墓地是随葬铁器最多的一处大型墓地，其总数达2740多件，在全部随葬器物总量中所占比重过半，这一点在目前所见国内已发表的大型墓地报告中尚属先例。1996年11月，辽宁省文物考古研究所与日本奈良文化财研究所达成了共同研究的协议，确定研究的课题为“亚洲古代都城遗迹研究与保护——三燕都城等出土铁器及其他金属器的保护与研究”。在这次共同研究中，我们与日方专业人员合作，对铁锈所含的氯化物、硫化物进行了

测定和分析，并根据不同类别的铁器的锈蚀状况，对选出的30件铁器标本采用氢氧化锂(LiOH)法对其进行保护处理。此举在国内尚属首例^[27]。

其二，与北京科技大学冶金与材料史研究所合作，对在喇嘛洞铁器中选定的32件标本进行了金相鉴定，其中农具9件、手工工具7件、兵器11件、其他器类5件。鉴定结果表明，喇嘛洞墓地铁器在材质和制作工艺上，明显受到了秦汉以来中原地区发达的钢铁冶铸和锻造技术的影响，在工艺上与中原地区属于同一个技术体系^[28]。这批铁器标本以锻铁制品为主，共26件，表明当时锻制技术已成为主要的制铁技术，工匠已基本掌握了在不同温度和锻打条件下铁质的变化规律。这些锻铁的材质又以炒钢为主，共13件，其中8件为兵器，表明炒钢已成为主要的制钢技术，并被广泛应用于军事上。对北燕冯氏墓随葬的16件铁器首次进行的金相鉴定结果表明，材质为优质的铸铁脱碳钢的铁器占一半，另有以夹钢制成的凿、以炒钢经淬火制成的剑及以炒钢经锻打制成的铁镜等^[29]。

两相比较，就铸铁脱碳钢而言，在喇嘛洞中占鉴定铁器总数的不足三分之一，而在冯氏墓中却占了鉴定铁器总数的一半。由此可见，在前燕至北燕时期的鲜卑社会中，随着铁器使用的普及，这种以生铁经过退火处理而形成的铸铁脱碳钢已明显成为一种使用率很高的铁器材质。

其三，与吉林大学边疆考古研究中心合作，对喇嘛洞墓地出土的人骨标本进行了系统的科学鉴定。鉴定结果表明，喇嘛洞三燕文化居民的遗传学构成并不单纯，而是一个“多源性同种系”的人群。喇嘛洞三燕文化居民的高颅性质显示其主体部分应属于东亚蒙古人种范畴，与朝阳地区发现的其他慕容鲜卑居民的颅型偏低的北亚人种特点大相径庭。因此，二者的族属可能并不一致。由于这是在依据400余个体的大样本数据资料的基础上得出的结论，故其科学性是无可质疑的^[30]。与这一鉴定结果密切相关者是喇嘛洞三燕文化居民的族属问题，对此，在学术界主要有“鲜卑说”（慕容鲜卑和宇文鲜卑）和“扶余说”两种^[31]。这一鉴定结果既然不支持“鲜卑说”，但是否就是支持“扶余说”呢？似乎亦不尽然，因为喇嘛洞三燕文化居民的面部特征与历史上世居吉林四平或农安地区东汉晚期的扶余族所具有的“古东北类型”的面部特征也有差别，其体质特征的复杂性显示了其种系来源的多源性^[32]。看来，在目前还缺少有关扶余族人骨鉴定的大样本数据与之进行比对之前，显然还不宜从体质人类学的角度对“扶余说”予以肯定。

总之，在族属问题上，目前还存在着一个如何将古文献相关记载与考古发现相结合得出的定性化结论、与通过人骨鉴定研究得出的定量化结论进行参照对接或整合的问题。北方十六国时期的人口大迁徙、民族大融合、文化大碰撞的历史条件决定了慕容鲜卑的民族成分的复杂性，这种复杂性大大增加了我们对这一时期的民族族属判定的难度。有鉴于此，许永杰先生曾指出：“考古学文化的族属研究应建筑在谱系研究的基础上。”“考古学文化族属研究的实践表明，这种谱系类比法要优于简单的三要素（即时代、地域和文化特征）类比法。”他在归

纳比较分别可能与拓跋鲜卑和慕容鲜卑有关的考古遗存各自独有的文化特征时指出：“随葬陶器在认定考古学文化的谱系和探讨考古学文化的族属问题上，是具有决定性作用的。”^[30]因此，在讨论喇嘛洞三燕文化居民的族属问题时，喇嘛洞陶器群与老河深陶器群在文化特征上的明显差异是不可忽视的一个重要方面。

② 铁制甲骑具装的复原研究

铁制甲骑具装是流行于我国北方十六国时期的一种重装骑兵装备。考古发现的与之密切相关的遗物是铁制的人胄、马胄及共存的大量甲片堆积。就目前所见，在墓内同时随葬这三种遗物者，除了朝阳十二台乡砖厂88M1之外，就是北票喇嘛洞IM5和IM17了。其中88M1是最早于1988年5月发现的随葬这类遗物的重要墓葬，不过遗憾的是，在清理过程中因缺乏经验，对甲片堆积处理失当，使其最终失去了复原价值。1995年秋，由这三种遗物构成的甲骑具装残骸终于又再现于喇嘛洞IM5之内，此次，我们以套箱法从该墓内整体取出保存，2003年夏秋之间，在中国社会科学院考古研究所白荣金先生的指导下，着重对套箱内的铁甲堆积进行了室内清理和复原研究。通过对该副铁甲中的人胄、马胄和众多型式甲片共存情况的考察，结合铁甲堆积中的“典型块”上的原始遗构和连缀线索以及其他相关图像资料，按照一定的工作流程和技术方法，在反复比较和分析的基础上，以实证复原为主，推测复原为辅，经过几个月的努力，终于复原出国内第一套甲骑具装纸板模型^[31]。虽然朝阳十二台乡砖厂88M1中的铁制甲骑具装因其无法复原而成憾事，而喇嘛洞IM5铁甲骑具装的复原则终于弥补了这一缺憾。

以喇嘛洞IM5铁甲骑具装的复原研究为借鉴，近年我们又对IM17的铁甲堆积进行了系统的室内清理和初步研究。此番清理是继IM5甲骑具装的复原研究之后，借鉴和参照已有经验和方法，对喇嘛洞墓地出土的铁甲堆积进行的第二次科学的、系统的室内清理。由于IM17的铁甲堆积的锈蚀程度之重和保存状况之差均甚于IM5，在此次清理中虽未能对IM17甲骑具装的原貌进行整体复原，但通过对堆积的甲片进行的科学、系统的提取和初步的分类考察，相信仍然能够对以后的相关复原研究提供一些有益的参考和借鉴^[32]。

3. 作为地域性文化标志或符号的三燕文化

（1）三燕文化与大凌河文明

如果说文明是一种历史文化的积淀，那么，在辽西境内流淌着的大凌河这条文明长河中，三燕文化就是其最为厚重的积淀之一。早在3世纪初，曾为中国北方地区少数民族之一部的东部鲜卑自离开内蒙古中部的世居之地以后，最初在其先祖莫户跋的带领下首次入居辽西，继而又随其第三代首领涉归迁往辽东北，289年东部鲜卑慕容部在其首领慕容廆的率领下，再迁回徒河之青山（约为今大凌河中上游一带）。此后，经过近半个世纪的艰苦创业，终于以大凌河流域为依托奠基立国。在立国之前及以后，慕容鲜卑历经与汉、扶余、乌桓和高

句丽等民族之间的冲突、融合和文化上的碰撞、吸收，创造了璀璨一时的以慕容鲜卑文化为主要内涵的区域性的民族文化——三燕文化。如前所述，就目前的考古发现所见，在有关三燕文化的重要史迹中，位于北票境内的有金岭寺建筑址、三官甸子遗址、喇嘛洞墓地和大板营子墓地，位于朝阳境内的有龙城宫城南门遗址、团山子遗址、十二台营子墓地和袁台子墓地等。从空间分布来看，这些遗址和墓葬沿着大凌河两岸大体按年代的早晚由东北向西南布列，形成了一条由一河两地（即大凌河中上游、朝阳县东北境和北票市西南境）构成的“三燕文化史迹长廊”。这种三燕文化遗存空间布局的形成不是偶然的，而是在十六国时期的民族迁徙与融合、文化交流与影响的历史条件下，地理因素（生态环境和资源条件）和人文因素（慕容鲜卑社会的政治、经济和军事的发展）相互作用的必然结果。

（2）三燕文化、辽河文化与辽海文化

在经济大发展、文化大繁荣的当今之世，地域文化标志的确立已成为各地区文化建设的一项重要内容。在以何种文化称谓作为辽宁地域文化标志或文化符号的问题上，学术界曾有“辽河文化”说和“辽海文化”说^[36]。如撇开持此二说的各种理由，仅就辽宁属于滨海省份这一点来说，“辽海文化”较之“辽河文化”似乎更具文化魅力和符号意义。从历史上看，人类社会以及所创造的一切文化和文明所赖以生存和发展的最基本、最重要的自然资源莫过于其所在区域内的水系了。辽河虽为辽宁境内第一大水系，但其主要流域仅限于包括辽北低丘区在内的辽河平原、辽西地区的大、小凌河和辽东地区的叆河和浑江等都是相对独立于辽河水系之外的重要水系，以这些水系和相应的生态环境为依托，曾在历史上产生并发生过区域性重要影响的两种文化，即十六国时期的三燕文化和两汉至隋初时期的高句丽文化。可见，只有以辽海之“海”的海纳百川的气势才足以涵盖和彰显辽宁全境中不同区域内的各种生态环境、多种经济模式、多民族人口构成以及据以形成的多元化的地域文化形态。其关系，如同王绵厚先生对“辽河文明”和“辽海文化”之间的关系所作的形象比喻那样，应是一种“同心圆”式的、互为表里的不同层次的姊妹文化的关系^[37]。

然而，在文化概念的层面上，作为考古学意义上的“三燕文化”与作为文化学意义上的“辽海文化”是否也有相通之处呢？回答是肯定的。学术界曾将“辽河文化”的主要特点归纳为以“闯关东”为代表的移民文化和以满汉融合为主导的北方多民族文化聚合^[38]。其实，“移民文化”和“多民族文化聚合”又何尝不是“辽海文化”的两大特点呢？而形成这两大文化特点的历史渊源最早即可追溯至有国史可考、有史迹可寻、有遗物可据的三燕文化。如前所述，包括慕容鲜卑在内的东部鲜卑早在3世纪中叶，在其先祖莫护跋的率领下就已入居辽西，这应是一次有史以来最早的曾对这一区域的文化形态产生过重要影响的“移民事件”；而由这批包括慕容鲜卑在内的东部鲜卑移民及其后裔或后继者所创造的三燕文化，则更是一种融鲜卑、汉、乌桓、扶余和高句丽等文化于一体的“多民族文化聚合”。在历史上曾流徙于今之辽宁境内的诸多北方少数民族中，能够以封建割据的形式建立自己的国家政

权，在对其辖境进行有效的王朝统治的同时又据以在北方乃至中原地区实现局部统一者，唯有慕容氏鲜卑而已。从历史地图上也可以看到，在三燕政权中，除了建于5世纪初、偏居今之辽西一隅的北燕之外，其中的前燕和后燕的版图均几乎囊括今之辽宁全境，其南界已达今河南南阳至安徽蚌埠之间的淮河一带^[30]。虽然这两个王朝所维持的统治时间并不长，但其打下的历史烙印之深、产生的文化影响之远，以至于在后世的辽之契丹、元之蒙古等这些骑马民族文化中还可找到某些慕容鲜卑文化传统的影子。可见，考古学意义上的三燕文化是文化意义上辽海文化的重要历史渊源之一。

（3）三燕文化的符号意义、名片价值和品牌战略

“文化符号”、“文化名片”和“文化品牌”是近年流行于媒体和文化界的三个时髦用语。所谓“文化符号”指某一地域文化的标志性称谓，它代表着一定时空范围内特有的历史和人文的文化形态。据相关研究报告，文化界已确定将“辽海文化”作为辽宁的地域文化符号^[31]。而与之相关的“辽河文化”则被文化史学者视为本土文化的一棵具有主干性质的“文化结构树”，他们认为，各市县所倡导的乡土特色文化均属这棵“结构树”上的一个支系。以这种乡土文化为切入点，有利于共建“人文辽宁”^[32]。显然，如果将大凌河流域视为西辽河流域的一部分，那么根植于大凌河流域的三燕文化亦应是这棵“文化结构树”上的重要支系之一。将“三燕文化”作为包括大凌河、朝阳和北票在内的“一河两地”的文化标志性称谓，在当前以旅游业为龙头的文化产业空前繁荣的形势下，对不断加强乡土特色文化建设，科学合理地利用本乡本土的文化资源，充分发掘其历史内涵，彰显其文化魅力，并以此来促进地方经济建设和精神文化建设的协调发展方面，具有积极和现实的符号意义。

造型独特的金步摇冠饰、以铜鎏金镂空鞍桥包片为代表的较为完备的铜铁马具系统、世所罕见的甲骑具装和诸多纪年墓葬、大型墓地以及与宫城皇苑有关的建筑遗址等，所有这些不仅是三燕文化的重要特征，也是3至5世纪的三燕文化的创造者向已进入21世纪现代文明世界的我们所展示出的一张特色独具的“文化名片”。如何利用这张文化名片，不断充实和丰富辽海文化的历史内涵，为其增光添彩，使三燕文化走向全国进而面向世界，应是当前地方文化建设的重要任务之一。只有进一步加强国内外相关地区之间的文化交流与学术合作，对三燕文化继续进行深入多学科研究，并展开以乡土历史文化的科普教育为主旨的公共考古，让三燕文化走出学术圈，面向社会，普及大众，成为民间耳熟能详的科普常识，才能使三燕文化的名片价值得以最大实现。

党的十八大报告曾明确指出，文化是民族的血脉，是人民的精神家园。在科学昌明、学术繁荣、文化建设蓬勃兴起的当今之世，如何将具有上述符号意义和名片价值的三燕文化打造成为一个在全国性的地方文化建设中研究成果更多、知名度更高因而影响力更大的地域性的文化品牌，使之成为促进地区经济发展与地方文化建设良性互动的典范，这是需要我们不断进行思考和探索的课题之一。虽然这一课题的制定和实施三燕文化的品牌战略还有很长的

路要走，还有许多实际工作要做，诸如三燕文化史迹的系统调查、勘探以及重点发掘和研究；前述“三燕文化史迹长廊”上的遗址公园和墓园建设、景观设计、保护与申遗；以三燕文化为主题或重要内容的乡土教材的编纂和公共考古的展开；以三燕文化旅游专线的开辟为主要内容的文化产业的运作等等，但可以相信，只要我们能够坚定不移地贯彻党的十八大提出的关于建设社会主义文化强国的既定方针，发扬锲而不舍的精神，经过长期的不懈努力，将三燕文化打造成为一个区域性的文化品牌的战略构想就一定能够实现。

注

- [1] 陈大为：《辽宁北票房身村晋墓发掘简报》，《考古》，1960年第1期。关于房身M8出土的金步摇饰，参见孙国平：《试论鲜卑族的步摇冠饰》，《辽宁省博物馆、考古学会成立大会会刊》，1981年。
- [2] 黎瑞瀚：《辽宁北票西官营子北燕冯素弗墓》，《文物》，1973年第3期。
- [3] 辽宁省文物考古研究所等：《辽宁北票喇嘛洞墓地1998年发掘报告》，《考古学报》2004年第2期。
- [4] 辛岩等：《金岭寺魏晋时期大型建筑群考古发掘获初步成果》，《中国文物报》，2001年1月31日。
- [5] 辽宁省文物考古研究所：《辽宁北票市大板营子慕容墓的勘探与发掘》，《辽宁考古文集》（二），科学出版社，2010年7月第1版。
- [6] 万欣：《鲜卑墓葬、三燕史迹与金步摇饰的发现与研究》，《辽宁考古文集》（一），辽宁民族出版社，2003年7月第1版。关于朝阳县境内发现的三燕文化重要遗存，可参见：辽宁省文物考古研究所等：《朝阳王子坟山墓群1987、1990年考古发掘的主要收获》和《朝阳十二台砖厂88M1发掘简报》，《文物》，1997年第11期；陈大为等：《辽宁朝阳后燕崔道墓的发现》，《考古》，1982年第3期；辽宁省博物馆文物工作队等：《朝阳袁台子东晋壁画墓》，《文物》，1984年第6期；田立坤等：《朝阳古城考古纪略》，《边疆考古研究》，第6辑，科学出版社，2007年12月第1版。
- [7] 参见朱子方：《记后燕龙腾苑遗址的发现》，《东北地方史研究》，1984年创刊号；田立坤：《棘城新考》，《辽海文物学刊》，1996年第2期；辛发等：《锦州前燕李廆墓发掘简报》，《文物》，1995年第6期。至于墓表纪年为“永昌三年”（应为太宁二年，即324年）的李廆墓，其纪年并不在三燕纪年范围之内，只能算是东晋墓葬，而非原报告所定的“前燕墓葬”。
- [8] 毛利光俊彦（日）撰，李贤淑译：《中国古代北方民族的冠》，《东北亚考古学论丛》，150页，科学出版社，2010年1月第1版。
- [9] 田立坤：《论喇嘛洞墓地出土的马具》，参见表一，《文物》，2010年第2期。
- [10] 桃崎祐辅（日）撰，姚义田译：《从倭出土的马具看国际环境——倭与朝鲜三国伽耶、慕容鲜卑三燕的交往》，《历史与考古信息·东北亚》，2008年第1期。
- [11] 参见注[3]，图四、五、图版七。
- [12] 参见注[3]。
- [13] 宋兆麟：《古代器物溯源》，143页及附图16~4，商务印书馆，2014年11月第1版。
- [14] 徐秉琨：《冯素弗墓的发现所引发的思考》，《辽宁省博物馆馆刊》（2010），20页，辽海出版社，2010年11月第1版。
- [15] 内田昌功（日）撰，姚义田译，《北燕冯氏出身与〈燕志〉、〈魏书〉》，《辽宁省博物馆馆刊》，第2辑，2007年。
- [16] 同注[2]。
- [17] 卢治萍：《冯素弗墓出土铁甲片研究》，《辽宁省博物馆馆刊》（2011），28页，辽海出版社，2011年12月第1版。
- [18] 辛岩，付兴胜，穆启文：《辽宁北票金岭寺魏晋建筑遗址发掘报告》，《辽宁考古文集》（二），科学出

- 版社, 2010年7月第1版。
- [19] 田立坤：《金岭寺建筑址为“庵庙”说》，《庆祝张忠培先生八十岁论文集》，科学出版社，2014年7月第1版。
- [20] 杨鸿勋：《宫殿考古通论》，紫禁城出版社，2001年8月第1版。另参见中国科学院考古研究所汉城发掘队：《汉长安城南郊礼制建筑群址发掘简报》，《考古》，1960年第7期。
- [21] 中国传统宅院建筑的最高规格为左、中、右三路之制，其台基分为上、中、下三重；五方五色，即指东青、南赤、中黄、西白、北黑，象征一国领土。参见韩增禄：《易学与建筑》，158和111页，沈阳出版社，1999年6月第2版。
- [22] 万欣：《喇嘛洞铁工初论——兼议中国慕容鲜卑、朝鲜三国时期和日本古坟时代铁器葬俗的一致性与差异性》，《东北亚考古学论丛》，科学出版社，2010年1月第1版。
- [23] 武家昌：《辽宁北票市大板营子鲜卑墓的清理》，《考古》，2003年第5期。另参见注〔5〕。
- [24] 王宇、万欣：《辽宁北票市大板营子墓葬的勘探与发掘(续)》，见本集第1页。
- [25] 辽宁省文物考古研究所等：《朝阳王子坟山墓群1987、1990年考古发掘的主要收获》，《文物》，1997年第11期。
- [26] 王宇：《北票大板营子墓地出土陶器研究》，见本集第107页。
- [27] 辽宁省文物考古研究所、日本奈良国立文化财研究所：《辽宁北票市喇嘛洞鲜卑贵族墓地出土铁器的保护处理及初步研究》，《考古》，1998年第12期。
- [28] 北京科技大学冶金与材料史研究所等：《北票喇嘛洞墓地出土铁器的金相实验研究》，《文物》，2001年第12期。另参见陈建立：《从铁器的金属学研究看中国古代东北地区铁器和冶铁业的发展》，《北方文物》，2005年第1期。
- [29] 韩汝玢：《北票冯素弗墓出土金属器的鉴定与研究》，《辽宁省博物馆馆刊》（2010），辽海出版社，2010年11月第1版。
- [30] 陈山：《喇嘛洞墓地三燕文化居民人骨研究》序言部分(朱泓撰)，科学出版社，2013年3月第1版。
- [31] 关于“扶余说”和“宇文氏鲜卑说”，可分别参见(田立坤：《关于北票喇嘛洞三燕文化墓地的几个问题》，《辽宁考古文集》，辽宁民族出版社，2003年7月第1版；陈平：《辽西三燕墓葬论述》，《内蒙古文物考古》，1998年第2期。)在4世纪中叶，慕容皝曾分别对位居其西北部的宇文鲜卑和位居其东北部的高句丽进行杀伐攻略，徙掠其部众皆达五万余(口)。另据《资治通鉴·晋记》卷九七载，永和元年(345)，记室参军封裕在上书谏中也有慕容皝曾“南挫强赵，东兼高句丽，北取宇文，拓地三千里，增民十万户”之语，由此可窥见前燕境内人口的多民族成分之一斑。
- [32] 参见注〔30〕，158页。
- [33] 许永杰：《鲜卑遗存的考古学考察》，《北方文物》，1993年第4期。
- [34] 白荣金等：《辽宁北票喇嘛洞十六国墓葬出土铁甲复原研究》，《文物》，2008年第3期。
- [35] 万欣等：《辽宁北票市喇嘛洞墓地IM17铁甲堆积的室内清理》，见本集第255页。
- [36] a. 曲彦斌主编：《辽宁文化通史》，29页，大连理工大学出版社，2009年12月第1版：
b. 辽宁文化符号和文化定位问题课题组：《关于辽宁文化符号和文化定位问题的研究报告》，《沈阳故宫博物院院刊》，第七辑，2009年。
- [37] 王绵厚：《纵论辽河文明的文化内涵与辽海文化的关系》，《辽宁大学学报》(哲学社会科学版)，2012年第6期。
- [38] 同注〔36〕a。
- [39] 《中国文物地图集·辽宁分卷》，2010年。
- [40] 同注〔36〕b。
- [41] 同注〔36〕a，28页。

魅力と収穫：三燕文化研究の新進展略論 — 北票域内の関連考古発見を例として—

趙志偉 王 宇 万 欣

中国北方の十六国期において、鮮卑族は当時もっとも成功した少数民族である。その中の東部鮮卑慕容部は、3世紀初めの遼西遷居から436年の北燕滅亡までの200年以上の間、現在の遼西地区において相次いで3つの地方割拠政権を建てた。すなわち慕容廆が建てた前燕（337~370年）、慕容垂が建てた後燕（384~409年）、鮮卑化した漢人の馮跋が建てた北燕（409~436年）は、中国北方民族の大移動と大融合、文化の大衝突と大交流の歴史上に濃い一筆を書き入れ、独特の特色を備えた文化史跡を後世に遺した。三燕文化とはすなわち、主に朝陽と北票域の大凌河流域で発見された前燕、後燕、北燕、および前燕以前の慕容鮮卑と関係する考古文化を指し、遼寧省全域内の多くの古文化史跡の中で、地域色と民族的特色をもっともそなえた考古文化である。

1. 北票域内で発見された三燕文化の重要史跡

以下の考古発見からみて、三燕文化と関係する遺跡の大部分は遼西地区北寄りの地域に分布しており、それは主に北票域の南部とこれに連なる朝陽県北東部の大凌河流域である。大凌河水系と低く緩やかな山並みが縦横に交錯し、地形は丘陵状を呈し、内モンゴル草原と相対的に広くひらけた大凌河平原の間の過渡地にあたる。この一帯は、歴史の上ではもとは漢代に設けられた遼西郡の一部であった。曹魏初年（3世紀初頃）に東部鮮卑の先祖の莫護跋が部を率いて塞外より遼西に入居した後、この一帯は鮮卑慕容部の父祖伝来の地、そして「龍興」の地となった。北票域内で発見された重要な三燕文化の史跡をみると、大変傑出した遺跡が存在することがわかる。

① 遼西地区で最初に発見された鮮卑墓地：房身村墓地

北票市章吉營子鄉房身村の北山にある。この墓地は、慕容鮮卑の発展の中期段階、つまり慕容廆が部を率いて徒河の青山（おおよそ大凌河中下流域一帯）に遷居して以降、慕容皝が前燕政権を確立するより前の代表的な墓地であると考えられている。2号墓と8号墓からは、各2点の金製歩搖飾が出土した。この墓地の金製歩搖の発見によって、学術界は初めて、房身村墓地を代表とするこれら墓を史書に記載された慕容鮮卑と関連づけたのである⁽¹⁾。

② 国内で最初に発見された北燕將軍墓：馮素弗墓

北票市西官營鎮梁杖子村饅頭溝村民組の將軍山東麓に位置する。1965年9月に発見され、

発掘がおこなわれた。馮氏本人とその妻・親族の墓を含む全2基である。現在にいたるまで唯一発見された北燕紀年墓である⁽²⁾。

③ 最大規模の三燕文化墓地：喇嘛洞墓地

北票市南八家子鄉四家板村喇嘛洞村民組の西にある山の斜面上に位置する。1992年から1998年の間に相次いで5次の探査と発掘を行い、占有面積は約1万m²、全部で三燕文化の墓葬420基を調査した。その年代はおよそ3世紀末～4世紀中葉で、前燕建国前後に大凌河流域で活動した慕容鮮卑と関係する大型墓地である⁽³⁾。

④ 最初に発掘された三燕早期の建築址：金嶺寺建築遺跡

北票市大板鎮金嶺寺村北西の大凌河二級台地上に位置する。2000年7月から11月にかけて、3900m²の面積を発掘した。曹魏初年（3世紀中葉頃）に慕容鮮卑の先祖莫護跋が部を率いて塞外より遼西に入居した時、かつて「始め國を韓城の北に建てる」という歴史的出来事と関係する建築址である可能性がある⁽⁴⁾。

⑤ 初期鮮卑文化の特徴を備えた土器組成数が最大の墓地の発見：大板營子墓地

墓地は北票市大板鎮波汰溝村大板營子村民組の西の台地上にある。1994年と1999年に合計3次の探査と発掘を行い、全部で28基の墓を調査した。その年代はおよそ3世紀末～4世紀初頭で、前燕建国以前の慕容廆期の遺跡である⁽⁵⁾。

北票域内のこれら重要な三燕文化の史跡は、朝陽県内の十二台両晋墓群、十二台鄉磚廠88M1、後燕崔道墓、袁台子塗画墓、および朝陽市内の三燕龍城の宮城南門遺跡と共に、大凌河中上流两岸および緩やかな丘陵地帯の約650m²の範囲内にあり、慕容鮮卑の遺跡と三燕史跡が比較的集中する文化区域を形成しており、その完全性、重要性、は北方十六国期の考古発見で稀にみるところである⁽⁶⁾。

2. 三燕文化研究の新たな進展と新事実

上述の三燕文化遺跡が持つ独特の歴史的内容と鮮明な文化的特徴は、それによって現在の考古文化のなかで独特の魅力を有しており、人を引き付けてやまない。

魅力その一：金製歩搖飾と金銅製透彫鞍金具というこの両種の象徴的資料を代表とし、独自の地方的特色を備えた服飾スタイルと民族的特色を備えた馬具文化を構成した。

魅力その二：北燕紀年墓である馮素弗墓の確認は、考古学の発見と史書の記載とが相互に裏付けあう典型的な墓の例となり、現在の通史・特定分野史の中で必ず引用される重要な墓の例となっている。

魅力その三：喇嘛洞墓地は現在までに明らかとなった最大規模の中国北方十六国期の三燕文化墓地である。喇嘛洞墓地の全面発掘、系統的な整理、そして総合的な研究は、墓地資料が初めて包括的に発表されたことによって、その魅力は無限に広がった。これらの魅

力は、密な分布と規則的な配列の墓葬配置、保存状態が比較的良好な大量の人骨標本、副葬された大量の鉄製工具と武器、形態が多様化した土器群、数基の墓内で発見された鉄製小札堆積、および初めて出土資料にもとづいて復元した重装騎馬模型などに表れている。

魅力その四：金嶺寺建築遺跡は、現在に至るまで唯一の考古発掘を経て年代が燕都龍城の建築遺跡よりも古い遺跡であり、その規格にかなった構造、対称配置が反映する祭祀と儀礼的性格によって、無限の思いをさせさせる。

魅力その五：原始的な形態、完全な組成、共存関係が明確な大板營子土器群の出土は、中国北方鮮卑土器系譜の時期区分と類型学研究に重要な標識資料を提供了。

この他に、三燕文化自体にはなお多くの史料証拠、人々によって解き明かされることを待っている謎が存在する。例えば龍勝苑の謎、大棘城の謎、前燕紀年墓の謎などである⁽⁷⁾。言うまでもなく、これら解明を待つ謎が三燕文化のさらに大きな魅力の在処なのかもしれない。まさしく上述のような魅力の吸引力によって、以下で述べる関連研究の展開を促進し、また、継続的に新事実を示すことによって、人びとに新たな思考をかきたてている。

（1）考古学研究の面において

① 鞍金具について

三燕文化のもっとも象徴的で代表的な遺物である金製歩搖飾と金銅製透彫鞍金具は、北票と朝陽域内で出土しているとはい、両者を比較すると後者は前者と異なる点がある。

金製歩搖飾については、北票域内で出土した歩搖は年代系譜上に一定の変遷がある。すなわち、相対的に年代がもっとも早い房身村の歩搖（3世紀末～4世紀初）→喇嘛洞I M7号墓の歩搖（3世紀末～4世紀中葉）→馮素弗墓の歩搖（415年）の順序となり、形の上では複雑なものから簡素なものへと変化し、さらに板状の牌座（山題）から十文字板金へという変遷をみせる。日本の研究者は、朝鮮半島では5世紀前半に新羅・加耶の金冠として姿を現す、この種の枝幹の長い樹木形装飾のある金冠は、いずれも慕容鮮卑の歩搖文化と聖樹思想の伝播と影響下の産物であろうと考えている。6世紀以降、百濟の影響を受けて日本の藤ノ木古墳でもまた新たなタイプの歩搖冠が出現している⁽⁸⁾。

鞍金具は、今までに全11点（組）の鞍金具が発見されており、8カ所から出土あるいは回収されており、そのうち喇嘛洞墓地出土のものが5点（組）ある。この5点（組）の鞍金具には、以下の顕著な特徴がある。

1つの特徴は、A型とB型の併存である。田立坤の研究によると、これら鞍金具は平面形が鎌形に近いA型と楕円形に近いB型の両種があり、両者は共に高橋鞍に属す⁽⁹⁾。このうちA型鞍金具は北票市と朝陽県内で発見されているが、B型鞍金具は北票の喇嘛洞墓地にのみみられる。このため、もし朝陽の十二台郷磚廠88M1号墓出土の2組の金銅製

透彫鞍金具をもっとも代表的なA型鞍金具とみるならば、喇嘛洞II M101号墓出土の1組の金銅製透彫鞍金具はB型鞍金具の典型例であることは疑いがない。このタイプのB型鞍金具は現在のところ中国国内ではいまだその他に出土例がない一方で、日本の誉田丸山古墳から出土しており、日本の研究者は「特異な梢円形平面の鞍金具」と呼び、慕容鮮卑の三燕で製作された「舶載品」の可能性が極めて高いとする^[30]。

2つの特徴は、青銅製のものと鉄製のものの併存である。喇嘛洞の鞍金具中には、喇嘛洞II M101号墓出土の金銅製透彫鞍金具の他に、さらに鉄製鞍金具がみられる。すなわち喇嘛洞II M202号墓で出土した素面で鍔のある鉄製鞍金具と喇嘛洞II M266号墓で出土した鉄地金張鞍金具であり、その形はそれぞれ前述したA型とB型銅製鞍金具とまったく同じである。言うまでもなく、これは両者の空白を埋める重要な発見であり、中国の兩晉期と朝鮮半島の三国時代、日本の古墳時代の馬具発展史の中で重要な地位を占めている。

上述の特徴の他に、現在までに鞍金具片が出土した墓については、喇嘛洞II M101号墓と喇嘛洞II M202号墓は、鞍金具と人骨がともに残存状況が良好で、比較的位置関係も明確な墓である^[31]。この2基はともに大小各1点の鞍金具1組が副葬され、いずれも死者の足元に置かれていた。注目に値するのは、この2点の鞍金具が上小下大（すなわち足により近い所に小さい方が、足からより遠い所に大きい方の鞍金具）の形で置かれていたことだ。もしもこの配置方法と人骨の埋葬方法と頭向を関連づけて考察するならば、これは一種の暗示のようだ。すなわち、大きい方の鞍金具は人体の前、小さい方の鞍金具は人体の後ろで用いられ、また鞍金具の装着方式も前大後小であったにちがいなく、これまで一般的に考えられてきた前小後大的組合せではない。このような装着方法は、頭側が幅広く、尻側が狹くなる馬の背の形状と適合するだけでなく、騎乗者が鞍の高さが低い後輪側から足を跳ね上げて乗るのに都合がよい。

この他に、鞍金具と鍔の出土状況をみると、この両種を組み合わせて使用した馬具をともに副葬した墓葬は少なくなく、朝陽十二台宮子88M 1号墓や喇嘛洞II M266号墓などがあるが、鞍金具を副葬した喇嘛洞II M101号墓と喇嘛洞II M202号墓では、轡や鉗具といった馬具はすべて揃っているのに鍔の副葬がみられず、これはやや一筋縛りでいかない現象である^[32]。これについて、可能な解釈は、すなわち、これら鞍と共に副葬された鍔は、もしかしたら保存されにくい皮製であったのかもしれない。このような鍔を研究者は「繩套式馬鍔」【繩紐式の鍔】と呼んでおり、雲南省晋寧の石寨山前漢中期墓（紀元前2世紀）で出土した1点の貯貝器上にみられる。この貯貝器の戦争場面を表現した形象の中で、裸足の一騎士が足の指を馬の腹に重ねた片方の鍔に入れている^[33]。のことから推測できるのは、朝陽十二台宮子88M 1号墓の金銅製輪鍔だけでなく喇嘛洞II M266号墓の木芯銅板張輪鍔も、その使用範囲はそれら身分が比較的高い者に限られていたという点である。鍔

の普及・展開の初期には、木と金銅によって製作した硬い鎧と皮革で製作した柔軟な鎧が併存し、相関関係にあった段階があるようだ。

② 北燕馮素弗墓の後続的研究について

これについては、2点が注目に値する。

第一に、「晋書」馮跋載記によると、馮素弗は北燕燕王馮跋の弟で、皇族嫡親といえる。規格性の高い墓制と漢と鮮卑、あるいは西域文化の要素を含んだ大量の副葬品は、十六国期という、特定の歴史条件下にあった民族関係と文化交流の重要な物証である。馮素弗墓は石構造、墓の主軸、牛を用いた祭祀、犬の殉葬、鏡等の面で北方鮮卑文化の伝統をとどめるほかに、例えば冥印、蟬文金璫、鐵旗座と安車、彩画棺と壁画、中原式の生活用具（青銅製瓶、鐵鏡など）と文具（硯と墨）、および武器・狩猟具などが中原文化の風格を示している^[14]。

この両種の異なる文化要素が関係した馮素弗本人の族属の問題は、関連研究の深化にともない、まるで問題ではないことが「問題」となったかのようだ。もともと馮氏が鮮卑化した漢人であるということは、史書上の関連記載にもとづいて確認されたもので、学術界の普遍的な認識となっていた。しかし、日本の研究者の研究成果はかえって真逆のもので、馮氏は漢化した鮮卑人とする^[15]。そしてこれによって想起される観点として、馮素弗墓、崔通墓、李廆墓の3基の墓の中で、崔通墓と李廆墓の紀年は年号を刻んだ墓標あるいは墓碑という副葬品から直接確定したが、身分と墓葬規格が最高の馮素弗墓のみは文字による紀年刻記がみられず、副葬された「范陽公章」や「遼西公章」など、4点の漢文官印と「晋書」馮跋載記中の関連記載にもとづく被葬者の身分考証および卒年記載を通じて確認できたものだという点である^[16]。この点と、身分等級が高くなき崔通墓と李廆墓が、意を凝らした墓表あるいは墓碑の形でもって自身の漢人という身分と没年を表明した方法とはあきらかに異なる。この点は、鮮卑人である馮素弗が漢字に習熟していなかった、それとも故意に自身の鮮卑としての原籍を隠し、紀年を墓内に文字で残さなかったということなのだろうか。その上、それら副葬品が示す多くの漢文化要素に比べて、葬制と葬俗にみられる鮮卑文化の要素は、さらにある種、根源が深く、強固で容易に変わらない文化要素である。このため、この一点からみて、通常は鮮卑化した漢人とみなされている馮素弗は、漢化度が非常に高い鮮卑人であった疑いを完全に排除することは難しいようだ。

第二に、最初に発表された馮素弗墓出土馬甲小札資料は、多くは若干銷びて片同士が貼り付いた小札からなる残塊であった。これら残塊上には、往々にして本来の小札構成と縦じ合わせの痕跡が残っているため、甲冑研究においてそれらは大量の単体小札片よりも典型例としての意義を有している。このため、小札単体に対してそれを一般的に「典型塊」と言う。このうち小札長が7~8cm以上のものは馬甲の小札とすべきである。このような

小札の孔は比較的多く、あるものは30個以上に達し（例えばI、II型片）、その綴じ方もまたそれに応じて複雑かつ稀にみるもので、これによって馮素弗の將軍としての身分にふさわしい鐵製馬甲の構造と製作工芸をうかがいみることができ、これは珍しいことである⁽¹⁷⁾。これららばらばらになった典型塊は、全体復元をおこなう価値をすでに失っていたものの、小札の革縫や覆輪の痕跡の保存状態、およびそこに残されていた製作技術の情報からいうと、喇嘛洞I M5号墓の鐵製馬甲よりもより良好で、より一層内容豊富なものである。

③ 金嶺寺建築遺跡の発掘と研究

金嶺寺建築遺跡の発掘および発掘報告の公表は、三燕文化研究の新たな進展の重要な指標の一つである。一般的に、この建築遺跡は慕容部が初めて遼西大凌河流域に居を定めた早い時期の高等建築遺跡で、前燕早期の都城の性格をそなえていると考えられている。その建築プランには縱軸線と横軸線に沿って均衡をとる対称方式を採用しており、「間」を単位とする1基の建物と院落（中央の建物を版築壁が取り囲む区画）を構成し、さらには奇数の院落がグループとなった建物群という、いくつかの建築単位を構成している。このような念入りな設計を経た建築プランは、あきらかに中国古代社会の宗法と礼教の性質を有している。すなわち、建物外周を取り囲む防御作用のある壕の出現は、この建築が封建的な集権政治と関係しているということである⁽¹⁸⁾。田立坤はこの建物址の配置の特徴に対する分析において、「晋書」慕容雗載記の関連記載から、それが特殊な礼制建築、つまり「廟廟」であるという仮説を最初に提示した。「廟廟」はすなわち「慕容廟廟」を指す。この廟は慕容雗が357年に建てたもので、後燕末年まで用いられ、北燕に廃れた⁽¹⁹⁾。この仮説は、建築址の平面プランの復元から、5組の建築群（現存するのは3組で、ほか2組はすでに河流で破壊）で構成されたとする。このうち北面中央と東廂・西廂建物群は、3つの並列する院落で建物群を構成し、合計9つの院落がある。北面西部と北面東部の建物群は、共に5つの並列する院落が建物群を構成し、合計10の院落がある。こうして南面する平面「四」字形の建築址群を構成した。このように、全体配置だけでなく部分構成の上でも中央に引いた中軸線を中心とする左右対称の配置プランであり、最大の特徴はその奇数対称配置にある。このように、建築構造上に意を凝らして均衡と対称を追求する現象は、漢長安城南郊の礼制建築である王莽九廟と比較的類似する⁽²⁰⁾。中国北方の古代少数民族の中で、慕容鮮卑は漢化がもっとも早く、もっとも深く達した民族であるからには、この種の祭祀性と儀礼性を備えた建物の設計と造営において、何がしかの、例えば「三路三重」、「五社五稷」、「九五之尊」など、ある種「数字化」した漢文化の伝統的礼制の觀念寓意を移植できたのであろう。この点において、金嶺寺建築遺跡の奇数対称配置は我々にさらに思考を進めるための空間を残したといえる⁽²¹⁾。

④ 喇嘛洞墓地出土鉄器の系統的整理と研究

中国冶金史の観点から、喇嘛洞墓地で出土した十六国期の大量の鉄器は、そのもっとも魅力の所在するところである。鉄器の量と種類の多さ、副葬の普遍性は、どれも現在中国国内で発見されているその他の地区的鉄器時代の大型墓地にはないものである。基礎的な統計をみると、鉄器を副葬した310基の墓において、全部で各種鉄器2740点（組）以上が出土し、各墓葬は平均で8点以上の鉄器を副葬し、生産工具、武器、馬具、その他の計5類80種以上を含む。このうち農工具、武器、馬具が喇嘛洞墓地出土鉄器の主要器種である。東アジアの範囲でみると、喇嘛洞墓地出土鉄器は朝鮮半島で発見された三国時代の鉄器、および日本の九州から発見された古墳時代の鉄器と、形、種類、組成、および反映している総合的文化様相において顕著な一致をみることができる。したがってこの三者を一つに合わせて、それを4～6世紀における東アジア地域の独自的特色をそなえた完全な鉄器系統であるとみなす。この鉄器系統の主要分類が8種の農工具（犁、轡、鋤先（あるいは鍬）、鍊、斧、手斧、鑿、刀子）、4種の武器（劍、刀、矛、鎗）、4種の馬具（鞍金具、鐙、轡、銃具）の合計16種類を代表的器種構成とすることから、かつてそれを「三鐵十六器の東アジア鉄器系統」と結論付けたことがある²²⁾。この系統中の鉄器はいずれも副葬品として意識的に当時の墳墓内に置かれたもので、そのためそれが反映している歴史的、文化的情報はさらに豊富であり、研究価値もより一層高い。この点からして、たとえ東アジア地域の鉄器の源が中国中原地区であるとしても、それとは比べ難い。したがって喇嘛洞墓地出土鉄器を主要かつ重要な構成部分とする4～6世紀の東アジア鉄器系統は、全古代人類の社会史中の鉄器時代において重要な地位を占めているといえる。

⑤ 大板營子墓地の墓葬資料の再整理

該当する墓地は3次の発掘を通して合計28基の墓を調査した。このうち一部の墓葬資料は、2003年と2010年に発表された²³⁾。同墓地の墓葬は大部分が完全な状態で保存されていたため、三燕文化の墓葬構造と土器の研究に対する価値と影響は大きい。そのため最近未発表であった未盗掘の12基の墓の関連資料を整理し、概報を公表した²⁴⁾。現在すでに発表されている資料からみて、朝陽の十二台磚廠両晋墓群、科爾沁左翼後旗の舍根墓群と新勝屯墓群を代表とする初期鮮卑の遺跡において、新勝屯墓群はわずか2基で土器数も限られ、舍根墓群の土器は数がやや多いとはいえ、多くは採集品である。このため、大板營子の土器と総体的な比較ができるのは、十二台磚廠両晋墓群で出土した土器群のみである。統計をみると、大板營子墓地の23基の墓内で出土した58点の土器のうち、罐と壺はそれぞれ37点と21点で、壺の数は全体の半分に達していない。十二台磚廠両晋墓群は合計21基で、出土した壺と壺はそれぞれ21点と12点であり²⁵⁾、壺の数がすでに罐を大きく上回っている。

夾砂大口罐と泥質灰陶壺の出現は、後漢期に始まった内蒙東北部から南に向かって大

凌河流域へと達する、北から南へと前後関係を持って相次ぎ、あわせてこの両種の土器を代表とする土器組成を形成した。この土器組成は初期鮮卑の典型的な遺跡、すなわち後漢晚期～西晋期の西拉木倫河流域と大凌河流域で流行した。大板營子墓地は遼西地区におけるこの土器組成の代表であり、またこの土器組成が遼西地区に流入した原初形態である⁽²⁰⁾。慕容鮮卑は遼西に侵攻した後、急激に漢化を始め、土器組成もまた変化し、夾砂大口罐と泥質灰陶罐が相次いで消失する。これらのことから、大板營子土器群が北方地区の鮮卑土器体系の研究のなかで果たす役割は一層重要である。

(2) 考古科学的研究

喇嘛洞墓地の考古発見を契機として、日中共同研究と科学技術の手法を取り入れた考古科学的研究が相次いで展開された。

① 鉄器の保存処理、金相鑑定および人骨研究

第一に、喇嘛洞墓地は副葬された鉄器がもっとも多い大型墓地で、その総数は2740点以上にのぼり、全副葬品総数の半数以上を占めている。この点は現在中国国内で発表されている大型墓地の報告のなかで、いまだなお類をみないことである。1996年11月、遼寧省文物考古研究所と奈良文化財研究所は共同研究協定を締結した。研究課題は「東アジアにおける古代都城遺跡と保存に関する研究—三燕都城等出土の鉄器及びその他金属器の保存と研究」であった。この共同研究において、我々と日本側専門家は鉄錆に含まれている塩化物と硫化物について共同で測定と分析をおこない、数器種の鉄器の腐食状況をもとに選別した30点の鉄器標本に対して水酸化リチウム水溶液法(LiOH)で保護処理を実施した。これは中国国内で最初の例であった⁽²¹⁾。

第二に、北京科技大学冶金與材料史研究所と共同で、喇嘛洞墓地出土鉄器中から選別した32点の標本に対して金相鑑定をおこなった。そのうち農具は9点、工具は7点、武器は11点、その他器種は5点である。鑑定結果から判明したのは、喇嘛洞墓地の鉄器は材質と製作技術の上であきらかに秦漢以来中原地区で発達した鋼鐵製造と鍛造技術の影響を受けしており、技術の上で中原地区と同一の技術体系に属するということである⁽²²⁾。これら鉄器標本は鍛造製品が主で、合計26点あり、鍛造製作技術がすでに主要な鉄器製作技術となっており、当時の工匠は様々な温度と鍛打条件の下で鉄の性質が変化する法則をすでに基本的に把握していたことがあきらかとなった。これらの鍛鐵素材はまた炒鋼（鉄から脱炭）が主であり、合計13点のうち8点は武器で、炒鋼法がすでに主要な鋼製造技術となっており、また広く軍事上に応用されていたことが明らかとなった。北燕の馮素弗墓に副葬された16点の鉄器に対して初めて金相鑑定を行った結果、材質が優良な鍛鐵脱炭鋼の鉄器が過半数を占め、その他に夾鋼の盤、炒鋼を焼き入れした剣、および炒鋼を鍛打して作っ

た鉄鏡などがあることがわかった⁽²⁹⁾。

喇嘛洞墓地と馮素弗墓双方の金相を比較すると、鑄鐵脱炭鋼については、喇嘛洞墓地出土鉄器中では鑑定総数の1/3にお達しないが、馮素弗墓の鉄器では鑑定総数の半数を占める。このことから、前燕から北燕期にかけての鮮卑社会の中で、鉄器使用の普及にともない、この種の鉄を生み出す過程中に退火処理をして作った鑄鐵脱炭鋼がすでに使用率の非常に高い鉄器素材となっていたことがわかる。

第三に、吉林大学辺疆考古研究センターと共に、喇嘛洞墓地で出土した人骨標本に対して系統的な科学鑑定を実施した。鑑定結果からあきらかとなったのは、喇嘛洞の三燕文化住民の遺伝学的構成は単純ではなく、「多源的同種系」の集団だということである。喇嘛洞三燕文化住民の高顎性質は、その構成主体部が東亜蒙古人種の範疇に属すことを明示しており、朝陽地区で発見されたその他慕容鮮卑住民が偏低性質の北亜人種の特徴であることと大きな隔たりがある。このため、両者の族属はおそらく一致しない。これは400体以上の大量の標本データをもとに得た結論であるので、その科学性ゆえに疑う余地がない⁽³⁰⁾。この鑑定結果と密接に関係するのが喇嘛洞三燕文化住民の族属問題である。これについて、学術界では、「鮮卑説」（慕容鮮卑と宇文鮮卑）と「扶余説」の2つがある⁽³¹⁾。この鑑定結果はあきらかに「鮮卑説」を支持せず、すなわち「扶余説」を支持するのだろうか。しかしまったくその通りとはいえないようだ。喇嘛洞三燕文化住民の顔面部の特徴は、歴史上、吉林省四平地区あるいは農安地区の後漢後期の扶余族が有する「古東北類型」の顔面特徴ともまた大きな違いがあり、形質的特徴の複雑性はその人種系譜の源の多源性を明示している⁽³²⁾。目下、扶余族に關係する人骨鑑定の大量標本データはこの喇嘛洞人骨と比較をおこなうにはなお不足しており、形質人類学の角度から「扶余説」を肯定するのはあきらかに適切ではない。

要するに、族属問題では目下、古文献の関連記載を考古資料と合わせて得た定性分析的結論が存在しており、人骨鑑定研究から得た定量分析的結論と照らし合わせて接ぎ合わせる、あるいは整合するという課題がある。中国北方十六国期の人口大移動、民族大融合、文化大衝突の歴史条件が慕容鮮卑の民族構成成分の複雑性を決定し、この種の複雑性が我々のこの時期の民族の族属判定の難度を大いに引き上げている。これにかんがみると、許永傑はかつて「考古学文化の族属研究は系譜研究の基礎上に構築すべきだ」、「考古学文化の族属研究の実践は、この種の系譜分類法が簡単な三要素分類法（すなわち時代、地域、文化特徴）より優れていることを明らかに示している」と指摘したことがある。彼は帰納的比較分類で拓跋鮮卑と慕容鮮卑とが関係する考古遺跡の各自特有の文化特徴を指摘する際、「副葬土器は考古学文化の系譜を認定し考古学文化の族属問題を検討する上で、決定的な作用を持つものだ」と指摘している⁽³³⁾。このため、喇嘛洞三燕文化住民の族属問題

を議論する際、喇嘛洞土器群が老河深土器群と文化的特徴の上で明確に異なっていることは軽視できない重要な点である。

② 鉄製甲騎具装の復元研究

鉄製甲騎具装は我が国北方十六国期の重装騎兵の装備として流行した。考古学で発見されたこれと密接に関係する遺物として、鉄製の人冑、馬冑、および共伴する大量の小札堆積がある。目下のところ、墓内に同時に3種の遺物が副葬された例は、朝陽十二台88M1号墓を除くと喇嘛洞I M5号墓と喇嘛洞I M17号墓がある。このうち、1988年5月に最初に発見された朝陽十二台88M1号墓は、この種の遺物を副葬した重要墓葬である。しかし遺憾なことに、調査過程で経験の乏しさから小札堆積の処理を間違い、それは最終的に復元価値を失った。1995年秋にこの3種の遺物で構成された甲騎具装残骸が再び喇嘛洞I M5号墓内で出土し、外箱で覆って切り取る套箱法で墓中から全体を取り出し保存した。2003年の夏から秋の間に、中国社会科学院考古研究所の白榮金の指導と協力の下、再度、箱内の小札堆積に対して室内調査と復元研究を行った。この小札堆積中の「典型塊」上における原位置と綴じ合わせ方法、およびその他関係する図像資料を総括し、一定の製作工程と製作技術に照らして比較と分析を繰り返した上で、実証復元を主とし推測復元で補完し、数ヶ月の努力を経てついに国内第一領目の甲騎具装の紙板模型を復元製作した^[34]。鉄製甲騎具装は当初、1988年春に十二台碑廠88M1号墓で発見されたものの、ついにそれを復元できなかったことは遺憾であった。そして喇嘛洞I M5号墓鉄甲騎具装の復元は、ついにその時の遺憾の思いを満たした。

喇嘛洞I M5号墓甲騎具装の復元研究にならい、近年、喇嘛洞I M7号墓の鉄甲堆積に対して系統的な室内調査と基礎研究を行った。その整理は喇嘛洞I 5号墓甲騎具装の復元研究に後続するもので、すでにある経験と方法を手本とし、また参照して、喇嘛洞墓地で出土した小札堆積に対して第2次の科学的・系統的室内調査を行った。喇嘛洞I M17号墓の小札堆積の腐食度と保存状態は共に喇嘛洞I M5号墓より深刻であったため、今回の整理で喇嘛洞I M7号墓甲騎具装を本来の姿に完全復元することはできなかったものの、堆積した甲片を科学的・系統的に取り上げて基礎的な分類・検討することで、今後の関連復元研究に有益な参考・模範例を提供するものと信じている^[35]。

3. 地域的文化の表示あるいは符合としての三燕文化

(1) 三燕文化と大凌河文明

もし、文明がある種の歴史文化の沈殿であるとするならば、遼西城内で流れている大凌河というこの文明の長い川の流れの中で、三燕文化はそのもっとも厚い沈殿堆積の一つで

ある。早くも3世紀初めに、中国北方地区の少数民族の一部であった東部鮮卑は、内モンゴル中部の代々居住した地を離れてまずその先祖莫護跋の引率の下に遼西に入居した。続いてその第3代首領の渉帰にしたがって遼東の北に遷居した。289年、東部鮮卑慕容部は首領・慕容廆の統率の下、再び徒河の青山（現在の大凌河中上流域一帯）に移った。この後、半世紀近くの創業の苦難を経た後、ついに大凌河流域を地盤として国を建てた。立国の前および以後で、慕容鮮卑は漢、扶余、烏桓、高句麗などの民族との間で衝突と融合、そして文化上の衝突と吸収をたどり、光り輝く慕容氏の鮮卑文化を主要構成内容とする地方的民族文化である三燕文化を創造した。前述のとおり、現在の考古学的発見でみつかっている三燕文化に関する重要な史跡の中には、北票域内に金嶺寺建築遺跡、三官甸子遺跡、喇嘛洞墓地、大板營子遺跡、朝陽域内に、龍城南門遺跡、团山子遺跡、十二台營子墓地、袁台子墓地などがある。空間的な分布から、これら遺跡と墓葬は大凌河两岸に沿っておよそ年代順に北東から西南に並んでおり、一本の川が両地を貫いて流れる（すなわち大凌河中上流が朝陽東北部と北票西南部を貫いて流れる）ことにより構成された「三燕文化史跡回廊」を形成している。このような三燕文化遺跡の空間配置の形成は当然、偶然ではなく、十六国期の民族の移動と融合、文化の交流と影響という歴史条件の下で、地理的因素（生態環境と資源条件）と人文的因素（慕容鮮卑社会の政治・経済・軍事的発展）の相互作用によって生まれた必然的結果である。

（2）三燕文化・遼河文化・遼海文化

経済的大発展と文化の大繁栄にある当時期において、地域文化の標識の確立はすでに各地の文化を築く際の重要事項となっている。どの種類の文化をもって遼寧地域の文化標識あるいは文化記号とするかという問題については、かつて学術界には「遼河文化」説と「遼海文化」説があった^⑯。この2説がもつ各種論拠はさておくとして、遼寧は海に面した省であるというこの一点からすると、「遼海文化」が「遼河文化」よりも文化的魅力と符合的意義をよりそなえていると思われる。歴史からみて、人類社会および創造されたすべての文化と文明が生存と発展のために依拠するもっとも基本的かつ重要な自然資源は、それが所在する地域内の水系にはかならない。遼河は遼省内第一の大水系ではあるが、その主要流域は遼北の低丘区域を含む遼河平原で、遼西地区の大・小凌河と遼東地区的鰲河と渾江は共に遼河水系から相対的に独立し、その外にある重要な水系である。これら水系と関係する生態環境をもとに歴史上生み出された、または発生した地域色ある重要な影響を与えた両種の文化が、十六国期の三燕文化と両漢から隋初期にかけての高句麗文化である。したがって、遼海の「海」は百川を收めいれるという気勢をもってしてこそ、遼寧全領域内の異なる区域の各種生態環境、多様な経済モデル、多民族の人口構成および、それに

もとづいて形成された多元化的地域文化の形態を明示している。両者の関係は、王綿厚が「遼河文明」と「遼海文化」の関係と表現してそれをたとえたように、一種「同じ同心円内にある」、表裏をなす異なるレベルの姉妹文化の関係とすべきである⁽³⁷⁾。

しかしながら文化概念という面では、考古学的意義の「三燕文化」と文化学的意義の「遼海文化」は通じ合うところがあるのだろうか。答えは通じ合うところがある、である。学界は、「遼海文化」の主な特徴を「闢闢東（山海闢を越えて関東へ移り住む）」を代表とする移民文化と満漢融合によって主導された北方多民族文化の集合であると帰結した⁽³⁸⁾。

現に、「移民文化」と「多民族文化の集合」がどうして「遼海文化」の二大特徴でないことがあろうか。すなわち、この二大文化特徴を形成した歴史的源は、国史から考えても、史跡からしても、遺物にもとづいても、最古は三燕文化に遡ることができる。前述のように、慕容鮮卑を内包する東部鮮卑は、早くも3世紀中葉にその祖先・莫護跋の引率のもと、遼西に入居した。これがこの地域の文化形態に重要な影響を生み出した有史以来最古の「移民事件」である。そしてこの慕容鮮卑を内含する東部鮮卑移民、およびその後裔あるいは後繼者によって創造されたのが三燕文化であり、さらには鮮卑、漢、烏桓、扶余、高句麗等の文化が融合して一体となったのが「多民族文化の集合」である。歴史上、現在の遼寧省内に流れ込んだ多くの北方少数民族の中で、最初に封建割拠の形で自身の国家政権を建て、その割拠した地を確に王朝統治者となつたのは慕容鮮卑のみである。また、歴史地図上からうかがえるのは、慕容鮮卑が建てた3つの燕国のうち、5世紀初めに建国して現在の遼西の一端を居とした北燕を除き、そのうちの前燕と後燕の版図はいずれも現在の遼寧全域をほぼ管轄し、その南境界は現在の河南省安陽から安徽省蚌埠の間の淮河一帯に達していた⁽³⁹⁾。この両王朝が維持された統治期間は長くないが、それが刻みこんだ歴史の烙印は深く、生み出した文化影響は長期にわたり、後世の遼における契丹・元における蒙古などの騎馬民族文化中にいたるまで、何らかの慕容鮮卑文化の伝統の影をみつけることができる。このように、考古学的意義における三燕文化は文化学的意義における遼海文化の重要な歴史的源の一つなのである。

（3）三燕文化の記号的意義・顔としての価値・ブランド戦略

「文化符合」【文化記号】、「文化名片」【文化名刺：文化を代表する顔】、「文化品牌」【文化ブランド】が目下、メディアと文化界に流行する3つの流行語である。いわゆる「文化符合」とは、すなわちある一地域の文化の記号としての呼称を指し、それは一定の時空間的範囲内に特有の歴史・人文的文化形態を代表する。関連研究の報告によると、文化界ではすでに「遼海文化」を遼寧の地域文化記号としてすでに確定した⁽⁴⁰⁾。これと関係する「遼河文化」を、文化史学者は在地文化の1本の根幹的性格をそなえた「文化結合樹」である

とみなしている。彼らは各市県が提唱する郷土の特色ある文化はいずれもこの「結合樹」の一本の枝であると考えている。このような郷土文化を切り口とすることは、「人文遼寧」の建設に有利である⁽⁴¹⁾。大凌河流域を西遼河流域の一部分とみるならば、大凌河流域に根差す三燕文化はまた、この「文化結合樹」の重要な分枝の1本である。「三燕文化」を大凌河・朝陽・北票を内に含む「一河两岸」文化の呼称とすると、これは現在の旅行業をトップとする文化産業の空前の繁栄下では、郷土の特色ある文化建設の不断の強化を通じて科学的、合理的に在地の文化資源を利用し、内包する歴史を十分に発掘し、その文化の魅力を明らかにし、またこれによって地方経済の建設と精神文化の建設の協調的発展を促進することとなり、いずれも積極的かつ現実的な記号的意義を備えている。

造形が独特の金製歩搖冠飾、金銅製透影鞍金具を代表とするほぼ完全な形の金銅・鉄製馬具類、珍しい甲騎具装、多くの紀年墓、大型墓地、および宮城皇苑と関連する建築遺跡は、すべてこれらは三燕文化の重要な特徴であるだけでなく、3~5世紀における三燕文化の創造者がすでに21世紀の現代文明世界に突入している我々に提示した1枚の独特な「文化名片」である。いかにこの文化名片を使って遼海文化の歴史内容を不斷に充実させ、その榮誉を高め、三燕文化を全国そして世界に向けて打ち出すかというのが、目下、地域文化建設の重要な任務の一つである。国内外の関連地域間で文化交流と学術協力をさらに強化し、三燕文化に対して学際的研究を継続して進める。あわせて郷土歴史文化の普及教育を主旨とするパブリック・アーケオロジーを展開し、三燕文化を学術の枠から取り出して社会に向かって大衆に普及させ、世間に流布する科学的一般常識としてこそ、三燕文化の名刺価値を最大限のものすることができる。

中国共产党第18次全国代表大会の報告では、文化は民族の血脈で、人民の精神の故郷であると明確に指摘された。科学発達、学術繁栄、文化建設が勃興する今の世の中において、どのようにして上述の記号的意義と顔としての価値をそなえた三燕文化を全国的な地方文化建設の動きの中で、研究成果をさらに増やし、知名度を高め、それによって影響力が大きい地域的文化ブランドに作り上げるか、それが我々が不斷に思考し模索しなければならない課題の一つである。この企画製作と三燕文化のブランド戦略遂行には非常に長期にわたる時間が必要で、また多くの行わなければならない仕事がある。それは例えば以下のようなものである。三燕文化史跡の系統的調査、探査、および重点発掘と研究。前述の「三燕文化史跡回廊」上の遺跡公園と墓園の建設、景観設計、保護と遺跡申請。三燕文化を主題あるいは主要内容とする郷土教材の編纂とパブリック・アーケオロジーの展開。三燕文化旅行専門ルートの開拓を主な内容とする文化産業の運営、等々である。しかしながら、我々が党第18次全国代表大会で提出された社会主義文化強国建設に関する既定方針をしっかりと着実に貫徹し、粘り強く物事にあたるという精神を發揮し、長期にわたる不断の努

力を経た晩には、三燕文化を地域色ある文化ブランドに作り上げるという戦略構想は必ずや実現できるであろう。

註

- (1) 陳大為「遼寧北票房身村普墓發掘簡報」「考古」1960年第1期。
房身8号墓出土の金製歩搖飾については以下を参照した。
孫國平「試論鮮卑族的步搖冠飾」遼寧省考古・博物館学会編『遼寧省考古・博物館学会成立大会会報』1981年。
- (2) 黎瑞清「遼寧北票縣西官營子北燕馮素弗墓」「文物」1973年第3期。
- (3) 遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館・北票市文物管理所「遼寧北票喇嘛洞墓地1998年發掘報告」「考古學報」2004年第2期。
- (4) 辛岩等「金嶺寺魏晉時期大型建築群址考古發掘獲初步成果」「中國文物報」2001年。
- (5) 万欣「遼寧北票市大板營子墓地的勘探與發掘」「遼寧考古文集」2、科学出版社、2010年。
- (6) 万欣「鮮卑墓葬、三燕史迹與金製步搖飾的發現與研究」「遼寧考古文集」1、遼寧民族出版社、2003年。
朝陽県内で発見された三燕文化の重要な遺跡については、以下を参照した。
遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館「朝陽王子墳山墓群1987、1990年度考古發掘的主要收穫」「文物」1997年第11期。
遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館「朝陽十二台鄉碑廟88M1發掘簡報」「文物」1997年第11期。
陳大為・李宇峰「遼寧朝陽後燕崔過墓的發現」「考古」1982年第3期。
遼寧省博物館文物隊・朝陽地区博物館文物隊・朝陽県文化館「朝陽袁台子東晉畫幕」「文物」1984年第6期。
田立坤・万雄飛・白玉宝「朝陽古城考古紀略」「遼寧考古研究」第6輯、科学出版社、2007年。
- (7) 以下の資料を参照した。
朱子方「記後燕龍驤苑遺址的發現」「東北地方史研究」創刊号、1984年。
田立坤「棘城新考」「遼海文物學刊」1996年第2期。
辛發・魯寶林・吳鵬「錦州前燕李廆墓清理簡報」「文物」1995年第6期。
墓標の紀年が「永昌三年」(太安2年に相当し、324年)の李廆墓については、その紀年は三燕紀年の範囲内になく東晉墓なのである。原報告でいう「前燕墓葬」ではない。
- (8) 毛利光俊彦(李賢淑訳)「中國古代北方民族の冠」「東北亞考古學論叢」科学出版社、2010年。
- (9) 田立坤「論喇嘛洞墓地出土的馬具」「文物」2010年第2期の表1を参照した。
- (10) 桃崎祐輔(姚義田訳)「從倭出土的馬具看國際環境—倭與朝鮮三国伽耶、慕容鮮卑三燕的交往」「歷史與考古通信・東北亞」2008年第1期。
- (11) 同註(3)図4・5、図版7を参照。
- (12) 同註(3)。
- (13) 宋兆麟「古代器物溯源」143頁および附圖16-4、商務印書館、2014年。
- (14) 徐秉琨「馮素弗墓的發現所引發的思考」「遼寧省博物館館刊」(2010)20頁、遼海出版社、2010年。
- (15) 内田昌功(姚義田訳)「北燕封氏與「燕志」、「燭書」」「遼寧省博物館館刊」第2輯、2007年。
- (16) 同註(2)。
- (17) 盧治萍「馮素弗墓出土鐵甲片研究」「遼寧省博物館館刊」(2011)28頁、遼海出版社、2011年。
- (18) 辛岩・付興勝・穆啓文「遼寧北票金嶺寺魏晉建築遺址發掘報告」「遼寧考古文集」2、科学出版社、2010年。
- (19) 田立坤「金嶺寺建築址為「鬼廟」說」「慶祝張忠培先生八十歲論文集」科学出版社、2014年。

- (20) 楊鴻勳『宮殿考古通論』紫禁城出版社、2001年。
- 中国社会科学院考古研究所「萬長安城南郊礼制建筑群發掘简報」「考古」1960年第7期。
- (21) 中国伝統の邸宅建築の最高規格は左・中・右三路制で、その基壇は上・中・下の三重に分かれる。五方五色とは、東青・南赤・中黄・西白・北黑を指し、国土を象徴する。
参照：韓增禄「易學與建築」111・158頁、瀋陽出版社、1999年。
- (22) 万欣「喇嘛洞鐵工初論—兼議中國慕容鮮卑、朝鮮三国時期和日本古墳時代鐵器非俗的一致性與差異性」『東北亞考古學論叢』科学出版社、2010年。
- (23) 武家昌「遼寧北票市大板營子鮮卑墓的清理」「考古」2003年第5期および註5を参照。
- (24) 王宇・万欣「遼寧北票市大板營子墓葬的勘探與發掘（続）」「遼西地區東晉十六國時期都城文化研究」遼寧人民出版社、2017年（本書1~46頁再録・翻訳）。
- (25) 同註（6）、遼寧省文物考古研究所、朝陽市博物館1997年。
- (26) 王宇「北票大板營子墓地出土陶器研究」「遼西地區東晉十六國時期都城文化研究」遼寧人民出版社、2017年（本書169~188頁再録・翻訳）。
- (27) 遼寧省文物考古研究所・日本奈良國立文化財研究所「遼寧北票市喇嘛洞鮮卑貴族墓地出土鐵器的保護處理及初步研究」「考古」1998年第12期。
- (28) 北京科技大学冶金與材料史研究所・遼寧省文物考古研究所「北票喇嘛洞墓地出土鐵器的金相實驗研究」「文物」2001年第12期。
陳建立「從鐵器的金屬學研究看中國古代東北地區鐵器和冶鐵業的發展」「北方文物」2005年第1期。
- (29) 韓汝玲「北票馮素弗墓出土金屬器的鑑定與研究」「遼寧省博物館館刊」遼海出版社、2010年。
- (30) 陳山「喇嘛洞墓地三燕文化居民人骨研究」科学出版社の「序言」（朱泓〔撰〕）、2013年。
- (31) 「扶余說」と「宇文氏鮮卑說」について、それぞれ以下を参照した。
田立坤「關於北票喇嘛洞三燕文化墓葬的幾個問題」「遼寧考古文集」1、遼寧民族出版社、2003年。
陳平「遼西三燕墓葬論述」「內蒙古文物考古」1998年第2期。
4世紀中葉に慕容部は西北部にいた宇文鮮卑と東北部にいた高句麗に対してそれぞれ討伐をおこない、その部衆5万余（口）を移した。また「資治通鑑」晋紀卷97によると、永和元年（345年）、記室參軍の封裕が上書して諫めた中に、慕容部がかつて「南に強趙を擁き、東に高句麗を蒙ね、北に宇文を取り、地三千里を拓き、民十萬戸を増した」という語があり、これによって前燕域内の多民族構成の一端をうかがい知ることができる。
- (32) 同註（30）、158頁参照。
- (33) 許永傑「鮮卑遺存的考古學考察」「北方文物」1993年第4期。
- (34) 白榮金・万欣・雲燕・侯溥「遼寧北票喇嘛洞十六國墓葬出土鐵甲復元研究」「文物」2008年第3期。
- (35) 万欣・白雲燕・趙代盈・肖俊溥「遼寧北票市喇嘛洞墓地I M17鐵甲堆積的室内清理」「遼西地區東晉十六國時期都城文化研究」遼寧人民出版社、2017年（本書345~410頁再録・翻訳）。
- (36) a. 曲彥斌『遼寧文化通史』29頁、大連理工大學出版社、2009年。
b. 遼寧文化符合和文化定位問題已經課題組「關於遼寧文化符合和文化定位問題的研究報告」「瀋陽故宮博物院刊」第7輯、2009年。
- (37) 王綿厚「縱論遼河文明的文化內涵與遼海文化的關係」「遼寧大學學報（哲學社會科學版）」2012年第6期。
- (38) 同註（36）a。
- (39) 國家文物局主編「中國文物地圖集」遼寧分卷、西安地圖出版社、2010年。
- (40) 同註（36）b。
- (41) 同註（36）a、28頁。

浅谈辽西地区前燕、后燕政权中的外族居民

郑 宇 刘发力 李 霞

前燕、后燕为十六国时期东北及华北地区的两个向后承替的少数民族政权，建立者均为慕容鲜卑。

鲜卑是我国古代东北地区的一支东胡系少数民族，有关鲜卑的记载最早见于《后汉书》。1世纪末，北方的匈奴统治集团分裂为南北两部分，势力衰弱之际，鲜卑乘机南下，势力强盛，“南抄表缘边，北拒丁零，东却夫余，西击乌孙，尽据匈奴故地，东西万余里，南北七千余里”（《后汉书·鲜卑传》）。

曹魏初年，慕容鲜卑部的莫护跋率部进入辽西，289年，慕容廆迁回大凌河流域，294年，居棘城。337年，廆子皝称燕王，都棘城，建立政权，史称前燕。370年，前秦苻坚破燕都邺城，前燕灭亡。384年，慕容垂在龙城称尊号，是为后燕。后燕凡26年，409年，后燕高云为近侍所弑，鲜卑化的汉人冯跋继承后燕，建立北燕。

前燕、后燕政权的主体为慕容鲜卑，但在其统治下，还有众多汉族、鲜卑宇文部、段部、高句丽、百济、夫余、丁零人等。

1. 前燕、后燕政权的疆域及其主体居民的民族

前燕政权的统治中心在辽西地区，前燕初建都于棘城，即今之朝阳市^[1]。341年，慕容皝迁都龙城^[2]，此后慕容鲜卑的势力继续向中原地区发展。东晋永和五年（349）徙都于薊，后又迁邺，建留台于龙城^[3]。东晋太和五年（370）为前秦所灭。淝水之战（383）后，前燕贵族慕容垂趁机建立后燕政权，以龙城为都。一直到北燕灭亡，龙城都是后燕与北燕的统治中心。

前燕的疆域范围最初为辽西地区，后随着慕容氏不断征战开疆拓土，势力最鼎盛时其疆域包括今辽宁省大部分地区、河北、河南东部、山东、及安徽的一部分^[4]。鼎盛之时，疆土“南至汝、颍，东尽青、齐，西抵崤、黾，北守云中”^[5]。此后的后燕政权所辖疆域未超过前燕时期，只包括了辽东、辽西、和幽州地区^[6]。

幽州及其以南地区的居民族属以汉族为主。西晋时期，幽州下辖七个县，共五万九千二十户^[7]。辽东地区统八县，共五千四百户^[8]。这些居民多为汉族人。3世纪末，慕容鲜卑迁入辽西，改变了辽西地区居民的民族构成。辽西地区统三县，共二千八百户^[9]，这些居民应以汉族和慕容鲜卑为主体。

2. 前燕、后燕时期迁入辽西的居民族属

前、后燕政权的疆域，其北接夫余，东临高句丽，南濒东晋，西为代、鲜卑宇文部等。前、后燕政权与这些相邻的民族、政权之间交往频繁，导致大量的人口迁徙。因此，辽西地区作为前、后燕政权的政治中心拥有大量的外族居民。

慕容鲜卑是前燕、后燕政权的建立者，曹魏初年，莫护跋率部进入辽西，从司马懿讨公孙渊，拜率义王^[10]。从此，慕容鲜卑便开始掌控辽西地区。

汉族是辽西地区居民的主要族属，早在慕容鲜卑进入辽西地区之前，这里的居民有一万四千一百五十户^[11]。东汉时期辽西作为郡制下辖五城，地理范围大于西晋时期^[12]。而除此之外，在前燕、后燕时期，辽西地区还迁入了很多外来的汉族人口。如西晋建兴元年（313），“辽东张统据乐浪、带方二郡，与高句丽王乙弗利相攻，连年不解。乐浪王道说统帅其民千余家归廆”^[13]。乐浪、带方二郡多为汉人，而张统本人为辽东人氏。西晋永嘉之乱后，中原士庶很多流亡辽西，而慕容廆则多加招揽以为己用，并且立州郡安置这些中原流民^[14]。以至于“自永嘉丧乱，百姓流亡，中原萧条，千里无烟，饥寒流陨，相继沟壑。先王以神武圣略，保全一方，威以殄奸，德以怀远，故九州之人，寒表殊类，襁负万里。若赤子之归慈父，流人之多旧土十倍有余”^[15]。咸和九年（334），“廆自征辽东，克襄平。仁所署居就令刘程以城降，新昌人张衡执县宰以降。于是斩仁所置守宰，分徙辽东大姓于棘城”^[16]。咸康年间，慕容皝两次与石季龙交战，掠后赵人口数万（见附表）。

宇文鲜卑与慕容鲜卑毗邻，二部之间战事频繁，通过战争人口流动增量大。慕容廆时期，曾经两次破宇文鲜卑，迁徒宇文鲜卑数万人到辽西地区（见附表）。慕容鲜卑周边的其他鲜卑诸部，如段部、索连部、木津部都曾因战争，其族人被掠入辽西（见附表）。

高句丽西接鲜卑，二者之间亦是征战不断，前燕慕容皝，后燕慕容盛两次掠高句丽人口万余户（见附表）。

夫余在前燕时期也因战争有大量人口被掠至辽西，甚至还有夫余人通过辽西被卖到中原地区^[17]。

以上这些民族曾经过大规模的人口迁徙，此外，还有其他民族也有少量的人口迁入辽西地区。太宁三年（325），慕容廆伐石季龙时，“以裴嶷为右部都督，率索头为右翼……”^[18]“索头”又称“索头鲜卑”，魏晋南北朝时汉族士人称拓跋鲜卑为索头。因此，慕容鲜卑治下应有效力于前燕的拓跋鲜卑人。

太元二十年（395），慕容详僭号，赵王麟起兵讨伐，“麟率丁零之众入中山，斩详及其亲党三百余人”，说明后燕时期，慕容鲜卑治下还有丁零人。

3. 前燕、后燕时期外来居民的迁徙途径

前燕、后燕时期外来居民的迁徙途径主要有三种：主动归附、战争掠夺、人质。

① 主动归附

十六国时期，战争频繁，中原地区由于政权变更快，战乱更胜过周边地区，尤其是西晋永嘉之乱（311）后，大量中原人涌向辽西地区。“时二京倾覆，幽冀沦陷，廆刑政修明，虚怀引纳，流亡士庶多襁负归之”。这些人多为汉族人，归附的原因为避难辽西。

那些主动归附的汉族士庶在慕容鲜卑治下拥有较高的地位，在当时人眼中，他们的身份便与通过其他方式进入辽西的外族人不同，慕容皝时期大臣的上表中曾有言：“句丽、百济及宇文、段部之人，皆兵势所徙，非如中国慕义而至，咸有思归之心。”^[19]由此可见，鲜卑统治者对不同外来民族的态度有所不同。

汉族士庶最大规模的一次迁入是中原永嘉之乱后。慕容氏也很重用这批汉族士庶，他们中的很多人在前燕为官，并且深得慕容廆、慕容皝重视，在前燕的汉化中起到相当大的作用。（慕容廆）以河东裴嶷、代郡鲁昌、北平阳耽为谋主，北海逄羨、广平游邃、北平西方虔、渤海封抽、西河宋庾、河东裴开为股肱，渤海封弈、平原宋该、安定皇甫岌、兰陵缪恺以文章才俊任居枢要，会稽朱左车、太山胡毋翼、鲁国孔纂以旧德清重引为宾友。平原刘儒学该通，引为东庠祭酒，其世子號率国胄束修受业焉。廆宽政之暇，亲临听之，于是路有颂声，礼让兴矣。^[20]这些汉族人在前燕政权建设、巩固，及慕容鲜卑汉化的过程中，起到极大的推进作用。

② 战争掠夺

战争掠夺是前后燕政权获取外来人口最多的一种方式。辽西地处交通要道，前、后燕政权与周边政权及民族战争不断，胜利的一方通常会掠夺败方的居民。

前、后燕政权掠夺人口族属主要有鲜卑各部、夫余、高句丽及来自不同地方的汉族人，可能还包括一些后赵的羯人。这些被掠夺而来的人口，大概有二十余万户（见附表）。

通过战争掠夺获取人口，大多发生在前燕早期，即慕容廆和慕容皝时期，此外，慕容暠、慕容盛时期各发生一次。慕容廆是前燕第一代统治者，慕容皝是第一个称尊的燕王，他们二人统治时期慕容鲜卑势力不断扩大，在这个过程中他们不断掠劫人口，充实自身的同时也打击了敌人，巩固统治。其中，规模较大的几次均发生在慕容皝时期，如咸和九年（334），迁徙辽东大户至棘城；咸康七年（341），慕容皝征高句丽，破其都城丸都城，劫掠丸都城人口五万余而归；永和三年（347），征夫余，掠夫余人口五万而归。

这些战争掠夺而来的人，大多被安置在当时的都城附近，即前期的辽西（棘城、龙城），后期的河北地区（蓟城、邺城）。亦有为之增设的新郡，如咸和九年（334），慕容皝迁徙辽东大户至棘城，“置和阳、武次、西乐三县”^[21]。

③ 人质

人质也是前、后燕时期外族人口迁入的一种方式。史籍中没有明确记载过三燕时期都有哪些政权的人质迁入过，《十六国春秋》和《晋书》都曾记载前秦拔鄆城时，有夫余、高句丽和上党的质民子弟引纳前秦军队的情况^[22]，这说明三燕治下有一定数量的来自不同民族或政权的质民。

总之，前、后燕时期，通过不同的方式，吸收了很多外来人口，这些来自不同民族的居民加快了慕容鲜卑的汉化过程，也为辽西地区的开发做出了贡献。

注

- [1] 田立坤：《棘城新考》，《辽海文物学刊》，1996年2期。
- [2] 潘球：《十六国春秋辑补·前燕录三·慕容皝下》卷二十五（中华书局，1985年）。《晋书·慕容皝载记》卷一百九：“咸康七年，皝迁都龙城”。
- [3] 《晋书·慕容廆载记》
- [4] 谭其骧：《中国历史地图集》第三集，中国地图出版社，1991年。
- [5] 顾祖禹：《读史方舆纪要》卷十，中华书局，2005年。
- [6] 同上
- [7] 《晋书·地理志上》，中华书局，1974年。
- [8] 同上
- [9] 同注[7]。
- [10] 《晋书·慕容廆载记》：“父涉归，以全柳城之功，进拜鲜卑单于，迁邑于辽东北，于是渐幕诸夏之风矣。”
- [11] 《后汉书·郡国志五》，中华书局，1973年。
- [12] 同注[4]。
- [13] 《资治通鉴》卷八十八，中华书局，1956年。
- [14] 《晋书·慕容廆载记》：“时二京倾覆，幽冀沦陷，廆刑政修明，虚怀引纳，流亡士庶多襁负归之。廆乃立郡以统流人，冀州人为冀阳郡，豫州人为成周郡，青州人为营丘郡，并州人为唐国郡。”
- [15] 《晋书·慕容皝载记》，中华书局，1974年。
- [16] 同注[15]。
- [17] 《晋书·东夷传·夫余国》“尔后每为廆掠其种人，卖于中国”。
- [18] 同注[15]。
- [19] 同注[15]。
- [20] 同注[15]。
- [21] 同注[15]。
- [22] 崔鸿：《十六国春秋》：“散骑侍郎徐蔚等率夫余、高句丽及上党质民子弟五百夜开城门，引纳秦师。”

附表 前燕、后燕时期战争掠夺人口统计

时间	迁徙居民的族属	迁徙人数	出处
太康六年(285)	夫余	万余人	《晋书·慕容廆载记》“又率众东伐扶余，扶余王依虑自杀。廆夷其国城，驱万余人而归”
太安元年(302)	鲜卑宇文部	万余人	《资治通鉴》卷八十四 “(廆)大破之(素怒延)，追奔百里，俘斩万计”
永康元年(300)	鲜卑素连部、木津部		《晋书·慕容廆载记》“(廆)率骑讨连、津，大败斩之。二部悉降，徙之棘城，立辽东郡而归”
太宁三年(325)	鲜卑宇文部	数万余户	《晋书·慕容廆载记》“廆遣皝距之。以裴嶷为右部都督，率索头为右翼，命其少子仁自平郭趣柏林为左翼，攻乞得龟。克之，悉虏其众。乘胜接其国城，收其资用亿计。徙其人数万户以归。”
永昌元年(322)	鲜卑段部	千余户	《资治通鉴》卷九十二 “慕容廆遣其世子皝表段末柅，入令支，掠其居民千余家而还”
咸和九年(334)	辽宁汉族		《晋书·慕容皝载记》“皝自征辽东，克襄平。仁所署居就令刘程以城降，新昌人张衡执县宰以降。于是斩仁所置守宰，分徙辽东大姓于棘城，置和阳、武次、西乐三县而归。”
咸康年间	后赵	千余户	《晋书·慕容皝载记》“皝前军帅慕容评攻季龙将石成等于辽西，斩其将呼延晃、张支。掠千余户以归。段辽谋叛，皝诛之。”
咸康六年(340)	后赵	三万户	《晋书·慕容皝载记》“皝将图石氏。从容谓诸将曰：‘石季龙自以安乐诸城防守严密，城之南北必不设备。今若诡路出其不意，冀之北土尽可破也。’于是率骑二万出轘轘塞，长驱至于虧城，进渡武遂津，入于高阳。所过焚烧积聚，掠徒幽、冀三万余户。”
咸康七年(341)	高句丽	五万余口	《晋书·慕容皝载记》“皝掘钊父利墓，载其尸并其母妻珍宝，掠男女五万余口，焚其宫室，毁丸都而归。”
永和三年(347)	夫余	五万余口	《晋书·慕容皝载记》“遣其世子儁与恪率骑万七千东袭夫余，克之，虏其王及部众五万余口以还。”
兴宁元年(363)	汝南地区汉族	万余户	《晋书·慕容皝载记》“皝复使慕容评寇许昌、悬瓠、陈城，并陷之，遂略汝南诸郡，徙万余户于幽冀。”
隆安四年(400)	高句丽	五千余户	《晋书·慕容皝载记》“盛率众三万伐高句丽，袭其新城、南苏，皆克之，数其积聚，徙其五千余户于辽西。”

遼西地区における前燕・後燕政権下の外来居住者について

鄭 宇 劉發力 李 震

前燕・後燕は、十六国期の東北および華北地区に前後して興った少数民族政権で、慕容鮮卑によって建国された。

鮮卑は中国古代東北部にいた東胡系少数民族のひとつである。鮮卑に関するもっとも古い記事は『後漢書』にみえる。紀元1世紀末に北方の匈奴統治集団は南北に分裂するが、鮮卑は勢いに乗って南下し勢力を強めたと考えられ、「南鈔緣辺、北拒丁零、東却夫余、南擊烏孫、尽據匈奴故地、東西万余里、南北七千余里」（『後漢書・鮮卑伝』）とある。

曹魏初年に慕容鮮卑部族の莫護跋は、部を率いて遼西に入った。紀元289年に慕容廆は大凌河流域へと移り、294年に棘城に居した。そして337年、廆の子・皝は燕王を称し、棘城を都として政権を立てた。史書では前燕と称される。370年に前秦の苻堅は燕の都・鄆城を破り、前燕は滅亡した。384年、慕容垂は龍城において尊号を称し後燕を建てた。後燕はおよそ26年続くが、後燕の高雲が近侍によって殺され、409年、鮮卑化した漢人が後燕を継承し北燕を建てた。

三燕政権は慕容鮮卑を主体とするが、三燕政権の治下には多数の漢族や鮮卑宇文部、段部、高句麗、百濟、夫余、丁零人などがあった。

1. 前燕・後燕政権の境域およびそこに居住した主要民族

前燕政権の中心地は遼西地区にあり、前燕は当初、棘城を都とした。棘城は現在の朝陽市である⁽¹⁾。341年、慕容皝は龍城に遷都した⁽²⁾。こののち、慕容鮮卑は中原地区に向かって勢力をのばし、東晉永和五年（349）には都を薊、つづいて鄆へ遷したが、龍城にも都の機能をとどめていた⁽³⁾。東晉太和五年（370）には前秦によって滅ぼされる。淝水の戦い（383）ののち、前燕の貴族・慕容垂は機に乗じて後燕政権を立て、龍城を都とした。北燕滅亡にいたるまで、龍城は後燕と北燕の統治の中心であった。

前燕の境域ははじめ遼西地区にあったが、のちの慕容氏による再三にわたる戦いと境域開拓、領土拡大により、最盛期には現在の遼寧省の大部分、河北省、河南省東部、山東省、安徽省の一部をその境域に含んだ⁽⁴⁾。その最盛期の境域は、「南至汝・颍、東尽青・齊、西抵岐・岷、北守雲中⁽⁵⁾」とされる。のちの後燕および北燕政権が治めた境域はいずれも前燕期を超えるものではなく、遼東、遼西、幽州地区のみを含む小規模な範囲のものであった⁽⁶⁾。

幽州およびそれ以南に住む主な民族は漢族であった。西晋期、幽州は七つの県を統轄しており、その戸数は59,020戸であった⁽⁷⁾。遼東地区は八県を統轄し、その戸数は5,400戸であった⁽⁸⁾。これらの多くは漢人である。3世紀末、慕容鮮卑は遼西に遷り、遼西地区的民族構成を変化させた。遼西地区は三県を統轄し、2,800戸となり⁽⁹⁾、これら居住民はおそらく漢族と慕容鮮卑が主体であったと考えられる。

2. 前燕・後燕期に遼西へ移民した族属の種類

前燕・後燕政権の版図は、北は夫余に接し、東は高句麗、南は東晋、西は代や鮮卑宇文部などに臨んでいた。三燕政権とこれら隣する民族、政権間の往來は頻繁で、大量の人口移動を招いた。そのため、遼西地区は三燕政権の政治的中心地として多くの外来居住者を擁した。

慕容鮮卑は三燕政権の創立者である。曹魏初年に慕容鮮卑部の莫護跋が部を率いて遼西に入り、司馬懿に従って公孫淵を討ち、率義王を拝命した⁽¹⁰⁾。これより、慕容鮮卑は遼西地区を統治するようになった。

漢族は遼西地区に居住していた主要民族で、慕容鮮卑が遼西地区に入るよりも早く、当地には14,150戸の人びとがいた⁽¹¹⁾（後漢期の遼西は郡制のもとで五城を統轄し、その地理的範囲は西晋期よりも大きかった⁽¹²⁾）。このほか、三燕時期において遼西地区には外地から多数の漢族の移動があった。例えば、西晋建興元年（313）には「遼東張紹据樂浪、帶方二郡、與高句麗王乙弗利相攻、連年不解、樂浪王遵說帥其民千余家帰鬼⁽¹³⁾。」とある。樂浪、帶方の二郡の多くは漢人であり、張紹本人も遼東人氏である。西晋の永嘉の乱後には多くの中原土庶が遼西に亡命した。また、慕容廆は多くを招き入れ、州郡を立ててこれらの中原移民を置いた⁽¹⁴⁾。それは「自永嘉喪亂、百姓流亡、中原蕭条、千里無煙、飢寒流限、相繼溝壑。先王以神武聖略、保全一方、威以殄姦、德以懷遠、故九州之人、塞表殊類、襁負万里、若赤子之罹慈父、流人之多旧土十倍有余⁽¹⁵⁾。」という状況であった。咸和九年（334）には「號自征遼東、克襄平。仁所署居就令劉程以城降、新昌人張衡執縣宰以降。於是斬仁所置守宰、分徙遼東大姓于棘城⁽¹⁶⁾。」とある。咸康年間、慕容皝は二度にわたり石季龍と戦い、後趙の人口数万を奪った（付表参照）。

宇文鮮卑と慕容鮮卑は隣接し、両部間の戦事は頻繁で、戦乱による人口の流動も増加した。慕容廆期には宇文鮮卑を二度破り、宇文鮮卑数万人が遼西地区に移った（付表参照）。

慕容鮮卑周辺の段部・素連部・木津部といったその他の鮮卑諸部も、戦乱によってその民が遼西に掠奪された（付表参照）。

高句麗は鮮卑の西に接し、両者問においても戦事が絶えず、前燕の慕容皝と後燕の慕容盛は二度にわたり高句麗の民数万余戸を奪っている（付表参照）。

夫余も前燕期の戦乱によって大量の人口が遼西に奪われ、遼西を通じて中原地区へと売られる夫余人さえもあった^[17]。

以上の民族は大規模な人口移動を経験しているが、その他の民族も人口は多くはないが、遼西地区へと移っている。太寧三年（325）、慕容廆が石季龍を討伐した際には「以裴嶷為右部都督、率索頭為右翼…^[18]」とあり、「索頭」や「索頭鮮卑」と称されている。晋南北朝時期の漢族士人は拓跋鮮卑を索頭と称した。このことから、慕容鮮卑の統治は前燕の拓跋鮮卑人にも効力を有していたと考えられる。

太元二十年（395）、慕容詳は僭号し、趙王・麟が兵を起こして討伐した。「麟率丁零之衆入中山、斬詳及其親党三百余人」という記事より、後燕期の慕容鮮卑の治下には丁零人もいたことがわかる。

3. 前燕・後燕期の外來居住者の移民方法

前燕・後燕期における外來住民の移民方法には、主に自発的な帰順、戦乱による掠奪、人質の三種があった。

① 自発的帰順

十六国期には戦乱が頻発した。中原地区では政権が即時に交代し、戦乱は周辺地区を圧倒するものであった。とりわけ西晋永嘉の乱（311年）後、大量の中原人が遼西地区に押し寄せた。「時二京傾覆、幽冀淪陷、魔刑政修明、虛懷引納、流亡士庶多襁負帰之」。彼らの多くは漢族で、帰順の理由は遼西への避難であった。

このように自発的に帰順した漢族士庶は、慕容鮮卑の統治下において高い地位を有した。当時の人々の目には、彼らの身分はそのほかの方法で遼西に入った外來民族とは異なって映り、慕容皝期の大臣の上表中には「匱麗、百濟及宇文、段部之人、皆兵勢所徙、非如中國慕義而至、咸有思歸之心。^[19]」とある。このことから、鮮卑の統治者は民族ごとに異なる態度をとっていたことがわかる。

最大規模の移民は永嘉の乱後のもので、慕容氏もこの時移住してきた漢族士人を重用した。彼らの多くは前燕の官人となり、しかも慕容廆や慕容皝から大変重視され、前燕の漢化に多大な影響をおよぼした。史籍にも、「（慕容廆）以河東裴嶷、代郡魯昌、北平陽耽為謀主、北海逢羨、廣平遊達、北平西方虔、渤海封抽、西河宋寅、河東裴開為股肱、渤海封弈、平原宋該、安定皇甫岌、蘭陵繆侃以文章才俊任居枢要、会稽朱左車、太山胡母翼、魯國孔纂以旧德清重引為賓友、平原劉讚儒學該通、引為東庠祭酒、其世子皝率國胄東受業焉。廆覽政之暇、親臨聽之、于是路有頌聲、礼讓興矣。^[20]」と記されている。これらの漢族は前燕政権の樹立と安定化の基盤となるとともに、慕容鮮卑の漢化過程において大きな促進作用をもたらした。

② 戦乱による掠奪

戦乱による掠奪は、前燕・後燕政権が外來人口を得るうえでもっとも多く用いた手段であった。遼西の地は交通の要所であったため、前燕・後燕政権と周辺政権・民族間には争いが絶えなかった。通常、勝者は敗者の民を奪った。

前燕・後燕政権が掠奪した族属には、主として鮮卑各部、夫余、高句麗および各地の漢族、そのほか後趙の羯人も含まれていた可能性がある。これらの掠奪人口はおよそ20万余戸であった（付表参照）。

戦乱による人口の掠奪の多くは前燕早期、すなわち慕容廆と慕容皝の時期によるもので、これ以外は慕容暐と慕容盛の時期に各一度生じたのみである。慕容廆は前燕の第一代統治者、慕容皝は燕王を称した最初の人物であり、彼ら二人の時期に慕容鮮卑勢力は絶えず拡大していた。その過程で彼らは絶えず人口を奪い、自身を充実させると同時に敵に打撃を与え、統治を強固にした。そのうち、幾度かの比較的大規模なものはすべて慕容皝期に起きており、咸和九年（334）の遼東大戸の棘城への移動や、咸康七年（341）の慕容皝による高句麗攻略時、その都・丸都城を破り、丸都城の人口5万余口の掠奪、永和三年（347）に夫余を攻め、夫余人口5万余口の掠奪などが挙げられる。

このような戦乱によって略奪されてきた人口の多くは、当時の都城付近、すなわち前期の遼西（棘城、龍城）、後期の河北地区（薊城、鄆城）に置かれたが、そのために新都を建設することもあった。例えば、咸和九年（334）に慕容皝が遼東大戸を棘城へ移した際に「置和陽、武次、西樂三県⁽²¹⁾」と記されている。

③ 人質

人質も前燕・後燕期に外來の族属が移り入る方法であった。史籍中に前燕・後燕政権が人質を移入させたという明確な記述はないものの、『十六国春秋』と『晉書』には、前秦が鄆城を奪取した際、夫余、高句麗、上党の質民子弟を前秦軍が招き受けた状況が記されている⁽²²⁾。このことは、三燕の治下に出自の異なる民族や政権の人質が一定数いたことを示している。

以上のことをまとめると、前燕・後燕期には、異なる方法を通じてその政権中に多くの外來人口を擁しており、これら異なる出自をもつ民族は慕容鮮卑の漢族化を促すとともに、遼西地区の開拓にも貢献したと考えられる。

註

- (1) 田立坤「棘城新考」「遼海文物学刊」1996年第2期。
- (2) 湯球『十六国春秋輯補・前燕錄三・慕容皝下』卷二十五、中華書局、1985年。
『晉書・慕容皝載記』卷一百九「咸康七年、就遷都龍城。」

- (3)『晉書・慕容廆載記』
- (4)譚其驥『中國歴史地圖集』第3集、中国地图出版社、1991年。
- (5)顧祖禹『讀史方輿紀要』卷十、中華書局、2005年。
- (6)同註(5)。
- (7)『晉書・地理志上』中華書局、1974年。
- (8)同註(7)。
- (9)同註(7)。
- (10)『晉書・慕容皝載記』「父涉帰、以全柳城之功、進拜鮮卑單于、遷邑於遼東北。於是漸慕諸夏之風矣。」
- (11)『後漢書・郡國志五』中華書局、1973年。
- (12)同註(4)。
- (13)『資治通鑑』卷八十八、中華書局、1956年。
- (14)『晉書・慕容廆載記』「時二京傾覆、幽冀渝陷、魔刑政修明、虛懷引納、流亡士庶多被負歸之。魔乃立郡以統流人、冀州人為冀陽郡、豫州人為成周郡、青州人為營丘郡、并州人為唐國郡。」
- (15)『晉書・慕容皝載記』中華書局、1974年。
- (16)同註(15)。
- (17)『晉書・東夷伝・夫余國』「爾後每為魔掠其種人、亮於中國。」
- (18)同註(15)。
- (19)同註(15)。
- (20)同註(15)。
- (21)同註(15)。
- (22)崔鴻『十六國春秋』「散騎侍郎徐蔚等率夫余、高句麗及上黨賈民子弟五百夜開城門、引納秦師。」

付表 前燕・後燕時期の戦争による掠奪人口の統計

年代	移入民	人数	出典
太康六年（285）	夫余	万余人	『晉書・慕容廆載記』「又率衆東伐扶余、扶余王俱盧自殺、廆攻其國城、驅万余人而歸。」
太安元年（302）	鮮卑宇文部	万余人	『資治通鑑』卷八十四「（廆）大破之（素愍延）、追奔百里、俘斬万計。」
永康元年（300）	鮮卑素連部、木津部		『晉書・慕容廆載記』「（廆）率騎討達、津、大敗斬之、二部悉降、徙之韓城、立遼東郡而廢。」
太寧三年（325）	鮮卑宇文部	数万余戶	『晉書・慕容廆載記』「廆遣皝距之。以裴凝為右部都督、辛崇頭為石翼、命其少子仁自平鄧趣柏林為左翼、攻乞得鬼、克之、悉虜其衆、乘勝拔其國城、收其資用億計、徙其人數万户以歸。」
永昌元年（322）	鮮卑段部	千余戶	『資治通鑑』卷九十二「慕容廆遣其世子皝襲段末林、入令支、掠其居民千餘家而還。」
咸和九年（334）	遼東漢族		『晉書・慕容皝載記』「皝自征遼東、克襄平。仁所署居就令劉程以城降、新昌人張衡執思寧以降。於是轉仁所置守宰、分徙遼東大姓於韓城、賈和陽、武次、西秦三縣而還。」
咸康年間	後趙	千余戶	『晉書・慕容皝載記』「皝前軍帥慕容評敗李龍將石等於遼西、斬其將呼延晃、張支、掠千余戶以歸。段達謀叛、皝誅之。」
咸康六年（340）	後趙	三萬戶	『晉書・慕容皝載記』「皝將圍石氏、从容謂諸將曰：『石季龙自以安東諸城守防嚴重、城之南北必不設備、今若進路出其不意、冀之北土尽可破也。』于是率騎二万出繼幽塞、民驅至于霸城、進渡武遼津、入于高陽、所過焚燒積聚、掠徙幽冀三万余戶。」
咸康七年（341）	高句麗	五万余口	『晉書・慕容皝載記』「皝據河外利葦、載其戶并其母妻珍寶、掠男女五万余口、焚其宮室、毀丸都而還。」
永和三年（347）	夫余	五万余口	『晉書・慕容皝載記』「皝復使慕容評寇昌昌、懸瓠、陳城、并陷之、遂略汝南諸郡、徙万余戶于幽冀。」
興寧元年（363）	汝南地區漢族	万余戶	『晉書・慕容皝載記』「廆復使慕容評寇昌昌、懸瓠、陳城、并陷之、遂略汝南諸郡、徙万余戶于幽冀。」
隆安四年（400）	高句麗	五千余戶	『晉書・慕容皝載記』「盛率衆万伐高句麗、克其新城、南蘇、皆克之、數其積聚、徙其五千余戶於遼西。」

龙城新考

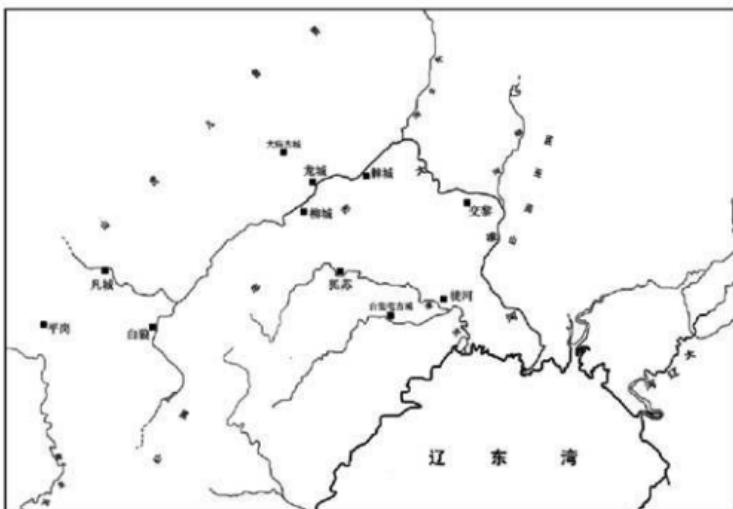
田立坤

本文所要讨论的龙城是指十六国时期前燕慕容皝所建之都城^[1]，也称和龙城、黄龙城。今辽宁省朝阳市老城区即其遗址^[2]。龙城沿革兴废，载在史册，遗迹可考、文物可证^[3]，无需再论。本文则意在考察龙城之选址，比较龙城和与其同时代且关系密切的棘城、柳城在地理位置、周边环境等方面的差异、优劣，故谓之新考。

1. 问题之提出

自战国燕秦开却胡在辽海地区始置郡县以来，各代在今辽西大、小凌河流域修建了众多的城池，其中有文献和遗迹可征的战国至两汉的重要城址就有凌源三十家子汉平岗城、安杖子战国至汉的凡城，喀左黄道营子战国至汉的白狼城，朝阳十二台子战国至汉的柳城、松树嘴子汉代狐苏城、大庙汉城，北票三官营子战国至汉的棘城，锦州汉徒河城、台集屯战国至汉代古城，义县汉交黎（昌黎）城，等等。经两千多年沧桑巨变，至今除汉徒河城随着辽西走廊的逐渐畅通繁荣，发展成为辽西沿海地区的中心城市锦州外，其他辽山西地区的诸城都没能发展起来，有的很早就废弃了。而晚建的龙城则后来居上，自前燕始建历经十六国、北朝、隋、唐、辽、金、元、清，虽然有过两次焚毁^[4]、两次废弃^[5]，但是沿用不衰，至今仍然是辽山西地区的中心城市——朝阳市府所在地（图一）。通过1991年以来开始的对朝阳老城区大面积考古勘探和重点地段的抢救发掘，进一步明确了解到朝阳古城的准确位置。尤其是龙城宫城南门遗址的发现、前燕始筑城夯土的确认，证明朝阳古城的北部城墙亦始筑于前燕。龙城始建至今不仅没有废弃，而且位置都不曾移动^[6]。

十六国至隋、唐时期（止于“安史之乱”），龙城（隋改名柳城）处于东北地区政治、经济、文化中心的地位长达四百多年，主导着东北乃至东北亚地区的局势，正如唐代张九龄所说：“况营州（龙城、柳城）者，镇彼戎夷，扼喉断臂，逆制其死命，顺则为其主人，是称乐都，其来尚矣。”^[7]近代史家金毓黻先生对龙城的历史作用亦给予很高的评价：“盖自慕容氏以来，龙城之地，一跃为东北首都，于以保障北方，控制东夷，一若两汉时之置辽东郡，自魏迄唐，而未之改。”^[8]龙城历史地位的形成，原因是多方面的，如历史上的全国政治、经济、军事形势，中原王朝与周边各民族的关系，东北地区的民族分布、迁徙、融合，等等。但是前提条件是龙城在地理上占有的区域优势和选址的科学性，舍此二者，则无今日之龙城。



图一 辽西地区汉代重要城址分布示意图

2. 建城之背景

曹魏初年，鲜卑慕容部在首领莫护跋的率领下，从北方草原入居辽西。魏明帝景初二年(238)，司马懿征讨据辽东的公孙渊，莫护跋率部参战有功，被拜为率义王，“始建国于棘城之北”。莫护跋去世后，其子木延继，木延死后涉归继，涉归又迁于辽东北。涉归死后，家族发生夺位内斗，涉归之弟耐继立，并欲谋杀涉归之子廆，后耐被国人所杀，廆被拥立为部落首领，即慕容廆。太康十年(289)，因辽东北地处偏远，慕容廆又率部迁徙徒河之青山，元康四年(294)移居大棘城，教以农桑，法制同于上国^[9]。至此，慕容鲜卑最终放弃了逐水草迁徙、居无定所的生活方式，完成了从游牧到定居的转变。

时正值西晋白痴皇帝司马衷在位，外戚与宗室相互勾结引起的“八王之乱”正酣。“八王之乱”结束后，“永嘉丧乱”又接踵而至，致使“百姓流亡，中原萧条，千里无烟”，而占据辽西地区的慕容廆则“刑政修明，虚怀引纳，流亡士庶多襁负归之”。慕容廆乘机侨置郡县，以统流人，推举贤才，委以庶政，创建学校，采取称臣奉晋正朔的政治策略，积极推行各项汉化政策，争得汉族世家大族乐于为其所用，使慕容鲜卑的势力得以迅速壮大。东晋元帝太兴二年(319)，慕容廆击败平州刺史、东夷校尉崔毖阴谋策划的高句丽、宇文、段氏三国围攻棘城的联军，又随即出兵辽东，迫使崔毖弃家逃亡高句丽。太兴四年(321)，东晋以

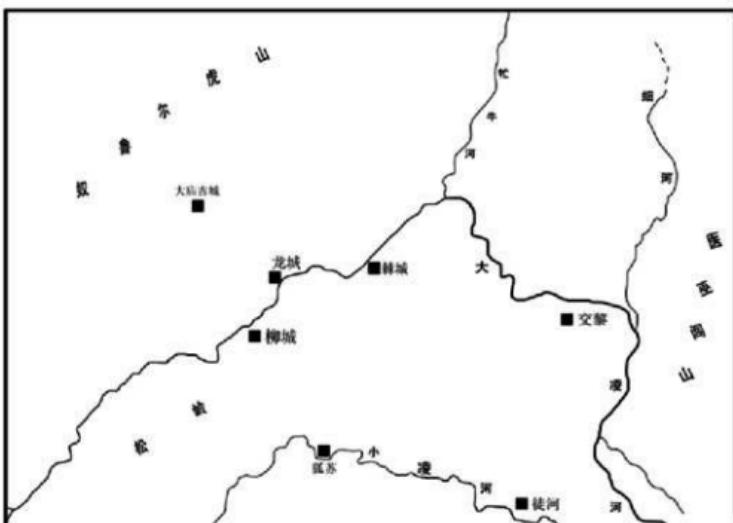
慕容廆为使持节都督幽平二州东夷诸军事、车骑将军、平州牧，封辽东郡公，承制海东，命备官司，置平州守宰^[10]，慕容廆成为得到东晋正式册封的“敷宣帝命，以罚有罪”、保全一方的诸侯。咸和六年（331），慕容廆授意其僚属上疏请封自己为燕王，朝议未定，慕容廆即去世了。经过慕容廆四十多年的经营，慕容鲜卑广收人望，不仅在政治上占有绝对的优势，在经济、文化、军事实力方面也得到很快的发展。慕容皝继位后，于康熙三年（337）在棘城自称燕王，建立政权（史称前燕），备置群司，完成了慕容鲜卑社会从氏族部落到封建国家的最后转变。这是慕容鲜卑历史上最重要的一次转折，其政治诉求已经不仅仅是勤王以求诸侯了，而是要逐鹿中原，实现慕容廆“吾积福累仁，子孙当有中原”的预言^[11]。而且由于兼并鲜卑各部，劫掠扶余、匈奴人口，加之中原人士“慕义而至”，辽西地区“流人之多旧土十倍有余，人殷地狭，故无田者十有四焉”^[12]。寻求更大的发展空间，以满足人口增加的需求，已经成为前燕政权的当务之急。棘城不论所处的地理位置，还是周边环境，以及规模，都已经不能适应慕容鲜卑社会快速发展的需要。所以必须放弃棘城，另辟新都。而柳城之北、龙山之西所谓的“福德之地”^[13]，在前燕当时所控制的地域内则是最佳的不二选择，龙城应运而生。燕王慕容皝使阳裕、唐柱等筑龙城，构宫庙，改柳城县为龙城县，迁都龙城^[14]。龙城成为继棘城之后前燕的第二座都城。

3. 棘城与龙城

棘城也称为大棘城，正史中始见于《晋书·慕容廆载记》：慕容廆“曾祖莫护跋，魏初率其部入居辽西，从宣帝伐公孙氏有功，拜率义王，始建国于棘城之北”。关于棘城位于何地，历来说法不一，最有代表性的是唐杜佑《通典》柳城郡东南说：“汉徒河县之青山在（柳城）郡城东百九十里，棘城即顓頊之墟，在郡城东南百七十里。”^[15]唐柳城郡治今朝阳老城区，依此研究者都将棘城置于今锦州附近，《中国历史地图集》更明确将棘城定在今锦州北、义县西南的砖城子^[16]。嘉庆《重修大清一统志》则认为“大棘城在义州西北”。义州即今义县，在锦州北略偏东、朝阳东略偏南，“义州西北”即今朝阳正东或东北，与《通典》柳城（朝阳）东南说不同。根据考古发现和文献记载，以及地貌环境，我们认为，棘城很可能始建于战国。今北票市章吉营子乡三官营子村战国至汉遗址即是棘城之所在^[17]。

大凌河流经朝阳城东后，东折流过凤凰山（即龙山）北，注入南来的牤牛河又向东北，流出朝阳盆地，进入两侧丘陵起伏、连绵不断三十多公里长的狭长河谷地段，河谷最宽处近六公里，北票三官营子村战国至汉的棘城遗址即位于该段河谷的右侧，西南距今朝阳市区约五十华里（图二）。

棘城虽然位于大凌河这条连接东北、华北、北方草原的交通要道上，但是交通并不方便，左右两侧都缺少便捷的出路，而且地域狭窄，难得容纳大量人口生存，加之河谷平直，位于河的右岸又极易受到河水的侵害。所以，在慕容鲜卑人口急剧增加、势力强大，建立政



图二 棘城地理位置示意图

权之后，开始积极进取中原，其政治重心必随之南移，棘城也即完成了她的历史使命。

与棘城相比，龙城具有如下优势：首先，龙城所在的朝阳盆地位于辽西山地区居中的位置^[18]。辽西山地区由东北西南走向的奴鲁尔虎山、松岭、医巫闾山、大凌河谷地、小凌河谷地五个自然地理单元构成。奴鲁尔虎山与松岭两大山系之间的大凌河谷地既是一条连接东北与华北、北方的天然通道，也是人类开发较早、适合人居、文化发达的地带。龙城所在的朝阳盆地在大凌河谷地中面积最大，具有容纳大量人口生存的空间。自五千多年前的红山文化时期开始，历经夏、商、周各代，一直是大凌河流域人类活动最频繁、最集中的地区^[19]。其次，龙城所在的朝阳盆地占据重要的军事地理位置。位于大凌河中游的朝阳盆地，不仅雄踞东西向的大凌河古道，而且南出凤凰山与柏山之间的山口即进入小凌河谷地，溯小凌河而上可进入大凌河南源谷地到达汉代右北平郡的白狼城（今喀左县的黄道营子古城）；顺小凌河而下可到达汉代辽西郡的徒河城（今锦州市），进入沿海的辽西走廊，并可经海路到达山东半岛、东南沿海以及朝鲜半岛；西北出大青山口^[20]，向北进入西拉木伦河、老哈河流域，可通往北方草原；向西南进入大凌河北源，可到达汉代右北平郡的凡城（今凌源安杖子古城），以及右北平郡治平岗城（今凌源三十家子古城）。建于朝阳盆地的龙城可谓四通八达的军事要塞。

朝阳盆地的重要战略地位早已为人们所认知，战国时在位于盆地南缘的今大凌河右岸袁

台子一带即有“西城”，西汉时改置柳城，并且是辽西郡的西部都尉治所^[21]，初步形成朝阳盆地在辽西山地区的政治、文化、军事中心地位。东汉末年，右北平、辽西、辽东属国三郡乌桓以柳城为中心形成联盟，后被曹操讨灭。魏晋时期，柳城成为鲜卑慕容氏、宇文氏^[22]、段氏^[23]三部激烈争夺之地，最终是占据朝阳盆地柳城的慕容鲜卑击败了宇文氏、段氏，称雄辽海，走向中原。

4. 柳城与龙城

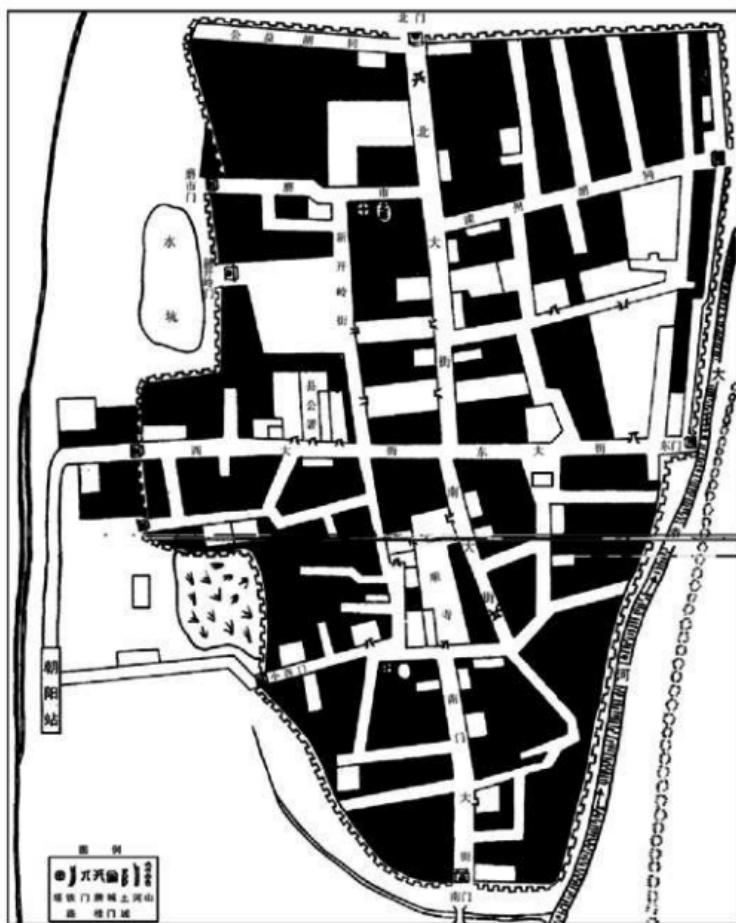
柳城与龙城都位于朝阳盆地，而且柳城在先，慕容皝为何不利用柳城而要劳民费力另建龙城呢？其中原因可能有以下几方面：首先是柳城位于大凌河右岸，易遭水害；其次是作为县城，柳城的规模过小；再次是柳城的主要功能是戍守防御，因此选择在便于控制大凌河谷地和通往小凌河谷地山口的大凌河右岸，地方狭窄，没有发展空间。都城为国之重心所在，需要有较大的发展空间。所以柳城与棘城同样，都不能满足做为前燕都城的功能需求。

朝阳盆地中地势较高，适合建城的有两处地点，一是今西上台，也称作西梁，呈东北—西南走向，平均海拔180米左右；另一处即是现在的朝阳市老城区，海拔170米左右。西梁处于朝阳盆地的中心位置，但是距离大凌河较远，有违“高毋近旱，而水用足”的建城原则^[24]。老城区位于大凌河的左岸，东隔大凌河与凤凰山相望，既有山水之形胜，又得山水之便利，而且南、北、西三面均有很大的扩展空间。这可能是当初慕容皝选择在此建都城的主要原因。选择在大凌河左岸的今朝阳老城区位置建城，东临大凌河，不利之处是很容易发生水害。受地球偏转力的影响，大凌河水流趋势以向右岸侵蚀为主，但是，因受到具体的地貌环境限制和流水的侵蚀、搬运、沉积，再侵蚀、搬运、沉积的交替作用，使大凌河进入朝阳盆地之后，河谷形成连续的几度弯曲，在十二台子北因受阻于青龙山，主流线由向北改向北偏东流，直抵凤凰山脚下，受山体所阻，主流线又改向北偏西流，流水对左(西)岸侵蚀加重，挟带的泥沙量增加，因挟沙量增加，搬运能力下降，相应的造成泥沙逐渐沉积，加之地球偏转力的影响，主流线因而又改向北偏东流，使西岸形成凹岸。此即《水经注》所说的“白狼水又东北经龙山西，……又北经黄龙城东，……《魏土地记》曰：黄龙城西南有白狼河，东北流，附城东北下，即是也”^[25]。龙城恰好位于上述大凌河左侧凹岸顶点的下方，大凌河与龙城东墙擦肩而过。因此，虽然经历了一千多年间的大凌河无数次洪水泛滥，在没有大规模水利设施防范的情况下，龙城依旧岿然不动，临河而不受水侵，而且规模还不断扩大。现在的朝阳新城区即是以龙城为中心向南、北、西三面呈放射状分布，足见其地理位置之优越，选址之科学（图三）。

龙城所处的地理位置对其布局也产生了直接的影响。朝阳盆地整体地势为西高东低，夏秋之间西梁之水大部汇聚于老城南门外，少部汇聚于北门外，然后东入大凌河。清末时南门外有龙安桥，北门外有同济桥以济行人^[26]。1936年所修《朝阳县志》的“朝阳县街市图”



图三 现代朝阳市老城区地理位置图
(根据“朝阳市周边地貌图”修改而成。比例尺：1 : 100000)



图四 民国时期朝阳县城平面图
(根据民国十九年《朝阳县志》的“朝阳县街市图”略有修改而成)

显示，当时西城墙北段外有很大的水坑，南段外也是洼地。当系城西之水东入大凌河的水道子遗(图四)。受此西梁东入大凌河之水和城东大凌河床的限制，龙城整体呈北宽南窄，南北狭长的梯形，城的南北轴线为南偏西30度左右，与城东大凌河岸基本平行。

西梁之水从城的南北分入大凌河的水道，很可能系当年借地势人工所为，以为防御之护城河，有待进一步考察研究确认。

5. 龙城之选址

据《资治通鉴》等文献记载，东晋咸康七年(341)正月，唐国内史阳裕、唐柱受燕王慕容皝之命，在柳城之北、龙山之西，所谓福德之地筑龙城^[27]。这些记载说的都是龙城的营建阶段，但是通过什么方式、为何选中柳城之北龙山之西，因何谓“福德之地”，即龙城的选址过程，并没有交代。下面对此试做讨论。

都城是国家的政治中枢所在，对于国家是否长治久安、兴旺发达至关重要。因此，历代王朝都特别重视都城的选址。最初的都城选址要经过两个步骤。首先是根据当时国家所处的政治、经济、军事形势，并兼顾到长远的发展，确定建都的区域范围，然后在确定的区域范围之内通过卜筮相地等手段勘察山川走势、地形地貌，划定具体位置，最后才能规划布局，动工营建。如西周时成周的营建，即先由召公前去勘察，继而周公占卜确定位置^[28]。关于龙城的选址，也应有与此类似的过程。建都龙城是前燕发展史上的重要事件，绝不会是慕容皝心血来潮即命阳裕等营建新都，肯定要经过几番的朝议讨论斟酌，实地勘察，权衡利弊；同时，求于龟筮也是必不可少的程序，最后才能确认哪里是可以建都的“福德之地”。

现在看来，龙城之所以能沿用至今，是因为当年的慕容皝等可能已经掌握了大凌河的流水规律，所以选择在今大凌河西侧凹岸顶点的下方建城，成功规避了大凌河的水害。从20世纪70年代的河床看，大凌河左侧凹岸顶点北距老城南门尚有数百米的距离。随着凹岸的顶点逐渐下移，河床也会随之向东城墙逐渐靠近。所以当初建城时南门距凹岸的顶点应该有很长的距离，河床与东城墙之间也不会像现在这样靠近，应该有很大的空间。所以尽管凹岸顶点不断向北推移，但是至今仍没能对龙城造成致命的危害。

据《晋书·慕容皝载记》，当初参与龙城营建的除慕容皝之外，仅有阳裕和唐柱两人。唐柱仅此一见，事迹不详。阳裕字士伦，右北平无终人，少孤，成年后先任幽州主簿、治中从事。石勒攻下蓟城后，阳裕投段氏鲜卑，段氏败亡后，降于石虎。咸康四年(338)冬，阳裕又为前燕军所俘。阳裕深受慕容皝的器重，东破高句丽，北灭宇文归，皆豫其谋。“及迁都和龙，裕雅有巧思，皝所制城池宫阙，皆裕之规模。”可见阳裕既是龙城营建的主持者，也是龙城选址的主要参与者。

《晋书·慕容皝载记》附“阳裕传”还称：“裕虽仕皝日近，宠秩在旧人之右，性谦恭清俭，刚简慈笃，虽历居朝端，若布衣之士。士大夫流亡羁绝者，莫不经营收葬，存恤孤遗。

士无贤不肖皆倾身侍之，是以所在推仰。”范阳卢湛每称之曰：“吾及晋之清平，历观朝士多矣，忠清简毅，笃信义烈，如阳士伦者，实亦未几。”“及死，號甚悼之，时年六十二”。阳裕去世时慕容皝尚在，可推知阳裕当死于龙城。时间在建元二年（344）春前燕伐宇文逸豆归^[29]之后至永和四年（348）九月慕容皝死之前。阳裕不仅是龙城选址、营建的主要参与者和主持者，而且还是前燕一位杰出的政治家。

龙城，从慕容鲜卑南下辽西建的第一座城到现代的朝阳市，一千六百多年间，先后作为十六国前燕、后燕、北燕的都城，北朝、隋、唐经营东北的唯一政治、军事重镇—营州的治所，辽、金、元兴中府（州）的治所，功能几度转变，在中原、东北、北方多元文化交流与融合过程中扮演了重要角色。

龙城，因前燕兴而建，不为北燕亡而废，福德之地，此之谓耶？

（此文原载于《边疆考古研究》第12辑，2012年）

注

- [1] 除本文讨论的龙城之外，汉代还有匈奴单于祭天，大会诸国的龙城。即唐代边塞诗人王昌龄《出塞》诗“秦时明月汉时关，万里长征人未还。但使龙城飞将在，不教胡马度阴山”中提到的龙城，在今蒙古草原。
- [2] 田立坤·万维飞·白宝玉：《朝阳古城考古纪略》，《边疆考古研究》，第6辑，科学出版社，2007年。
- [3] a：辽宁省博物馆编：《辽宁史迹资料》，内部资料，1961年。
b：拙作：《朝阳史地考略》《张忠培先生七十岁论文集》，科学出版社，2004年。
- [4] 公元384年七月，前秦昌黎太守宋徵撤离辽海地区时，焚毁龙城宫殿，见《晋书》卷一一五，苻丕载记。436年五月北燕灭亡前求助于高句丽，高句丽大军到龙城将龙城焚毁，火一旬不灭，见《资治通鉴》卷一百二十三，宋纪元嘉十三年。
- [5] “安史之乱”后，驻守营州的平卢军孤城无援，最后不得不撤出营州，渡海到山东，营州地区为奚所占，见《新唐书·候希逸传》，明初置营州五屯卫于辽西地区，永乐元年徙于山海关内，辽西地区成为蒙古兀良哈部的牧地，直至清初才逐渐恢复人烟。见《明史·地理志》，《清史稿·地理志》相关条目。
- [6] 同注[2]。
- [7] 《旧唐书》卷一八五下，宋庆礼传。
- [8] 金毓黻：《东北通史》卷三：八、昌黎郡与营州，第188页，五十年代出版社，1981年6月翻印本。
- [9] 《晋书》卷一百八，慕容廆载记。
- [10] 《晋书》卷一百八，慕容廆载记。另见《资治通鉴》卷九十一，晋纪太兴二年、太兴四年。
- [11] 《晋书》卷一一零，慕容皝载记。
- [12] 《晋书》卷一零九，慕容皝载记。
- [13] 《通典》卷一百七十八，州郡八，柳城郡。
- [14] 《晋书》卷一百九，慕容皝载记。
- [15] (唐)杜佑：《通典》卷178，柳城郡条。
- [16] 谭其骧主编：《中国历史地图集释文汇编·东北卷》6，中央民族学院出版社，1988年。
- [17] 拙作：《棘城新考》，《辽海文物学刊》，1996年第2期。
- [18] 这里所说的朝阳盆地范围包括今朝阳市区及南面的十二台子乡、西南的西大营子乡、西面的七道泉子乡、西北的召都巴乡、北面的他拉皋乡；东、南两面有松岭山脉的凤凰山和柏山，西、北两面有双鲁

尔虎山脉的桃花山、狼山和马鞍山：大凌河靠东侧纵贯其间。自西北山间流出的十家子河经狼山前东入大凌河。盆地内海拔高度在160至185米之间。

- [19] 摘作：《朝阳史地考略》，《庆祝张忠培先生七十岁论文集》，科学出版社，2004年。
- [20] 大青山为努鲁尔虎山系的一座主要山峰，海拔1153米，是朝阳西北的天然屏障。元代称青峦岭。清乾隆三十八年哈达清格著《塔子沟纪略》卷十一艺文有元元统三年(1335)《兴中州达鲁花赤也先公平治道碑记》，称“夫青峦岭者，自古有之，东连辽水，西接蓄川”。
- [21] 《汉书》卷二八下，地理志，辽西部柳城。关于西域和柳城的发现，参见辽宁省文物考古研究所，朝阳市博物馆：《朝阳袁台子》，文物出版社，2010年。
- [22] 慕容鲜卑初入辽西之时即活动于大凌河中游的柳城、棘城一带。《晋书》卷一零八，慕容廆载记称：“父涉归，以全柳城之功，进拜鲜卑单于，迁邑于辽东北”；又称“涉归有憾于宇文鲜卑”，“全柳城之功”，“迁邑于辽东北”可能均与同宇文鲜卑争夺柳城有关。
- [23] 慕容鲜卑与段氏争夺柳城，见《晋书》卷一零九，慕容皝载记。
- [24] 《管子》卷一，乘马第五：“凡立国都，非于大山之下，必于广川之上。高毋近旱，而水用足；下毋近水，而沟防省。因天材，就地利，故城郭不必中规矩，道路不必中准绳。”《诸子集成·管子校正》，上海书店，1986年。
- [25] 陈桥驿：《水经注校证》卷十四，大辽水，中华书局，2007年。
- [26] 民国十九年修《朝阳县志》卷九，桥梁。南门外龙安桥：“县之南门外，本系干河，惟夏秋间雨水过多，则西北一带，田亩沟洫间溢之水，悉汇于此，东入大凌河。”北门外同济桥：“县之北门外半里许，有横沟，亦系干河。夏秋间积水，沮洳之难行，与南门外相等。
- [27] 此系参依据《晋书》、《通典》相关记载综合言之。
- [28] 《史记》卷四，周本纪：成王在丰，使召公复营洛邑，如武王之意。周公复卜申视，卒营筑，居九鼎焉。曰：“此天下之中，四方入贡道里均。”作《召诰》、《洛诰》。参见顾炎武《历代宅京记》总序上，中华书局，1984年。
- [29] 《资治通鉴》卷九十七，晋纪咸康八年十一月，建元二年正月条。

龍城新考

田立坤

本稿が検討する龍城とは、十六国期前燕の慕容皝が建てた都城を指す⁽¹⁾。龍城はまた、和龍城、黃龍城とも称され、現在の遼寧省朝陽市老城区がその遺址である⁽²⁾。龍城の沿革興廃は史書に記載があるうえ、すでに遺跡や文物から考察、証明されてきたため⁽³⁾、再論するまでもない。本稿の意図は龍城の立地計画にあり、龍城と同時代かつ密接な関係にある棘城、柳城と、地理的位置や周辺環境等の点から、相違性や階層性について比較する。ゆえにこれを新考という。

1. 問題提起

戰国燕の秦開が東胡を破って遼海地区に初めて郡県を設置して以来、各代が現在の遼西の大・小凌河流域に多くの城を築いた。その中で文献と遺跡において確かめられる戰国から兩漢の重要な城址には、凌源三十家子の平岡城（漢）、安杖子の凡城（戰國～漢）、喀左黄道宮子の白狼城（戰國～漢）、朝陽十二台子の柳城（戰國～漢）、松樹嘴子の狐蘇城（漢）、大廟城（漢）、北票三官宮子の棘城（戰國～漢）、錦州の徒河城（漢）、台集屯の古城（戰國～漢）、義縣の交黎（昌黎）城（漢）などがある。二千年以上の世の激しい移り変わりを経て今日にいたるまで、漢の徒河城が遼西回廊の着実な繁栄とともに遼西沿海地域の中心都市の錦州に発展したことを除くと、その他の遼西山地地域の諸城は発展までいたらず、あるものはかなり早い時期に廃棄された。遼れて築かれた龍城は、先行する諸城とは大きく異なり、前燕の初建から十六国、北朝、隋、唐、遼、金、元、清にいたるまでに二度の焼毀⁽⁴⁾と二度の廢棄⁽⁵⁾があったものの使用され続け、現在にいたるまで、遼西山地地域の中心都市・朝陽市の政府所在地である（図一）。1991年より開始した朝陽市老城区における広域考古探査と重点地域の緊急発掘を通じて、朝陽古城のより正確な位置が明らかとなつた。とりわけ龍城宮城南門遺跡の発見と、前燕による初期の版築層の確認は、朝陽古城の北部城壁が前燕に初めて築かれたことを証明した。龍城は築城されてから現在にいたるまで廃棄されたことがないだけでなく、位置も移動していないのである⁽⁶⁾。

十六国から隋唐期（“安史の乱”以前）まで、龍城（隋は柳城に改名）は、400年以上にわたり東北地区の政治、経済、文化の中心に位置し、東北ないしは東北アジア地域の情勢を主導し、唐の張九齡は「況や營州（龍城、柳城）は彼の戎夷に鎮し、喉を扼し臂を斬ら、逆はば則ち其の死命を制し、順はば則ち其の主人と為り、是れ楽都と称し、其の來たるこ

と尚し。」⁽⁷⁾と述べている。近代の歴史家である金毓黻は龍城の歴史作用を非常に高く評価し、「蓋し慕容氏以来、龍城の地は一躍して東北の首都となり、北方を保障するを以て東夷を控制し、はじめ兩漢の時のごとくこれに遼東郡を置き、魏より唐まで未だ之を改めず。」⁽⁸⁾とする。龍城の歴史的地位は多岐にわたる要因によって形成されたものである。例えば歴史上の全国的な政治・経済・軍事情勢、中原王朝と周辺各民族との関係、東北地区の民族分布・移動・融合等々であるが、前提条件は龍城が地理上に占める地域的優位性と選地の科学性であり、この二者をおいて今日の龍城は存在しなかった。

2. 築城の背景

曹魏初年、鮮卑慕容部は首領莫護跋に率いられ、北方草原より遼西に入居した。魏の明帝の景初二年（238）、司馬懿は遼東に割拠する公孫淵を討った。莫護跋は部を率いて参戦して功績があり、率義王を挙げて「始め棘城の北に建国」した。莫護跋の死去後、その子の木延が繼ぎ、木延の死後は渉帰が繼ぎ、渉帰はまた遼東の北部に移動した。渉帰の死後、一族で跡目簒奪争が起き、渉帰の弟の耐が立って位を継ぎ、渉帰の子の廆を謀殺しようとした。後に耐は国人によって殺され、廆が部族首領に擁立された。すなわち慕容廆である。太康十年（289）、遼東北部は辺鄙な遠方にあるため、慕容廆は再び部を率いて徒河の青山に移動し、元康四年（294）には大棘城へ居を移し、農桑を教え法制を上国と同じにした⁽⁹⁾。ここにいたって慕容鮮卑はついに水草を追って移動する非定住の生活方式捨て、遊牧から定住への転換を完了した。

時まさに西晋の愚帝司馬衷の在位時、外戚と宗室が互いに結託して引き起こした「八王の乱」の最中であった。「八王の乱」終結後、踵を接して「永嘉の乱」が起り、「百姓流亡し、中原蕭条として、千里烟無し」となり、遼西地域を占拠した慕容廆は「刑政修明し、虚懷引納し、流亡の士庶、襁負し之れに帰すもの多し」であった。慕容廆は機に乗じて偽郡県を設置して流人を統べ、賢才を推舉して庶政を委ね、学校を創建し、臣を称して晋の正朔を奉ずる政治策をとった。積極的に各方面の漢化政策を推進することで、漢族の世家大族が競ってその登用を望むようにし、慕容鮮卑の勢力を急速に拡大させた。東晋元帝の大興二年（319）、慕容廆は平州刺史・遼東校尉崔懲の陰謀画策による高句麗、宇文、段氏三国の棘城を包囲した連合軍を撃破すると、続いて遼東に出兵し、崔懲を高句麗に逃亡させた。大興四年（321）、東晋は慕容廆を使持節都督幽平二州東夷諸軍事・車騎將軍・平州牧とし、遼東郡公に封じた。海東の統治権を受け、官司を備え平州守宰の設置を命ぜられ⁽¹⁰⁾、慕容廆は東晋に正式に冊封されて、「帝命を敷宣し、以て罪有るを罰す」として、一諸侯の地位を保った。咸和六年（331）、慕容廆はその部下の意を受けて自身を燕王に封じることを請う上奏をしたが、朝議が決しないうちに慕容廆は亡くなつた。慕容廆の40年以上の

活動を通じて、慕容鮮卑は広く人望を集め、政治上で絶対的な優勢を占めただけでなく、経済・文化・軍事の面でも急速な発展を遂げた。慕容皝が位を継いだ後、咸康三年（337）に棘城で燕王を自称して政権（歴史上、前燕と呼ばれる）を樹立し、諸官府を置き、慕容鮮卑社会は最終的に氏族・部族制から封建国家に転換を果たした。これは慕容鮮卑の歴史的に最も重要な最初の転換点で、その政治要求はすでに君主に忠誠を尽くして諸侯となることを求めるのではなく、帝位を求めて政権を争い、慕容廆の予言「吾、福を積み仁を累ね、子孫當に中原に有るべし」を実現することであった^{〔1〕}。さらに、鮮卑各部を一つに合わせ、扶余と高句麗の人を奪い、これに中原の「義を慕いて至る」人士が加わって、遼西地区は「流人の多きこと、旧土の十倍有余、人殷地狭、故に田无きは十有四」^{〔2〕}となった。さらに、大きな発展空間を求めて、人口増加による要求を満たすことが、すでに前燕政権の当面の急務になっていた。棘城は所在する地理的位置だけでなく、さらには周辺環境、そして規模において、いずれもすでに慕容鮮卑社会の急進的な発展による要求に対応できなくなっていた。したがって棘城を廢棄する必要があり、他所に新都を造営した。柳城の北、龍山の西のいわゆる「福德の地」^{〔3〕}は、前燕当時の管轄地域のうち二つとない最良の地であり、龍城は時機に乗じて誕生した。燕王慕容皝は陽裕、唐柱らに龍城を造営させ、宮廟を構え、柳城県を改めて龍城県とし、龍城に遷都した^{〔4〕}。龍城は棘城の後を繼いで、前燕第2番目の都城となった。

3. 棘城と龍城

棘城は、また大棘城と称され、正史において『晋書』慕容廆載記の「曾祖莫護跋、魏初其の諸部を率いて遼西に入居し、宣帝に従い公孫氏を伐ち功有り、率義王を拜し、始め国を棘城の北に建つ」が初見である。棘城がどこにあったのかについてはこれまで諸説があり、最も代表的なのは唐の杜佑『通伝』の柳城郡東南説「漢徒河縣の青山は（柳城）郡城の東百九十里に在り。棘城は即ち顚頷の墟、郡城の東南百七十里に在り」^{〔5〕}である。唐の柳城郡は今の朝陽老城区で、これに基づき研究者は皆、棘城を今の錦州付近に置く。『中国歴史地図集』はさらに明確に、棘城を今の錦州の北、義県西南の鵠城子に定める^{〔6〕}。『嘉慶重修大清一統志』は「大棘城は義州西北に在り」とする。義州は現在の義県で、錦州の北やや東寄り、朝陽の東やや南寄りにあり、「義州西北」は現在の朝陽の真東あるいは北東に位置し、『通伝』柳城（朝陽）東南説と一致しない。考古学の発見と文献記載および地形環境にもとづき、我々は、棘城はおそらく戦国期に初めて築かれ、現在の北票市章吉營子郷三官營子村の戰国から漢代の遺跡がすなわち、棘城の所在地であると考えている^{〔7〕}。

大凌河は朝陽城の東を流れた後、東に折れて鳳凰山（龍山）の北を過ぎ、南へ流れ来た

牤牛河が流入してさらに東北に向かい、朝陽盆地を流れ出る。両側丘陵が起伏して連綿と30km以上連なる狭い河谷地帯に入る。そのもっとも広い所は6kmほどで、北票三官營子村の戰国から漢代の棘城遺跡はこの河谷右側、現在の朝陽市街西南約25kmに位置する（図二）。

棘城は大凌河という東北・華北・北方草原の交通要路上にあるとはいえ、交通は不便であり、東西両側はともに出口が少なく、かつ土地は狭く、大量の人口を抱えることは難しい。これに加えて河谷は平坦で、川の右岸に位置するため河水の侵害を極めて受けやすい。したがって、人口の急激な増加、勢力拡大、政権確立の後に、慕容鮮卑は積極的に中原の進取を開始してその政治的重心を南に移す必要があり、棘城もまたその歴史的使命を終えた。

棘城と比べて龍城は以下の点で優れている。まず、龍城が所在する朝陽盆地は遼西山地地区の中央に位置している⁽¹⁸⁾。遼西山地地区は東北から南西に向かってはしる奴魯爾虎山、松嶺、医巫閭山、大凌河河谷、小凌河河谷の5つの自然地理単位で構成されている。奴魯爾虎山と松嶺両大山系の間の大凌河河谷は、東北・華北・北方へ続く天然の通路で、人類による開発が比較的早く、居住に適し、文化が発達した地帯でもある。龍城が所在する朝陽盆地は、大凌河河谷の中で面積が最大で、大量の人口を保つ空間があり、5000年以上前の紅山文化期から始まり夏、商、周各代を経て、一貫して大凌河流域における人間の活動が最も頻繁かつ集中した地域である⁽¹⁹⁾。つぎに、龍城が所在する朝陽盆地は地理的に重要な軍事的位置を占めている。大凌河中流に位置する朝陽盆地は、東西方向の大凌河古道に雄然と位置するだけでなく、南側の鳳凰山と柏山の間を抜けると小凌河河谷へと通じる。小凌河を週ると大凌河の南源山地に入ることができ、漢代・右北平郡の白狼城（現・喀左県の黃道營子古城）に至る。小凌河に沿って下ると漢代遼西郡の徒河城（現・錦州市）に至り、沿海の遼西回廊に入り、また海路で山東半島、東南沿海、ならびに朝鮮半島に通じることができる。北西に位置する大青山を抜けると⁽²⁰⁾、北に向かう西拉木倫河、老哈河流域に入り、北方草原に通じることができる。南西の大凌河北源へ進むと、漢代・右北平郡の凡城（現・凌源の安杖子古城）、および右北平郡治の平岡城（現・凌源の三十家子城）に至る。朝陽盆地に築かれた龍城は、四方八方に通じる軍事要塞といふことができる。

朝陽盆地の重要な戦略的地位は早くも諸人の知るところとなっており、戰国期には盆地南縁に位置する現在の大凌河右岸の袁台子一帯に「西城」があった。前漢期には柳城に改められ、しかも遼西郡の西部都尉治所となり⁽²¹⁾、朝陽盆地の遼西山地地区における政治・文化・軍事の中心的な地位を形成した。後漢末年には、右北平、遼西、遼東属國三郡の烏桓が柳城を中心に連盟を形成したが、のちに曹操によって滅ぼされた。魏晉期には、柳城は鮮卑の慕容氏、宇文氏⁽²²⁾、段氏⁽²³⁾の三部による激しい争奪地となり、最終的に朝陽盆地の柳城を占有した慕容鮮卑が宇文氏と段氏を破り、遼海に雄を唱え、中原へと向かった。

4. 柳城と龍城

柳城と龍城は共に朝陽盆地にあり、柳城が先に存在したにもかかわらず、なぜ慕容皝は柳城を利用せず、民を使役して龍城を築かせたのだろうか。いくつかの方面にその原因が求められる。まず、柳城は大凌河の右岸に位置し、水害に遭いやすい。つぎに、県城とするには柳城の規模が小さすぎた。さらに、柳城の主要目的は防衛であり、このため大凌河河谷を制御しやすく小凌河河谷入口へ通じる大凌河右岸を選んでおり、土地は狭く、発展空間がない。都城は国の中枢所在地であり、より大きな発展空間を必要とする。このため柳城は棘城と同様、いずれも前燕都城としての要求機能を満たすことができなかつた。

朝陽盆地の中で、地勢がやや高く築城に適しているのは2地点ある。1ヶ所目は現在の西上台で、西梁とも呼ばれ、北東-南西方向に伸び、平均海拔180m前後である。もう1ヶ所が即ち現在の朝陽市老城区で、海拔170m前後である。西梁は朝陽盆地の中心の位置にあるものの大凌河からやや遠く、「高きも旱に近づくこと母くして、水用足る」の築城原則に合わない⁽²⁴⁾。老城区は大凌河の左岸に位置し、東は大凌河を隔てて鳳凰山を臨み、山水の地勢に優れ、また山水の利便があり、南・北・西の三面には非常に大きな空間が広がる。これがおそらく当初、慕容皝がここに都城を建設することを選んだ主要な原因である。築城にあたり、大凌河左岸の現・朝陽市老城区の位置を選択すると、東は大凌河に臨み、非常に容易に水害が発生する不利点がある。地球の偏向力の影響を受けて大凌河水流の動きは右岸を主に浸食するが、実際の地形環境の制約、水流の浸食・運搬・堆積、そして再浸食・運搬・堆積の反復作用を受けることによって、大凌河は朝陽盆地に流れ込んだのち、河谷は連続する幾度もの湾曲を形成する。十二台子の北では青龍山に阻まれることによって主流線は北から北やや東向きの流れに変わり、鳳凰山の山裾に当たって阻まれて、主流線は再び北やや西向きに変わり、河流は左岸（西岸）に浸食を加え、含有する土砂量が増える。含有土砂量が増えることによって運搬能力は低下し、応じて土砂が次第に堆積し、これに地球の偏向力の影響が加わって、主流線が再び北やや東向きに流れを変え、西岸に湾曲して窪んだ河岸が形成される。これはすなわち、「水經注」がいうところの「白狼水は又東北して龍山の西を経、……又北して黃龍城の東を経、……『魏土地記』曰く「黃龍城の西南に白狼河有り。東北に流れ、城の東北の下に附く」、即ち是れなり」⁽²⁵⁾である。龍城はちょうど上述の大凌河左側の河道湾曲部外側の頂点の下方にあり、大凌河は龍城東城壁のすぐそばを流れている。このため千年以上にわたって大凌河の無数の洪水氾濫を経たものの、大規模な水利施設の防備がない状況の下で龍城は依然として確固とそびえ立ち、川に隣接しているものの水害を受けなかつた。しかも規模は不斷に拡大し続け、現在の朝陽市新城区は龍城を中心として南・北・西の三面に放射状に展開しており、その地

理的位置上の優位性、選地の科学性を知るに足る（図三）。

龍城が所在する地理的位置は、その形状にも直接的な影響を与えている。朝陽盆地の地形は西高東低で、夏から秋にかけて西梁の水は大部分が老城南門外に、それ以外が北門外に集まり、その後、東へ向かい大凌河に注ぐ。清末の南門外には龍安橋、北門外には同濟橋がかかり、人を渡していた⁽²⁶⁾。1936年に編纂された『朝陽県志』の「朝陽県街市図」が示すように、当時、西城壁北部外側には非常に大きな水坑（水溜り）があり、南部外側もまた窪地であり、城西の水が東へ向かって大凌河に注いでいた水路の名残である（図四）。この西梁の大凌河に東流する水と城東の大凌河河床の制約を受けて、龍城全体は北が広く南が狭い長い台形を呈しており、城の南北中軸線は南が西に30°ほどふれ、城東の大凌河河岸と基本的に平行している。

西梁の城に沿って南北に分かれて大凌河に注ぐ水路は、おそらく当時、地形を利用して人工的に作ったものであり、これは防御のための堀河であろう。さらなる研究による確認が待たれる。

5. 龍城の選地

『資治通鑑』等の文献記載にもとづくと、東晋の咸康七年（341）正月、唐国内史の陽裕、唐柱は燕王慕容皝の命を受け、柳城の北で龍山の西のいわゆる福德の地に龍城を築いた⁽²⁷⁾。これらの記載がいうところはいずれも龍城の造営段階のことであり、どうして柳城の北で龍山の西の地を選んだのか、どうして「福德の地」というのかといった、龍城の選地過程は述べていない。以下ではこれについて検討を試みる。

都城は国家の政治中枢の所在地で、国が長期安定、隆盛発展するかどうかに關係する重要なものである。このため歴代王朝はみな都城の選地を特別重視した。最初の都城選地には二つの段階を踏む必要があった。まず当時の國家が置かれた政治・経済・軍事情勢に基づき、あわせて長期の発展を考慮して都城造営の範囲区域を決定した。その後、確定した範囲区域内でト笠相地等にもとづき山川の走向、地形状況を調べ、具体的な位置を確定し、最後にようやく配置プランが計画され、造営工事を始めた。例えば西周期の成周の建設では、まず召公に先に調査に行かせ、続いて周公がト占して位置を確定した⁽²⁸⁾。龍城の選地についてもこれと同じような過程があったに違いない。龍城建都は前燕発展史上の重要な出来事であり、慕容皝はふと思いついて陽裕らに新都建造を命じたのではなく、間違いなく幾度もの朝議討論、斟酌、実地調査、利害得失の比較検討を経る必要があった。同時に、亀筮もまた欠かすことのできない手順であり、最後にようやく何処かの建都可能な「福德の地」を確定することができた。

今日的視点において、龍城の地が今に至るまで使用し続けられているのは、当時の慕容

號らがすでに大凌河の水流法則を把握していたためで、ゆえに今の大凌河西岸の河道湾曲部外側の頂点の下方に城を築くことを選択し、大凌河の水害を避けることに成功した。1970年代の河床からみて、大凌河左岸の河道湾曲部外側の頂点は老城南門から北にお数百mの距離にある。河道湾曲部外側の頂点が次第に下流側に移動することによって、河床もまたこれに伴い東城壁に次第に接近する。このため築城当初の南門は河道湾曲部外側の頂点から非常に遠い距離にあったはずであり、河床と東城壁の間もまた現在のように近かったとみることはできず、非常に大きな空間があったはずである。したがって河道湾曲部外側の頂点は北に向かって推移し続けているものの、今まで龍城に対して致命的な危害を加えていない。

『晉書』慕容號載記によると、当初、龍城築城に参与したのは、慕容號を除くと陽裕と唐柱の二名のみである。唐柱はこの一ヶ所にみられるのみで、事績不詳である。陽裕は字は士倫、右北平郡無終県の人で、幼くして孤児となり、成人した後まず幽州主簿・治中従事に任せられた。石勒が薊城を攻め落とした後、陽裕は段氏鮮卑に身を投じ、段氏が滅亡した後、石虎に投降した。咸康四年（338）冬、陽裕はまた前燕軍の捕虜になった。陽裕は慕容號の高い評価を受け、東は高句麗を破り、北は宇文帰を滅し、いずれもその策略に参与した。「和龍に遷都するに及び、裕雅より巧思有り。號制する所の城池宮闈、皆裕の規模なり。」にみえる陽裕は龍城築城の責任者であり、龍城遷地の主要な参与者である。

『晉書』慕容號載記に付された陽裕伝は、さらに以下のように言う。「裕、號に仕えること日近しと雖も、寵秩は旧人の右にあり。性、謙恭清儉、剛簡慈篤、朝端に歴居すると雖も布衣の士の若し。士大夫流亡羈絶すれば取募を經營せざること莫く、孤遺を存恤し、士の无賢不肖は皆身を傾けて之を待ち、是を以て推仰在る所なり」。「范陽の盧諱、毎に之を称して曰く、吾、晋の清平に及び、朝士を歴観すること多し。清忠簡毅、篤信義烈、陽士倫の如き者、實に亦未だ幾もなし」。「死に及び、號、甚だ之を悼む。時に年六十二」。陽裕の死去時に慕容號は在世であり、このことから陽裕は龍城で亡くなり、その時期は、建元二年（344）春の前燕が宇文逸豆帰²⁹を討った後から永和四年（348）九月の慕容號死去以前と推定できる。陽裕は龍城の遷地、築城の主要参与者、そして責任者であつただけでなく、前燕の傑出した政治家でもあった。

龍城は、慕容鮮卑が遼西に南下して築いた最初の城として生まれてから現代の朝陽市まで、1600年以上の間、相次いで十六国の前燕、後燕、北燕の都城、北朝、隋、唐の東北経営の唯一の政治・軍事重要地、つまり營州治所であった。さらには遼、金、元の興中府（州）の治所であり、機能を何度も変え、中原、東北、北方の多元的文化交流と融合過程の中で重要な役割を果たしてきた。

龍城は、前燕が興ったことにより築城され、北燕は亡んだが廃棄されなかった。福徳の

地とはこのことをいうのだろうか。

(原文は『辺疆考古研究』第12輯、2012年に掲載)

註

- (1) 本稿が検討する龍城以外に、漢代には匈奴单于が天を祭り、諸国と大いに会した龍城があり、唐代の辺塞詩人王昌龄の詩「出塞」「秦时的名月 漢時の闇。万里長征、人未だ還らず。但だ龍城の飛将をして在らしめば、胡馬をして燕山を度らしめず。」にある龍城は、現在のモンゴル草原にあった。
- (2) 田立坤・万雄飛・白宝玉「朝陽古城考古紀略」『辺疆考古研究』第6輯、科学出版社、2007年。
- (3) a. 遼寧省博物館編『遼寧史迹資料』内部資料、1961年。
b. 田立坤「朝陽史地考略」「慶張忠培先生七十歳論文集」科学出版社、2004年。
- (4) 384年7月、前秦の呂黎太守宋敵が遼海地区を手放した時、龍城宮殿を焼毀したことは『晉書』卷115苻丕載記にみえる。436年5月の北燕滅亡前に高句麗に助けを求めて、高句麗の大軍が龍城に到り龍城を焼殺し、火が一句の間消えなかったことは『資治通鑑』卷123、宋紀元嘉13年にみえる。
- (5) 「安史の乱」の後、營州に駐屯した平盧軍は孤城無援となり、最後には營州を出ざるを得なくなり、海を渡って山東へ行き、營州地区は奚の占めるところとなつたことが『新唐書』侯希逸伝にみえる。明初に營州五屯衛を遼西地域に置き、永樂元年に山海關内に移り、遼西地域は蒙古兀良哈部の牧地となり、清初になってようやく徐々に人煙が復したことが『明史』地理志、『清史』地理志の関連項目にみえる。
- (6) 同註(2)。
- (7) 『旧唐書』卷185下、宋慶礼伝。
- (8) 金破顛「東北通史」卷三、八、昌黎郡與營州、1981年6月再印本、188頁、五十年代出版社。
- (9) 『晉書』卷108 崔容寬載記。
- (10) 『晉書』卷108 崔容寬載記。他に『資治通鑑』卷91 晋紀太興二年、太興四年。
- (11) 『晉書』卷110 崔容倩載記。
- (12) 『晉書』卷109 崔容就載記。
- (13) 『通典』卷178 州郡八、柳城郡。
- (14) 『晉書』卷109 崔容就載記。
- (15) 杜佑『唐』『通鑑』卷178、柳城郡。
- (16) 譚共驥主編『中国歴史地図集』枳文匯編・東北卷』6、中央民族学院出版社、1988年。
- (17) 田立坤「棘城新考」「遼海文物学刊」1996年第2期。
- (18) ここでいう朝陽盆地の範囲は、現在の朝陽市區、および南の十二台子郷、西南の西大宮子郷、西の七道泉子郷、西北の召都巴郷、北の他拉皋郷を含む。東と南の両方面には松嶺山脈の鳳凰山と柏山があり、西と北の両方面には奴魯爾虎山脈の桃花山、狼山、馬鞍山がある。大凌河がその東寄りを貫いて流れ、北西の山の間から流れ出る十家子河が狼山の前を流れ、東に向かい大凌河に流入する。
- (19) 田立坤「朝陽史地考略」「慶張忠培先生七十歳論文集」科学出版社、2004年。
- (20) 大青山は努魯爾虎山系の主要な山峰の一つで、海拔1153mである。朝陽西北の天然の障壁であり、元代には青巒山と称された。清乾隆38年の哈達清格著『塔子溝紀略』卷11芸文にある元の元祐3年(1335)『興中州達魯花赤也先公平治道塗碑記』は、「夫れ青巒山は古より之れ有り、東は遼水に連なり、西は雷川に接す」とみられる。
- (21) 『漢書』卷28下 地理志、遼西郡柳城。西城と柳城の発見については、以下を参考にした。
遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館「朝陽袁台子」文物出版社、2010年。
- (22) 崔容鮮卑は初めて遼西に入った時、大凌河中流域の柳城、棘城一帯で活動した。『晉書』卷108、崔

- 容夾載記には、「父涉帰、全柳城の功を以て進みて鮮卑单于を拜し、邑を遼東の北に遷す」とある。また「涉帰、宇文鮮卑を憾む有り」、「全柳城の功」、「邑を遼東の北に遷す」は、おそらく宇文鮮卑と柳城を争奪したことといずれも関係すると思われる。
- (23) 雅容鮮卑が段氏と龍城を争奪したことは、『晉書』卷109、雅容號載記にみえる。
 - (24) 『管子』卷1、東馬第五「凡そ国都を立つるには大山の下に於いてするに非ぜんば、必ず広川の上に於いてす。高きも旱に近づくこと母くして、水用足り。下きも水に近づくこと母くして、溝防省く。天材に因り、地利に就く、故に城郭は必ずしも規矩に中らず、道路必ずしも準繩に中らず」。(『諸子集成・管子校正』上海書店、1986年。)
 - (25) 陳橋驥『水經注校証』卷14、大遼水、中華書局、2007年。
 - (26) 中華民国19年編纂『朝陽県志』卷9、桥梁、南門外龍安橋「県の南門外。本系干河、惟夏秋の間、雨水過多なり。則ち西北一帯、田畠溝渠の間、漲溢の水、悉く此に匯まり、東し大凌河に入る」。北門外同濟橋「県の北門外半里許り。横溝有り、亦系干河。夏秋の間水積り、沮洳の行き難きこと、南門外と相等し」。
 - (27) これは『晉書』、『通伝』の関連記載にもとづいて総合的に言えることである。
 - (28) 『史記』卷4 周本紀「成王、豈に在り。召公をして復た洛邑に營ましめ、武王の意の如くせんとす。召公復たし、申ねて視、卒に營築して九鼎を居く。曰く、此れ天下の中にして、四方より入貢するに道里均し、と。召誥、洛誥を作る」。顧炎武『歷代宅京記』總序上、中華書局、1984年。
 - (29) 『資治通鑑』卷97 晋紀咸康8年11月、建元2年正月条。

三燕龙城宫城南门遗址及其建筑特点

万雄飞

朝阳古城位于辽宁省朝阳市市区，从十六国前燕始建至明初废弃的千余年间，朝阳古城一直是东北地区的中心城市，具有重要的历史与考古价值。据文献记载并结合朝阳市区及其近郊考古资料综合判断，现朝阳市区东部以南塔、北塔、佑顺寺、关帝庙为中心的老城区就是朝阳古城所在地。然而，由于被现代城市所叠压，朝阳古城的城门、城墙、城内大型建筑基址、街道等考古遗迹极少发现，因此朝阳古城的准确范围、城内布局及其城市发展与演变不为人所知。

2003年，辽宁省朝阳市委、市政府决定对老城区北大街及其周边进行大规模拆迁改造，趁此良机，辽宁省文物考古研究所及时组建专业考古队伍，在朝阳市北大街改造指挥部及有关部门的大力支持下，积极开展考古勘探，在此基础上选择重点区域进行考古发掘。田野考古工作从2003年7月开始至2008年10月结束，发现十六国至清代遗迹十多处，出土各时期遗物数千件，取得了显著成绩^[1]。此次持续数年的考古工作最重要的收获之一就是发现并发掘了三燕龙城宫城南门遗址。

该遗址位于朝阳市双塔区北大街与营州路的交叉口（俗称大什字）东北220米处，东侧紧邻北大街，南侧距营州路约200米（图一）。发掘结果表明，该城门始建于十六国前燕时期，先后历经后燕、北魏、唐代、辽代和金元五个时期的改建，彻底废弃于明初，持续沿用近千年。现将该遗址前燕和后燕两个时期门址的发掘情况介绍如下。

1. 地层堆积

该城门沿用时间长，地层堆积较为复杂。现分别以遗址南壁局部剖面、西城墙南北向剖面和东墩台南北向剖面为例，介绍遗址的地层堆积情况。

① 遗址南壁局部剖面（图二）

第一层：清代及近现代堆积层。厚约2.5米。可分为2层。

1a层：近现代层。厚约2.1米，土质较杂，遗址内普遍分布。内含石块、红砖、白灰块和煤渣等。

1b层：清代路面和文化层。深2.5米，厚约0.4米。路面用白灰混合小碎石子铺成，表面平整，其上是灰黄色堆积土。

第二层：金元文化层。深约3.4米，厚约1.2米。分为2层。

2a层：金元文化层。灰黑色，厚约0.9米。该层下发现一条南北向的道路遗迹，路面用

小石子、碎瓦片、瓷片铺成，路面宽约6米，与城门址中间门道相通。路土中出土了青瓷片、粗白瓷片等。路面以上的堆积出土了陶片、瓷片和瓦片等。

2b层：路土堆积层，灰褐色，厚约0.2-0.5米。内含粗白瓷片、黄釉和绿釉瓷碗底、黑

陶卷沿盆口沿、饰附加堆纹黄褐陶片等。出土了“大定通宝”和“大观通宝”各1枚，还出土了残骨簪、动物头瓷件。

第三层：辽代文化层。深约4.8米，厚约1.3米。分为3层，每层下均有路土。

3a层：浅灰土，厚0.35-0.5米，内含白瓷器底、黄釉瓷碗口沿、灰陶卷沿盆、布纹瓦、瓦当等，还出土了铁锄一件、“政和通宝”钱一枚。

3b层：灰褐土，厚0.45-0.55米，内含白瓷器底、白瓷碗口沿、卷沿陶罐口沿、展沿盆口沿等，并含较多动物碎骨。

3c层：路土堆积层，厚0.3-0.4米。上半部为路面，呈灰黑色，厚约0.1-0.2米，下半部为人工铺垫的路基，厚0.2-0.3米，路基用排列得较有规律的残砖铺成。其中夹杂大量红烧土。残砖均饰长、直绳纹，形制较规整，与唐代墩台包砖相同，应为唐代的倒塌堆积。

第四层：唐代路土层。深5.1-5.3米，厚0.2-0.35厘米。分为2层，两层之间有一个厚0.04米的淤沙层。

4a层：路土堆积层，黑褐色，厚约0.05米。

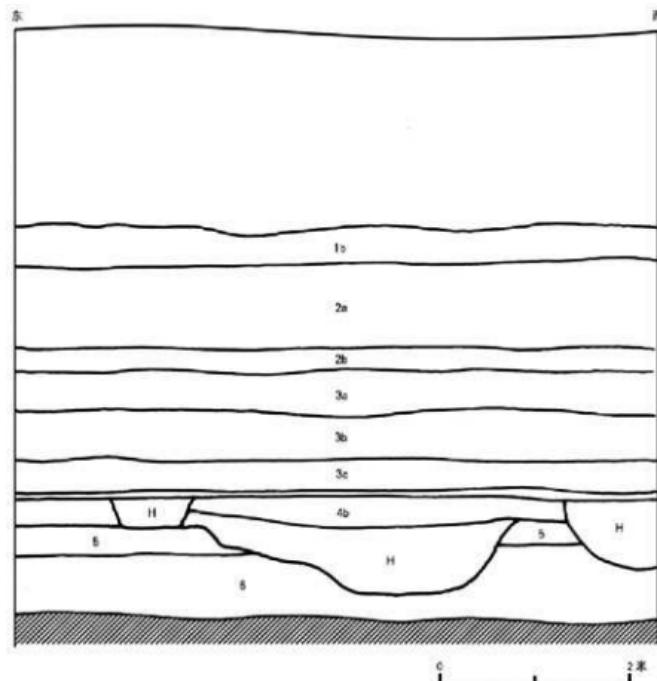
4b层：路土堆积层，黄褐色，夹杂较多炭粒，厚0.15-0.3米。内含布纹瓦、灰陶片等。

第五层：北魏路土层。深约5.6米，厚0.25-0.3米。也可分为2层，上层黄灰色，厚约0.1米，下层呈黑褐色，厚约0.2米。内含灰陶器底、灰陶器腹片、板瓦。

第六层：三燕时期文化层。深约6.2米，厚0.6-0.8米。淤泥与淤沙交替叠压，淤土中含有少量瓦片和陶片。



图一 城门遗址位置图



图二 遗址南壁局部剖面图

1a. 近现代层 1b. 清代路面和文化层 2a. 金元文化层 2b. 金元路土层 3a. 辽代文化层和路土层
3c. 辽代文化层和路土层 4a. 唐代路土层 4b. 唐代路土层 5. 北魏路土层 6. 三燕时期文化层

(2) 西城墙南北向剖面 (图三)

第一层：清代及近现代堆积层。厚2.5米。上层为近现代堆积，土质较杂，遗址内普遍分布，内含石块、红砖、白灰块和煤渣等。下层为清代文化层，厚0.4米，内含清代青花瓷片等。

第二层：金元夯土。深约4米，厚1~1.6米。灰黄色，质地较松，夯层不清晰，内含炭粒、烧土块、陶片等。金元夯土在城墙北侧较明显，紧贴着前燕时期的黄色纯净夯土，外部包砖石。

第三层：金元文化层。深约4.6米，厚0.5~2米，灰黄色，土质较松软，内含炭粒、陶片、瓷片和布纹瓦片等。

第四层：辽代文化层。深约5米，厚0.3~0.5米，灰褐色，土质松软，内含炭粒、陶片

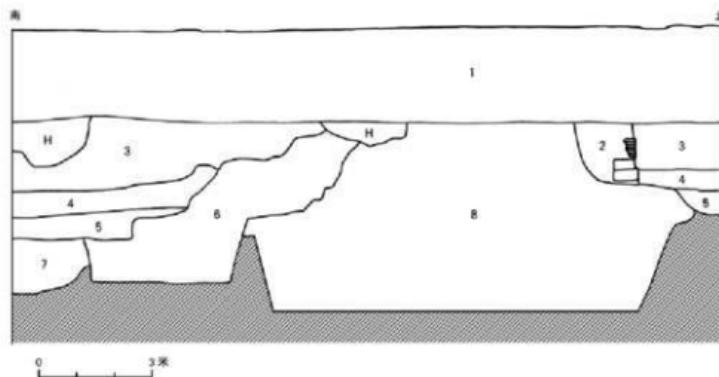
和布纹瓦片等。

第五层：唐代文化层。深约5.3米，厚0.2-0.6米，灰黑色，土质松软，内含陶片和瓦片等。

第六层：唐代夯土。深6.7米，厚1.5-3米。黄褐色，土质坚硬致密，内含较多炭粒、木屑和少量碎瓦片，夯层和夯窝都十分清晰，夯层厚约0.1米，夯窝圆形，直径约0.04米。唐代把城墙加宽，在前燕城墙的南侧进行了增补，北侧无增补迹象。补筑的夯土底部有挖筑的基槽，基槽上口宽约4.2米，下口宽3.7米，深1.7米，挖槽部分打破了前燕的夯土。地上部分紧贴着前燕的夯土墙，两者结合紧密无裂缝。唐代城墙地上部分保存高度达2.4米。

第七层：三燕至隋代文化层。深7米，厚1-1.5米。浅灰色，内含陶片和瓦片等。

第八层：前燕夯土。深7米，厚0.6-5米。黄色，土质坚硬致密，内含极少的炭粒和瓦片。夯层和夯窝都十分清晰，夯层厚约0.1米，夯窝圆形，直径约0.03米。前燕夯土城墙地下部分挖槽，上口宽约11米，槽深约2.5米，地上部分宽约4.5-9.5米，残高约2米。前燕夯土城墙直接打破生土层。



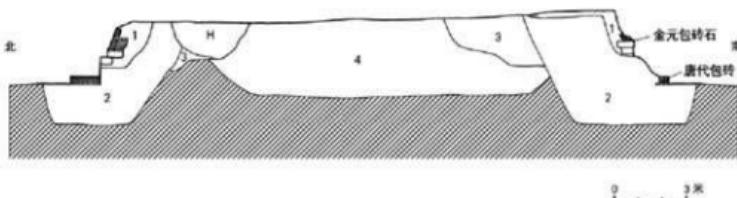
图三 西城墙南北向剖面图

1. 清代及近现代堆积层 2. 金元夯土 3. 金元文化层 4. 辽代文化层 5. 唐代文化层
6. 唐代夯土 7. 三燕至隋代文化层 8. 前燕夯土

③ 东部墩台南北向剖面 (图四)

第一层：金元夯土。厚1-1.6米。灰黄色，质地较松，夯层不清晰，内含炭粒、烧土块、陶片等。金元夯土居于墩台的最外侧，在墩台的外围补筑，紧贴着唐代的黄褐色夯土，外部包砖石。

第二层：唐代夯土。厚约4米。黄褐色，土质坚硬致密，内含较多炭粒、木屑和少量碎瓦片，夯层和夯窝都十分清晰，夯层厚约0.1米，夯窝圆形，直径约0.03米。唐代对墩台的



图四 东部墩台南北向剖面图
1. 金元夯土 2. 唐代夯土 3. 后燕夯土 4. 前燕夯土

南北两端都进行了大规模的增筑，把墩台增大。补筑时地上部分紧贴三燕时期的夯土，地下部分挖槽夯筑，槽深约1.6米。

第三层：后燕夯土。厚1-1.9米。黄灰色，土质较硬，内含炭粒、烧土粒少量瓦片，夯层不清晰。后燕仅在前燕墩台南北两端进行增补，把墩台加长，又被唐代补筑夯土打破。后燕补筑的夯土仅限于地上部分，地下无基础。

第四层：前燕夯土。厚约3米。黄色，土质坚硬致密，内含极少的炭粒和瓦片，夯层和夯窝都十分清晰。夯层厚约0.1米，夯窝圆形，直径约0.03米。前燕夯土地下部分挖槽，宽约12.5米，槽深约1.6米，地上部分宽约11米。前燕夯土直接打破生土层。

2. 前燕时期城门遗迹

前燕时期是这座城门兴建之始。由于后代不断维修、重建，前燕始建的门址被层层包裹在后期补筑的夯土之内。发掘时为了保留后期保存较好的遗迹，没有把前燕时期的城门遗迹全部揭露出来，但是我们通过东、西门道的发掘以及西城墙的解剖，基本上搞清了前燕门址的格局。

前燕门址坐北朝南，方向约为220度，共有东、中、西3个门道，它们之间筑有2道夯土隔墙。东、西门道规格和结构相同，左右对称，中门道压在晚期门道之下，情况不明。东、西门道两侧分别连接向东西延伸的夯土城墙。

(1) 墩台、隔墙和城墙

墩台、隔墙和城墙都用黄土夯筑而成，黄土纯净，包含物极少，质地坚硬，夯层均匀、清晰，每层厚0.08-0.1米(图版一，1)。墩台和隔墙的地上部分因遭到破坏和后期重建，原始南北长度不明。墩台被破坏后与两侧的城墙基本上连为一体，难以区分开。墩台残长约8、残高2.4米。隔墙平面为长方形，残长约8、残高2.4米。城墙南北残宽最宽约9、残高3米。夯土城墙向两侧延伸，现已揭露的东城墙长约50米，西城墙长约10米。

墩台、隔墙和城墙的底部都挖有基槽，宽度基本相同，墩台和隔墙处没有格外加宽。基

槽截面呈倒梯形，上口宽约12米，门道处槽深约1.2米，城墙处深约2.5米。基槽直接打破生土。

（2）门道

发掘了东、西门道，两者基本对称，中门道未发掘。我们重点解剖了东门道，下面以东门道为例加以介绍。

东门道宽约4.5、长12米(以底部基础计算)。门道内的木构设施及柱础石等构件已荡然无存，只留下一个空壳式的豁口。豁口的两壁和地面都是纯净的黄色夯土，夯土壁和地面上留下了多处辙、镐类工具痕。夯土壁面较平整，略呈斜坡状。夯土地面起伏不平，整体上北高南低。根据以上迹象，推测后燕重建时彻底破坏了前燕门道的内部设施。

门道内地面上发现了两列柱洞，它们顺门道方向排列，每列6个，共12个(图版一，2)。两列间距2.5米(柱心到柱心，以下同)，一列内两两之间的间距约1.9米。柱洞绝大多数平面为长方形，长0.5-0.6、宽0.4米，个别为圆形，直径0.4米。柱洞现存深度因地面高低而不同，北部最深为0.8米，南部最浅为0.4米。柱洞内壁陡直，壁面平整，有的可见窄沟状工具痕。柱洞底部较平坦，无础石或砖瓦垫底。填土松软，无木屑，出土少量砖瓦。这些柱洞底部基本在同一水平面上，未打破生土。

清理柱洞时发现一个迹象：洞口的一边或一角多数被人为破坏，留下了铁辙类工具痕迹(图版一，3)。分析原因，似乎是为了取走木柱而有意挖开一边或一角。东、西两列柱洞的间距仅为2.5米，作为门道的宽度显然太窄。柱洞底部无础石，不能用于承重。据此推测，这些柱洞可能是门道施工时的脚手架柱坑。

3. 后燕时期城门遗迹

后燕时期在前燕门址的基础上进行了改、扩建，工程内容主要是对墩台和门道进行修复、重修，城墙部分则未作改变，沿用了原有城墙。后燕重建后的门址仍为3个门道，门道位置不变，但方向略有调整，为215度。考古发掘了东、西两门道，中门道未揭露。北燕沿用这一期门址。

（1）墩台和隔墙

因原来的墩台遭到破坏，重建时在墩台的南北两侧都进行了较大规模的增补。重修后的墩台南北长度大于两侧城墙的厚度。修葺限于地面以上，地下基础部分无变化。

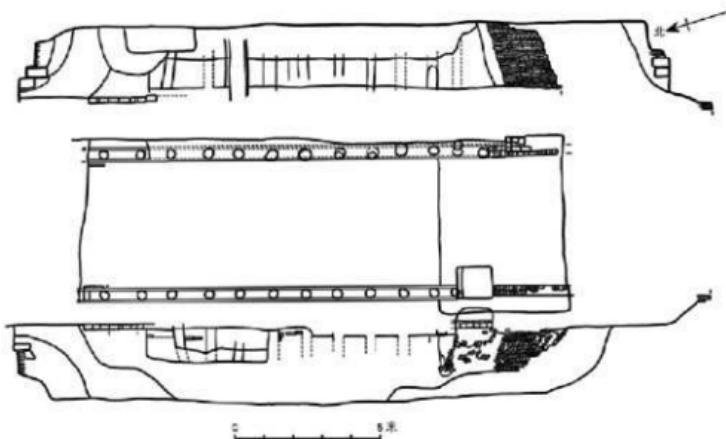
后补的夯土呈灰黄色，土质较杂，包含较多木炭和烧土粒，质地也较疏松。后燕修葺后的东、西墩台因后期破坏，南北长度不明，现存最长处约16米。我们对东墩台的南部进行了解剖，发现后燕补筑的东部墩台宽约4米。

两道隔墙平面呈长方形。南北两端被破坏，长度不明。由于中门道在后期一直继续使用，并多次被改造，东隔墙的西侧和西隔墙的东侧均遭到一定程度的破坏。推测隔墙与门道宽度相同，均为4米。

（2）门道

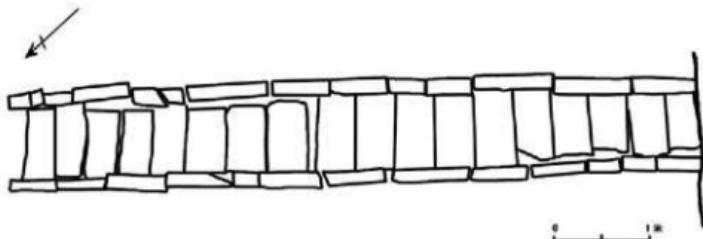
后燕时期沿用三门道的格局。中门道在后期门址中反复改建，情况不明。东、西门道北魏时期被封堵，因此保存较完好。我们对东、西门道进行了发掘，它们左右对称，规格和结构基本相同，方向215度。后燕重建时对这两个门道进行了彻底改造，不仅对门道的地面进行平整和铺垫，而且对门道的两壁进行了加工，并铺设了全部门道设施。由于墩台南北长度增加，门道进深也随之增加。

① 东门道 门道为过梁式木构架结构。东、西两侧壁立有排叉柱，排叉柱之下承以砖地袱，排叉柱之间是残砖与黄土砌筑的土垛，土垛外表抹泥。门道的南半部保存基本完整，南端墙面用青砖包砌，北端被破坏。门道宽4米（以两壁抹泥墙之间距离计算），残长15.4米。门道内保存的遗迹有砖地袱（砖槽）、排叉柱、土垛、包砖面和路土等（图五；图版二，1）。



图五 后燕时期东门道平面及侧视图

砖地袱位于门道两侧壁的底部，呈槽状，顺门道方向左右各铺设一列（图版二，2）。砖地袱用来承托排叉柱。它的结构为：底部顺着门道方向横置一列条砖作底，底砖之上两侧各立一块立砖，形成一个截面呈长方形的砖槽，底砖外侧再斜倚一列条砖，起支撑外侧立砖，防止其外移的作用（图六）。砖槽内宽0.26米，槽内均有木屑和板灰痕迹，推



图六 东门道东壁北端砖槽

测砖槽内可能还有木地樑。砖槽的底砖为承重砖，在承托排叉柱处，砖面往往略有下陷，有的底砖已完全被压碎。

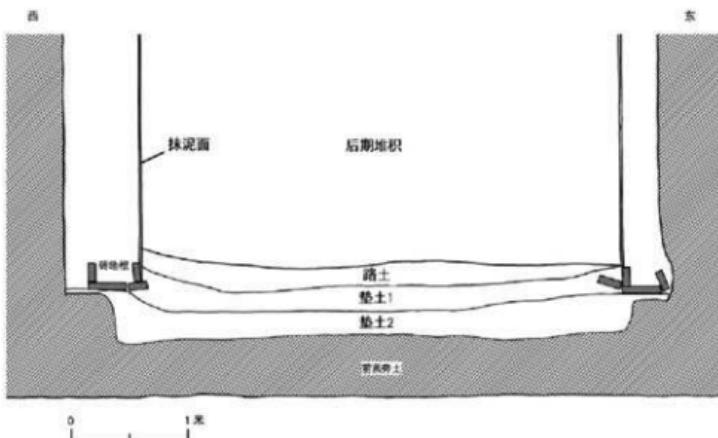
排叉柱立于砖地樑之上，东西两侧各一列，左右对称，它们嵌在土垛中，起着支撑门道顶部的作用(图版二、3)。排叉柱多数朽烂成灰，可见残存的木屑。从朽烂后的残痕观察，排叉柱截面近方形，边长约0.25米。因门道北部被破坏，排叉柱原有数量不明，东壁残存13根，西壁残存12根。东壁保存了南起的第1至第13根，其中第1、2柱间距1.3米(柱心至柱心，以下同)，第2、3柱间距0.8米，其余间距约1米。东壁南起第1根木柱略向北倾斜，倾斜角约15度，第2根也略向北倾斜，但角度更小，其余皆为直柱。西壁保存了南起第2—13根，第2、3柱间距为0.8米，其余柱间距约1米。西壁南起第1根木柱在后期修葺时被破坏，第2柱也被叠压在后补的包砖之中。

排叉柱之间以土垛相隔，土垛紧贴夯土壁，底部叠压着砖地樑，外壁用草拌泥抹光(图版二、4)。土垛起着保护排叉柱和底部砖槽的作用。土垛外壁的抹泥面与底部砖地樑外侧立砖对齐，把砖地樑和排叉柱完全包裹于泥墙之内，因此排叉柱全部为暗柱。东壁土垛厚约0.6米，西壁土垛厚约0.3米。东壁土垛与夯土壁结合不太紧密，有一小裂隙。土垛多用黄灰土夯砌而成，内含炭粒和烧土粒。少数结构特殊，如西壁第11、12柱之间的土垛全部用土坯砌成；东壁第7、8柱之间的土垛，下部有一段用残破板瓦垒成的高约0.6米的瓦墙。这些地方可能是在后期维修时造成的。

包砖面位于门道两壁的南端，有加固和美观的作用。推测门道北端也有对称的设置，现已被破坏。东壁包砖面保存较好，残长1.7，存高2，厚0.6米。分为内外两层，内层砌筑得较为杂乱，外层错缝顺砌，较为整齐美观。包砖紧邻南起第一根排叉柱，相邻处从上至下砌成向北倾斜的形状，留出了排叉柱位置(图版三、1)。包砖面之下也有预置的砖地樑。值得注意的是，包砖部分与门道方向不完全一致，略向外撇约2度。西壁包砖面残长3.4，存高1.2，厚0.3米。内外两层都用条砖斜向立砌，外侧残存9层，第1—6层向北倾斜，第7层向南倾斜，以上逐层交错。包砖面之下有预置砖地樑，方向与门道一致。西壁包砖面比东壁

向门道内延长约1.7米，砌筑方式也与东侧不同，应是后期修补造成。

门道内路土明显，土质坚硬，厚约0.2米，路土表面有一层木炭灰烬，火烧痕迹明显（图版三，2）。路土之下有两层人工垫土，最下一层为灰黑色，经过夯砸，夯窝明显，包含大量木炭灰和少量瓦片，厚0.2-0.3米。其上一层为灰褐色，也经过夯砸，质地较硬，夹杂炭粒、烧土粒和少量瓦片，两侧高，中间低，两侧正好把砖槽外侧的立砖掩埋住，厚0.15-0.3米。路土之上为后期的倒塌堆积，包含较多的残砖和碎瓦，厚约0.4-1.5米（图七）。



图七 后燕时期东门道东西向剖面图

② 西门道 形制、结构与东门道基本相同，仅局部有差异。西门道宽4米（以两壁抹泥墙之间距离为准），残长16.4米。门道内现存遗迹有砖地袱、排叉柱、土垛、包砖面和路土等（图版三，3）。以下仅述与东门道的差异之处。

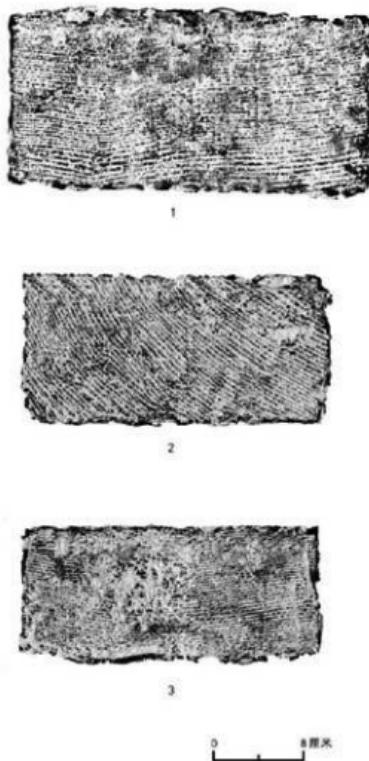
包砖面保存较好，皆为平砖顺砌，没有后期修补迹象。包砖面与门道方向明显不一致，向外撇角度较大，约为6度，呈“八”字形。包砖面东壁残长1.3米，西壁残长1.8米。

土垛修补迹象明显多于东门道，尤其是东壁，土垛下半部多用残砖修补。砖块掺杂在黄土之间，砖墙的高度和垒砌方式各不相同，整体上都较为草率。

门道中间第8、9柱之间的地面上，发现较多朽木，周围出土较多铁钉、铁环等，推测这里可能有木门扉结构。地面上未发现门砧石、将军石等及其残迹。

4. 出土遗物

数量较少，分为建筑材料和生活用品两类。建筑材料有砖、筒瓦和板瓦等，生活用品主



图八 长条砖
1. A型砖 (04CLⅢDM④:8) 2. B型砖 (04CLⅢDM④:9)
3. C型砖 (04CLⅢDM④:10)

25.5、宽15、厚5厘米。这种砖出土数量较少，是门道南端的包砖(图八、3；图版四、3)。

板瓦 无完整或可复原完整者，均为残片。按背面的纹饰，可分为外素里布纹和外绳纹里布纹两型。

A型 外素里布纹。04CLⅢDM⑤:1，泥质灰陶，背面为素面，里面饰布纹，瓦头背面有手指捏压纹，捏压纹较小，且排列紧密。瓦头部分最宽，往下渐窄，内收斜度较大，平面呈梯形。内切较浅。瓦头宽30、厚2厘米(图九：图版四、4)。

B型 外绳纹里布纹。04CLⅢDM④:2，泥质红褐陶，背面饰粗绳纹，局部抹光，里面饰布纹。瓦厚1.5厘米。

要的是陶器，它们都出土于东门道三燕时期的地层之中。

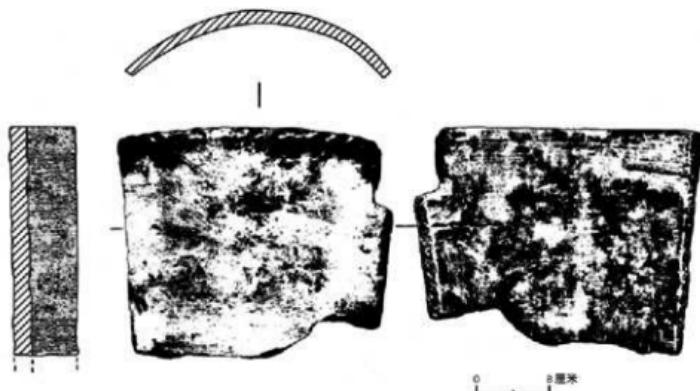
① 建筑材料

砖 出土的都是长方形的条砖，它们主要用于砌筑门道下的砖槽和包砌门道南端内壁。按砖的长度、大小，可分为3型。

A型 规格最大。04CLⅢDM④:8，黄灰色，烧成温度较高，质地坚实。正面饰细绳纹，绳纹较浅，且略带弧线，背面平素。形制不太规整，正面四沿略高起。长32、宽16、厚6.5厘米(图八、1)。门道两侧底部的砖槽全部用这种砖砌筑而成(图版四、1)。

B型 规格居中。04CLⅢDM④:9，青灰色，局部呈蓝色，烧成温度极高，质地格外坚硬。正面饰斜向细绳纹，背面平素。形制也不规整，一端稍宽，另一端略窄，表面起伏不平。长28、宽12.5、厚5.5厘米。门道南端的包砖多用这种砖，形制大小相同，有少数砖正面饰直向细绳纹(图八、2；图版四、2)。

C型 规格最小。04CLⅢDM④:10，黄灰色或红褐色，正面饰细直绳纹，长



图九 A型板瓦

筒瓦 出土数量较少，且均为残片。按瓦的厚薄不同，分为两型。

A型 厚筒瓦 04CLⅢDM④：4，泥质灰陶，背面为素面，里面饰布纹，扣尾长且平直，瓦身较厚，为2.5厘米。

B型 薄筒瓦 04CLⅢDM④：5，泥质红陶，背面为素面，里面饰布纹，瓦身较薄，为1.5厘米。

② 生活用品

主要是陶器，均为残片，包括器物口沿和带纹饰的陶片。

陶罐口沿 04CLⅢDM④：7，泥质，外皮黑色内心红褐色。圆唇，沿部略外叠，短颈。口径11.5厘米。04CLⅢDM④：6，泥质红褐陶，方唇，唇部上沿有浅槽，斜肩，无纹饰。口径10.7厘米。

带纹饰陶片 04CLⅢDM⑤：3，外皮黑色，内为红褐色，泥质，外饰划纹。

5. 各期城址的年代与性质

朝阳古城始建于十六国前燕时期，是按照都城规制设计建造的。城市规格很高。341年，慕容皝派阳裕、唐柱于柳城之北、龙山之西筑龙城，在城内修建宫殿，第二年慕容皝将都城由棘城迁到龙城，345年，修筑新宫“和龙宫”^[2]。350年，慕容儁率军南伐冉魏，迁都蓟城。370年，前燕政权灭亡，前秦在前燕故地设平州，镇和龙，即龙城。385年，前秦昌黎太守宋敞从龙城撤退时，纵火烧毁和龙宫室^[3]，这是龙城第一次遭大规模破坏。386年，慕容垂称帝，史称后燕，定都河北中山，据有幽、冀、平三州。397年，后燕慕容宝在中原被拓

跋魏打得大败，无法立足，将都城重新迁回旧都龙城。慕容熙为后燕皇帝时(401—407年)，荒淫无道，穷奢极欲，在龙城内大兴土木，建弘光门，起承华殿，并在龙城北郊修筑皇家园林——龙腾苑^[4]。436年，北燕灭亡，高句丽军队将龙城抢掠一空，并纵火焚毁了龙城宫殿，大火一旬不灭^[5]，这是龙城第二次遭到大规模破坏。北魏占领辽西地区之后，在龙城废墟上置龙城镇。后龙城又为营州治所^[6]。

考古发掘表明，三燕时期这座城门遗址可分为前燕和后北燕两期。它是三燕龙城的宫城南门，甚至可能就是文献中记载的“弘光门”，分析如下。

第一期门址包括东西墩台、隔墙、三个门道和东西夯土城墙。按照我国古代建筑的等级制度，三门道城门为都城之制，只有都城城门才允许采用三门道规格^[7]。结合朝阳古城的历史，可知朝阳古城仅在前燕、后燕和北燕时期做过都城，称龙城。据此，第一期城门的建造年代可锁定在十六国三燕时期。第一期门址的墩台、隔墙和城墙均为挖槽夯筑，基槽直接打破生土。夯土为纯黄土，极为纯净。这与史料记载的三燕龙城为择地新建之城的记载相符。门址西门道的柱洞内出土一块完整条砖，一面饰细绳纹，另一面为素面，规格为 $32 \times 16 \times 6.5$ 厘米，青砖的长宽，纹饰皆与前燕李廆墓^[8]所用墓砖相同。综上所述，我们推定第一期城门址的年代为前燕时期。

第二期门址保留了三门道的格局，按照城门等级制度，其重建和使用年代应在三燕时期。发掘表明，第二期城门是在旧有门址的基础之上重建而成，墩台、隔墙、门道都留下了大规模重建的痕迹。从东、西门道来看，门道内的砖地袱、排叉柱、土块以及地面都是重新铺设，可见第二期门址在原有基础上进行了彻底翻建，工程浩大。此次大规模的修筑活动可与史料记载的后燕慕容熙在龙城大兴土木相吻合，我们推定第二期城门的重建年代为后燕慕容熙时期，北燕沿用。

三燕时期，这座城门应为龙城宫城南门。试析如下。我国古代城市的布局有其发展演变过程，自曹魏邺城建成以来，开启了以宫城或衙城(官署区)居北，里坊居南的城市布局模式^[9]。龙城始建时间晚于曹魏邺城100多年，其布局无疑受到了曹魏邺城的深刻影响。

20世纪90年代经过考古钻探和发掘，考古工作者证实朝阳北塔周围台基发现的三燕建筑遗址与塔基夯土台基同属一座大型建筑基址，应为三燕龙城和龙宫的宫殿基址^[10]，从而确定了三燕和龙宫的位置。本次发掘的城门遗址位于朝阳古城中部偏北，地处朝阳北塔、南塔之间，在朝阳北塔(即三燕和龙宫宫殿基址)东南约250米处。参考曹魏邺城的布局，这座城门遗址应为三燕龙城宫城的南门。史料记载后燕慕容熙扩建龙城时，“拟邺之凤阳门，作弘光门，累级三层”，也许它就是后燕时期的“弘光门”。2005—2008年，辽宁省文物考古研究所连续在朝阳老城区内开展大规模的考古勘探和发掘，相继发现了宫城墙、北门和北城墙、东门和东城墙等重要遗迹，进一步证实了这一判断。

6. 建筑特点分析

这座城门自前燕始建以后，又历经了五次重建，在历史长河中呈现出六种不同的形制面貌。由于历代破坏和后期不断重修，六个时期的门址只有后燕和金元这两个时期的门道结构保存相对较好。下面着重分析后燕时期城门的特点。

后燕时期城门门道的特点有四：一是门道两端呈喇叭口外敞（其中北端被破坏，推测应与南端相同），这种门道形制为首次发现。二是排叉柱下使用砖地桩作为支撑，为国内各时期城门遗址所仅见。门道下部用砖地桩承柱（砖槽内可能有木地桩）的做法十分独特，可能是慕容鲜卑自己的发明创造。客观评价，砖地桩承排叉柱的做法并不科学，支撑排叉柱顶部巨大重量的仅为砖地桩底部的一块厚约5厘米的青砖，这与柱础石相比，牢固性和稳定性都差很多。发掘证明，砖地桩底部承重的青砖全部断裂，个别地方甚至下陷。三是门道排叉柱间距较大，由密排变为疏排。四是排叉柱南端第一根内倾，为首次发现的考古实例，间接印证了傅熹年先生对唐代重玄门门道结构的复原^[11]。

注

- [1] 田立坤、万维飞、白宝玉：《朝阳老城考古纪略》，《边疆考古研究》，第6辑，科学出版社，2007年。
- [2] 《资治通鉴》卷九六：“咸康七年。春，正月，燕王皝使唐国内史阳裕等筑城于柳城之北、龙山之西，立宗庙、宫阙，命曰龙城。”《晋书》卷109《慕容皝载记》：“使阳裕、唐柱等筑龙城。构官庙，改柳城为龙城县……咸康七年暨迁都龙城……起龙城宫阙……时有黑龙白龙各一见于龙山，皝亲率群寮观之，去龙二百余步，祭以太牢。二龙交首嬉翔，解角而去。皝大悦！还宫赦其境内，号新宫曰和龙，立龙翔佛寺于山上。”
- [3] 《资治通鉴》卷一六〇：“太元十年二月，王永使宋敵燒和龍及虜城宮室，率眾三萬奔塞羌。”《晉書》卷一五《苻丕載記》：“乃遣昌黎太守宋敵燒和龍、虜城宮室，率眾三萬進屯壘羌，遣使招丕。”
- [4] 《晉書》卷一二四《慕容熙載記》：“大筑龍蹻苑，廣袤十餘里，役徒二萬人。起景云山於苑內，基廣五百步，峰高七十丈。又起逍遙宮、甘露殿，連房數百，觀閣相交。凿天河渠，引水入宮。又為其昭仪苻氏鑿曲光海、清涼池……拟鄧之風陽門，作弘光門，累級三層……為苻氏起承華殿，高承光一倍。負土於北門，土於谷價同。”
- [5] 《資治通鑑》卷一二三：“五月乙卯，燕王帥龍城見戶東徙，焚宮殿，火一旬不灭。”《十六國春秋》卷一五《北燕錄》：“五月乙卯，弘率龍城見戶東徙，焚燒宮殿，火一旬不絕。”
- [6] 《魏書》卷一零六《地形志上》：“营州治和龙城。太延二年为镇，真君五年改置。”
- [7] 傅熹年：《中国古代建筑概说》，《傅熹年建筑史论文集》，文物出版社，1998年。
- [8] 辛发、鲁宝林、吴鹏：《锦州前燕李廆墓清理简报》，《文物》，1995年第6期。
- [9] 中国社会科学院考古研究所邺城考古工作队、河北省文物研究所：《河北临漳邺北城遗址勘探发掘简报》，《考古》，1990年第7期。
- [10] 辽宁省文物考古研究所、朝阳市北塔博物馆：《朝阳北塔——考古发掘与维修工程报告》，文物出版社，2007年。
- [11] 傅熹年：《唐长安大明宫玄武门及重玄门复原研究》，《傅熹年建筑史论文集》，文物出版社，1998年。



1. 西城墙前燕夯土



2. 前燕门道柱洞



3. 柱洞

图版一



1. 东门道全景



2. 砖地



3. 排叉柱



4. 土块



1. 东门道东壁包砖

2. 东门道地面



3. 西门道全景



图版三



1. 后燕砖槽用砖



2. 后燕门道南墙包砖 1



3. 后燕门道南墙包砖 2



4. 板瓦

三燕龍城宮城南門遺跡およびその建築の特色

万雄飛

朝陽古城は遼寧省朝陽市内に位置する。十六国の前燕が造営を始めてから明代初期に廃棄されるまでの千余年の間、朝陽古城は一貫して東北地区の中心都市であり、重要な歴史的・考古学的価値を有している。文献記載にもとづき朝陽市内およびその近郊の考古資料を総合的に判断すると、現在の朝陽市東部の南塔、北塔、佑順寺、閻帝廟を中心とする老城区は朝陽古城の所在地であった。しかし現代の市街と重なっているために、朝陽古城の城門、城壁、城内の大型建物基壇、街道などの考古遺跡の発見例は非常に少なく、このため朝陽古城の正確な範囲、城内のプラン、およびその都市の発展と変遷過程は不明であった。

2003年、遼寧省朝陽市の党委員会と朝陽市政府は老城区北大街およびその周辺に対して大規模な建物取り壊しと再開発を行った。この機会を利用して、遼寧省文物考古研究所は直ちに専門の考古隊を組織し、朝陽市北大街改造指揮部および関係部門の強力な支持を得て、積極的に試掘調査を展開し、その成果をもとに重点区域を選び、発掘調査を実施した。野外での発掘調査は2003年7月に開始し、2008年10月に終了した。十六国期から清代に至る遺跡を10ヶ所以上発見し、各時期の遺物が数千件出土し、著しい成果を挙げた⁽¹⁾。この数年間にわたる考古学調査のもっとも重要な収穫の1つが、三燕の龍城宮城南門遺跡を発見し発掘したことである。

この遺跡は朝陽市双塔区北大街と營州路の交差地点（俗稱：大什字）の東北220mの所にあり、東側は北大街に近接し、南側は營州路から約200mの地点に位置する（図一）。発掘の結果、明らかとなったのは、この城門は十六国の前燕期に初めて建設され、後燕、北魏、唐、遼、金元の5時期の相次ぐ改築を経て、明代初期に徹底的に廃棄されるまで、千年継続して使用されたことである。この遺跡の前燕と後燕両時期の門址の発掘状況を以下に紹介する。

1. 土層堆積

この城門が使用された期間は長く、土層の堆積はやや複雑である。ここでは遺跡南壁の土層断面、西城壁南北方向の土層断面と東墩台の南北方向の土層断面を例とし、遺跡の土層堆積状況を紹介する。

① 遺跡南壁断面図（図二）

第1層：清代および近現代の堆積層。厚さ約2.5m。2層に細分することができる。

1a層：近現代層。厚さ約2.1m。土質はかなり粗く、遺跡内に普遍的に堆積する。石塊、赤色の磚、石灰塊、石炭屑などを含む。

1b層：清代路面と文化層。深さ2.5mにあり、厚さ約0.4m。路面は石灰を採石に混ぜたものを用いて舗装し、表面は平らで、その上は灰黄色土が堆積する。

第2層：金元代文化層。深さ約3.4mにあり、厚さ約1.2m。2層に細分される。

2a層：金元代文化層。灰黒色を呈し、厚さ約0.9m。この層の下から1条の南北方向の道路遺構を発見した。路面は小砾、瓦片、瓷器片で舗装し、路面は幅約6m、城門址中央の門道とつながる。道路土中から青瓷片、粗雑な白瓷片が出土し、路面より上の堆積層で陶片、瓷器片、瓦片等が出土した。

2b層：道路土堆積層。灰褐色を呈し、厚さ約0.2~0.5m。粗雑な白瓷片、黄釉・緑釉瓷碗の底部片、黒陶卷沿盆の口縁部片、粘土貼り付けで装飾した黄褐陶片などを含む。

「大定通宝」と「大觀通宝」各1点、さらに骨製簪の一部、動物頭部の瓷器が出土した。

第3層：遼代文化層。深さ約4.8mにあり、厚さ約1.3m。3層に細分され、各層の下にいずれも道路土がある。

3a層：淡灰色。厚さ0.35~0.5m。白瓷の底部、黄釉瓷碗の口縁部片、灰陶卷沿盆、布目瓦、瓦当などを含み、さらに鐵製錫先1点、「政和通宝」銭1点が出土した。

3b層：灰褐土。厚さ0.45~0.55m。白瓷の底部、白瓷碗の口縁部片、卷沿陶罐の口縁部片、展沿盆の口縁部片などを含み、あわせて比較的多くの動物骨片を含む。

3c層：道路土堆積層。厚さ0.3~0.4m。上半部は路面で、灰黒色を呈し、厚さ約0.1~0.2m。下半部は人工的に敷いた路床で、厚さ0.2~0.3m。路床は比較的規律よく並べた磚片で舗装し、その中には大量の焼土が混じる。磚片はいずれも長く直線的な縦タタキ痕を残す。形は比較的一定の規格にそろい、唐代の墩台を外装する磚と同一である。唐代の倒壊堆積層であろう。

第4層：唐代道路土層。深さ5.1~5.3mにあり、厚さ0.2~0.35m。2層に細分され、両層の間には厚さ0.04mの堆積砂層がある。

4a層：道路土堆積層。黒褐色。厚さ約0.05m。

4b層：道路土堆積層。黄褐色で、やや多くの炭粒が混じり、厚さ0.15~0.3m。布目瓦、灰陶片などを含む。

第5層：北魏代の道路土層。深さ約5.6mにあり、厚さ0.25~0.3m。2層に細分でき、上層は黄灰色を呈し、厚さ約0.1m、下層は黒褐色を呈し、厚さ約0.2m。灰陶の底部、灰陶の胴部片、平瓦を含む。

第6層：三燕期文化層。深さ約6.2mにあり、厚さ0.6~0.8m。堆積泥層と堆積砂層が交互に重なり、堆積土中に瓦片と陶片を少量含む。

② 西城壁の南北方向土層断面（図三）

第1層：清代および近現代堆積層。厚さ2.5m。上層は近現代の堆積で遺跡内に普遍的に堆積する。土質はきわめて粗く、石塊、赤色の磚、石灰塊、石炭屑などを含む。下層は清代文化層で、厚さ0.4m、清代の青花片などを含む。

第2層：金元代版築土。深さ約4mにあり、厚さ1~1.6m。灰黄色を呈する、大変しまりのない土。版築層は不明瞭で、炭粒、焼土塊、陶片などを含む。金元代の版築土は城壁北側において比較的明瞭で、前燕期の黄色版築土に接し、外部は磚石で包まれる。

第3層：金元代文化層。深さ約4.6mにあり、厚さ0.5~2m。灰黄色を呈する、きわめてしまりがない軟質土で、炭粒、陶片、瓷器片、布目瓦片などを含む。

第4層：遼代文化層。深さ約5mにあり、厚さ0.3~0.5m。灰褐色を呈する、きわめてしまりがない軟質土で、炭粒、陶片、瓦片などを含む。

第5層：唐代文化層。深さ約5.3mにあり、厚さ0.2~0.6m。灰黒色を呈する、しまりがない軟質土で、陶片、瓦片などを含む。

第6層：唐代版築土。深さ6.7mにあり、厚さ1.5~3m。堅固にしまった黄褐色土で、炭粒、木屑と少量の瓦片を比較的多く含む。版築層と搗棒の穴がともに非常に明瞭で、版築層の厚さは約0.1m、搗棒の穴は円形で、直径4cmである。唐代に城壁を厚く拡張しており、前燕代城壁の南側に増補を行っているが、北側にはその形跡がない。補充して塗いた版築土底部には掘込地業のための坑を掘っており、穴上面の幅は約4.2m、下面幅は3.7m、深さ1.7mである。掘込地業の穴は前燕代の版築土を壊している。地上部分は前燕の版築壁に接着しており、両者は分断されることなく密着しており、唐代城壁地上部分の残存高は2.4mに達する。

第7層：三燕から隋代の文化層。深さ7mにあり、厚さ1~1.5m。淡灰色を呈し、陶片と瓦片等を含む。

第8層：前燕の版築土。深さ7mにあり、厚さ0.6~5m。しまりの強い黄色土で、ごく少量の炭粒と瓦片を含む。版築層と搗棒の穴はともに非常に明瞭で、版築層の厚さは約0.1m、搗棒の穴は円形で、直径約3cm。前燕代の版築城壁の地下部には掘込地業の坑があり、坑上面の幅は11m、深さ約2.5m。城壁地上部分の幅は約4.5~9.5m、残存高約2m。前燕代の版築城壁は地山層を直接掘り込んで築かれている。

③ 東墩台の南北方向土層断面（図四）

第1層：金代版築土。厚さ1~1.6m。ややしまりがない浅黄色土で、版築層は不明瞭である。炭粒、焼土塊、陶片などを含む。金代版築土は墩台のもっとも外側にあり、墩台

の外周を補って築き、唐代の黄褐色版築土に接着している。外部は磚と石でおおわれている。

第2層：唐代版築土。厚さ約4m。黄褐色で、土質は堅固にしまり、やや多くの炭粒、木屑、少量の瓦破片を含む。版築層と捣棒の穴はともに非常に明瞭で、版築層の厚さは約0.1m。捣棒の穴は円形で、直径約3cm。唐代に墩台の南北両端に大規模な増築をおこない、墩台を大きくしている。増築時の地上部分は三燕期の版築土に接着し、地下部分は地業の坑を掘って版築しており、その深さは約1.6mである。

第3層：後燕代版築土。厚さ1~1.9m。比較的しまりのある黄灰色土で、炭粒、焼土粒、少量の瓦片を含み、版築層は不明瞭である。後燕の時期にわずかに前燕基壇の南北両端に増補を行って墩台を長くするが、唐代の増築版築土に壊されている。後燕期に増築した版築土は地上部分に限られ、地下に基礎はない。

第4層：前燕代版築土。厚さ約3m。しまりの強い黄色土で、ごく少量の炭粒と瓦片を含む。版築層と捣棒の穴はともに非常に明瞭で、版築層の厚さは約0.1m、捣棒の穴は円形で、直径約3cm。前燕代の版築土の地下部分には掘込地業の坑を掘り、幅約12.5m、深さ約1.6mである。地上部分の幅は約11m。前燕代の版築土は地山を直接掘り込んで築かれている。

2. 前燕期の城門遺構

前燕期にこの城門は初めて築かれたが、後代の相次ぐ補修と再建により、前燕創建の門址は後代に補修された何層もの版築土によって覆われている。発掘時には、後世の比較的良く保存されている遺構を残すために前燕期の城門遺構のすべてを露出させなかつたが、主として東門道と西門道の発掘、および西城壁の調査から、前燕門址の構造を明らかにした。

前燕門址は南北方位で、方位は約220°、東・中・西の計3条の門道があり、それらの間に2つの版築隔牆が築かれている。東門道と西門道の規格と構造は同じで、左右対称をなす。中門道は後代の門道の下層にあり、状況は不明である。東門道と西門道の両側はそれぞれ東西方向にのびる版築城壁に連接している。

(1) 墩台、隔牆、城壁

墩台と隔牆と城壁はいずれも黄土版築によって築かれている。黄土は混じりがなく包含物が極めて少なく、土は堅固である。版築層は均質かつ明瞭であり、各層の厚さは8~10cmである(図版一、1)。墩台と隔牆の地上部分は壊され後代の再建により、本来の南北長は不明である。墩台は壊された後に両側の城壁と基本的に一体となっており、区別が難

しい。墩台は残存長約8m、残存高2.4mである。隔牆の平面形は長方形で、残存長約8m、残存高2.4mである。城壁の南北残存幅はもっとも広くて9m、残存高は3mである。版築城壁は両側へ向かってのびており、露出させた東城壁の長さは約50m、西城壁の長さは約10mである。

墩台と隔牆と城壁の底にはいずれも地業のための坑が掘られている。幅は基本的に同じで、墩台と隔牆箇所を特別に幅広くしていない。掘込地業の坑の断面は逆台形を呈し、上口幅は約12mである。門道箇所の掘り込みの深さは約1.2m、城壁箇所の深さは約2.5mである。地業の坑は地山土を直接掘り込んでいる。

(2) 門道

東門道と西門道を発掘した。両者は基本的に対称である。中門道は未発掘である。重点的に東門道を調査したので、以下、東門道を例として紹介する。

東門道の幅は約4.5m、長さ12m（底部基礎で計算）である。門道内の木造構造および柱礎石等の建築部材はすでに跡形もなく残存しておらず、ただ抜け殻状に空間のみをとめている。空間の両壁と地面はともに混じりのない黄土版築で、版築壁と地面上には多くの場所に鍛などの工具痕が残っていた。版築壁の壁面は比較的平坦に整い、やや傾斜している。版築土の上面には起伏があり平らではなく、総体的に北が高く南が低い。以上の形跡から、前燕期の門道の内部施設は後燕の再建時に徹底的に破壊されたものと推測される。

門道内の地面上で2列の柱穴列を発見した。それらは門道方向に列をなし、各列6基、合計12基が並ぶ（図版一-2）。両列の間の距離は2.5m（両柱心々間の距離。以下同じ）で、同一列の隣り合う柱との間の距離は約1.9mである。柱穴の大半は平面長方形で、長さ0.5～0.6m、幅0.4m、ごく一部が円形で直径は0.4mである。柱穴の現存する深度は地面の高さが同一ではないため北部がもっとも深く0.8m、南部がもっとも浅く0.4mである。柱穴内壁は垂直に立ち上がり、壁面は平坦で、あるものは幅の狭い溝状の工具痕がみられる。柱穴底部は比較的平坦で、礎石あるいは瓦磚を底に敷いていない。埋土はしまりがなく、木屑を含まず、少量の瓦磚が出土した。これら柱穴底部は基本的に同一面上にあり、地山を掘り込むにはいたっていない。

柱穴精査時にある現象があきらかになった。すなわち、柱穴口の一辺あるいは一角の多数が人によって破壊されており、鍛などの工具痕が残っていた（図版一-3）。柱を持ち去るために、故意に一辺あるいは一角を掘ったようである。東西両列の柱穴間の距離はわずか2.5mで、門道の幅としてはあきらかに狭すぎる。柱穴底部には礎石がなく、荷重に耐えられない。以上から推測して、これらの柱穴はおそらく門道施工時の足場穴であろう。

3. 後燕期の城門遺構

後燕期に前燕代の門址の基礎上に改築と拡張を行っている。工事の内容は主に墩台と門道に対する修復と再建で、城壁部分は改変することなく既存の城壁を引き続き使用した。後燕再建後の門址はやはり3条の門道であり、門道の位置も変わらないが、方位はやや調整されて 215° である。東西両門道を発掘調査し、中門道は未発掘である。北燕はこの時期の門址を引き続き使用した。

(1) 墩台と隔牆

本来あった墩台が破壊されたために、再建時に墩台の南北両側で比較的大規模な増築補修が行われている。再建後の墩台の南北長は、両側城壁の厚さよりも長さがある。修繕は地表よりも上部に限られ、地下の基礎部分には変化がない。後補の版築土は灰黄色を呈し、土質は比較的粗雑で、かなり多くの炭と焼土粒を包含し、比較的しまりがない。

後燕修繕後の東西墩台は後代に破壊されたために南北長は不明で、現存する部分は最長約16mである。東墩台の南部に対して調査をおこない、後燕が修築した東部墩台の幅は約4mと判明した。

2列の隔牆の平面形は長方形を呈する。南北両端は破壊され、長さは不明である。中門道は後代にも継続して使用され続けたために何度も改築され、東隔牆の西側と西隔牆の東側はともに一定程度の破壊を受けていた。隔牆と門道の幅は均しく4mと推測される。

(2) 門道

後燕期は三門道の構造を踏襲している。中門道は後代の門址の度重なる改築により状況が不明である。東門道と西門道は北魏期に塞がれ、そのため比較的完全に近いかたちで保存された。私たちは東門道と西門道に対して発掘を実施した。それらは左右対称であり、規格と構造は基本的に同じで、方位は 215° である。後燕の再建時にこの2条の門道に対して徹底的な改築を行っており、門道の地面を平坦に整えて舗装しただけでなく、門道の両壁に対して手を加えており、あわせてすべての門道施設を建設した。墩台の南北長が増し、門道の奥行もまたこれにしたがって長くなった。

① 東門道

門道は梁を渡した木造構造である。東西両壁に排叉柱（門道両側の壁に沿って一定間隔で立てた柱）を立て、排叉柱の下は磚地覆で支えている。排叉柱の間は磚と黄土を積んだ土塼（排叉柱と排叉柱の間を埋める土塼で、現在は柱が腐りなくなっているため突出している部分を指す）で、土塼の外表面は泥を塗っている。門道の南半部は基本的に完全に保存されてお

り、南端壁面は青灰色の磚を積んで覆う。北端は破壊されている。門道の幅は4m（泥塗りした両壁の間の距離で計算）、残存長は15.4mである。門道内に保存されていた遺構には、磚地覆（磚槽）、排叉柱、土塼、磚外装面、道路土などがある（図五、図版二-1）。

磚地覆は門道両側壁の底部にあり、溝状で、門道の方向に沿って左右に各1列を設ける（図版二-2）。磚地覆は排叉柱を支えるためのもので、柱礎石に当たる。その構造は以下の通りである。底部は門道の方向に沿って一列の磚を横置きして底とし、底磚上両側にそれぞれ1個の磚を立て、1本の断面が長方形を呈する磚槽を作る。底磚の外側にはさらに1列の磚を斜めに立てかけて立磚の外側を支え、立磚が外に移動するのを防ぐ働きをする（図六）。磚槽内の幅は0.26m、槽内はいすれも木屑と朽ちた板の痕跡があり、磚槽内にはおそらく木地覆があったと推測される。磚槽の底磚は磚の重みのために排叉柱を支えた箇所で磚面が往々にしてやや下に沈んでおり、ある底磚は完全に砕けていた。

排叉柱は磚地覆の上に立ち、東西両側に各1列があり、左右対称で、それらは土塼中に固定され、門道頂部を支える働きをしていた（図版二-3）。排叉柱の多くは腐朽するが、木質の残存を確認することができる。腐朽後に残った痕跡の観察から、排叉柱の断面は方形に近く、一辺の長さは約0.25mである。門道北部が破壊されているため、排叉柱の本来の数量は不明だが、東壁には13本が残存し、西壁には12本が残存する。東壁には南から第1柱から第13柱までが残っており、このうち第1柱と第2柱の間の距離は1.3m（以下、両柱心々間の距離）、第2柱と第3柱間の距離は0.8m、その他の間の距離は約1mである。東壁は南から第1柱がやや北向きに傾いており、傾斜角は約15°である。第2柱もまたやや北に傾くが角度はそれほどなく、その他はみな垂直である。西壁には南から第2柱から第13柱までが残り、第2柱と第3柱の間の距離は0.8mで、その他の柱の間隔は約1mである。西壁の南から第1本目の柱は後代の修築時に破壊されており、第2柱もまた後代補われた磚によって覆い包まれている。

排叉柱の間は土塼で隔てられ、土塼は版築壁に接着しており、底部は磚地覆の上にのつておらず、外壁は薬を混ぜた泥を塗っている（図版二-4）。土塼は排叉柱と底部の磚地覆を保護する働きをしていた。土塼外側の泥を塗った面は底部の磚地覆外側の立磚と描い、磚地覆と排叉柱は完全に泥壁内に埋め殺されている。このため排叉柱はすべて暗柱である。東壁土塼の厚さは約0.6m、西壁土塼の厚さは約0.3mである。東壁土塼は版築壁と完全に接着しておらず、小さな裂隙がある。土塼は黄灰色土を搾き固めて作っており、炭粒と焼土粒を含む。いくつか特殊な構造のものがあり、例えば西壁第11・12柱の間の土塼はすべて日干し磚で築いており、東壁第7・8柱の間の土塼は下部に破損した平瓦を一段積み、高さ約0.6mの瓦壁とする。これらの部分はおそらく後世に補修した際に造成されたものだろう。

磚で包む磚外装面は門道両壁の南端にあり、強度を高めるとともに、美しくみせる効果があった。門道北部にも対称的に磚外装面を設置したと推測されるが、現在はすでに破壊されている。東壁の磚外装面の保存状況は比較的良好で、残存長1.7m、残存高2m、厚さ0.6mである。内外両層に分かれ、内層は比較的難に染かれており、外層は互い違いに積み、比較的整った美しい外観である。磚外装は南から第1本目の排叉柱に隣り合い、隣り合った部分は上から下まで北向きに傾斜する形状に積まれており、排叉柱の位置をとどめている（図版三-1）。磚外装の下にも予め設置された磚地覆がある。注意すべきは、磚外装の部分は門道の方向と完全には一致せず、約2°やや外に向かってふれています。西壁磚外装面の残存長は3.4m、残存高は1.2m、厚さは0.3mである。内外両層はともに磚を斜めに立てて積み、外側は9層が残存し、第1～6層は北に向かって傾斜し、第7層は南向きに傾斜し、以上の各層は交錯している。磚外装の下にはあらかじめ設置された磚地覆があり、方向は門道と一致する。西壁磚外装面は東壁側より門道内側に約1.7m長くのび、積み方も東側とは異なっており、後代の修築造成によるものと思われる。

門道内の道路土は明瞭で、土質は堅固で、厚さは約0.2m、道路土表面には1層の木炭灰層があり、火に焼けた痕跡が明瞭である（図版三-2）。道路土の下には2層の人工的な敷土がある。最下層は灰黒色で搗き固められており、搗棒の穴は明瞭である。大量の木炭灰と少量の瓦片を含み、厚さは0.2～0.3mである。その上は灰褐色層で、同様に搗き固められて、炭粒と焼土粒と少量の瓦片が混ざる。両側が高くて中央が低く、両側は磚地覆の磚槽外側の立磚を埋めており、厚さ0.15～0.3mである。道路土の上は後世の倒壊による堆積層で、比較的多くの磚片と瓦片を含み、厚さ約0.4～1.5mである（図七）。

② 西門道

平面形と構造は東門道と基本的に同じであるが、部分的に異なる。西門道の幅は4m（泥塗りした両壁間の距離）、残存長は16.4mである。門道内に現存する遺構には、磚築地覆、排叉柱、土塼、磚外装面、道路土がある（図版三-3）。以下、東門道との相違点のみを記述する。

磚外装面は比較的よく保存されており、平らな磚のみを積み、後世の補修痕跡がない。磚外装面は門道の向きとあきらかに一致せず、約6°外側にやや大きくふれ、「八」の字形を呈する。磚外装東壁の残存長は1.3m、西壁の残存長は1.8mである。

土塼の補修痕はあきらかに東門道より多く、とりわけ東壁は土塼下半部の多くが磚残片で補修されている。磚残片が黄土の間に混じり、磚壁の高さと積み方はそれぞれ異なる。全体的に総じて粗雑なつくりである。

門道中間の第8・9柱の間の地面上で比較的多くの朽木が発見され、周囲からはやや多くの鉄釘や鉄環等が出土した。ここにおそらく木製門扉構造があったと推測される。地面

上では門砧石（門扉の軸を受ける石）や將軍石（両開き門扉の合わせ目下に埋められ、門落とし等で固定する働きをもつ石）等、およびその痕跡は発見されていない。

4. 出土遺物

数量は比較的少なく、建築部材と生活用品の2種類に分かれる。建築部材には磚、丸瓦、平瓦などがあり、生活用品は主に土器で、それらはすべて東門道の三燕期の地層中から出土した。

(1) 建築部材

磚 出土したのはいずれも長方形の磚で、それらは主に門道下の磚槽や門道の南端内壁を覆う磚として用いられていたものである。磚の長さと大きさによって、3型式に分けることができる。

A型 規格が最大のもの。04CLⅢDM④：8は黄灰色、焼成温度が比較的高く、固く丈夫である。正面には細い縄タタキ痕が残る。縄タタキ痕は比較的浅くかつやや弧線となり、背面はそのままで縄タタキ痕がない。作りはさほど規格性がなく、正面四辺はやや高く上がる。長さ32cm、幅16cm、厚さ6.5cm（図八-1）。門道の両側底部の磚槽はすべてこの種の磚を用いて築いている（図版四-1）。

B型 規格が中位のもの。04CLⅢDM④：9は青灰色で、一部が蓝色を呈し、焼成温度はきわめて高く、ことのほか硬く丈夫である。正面には斜方向の細い縄タタキ痕が残り、背面はそのまま縄タタキ痕がない。作りも整っておらず、一端はやや幅広く、別の端はやや幅が狭く、表面は凹凸があり平らではない。長さ28cm、幅12.4cm、厚さ5.5cm。門道南端を覆う外装磚にはこの種の磚を多く用いている。形とサイズは同じだが、正面に直線の細い縄タタキ痕を残す磚が少数ある（図八-2、図版四-2）。

C型 規格が最小のもの。04CLⅢDM④：10は黄灰色あるいは赤褐色、正面に直線の細い縄タタキ痕を残す。長さ25.5cm、幅15cm、厚さ5cm。この種の磚の出土数量は非常に少なく、門道南端の外装磚に用いられた（図八-3、写真四-3）。

平瓦 完形あるいは完形に復元できるものがなく、すべて破片である。凸面の調整痕によって、凸面に縄タタキ痕がなく、凹面に布目痕を残すものと、凸面に縄タタキ痕があり、凹面に布目痕を残す2型式がある。

A型 凸面に縄タタキ痕がなく、凹面に布目痕を残すもの。04CLⅢDM⑤：1は泥質灰陶、凸面は縄タタキ痕がなく、凹面は布目痕が残る。瓦当凸面側には、比較的小小さく、かつ密に並んだ指頭圧痕がみられる。瓦当部分がもっとも幅広く、反対側に行くにしたがって次第に幅が狭くなり、内取する弧度も強くなり、平面は台形を呈する。横断の湾曲は比

較的弱い。瓦当は幅30cm、厚さ2cm（図九、図版四-4）。

B型 凸面に繩タタキ痕、凹面に布目痕を残す。04CLⅢDM④：2は泥質紅褐陶、凸面には粗い繩タタキ痕が残り、一部は平らになられ、凹面には布目痕が残る。厚さ1.5cm。

丸瓦 出土数量が比較的少なく、かついずれも破片である。瓦の厚さによって、2型式に分けられる。

A型 厚い丸瓦。04CLⅢDM④：4は泥質灰陶、凸面にタタキ痕はなく、凹面には布目痕を残す。玉縁部は長くかつ平坦で、瓦はやや厚く、2.5cmである。

B型 薄い丸瓦。04CLⅢDM④：5は泥質紅陶、凸面に繩タタキ痕がなく、凹面には布目痕を残す。瓦はやや薄く、1.5cmである。

（2）生活用品

主に土器で、いずれも破片である。口縁部と文様のある陶片を含む。

陶罐口縁部 04CLⅢDM④：7は泥質、外面は黒色で、内面は赤褐色を呈する。口縁端部は丸くおさめ、口縁部はやや外に開き、頸は短い。口径11.5cm。04CLⅢDM④：6は泥質紅褐陶。口縁端部は面を有し、口縁端部上に浅い溝がめぐる。肩部は斜肩で無文である。口径10.7cm。

文様のある土器片 04CLⅢDM⑤：3は外面が黒色、内面は赤褐色を呈する。泥質、外面に文様を刻んでいる。

5. 各期城址の年代と性質

朝陽古城は十六国前燕期に創建され、創建にあたっては都城の規格に照らして設計・造営されており、城の規格は非常に高い。341年に前燕の慕容皝は陽裕と唐柱を柳城の北に遣し、龍山の西に龍城を築き、城内に宮殿を造営した。翌年、慕容皝は都を韓城から龍城に遷し、345年に新たな宮殿「和龍宮」を造営した⁽³⁾。350年、慕容儕は軍を率いて南の冉魏を討ち、薊城に遷都した。370年に前燕政権が滅亡すると、前秦は前燕故地に平州を設け、和龍、すなわち龍城を鎮圧した。385年、前秦の昌黎太守宋敷が龍城から撤退する際に火を放つて和龍の宮室を焼いた⁽³⁾。これが龍城最初の大規模な破壊である。386年に慕容垂が帝を称した。これは歴史上後燕と呼ばれるが、後燕は河北中山を都と定め、幽州、冀州、平州の3州を占めた。397年、慕容宝が中原で北魏に大敗すると拠点を失い、都を再び新たに旧都龍城に遷した。慕容熙は在位中（401～407年）、淫乱無道で奢侈の限りを尽くした。龍城内で大いに土木工事を興し、弘光門を建て、承華殿を造営し、さらに龍城北郊に皇室の園林・龍勝苑⁽⁴⁾を造営した。436年に北燕が滅亡すると、高句麗軍が龍城を略奪し尽くし、加えて火を放つて龍城の宮殿を焼き、大火は十日の間消えなかつた⁽⁵⁾。

これが龍城第2回の大規模破壊である。北魏は遼西地区を占領したのち龍城廃墟の上に龍城鎮を置き、のちに龍城は再び、營州の治所となった⁽⁶⁾。

考古学的発掘調査からあきらかとなったのは、三燕期のこの城門址は前燕と後・北燕の両期に分かれ、これは三燕龍城の宮城南門であり、さらには文献中に記載された「弘光門」である可能性があることである。分析は以下の通りである。

第1期門址は、東西墩台、隔牆、3条の門道、東西版築城壁をもつ。我が国の古代建築の等級制度に照らすと、三門道城門は都城の制で、都城城壁のみが三門道規格の使用が許される⁽⁷⁾。朝陽古城の歴史に照らし合わせると、朝陽古城は前燕、後燕、北燕期にのみ都城となり、龍城と称された。このため第1期城門の築造年代は十六国の中燕期と確定できる。第1期門址の墩台、隔牆、城壁はいずれも地業の坑を掘って版築しており、地業の坑は直に地山を掘り込んでいる。版築土は純黄土で、極めて純度が高い。これは史料にみられる、三燕龍城が選地新造された都であるという記載と符合する。門址西門道の柱穴内で1点の完形の磚が出土した。一方の面は細い繩タタキ痕が残り、別の一面はタタキ痕が残らない。大きさは32×16×6.5cmである。青灰色を呈し、大きさ、文様ともに前燕李廆墓⁽⁸⁾で使用されている磚と同じである。以上より第1期門址の年代は前燕期であると推定した。

第2期門址は三門道の構造をとどめている。城門の等級制度から、その再建・使用年代は中燕期であろう。発掘では、第2期門址は旧門址の基礎の上に再建されており、墩台、隔牆、門道はいずれも大規模に再建された形跡が確認された。東門道と西門道からみて、門道内の磚地覆、排叉柱、土塹および地表面はいずれも重複してあらたに敷設したものである。第2期門址の造営は元よりあった基礎の上に完全に再建された大規模工事であったことが判明した。この大規模な建設活動は史料が記載する後燕慕容熙が龍城で大いに土木を興したことと符合する。第2期城門の再建年代は後燕慕容熙期であり、北燕はそれを引き継ぎ使用したと推定する。

三燕期において、この城門は龍城宮城の南門であったに違いない。以下考察すると、我が国における古代城市的配置プランにはその変遷があり、曹魏鄆城の造営以降、宮城あるいは衙城（官衙区）を北に、里坊を南に置いた都市モデルが創設された⁽⁹⁾。龍城の創建年代は曹魏鄆城より100年以上遅く、その配置プランは疑いなく曹魏鄆城の深い影響を受けている。

1990年代にボーリング探査と発掘を通じて、考古学者は朝陽北塔周囲基壇で発見された三燕建築遺構が塔版築基壇と同じ大型建築の基壇であることを証明した。これは三燕龍城和龍宮の宮殿基壇であるに違なく⁽¹⁰⁾、これによって三燕和龍宮の位置が確定した。今回発掘した城門址は朝陽古城の中央部北寄りに位置し、朝陽北塔と南塔の中間にあり、朝

陽北塔（すなわち三燕和龍宮宮殿基壇）の東南約250mの所にある。曹魏鄆城の配置構造を参考にすると、この城門址は三燕龍城宮城の南門であろう。史料は後燕慕容熙が龍城を拡張した時、「鄆の鳳陽門に擬え、弘光門を作り、累級三層」と記載するが、あるいはこれが後燕期の「弘光門」なのかもしれない。2005～2008年に遼寧省文物考古研究所は朝陽老城区内で大規模な地下探査と発掘を展開し、相次いで宮城城壁、北門と北城壁、東門と東城壁などの重要な遺跡を発見し、その性格をさらに実証した。

6. 建築的特徴の分析

この城門は前燕に創建されて以降、5回の再建を経ており、長い歴史の中で6種の異なる姿を見せた。歴代の破壊と後代の不斷の修築によって、6つの時期の門址は後燕と金元というこの2時期の門道構造のみが相対的に比較的良く保存されている。以下、再度後燕期の城門の特徴を分析する。

後燕期の城門門道の特徴は4つある。1つ目は、門道両端はラッパ状に外に開いており（このうち北端は破壊されているが、南端と同様であったと推測）、このような門道形態は初めての発見である。2つ目に、排叉柱の下に磚築地覆を使用して柱を支えており、これは中國国内各時期の城門遺跡では稀な例である。門道下部に磚地覆を使用して柱を受ける（地覆磚槽内にはおそらく木地覆があった）という方法はかなり独特で、おそらく慕容鮮卑自身の創意発明であろう。客観的評価としては、磚築地覆が排叉柱を承ける構造法は科学的でなく、排叉柱頂部の巨大な重量を支えたのはわずかに磚地覆底部の1点の厚さ5cmの青灰色磚で、これは柱礎石に比べて堅牢性・安定性ともに大いに劣っている。発掘が証明するように、磚地覆底部の重さを受けた青灰色磚はすべて亀裂があり、顯著な場合には各場所で下方に落ち窟みがみられた。3つ目に、門道排叉柱の間隔が比較的広く、密な間隔から広い間隔へと変わっている。4つ目に、排叉柱南端の第1本目が内傾しており、これは初めて発見された発掘実例であり、間接的に傅熹年先生の唐代重玄門の門道構造の復元を証明した⁽¹¹⁾。

註

- 田立坤・万雄飛・白宝玉「朝陽老城考古紀略」「辺疆考古研究」第6輯、科学出版社、2007年。
- 『資治通鑑』卷96「成光七年。春、正月、燕王皝、唐国内史陽裕等をして柳城の北に城を築かしめ、龍山の西に宗廟、宮闈を立て、命して龍城と曰う」。『晉書』卷109巻、慕容皝載記「陽裕、唐柱等をして龍城を築かしめ、宮廟を構え、柳城を改め龍城県と為す。……成康七年、皝、都を龍城に遷す。……龍城の宮闈を起こす。……時有りて黒龍白龍各一龍山に見れ、號、親ら群寮を率いて之を觀、龍を去ること二百余歩、太牢を以て祭る。二龍、文首嬉翔し、解角面して去る。號、大いに悅ぶ。宮に還りて其の境内を敷し、新宮を号して和龍と曰い。龍翔仏寺を山上に立てる」。
- 『資治通鑑』卷160「太元十年二月、王永、宋敏をして和龍及び荷城宮城を燒かしめ、衆三万を率い

て壇間に弁る』。『晉書』卷1151、苻丕載記「乃ち昌黎太守宋敷をして和龍、薊城の宮城を焚焼せしめ、衆三万を率いて壇間に進也し、使を遣し丕を招く」。

- (4) 『晉書』卷124、慕容熙載記「大いに寵勝苑を築き、広袤十余里、役徒二万人。景雲山を苑内に起こし、基広五百歩、峰高十七丈。また造道宮、甘露殿を起こし、連房数百、觀閣相交わる。天河渠を鑿ち、水を引きて宮に入る。また其の昭儀苻氏の為に曲光海、清涼池を鑿つ。……鄆の鳳陽門に擬え、弘光門を作り、累級三層。……苻氏の為に承華殿を起こし、高きこと光一倍を承く。土を北門に負えば、土、穀に価同じ」。
- (5) 『資治通鑑』卷123「五月、乙卯、燕王、龍城を帥いて戸の東徙するを見、宮殿を焚き、火一句滅せず」。『十六国春秋』卷15、北燕錄「五月、乙卯、弘、龍城を率いて東徙するを見。宮殿を焚燒し、火一句絶えず」。
- (6) 『魏書』卷106上、地形志上「營州、和龍城に治す。太延二年、鎮たり。真君五年、置を改む」。
- (7) 傅熹年「中国古代建築概論」「傅熹年建築史論文集」文物出版社、1998年。
- (8) 辛発・魯宝林・呉鵬「錦州前燕李廆墓清理簡報」「文物」1995年第6期。
- (9) 中国社会科学院考古研究所都城考古工作隊・河北省文物考古研究所「河北臨漳郡北城遺址勘探發掘簡報」「考古」1990年第7期。
- (10) 遼寧省文物考古研究所・朝陽市北塔博物館「朝陽北塔－考古發掘與維修工程報告」文物出版社、2007年。
- (11) 傅熹年「唐大明宮玄武門及重玄門復元研究」「傅熹年建築史論文集」文物出版社、1998年。

朝阳北塔在东亚佛寺布局演变序列中的地位

郭大顺

1988年笔者在日本作文物考察时，曾参观过多处佛寺及佛寺遗址，对日本古代佛寺特别是对隋唐及此前早期佛寺整体布局的考古发掘、复原和展示渐有印象。在参观国立奈良博物馆时，正好该馆在举办一个佛教展览，我曾就日本古代塔寺布局询问过井口喜晴室长。他送我一份日本飞鸟时代到奈良时代佛寺平面布局演变图。几天后拜访关西大学网干善教教授，他又送我一本他的新作—《飞鸟发掘》，书中有朝鲜半岛和日本列岛早期佛寺布局图多例，可以看出由北(朝鲜半岛)向南(日本列岛)发展演变的一些规律^[1]。此后，又听《文物》月刊编辑部李力同志说，宿白先生对古代佛寺布局很重视。我又读到徐苹芳先生《开封大相国寺图说》一文^[2]，文中引用大量隋唐前后佛寺布局材料，但多是日本的例子，中国的最早实例只有大同善化寺，那已是辽金时代了。这段经历引起了我对中国古代佛寺布局特别是早期佛寺布局的注意。

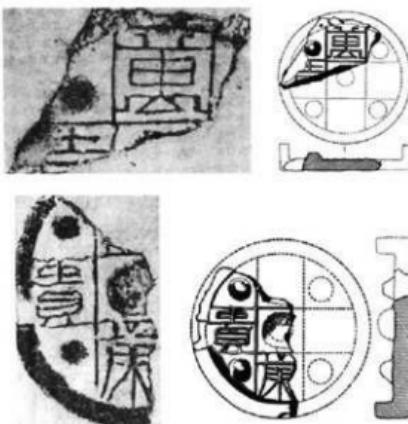
此前的1984年，配合义县奉国寺大殿维修，当地政府部门将现奉国寺庙前作了大面积动迁，这为通过考古发掘验证该寺院辽金碑刻所记辽代奉国寺建筑组合和布局提供了有利条件。为此，笔者多次建议参加奉国寺维修工程的王晶辰(省文化厅文物处)和吴鹏(义县文物管理所)同志，在奉国寺维修过程中插空做些考古发掘工作。虽然奉国寺庙前由于历年有人居住，且甚密集，地下扰乱很重，但仍在寺院西部和南部距地表3米以下的深处，找到了辽代奉国寺诸多建筑的磉墩部分，这就为了解辽代奉国寺的布局提供了实物证据，包括山门、回廊，特别是回廊与配殿相结合(即由唐代的回廊与两侧建筑不相结合到明清时期的東西两厢的过渡阶段)等具时代特点的布局等。不过，这已是隋唐以后的实例了。

真正与隋唐及之前的早期佛寺布局联系起来的是朝阳北塔。就在奉国寺维修工程开始不久，朝阳北塔的维修也着手筹备工作，在制订维修方案时，大家一致同意将北塔地上建筑的维修与地下考古发掘结合起来^[3]。其成果十分可喜，一是在地上部分探察清楚、保留并局部展示出唐塔与辽代的两个阶段共三个时期层层包砌的年代关系，一是找到北魏木塔的塔基部分以及压在其下的十六国三燕时期的夯土台基，这就以确凿的实物资料证明，朝阳北塔就是史载北魏冯太后在故燕国都城龙城所建“思燕佛图”^[4]。但因为当时北塔周围被工厂、居民区所包围，无法扩大发掘面积，有关北塔所在寺院布局的材料所知甚少，但在北塔东部约40米处勘探出“富贵万岁”瓦当等三燕至北魏时期文物和遗迹线索，为继续寻找北塔寺院的围墙等遗迹保留了一线希望(图一)。据记载，朝阳北塔始建于5世纪后半期，要早于洛阳永宁寺的建造年代(6世纪初)，是中国目前所知佛寺遗址中较早的一例。于是，寻找北魏时期

朝阳北塔寺院布局就列为辽西考古的一个重要课题，自然也成为此后在朝阳老城区进行考古勘探的主要目标之一。巧的是，2003—2004年，朝阳北大街改造工程将北塔周边全部动迁，这又是一个极难得的机会。在大家的宣传和推动下，开始了寻找北塔寺院整体布局的考古发掘。虽然城建留给考古发掘的时间极为有限，最后的结果远不如期望，但在北塔的东、西、北三面都找到了寺院围墙墙基的线索，在北塔北约10米处还发现了夯土台基（可惜已来不及正式发掘，因新建的北塔博物馆竟然就建在这座夯土台基之上），可以基本勾画出一个北塔寺院的平面布局图，是与洛阳永宁寺相近的塔的位置近乎位于寺院中心的布局（图二）^[5]。

关于洛阳永宁寺，这座北魏国寺在20世纪80年代以来由中国社会科学院考古研究所进行过多次勘探和系统发掘，是北方地区考古工作做得较多也较为全面的一个佛寺遗址。尤其是在发掘塔基之后，通过勘探和试掘，找到包括寺院围墙、山门在内的多处建筑遗迹，所得永宁寺寺院平面图是当时“获得的第一张北魏乃至整个南北朝时期辟地新建类佛寺的寺院布局图”，自然较为准确翔实。特别是长方形院落内位于中轴线上的佛塔地位高于佛殿，成为朝阳北塔寺院布局的重要参照^[6]。

能够更为直接印证朝阳北塔寺院布局的，是最近发表的山西大同北魏方山“思远佛寺”遗址的考古发掘资料。因为“思远佛寺”建于北魏文明太皇太后冯氏陵园中，始建于太和三年（479），与朝阳北塔的建筑年代十分接近，而且都与冯氏太后有着密切关系，尤其是从塔的总体结构上比较，虽然“思远佛寺”建于西寺梁山南麓二级阶地的山坡地上，是与陵园有关的建筑，但寺院以塔为中心的整体平面布局，特别是有环实体塔心的殿堂式回廊结构，与朝阳北塔几乎完全相同（图三）^[7]。不同的是，朝阳北塔建筑于三燕龙城官殿址之上，规模相对较大（“思远佛寺”的塔心实体南北残长12.05米、东西残长12.20米，小于朝阳北塔塔心实体以外圈柱网中心为标准计算的长宽各18.90米；“思远佛寺”环塔心殿堂式回廊每边长18.20米，面阔五间，小于朝阳北塔环塔四周殿堂遗址宽48.60米，面阔11间的规模）。尤其要提到的是，朝阳北塔位置又在靠近东北亚的辽西地区，与朝鲜半岛和日本列岛佛寺布局的关系更



图一 朝阳北塔东40米处勘探出土三燕至北魏“富贵万岁”瓦当残件

为密切。

前述朝鲜半岛和日本列岛诸佛寺布局的演变规律，概括而言，在于塔与佛殿在寺院布局中相对位置的变化，塔的位置渐由主而次，而佛殿的位置则由次而逐渐取代塔占据了寺院的主要位置。其具体演变过程在以下诸实例中有较为典型的反映(图四)^[8]。

平壤清岩里废寺。位于大同江北岸的清岩里高句丽土城南部，1938年发掘。该寺建于498年，晚于朝阳北塔十余年，具有从南到北为中门、八角殿塔和中金堂的南北中轴线，形成塔近中心，塔后有中金堂，塔的东、西仍各有一金堂，是一塔三金堂的布局，与20世纪50年代发掘的日本飞鸟寺一塔三金堂的组合相近，但年代要早近百年。显示佛殿出现后，塔仍占据着中心位置。是处于与朝阳北塔、大同思远佛寺以及洛阳永宁寺相近的发展阶段。

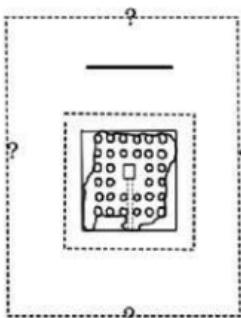
忠清南道军守里废寺。位于今忠清南道扶余郡，是百济扶余宫城南部的一座寺院，建于538年。基本布局为塔与塔前中门、塔后中金堂、北讲堂处于南北轴线上。金堂位置渐近中心，而塔的位置明显靠前(南)，逐渐离开中心地位，显示塔殿地位开始发生较大变化，从而代表了这一演变过程中的又一阶段。

奈良飞鸟寺遗址。建于588年。1954—1956年发掘。为塔与塔前(南)中门、南门，塔后(北)

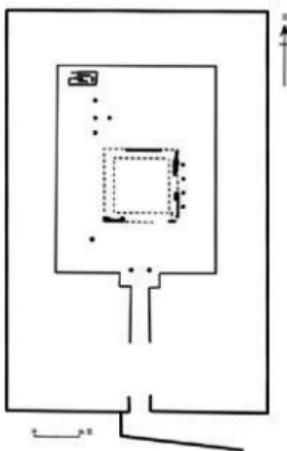
中金堂、北讲堂处于南北轴线，寺院中心渐由塔向佛殿转移的布局，但塔的左、右仍有东、西金堂，显示塔的中心位置仍然得到部分保留。

大阪四天王寺遗址(图五)，建于593年。保持着这一阶段南门、中门、塔、金堂、讲堂处于寺院中轴线的布局，但塔移前，寺院中心渐由塔向佛殿转移。

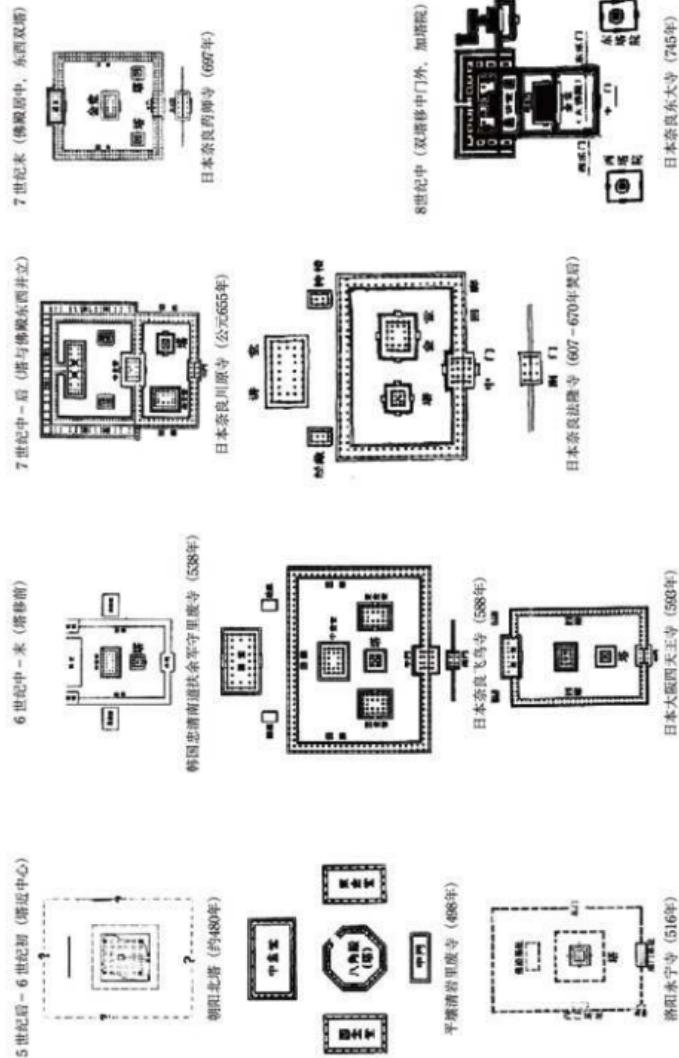
奈良川原寺遗址和法隆寺(图六)。分别建于655年和607年(法隆寺现存地上建筑及布局为670年焚后重建)，这两座寺院布局的一个重大变化是，塔位于寺院中门以内的前院，且与西金堂东、西并立，离开了寺院布局的南北中轴线，而中金堂位在寺院最中心，形成由中门直



图二 朝阳北塔的北魏塔基与寺院布局平面图
(约公元480年)



图三 大同“思远佛寺”布局平面图
(479年)



图四 5—8世纪中国、朝鲜半岛与日本佛教布局演变图

接到中金堂到讲堂的南北轴线，显示塔的地位进一步降低，而佛殿则已有占据寺院的中心位置的演变趋势，是东亚佛寺布局演变的又一关键阶段，也是塔殿地位变化更为显著的一个阶段。

奈良药师寺。建于697年。为双塔，而且都已移于寺院中门内前院的两旁，在寺院中处于显著的附属位置，而佛殿则已完全占据了寺院的中心地位，塔殿地位的转化到这时已基本完成。

奈良东大寺。建于745年。佛殿是寺院中心建筑，也有双塔，但双塔更进一步移至寺院中门以外，南大门以内，并另立东西塔院，是为塔与殿地位变化的延续。

以上诸例所推出的朝鲜半岛和日本列岛佛寺布局演变序列可以明确分为：5世纪后至6世纪初(塔近中心，佛殿在北)，6世纪中至6世纪末(塔离开中心，移前)，7世纪中至7世纪后(塔与佛殿东西并立)，7世纪末及以后(东西双塔到塔移寺院外，另立塔院)共四个阶段。如果在此基础上，将朝阳北塔、大同思远寺和洛阳永宁寺等中国北方三寺依年代次序排列进去，可以得出一个更为系统的东亚佛寺布局演变阶段图，即仍可分作四个阶段，但第一阶段因有中国北方三寺资料，不仅内容更为充实，从中对塔近中心到塔与佛殿并立再到佛殿渐近中心而塔的地位变为次要，甚至移至寺院以外的塔院内的演变规律看得更为清楚，而且将第一阶段佛寺的时代提早到5世纪后半期，地区也是从中国的北方开始，经中国东北导向东北亚地区。由于这一演变反映的中心内容是礼拜对象的转变，即由对塔为主要礼拜对象为主到以殿和佛像的礼拜为主，可以认为，这是佛教传入中国以及



图五 日本大阪四天王寺



图六 日本奈良法隆寺

东北亚以后一个十分重要的阶段性变化。这就涉及东亚佛教一个重大的课题，那就是佛教的东传。

永宁寺发掘报告在评价该寺院布局考古发掘成果的学术价值和巨大影响时，已触及该寺院布局在东亚佛寺布局演变过程中的地位以至佛教东传中的重要作用：“如果放眼世界，还能从朝鲜半岛和日本列岛的早期佛寺遗址上，看到永宁寺这类寺院布局的某些影子。”^[9]

关于佛教由中国大陆向朝鲜半岛和日本列岛的传播，一般以为可以分为南北两路。论证南路的较多，而北路较少。北路东传的证据，早期实例除朝阳北塔以外，还有较早的北燕冯素弗墓所出的一件佛像纹步摇金饰，时代在5世纪上半叶^[10]。义县万佛堂石窟现存大佛与日本奈良飞鸟寺大佛在作风上的相近，也常被作为其间关系的证据，然而那已到6世纪以后了^[11]。而文献记载佛教向东传入高句丽是在4世纪后半叶（372年“秦王苻坚遣使及浮屠顺道，送佛像经文”为佛教传入高句丽之始）。不过辽阳上王家两晋之际壁画墓中有佛教装饰题材——莲花，墓前室四壁用四行石板抹角叠砌，中间形成方形天井的室顶，其具体时间以墓顶结构相同，壁画内容相近而有纪年的朝鲜黄海南道安岳郡东安岳3号墓（357年）为准，约在4世纪中叶，早于文献记载佛教传入高句丽数十年^[12]。而安岳三号墓错迭方形石块式藻井式墓顶和藻井上彩绘莲座以及莲花、舒叶等边饰花纹等较多的莲花装饰，是迄知佛教传入高句丽的最早证据^[13]。从辽阳上王家两晋之际墓到东岳三号墓的佛教题材，正是佛教东传的更早线索。

从以上所论可知，佛教的东传确有经北路相传的一支，具体途径是经辽西、辽东到达高句丽，再向南传播的。佛寺布局中塔殿位置变化由于反映了礼拜对象的转变，而且演变序列较为系统，应是佛教东传过程的一条主线。朝阳北塔在这一佛寺布局系统演变序列中排在前列，是佛教由北路东传的一个主要环节和重要实证。正如宿白先生所言：“辽宁朝阳发现的5世纪后期兴建的思燕佛图，是迄知距离高句丽最近的一处以塔为中心的佛寺。”^[14]可见，在东北亚佛寺布局先后演变序列进而在佛教东传过程中的关键地位，是为朝阳北塔最为重要的学术价值之一。

（原载于《辽宁省博物馆馆刊》第三辑，2009年）

注

- 〔1〕 网干善教：《飞鸟发掘——成果と展望》，（日）鞍马堂出版株式会社，1988年。
- 〔2〕 徐苹芳：《开封大相国寺图说》，《文物与考古论集》，第357—369页，文物出版社，1987年。
- 〔3〕 郭大顺：《古建筑维修的一个薄弱环节》，《中国文物报》，1996年2月4日。
- 〔4〕 朝阳市北塔考古勘察队等：《朝阳北塔1986—1989年考古勘察纪要》，《辽海文物学刊》，1990年第2期；张剑波等：《朝阳北塔的结构勘察与修建历史》，《文物》，1992年第7期。
- 〔5〕 辽宁省文物考古研究所，朝阳市北塔博物馆编：《朝阳北塔——考古发掘与维修工程报告》，第133页，文物出版社，2007年。
- 〔6〕 中国社会科学院考古研究所著：《北魏洛阳永宁寺——1979—1994年考古发掘报告》第138页，中国大

- 百科全书出版社，1996年。
- [7] 大同市博物馆：《大同北魏方山思远佛寺遗址发掘报告》，《文物》，2007年第4期。
- [8] 以下佛寺布局平面图参见：网千善教：《飞鸟发掘——成果と展望》，第111—114页。醍醐堂出版株式会社，1988年；徐苹芳：《开封大相国寺图说》，《文物与考古论集》，第365页图五、六，第367页图九，文物出版社，1987年。
- [9] 同注〔6〕，第155页。
- [10] 黎瑞清：《辽宁北票县西官营子北燕冯素弗墓》，《文物》，1973年第3期。
- [11] 刘建华：《义县万佛堂石窟》，科学出版社，2001年。
- [12] 李庆发：《辽阳上王家晋代壁画墓清理简报》，《文物》，1959年第7期；洪晴玉：《关于冬寿墓的发现和研究》，《考古》，1959年第1期。
- [13] 宿白：《朝鲜安岳所发现的冬寿墓》，《文物参考资料》，1952年第1期。
- [14] 宿白：《在“渤海文化研讨会”上的发言》，《北方文物》，1997年第1期。

東アジア仏教寺院の伽藍配置の変遷における 朝陽北塔の位置づけ

郭大順

1988年に筆者が日本で文物調査をおこなった際、多くの仏教寺院や寺院遺跡を参観したが、日本古代寺院、とりわけ隋唐代ないしそれ以前の初期寺院の伽藍全体の配置の発掘と復元、展示が印象に残った。奈良国立博物館を参観した折、同館ではちょうど仏教の展覧会が開催されており、筆者は日本古代の仏塔の配置について井口喜晴考古室長（当時）にうかがった。すると氏は日本の飛鳥時代から奈良時代に至る寺院の平面配置の変遷図をくださった。数日後、関西大学の網干善教教授を訪ねると、氏は新著『飛鳥発掘』をくださった。同書には朝鮮半島と日本列島における初期寺院の伽藍配置図が多く掲載されており、北（朝鮮半島）から南（日本列島）へと発展、変化していく法則をみてとることができた⁽¹⁾。その後、「文物」月刊編集部の李力氏より、宿白先生が古代寺院の伽藍配置を大変重視していることを聞いた。また徐莘芳先生の「開封大相国寺図説」を拝読した⁽²⁾。同論考には隋唐前後の寺院の伽藍配置に関する多数の資料が引用されていたが、多くは日本の事例であり、中国でもっとも古い実例は大同市善化寺、すなわち遼金代のものであった。このような経緯から、筆者は中国古代寺院の伽藍配置、とくに初期仏教寺院の伽藍配置に注目するようになった。

それに先立つ1984年、義県奉国寺大殿の修繕にあたり、現地の政府は現在の奉国寺の大部分を移動させることにした。これは遼金代の碑文に記された遼代奉国寺の建築構成と配置を考古学的な発掘調査によって検証するうえで、実に幸いなことであった。そのため筆者は、奉国寺の修繕に参加した王晶辰氏（遼寧省文化庁文物處）と呉鵬氏（義県文物管理所）に幾度も提言し、奉国寺の修繕中に発掘調査をおこなう機会を得た。奉国寺には以前から人が居住しており、かつ居住域が密集していたため地下は大きく擾乱されていたものの、寺院西部と南部では、地下3m以下の深部から遼代奉国寺にかかる多くの建造物の礎石が発見された。これらは遼代奉国寺の伽藍配置を理解するための実証資料であり、山門や回廊のはか、回廊とその左右の配殿の取り付き等（これは唐代における回廊と両側の建物が連結しない配置から明清代の東西両房へと変化する、過渡的段階を示す）、遼代の特徴を示す配置が含まれていた。しかしながら、これも隋唐以降の実例にすぎなかった。

隋唐およびそれ以前の初期寺院の伽藍配置との関係性をまさに示すのが朝陽北塔である。奉国寺の修繕が開始されてまもなく、朝陽北塔の修繕もまた着手された。修繕方法の決定にあたり、北塔の地上部の建築の修繕と地下の発掘調査を同時にを行うことに全員が同意し

た⁽³⁾。その成果は実に喜ばしいものであった。ひとつは、地上建築部の調査において、唐代の塔と遼代の塔が三段階にわたって姿をとどめており、局所的にこれを検出することで、各層が重複して包み込まれるように構築された計3期におよぶ時期的関係をあきらかにできた点である。もうひとつは、北魏木塔の基壇ならびにその下にある十六国三燕期の版築基壇を発見したことである。このようなきわめて確実な実物資料にもとづき、朝陽北塔は、史料にみえる北魏馮太后が故燕国の都城・龍城に建立した「思燕仏団」であることが証明された⁽⁴⁾。ただし、調査時の北塔は周囲を工場や住民区に囲まれていたため発掘範囲を拡張することはできず、また北塔が存在した寺院の配置に関する検討材料もほとんど知られていなかった。しかしながら、北塔から東へ約40mの地点では、「富貴万歳」瓦等の三燕から北魏に至る遺物や遺構の手がかりが発見されており、北塔寺院を囲む墙壁等の遺構の調査の継続に一筋の希望が残る(図一)。史料によれば、朝陽北塔は5世紀後半に造営が開始され、洛陽永寧寺の造営年代(6世紀初め)に先行する。目下、中国における仏教寺院遺跡のなかでも古い時期の一例である。それゆえ、北魏代の朝陽北塔の伽藍配置は淮西考古学の重要課題のひとつであり、もちろん今後の朝陽老城区における考古学的調査の主要な目標のひとつでもある。奇遇にも、2003年から2004年に朝陽北大街のつくり替えに際して北塔周辺の建物はすべて移動することとなり、これもまた得難い機会であった。各位の宣伝と促進のもと、北塔寺院の全体配置を探る発掘調査が開始された。発掘調査のために都市建設を中断できる時間は大変限られており、期待したほどの結果は得られなかつたが、北塔の東・西・北の三面に寺院を囲む墙壁の基礎の手がかりを発見したほか、北塔の正北約10mの地点に版築基壇を発見し、北塔寺院の基本的な平面配置図を描くことができた(新設の北塔博物館がこの版築基壇の上に建設されていたため、残念ながら正式な発掘はできなかつた)。その平面配置は洛陽永寧寺に類似し、塔が寺院のほぼ中心に位置するものであった(図二)⁽⁵⁾。

北魏の国寺である洛陽永寧寺については、1980年代より中国社会科学院考古研究所が複数回にわたって探査と系統的な発掘を実施しており、北方地区において考古学的調査が比較的多く、また全面的に調査がおこなわれた寺院遺跡のひとつである。とくに塔基壇の発掘後、探査と試掘調査によって寺院周囲の墙壁や山門内側の多くの建築遺構が発見された。永寧寺の伽藍配置は当時、「初めて得られた北魏ないし南北朝期に新設された寺院の伽藍配置図」であり、的確かつ詳細であった。とりわけ、長方形の回廊で囲まれた区画内の中央線上に位置する塔は仏殿よりも地位が高く、朝陽北塔の伽藍配置の重要な参考になる⁽⁶⁾。

朝陽北塔の伽藍配置をより直接的に裏付けるのが、近年報告された山西省大同市の北魏方山「思遠仏寺」遺跡の発掘資料である。「思遠仏寺」は北魏の太和三年(479)に、北魏の文明太皇太后馮氏の陵園内において造営が開始されており、朝陽北塔と時期的に近く、

かつ両者ともに馮氏太后と密接な関係にあるからである。とくに塔の全体的な構造を比較すると、「思遠仏寺」は西寺梁山南麓の二級段丘の斜面に営まれた陵園にかかる建築ではあるものの、塔を中心とした平面配置を示し、塔の周囲を殿堂式回廊がめぐる点で朝陽北塔と完全に一致する（図三）⁽⁷⁾。相違点としては、朝陽北塔が三燕の龍城の宮殿跡の上につくられ、規模が相対的に大きいことである（「思遠仏寺」の塔心実体は南北方向の現存長12.05m、東西方向の現存長12.2mで、外縁の柱並びの中心を基準に計算した朝陽北塔の塔心実体の一辺の長さ18.9mより小さい。また「思遠仏寺」の塔周囲をめぐる殿堂式回廊は各辺の長さが18.2mの桁行五間で、これは長さ48.6m、桁行十一間の朝陽北塔周囲の殿堂構造よりも小規模である）。さらに特筆すべきは、朝陽北塔は東北アジアのなかでも遼西地区に近く、朝鮮半島と日本列島における寺院の伽藍配置との関連性がより密接なことである。

先述した朝鮮半島と日本列島の諸寺院の伽藍配置にみられる変化の法則とは、簡単にいえば、伽藍配置における塔と仏殿の位置関係の変化にある。塔は主体的な位置から従属的な位置へと次第に変化する一方、仏殿は塔に代わって伽藍の主要位置を占めるようになる。その具体的な変化は以下の諸例に典型的にあらわれている（図四）⁽⁸⁾。

平壤清岩里庵寺は大同江北岸の清岩里高句麗土城南部に位置し、1938年に発掘された。同寺は498年に建立され、朝陽北塔より十余年遅れる。南から北に向かって中門、八角殿塔、中金堂が中軸線をなし、塔は伽藍の中心近くに位置する。塔後方に中金堂、塔の東西にそれぞれ金堂があり、一塔三金堂の配置をなす。一塔三金堂の組み合わせは1950年代に発掘された日本の飛鳥寺に類似するが、それよりも時期は100年近く古い。仏殿の登場後も、依然として塔が伽藍の中心的な位置を占めていたことを示している。同寺は朝陽北塔および大同思遠仏寺、洛陽永寧寺と近しい発展段階に位置づけられる。

忠清南道扶余軍守里庵寺は、現在の忠清南道扶余郡に位置する。百濟の扶余宮城南部の一寺院で、538年に創建された。南北軸線上に塔、塔前方に中門、塔後方に中金堂と北講堂を置く基本配置をとる。金堂の位置が次第に伽藍の中心に近づいているのに対し、塔は明らかに前方（南）に寄っており、中心的な位置から離れ始めている。これは塔と仏殿の位置づけに大きな変化が生じ始めたことを示しており、一連の変遷における新たな一段階をあらわしている。

奈良飛鳥寺は588年の創建で、1954年から1956年にかけて発掘された。南北軸線上に塔、塔前方（南）に中門と南門、塔後方（北）に中金堂と北講堂がある。伽藍の中心が塔から仏殿へと次第に移っていく配置ではあるものの、塔の左右には依然として東西の金堂があり、部分的に塔の中心的な位置が保たれていることを示す。

大阪四天王寺（図五）は593年に創建された。南門、中門、塔、金堂、講堂が伽藍の中軸線上に位置する当段階の特徴をとどめるが、塔は前方へと移動し、伽藍の中心が徐々に

塔から仏殿へと移っている。

奈良川原寺および法隆寺（図六）は、それぞれ655年、607年（法隆寺に現存する地上建築とその配置は670年の火災後の再建）に建立された。両寺院の伽藍配置における大きな変化は、塔が伽藍の中門より内側の前院に位置し、かつ西金堂と塔とが東西に並立していることである。塔は伽藍配置の南北中軸線からはずれる一方、中金堂が伽藍の中心に位置するようになり、中門から中金堂、そして講堂に直接至る南北の軸線が形成された。塔の位置づけがさらに低くなるのに対して、仏殿はすでに伽藍の中心的な位置を占めつつある。これは、東アジアにおける寺院の伽藍配置の変遷のなかでまた一つの重要な段階をなしており、塔と仏殿の位置づけの変化が顕在化する段階でもある。

奈良薬師寺は697年に創建された。塔は双塔で、かつ中門内側の前院の両脇に移動している。塔は伽藍のなかであきらかに付属的な位置にある一方、仏殿は完全に中心的地位を占めており、塔と仏殿が逆転する配置が基本的な完成をみた。

奈良東大寺は745年の創建で、仏殿が寺院の中心建築である。双塔もあるが、双塔は中門の外側、南大門の内側へと移動し、別に東西の塔院が建てられた。これも塔と仏殿との位置づけの変化の延長線上にある。

以上の諸例によって示した朝鮮半島と日本列島における寺院の伽藍配置の変遷は、以下のように明確に分けることができる。5世紀後半から6世紀初め（塔は中心付近、仏殿は北にある）、6世紀中頃から6世紀末（塔は中心を離れ前方に移動する）、7世紀中頃から7世紀後半（塔と仏殿が東西に並立する）、7世紀末およびそれ以降（東西双塔となって伽藍の外側へと移り、別に塔院を建てる）の計4段階である。これをもとに、朝陽北塔、大同思遠寺、そして洛陽永寧寺といった中国北方の三寺を時系列に並べるならば、東アジア仏教寺院におけるより系統的な伽藍配置変遷図を導き出せる。4段階に分けられることに変わりはないが、第1段階に中国北方の三寺が含まれることによって内容はより充実する。それだけではなく、塔が伽藍の中心付近から仏殿との並立へと変化し、さらに仏殿が徐々に中心に近づくことで塔の位置づけが従属性なものとなり、さらには伽藍の外側の塔院内へと移動するという変化の方向性もより明確になる。また、第1段階の佛教寺院は5世紀後半期まで遡り、地域も中国の北方に始まり、中国東北部を経て東北アジア地域へと発展する。この一連の変遷が反映しているのは礼拝対象の変化、すなわち、塔を主たる礼拝対象とすることから、仏殿と仏像の礼拝を主とすることへの変化である。それゆえ、この一連の変化は佛教が中国および東北アジア地域に伝播して以降の、きわめて重要な段階的变化とみなすことができる。これは、東アジア佛教における佛教の東漸という重大な問題に関わっているのである。

永寧寺の伽藍配置の発掘成果が有する学術的価値と多大な影響を評価するにあたり、そ

の発掘報告書は、同寺の伽藍配置が東アジア仏教寺院の伽藍配置の変遷のなかで占める位置や、仏教の東漸のなかで及ぼした重要な作用に言及した。「視野を世界に広げるならば、朝鮮半島と日本列島の初期仏教寺院遺跡にも、永寧寺のような伽藍配置の影響を認めることができる」⁽⁹⁾。

中国大陸から朝鮮半島および日本列島への仏教の伝播に関して、一般には南北の両路に分けられると考えられている。南路の論証が比較的多くみられるのに対し、北路はやや少ない。北路経由の仏教東漸の証拠として、初期の実例である朝陽北塔のはかにも、時期的に先行するが、北燕馮素弗墓からは仏像文を有する金製歩搖冠装飾が出土し、その年代は5世紀前半に位置づけられる⁽¹⁰⁾。義県万仏堂石窟に現存する大仏と日本の奈良飛鳥寺の大仏は作風が類似し、しばしば両者の関連性を認める根拠としても挙げられるが、時期はすでに6世紀以降である⁽¹¹⁾。また文献によれば、仏教が高句麗に伝わったのは4世紀後半である（372年の「秦王符堅遣使及浮屠順道、送仏像經文」を高句麗への仏教の伝播とする）。しかし、両晉の境に位置づけられる遼陽上王家の壁画墓には、仏教の装飾モチーフである蓮華が確認できる。同墓前室の四壁は四枚の板石を角をずらしながら積み重ねて築き、方形天井をもつ墓室頂部を形成している。同墓の年代は、墓室頂部の構造が同一かつ壁画の内容が類似することから、朝鮮民主主義人民共和国の黄海南道安岳郡安岳3号墓（357年）を基準として、おおよそ4世紀中頃に位置づけることができる。これは文献にみられる高句麗への仏教伝播よりも数十年早い⁽¹²⁾。また、安岳3号墓にみられる石を互い違いに交差させる三角持送り式の墓室頂部と、そこに彩色で描かれた蓮華座や蓮華、蓮葉のような繩文様といった多くの蓮華装飾は、現在のところ高句麗への仏教伝播を示すもっとも古い証拠である⁽¹³⁾。両晉の境に位置する遼陽上王家壁画墓から安岳3号墓に至る仏教モチーフは、まさに最初期の仏教東漸の手がかりである。

以上論じてきたことからいえるのは、仏教の東漸には確かに北路を経由した一支流があったということである。具体的なルートとしては、遼西・遼東を経て高句麗に至り、そこからさらに南方へ伝播する。仏教寺院の伽藍配置における塔と仏殿の位置の変化は礼拝対象の変化を反映しており、その時期的な変遷は系統的であることから、北路は仏教の東漸過程のひとつの主要なルートであったと考えられよう。朝陽北塔はこのような伽藍配置の系統的な変遷のなかで最初期に位置しており、北路経由で東漸した仏教の重要な糸口であり、その実証である。宿白先生が言うように、「遼寧朝陽で発見された5世紀後半に創建された思燕佛団は、現在のところ高句麗と距離的にもっとも近い、塔を中心とした寺院である。」⁽¹⁴⁾。東北アジア仏教寺院の伽藍配置の変遷は、仏教の東漸過程において鍵となるものであり、朝陽北塔はもっとも高い学術的価値を有するもののひとつといえる。

（原文は『遼寧省博物館館刊』第3輯、2009年に掲載）

註

- (1) 網干善教「飛鳥發掘—成果と展望—」駿々堂出版、1988年。
- (2) 徐華芳「開封大相國寺園說」「文物與考古論集」357~369頁、文物出版社、1987年。
- (3) 郭大順「古建築維修的一個薄弱環節」「中國文物報」1996年。
- (4) 朝陽市北塔考古勘察隊ほか「朝陽北塔1986~1989年考古勘察紀要」「遼海文物學刊」1990年第2期。
張劍波ほか「朝陽北塔的結構勘察與修建歷史」「文物」1992年第7期。
- (5) 遼寧省文物考古研究所・朝陽市北塔博物館編：『朝陽北塔—考古發掘與維修工程報告』133頁、文物出版社、2007年。
- (6) 中国社会科学院考古研究所『北魏洛陽永寧寺—1979~1994年考古發掘報告』138頁、中国大百科全書出版社、1996年。
- (7) 大同市博物館「大同北魏方山思遠寺遺址發掘報告」「文物」2007年第4期。
- (8) 寺院の伽藍配置平面図は以下を参照した。
網干善教「飛鳥發掘—成果と展望—」111~114頁、駿々堂出版、1988年。
- 徐華芳「開封大相國寺園說」「文物與考古論集」365頁の図5・6、367頁の図9、文物出版社、1987年。
- (9) 同註(6)、155頁。
- (10) 黎瑞渤海寧北票縣西官營子北燕馮素弗墓」「文物」1973年第3期。
- (11) 劉建華『義縣萬佛堂石窟』科学出版社、2001年。
- (12) 李慶發「遼陽上王家晉代壁畫墓清理簡報」「文物」1959年第7期。
洪晴玉「關於冬壽墓的發現和研究」「考古」1959年第1期。
- (13) 宿白「朝鮮安岳所發現的冬壽墓」「文物參考資料」1952年第1期。
- (14) 宿白「在“渤海文化檢討會”上的發言」「北方文物」1997年第1期。

初期慕容鮮卑の墓制と親族構造に関する予察 —北票大板營子墓地の検討から—

廣瀬 覚

1. はじめに

大板營子墓地は、北票市大板鎮波台沟台村に所在する初期の慕容鮮卑のものとみられる集団墓地で、1994年と1996年の2次にわたる発掘調査で23基の竪穴系の埋葬施設が検出されている。大凌河を挟んで東約10kmには、総数435基を数える三燕文化最大規模の墓地遺跡で、倭の古墳文化にも影響をおよぼしたとみられる装飾馬具や装身具が出土したことでも有名な喇嘛洞墓地が所在する。大板營子墓地は、墓地全体の規模や副葬品の内容において喇嘛洞墓地よりも大きく劣り、階層的に下位に位置づけられる集団の墓地であることは疑いない。しかしながら、年代的には喇嘛洞墓地とほぼ同時期の所産と考えられ、埋葬施設の構造には類似性も認められることから、大板營子墓地の造営集団の性格を究明する作業は、初期の三燕文化の実態理解において重要な鍵を握るといえる。

ところで、遼西地域の発掘調査で検出される墓地では、時代を問わず総じて人骨の残りが良い。大板營子墓地でも、各墓から人骨が出土しており、報文では各墓の埋葬施設の構造と副葬品の内容とともに、人骨の年齢と性別に関する鑑定結果が併記されている（万欣2010）。本論では、それらを基本データとして大板營子墓地の造営過程と親族構造について若干の検討を試み、初期慕容鮮卑の墓制と集団構成のあり方を考える一助としたい。

2. 大板營子墓地の概要

検出された竪穴系の埋葬施設23基の内訳は、木棺墓11基、石槨墓12基で、両者とも墓坑の最下部に木棺を安置する。墓坑は長さ2.5~2.7m、幅1m前後が標準的であるが、やや大型ものでは長さ3m前後、幅1.2m前後におよぶものがある。深さは、残りの良いもので2m前後に達する一方で、木棺や石槨の高さは0.4~0.6mであり、墓坑が必要以上に深い印象を受ける。墓坑底には、木棺墓ではバラス、石槨墓では板石を敷き詰める。

木棺墓では、棺を設置したのちに、棺と墓坑壁の間に土砂を充填して、小口板や側板を固定する。石槨墓も同様に棺を囲むように壁状に板石を積み上げる。この作業により、棺の周囲にはテラスが形成される。このテラス状の施設は、おそらく棺上面の高さに相当するのであろう。同部分から棺外副葬としての土器や犬・牛骨が検出された事例がある点も、そのことを推測させる。なお、報文では、石槨墓のうち壁体に板石を箱式石棺状に立てか

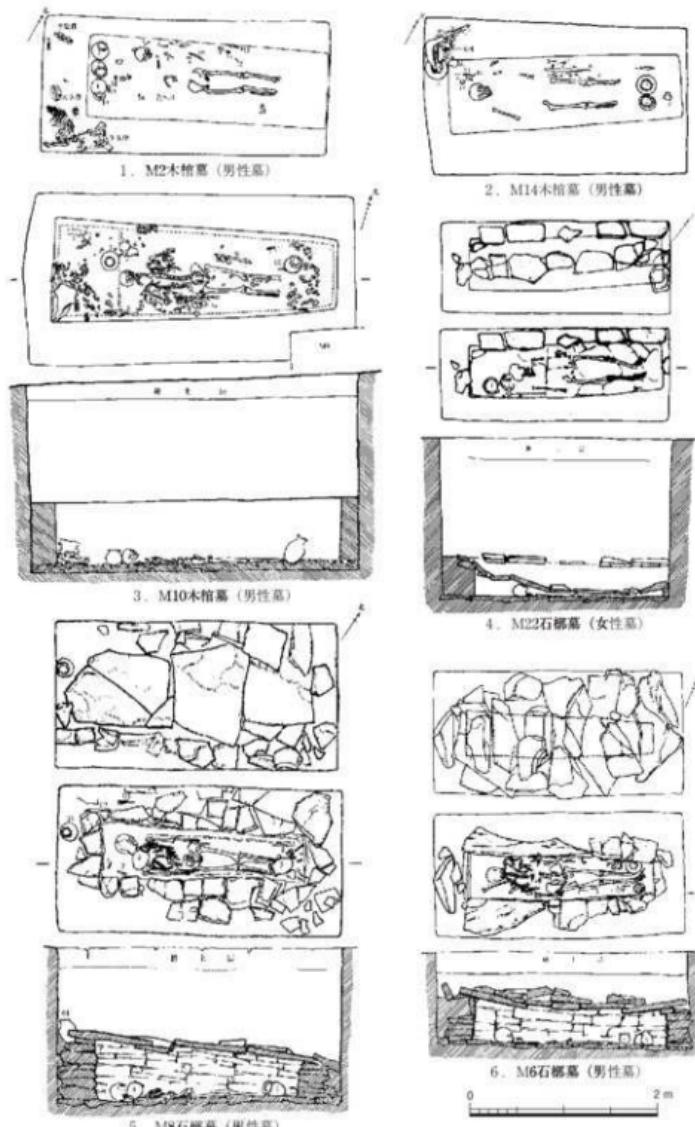


図1 大板營子墓地の木棺墓と石槨墓 1:60

ける構造をとるM5を石板墓として細分するが、墓地全体で1基が検出されているのみであり、ここではその差は強調しないでおく。

木棺の平面形は、木棺墓、石槨墓を通じて、比較的単調な方形プランのもの（図1-1・2・4）と、頭部側が幅広で足部側が幅狭となる台形プランのもの（図1-3・5・6）の両者がみられる。後者に属する石槨墓であるM8では、頭部側の小口壁と足部側の小口壁で25cm程の高低差があり、結果的に天井石が頭部側から足部側にむかって大きく傾く。上述のように、板石積みの上面テラスが棺の高さに相当すると考えられることからすると、この天井石の傾きは木棺上面の形状をそのまま反映しているものと推測できる。すなわち、大板營子墓地で使用された木棺の中には、一方の幅・高さが極端に大きい、いわゆる「片流れ形式」のものが採用されていたと理解できる。

岡林孝作は、漢代の木棺が総じて単純な箱形を呈するのに対し、「片流れ形式」木棺の早い事例が、三燕期の遼西地方や、代～北魏盛樂期の内蒙中南部地方などにみられることがから、この種の木棺と鮮卑との関わりを指摘する（岡林2004）。大板營子墓地にみる幅・高さが極端に大きい一群の木棺は、3世紀末～4世紀初頭とされる朝陽田草溝2号晋墓（遼寧省文物考古学研究所ほか1997）などとともに、慕容鮮卑における初期の「片流れ形式」木棺の事例として評価できる。かつ、同木棺の存在は、動物の殉葬とともに、大板營子墓地の被葬者集團が鮮卑系の集團であることを裏付けるものといえよう。なお、立面上にも「片流れ形式」木棺の使用が確実であるM8では、石槨四隅付近から鉄釘が出土しており（図版2-2）、棺材の接合に釘を使用していたことが判明する。

副葬品は、武器（鉄矛・鉄刀・鉄鎌）、工具（鉄斧・鉄鎌）、装身具（金銅・銀耳環・銅鏡・銅・鉄指環・瑪瑙玉・陶器片軸用・骨紡錘車）、五銖錢、土器などがある。鉄矛・銅鏡・銅指環・瑪瑙玉・五銖錢などの副葬品は、内蒙における初期鮮卑の墓地とも共通しており、副葬品目からも鮮卑の墓地であることが裏付けられる。しかしながら、喇嘛洞墓地と比較すると副葬品の構成は総じて簡素であり、M16の金銅・銀耳環、M21の銅鏡にみるセット間

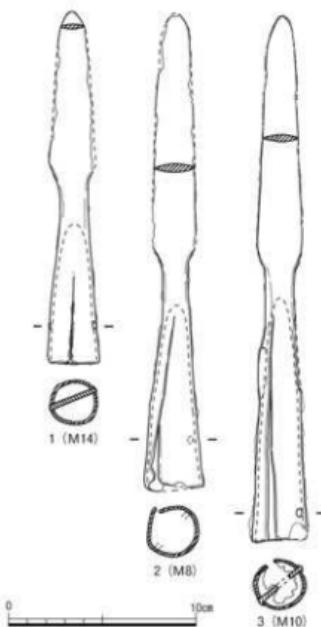


図2 大板營子墓地出土の鉄矛

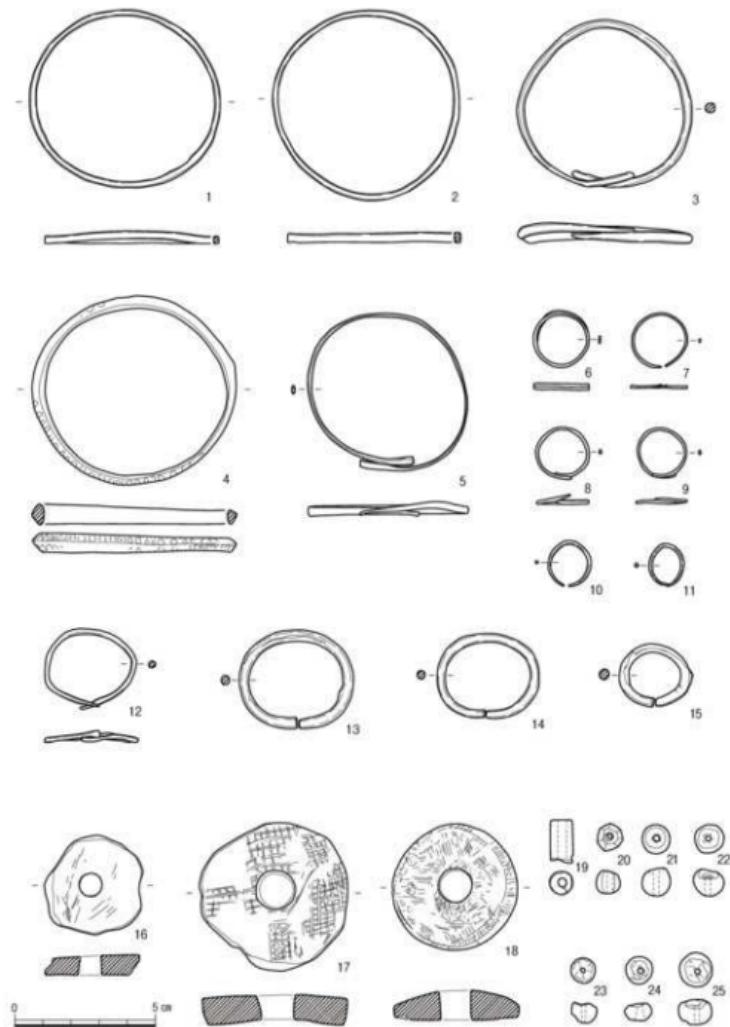


図3 大板岩墓地出土の装身具 1:2

1・2:銅鏡 (M1) 3:銅鏡 (M22) 4・5:銅鏡 (M21) 6-9:銅指環 (M1)

12:銀耳環 (M16) 13:金銅耳環 (M16) 14:金銅耳環 (M22) 15:金銅耳環 (M21)

16:陶器軒用筋飾車 (M16) 17:陶器片軒用筋飾車 (M21) 18:骨筋飾車 (M21) 19-25:瑪瑙玉 (M7)

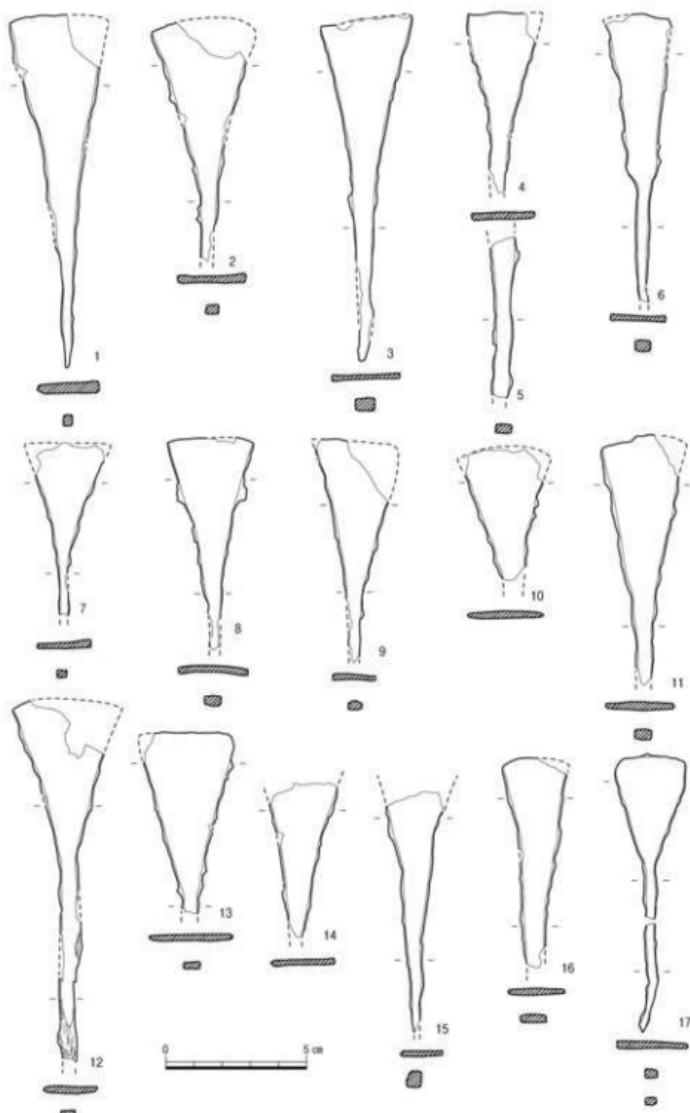


図4 大板岩子墓地出土の方頭形式の鐵鎌 1 : 2
1・2 : M2 3~6 : M20 7~9 : M14 10~11 : M3 12 : M8 13~15 : M10 16~17 : M6

係の乱れを勘案すると、最終的に副葬されることになる品目の入手には一定の制約が生じていた様子がうかがえる。とりわけ馬具類の副葬が全くみられず、代わって鮮卑墓では稀な工具類が出土している点は、鮮卑内での被葬者集団の具体的性格を考える上で重要なところ。

これらの副葬品のうち、大板營子墓地の造営年代を検討しうる品目はそう多くはない。まず五銖銭は、直径や方孔の大きさ、銭文の特徴から、後漢代のものに比定できるが、あくまでも造営年代の上限を示すに過ぎない。同じく五銖銭が出土し、後漢晩期に比定されている内蒙古地区商都県東大井墓地（魏堅編2004）からは、外面に花弁形の装飾を施した銅鏡が出土しているが、大板營子墓地出土の銅製腕輪は刻み目をもつものが1点出土しているのみで（図3-4、図版1-5）、その他は装飾をもたない簡素なもので占められる。一方、3点出土した鉄矛はいずれも袋端部が直線を呈する直基式であり、喇嘛洞墓地で直基式とともに出土している山形抉り式が含まれないことから（図1、図版1-1）、これが両墓地間の年代差を反映している可能性がある（諫早2014）。報文では、主に出土土器の位置づけにもとづいて、大板營子墓地の造営年代を「3世紀中晩期」に比定するが（万欣2010）、土器の年代的な位置づけについては、今後の検討課題としたい。

なお、鉄鎌には、長頭鎌や三翼鎌（図版2-1右端）も少量出土しているが、主体を占めるのは報文がB型鎌とよぶ方頭形式のもの（図4）である。その形状は特徴的で、長い頭部から闇を設けず、刃部にむかって側刃が大きく開いて銀杏葉形を呈する。その形状からすると、実用品であったかどうか疑わしい。万欣が鷹形鎌とよぶこの種の鎌は、十六国期に出現した後、唐代以降も存続するよう、中原の唐墓では出土しないことから、万は北方騎馬民族の特色を示すものと評価する。万によれば、遼代の儀式で用いられた「横鎌箭」は鷹形鎌と全く同じ形状を呈することであり（万欣2013）、この種の鎌の性格を考える上で興味深い。

3. 大板營子墓地の構造と変遷

次に大板營子墓地全体の構造を検討し、その造営過程を検討する。まず墓の分布状況をみると、検出された23基のうちの20基は、いずれも頭位を南西に向け、並列する二つの墓列を形成している点が注目される。二列間の距離は、墓坑の短辺間で2~3.5m程を測る。一方、それらの一群とは異なり、調査区東側のM1とM18の2基は頭位を南東に向けており、西側の20基とは群構成を異なる。M1とM18は縦列の関係で築かれており、その距離は墓坑の短辺間で西群と同様に3.5m程を測ること、M18は調査区東端に位置し、M1も北東側に崖面が迫ることから、調査区および崖面の東側には二列に配置された別の墓群が存在し、M1とM18はその一群の西端をなす蓋然性が高い。ここでは、全体の構成が判明

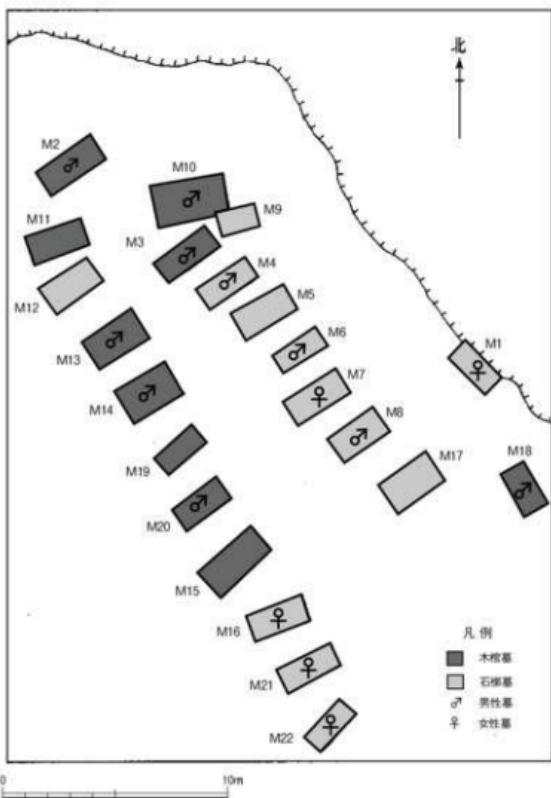


図5 大板営子墓地の埋葬構造と性別 1:250

する西群を中心に検討を加える。

改めて西群の分布状況を詳しくみると、巨視的には、西群では東西二列とも、木棺墓は北側に、石槨墓は南側に分布する傾向が認められる（図5）。その上で、木棺墓のM10の墓坑を一部壊して石槨墓のM9が築かれていることからすると、木棺墓が先行して築かれ、それに連れて石槨墓が築かれた可能性が示唆される。そのことは、出土遺物からの様相からも傍証される。例えば陶器では、木棺墓出土のA型壺（M2、M10）は頭部の立ち上がりが相対的に長く、肩部に張りを留めるのに対し、石槨墓出土の同壺（M6、M12）では頭部が短くなり、肩部の張りも失われている（図6）。また、鐵釗の中で比較的まとまった数量が出土している方頭形式のものに着目すると、木棺墓出土のもの（M2、M3、M10、

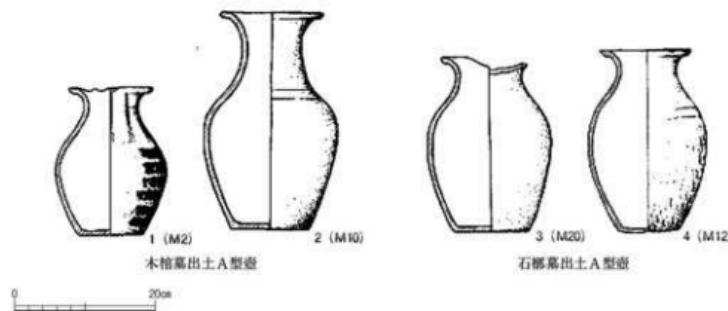


図6 大板營子墓地出土A型壺にみる形態変化

M14、M20) は側縁が緩やかに内彎し、端部幅が3~3.5cm程に達するのに対し、石槨墓であるM6出土のものには、側縁が直線化して開きが弱くなったり、鉢部の長さ4cm以下に縮小して三角形形を呈するなど、本来の銀杏葉形の形状から逸脱したものが含まれている(図4-16・17)。

このように造構の重複関係、土器や鉄器の形態変化から、木棺墓と石槨墓という埋葬施設の構造差は、概ね時間差に起因するものと理解できる。二列に整然と配列された墓群のなかで、総じて木棺墓が北側に、石槨墓が南側に偏って分布する点は、同族的な集団が北側から継続的に造墓を展開する中で、ある段階において埋葬構造が木棺墓から石槨墓へと変化した状況を示すものと考えられる。

ただし、遺物にみる形態変化がさほど大きなものではないことからすると、造墓活動全体は、せいぜい2世代程度の期間であったと推測されよう。すなわち木棺墓に埋葬された集団を第一世代、石槨墓に埋葬された世代を第二世代と捉えることができるが、第一世代、第二世代ともに、検出された墓数は10基程度であり、これが大板營子墓地の一時期における単位集団の構成員の規模を示しているものと理解できる。前述のように、本来、崖面の東にも別の墓群が存在した可能性が高いことからすると、墓地全体ではこうした単位集団が同時期にさらにいくつか存在し、それらが集まって一つの母集団を形成していたものと考えられる。

4. 埋葬者の性別と副葬品の関係

次に出土人骨と副葬品との関係から、大板營子墓群を造営した集団の親族構造に迫ってみたい。人骨が出土した21基のうち、成人男性と判定された人骨の出土墓は、M2・3・

表1 大板營子墓地の副葬品と性別の判定

	木棺墓	石棺墓	鉄鏃	工具類	鉄斧	鉄環	耳環	銅鏡	銀・銅鏡	瑪瑙玉	紡錘車	簪	人骨鑑定	性別推測
M2	○		○			○							成年男性	男性
M3	○		○	○									成年男性	男性
M4	○		○	○									成年男性	男性
M10	○		○	○	○								成年男性	男性
M13	○		○										成年男性	男性
M14	○		○	○	○	○							成年男性	男性
M20	○		○	○									成年男性	男性
M18	○		○										成年男性?	男性
M8	○	○	○	○	○								成年男性	男性
M6	○	○											成年男性	男性
M1	○						○	○	○				成年女性	女性
M7	○					○						○	成年女性	女性
M21	○					○	○	○	○	○			成年女性	女性
M22	○						○						成年女性?	女性
M16	○					○						○	成年男性?	女性
M11	○												成年男性	?
M19	○												成年男性	?
M15	○												未成年男性?	?
M5		○											成年男性?	?
M12	○												成年男性	?
M17	○												不明	
M23	○												不明	
M9	○												子供性別不明	

6・8・10~14・19・20で、その他に成人男性?とされるものにM4・16・18の3基がある。さらに、M9は性別不明の児童とされ、M15も未成年で性別は男性?とされている。一方、成人女性と判定された人骨が出土した墓は、M1・7・21の3基であり、断定されるには至っていないもののM22もその可能性が指摘されている。以上を踏まえて、副葬品目と性別との対応関係を検討してみよう。

まず、男性と判定された人骨出土墓に伴う副葬品として、普遍的にみられるものは鉄鏃と工具類である。また3例だけであるが、M8・10・14からは鉄矛が出土している。言うまでもなく鏃と矛は、武器であり、工具も力作業に関わる物品として武器との共通性を有する。これらは大板營子墓地の女性人骨出土墓からは一切出土していないことから、男性に限定的な副葬品目と判断できる。ただし、男性と断定ないしは推定された人骨出土墓の中には、武器・工具を含まないものが(M5・9・12・15・16)存在する点には注意を要する。武器・工具を含まないことが女性墓であることの絶対条件とはならないが、人骨鑑定が確定的でないものについては、女性墓である可能性を残しておいた方がよいだろう。逆に、人骨の鑑定からは男性であることが推定にとどまっている墓の中で、鉄鏃が出土しているM4・18・20については、その点をもって積極的に男性墓と断定してよかろう。

一方、女性人骨出土墓に特有の副葬品としては、金銅・銀耳環・銅鏡・瑪瑙玉・陶器転用・骨紡錘車を指摘できる。唯一例外は、報文で男性人骨?と推定されたM16のみであるが、上述のようにこの墓からは男性墓であることを示す武器や工具類が出土していない。

代わって女性人骨との共伴例が確認できる耳環、陶器片転用紡錘車が出土していることからすると、M16については積極的に女性墓である可能性を見込んでよかろう。この他、女性人骨出土墓には、銅・銀指環が伴う傾向がある。指環については、直径2~3cmの鉄製のものが男性人骨出土のM2・14から出土しているが(図版3-6)、これを除く銅・銀製のものについては女性墓に出土が限定される。あるいは鉄製の「指環」については、指輪以外の用途を想定すべきかもしれない。

このように、大板営子墓地では、金銅・銀製耳環、銅製腕輪・指輪、瑪瑙玉、陶器片転用・骨製紡錘車は、女性墓に優位な品目と捉えることができる。女性人骨の可能性が指摘されたM22については、銅鏡が出土していることからも女性墓と断定してよかろう。このほか、1点のみであるが、骨製簪が人骨鑑定、副葬品の構成から女性墓であることが確実なM7から出土しており、簪も女性を特徴づける副葬品とみることができる。

以上を整理すると、大板営子墓地で男性墓と断定できるものは、M2・3・4・6・8・10・14・15・20、女性墓と断定できるものはM1・7・16・21・22となる。その分布をみると、女性墓と断定できたものは、見かけ上は石槨墓に集中するものの、第二世代全体では女性墓の占める割合は著しく高いわけではない。鉄鎌・鉄矛が出土しなかった木棺墓(M11・15・19)の中に女性墓が含まれている可能性があることを踏まえると、全体としては男女の構成比はおむね拮抗状態にあったものと理解できる。

5. 墓制から親族構造を研究する視点

以上のように、大板営子墓地では、一世代10人前後が集団の基本単位となっており、かつそこでの男女の構成比は半々程度であったという状況を復元することができた。それの中には、児童や未成年と判断された人骨も含まれており、それらも成人と同構造の墓を築いて、埋葬されていた状況も読み取れる。前述のように、墓群は本来、東側にも展開していたとみられることから、大板営子墓地全体では他にも同規模の単位集団が複数存在し、それらがまとまって一つの同族集団を形成していたものと推測される。

ところで、中国に比べて人骨の遺存状況がさほど良好ではない日本においても、近年、墓制から親族構造を復元する研究が深化している。日本では、出土人骨の性別のみならず、歯冠計測値を用いて血縁関係を判定する手法が早くから導入されおり、田中良之は同一墓から出土した複数の人骨の関係を同手法を用いて分析し、家長とその妻が合葬される形態は6世紀以降になって登場するとし、兄弟原理の埋葬が中心の5世紀以前は双系的な社会であったことを指摘した(田中1995)。

ただし、歯冠計測値には他人の空似が存在する可能性もあり、信頼性を疑う意見もある。近年、清家章は、歯冠計測値による判定を補う方法として、頭蓋形態の小変異の分析を加

え、両者から被葬者間の親族関係を推測する方法を新たに導入した。また、清家は、人類学的アプローチのみならず、考古学的手法からも研究全体の補強に取り組み、人骨と副葬品の共伴例に基づいて、人骨が遺存しなかった墓においても副葬品の種類から被葬者の性別を推定する方法を確立させた（清家2010）。人骨の鑑定は、専門的知識と経験を要するため、筆者のような考古学研究者では容易に手が出せない領域であるが、清家の研究は、人骨の鑑定成果を踏まえつつ、墓の位置関係や構造、副葬品の種類といった考古学的情報を加味して分析を深めることで、親族構造に関する有益な情報を引き出し得ることとした点で、重要な成果といえる。

清家の研究成果によると、日本の古墳時代（3～6世紀）では、鐵・甲冑・鉄形石は女性人骨との共伴例がなく、それらの出土は男性墓であることを示すという。清家は、軍事に関わる権能を女性が有していないことが、男女で武器・武具類の副葬の有無に相違が生じた理由であると指摘する。ここで検討した大板營子墓地でも、鐵は男性墓のみから出土しており、軍事的権能と性差の関係は時代・地域を問わず普遍的である可能性が高い。武器類が男性人骨に伴う事例は、紀元前後の吉林省老河深墓地でも指摘されており、ここでは必ず男女がペアで合葬される（同穴合葬と異穴合葬の両者があるが、いずれも男性が右、女性が左に配置される）ことから、夫婦がペアで埋葬されたものと推測されている（宮本2009）。

このように、中国では、日本よりも総じて墓制から性別差が読み取りやすい環境にあり、また夫婦原理の埋葬が早くから存在した可能性があるなど、墓制にみる親族構造のあり方は日本ほど複雑ではないことが見込まれる。しかしながら、骨から得られる親族構造に関する情報は、性別や年齢のみならず、血縁関係、女性であれば妊娠痕の有無など、多岐にわたる。大板營子墓地に対するここでの検討は、一世代の基本単位が10人程度で、ほぼ同数の男女で構成されるという点を明らかにしたのみで、単位内の血縁関係や出自、被葬者間の具体的な関係にまで迫ることはできていない。それらに迫るには、さらに詳細な人骨の分析が不可欠である。人骨の遺存状況の良い中国大陆では、こうした人類学的分析と考古学的成果を統合することで、古代の社会構造に関する研究が飛躍的に発展をとげる余地が大きいにあるといえよう。

一方、日本では、人骨の遺存状況に恵まれないからこそ、墓地の構造や造営過程、副葬品の構成といった考古学的情報とあわせて、限られた人骨の分析結果を最大限活用し、古代の親族構造を復元する研究手法が深められてきたといえる。その結果、現段階の到達点として、日本では古墳時代前半期までは双系的な社会であったが、5世紀以降、朝鮮半島をめぐる軍事的緊張を受けて、上位階層から地位継承の父系化が進行するというモデルが提示されるに至っている（清家2010・2015）。今後、同様の手法を用いて、日本列島の社会

が直接・間接的に接触したであろう同時期の中国や朝鮮半島の親族構造に関する研究が深まることで、日本列島における親族構造の変化の歴史的意義や要因をより積極的に論じることが可能になるものと期待できる。

6. おわりに

この小論では、大板營子墓地の検討を通じて、いくつかの見解を提示できた。まとめると以下のようになる。

- ①大板營子墓地の副葬品の内容、埋葬施設や木棺の構造を検討し、初期慕容鮮卑の墓制の特徴を明らかにした。ただし大板營子墓地では、馬具類の副葬は一切認められず、副葬品も総じて簡素であることから、その造営集団は鮮卑の中でも階層的に下位に位置する集団であったとみられる。
- ②大板營子墓地では、造墓開始当初は伝統的な鮮卑の墓制を引き継ぎ、深い長方形の墓坑を穿ってその最下部に木棺を安置したが、ある時期、全面的に石槨墓に移行する。ただし、「片流れ形式」木棺は、木棺墓、石槨墓を通じて使用が継続した。
- ③木棺墓、石槨墓のいずれにおいても、鉄矛・鉄鎌・鉄斧といった武器・工具類は男性墓に、銅・銀製耳環、銅製腕輪・指輪、瑪瑙玉、陶器片転用・骨製紡錘車、骨製簪などの装身具類は女性墓に、副葬が集中する傾向が見出せた。
- ④大板營子墓地を営んだ集団は、一世代の男女比がほぼ同数からなる10人前後を基本単位とし、それらが複数集まってより大きな母集団を形成していたとみられる。

以上のうち、②の点は、広く3世紀代の朝鮮半島や日本列島で木棺墓・石槨墓が石槨墓に移り変わっていく現象と連動していくことも見込まれよう。喇嘛洞墓地でも、木棺墓と石槨墓の両者が存在することからも、両者を時期差とみる見解の妥当性や移行時期の詳細をさらに検証し、その背景を明らかにしていく必要がある。

また、③④の点は、今後、鮮卑の墓制を検討する際の重要な着眼点となろう。④の集団の編成単位については、やはり三燕期の総数420基を数える喇嘛洞墓地で検証を深めることが喫緊の課題といえる。さらに③については、鮮卑の墓制はもとより、それ以外の地域の墓制との比較の中でその特質を追及しなければならない。前述した内蒙ゴの初期鮮卑墓地である商都県東大井墓地では、男女合葬事例が頻繁にみられることがあって、副葬品にみる性別差は判然としないが、やはり武器・武具類は男性人骨、腕輪・指輪（銅製）は女性人骨に伴う傾向が看守できる点は注目に値する。

一方、武器・武具のみならず工具類も男性墓に集中する点は、女性墓からも工具類が出土する同時代の日本列島の状況とは明らかに異なる。両者の社会・集団における性的分業、ないしは他界観のあり方が異なっていた状況が推測できよう。そもそも、内蒙ゴの初期の

鮮卑墓地からは工具類は一般的に出土しないことからすると、工具類の副葬自体が、鮮卑による遼西地域への南下と定着を契機に加わった要素であることが見込まれる。いずれにしても、墓制にみる埋葬原理や親族構造、性的分業のあり方は、その集団の出自や性格、階層などの解明において重要な視点となる。ここでの検討をさらに発展させることで、鮮卑をはじめとする当該期の多様な部族や社会の集団構成のあり方やその特質を明らかにし、東晉十六国期における多様かつ複雑な歴史的・文化的動態を鮮明にしていくことが今後の課題といえる。

引用・参考文献

- 諫早直人 2014 「大板宮子墓地出土品の調査」小池はか2014所収。
- 大谷育恵 2011 「三燕金属装身具の研究」『金沢大学考古学紀要23』金沢大学人文学類考古学研究室。
- 大谷育恵 2012 「漢-北魏期における耳飾の展開とその画期」『山口大学考古学論集』中村友博先生退任記念論文集。
- 岡林孝作 2004 「中国における木棺と棺形舍利容器」『シルクロード学研究』vol.21中国・シルクロードにおける舍利莊嚴の形式変遷に関する調査研究、シルクロード学研究センター研究紀要。
- 金田明大 2006 「遼西地方における鮮卑墓出土土器の観察」『東アジア考古学論叢』奈良文化財研究所、中国遼寧省文物考古学研究所。
- 魏堅 編 2004 「内蒙古地区鮮卑墓葬的發言与研究」科学出版社。
- 小池伸彦はか 2014 「遼寧省北票市金嶺寺遺跡および大板宮子遺跡出土遺物の調査」『奈良文化財研究所紀要2014』。
- 清家章 2010 「古墳時代の埋葬原理と親族構造」大阪大学出版会。
- 清家章 2015 「卑弥呼と女性首長」学生社。
- 孫危 2007 「鮮卑考古学文化研究」科学出版社。
- 田中良之 1995 「古墳時代親族構造の研究」柏書房。
- 谷畠美穂・鈴木孝雄2004 「考古学のための古人骨調査マニュアル」学生社。
- 万欣 2010 「遼寧省北票市大板宮子墓地の勘探與發掘」『遼寧考古文集』2。
- 万欣 2013 「朝陽發現唐代鐵器初步的考察」『朝陽地區隋唐墓の整理と研究』奈良文化財研究所学報第91冊。
- 宮本一夫 2009 「考古学からみた夫余と沃沮」『國立歴史民俗博物館研究報告』第151集。
- 遼寧省文物考古研究所はか 1997 「遼寧朝陽田草沟晋墓」『文物』1997年第11期。
- 遼寧省文物考古研究所はか 2004 「遼寧省北票喇嘛洞墓地1998年發掘報告」『考古學報』2004年第2期。
- 陳山 2013 「喇嘛洞墓地三燕文化居民人骨研究」科学出版社。

挿図出典

- 図1・6: 万欣2010 図2: 謙早2014 図3・4: 筆者実測 図5: 万欣2010を改変
表1: 筆者作成



1. 鉄矛：上からM10、M8、M14出土



2. 鉄斧：左M10、右M3出土



3. 金銅耳環：M21出土（ほぼ等倍）



4. 金銅耳環：M16出土（ほぼ等倍）



5. 銅鏡：M21出土（等倍）

図版1 大板宮子墓地の副葬品1



1. 鉄鎌：左からM2、M20、M6、M4、M6出土（1/2）



2. 鉄釘：M8出土（1/2）



3. 五銖銭：M13出土 4. 花弁形飾具：M20出土



5. 紡錘車：左からM16、M21、M21出土

図版2 大板宮子墓地の副葬品2



1. 銅鉤：上からM1、M22、M21出土（等倍）



2. 銀耳環：M16出土（等倍）



3. 金銅耳環：M2出土（等倍）



4. 銀指環：M7出土（等倍）



5. 銅指環：M1出土（等倍）



6. 鐵指環：M14出土（等倍）



7. 瑪瑙玉：M7出土（等倍）

図版 3 大板宮子墓地の副葬品 3

北票大板营子墓地出土陶器研究

王 宇

大板营子墓地位于辽宁省北票市大板镇波汰沟村大板营子村民组西侧台地上，东北距大板镇6公里。1994年秋，1999年7月、9月，共经三次发掘，其中第一次共发掘墓葬5座（94BDM1、94BDM2、94BDM3、94BDM4、94BDM10）。第二、三次共发掘墓葬23座（99BDM1—99BDM23）。第一次发掘的5座墓葬中，只有94BDM2和94BDM3保存较好，共发现陶器9件，其中1件颈部残损，不能辨识器形。第二、三次发掘共出土陶器61件，除3件纺轮和残器外，可辨识器形的陶器共57件。现以这三次发掘中发表的陶器为资料，对该墓地进行初步研究。

1. 大板营子墓地出土陶器类型分析

按照器形不同，大板营子墓地出土陶器可分为壺、罐2类。

壺 26件。均为泥质陶，套接轮修。按照器形不同，可分为2型。

A型 25件。展沿，束颈，溜肩，弧腹，平底。多数在颈部饰竖向磨光暗纹。按照整体器形，可分为2亚型：

Aa型 器形较大，腹部较深，整体瘦高，高度一般在20厘米以上。99BDM11：1，圆唇，展沿，束颈，溜肩，深弧腹，平底。颈部饰竖向磨光暗纹，其下饰刻划弦纹，弦纹间夹饰水波纹。口径13.6、腹径21.5、底径10.2、高25.5厘米（图一，1）。

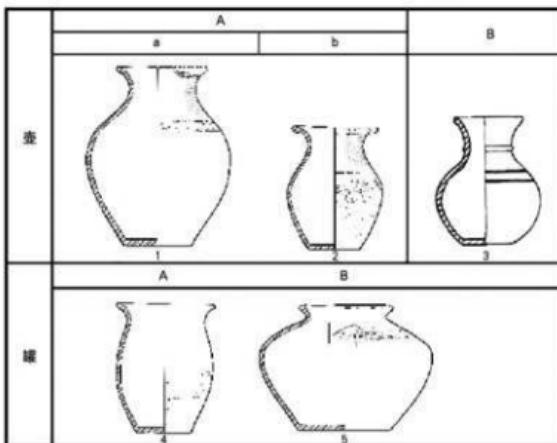
Ab型 器形较小，腹部较浅，高度一般在15厘米左右。99BDM12：3，舌状唇，展沿，束颈，溜肩，弧腹，平底。肩部饰竖向磨光暗纹，其下饰1周刻划弦纹，腹部饰压印席纹。口径9.8、腹径10.8、底径5.8、高15.4厘米（图一，2）。

B型 1件。94BDM1：2，侈口，束颈，溜肩，弧腹，平底。颈部有1周泥条附加堆起的凸棱，肩部饰2周刻划弦纹。口径10、底径7.6、高18.8厘米（图一，3）。

罐 37件，按照质地可分为2型。

A型 27件。夹砂陶。多为套接轮修，个别手制。侈口，束颈，弧腹，平底。多数为素面，个别在颈部饰刻划纹饰。99BDM10：4，残。灰陶。圆唇，展沿，弧腹，底部不平整。素面。口径12.3、腹径12、底径6.8、高16.2厘米（图一，4）。

B型 10件。泥质陶。口沿形制较丰富，溜肩，弧腹，平底。多数在肩部饰刻划纹，个别在颈部饰磨光暗纹、腹部饰截印纹饰。99BDM6：7，完整。灰陶。轮制，近底部有套接痕迹。方唇，侈口，溜肩，斜腹，平底。肩部饰压印麦穗和网格相间的纹饰。肩上有3道划



图一 大板营子墓地出土陶器类型图

1. 99BDM11:1 2. 99BDM12:3 3. 94BDM1:2 4. 99BDM10:4 5. 99BDM6:7

痕。口径10.2、腹径19.7、底径9.9、高13.5厘米(图一、5)

2. 大板营子墓地出土陶器纹饰

(1) 纹饰分类

按照施纹方式可分为4类：磨光暗纹、刻划纹、截印纹和压印纹。

① 磨光暗纹

磨光暗纹的施纹方法是在陶器成胎后，用硬质地工具如鹅卵石等在陶器表面划出纹饰后再进炉烧造。大板营子墓地出土陶器的磨光暗纹饰共4类：

A：竖向磨光暗纹，饰于器物的颈部，可分为单道竖向施纹、2道为一组竖向施纹、3道为一组竖向施纹3种。施这种磨光暗纹的大多为A型壶，少数B型罐上也有(图二、1、2、3)。

B：网格状磨光暗纹，饰于器物的腹部，施纹器类为A型壶(图二、4)。

C：通体磨光，磨光的方向一致，整体比较凌乱，施纹器类为A型罐。

D：局部磨光，主要施纹部位为腹部，方向有横向也有纵向，各类器形均有这种施纹方式。如99BDM20:1的A型罐腹部磨光；99BDM18:3的B型罐口沿内部有不规则磨光，肩部凹弦纹之间磨光(图二、5、6)。

除通体磨光的暗纹之外，磨光暗纹一般与其他纹饰结合施纹，包括两种磨光暗纹结合施



图二 陶器纹饰

1. 99BDM5:2 2. 99BDM11:1 3. 99BDM18:3 4. 99BDM12:1 5. 99BDM20:1 6. 99BDM18:3
7. 99BDM13:2 8. 99BDM14:2 9. 99BDM10:3 10. 99BDM20:1 11. 99BDM2:3
12. 99BDM12:3 13. 99BDM20:3

纹，如颈部竖向磨光暗纹和腹部网格状磨光暗纹结合施纹，这种施纹方式在陶壶上最常见。

② 刻划纹

刻划纹的施纹方式是在陶器成胎后，用尖状物体刻划出纹饰形状。一般施在陶器肩部、夹砂罐的颈部，施1周或2周。大板营子墓地出土陶器的最常见的施纹方式是刻划纹，有3种：凹弦纹、水波纹和垂幔纹。有的与其他纹饰结合，有的单独使用（图二、7、8、9）。施纹器类包含所有陶器类型。

③ 截印纹

截印纹的施纹方式是在陶器成胎后，用尖状物体在器表截印出纹饰。大板营子墓地出土带有截印纹的陶器共5件，均为篦点纹，有的是单个工具截点，有的并列一排的工具截点，一般施在器物的颈部或肩部（图二、10、11）。

④ 压印纹

压印纹的施纹方式有2种：

A在陶器成胎后，用模印纹饰的滚轮状工具在陶器的施纹处环状滚过，压印出纹饰。采用这种施纹方式的陶器共3件，器形有A型壶和B型罐，纹饰为“米”字纹和菱形纹相间的席纹（图二、12）。

B在陶器成胎后，用楔形工具在器表压印出纹饰，采用这种施纹方式的陶器仅1件，A型壶99BDM20：3（图二、13）。

（2）纹饰组合（见表一）

施于A型壶的纹饰可分为3部分：颈部、肩部及腹部。颈部所施纹饰皆为竖向磨光暗纹；肩部所施纹饰有刻划纹和截印纹2类，其中刻划纹为凹弦纹和水波纹，截印纹为篦点纹；腹部所施纹饰有磨光暗纹和压印纹2类，其中磨光暗纹为网格纹，压印纹有席纹和楔形纹。

施于B型壶的纹饰仅1种，即在肩部饰2周的凹弦纹。

施于A型罐的纹饰可分为颈部和腹部两部分：颈部纹饰有刻划纹和截印纹，刻划纹为凹弦纹和水波纹，截印纹均为篦点纹；腹部纹饰为不规则的磨光暗纹。

施于B型罐的纹饰可分为颈部和肩部两部分：颈部纹饰为竖向磨光暗纹；肩部纹饰有磨光暗纹、刻划纹和压印纹3种，磨光暗纹为不规则的横向磨光，刻划纹为凹弦纹和垂幔纹，压印纹饰为席纹。

表一 大板营子墓地出土陶器纹饰表

施纹位置	A型壶	B型壶	A型罐	B型罐
颈部	竖向磨光暗纹		弦纹、水波纹、篦点纹	竖向磨光
肩部	凹弦纹、水波纹、篦点纹	凹弦纹		凹弦纹、垂幔纹、篦点纹、局部磨光
腹部	席纹、楔形纹、网格纹		不规则磨光	

3. 大板营子墓地出土陶器组合

大板营子墓地出土陶器类型较少，组合相对单一，最常见的陶器组合为A型壶与A型罐，共9座墓；其次为A型壶、A型罐及B型壶，共5座墓；A型罐与B型罐，2座墓；A型壶、A型罐及其他陶器组合，1座墓；B型壶与B型罐，1座墓；A型壶与其他陶器组合，1座墓葬；单一种陶器如A型壶、A型罐或者B型罐，共7座墓（表二）。

表二 大板营子墓地出土陶器组合表

分类	陶器组合	墓葬
I	A型壶、A型罐	99BDM2, 99BDM3, 99BDM5, 99BDM8, 99BDM11, 99BDM12, 99BDM13, 99BDM20, 99BDM21
II	A型壶、A型罐、B型罐	99BDM3, 99BDM6, 99BDM10, 99BDM15, 99BDM19
III	A型罐、B型罐	99BDM14, 99BDM18
IV	A型壶、A型罐、其他	99BDM7
V	B型壶、B型罐	99BDM1
VI	A型罐、其他	99BDM22
VII	A型壶	99BDM2
VIII	A型罐	99BDM1, 99BDM4, 99BDM9, 99BDM16
IX	B型罐	99BDM4, 99BDM23

4. 大板营子墓地出土陶器年代

大板营子墓地出土陶器中，Aa型壶与锦州前燕李廆墓^[1]出土陶壶形制相似；Ab型壶与内蒙古科左后旗舍根墓地2043^[2]、巴林左旗南杨家营子墓地的M3：35^[3]、科左中旗六家子墓群壶104相似^[4]；B型壶与科左后旗新胜屯M2：1形制相似^[5]；A型罐与北票喇嘛洞M204：1^[6]、新胜屯M2：5、北票房身村晋墓^[7]出土陶罐形制相同。B型壶在内蒙古科右中旗北玛尼吐墓群^[8]、北票房仓窖墓^[9]、新胜屯墓地、朝阳王子坟山墓群^[10]等墓葬中均有发现。

大板营子墓地陶器纹饰以磨光暗纹和压印纹饰为主要特色。这两种纹饰都是鲜卑陶器中常见的纹饰。年代相对较早的舍根墓地、六家子墓地出土陶器的纹饰都是以这两种为主。而年代更早的南杨家营子墓地只有截印纹和压印纹，而没有磨光暗纹。磨光暗纹的普遍使用出现在辽西地区，说明大板营子墓地年代不会早于舍根墓地和六家子墓地。

大板营子墓地出土陶器以I类组合为主，即A型壶和A型罐。现能确定的属于早期慕容鲜卑的遗存出土陶器组合即为I类组合如舍根墓地；北票、朝阳地区十六国时期年代相对较早的遗存如北票房身村晋墓、朝阳王子坟山墓群等都以这两种器物为基本陶器组合。而从北票房仓窖鲜卑墓之后，随着A型罐的减少，I类组合也逐渐消失。因此I类组合流行年代当

早于或同于以上墓葬年代。

仅次于 I 类陶器组合，大板营子墓地另一组常见的陶器组合是 II 类陶器组合即 A 型壺、A 型罐与 B 型罐。B 型罐以汉式为主，在中原汉晋墓葬中多有发现，北方十六国墓葬中亦有大量出土^[11]。B 型罐的出现虽然晚于 A 型壺和 A 型罐，但却不晚于前燕时期，在墓葬中一直沿用到北燕时期如朝阳袁台子北燕墓出土了同类陶罐^[12]。因此，II 类陶器组合的年代上限晚于 I 类陶器组合，下限与 I 类陶器组合相同。

徐基先生在《关于鲜卑慕容部遗存的初步考察》一文中首先将这些以 I 类、II 类陶器组合为主的墓葬，定性为鲜卑慕容部遗存，得到学术界认可，并认为其年代为东汉后期至魏晋时期^[13]。这些遗存中，六家子墓地年代为东汉晚期至西晋；王子坟山墓群、新胜屯墓地年代与之相比稍晚；喇嘛洞墓地的发掘者将其年代定为慕容廆迁辽（289 年）至前燕早期；房身晋墓年代被普遍认为是前燕建国前至前燕早期；李廆墓有明确纪年，墓表的纪年为“永昌三年”（应为东晋太宁二年），即 324 年。因此，就大板营子墓地出土陶器来看，该墓地年代应与以上遗存相近，为 3 世纪末至 4 世纪初。

5. 大板营子墓地出土陶器与相关墓地出土陶器类比研究

大板营子墓地出的几类陶器在东汉末年至西晋时期的内蒙东部和辽西地区的鲜卑慕容部比较常见。出土这几类陶器的墓葬有科左中旗六家子墓地、科左后旗舍根墓地、呼伦贝尔市扎赉诺尔墓群^[14]、额尔古纳右旗拉布达林墓地^[15]、扎鲁特旗额日格吐墓群^[16]、新巴尔虎左旗伊和乌拉鲜卑墓^[17]、额尔古纳市七卡墓地^[18]、乌兰察布卓资县石家沟墓群^[19]、科左后旗新胜屯墓地、朝阳十二台乡砖厂 88M1^[20]、朝阳田草沟 M1、M2^[21]、朝阳王子坟山墓地、北票喇嘛洞墓地、朝阳前山十六国墓^[22]、北票仓粮窖墓、锦州李廆墓等。

按照出土陶器组合和形制，以上墓葬可分为 4 组（图三）：

A 组 扎赉诺尔墓群、拉布达林墓地、七卡墓地。这三个墓地皆位于内蒙古东部偏北，墓葬形制均为土圹墓，出土陶器、铜铁工具、马具、骨器等，扎赉诺尔墓群还出土了桦树皮器。这些墓葬出土的陶器以夹砂陶为主，器形以罐、壺为主，形制与大板营子墓地 A 型罐相近，口径远大于底径，最大腹径位置在器身中部偏上。

以上这些墓地，年代均为东汉晚期，被认为是早期鲜卑遗存，即拓跋鲜卑早期墓葬^[23]。该组墓葬的陶器中开始出现 A 型罐。

B 组 南杨家营子墓地、伊和乌拉鲜卑墓、舍根墓群、六家子墓地。以上墓地集中分布在通辽市及其附近，即西拉木伦河流域。该组墓葬形制除土坑墓外还有石构墓，多为单人葬，随葬马、牛肢骨。出土器物有陶器、玉石器、骨器等。陶器器类包括壺、罐，其中壺多为泥质灰陶，侈口，展沿，舌状唇，形制与大板营子墓地 A 型壺相同。罐均为夹砂陶，与大板营子 A 型罐形制相近或相同。该组墓葬的陶器组合为 A 型壺和 A 型罐，即大板营子 I 类陶

器组合。器物施纹方式也形成以颈部、肩部、腹部为单元的形式，纹饰以截印、压印纹为主，开始出现少量磨光暗纹。其中，南杨家营子墓地出土陶器除上述两类外还有束颈壶、杯、壺、罐的纹饰主要为截印篦点纹，出土东汉中晚期的五铢钱，被认为是拓跋鲜卑南迁的遗存。伊和乌拉鲜卑墓出土陶器组合与辽西地区的鲜卑墓相同，被认为是与早期拓跋鲜卑有较多联系，又与东部鲜卑有一定联系的遗存^[24]。六家子墓地出土遗存类型相对比较丰富，包括金牌饰、指环等饰品，出土“三公”镜、连弧纹镜，年代为东汉晚期到西晋时期，被认为与宇文鲜卑相关。

该组墓葬年代为东汉晚期到西晋时期。从文化性质看，均为鲜卑或与鲜卑相关的遗存，其中舍根墓群被多数学者认为是早期慕容鲜卑遗存。

该组遗存开始出现A型壶与A型罐的陶器组合，即I类陶器组合。A型壶中以Ab型居多。罐的数量多于壶。纹饰以压印席纹、截印纹为主，其次为磨光暗纹。

C组 新胜屯墓地，房身村M3，十二台乡M7022，仓粮窖墓，喇嘛洞M204、M336、大板营子墓地等。该组遗存分布于朝阳、北票附近的大凌河流域。出土陶器组合仍以I类陶器组合为主，即A型壶和A型罐。此外，该组出现了在颈部施凸棱的泥质壶，即大板营子墓地B型壶和与中原地区汉墓出土陶罐形制相似的泥质罐，即大板营子墓地的B型罐，同时开始出现其他类型陶器组合。该组陶器纹饰磨光暗纹增多，成为主要陶器纹饰。

新胜屯墓地墓葬共分3排，出土陶器、玉石器、铁器等。陶器共9件，器形有壶、罐2类。此外墓地采集标本有三足尊、压印奔马纹的陶片等。年代与舍根墓地、六家子墓地相近。房身村晋墓共发掘墓葬3座，均为石板墓，出土陶器、金银饰品等。其中M3出土陶器2件，其一为泥质陶壶，形制与大板营子墓地A型壶相同，一为夹砂罐，形制与大板营子墓地A型罐相同。年代为晋代。喇嘛洞墓地共发掘三燕时期墓葬416座，多数为长方形土圹墓，少数为石板墓，出土大量陶器、铜器、铁器、金银器、骨器、玉石器等。其中陶器以壶、罐为主，部分陶器形制与大板营子墓地出土陶器相同。年代为3世纪晚期到4世纪上半叶。

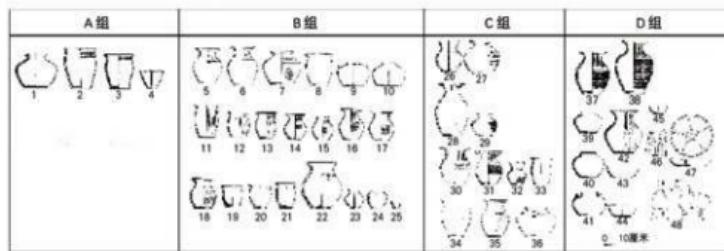
该组墓葬年代与B组相近或略晚，被认为是三燕文化遗存^[25]及与之相关的遗存，在保留鲜卑文化特征的同时，受周边文化影响，增添了新器形，形成新的陶器组合。该组遗存出现B型壶和B型罐，A型壶数量开始多于A型罐。陶器纹饰以压印席纹、磨光暗纹为主。

D组 前山十六国墓、李廆墓、田草沟晋墓。该组遗存位于辽宁省朝阳市、锦州市附近的大、小凌河流域。田草沟M1为石椁墓，前山十六国墓、李廆墓为砖室墓。该组遗存不见A型罐，出土陶器仍以A型壶为主。此外还有B型罐。另外前山十六国墓和李廆墓出土中原汉墓中常见的陶器，如俑、盒等。陶器除A型壶外皆为素面，A型壶的纹饰以磨光暗纹、压印纹、刻划纹为主，不见截印纹。

该组墓葬中，李廆墓有明确纪年，应为324年。锦州前山墓的墓葬形制为南方地区两晋时代流行的墓葬形制，因此该组墓葬年代大致为两晋之际，与C组相近或略晚。

该组遗存的陶器组合A型罐消失，以A型壶为主，B型罐比例增加。纹饰仍以压印席纹和磨光暗纹为主，截印纹几乎不见。

各组遗存从年代上看，A组为东汉时期，B组为东汉晚期，C组为东汉晚期到西晋，D组为两晋之际，后三组墓葬年代比较接近，且有重合，其文化面貌的差异，当为文化因素不同所致。



图三 相关遗存陶器分组图

1-4. 卓资县石家沟墓群出土 5-10. 六家子墓地出土 11-17. 舍根墓群出土 18-25. 南杨家营子
26-27. 喀喇河M363出土 28-29. 喀喇河M49出土 30-33. 新胜屯M22出土 34-36. 大板营子M66出土
37-38. 李庵墓出土 39-48. 前山十六国墓出土

从文化内涵看，A组被认为是拓跋鲜卑的早期遗存。这组遗存中，出土的梯木弓、弓囊、骨镞、骨弓弭、骨鸣镝、铁镞等，随葬马头、羊头等，对应文献记载拓跋鲜卑“畜牧迁徙，射猎为业”（《魏书·帝纪·序纪》）的生计模式。该组遗存中可见明显的匈奴文化因素，如动物形象及双耳等。B组遗存分布于A组遗存之南，其中南杨家营子墓地和伊和乌拉鲜卑墓被认为是晚于A组的拓跋鲜卑遗存，应为拓跋鲜卑南迁过程中的遗存。而舍根墓群为早期慕容鲜卑遗存。C组遗存为慕容鲜卑相关遗存。参考朝阳北票地区的史地沿革，慕容鲜卑初居辽西的时间为3世纪初^[26]至莫护跋迁入辽东北之前^[27]。慕容鲜卑第二次居辽西的时间为289年慕容廆迁回徒河之青山^[28]至咸康七年（341）迁都龙城^[29]。D组遗存中，有明显的汉文化因素，前山十六国墓和李庵墓墓葬形制与中原地区东晋时期砖椁墓相似。陶器中的钵、俑、鞍马、果盒等为中原器物。其中李庵墓墓表记录墓主人为来自中原的汉族人。同为D组的朝阳田草沟M1为石椁墓，随葬牛腿骨，出土金步摇等典型慕容鲜卑器物，为这一时期慕容鲜卑的代表遗存。

从陶器组合看，四组遗存陶器发展演变为，A组出现A型罐，B组出现A型壶，并形成I类陶器组合，即A型壶与A型罐共存，且壶中以Ab型壶为主；C组出现B型壶和B型罐，A型罐数量减少，A型壶数量增多，尤其是Aa型壶数量比例提高；D组，A型罐消失，B型罐数量增多。

与大板营子墓地陶器相似的遗存其陶器组合以I类为主，其中A型罐更具备早期文化特

征，B型罐则是晚期鲜卑文化受汉文化影响的产物。大板营子墓地是C组遗存中A型罐数量比例最高的，陶器纹饰也以兼备压印纹、截印纹、磨光暗纹等，比C组的其他遗存更具备早期特征。因而，大板营子墓地应为自内蒙古北部南下的鲜卑文化进入大凌河流域的相对较早的一批遗存，具备过渡时期的特征。

注

- [1] 辛发·鲁宝林·吴鹏：《锦州前山李廆墓清理简报》，《文物》，1995年第6期。
- [2] 张柏忠：《哲里木盟发现的鲜卑遗存》，《文物》，1981年第2期。
- [3] 中国社会科学院考古研究所内蒙古文物工作队：《内蒙古巴林左旗南杨家营子的遗址和墓葬》，《考古》，1964年第1期。
- [4] 张柏忠：《哲里木盟发现的鲜卑遗存》，《文物》，1981年第2期；张柏忠：《内蒙古科左中旗六家子鲜卑墓群》，《考古》，1989年第5期。
- [5] 田立坤：《科左后旗新胜屯鲜卑墓地调查》，《文物》，1997年第11期。
- [6] 辽宁省文物考古研究所·朝阳市博物馆·北票市文物管理所：《辽宁北票喇嘛洞墓地1998年发掘报告》，《考古学报》，2004年第2期。
- [7] 陈大为：《辽宁北票房身村晋墓发掘简报》，《考古》，1960年第1期。
- [8] 钱玉成·孟建仁：《科右中旗巴丹尼吐鲜卑墓群》，《内蒙古文物考古文集》，中国大百科全书出版社。
- [9] 孙国平·李智：《辽宁北票仓根窑鲜卑墓》，《文物》，1994年第11期。
- [10] 辽宁省文物考古研究所·朝阳市博物馆：《朝阳王子坟山墓群1987、1990年度考古发掘的主要收获》，《文物》，1997年第11期。
- [11] 张小舟：《北方地区魏晋十六国墓葬的分区与分期》，《考古学报》，1987年第1期。
- [12] 泰强：《朝阳发现的北燕墓》，《北方文物》，2007年第3期。
- [13] 徐基：《关于鲜卑慕容部遗存的初步考察》，《中国考古学会第六次年会论文集》，文物出版社，1990年。
- [14] 内蒙古文物考古研究所：《扎赉诺尔古墓群1986年清理发掘报告》，《内蒙古文物考古文集》，中国大百科全书出版社，1994年；王成：《扎赉诺尔河古墓清理简报》，《北方文物》，1987年第3期。
- [15] 内蒙古文物考古研究所·呼伦贝尔盟文物管理站·额尔古纳右旗文物管理所：《额尔古纳右旗拉布达林鲜卑墓群发掘简报》，《内蒙古文物考古文集》，中国大百科全书出版社，1994年。
- [16] 丽丽娟·刘桂兰：《扎鲁特旗额日格吐鲜卑墓》，《内蒙古文物考古》，2007年第2期。
- [17] 呼伦贝尔盟文物管理站：《新巴尔虎左旗伊和乌拉鲜卑墓》，《内蒙古文物考古文集（第二辑）》，中国大百科全书出版社，1997年。
- [18] 呼伦贝尔盟文物管理站·额尔古纳右旗文物管理所：《额尔古纳右旗七卡鲜卑墓清理简报》，《内蒙古文物考古文集》，中国大百科全书出版社，1994年。
- [19] 内蒙古博物馆：《卓资县石家沟墓群出土资料》，《内蒙古文物考古》，1998年第2期。
- [20] 张克华·田立坤·孙国平：《朝阳十二台乡砖厂88M1发掘简报》，《文物》，1997年第11期。
- [21] 辽宁省文物考古研究所·朝阳市博物馆·朝阳县文物管理所：《辽宁朝阳甜草沟晋墓》，《文物》，1997年第11期。
- [22] 李宇峰：《辽阳朝阳两晋十六国时期墓葬清理简报》，《北方文物》，1986年第3期。
- [23] 宿白：《东北、内蒙古地区的鲜卑遗迹·鲜卑遗迹辑录之一》，《文物》，1977年第5期；孙危：《内蒙古地区鲜卑墓葬的初步研究》，《内蒙古文物考古》，2001年第1期。
- [24] 孙危：《内蒙古地区鲜卑墓葬的初步研究》，《内蒙古文物考古》，2001年第1期。
- [25] “三燕文化遗存”最早由田立坤先生提出，“三燕文化遗存是慕容鲜卑在汉文化的强烈影响下，同时也

- 受到匈奴、高句丽等程度不同的影响而形成的一种具有自身特点的文化遗存。”（田立坤：《朝阳发现的三燕文化遗物及相关问题》，《采钢集》，文物出版社，2016年）
- [26] 《晋书·慕容廆载记》“曾祖莫护跋魏初率其部入居辽西……始建国于棘城之北”。大棘城即今朝阳市（田立坤：《棘城新考》，《辽海文学刊》，1996年第2期）。
- [27] 莫护跋东迁年代无考，马长寿先生在《乌桓与鲜卑》一书中论述辽东北的原因是太康二年(281)叛晋兵败之故，故辽东北的时间应在281年左右。
- [28] 《晋书·慕容廆载记》，2804页，中华书局，1974年。
- [29] 《晋书·慕容皝载记》，2822页，中华书局，1974年。

北票大板營子墓地出土土器の研究

王 宇

大板營子墓地は遼寧省北票市大板鎮波台村大板營子村民組の西側台地上にあり、大板鎮から東北に6kmの地点に位置する。1994年秋、1999年7月と9月の合計3回の発掘がおこなわれている。このうち第1次調査で合計5基の墓(94BDM1、94BDM2、94BDM3、94BDM4、94BDM10)を発掘し、第2・3次調査で合計23基の墓(99BDM1~99BDM23)を発掘した。第1次発掘の5基の墓のうち、94BDM2と94BDM3のみが比較的の残存状況が良好で、計9点の土器を公表したが、このうち1点は頭部が破損しており器形を識別できない。第2・3次発掘では、全部で61点の土器が出土し、2点の土製紡錘車を除くと、器形を識別できる土器は全部で57点である。ここではこの3回の発掘であきらかとなった土器を資料として、大板營子墓地に関する基礎的な研究をおこなう。

1. 大板營子墓地出土土器の型式分類

器形の違いにもとづき、大板營子墓地で出土した土器は壺と罐の2種類に区分できる。

壺 26点。すべて泥質陶で、輪積みで成形して輥轆で形を整えている。器形の違いから2型式に分けられる。

A型 25点。口縁部は外反し、頭部はしまる。肩部は張り、胴部は弧状に膨らみ、平底である。多くが頭部を縱方向の暗文で飾る。全体の器形から、2つの垂型式に分けることができる。

Aa型 器形は比較的大型で、身は深く、器高は基本的に20cm以上を測る。99BDM11:1は、口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。頭部はしまり、肩部は張り、胴部は丸みを帯びる、平底である。頭部は縱方向の暗文で飾り、その下を弦文で区切り、弦文の間を波状文で飾る。口径13.6cm、腹部最大径21.5cm、底径10.2cm、器高さ25.5cm(図一-1)。

Ab型 器形は比較的小型で、身はあまり深さがなく、器高は基本的に15cm前後である。99BDM12:3は、口縁部は外反し、端部は舌丈にやや尖り気味に丸くおさめる。頭部はしまり、肩部は張り、胴部は弧状に膨らみ、平底である。肩部は縱方向の暗文で飾り、その下には1周の弦文をめぐらせ、胴部は模様目状の印文で施文する。口径9.8cm、腹部最大径10.8cm、底径5.8cm、器高15.4cm(図一-2)。

B型 1点。94BDM1:2は、口縁部が大きく開き、頭部はしまり、肩部は張り、胴部は弧状に膨らむ。平底である。頭部には1周の粘土紐を貼りつけた突帶をめぐらせ、肩部

に2本の弦文を施文する。口径10cm、底径7.6cm、器高18.8cm(図一-3)。

罐 37点。胎土によって2型式に分けることができる。

A型 27点。夾砂陶。多くが輪積みによって成形して輥轆で形を整えており、まれに手捻りのものがある。口縁部は外反し、頸部はしまり、胴部は弧状に膨らむ。平底である。多くが素文で、まれに頸部に刻画文を施文する。99BDM10:4は破損資料である。灰陶。口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。胴部は弧状に膨らみ、底部は平坦ではない。素文。口径12.3cm、腹部最大径12cm、底径6.8cm、器高16.2cm(図一-4)。

B型 10点。泥質陶。口縁部の形はやや多様で、肩部が張り、胴部は弧状に膨らむ。平底である。多くが肩部に竈描文を施すが、まれに頸部を暗文、胴部を印文で装飾する。99BDM6:7は完形である。灰陶。輥轆を用いており、底部近くに輪積みの痕跡がみられる。口縁部は大きく開き、端部は面をもつ。肩部は張り、平底の底部から斜めに立ち上がり胴部へいたる。肩部には綾紋印と網目印文が交互になつた文様を飾る。肩上には3本の線刻がある。口径10.2cm、腹部最大径19.7cm、底径9.9cm、器高13.5cm(図一-5)。

2. 大板営子墓地出土土器の文様

(1) 文様の分類

施文方法によって暗文、竈描文、刺突文、印文の4類に分けることができる。

① 暗文

暗文の施文方法は土器を成形した後、例えば玉石のような硬い工具を用いて土器表面に施文したのち再び焼成する。大板営子墓地出土土器の暗文は、全部で4類がある。

A：縦位暗文で、頸部を飾る。一条の縦位暗文、2条1組の縦位暗文、3条1組の縦位暗文の3種類に分けることができる。このような暗文を施すのは、多くはA型壺で、少数のB型罐上にも存在する。

B：格子状暗文で、胴部を飾る。A型壺に施文される。

C：土器全体をみがく。ミガキの方向は同一で、全体はやや乱れている。A型罐に施文される。

D：一部をみがく。主な施文部位は胴部で、方向は横方向も縦方向もある。各型式の土器にいずれもこの種の施文方法のものがある。例えば、99BDM20:1A型罐には胴部に、99BDM18:3 B型罐の口縁部内面には不規則なミガキがあり、肩部の弦文の間にミガキが施されている(図二-5・6)。

土器全体をみがくものをぞき、暗文は一般的にその他文様と組み合わせて施文される。2種類の暗文を組み合わせた施文方法もこれに含まれ、例えば頸部の縦位暗文と胴部の格子状暗文を組み合わせたものがある。このような施文方法は壺で多用される。

② 篦描文（刻画文）

刻画文の施文方法は、土器を成形した後、尖った工具を用いて文様を刻み出す。一般的に土器の肩部や夾砂罐の頸部に1周から2周をめぐらす。大板营子墓地出土土器にもっともよくみられる施文は篦描文で、凹弦文、波状文、垂幔文の3種類がある。あるものはその他の文様と組み合わせたり、あるものは単独で使用される（図二-7・8・9）。すべての型式にこの文様が施文された器種がみられる。

③ 刺突文

刺突文の施文方法は、土器を成形した後、尖った工具で器面を突いて施文する。大板营子墓地は刺突文のある土器が計5点出土しており、これらはいずれも篦状工具による列点文である。あるものは単体の工具の刺突で、あるものは1列に並んだ工具による刺突で施されている。一般的に頸部あるいは肩部に施文する。

④ 印文

印文の施文方法には2種類ある。Aは土器を成形した後、文様が刻まれた環状の工具を用い、器面上を転がして文様を押し出してゆく。この施文方法を採用した土器は全部で3点ある。器形にA型壺とB型罐があり、「米」字文と菱形文が交互になった模様目状の文様である。

Bは土器を成形した後、楔形の工具を用いて器面に文様を押し出す。この種の施文方法を採用した土器は1点で、A型壺99BDM20:3である（図二-13）。

（2）文様の組み合わせ（表1参照）

A型壺の文様は、頸部、肩部、胴部の3ヵ所に分けることができる。頸部の文様はすべて縦位暗文である。肩部は篦描文と刺突文の2種類で、このうち篦描文は弦文と波状文、刺突文は篦列点文である。胴部の文様は暗文と印文の2種類で、このうち暗文は格子状暗文で、印文は模様目状の文様と楔形文である。

B型壺に施文された文様は1種類のみで、肩部に2周の弦文を飾る。

A型罐の文様は、頸部と胴部の両部位に分かれる。頸部文様には篦描文と刺突文があり、刻画文は弦文と波状文、刺突文はすべて篦列点文である。胴部文様は不規則な暗文である。

B型罐の文様は、頸部と肩部の両部位に分かれる。頸部文様は縦位暗文である。肩部文様には暗文、篦描文、印文の3種がある。暗文は不規則な横方向のミガキで、篦描文は弦文と垂幔文、印文は模様目状の文様である。

表1 大板營子墓地出土土器の文様一覧

施文位置	A型壺	B型壺	A型罐	B型罐
頸部	従竪暗文		弦文、波状文、 竪列点文	従竪ミガキ
肩部	凹弦文、波状文、 竪列点文	凹弦文		凹弦文、重綾文、 竪列点文、部分的な ミガキ
胴部	萬葉目状の文様、 横形文、格子状暗文		不規則なミガキ	

3. 大板營子墓地出土の土器組成

大板營子墓地出土土器の型式は比較的少なく、組成も相対的に単純である。もっとも一般的な土器組成はA型壺・A型罐で、合計9基ある。その次がA型壺・A型罐・B型罐で、合計5基。A型罐・B型罐の組み合わせは2基である。A型壺・A型罐・その他の土器の組み合わせが1基、B型壺・B型罐が1基、A型壺・その他の土器の組み合わせが1基ある。1種類の土器のみが出土した墓は合計7基あり、それはA型壺、A型罐、B型罐である（表2）。

表2 大板營子墓地出土土器の組合せ

分類	土器の組合せ	墓番
I	A型壺、A型罐	99BDM2, 99BDM3, 99BDM5, 99BDM8, 99BDM11, 99BDM12, 99BDM13, 99BDM20, 99BDM21
II	A型壺、A型罐、B型罐	99BDM3, 99BDM6, 99BDM10, 99BDM15, 99BDM19
III	A型罐、B型罐	99BDM14, 99BDM18
IV	A型壺、A型罐、その他	99BDM7
V	B型壺、B型罐	94BDM1
VI	A型罐、その他	99BDM22
VII	A型壺	94BDM2
VIII	A型罐	99BDM1, 99BDM4, 99BDM9, 99BDM16
IX	B型罐	94BDM4, 99BDM23

4. 大板營子墓地出土土器の年代

大板營子墓地出土土器のうち、Aa型壺は李魔墓⁽¹⁾で出土した壺と形が類似する。Ab型壺は科爾沁左翼後旗の内蒙古舍根墓地2043⁽²⁾、巴林左旗の南楊家營子墓地M3:35⁽³⁾、内蒙古科爾沁右翼中旗の六家子墓群の壺104⁽⁴⁾と類似する。B型壺は科爾沁左翼後旗の新勝屯M2:1⁽⁵⁾に類似する。A型罐は北票市の喇嘛洞M204:1⁽⁶⁾、新勝屯M2:5、房身村晋墓出土陶罐⁽⁷⁾と形が共通する。B型壺は内蒙古科爾沁右翼中旗の北瑪尼吐墓群⁽⁸⁾、

北票の倉糧窖墓⁽⁹⁾、新勝屯墓地、朝陽の王子墳山墓群⁽¹⁰⁾などの墓でいずれも出土している。

大板營子墓地出土土器の文様は、暗文と印文を主な特色とする。この2種類の文様はともに鮮卑土器の中でよくみられる文様であり、年代が相対的に早い舍根墓地と六家子墓地で出土した土器の文様は、いずれもこの両文様を主とする。年代がさらに早い南楊家營子墓地には刺突文と印文のみがあり、暗文はない。遼西地区における暗文の普遍的な使用的開始は、大板營子墓地の年代を舍根墓地と六家子墓地より遅及できないことを示している。

大板營子墓地出土土器は、A型壺とA型罐からなるI類組成を主とする。現在確認できる初期慕容鮮卑の遺跡から出土した土器組成は、舍根墓地がI類組成である。そして、遼寧省北票・朝陽地区にある十六国期の年代が相対的に早い遺跡の北票市房身村晋墓や朝陽王子墳山墓群等は、いずれもこの両種の土器が基本的な土器組成となる。北票市倉糧窖墓以降、A型罐の減少とともにI類組成もまた、次第に消滅する。このためI類組成が流行した年代は、以上墓葬の年代より早い時期か同時期である。

I類組成のつぎに大板營子墓地でよくみられるもう一組の土器組成は、A型壺、A型罐、B型罐を組み合わせとするII類組成である。B型罐は漢式で、中原の漢晋墓で多く発見されており、北方十六国期の墓葬中でもまた大量に出土する⁽¹¹⁾。B型罐の出現はA型壺とA型罐より遅いものの前燕期までは下らず、北燕期の袁台子北燕墓まで継続してこの種の罐が墓から出土する⁽¹²⁾。このため、II類組成の上限年代はI類組成より遅く、下限はI類組成と同じである。

徐基は「鮮卑慕容部遺存に関する初步考察」の中で、まずこのI類とII類組成を主とする墓葬を鮮卑慕容部の遺跡と定め、学界の同意を得て、あわせてその年代を後漢後期から魏晋期にかけてとした⁽¹³⁾。これら遺跡のうち、六家子墓地の年代は後漢晩期から西晋期で、十二台磚廠墓地と新勝屯墓地の年代はこれよりやや下る時期である。喇嘛洞墓地の発掘者は、その年代を慕容廆の遼西遷（289年）～前燕早期とし、房身村晋墓の年代は一般的に前燕建国前～前燕早期と考えられている。李廆墓は明確な紀年をもち、墓標の紀年は「永昌三年」（東晋太元二年に相当）で、すなわち324年である。したがって、大板營子墓地の出土土器からみて、この墓地の年代は上述の遺跡に近いはずで、3世紀末～4世紀初であろう。

5. 大板營子墓地出土土器と関連墓地出土土器との比較研究

大板營子墓地から出土する土器のうち、いくつかの器種は、後漢末年から西晋期の内蒙古東部と遼西地区の鮮卑墓で比較的よくみられる。このような土器が出土した墓には、内蒙古通遼市科爾沁左翼中旗の六家子墓地、科爾沁左翼後旗の舍根墓地、呼倫貝爾市の扎赉

諾爾墓群⁽¹⁴⁾、額爾古納市の拉布達林墓地⁽¹⁵⁾、扎魯特旗の額日格吐墓群⁽¹⁶⁾、新巴爾虎左旗の伊和烏拉鮮卑墓⁽¹⁷⁾、額爾古納市の七卡墓地⁽¹⁸⁾、烏蘭察布盟卓資県の石家溝墓群⁽¹⁹⁾、科爾沁左翼後旗の新勝屯墓地、朝陽の十二台鄉碑廠88M 1号墓⁽²⁰⁾、朝陽の田草溝M 1・M 2号墓⁽²¹⁾、朝陽の王子墳山墓地、北票の喇嘛洞墓地、朝陽の前山十六國墓⁽²²⁾、北票の倉糧窖墓、錦州の李廆墓などがある。

出土土器の組成と型式から、以上の墓を4組に分けることができる（図三）。

A組 扎賚諾爾墓群、拉布達林墓地、七卡墓地。この3墓地は内蒙古東部の北寄りに位置し、墓はいずれも土坑墓で、土器や青銅・鉄製工具、馬具、骨器等が出土した。このうち土器は夾砂土器を主とし、器形は壺と壺が主体を占める。器形は大板營子墓地A型壺と近く、口径は底径よりはるかに大きく、胴部最大径は胴部中位寄りにある。

上述のこれら墓地は、年代はいずれも後漢晩期で、初期鮮卑の遺跡、すなわち初期拓跋鮮卑の遺跡と考えられている⁽²³⁾。

このA組遺跡の土器でA型壺が初めて出現する。

B組 南楊家營子墓地、伊和烏拉鮮卑墓、舍根墓群、六家子墓地。以上の墓地は通遼市およびその付近、すなわち西拉木倫河流域に集中的に分布する。この組の墓には土坑墓の他に石築墓があり、多くは單人葬で、馬や牛の肢骨を副葬する。出土品には土器、玉石器、骨器などがある。土器の器種は壺と罐を含み、このうち壺は多くが泥質灰陶で、口縁部は大きくひらき、端部は舌状にやや尖りぎみに丸くおさめるもので、形態は大板營子墓地A型壺と共通する。このB組墓葬の土器組成はA型壺・A型罐で、すなわち大板營子I類組成である。土器の施文方法もまた、頭部、肩部、胴部を単位とするもので、文様は刺突文と印文を主とし、少量の暗文が出現し始める。このうち南楊家營子墓地出土土器には、上述した器種以外に、さらに束頭壺と杯がある。壺と罐の文様は主に刺突竜列文である。後漢晩期の五銖錢が出土し、拓跋鮮卑の南遷した遺跡と考えられている。伊和烏拉鮮卑墓出土土器の組成は遼西地区の鮮卑墓と同じで、初期拓跋鮮卑と比較的の関係が深いと考えられており、また東部鮮卑と一定の関係がある遺跡と考えられている⁽²⁴⁾。六家子墓地の出土遺物は比較的多く、金牌飾や指輪等の装飾品が出土し、「三公」鏡と連弧文のある鏡が出土し、年代は後漢晩期～西晋期で、宇文鮮卑に関連すると考えられている。

このB組遺跡の年代は後漢晩期～西晋期である。その性格からみて、いずれも鮮卑あるいは鮮卑と関連する遺跡であり、その中の舍根墓群は多くの研究者が初期慕容鮮卑の遺跡と認めている。

このB組遺跡でA型壺・A型罐の土器組成、すなわちI類組成が出現した。A型壺の中ではAb型が多数を占める。そして罐の数が壺より多い。文様は莫蘆目状の印文と刺突文を主とし、そのつぎが暗文である。

C組 新勝屯墓地、房身村3号墓、十二台磚廠M7022、倉糧窖墓、喇嘛洞M204、M336、大板營子墓地等。この組の遺跡は、朝陽と北票市付近の大凌河流域に分布する。出土土器はA型壺・A型罐のI類組成を主とする。この他に、このC組において、頭部に凸稜のある泥質壺である大板營子墓地B型壺と、中原漢墓から出土する陶罐と形が類似する泥質罐の大板營子墓地B型罐が出現し、同時にその他型式の土器を組み合わせた副葬も開始した。このC組遺跡の土器文様は暗文が増え、主要な文様となる。

新勝屯墓地の墓は3列に並ぶ配置で、土器、玉石器、鉄器等が出土した。土器は合計9点で、器形には壺と罐の2種類がある。この他に墓地で採集された資料には、三足尊や疾走する馬を印文文様とする奔馬印文土器片等がある。年代は舍根墓地や六家子墓地と近い。房身村晋墓では合計3基の墓を発掘した。いずれも板石墓で、土器や金銀製飾品等が出土した。このうち3号墓で出土した土器は2点で、うち1点は泥質壺で、形態が大板營子墓地A型壺と共通する。もう1点は夾砂罐で、形態が大板營子墓地A型罐と共通する。年代は晋代である。喇嘛洞墓地では全部で三燕期の墓葬416基を発掘した。多くは長方形土坑墓で、少数が石板墓である。大量の土器、青銅器、鉄器、金銀器、骨器、玉石器等が出土した。このうち土器は壺と罐を主とし、一部の土器の形態が大板營子墓地出土土器と共通する。年代は3世紀末～4世紀前半である。

このC組墓葬の年代はB組に近いかあるいはやや遅く、三燕文化の遺跡⁽²⁵⁾およびそれと関連する遺跡と考えられており、鮮卑文化の特徴をとどめると同時に周辺文化の影響を受けて新たな器形が加わり、新たな土器組成を形成している。

このC組遺跡でB型壺とB型罐が出現し、A型壺の数がA型罐より多くなりはじめる。土器の文様は莫蘆目状の印文と暗文が主体を占める。

D組 前山十六国墓、李廆墓、田草溝晋墓。この組の遺跡は遼寧省朝陽市と錦州市付近の大・小凌河流域にある。田草溝1号墓は石槨墓で、前山十六国墓と李廆墓は磚室墓である。このD組遺跡ではA型罐がみられず、出土土器はA型壺が主で、この他にさらにB型罐がある。この他に、前山十六国墓と李廆墓では中原漢墓でよくみられる桶や盒などの土器類が出土した。土器はA型壺以外はすべて素文である。A型壺の文様は暗文と印文、篦描文を主とし、刺突文はみられない。

このD組墓葬のうち、李廆墓は明確な紀年を持ち、324年である。前山十六国墓の墓構造は南方地区晋晉期に流行した構造である。よって、このD組墓葬の年代はおよそ晋晉交代期で、C組に近いかあるいはやや後出する。

このD組遺跡の土器組成では、A型罐が消失し、A型壺が主となり、B型罐の比率が高まる。文様は莫蘆目状の印文と暗文が主で、刺突文はほぼみられないようだ。

各組の遺跡を年代からみると、A組は後漢期、B組は後漢晉期、C組は後漢晉期～西晋、

D組は両晋交代期である。後者3組の墓葬の年代は比較的近接しかつ重なり合い、その文化様相の違いはまさに文化要素の相違と一致する。

文化内容からみて、A組は拓跋鮮卑の初期の遺跡と考えられている。このA組遺跡では、白桦製の弓、弓筒、骨鎌、骨製弓弭、骨製鳴鈎、鐵鎌等が出土し、馬頭や羊頭などを副葬し、文献に記載された拓跋鮮卑の「畜牧遷徙し、射獵を業と為す」（『魏書』卷1序記）という生業方式に対応する。このA組の遺跡中には、動物図像や双耳腹など、あきらかに匈奴文化の要素がみられる。B組遺跡はA組遺跡の南に分布し、このうち南楊家營子墓地と伊和烏拉鮮卑墓はA組の拓跋鮮卑遺跡より後出する時期と考えられ、拓跋鮮卑の南遷過程中の遺跡である。そして舍根墓群は初期慕容鮮卑の遺跡である。C組遺跡は慕容鮮卑の遺跡である。朝陽・北票地区の歴史沿革を参考にすると、慕容鮮卑が初めて遼西に居住した年代は、3世紀初め⁽²⁶⁾から莫護跋の時期に遼東の北に移動⁽²⁷⁾する前までである。慕容鮮卑の第2次遼西居住期は、289年に慕容廆が徒河の青山に移動⁽²⁸⁾してから咸康七年（341年）の龍城遷都⁽²⁹⁾までである。D組遺跡中にはあきらかに漢文化の要素があり、前山十六国墓と李廆墓の墓構造は中原地区東晉期の磚椁墓に類似し、土器中の鉢、俑、鞍馬俑、果盒等は中原のものである。このうち李廆墓では墓標が出土し、墓主人は中原から来た漢人であると記録する。同じくD組の田草溝M1は石椁墓で、牛の大腸骨を副葬し、金製歩搖など典型的な慕容鮮卑の遺物が出土し、この時期の慕容鮮卑の代表的な遺跡である。

土器の組み合わせからみて、4組の遺跡における土器の変遷は以下の通りである。A組でA型罐が出現する。B組でA型壺が出現し、あわせてA型壺とA型罐のI類組成が形成された。かつ壺の中ではAb型壺が主体となる。C組でB型壺とB型罐が出現する。A型罐の数が減少してA型壺の数が増加し、とりわけAa型壺の比率が高まる。D組でA型罐は消失し、B型罐の数量が増加する。

大板營子墓地の土器と類似する遺跡は、その土器組成はI類組成を主とする。このうちA型罐はより一層早い時期の文化的特徴をそなえている。そしてB型罐は、後期鮮卑文化が漢文化の影響を受けた産物である。大板營子墓地はC組遺跡の中でA型罐の数量比率がもっとも高い遺跡で、土器文様もまた印文、刺突文、暗文等が描い、C組のその他遺跡に比べてより一層早い時期の特徴をそなえている。したがって、大板營子墓地は内モンゴル古北部から南下した鮮卑文化が大凌河流域に入った比較的早い時期の遺跡であり、過渡期の特徴をそなえている。

註

- (1) 辛免・魯宝林・呉鶴「錦州前燕李廆墓清理簡報」「文物」1995年第6期。
- (2) 張柏忠「哲里木盟發現的鮮卑遺存」「文物」1981年第2期。
- (3) 中国社会科学院考古研究所内蒙工作隊「内蒙古巴林左旗南楊家營子的遺址和墓葬」「考古」1964年

- 第1期。
- (4) 同註(2)。
張柏忠「內蒙古科左中旗六家子鮮卑墓群」『考古』1989年第5期。
- (5) 田立坤「科左後旗新勝屯鮮卑墓地調查」『文物』1997年第11期。
- (6) 遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館・北票市文物管理所「遼寧北票喇嘛洞墓地1998年發掘報告」『考古學報』2004年第2期。
- (7) 陳大為「遼寧北票房身村晉墓發掘簡報」『考古』1960年第1期。
- (8) 錢玉成・孟建仁「科右中旗北瑪尼吐鮮卑墓群」『內蒙古文物考古文集』中国大百科全書出版社、1994年。
- (9) 孫國平・李智「遼寧北票倉糧窖鮮卑墓」『文物』1994年第11期。
- (10) 遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館「朝陽王子墳山墓群1987、1990年度考古發掘的主要收穫」『文物』1997年第11期。
- (11) 張小舟「北方地區魏晉十六國墓葬的分區與分期」『考古學報』1987年第1期。
- (12) 蔡強「朝陽發現的北燕墓」『北方文物』2007年第3期。
- (13) 徐基「關於鮮卑慕容部遺存的初步考察」『中國考古學年會第六次年會論文集』文物出版社、1990年。
- (14) 內蒙古文物考古研究所「扎赉諾爾古墓群1986年清理發掘報告」『內蒙古文物考古文集』中国大百科全書出版社、1994年。
- 王成「扎赉諾爾河古墓清理簡報」『北方文物』1987年第3期。
- (15) 內蒙古文物考古研究所・呼倫貝爾盟文物管理局・額爾古納右旗文物管理局「額爾古納右旗拉布達林鮮卑墓群發掘簡報」『內蒙古文物考古文集』中国大百科全書出版社、1994年。
- (16) 閻麗娟・劉桂蘭「扎魯特旗額日格吐鮮卑墓」『內蒙古文物考古』2007年第2期。
- (17) 呼倫貝爾盟文物管理站「新巴爾虎左旗伊和烏拉鮮卑墓」『內蒙古文物考古文集』第2輯、中国大百科全書出版社、1997年。
- (18) 呼倫貝爾盟文物管理局・額爾古納右旗文物管理局「額爾古納右旗七卡鮮卑墓清理簡報」『內蒙古文物考古文集』中国大百科全書出版社、1994年。
- (19) 內蒙古博物館「卓資縣石家溝墓群出土資料」『內蒙古文物考古』1998年第2期。
- (20) 遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館「朝陽十二台鄉磚廠88M1發掘簡報」『文物』1997年第11期。
- (21) 遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館・朝陽縣文物管理所「遼寧朝陽甜草溝晉墓」『文物』1997年第11期。
- (22) 李宇峰「遼寧朝陽發現十六國時期後燕崔述墓碑」『北方文物』1986年第3期。
- (23) 宿白「東北・內蒙古地區的鮮卑遺迹・鮮卑遺迹輯錄之一」『文物』1977年第5期。
孫危「內蒙古地區鮮卑墓葬的初步研究」『內蒙古文物考古』2001年第1期。
- (24) 同註(23)・孫危2001年。
- (25) 「三燕文化の遺跡」は田立坤によって最初に示された。「三燕文化の遺跡は慕容鮮卑が漢文化の強烈な影響下で、同時に匈奴、高句麗等からのまた別の影響も受け形成された一種の独特な特色を持つ文化遺跡である。」(田立坤「朝陽發現的三燕文化遺物及相關問題」『采銅集』文物出版社、2016年。)
- (26) 『晉書』卷108慕容廆載記「曾祖莫護跋、魏初其の諸部を率いて遼西に入居し…始め國を韓城之北に建てる。大韓城はすなわち現在の朝陽市である(田立坤「韓城新考」『遼海文物學刊』1996年第2期。)
- (27) 莫護跋の東遷年代には論考がないが、馬長寿は『烏桓與鮮卑』で遼東の北に移動した原因是太康二年(281)に晉に叛いて敗れたためと論述する。ゆえに遼東の北に移動した時期は281年頃とみている。

- (28) 『晉書』卷108慕容廆載記（『晉書』2804頁、中華書局、1974年）
(29) 『晉書』卷108慕容皝載記（『晉書』2822頁、中華書局、1974年）

三燕文化界格图案瓦当源流考

李新全

中国北方十六国时期，4世纪中叶至5世纪中叶，崛起于辽西地区的慕容鲜卑及鲜卑化的汉人冯氏先后建立了几个以“燕”为国号的地方政权，其中前燕、后燕、北燕前后相继，均曾以龙城（朝阳）为都，历时近百年，故将其统称为“三燕”，所谓“三燕文化”即指这一时期以慕容鲜卑遗存为主体的考古学文化。

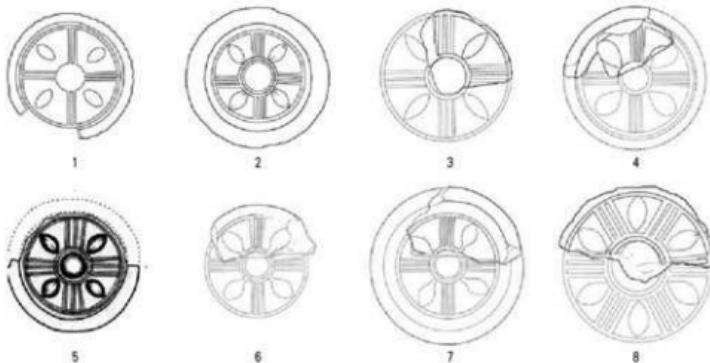
三燕时期遗迹集中分布的今朝阳地区中北部，方圆约650平方公里的大、小凌河流域，形成了一个由宫城址、皇苑址、草地组成的具有多民族特色的历史文化区域。据史书记载，三燕曾在龙城筑有大规模的宫殿建筑群，这些在当时颇负盛名的宏伟建筑虽然随着北燕的灭亡，冯弘的一把火而化为乌有，但是一些石质、陶质的建筑构件仍是我们找寻三燕宫殿址的重要线索。特别是出土的一些瓦当，更是承载着一些重要的历史文化信息。

本文拟通过对三燕文化界格图案瓦当来龙去脉的考察，探索瓦当变化背后所隐藏的历史文化问题。

1. 三燕文化瓦当介绍

近年来，在朝阳老城区改造以及北票金岭寺建筑遗址的考古发掘中，出土了一批三燕文化瓦当，主要有图案瓦当和文字瓦当两种。其中图案瓦当又可分为A、B两型：A型为有界格瓦当，当面中心为圆形大乳突，乳突外有一周凸弦纹，双辐线或三辐线组成的界格，界格内饰一叶瓣状突起。A型又依据辐线不同可分为Aa、Ab两个亚型：Aa型界格为双辐线，以朝阳老城区第V地点出土的（2004CLVH14：6）为代表^[1]（图一、1）；Ab型又根据叶瓣不同有式的变化，可分二式：I式当面有四叶瓣，以朝阳五一小区建筑工地、朝阳老城区管线沟出土的（2004CL管线沟14：2）为代表（图一、2），这类瓦当在朝阳市区其他地点以及金岭寺建筑遗址均有出土（图一、3—7）；II式当面有六叶瓣，以朝阳营州路（93CYZT4：1）出土的为代表（图一、8）。B型为无界格瓦当，根据当面图案可分为Ba、Bb两个亚型：Ba型当面中心为圆形大乳突，乳突外有一周凸弦纹，与Aa型瓦当叶瓣排列相同，以朝阳北塔出土的为代表（图二）；Bb型均为六叶瓣，叶瓣排列与AbII式相同，当面有复杂的几何形凸棱地纹，在朝阳市区及金岭寺建筑遗址均有出土（图三）。文字瓦当主要是“万岁富贵”瓦当，均为高边轮，“井”字形界格九分当面，中间为一圆形乳突，四个较大格内模印阳文，字体有篆书和篆隶结合字体两种。余下四个较小扇形格内饰有乳丁（图四）。

目前，就现有的资料而言，我们还不清楚无界格（B型）瓦当的来龙去脉。按照瓦当的叶



图一 三燕文化A型瓦当

1. 2004CLVH14:6 2. 2004CL管道沟采:2 3. 90CGA采:1 4. 92CWH12:2 5. BD16 6. 90CCYM1采:1
7. 92CWH12:1 8. 90CYZT4:1

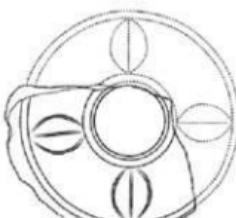
循由少到多的发展演变规律来看，四界格的叶瓣纹瓦当应早于六界格的叶瓣纹瓦当。那么，三燕文化四界格叶瓣纹图案瓦当（A型）的源头在哪里？它又流向了何处？这正是本文希望探索的问题（图五）。

2. 三燕文化界格图案瓦当之源

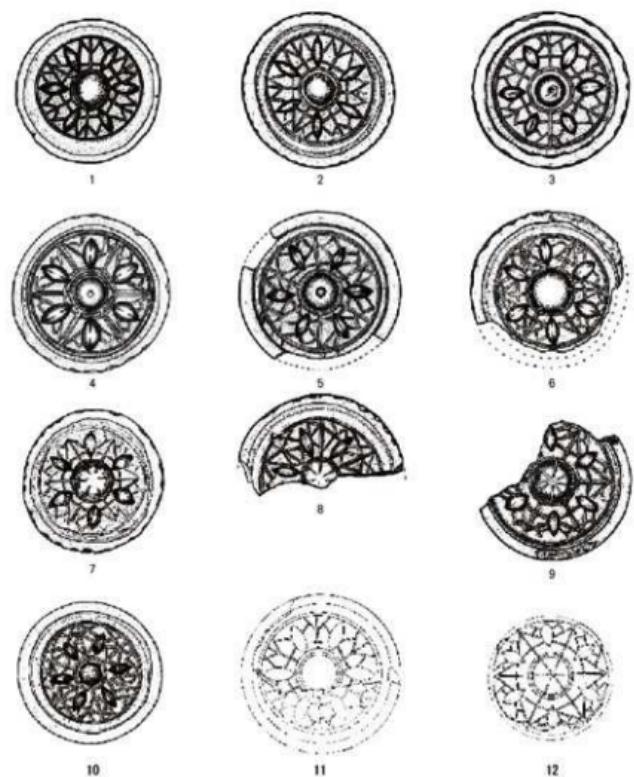
探索三燕文化四界格叶瓣纹图案瓦当的源头在哪里，我们先把目光投向了近年来由笔者主持发掘的新宾水陵南城址。该城址始建于汉武帝灭卫氏朝鲜、设乐浪、玄菟、真番、临屯四郡时期，也就是西汉中期，经东汉、公孙氏、魏晋等几个时期，存有十分丰富的遗迹遗物。尤其是大量的瓦当资料，为我们探寻三燕文化四界格图案瓦当的来源提供了难得的资料。

城址内出土的最早的图案瓦当多为卷云纹半瓦当（图六，1—3），还有卷云纹加水滴纹半瓦当（图六，4—6）。到了东汉时期，开始出现了圆瓦当，水滴逐渐演变成叶瓣纹（图七），到了公孙氏时期这种叶瓣纹圆瓦当与鸟篆书“千秋万岁”文字圆瓦当共出在大型官府建筑上（图八），并且文字瓦当涂朱彩，图案瓦当涂朱采或白彩^[2]。笔者认为，这三种类型的瓦当之间存在着内在的逻辑演变关系，试说如下。

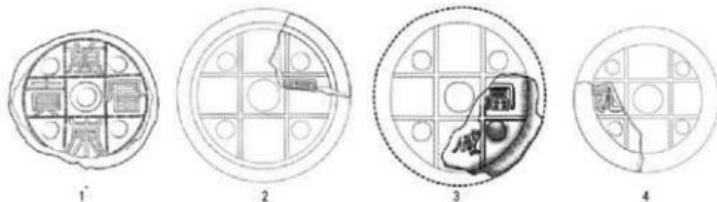
中国古代建筑是高台式土木结构建筑，面临的最大威



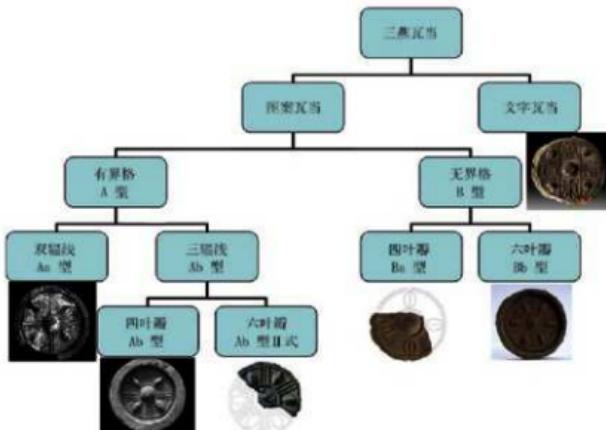
图二 三燕文化B型瓦当
(T7④:18)



图三 三燕文化Bb型瓦当
1. BD1 2. BD6 3. BD36 4. BD44 5. BD17 6. BD13 7. BD4 8. BD50 9. BD23
10. BD14 11. 04CLV3:3 12. 04CLVH4:6



图四 三燕文化文字瓦当
1. 朝阳北塔 2. 90CYZT4:2 3. 90CYZT3 4. 90CYZT1:1

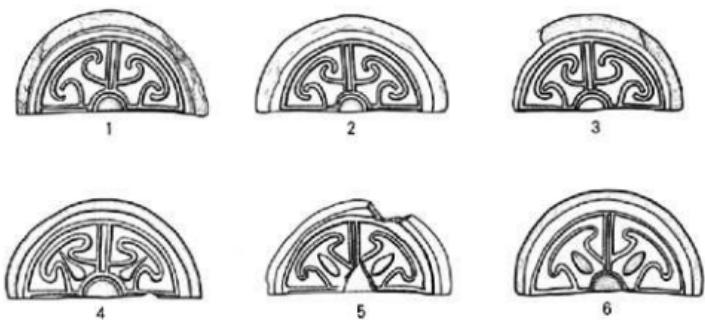


图五 三燕文化瓦当分类图

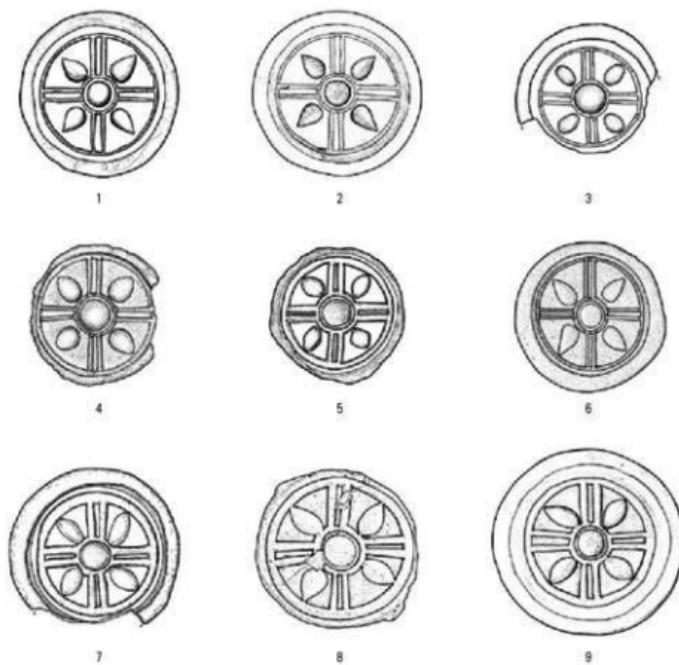
威胁就是火灾。因此，防火成为保护建筑最重要的任务。考古发现表明，早在西周时期就出现了瓦当，瓦当的纹饰是当时流行的重环纹。春秋战国时期，瓦当的纹饰装饰题材广泛，无论是动物纹的龟、鸟、虎、鹿、马等，还是植物纹的树、莲花、葵花等应有尽有。到了秦汉时期，瓦当的纹饰以卷云纹为主。有学者指出，这与战国以来盛行的五行学说有关^[3]。云纹代表水，有云才会有雨水，而水是古代克火的制胜法宝，尤其是对于高大的古代木构建筑而言，自天而降的雨水无疑是保护木构建筑免遭火毁的最理想有效的方法。因此，以代表水的云纹装饰在中国古代木构建筑屋顶最醒目的位置，非常契合战国以降流行的五行相生相克的学说思想。

永陵南城址出土的蘑菇状云纹中加水滴纹半瓦当应是上述五行学说思想的具体表现。到了东汉时期，云纹逐渐消失，代之以四界格叶瓣纹圆瓦当（图九）。在公孙氏时期，这类瓦当成为主流。这种中心为圆乳突、界格四分界面、每个界格内叶瓣形凸起的图案瓦当，在三燕文化中得以延续和发展（图十）。

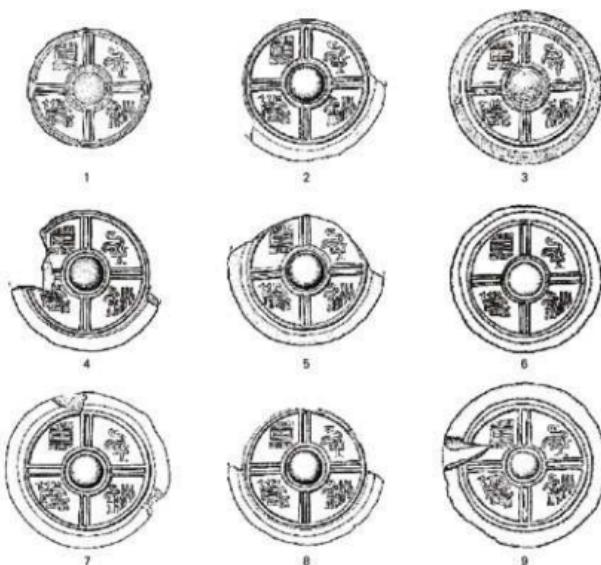
公孙氏盘踞的辽东地区与三燕所在的朝阳地区仅隔辽河，地缘相近。历史上有多次战争、大规模移民以及贸易通商等，也促进了文化交流。据《晋书》载：“慕容廆，……曾祖莫护跋，魏初率其诸部入居辽西，从宣帝伐公孙氏有功，拜率义王，始建国于棘城之北”^[4]。文献记载，4世纪初有三次辽东移民到辽西：第一次晋愍帝建兴元年（313），“辽东张统据乐浪、带方二郡，与高句丽王乙弗利相攻，连年不解。乐浪王遵说统帅其民千余家归（慕容）廆”^[5]。第二次是在319年，“崔毖……乃阴结高句丽及宇文、段国等，谋灭廆以分其地。太



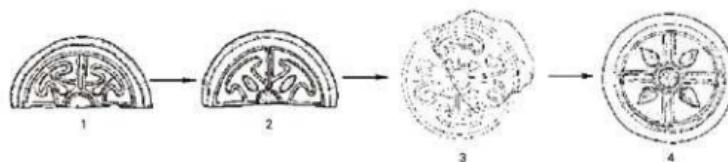
图六 永陵南城址出土云纹半瓦当
1. H104: 6 2. H104: 8 3. H165: 6 4. H104: 3 5. H165: 4 6. H165: 2



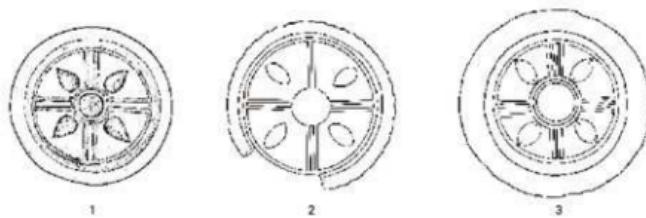
图七 永陵南城址出土叶瓣纹圆瓦当
1. J7: 13 2. T2019(3): 4 3. T2027(3): 2 4. T0608Za: 2 5. J4: 19 6. J4: 10
7. T2220(3): 30 8. T2319(3): 3 9. T2315(3): 2



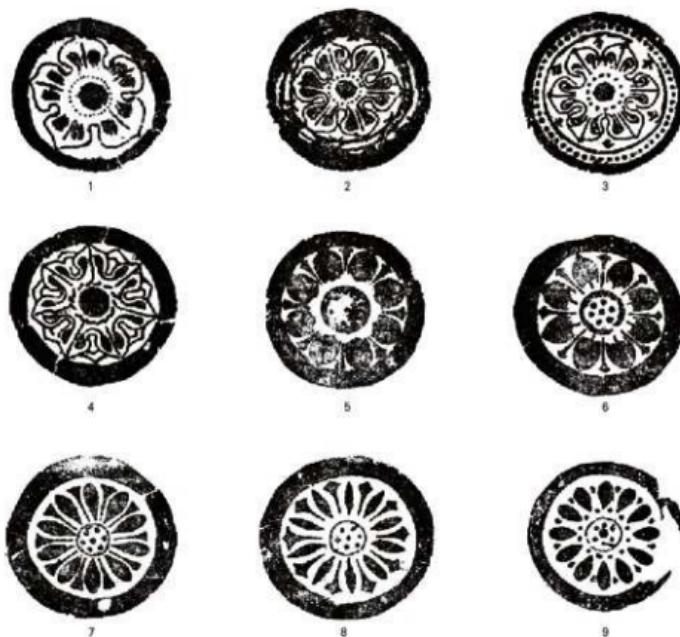
图八 永陵南城址出土“千秋万岁”文字圆瓦当
1. T2315③:3 2. J3:1 3. J3:38 4. J3:25 5. J3:17 6. J3:18 7. J3:13 8. J3:24 9. J3:15



图九 水滴纹半瓦当到四界格叶瓣纹圆瓦当演变示意图
1、2、4. (永陵南城址) 3. 邵阳窑址



图十 永陵南城址与三燕文化叶瓣纹瓦当比较图
1. 永陵南城址 (T2019③:4) 2.3. 郴阳市区 (2. 2004CLVH14:6, 3. 3004CL管线内采:2)

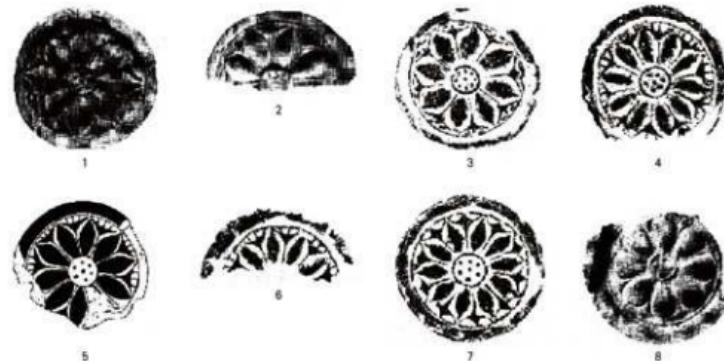


图十一 汉魏洛阳城出土莲花纹瓦当
1. 86LWJT14:1 2. 87BD2:1 3. 87BD2:2 4. 85BDT7H2:1 5. 86BDT9G2:3
6. 85BDT6F1:3 7. 85BDT6F1:1 8. 86BDT9G2:2 9. 87BD2:1

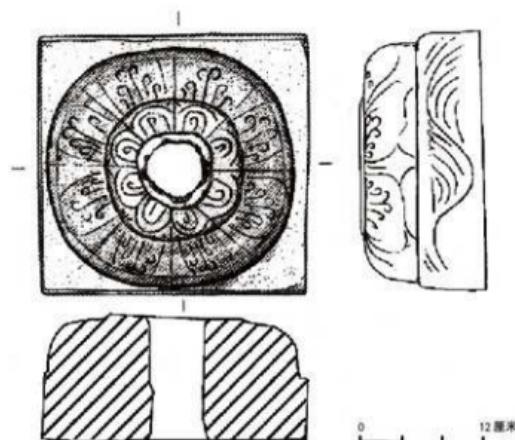
兴初，三国伐廆……遂大败……廆与数十骑弃家室奔于高句丽。廆悉降其众，徙煮及高瞻等于棘城”^[6]。第三次是咸和九年(334)，“甄自征辽东，克襄平。仁所署居就令刘程以城降，新昌人张衡执县宰以降。于是斩仁所置守宰，分徙辽东大姓于棘城，置和阳、武次、西乐三县而归”^[7]。

到魏晋南北朝时期，据学者们研究，中原地区在北魏迁都洛阳(493)后开始出现莲花纹瓦当，并且达到兴盛，经过东、西魏及北齐、北周，盛极一时^[8](图十一)。南方六朝地区的莲花纹瓦当大约产生于东晋晚期，并且在后来的发展中对朝鲜半岛的百济、新罗，乃至日本列岛均产生了强烈的影响^[9](图十二)。

因此，无论是笔者^[10]还是其他学者^[11]，在以往的著述中认为三燕时期已出现了莲花纹瓦当，现在看来都是不正确的观点，应予以纠正。因为，无论从文献记载，还是考古实物的发现，都无法证明三燕时期的四界格或六界格图案瓦当纹饰是莲花纹。理由如下：第一，从



图十二 六朝出土莲花纹瓦当
1. NYW : 101 2. NZJ1T304③ : 4 3. NZJ1T206④ : 4 4. NZJ1T206④ : 4
5. NPHHI : 5 7. NYW : 102 8. Aa型Ⅱ式



图十三 北票金岭寺建筑遗址出土柱础石 (F9 : 2)

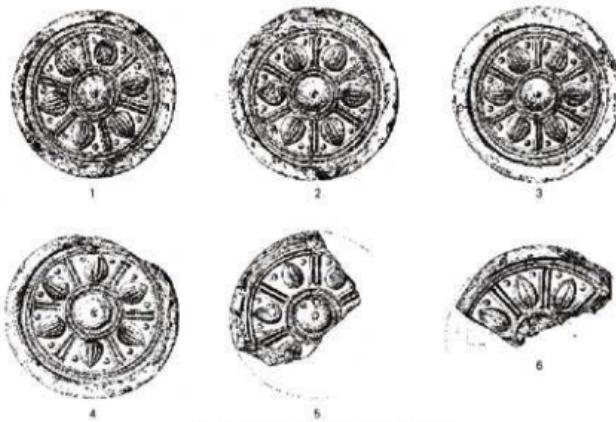
史书记载来看，前燕迁都龙城以后，慕容皝才在龙山建立龙翔佛寺，弘扬佛法，那时佛教刚刚传入前燕，还未达到古统治地位的程度。但那时龙城宫殿早已建成，而目前的学术界一致认为莲花纹瓦当是受佛教影响产生的，怎么能说佛教尚未传入三燕而三燕就有了莲花纹瓦当呢？这既与当时的历史背景不符，又与此类瓦当发展演变内在规律相违背的。第二，从考古发现来看，无论是中原地区汉魏时期的洛阳城，还是南方地区的六朝都城，发现最早的莲花

纹瓦当都是写实的，洛阳城出土最早的莲花纹瓦当是五瓣，当心还保留着大圆乳突状的传统瓦当式样，邺城出土最早的莲花纹瓦当是八瓣，并且当心是带有莲子的莲蓬形状；六朝都城出土最早的莲花纹瓦当是八瓣，当心也是带有莲子的莲蓬形状。第三，三燕文化中出土有莲花纹的图案，其样式是写实的莲花纹形状，例如北票金岭寺建筑遗址出土的莲花纹柱础石，其莲花图案就是八瓣写实的形状（图十三）。第四，既然学术界普遍认为魏晋南北朝时期的莲花纹瓦当是受佛教影响的结果，佛教传入中国最早的洛阳地区和佛教传布较广的南方六朝都城地区都是在5世纪才开始出现莲花纹瓦当的，那么，相对偏远的辽西龙城地区怎么会比上述地区先出现莲花纹瓦当呢？

综上所述，笔者认为那种双辐线四界格、每扇面内饰枣核状突起纹的瓦当就是前燕始都龙城时期的，它早于佛教传入龙城的时间。故那种双辐线或三辐线四界格、每个扇面内饰一枣核状突起的瓦当纹样现在应正名为叶瓣纹瓦当为好。这种瓦当源于辽东地区，在新宾永陵南城址有着比较完整的发展演变序列。在公孙氏割据政权被司马懿讨灭后，辽东郡首府襄平丧失了东北地区的政治中心地位，慕容鲜卑占据的辽西龙城成为了东北地区的新的政治中心，许多辽东大姓被迁往辽西地区，并将这种瓦当形制带到辽西龙城，继而三燕将这种瓦当形制继承发展了下来。

3. 三燕文化四界格图案瓦当之流

中外学者们很早就注意到了三燕文化图案瓦当与高句丽文化图案瓦当之间存在演变关系，王飞峰、桃崎祐辅等认为前者影响了后者；姜贤淑等认为后者影响了前者。随着出土瓦



图十四 千秋墓与太王陵莲花纹瓦当比较
1-3. (千秋墓出土) 4-6. (太王陵出土)



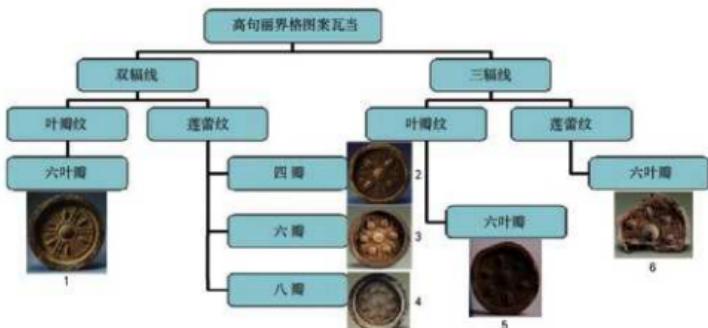
图十五 三燕文化瓦当与高句丽文化瓦当演变关系

1、3~5. 铜阳老城区 2. 北票金岭寺建筑遗址 6~7. 平壤 8. 韩城土城里 9. 集安千秋墓
10. 集安太王陵 11. 集安将军坟

当资料的不断丰富，笔者认为：三燕文化图案瓦当影响了高句丽文化的图案瓦当。理由如下：

第一，目前学术界认为高句丽最早的瓦当是卷云纹瓦当^[12]。其出现的年代在4世纪初。集安地区高句丽最早的莲花纹图案瓦当是千秋墓和太王陵出土的，千秋墓的莲花纹瓦当还与卷云纹瓦当共出，有学者指出，卷云纹瓦当应是千秋墓始建时使用的，莲花纹瓦当是好太王在位期间为祖先陵墓修葺时增用的^[13]。笔者十分赞同这一观点，因为太王陵的莲花纹瓦当有与千秋墓的相同（图十四），正说明好太王为祖先修墓时增用了莲花纹瓦当，故两者的莲花纹瓦当才能如此相似。

平壤地区也是高句丽莲花纹瓦当出土较多的地区之一，目前，虽然我们还无法准确判定其出现的具体年代，但它一定是在高句丽占据乐浪郡以后的事，即303年以后，也就是4世纪初以后。从目前掌握的资料来看，平壤地区的高句丽莲花纹瓦当种类很多，既有有界格的，也有无界格的。其中有界格的可分为双辐线四界格、双辐线六界格、三辐线六界格三种^[14]。其中双辐线四界格莲花纹瓦当应是在三燕文化双辐线四界格图案瓦当的基础上发展起来的。它是在三燕双辐线四界格图案瓦当四瓣面内的稜状突起上增加两条平行线，使其成为侧视莲瓣形，并在莲瓣两侧增饰两个圆形小乳丁，在当心的圆形乳突上也增饰一个圆形小乳丁。这种圆形小乳丁在三燕的文字瓦当上也曾出现过，因此我们完全有理由相信高句丽文化最早的莲花纹瓦当是在三燕文化双辐线四界格图案瓦当和装饰有圆形小乳丁的三燕文化文字瓦当的双重影响下的产物（图十五）。顺便提一下，在平壤地区也出土有高句丽文化三辐线



图十六 高句丽界格瓦当类型
1. 朝鲜清岩里 2. 朝鲜土城壁 3. 集安千秋墓 4. 集安将军坟 5. 平壤地区 6. 集安太王陵

六界格的叶瓣纹瓦当^[15]，它与三燕文化三幅线六界格图案瓦当别无二致，应是直接接受了三燕文化三幅线六界格叶瓣纹瓦当的模式。

平壤地区还出土有无界格的四瓣四叶莲花纹、五瓣五叶莲花纹、六忍冬六瓣莲花纹瓦当。按照中国秦汉至魏晋南北朝时期瓦当幅线越多越晚、界格线越多越晚、花瓣越多越晚的发展演变规律，我们可将高句丽文化莲花纹瓦当的发展顺序排列如下(图十六)。

4. 余论

若要捋清三燕文化图案瓦当的来龙去脉，我们必须跳出三燕政权主要所在的东北地区，从整个中国瓦当发展演变的宏观角度审视三燕文化瓦当的源与流。

瓦当是中国古代建筑特有的元素，不同时期的瓦当有着不同的装饰风格与特点，保留着强烈的时代信息。瓦当的装饰图案从表面上看有美化建筑的功用，起装饰作用，但背后却隐含着当时的人类社会的思想意识形态。瓦当出现之始，素面无纹，后来出现花纹，动物图样。春秋至秦，瓦当纹饰取材广泛，山峰之气、禽鸟鹿獾、龟鱼虫草，应有尽有，图案写实，简捷生动，这应是春秋战国时期诸子百家“百花齐放、百家争鸣”的思想在瓦当上的物化表现。西汉时新出现了以篆体文字为装饰题材的瓦当，文辞多为祈求吉祥福禄、延年益寿的吉语，同时还有四神、翼虎、鸟兽、昆虫、植物、云纹等题材。东汉至魏晋时期，纹饰以云纹为主，文字瓦当减少，这是与两汉之际流行道家黄老之学、追求清净无为而治的道家思想密不可分的，大量流行的云纹瓦当更是在道家的五行相生相克学说下的产物。南北朝至隋唐时期，莲花纹瓦当占据绝大多数，这是佛教传入中国后，迅速与中国传统的道教和儒教相结合，进而本土化的结果。宋代开始流行兽面纹瓦当，多为浅浮雕式，怒目张口，面目狰

狩，体现的是“存天理、灭人欲”的程朱理学思想。明清时蟠龙纹瓦当占主导地位，反映的是统治者“君权神授，龙脉传祚无穷”的帝王思想。

三燕文化界格图案瓦当是继承了辽东公孙氏割据政权使用的叶瓣纹瓦当，这种瓦当又是在两汉时期云纹瓦当的基础上发展演变而来。两汉时期云纹瓦当是与当时盛行的云生水、水克火的五行相生相克学说思想紧密相连的，最初的云纹图案象征卷云，后演变成卷云中夹着雨（水）滴。东汉晚期，云纹消失，水滴演化成叶瓣，并与鸟篆书“千秋万岁”瓦当一同使用在公孙氏政权的大型官府建筑上。这种叶瓣纹瓦当在辽东公孙氏政权被曹魏司马懿讨灭后，随着辽东大姓被慕容鲜卑数次迁往辽西而传给了三燕文化。三燕在与高句丽的交往中将这种瓦当又传播到高句丽。同时，高句丽在三燕文化图案和文字瓦当以及佛教的多重影响下，创造了自己的种类十分丰富的莲花纹瓦当。佛教的传入与盛行是莲花纹瓦当流行的思想根源。

三燕文化图案瓦当上承公孙氏政权的叶瓣纹瓦当，下启高句丽文化的莲花纹瓦当，在整个东北亚地区的瓦当发展体系中自成一脉，起着承上启下的作用。

注

- [1] 万维飞、白宝玉：《朝阳老城北大街出土的3—6世纪莲花纹瓦当初探》，辽宁省文物考古研究所、日本奈良文化财研究所编著：《东北亚考古学论丛》，科学出版社，2010年1月第1版。
- [2] 辽宁省文物考古研究所编著：《永陵南城址——2004—2008年考古发掘报告》，待刊。
- [3] 钱国祥：《汉魏洛阳城出土瓦当的分期与研究》，《考古》，1996年第10期。
- [4] (唐)房玄龄等撰：《晋书》卷一〇八，载记第八，第2803页，中华书局，1974年。
- [5] (北宋)司马光：《资治通鉴》卷八十八，第2799页，中华书局，1956年。
- [6] (唐)房玄龄等撰：《晋书》卷一〇八，载记第八，第2806—2807页，中华书局，1974年。
- [7] (唐)房玄龄等撰：《晋书》卷一〇九，载记第九，第2816页，中华书局，1974年。
- [8] 钱国祥：《汉魏洛阳城出土瓦当的分期与研究》，《考古》，1996年第10期。
- [9] 贺云翱：《六朝瓦当与六朝都城》，第51—59页，文物出版社，2005年3月第1版。
- [10] 李新全：《三燕瓦当考》，《辽海文学学刊》，1996年第1期。
- [11] a. 万维飞、白宝玉：《朝阳老城北大街出土的3—6世纪莲花纹瓦当初探》，《东北亚考古学论丛》，第61—66页，科学出版社，2010年。b. 王飞峰：《三燕瓦当研究》，《边疆考古研究》，第12辑，科学出版社，2013年。
- [12] a. 林志德、耿铁华：《集安出土的高句丽瓦当及其年代》，《考古》，1985年第7期。b. 耿铁华著：《高句丽瓦当》，第14页，吉林大学出版社，2014年。c. 王飞峰：《三燕、高句丽莲花纹瓦当的出现及其关系》，见本刊。
- [13] 王飞峰：《关于千秋墓、太王陵和将军坟的几个问题》，《边疆考古研究》，第10辑，科学出版社，2011年。
- [14] 耿铁华著：《高句丽瓦当》，吉林大学出版社，2014年。
- [15] 同注[14]。

三燕文化における区画図案瓦当源流考

李新全

中国北方の十六国時代、4世紀から5世紀中頃に至るまで、遼西地区に勃興した慕容鮮卑および鮮卑化した漢人・馮氏は相次いで「燕」を国号とする地方政権を建てた。そのうち、前燕・後燕・北燕は等しく龍城（朝陽）を都として約百年続いたため、三者をあわせて三燕と呼ぶ。いわゆる「三燕文化」とは、当該時期の慕容鮮卑が遺したものを中心とした考古学文化を指す。

三燕時期の遺跡は現在の朝陽地区の北部に集中して分布する。周囲約650平方キロメートルの規模で、小凌河流域内に宮城跡、皇苑跡、墓地からなる多民族の特色を備えた歴史文化区域を形成する。史書の記載によると、三燕はかつて龍城に大規模な宮殿群を築いていた。当時著名であったこれらの壮大な建築は北燕の滅亡、馮弘が放った火により灰燼に帰したものの、一部の石質・陶質の建築部材は三燕の宮殿跡を探索するうえで今なお重要な手がかりとなっている。とりわけ出土瓦は重要な歴史的、文化的情報を有している。

本稿では三燕文化の区画図案瓦当の成立と展開に対する考察を通じて、瓦当変化の背後に隠れた歴史文化の問題を探りたい。

1. 三燕文化瓦当の紹介

近年、朝陽老城区の改修および北票市金嶺寺建築遺跡の発掘調査において、三燕文化の瓦がまとまって出土した。主に図案瓦当と文字瓦当の二種がある。このうち、図案瓦当はA型とB型に分けられる。A型は区画を有する瓦当で、瓦当面中央が大きく乳頭状に突出し、その外側を圓線が一周する。双幅線もしくは三幅線をもって区画となし、各区画内部を一つの葉弁状突起で飾る。A型はまた、幅線の違いによりAa型とAb型の亜型に細分される。Aa型は区画が双幅線からなるもので、朝陽老城区第V地点出土品（2004CLVH14:6）に代表される⁽¹⁾（図一-1）。Ab型は葉弁の違いによる型式変化により、さらに二式に分けられる。I式は瓦当面に四弁を有するもので、朝陽五一小区建築工地や朝陽老城区管線溝出土品（2004CWH管線溝來：2）に代表される（図一-2）。このような瓦当は朝陽市区のその他の地点および金嶺寺建築遺跡から出土している（図一-3～7）。II式は瓦当面に六弁を有し、朝陽營州路出土品（93CYZT4:1）に代表される（図一-8）。B型は区画をもたない瓦当で、瓦当面の文様によりBa型とBb型に細分することができる。Ba型は瓦当面中央が大きく乳頭状に突出し、その外側を圓線が一周する。葉弁の配置はAa型と共通

し、朝陽北塔出土品に代表される（図二）。Bb型はいずれも六弁で、葉弁の配置はAb II式と共通する。瓦当面には複雑な幾何学形の凸状の地文があり、朝陽市区および金嶺寺建築遺跡からの資料が代表例である（図三）。文字瓦当は主に「万歳富貴」瓦である。いずれも高い外縁を有する。「井」字形の区画によって瓦当面を九分割し、中央の区画に円形の乳頭状の突起を配す。やや大きな四つの区画内にはスタンプで陰文を施し、字体には篆書と篆書・隸書を結合した2種類がある。残りの四つの区画は扇形を呈し、区画内部を乳釘文で飾る（図四）。

現存する資料からいえば、区画をもたない（B型）瓦当の成立と展開はあきらかではない。瓦当の弁が少ないものから多いものへ変化するという規律にしたがえば、四区画弁文瓦当は六区画弁文瓦当に先行すると考えられる。では、三燕文化の四区画弁文图案瓦当（A型）の起源はどこに求められるのだろうか。また、それはどのように展開していったのだろうか。これがまさに本稿において探究したい問題である（図五）。

2. 三燕文化における区画图案瓦当の起源

三燕文化の四区画弁文图案瓦当の起源がどこにあるかを検討するにあたり、近年、筆者が責任者として発掘を行なっている新賓永陵南城跡にまず着目する。永陵南城の造営は、漢武帝が衛氏朝鮮を滅ぼし、楽浪・玄菟・真番・臨屯の四郡を設置した時期に開始された。前漢中期から後漢・公孫氏・魏晋などのいくつかの時期にまたがり、実に豊富な遺構と遺物が存在する遺跡である。とくに大量の瓦資料は、三燕文化の四区画图案瓦当の起源を探究するにあたり、大変貴重な資料を提供した。

城跡内より出土した最古相の图案瓦当の多くは卷雲文半瓦当で（図六-1～3）、そのほかに卷雲文に水滴文を加えた半瓦当（図六-4～6）がある。後漢期には円形の瓦当が出現し、水滴文は次第に弁文に変化する（図七）。公孫氏期にいたると、この種の弁文円瓦当と鳥篆書の「千秋万歳」文字円瓦当がともに大型建物や官衙のような建物跡から出土する（図八）。また、文字瓦当には朱彩、图案瓦当には朱彩もしくは白彩が施される⁽²⁾。筆者はこの三型式の瓦当には、型式学的な相関関係があるとみている。以下、この点について説明する。

中国古代建築は基壇式土木混合建築である。当面する最大の脅威は火災であり、そのため、火を防いで建造物を保護することは重要な任務であった。考古学的な発見により、早くも西周期には瓦が登場していることがあきらかになっており、その瓦当文様は當時流行した重環文であった。春秋戦国期には瓦当面の文様装飾の題材が多様化し、動物文では亀・鳥・虎・鹿・馬など、植物文では樹・蓮花・葵花などがみられるようになる。秦漢期に至ると瓦当文様は卷雲文が主となる。これについては戦国以来盛行した五行学説との関

連性も指摘されている⁽³⁾。雲文は水をあらわすが、雲があつてこそ雨水があり、なおかつ古代において水は火を制する切り札であった。とりわけ高大な古代木造建築についていえば、天から降り注ぐ雨水は間違いなく木造建築を火災から守るもっとも理想的かつ有効な方法であった。そのため中国古代木造建築において、水をあらわす雲文装飾は屋根のもつとも目立つ位置に置かれた。これは戦国以降に流行した五行相生・相剋説の思想とよく合致している。

水陵南城跡から出土したキノコ状の雲文に水滴文を加えた半瓦当は上述の五行思想を具体的に表現したものであろう。後漢期に至ると雲文は次第にみられなくなり、四区画弁文円瓦当がそれに代わる(図九)。公孫氏期にはこの種の瓦当が主流となる。このように中心部が円形の乳頭状に突出し、四つに区画され、各区画内には弁を配する图案瓦当は、三燕文化のなかで継続して発展する(図十)。

公孫氏が盤踞した遼東地区と三燕のある朝陽地区は遼河を隔てて近接している。歴史上、幾度も戦争や大規模な移民、貿易通商などがあり、文化交流も促進された。『晋書』によれば、「慕容廆、……曾祖莫護跋、魏初率其諸部入居遼西、從宣皇伐公孫氏有功、拜率義王、始建國於棘城之北⁽⁴⁾」とある。文献上では、四世紀初めに遼東の移民が三度にわたり遼西に至っている。第一次は晋愍帝の建興元年(313)で、「遼東張統据楽浪、帶方二郡、與高句麗王乙弗利相攻、連年不解。樂浪王道說統帥其民千余家帰(慕容)廆⁽⁵⁾。」とある。第二次は紀元319年で、「崔慤、……乃陰結高句麗及宇文、段国等、謀滅廆以分其地。太興初、三国伐廆、……遂大敗、……慤與數十騎棄家室奔於高句麗、廆悉降其衆、徙燕及高瞻等於棘城⁽⁶⁾。」とある。第三次は咸和九年(334)で、「號自征遼東、克襄平。仁所署居就令劉程以城降、新昌人張衡執縣宰以降。於是斬仁所置守宰、分徙遼東大姓於棘城、置和陽、武次、西樂三県而帰⁽⁷⁾。」とある。

魏晋南北朝になると、中原地区では北魏の洛陽遷都(493年)後、蓮華文瓦当の出現・隆盛があり、東・西魏および北齊、北周を通じて大流行したとみられている⁽⁸⁾(図十一)。南方六朝地区的蓮華文瓦当はおおよそ東晋晚期に出現し、のちに発展するなかで、朝鮮半島の百濟、新羅、ないし日本列島に対して多大な影響をおよぼした⁽⁹⁾(図十二)。

のことから、筆者⁽¹⁰⁾はもちろん他の研究者⁽¹¹⁾も、すでに三燕期に蓮華文瓦当が登場したと言及してきたが、現在ではいずれも正しい観点とはいえず、是正しなくてはならないであろう。というのも、文献からも考古遺物からも、三燕期の四区画もしくは六区画图案瓦当の文様が蓮華文であるとは証明できないからである。その理由は次の点にある。第一に、史書の記載からすると、前燕が龍城に遷都して以降、慕容皝はようやく龍山に龍翔寺を建立して仏法を発揚するが、當時仏教は前燕に伝来したばかりであり、いまだ中心的な地位を占めてはいなかった。それにも関わらず、當時すでに龍城宮殿は建てられて

いたという点である。目下、蓮華文瓦当は仏教の影響下で生まれたとみることで学界的意見の一一致をみているが、仏教がいまだ三燕に伝来していないなかで、なぜ三燕に蓮華文瓦当があったということができるだろうか。この認識は当時の歴史背景と符合せず、また、このような瓦の型式学的な変化・発展にも反するものである。第二に、考古学的成果からみると、中原地区の漢魏期の洛陽城にしても、南方地区的六朝都城にしても、時期的に最古期の蓮華文瓦当はいずれも写実的であるという点である。洛陽城出土のそれは五弁で、中央の蓮子が大きく円形の乳頭状の突起をなす伝統的瓦当様式をとどめる。鄆城出土資料は八弁で、中央は蓮子をともなう花托形である。六朝都城出土資料は八弁で、やはり中央は蓮子をともなう花托形である。第三に、三燕文化で出土する蓮華文の図案は、その様式が写実的な蓮華文であるという点である。例えば北票市金嶺寺建築遺跡出土の蓮華文礎石のように、その蓮華図案は八弁の写実的な形状である（図十三）。第四に、仮に学界において魏晋南北朝期の蓮華文瓦当が仏教の影響を受けた結果であるという見解が普遍的であるとしても、仏教が中国にもっとも早く伝わった洛陽地区と仏教が比較的広範に広まった南方の六朝都城地区では、いずれも五世紀によく蓮華文瓦当が出現しているという点である。より僻地である遼西の龍城地区において、上記二地区に先行して蓮華文瓦当が登場することがありえるだろうか。

以上のことから筆者は、永陵南城跡でみられる、双幅線四区画の各扇形面内部を棗の種状の突起文で飾る瓦当は、前燕が龍城を都とした時期に始まったと考える。それは龍城への仏教伝来に先行する。それゆえ、双幅線もしくは三幅線四区画をもち、各扇形面内部を棗の種状の突起で飾る瓦当文様は、葉弁文瓦当と称するべきである。このような瓦当は遼東地区に源をもち、新賓永陵南城跡では比較的整った形で出土するという、変化・発展の過程がみられる。公孫氏の割拠政権が司馬懿によって滅ぼされたのち、遼東郡首府である襄平は東北地区的政治的中心地としての地位を失い、慕容鮮卑が占拠した遼西の龍城が東北地区的新たな政治的中心地となった。多くの遼東の名家が遼西地区に移り住み、この瓦当を遼西の龍城へともたらした。そして三燕はこの種の瓦当を継承し、発展させていったと考えられる。

3. 三燕文化における四区画図案瓦当の変遷

中国国内外の研究者たちは、早くから三燕文化の図案瓦当と高句麗文化の図案瓦当との関係に着目していた。王飛峰、桃崎祐輔などは前者が後者へと影響を与えたとみなし、姜賢淑などは後者が前者に影響を与えたとみている。出土瓦資料が絶えず増加するにつれ、筆者は三燕文化の図案瓦当が高句麗文化の図案瓦当に影響を与えたと考えている。その理由は以下の通りである。

第一に、現在、学界は高句麗の初現期の瓦当が卷雲文瓦当であるとみなしており⁽¹²⁾、その出現時期は4世紀初めである。集安地区高句麗の初現期の蓮華文图案瓦当は千秋墓ならびに太王陵出土品であるが、千秋墓出土の蓮華文瓦当は卷雲文瓦当に共伴することから、卷雲文瓦当は千秋墓の造営開始時に使用されたもので、蓮華文瓦当は好太王の在位期間に先祖の陵墓を修理する際に使用されたものであるという指摘がある⁽¹³⁾。筆者はこれに賛成する。なぜなら、太王陵の蓮華文瓦当は千秋墓のそれは同一であるからである(図十四)。これはまさに、好太王が祖先の墓を修繕する際に蓮華文瓦当を使用したことを示している。それゆえ両者の蓮華文瓦当はこのように共通するのである。

平壤地区もまた、高句麗の蓮華文瓦当が比較的多く出土する地区的ひとつである。現在のところ、その具体的な出現時期を正確に判断することはできないが、それはおそらく高句麗が楽浪郡を占拠して以降、すなわち303年以降、四世紀初め以降のことと考えられる。現在把握している資料から考えると、平壤地区における高句麗の蓮華文瓦当の種類は多く、区画を有するものや区画のないものもある。そのうち区画を有するものは、双幅線四区画、双幅線六区画、三幅線六区画の三種に分けられる⁽¹⁴⁾。また、そのうち双幅線四区画蓮華文瓦当は三燕文化の双幅線四区画图案瓦当を基礎として発展したものと考えられる。これは、三燕の双幅線四区画图案瓦当の四つの扇形面内部の棗の種状の突起上に二条の平行線を加えることで蓮瓣形の側面観としており、さらに、蓮瓣形の両側に円形の小さな突起をふたつ加え、中央の円形乳頭状の突出部にも円形の小さな突起をひとつ加えて装飾している。このような円形の小さな突起は三燕の文字瓦当においてすでに登場していることから、高句麗文化初現期の蓮華文瓦当は、三燕文化の双幅線四区画图案瓦当と円形の小さな突起を装飾にもつ三燕文化の文字瓦当、これら双方の影響を受けた产物と考えられる(図十五)。なお、平壤地区でも高句麗文化の三幅線六区画葉弁文瓦当が出土しているが⁽¹⁵⁾、それと三燕文化の三幅線六区画图案瓦当には差異が認められず、おそらく三燕文化の三幅線六区画葉弁瓦当を直接受容したものと考えられる。

平壤地区ではまた、区画をもたない四弁四葉蓮華文、五弁五葉蓮華文、六忍冬六弁蓮華文瓦当等が出土している。中国秦漢から魏晋南北朝期における瓦の変遷を参照するならば、幅線・区画線が多いほど年代が下り、さらに、花弁が多いほど年代が下るという変化と發展の過程がみられる。以上を整理すると、高句麗文化の蓮華文瓦当の發展過程は以下の図のように並べることができる(図十六)。

4. 結びにかえて

三燕文化の图案瓦当の成立と展開を整理するならば、三燕政権の主要地である東北地区を越え、中国における瓦当の変化・發展という広い視野から、三燕文化の瓦当の起源と変

遷をみなければならない。

瓦は中国古代建築特有の要素である。時代の異なる瓦当は異なる装飾様式と特徴を有し、各時代の情報を強くとどめている。瓦当の装飾图案は、表面上では建築を美化する装飾機能を有するが、その背後に当時的人類社会の思想や意識を内包している。

瓦はじめ文様のない素面で、のちに花文や動物図様が登場する。春秋から秦において、瓦当の文様装飾は多岐にわたり、山峰の氣、禽鳥鹿龍、龟魚虫草など、多種多様なものが採用されている。图案は写実的かつ端的で、生き生きとしている。これは春秋戦国期の諸子百家における「百花齊放、百家争鳴」という思想を瓦当に表現したものであろう。兩漢から魏晋期には、前漢において新たに篆書の文字を装飾題材とした瓦当が登場した。文辞の多くは吉祥福禄、延年益寿を希求する吉祥語である。と同時に、四神、翼虎、鳥獸、昆虫、植物、雲などの題材もある。後漢から魏晋期の文様装飾は雲文が主となり、文字瓦当は減少する。これは、兩漢に際して流行した道家の黄老の学、清淨無為の治を追求する道家思想と不可分である。雲文瓦当の大流行は、道家の五行相生・相剋説の産物であった。南北朝から隋唐期には蓮華文瓦当が主体を占める。これは、中国へ仏教が伝来し、すぐさま中国伝統の道教と儒教と結びついて本土化した結果である。宋代には獸面文瓦当が流行し始める。多くは浅い浮彫式で、目は怒って口を張り、顔つきは獰猛で、「存天理、滅人欲」という朱子学の思想を体现している。明清代には蟠龍文瓦当が主導的な位置を占める。これは統治者の「君權神授、龍脈伝祚無窮」という帝王思想を反映している。

三燕文化の区画图案瓦当は遼東の公孫氏割拠政権が使用した葉弁文瓦当を継承しているが、このような瓦当は兩漢時期の雲文瓦当を基礎に変化・発展してきたものである。兩漢期の雲文瓦当は、当時盛行した、雲が水を生み、水は火に克つという五行相生・相剋説思想と強く結びついていた。初現期の雲文图案は卷雲を象徴し、のちに卷雲の間に雨（水）滴を加えるものへ変化する。東漢晚期には雲文が消失して水滴が葉弁へと変化し、鳥篆書の「千秋万歳」瓦当とともに、公孫氏政権の大型建物に用いられた。このような葉弁文瓦当は、遼東の公孫氏政権が曹魏の司馬懿によって滅ぼされたのち、遼東の名家が慕容鮮卑によって数回にわたり遼西へと移されたことで、三燕文化へと伝えられた。三燕が高句麗と交流するなかで、このような瓦当がさらに高句麗へ伝播した。同時に高句麗は、三燕文化の图案と文字瓦当、そして仏教という多重の影響のもと、自身の種類豊富な蓮華文瓦当を創造した。仏教の伝来と盛行は、蓮華文瓦当の流行の思想的根源といえる。

三燕文化の图案瓦当は公孫氏政権の葉弁文瓦当を継承し、高句麗文化の蓮華文瓦当を開花させた。それは東北アジア地区における瓦当の発展体系全体のなかで一脈をなし、前後を結びつける役割を果たした。

註

- (1) 万雄飛・白宝玉「朝陽老城北大街出土の3~6世紀蓮華瓦当初探」遼寧省文物考古研究所・日本奈良文化財研究所編著『東北亜考古学論叢』科学出版社、2010年。
- (2) 遼寧省文物考古研究所編著『永陵南城跡-2004~2008年考古発掘報告』刊行予定。
- (3) 銭国祥「漢魏洛陽城出土瓦当の分期與研究」『考古』1996年第10期。
- (4) 唐・房玄齡等撰『晋書』卷一〇八、記第八、2803頁、中華書局、1974年。
- (5) 北宋・司馬光『資治通鑑』卷八十八、2799頁、中華書局、1956年。
- (6) 唐・房玄齡等撰『晋書』卷一〇八、記第九、2806~2807頁、中華書局、1974年。
- (7) 唐・房玄齡等撰『晋書』卷一〇九、記第九、2816頁、中華書局、1974年。
- (8) 銭国祥「漢魏洛陽城出土瓦当の分期與研究」『考古』1996年第10期。
- (9) 賀雲禪「六朝瓦当與六朝都城」51~59頁、文物出版社、2005年。
- (10) 李新全「三燕瓦当考」『遼寧文物學刊』1996年第1期。
- (11) a. 同(1)、61~66頁。
b. 王飛峰『三燕瓦当研究』『邊疆考古研究』第12輯、科学出版社、2013年。
- (12) a. 林志德・耿鉄華「集安出土的高句麗瓦当及其年代」『考古』1985年第7期。
b. 耿鉄華『高句麗瓦當』14頁、吉林大學出版社、2014年。
c. 王飛峰『三燕、高句麗蓮華紋瓦當的出現及其關係』遼寧省文物考古研究所・日本奈良文化財研究所編著『遼西地區東晉十六國時期都城文化研究』遼寧人民出版社、2018年(本書209~242頁再録・翻訳)。
- (13) 王飛峰「關於千秋墓、太王陵和將軍墳的幾個問題」『邊疆考古研究』第10輯、科学出版社、2011年。
- (14) 耿鉄華『高句麗瓦當』、吉林大學出版社、2014年。
- (15) 同註(14)。

三燕、高句丽莲花纹瓦当的出现及其关系

王飞峰

三燕考古学和高句丽考古学长期以来都是东北亚地区学术界关注的焦点，而三燕、高句丽莲花纹瓦当的出现及其关系研究也是其重要课题之一，这不仅是因为三燕与高句丽在相当长的时间内直接接壤，而且两者的莲花纹瓦当还显示出密切的关系。目前关于三燕、高句丽莲花纹瓦当的出现，特别是高句丽莲花纹瓦当的出现时间各国学者观点还存在着一定的差异。而三燕、高句丽莲花纹瓦当的影响与被影响的关系学界也存在着不同的看法，在此笔者就三燕、高句丽莲花纹瓦当的出现及其关系浅谈几点想法。

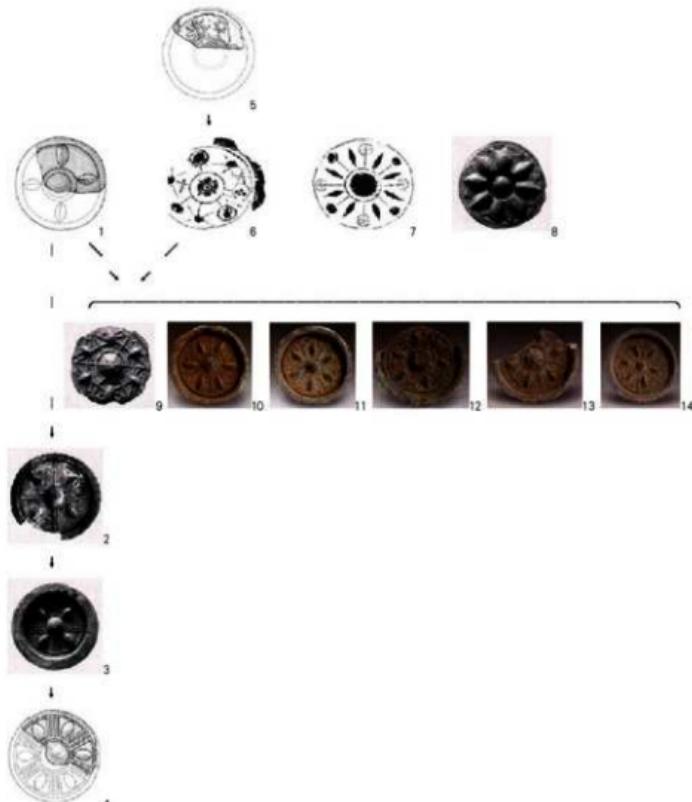
1. 三燕莲花纹瓦当的出现

佛教自东汉末年由西域传入中土，三国西晋时期得到了一定发展。东晋十六国开始进入迅速发展时期。佛教进入东北地区的准确年代虽然我们并不知道，但是最晚在前燕初期佛教已经在东北地区有了一定的发展。永和元年(345)，前燕慕容皝在龙城附近的龙山建立龙翔佛寺^[1]，这是目前已知东北地区最早的佛教寺院，也是佛教在前燕境内得到统治阶层认可的重要标志。作为佛教重要装饰纹样之一的莲花纹，在佛教传入中国之后，特别是与中国古典建筑相结合，产生了一系列与莲花纹相关的纹样和建筑构件等，莲花纹瓦当即是其中具有代表性的器物。就目前的考古发现资料，可以确认莲花纹瓦当早在战国时代的建筑中已经使用；南北朝及其以后流行的莲花纹瓦当在莲花特点、当面莲花布局、当心变化等方面都可以看到秦汉瓦当的影响^[2]。也有学者认为尽管莲花纹瓦当早在战国秦瓦当中就已出现，但系用写实的手法对取材于现实生活的莲花进行艺术刻画，与南北朝时期受佛教影响而产生的莲花纹瓦当，不仅形制、渊源不同，更重要的是赋予其中的意识观念，存在着天地之别^[3]。十六国开始，特别是南北朝、隋唐时期的莲花纹瓦当应当是受到佛教影响而出现的。三燕莲花纹瓦当同样是在佛教的影响下出现的。在讨论三燕莲花纹瓦当的出现之前，我们有必要对三燕莲花纹瓦当的认定和编年进行必要的说明。

三燕都城所在的龙城、蓟城、邺城和中山在三燕以后经历多次城市建设，三燕遗迹尤其是宫殿遗址确认难度较大，与三燕宫殿等建筑遗迹相关的考古工作不多，加之十六国时期能够对比的瓦当材料较少等因素一定程度上造成三燕瓦当的认定及编年相对困难。我们认为三燕瓦当的认定应从龙城、蓟城、邺城和中山四地及其附近地区着手，从已经发掘和出土的与三燕相关的遗物中寻找。三燕都城龙城及其周围的朝阳北大街^[4]、朝阳北塔^[5]及北票金岭寺建筑遗址^[6]等出土了一批与三燕相关的瓦当材料。蓟城(350—357年)和中山(385—397年)

作为前燕、后燕都城的时间不长，目前还没有发现与前燕、后燕有关的瓦当材料。邺城遗址已经发表的瓦当材料中有与朝阳和北票金岭寺建筑遗址出土瓦当相类似的材料^[7]，我们认为应是三燕时期的遗物。

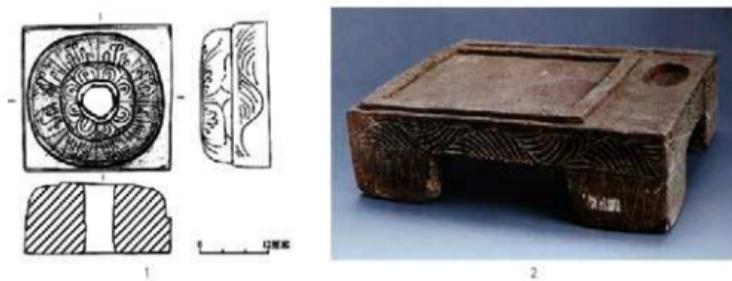
关于三燕莲花纹瓦当的类型及年代，笔者在《三燕瓦当研究》中曾有梳理，在此我们以《三燕瓦当研究》为基础对三燕莲花纹瓦当的类型、演变和年代做简单阐述。目前我们可以知道A型Ⅰ式(图一，1)和Ba型莲花纹瓦当(图一，5)在龙城遗址中均有发现，根据其形制判断可能是前燕龙城时期(341—350年)的遗物。A型Ⅱ式(图一，2)和Bb型莲花纹瓦当(图一，9—14)在龙城遗址和北票金岭寺建筑遗址等均有发现，其时代可能为后燕中山时期(385—397



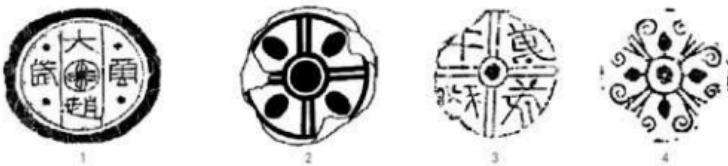
图一 三燕莲花纹瓦当发展演变图

年)。A型Ⅲ式(图一, 3)和A型Ⅳ式瓦当(图一, 4)在龙城遗址和北票金岭寺建筑遗址等均有发现, 其时代可能分别为后燕慕容熙时期(401—407年)、北燕时期(407—436年)。几何纹瓦当(图一, 6)和C型莲花纹瓦当(图一, 7)均为邺城遗址发现, 其时代可能是前燕邺城时期(357—370年)。D型莲花纹瓦当(图一, 8)仅在龙城遗址发现, 其时代可能在前燕迁都邺城(357年)之前。

需要说明的是虽然北票金岭寺建筑遗址的性质和年代在三燕瓦当的断代中具有十分重要的意义, 但是目前学界关于这一遗址性质和年代的认定还存在一些差异。金岭寺发掘简报认为该建筑群应是前燕及前燕以前不久慕容部开始定居于辽西大凌河流域的一处早期高等级建筑遗存^[8]。笔者认为该遗址是与后燕时期慕容垂“缮宗庙社稷”有关的考古遗存, 有网络状底纹的莲花纹瓦当可能为后燕中山时期、有界格线的莲花纹瓦当应为慕容熙时期遗物^[9]。田立坤先生认为此处建筑可能为前燕慕容皝时期修建的“慕容廆庙”, 但是对金岭寺建筑遗址出土的两类瓦当的时代并未作出说明^[10]。由于后燕建国时的首都中山(今河北省定州市)并没有发现三燕时期的瓦当或遗物, 因此金岭寺建筑遗址的性质和年代很大程度上取决于以后定州市出土的后燕瓦当。即如果定州出土的瓦当与有网络状底纹的莲花纹瓦当相似, 那么金岭寺建筑遗址的最初修建年代为后燕慕容垂时期, 有网络状底纹的莲花纹瓦当应为后燕慕容垂时期, 有界格线的莲花纹瓦当为后燕慕容熙时期; 反之, 如果定州出土瓦当与有界格线的莲花纹瓦当相似, 那么金岭寺建筑最初的修建年代为前燕慕容皝时期, 有网络状底纹的莲花纹瓦当应为前燕时期, 有界格线的莲花纹瓦当可能为后燕慕容垂时期。此外, 我们认为金岭寺建筑遗址发现的某些遗物表明该建筑群可能一直使用到北燕时期, 遗址曾出土一件浅灰色细砂岩质础石(图二, 1), 础石顶上饰八瓣莲花纹, 侧边阴刻水波纹, 其中水波纹不但与冯素弗墓出土的石砚(图二, 2)侧面纹饰较为相似^[11], 而且两者的质地均为细砂岩, 雕刻技法也大体一致。



图二 金岭寺遗址出土础石与冯素弗墓出土石砚
1. 金岭寺遗址出土础石 2. 冯素弗墓出土石砚



图三 鄱城遗址及抚顺地区出土瓦当

1. 鄱城遗址“大趙萬歲”瓦當 2. 永陵南城双界格线四叶纹瓦当 3. 抚顺出土“千秋萬歲”瓦当 4. 抚顺出土卷云纹瓦当

通过上述分析我们可以看到前燕时期已经出现莲花纹瓦当，莲花纹瓦当中既有网络状底纹的莲花纹瓦当，也有无界格线的莲花纹瓦当和有界格线的莲花纹瓦当，特别是后二者成为以后高句丽莲花纹瓦当的主要类型。A型 I 式和Ba型莲花纹瓦当的莲瓣中间有小短线，与此类似的莲瓣在后赵时期的“大趙萬歲”瓦当^[12]（图三，1）上同样可以找到，因此三燕莲花纹瓦当中早期的莲花纹瓦当可能受到了后赵时期此类纹样影响。后赵时期佛教盛行，后赵地区出现的与莲花纹有关的瓦当无疑是佛教文化影响的结果。加之后赵曾与前燕直接接壤、交往密切，因此我们推测这一时期佛教可能由后赵传入前燕，并在前燕地区开始传播，到345年慕容皝建立龙翔佛寺时佛教在前燕境内已经有了相当程度的发展。

东北地区与三燕有界格线的莲花纹瓦当类似的还有新宾县永陵南城出土的双界格线四叶纹瓦当^[13]（图三，2），日帝时代在修建抚顺市永安公园时曾出土了汉代的“千秋萬歲”瓦当（图三，3）和卷云纹瓦当^[14]（图三，4），其中部分卷云纹瓦当的当面还饰有四个花叶纹，与此卷云纹瓦当相似的半瓦当在20世纪80年代永陵南城调查中也有发现^[15]，辽宁省文物考古研究所在永陵南城考古发掘中曾出土了“千秋萬歲”瓦当和双界格线四叶纹瓦当（原报告称为图案瓦当并且认为是魏晋时期的莲花纹瓦当^[16]）。因此我们认为新宾永陵南城出土的双界格线四叶纹瓦当应是当地文字瓦当——“千秋萬歲”瓦当与饰有花叶纹的卷云纹瓦当结合后的产物，可能并非我们认为的受佛教影响而产生的传统意义上的莲花纹瓦当，至于其时代上限应晚于上述汉代的“千秋萬歲”瓦当和卷云纹瓦当。永陵南城出土的双界格线四叶纹瓦当，制作规整、火候较高，与三燕瓦当相比有着明显区别，此类瓦当不但不属于三燕瓦当，而且还应是在慕容鲜卑占领这一地区之前制作完成的。因此其年代下限应不晚于慕容鲜卑占领辽东之时，即东晋太兴二年（319）^[17]。所以三燕莲花纹瓦当中有界格线莲花纹瓦当的产生应受到了永陵南城双界格线四叶纹瓦当的影响。

因此我们认为三燕莲花纹瓦当出现于前燕迁都龙城之际（341年）或稍晚，不但是佛教传入前燕地区的直接产物，而且与慕容皝迁都龙城、兴建新都等活动有关。如咸康七年（341），慕容皝迁都龙城之前曾安排阳裕、唐柱等修建龙城宫殿和宗庙等^[18]。迁都龙城之后，除了巡视郡县、发展农业之外，慕容皝还增修了龙城宫阙^[19]。

2. 高句丽莲花纹瓦当的出现

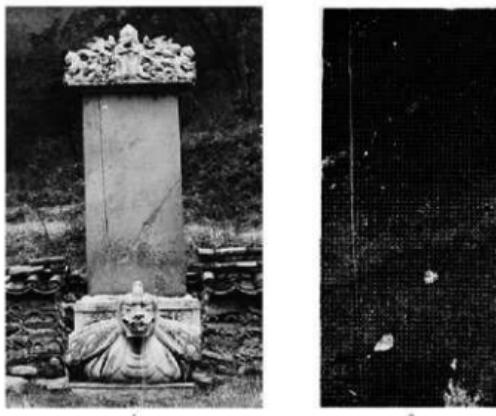
就目前的研究现状来看，我们认为高句丽莲花纹瓦当产生的主要条件包括以下两点：一是佛教传入高句丽；二是三燕莲花纹瓦当的影响。其中三燕莲花纹瓦当对高句丽莲花纹瓦当产生的影响，下文将专门论述。此处重点讨论佛教传入高句丽的时间及高句丽莲花纹瓦当的产生等。

关于佛教何时传入高句丽，目前研究者的意见并不一致，概括起来主要有以下几种观点。一是根据《三国史记》的记载，认为372年佛教由前秦僧人顺道传入高句丽^[20]。二是根据冬寿墓出现的莲花纹，认为不晚于357年的4世纪中叶佛教已经传入高句丽地区^[21]，甚至认为冬寿本人可能也是佛教信徒^[22]。三是根据《高僧传》中支道林（314—366年）与“高丽道人书”的记载，认为“高丽道人”即是当时高句丽地区的佛教徒，因此在366年之前佛教已经传入高句丽地区^[23]。四是根据《高僧传》《风岩寺智证大师寄照塔碑》等关于昙始的记载认为东晋太元二十年（太元为东晋孝武帝年号，376—396年，太元二十年即395年）佛教由东晋僧人昙始传入高句丽^[24]。五是根据《高僧传》《风岩寺智证大师寄照塔碑》等关于昙始的记载、朝鲜半岛及高句丽地区发现佛像资料等认为佛教在东晋太元末期（约390—396年）由后秦僧人昙始传入高句丽^[25]。其中第一种观点成为目前学界的主流观点。以上各种观点基本上是以目前可以见到的文献材料为基础，实质性的考古证据并不多，因此我们首先将对相关的文献资料进行整理。

目前可以见到最早关于高句丽佛教传入的记录见于南朝梁代僧人慧皎（497—554年）撰写的《高僧传》，《高僧传·卷十·昙始传》：释昙始，关中人，自出家以后，多有异迹。晋孝武太元之末，赍经律数十部，往辽东宣化，显授三乘，立以归戒，盖高句骊闻道之始也。义熙初，复还关中，开导三辅^[26]。自慧皎撰《高僧传》以后，直到元代中国历代文献有关昙始的记录如《法苑珠林》^[27]《北山录》^[28]以及元代的《神僧传》^[29]等均是以《高僧传》为基础，或是直接援引，或是稍加归纳，并无多大出入。

朝鲜半岛最早记录佛教传入高句丽的文献当属统一新罗末期由著名学者崔致远（857—？年）撰写的《风岩寺智证大师寄照塔碑》（全称《大唐新罗国故风岩寺山寺教证智证大师寄照之塔碑铭并序》）。《风岩寺智证大师寄照塔碑》^[30]（图四，1、2）位于今韩国庆尚北道闻庆市加恩邑院北里风岩寺，为韩国宝物第138号，碑高2.73、宽1.64、厚0.23米，螭首龟趺，碑阴末有“龙德四年岁次甲申六月口日竟建”的题记，龙德为五代时期后梁年号，龙德四年即924年^[31]，该碑开始部分叙述了佛教传入朝鲜半岛的过程。

第3列末段：昔当东表鼎峙之秋，有百济苏涂之仪，若甘泉金人之祀，厥后西晋县始始之貌，如，第4列上段：摄腾东入，句丽阿度度于我，如康会南行。崔致远虽然误将昙始所处的时代说成西晋，但是却记录了昙始入高句丽传法的事实。碑文中“县始始之貌，如摄腾



图四 凤岩寺智证大师寄照塔碑照片及正面碑文拓片
1. 凤岩寺智证大师寄照塔碑 2. 凤岩寺智证大师寄照塔碑正面碑文拓片

东入”，即是说昙始到达高句丽，如同东汉明帝时到达洛阳的西域僧人摄摩腾和竺法兰一样，使得佛教开始在高句丽地区传播。唐代高句丽人也自称高句丽为貊。这一点可以从高句丽灭亡后居住在唐朝的泉男生之子泉献诚的墓志（大足元年，701年）中得到证明：君讳献诚，其先高勾骊国人也……公即襄公嫡子也。生于小貊之乡，早有大成之用，地荣门宠。一国罕俦^[32]。

唐代道宣（596—667年）所撰《续高僧传·卷第二十六·释僧意传》有：释僧意……元魏中，住泰山朗公谷山寺聚徒教授，迄于暮齿，精诚不倦。寺有高骊像、相国像、胡国像、女国像、吴国像、昆仑像、岱京像，如此七像，并是金铜，俱陈寺堂，堂门常开，而鸟兽无敢入者，至今犹尔^[33]。部分学者认为此处所述高骊像即高句丽佛像，此佛像为前秦时期（351—394年）高句丽赠送给竺僧朗的^[34]。也有学者认为此处所述高骊像、相国像均为高句丽佛像，其中相国像可能是好太王时期（391—412年）高句丽“相国”赠送给竺僧朗的^[35]。从目前高句丽地区的佛像资料来看，中国、朝鲜和韩国境内均有发现。中国学者1985年在国内城发现了一尊金铜佛像^[36]（图五，1）。朝鲜发现的佛像资料较多，部分为1945年以前日本学者发掘高句丽佛寺（如平壤清岩里土城内的清岩里废寺址^[37]、平安南道平原郡德山面元五里废寺址^[38]等）的出土品或采集品，韩国发现的高句丽佛像^[39]（图五，2）多为采集品。朝鲜半岛发现的佛像除首尔市蘋岛发现的一尊金铜佛像^[40]（图五，3）时代较早外，高句丽地区佛像资料的时代大体不早于5世纪初。虽然也有学者认为蘋岛金铜佛像属于高句丽佛像，可能是5世纪初制造于中国北方地区^[41]，韩国学者金元龙先生也认为蘋岛佛像来自中国的可能性很高^[42]，但佛像出土周围均为百济墓葬和遗址，没有发现与高句丽相关的遗迹和遗物，因此这件佛像



图五 国内城及朝鲜半岛发现金铜佛像

1. 国内城发现高句丽金铜佛像 2. 庆尚南道宜宁郡出土高句丽金铜佛像（延喜七年，539年） 3. 首尔市藏岛发现金铜佛像

可能不属于高句丽佛像。

因此参考包括慧皎《高僧传》在内的中国史料、崔致远撰写的《风岩寺智证大师寄照塔碑》及高句丽地区发现的佛像资料等我们认为高句丽佛教是在东晋太元末年(约390—396年)由后秦关中僧人昙始传入的，昙始当时可能是从关中出发由陆路到达辽西，经辽东进入高句丽。

就目前的考古资料而言，高句丽最早的瓦当为卷云纹瓦当，卷云纹瓦当消失之后出现了莲花纹瓦当、忍冬纹瓦当和兽面纹瓦当等。出土高句丽莲花纹瓦当的遗址主要有生活遗址和墓葬两大类，其中生活遗址出土的莲花纹瓦当的颜色多为红褐色，当面基本没有界格线；墓葬上出土的莲花纹瓦当颜色基本为灰褐色，当面多有界格线。莲花纹瓦当颜色的区别、界格线的有无与遗迹性质密切相关的特征在国内城时期的莲花纹瓦当产生之后较为显著，迁都平壤之后这些特征不再明显。

2004年出版的《丸都山城》^[43]报告认为丸都山城宫殿址毁于342年前燕慕容皝攻破丸都山城的战火，说明发掘者认为最晚到342年高句丽已经出现了莲花纹、忍冬纹和兽面纹瓦当。日本学者田村晃一^[44]、东潮^[45]等，韩国学者金希灿^[46]、白种伍^[47]等认为高句丽莲花纹瓦当应是受到冬寿墓莲花纹的影响而产生的，最早的莲花纹瓦当是太王陵发现的莲瓣上有“Y”字形(即莲瓣形莲瓣，笔者注)的双界格线六瓣莲花纹瓦当，时代大体在4世纪中晚期。也有学者认为在高句丽莲花纹瓦当中，有界格线的瓦当出现时代较早，产生于4世纪后半期，无界格线莲花纹瓦当的年代上限为6世纪初前半^[48]。目前中国和朝鲜半岛的高句丽遗

连中均发现过高句丽莲花纹瓦当，其中集安和平壤地区发现的莲花纹瓦当不但数量很多，而且形制复杂。国内域时期集安地区出土莲花纹瓦当的墓葬主要有千秋墓、太王陵、将军坟^[49]、禹山M2112^[50]和长川二号墓^[51]、上活龙5号墓^[52]等，出土莲花纹瓦当的遗址有国内城^[53]、丸都山城^[54]、东台子遗址和梨树园子南遗址^[55]等。其他遗址和墓葬包括吉林省辽源市龙首山山城^[56]、延边温特赫部城^[57]、辽宁省抚顺市高台山城及附近的施家墓地^[58]、新宾县五龙山城^[59]、西丰县城子山山城^[60]、辽阳市金銀庫遗址^[61]和燕州城^[62]、丹东市叆河尖古城^[63]、凤城市凤凰山山城^[64]、岫岩县娘娘山山城^[65]、大连市大黑山山城^[66]、盖州市青石岭山城^[67]等。朝鲜境内发现高句丽莲花纹瓦当的遗址多分布在平壤地区，主要有平壤城、大城山城^[68]、长寿山城^[69]、定陵寺^[70]等，韩国境内发现高句丽莲花纹瓦当的遗址有首尔市红莲峰1号堡垒^[71]、峨嵯山城^[72]和京畿道涟川市的瓠芦古垒^[73]等。

就目前发现的莲花纹瓦当的形态和制作工艺等来看，集安地区的高句丽莲花纹瓦当其时代整体上应早于其他地区高句丽遗迹中发现的莲花纹瓦当。因此我们认为高句丽最早的莲花纹瓦当应该从集安地区的高等级遗迹如丸都山城官殿址、东台子遗址、千秋墓等出土品中予以考虑。

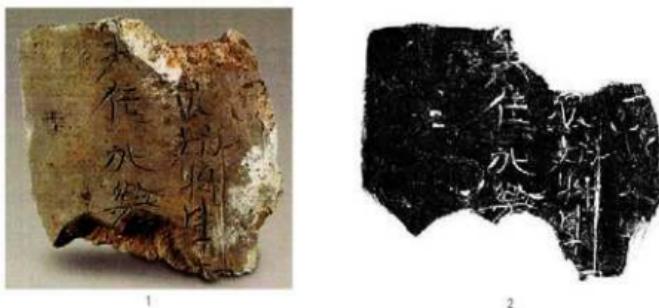
丸都山城官殿址。虽然报告认为其下限为342年，但是我们认为目前发掘的官殿区可能是慕容皝攻破丸都山城之后好太王十七年(407)重新选择基址“增修官阙”(《三国史记·卷第十八·广开土王本纪》：十七年春二月，增修官阙)的结果，那么寻找丸都山城早期官殿址及慕容皝烧毁的官殿址也成为国内城时期高句丽考古学的一个重要课题^[74]。丸都山城瞭望台、各个门址发现的瓦当与官殿址出土瓦当在颜色、胎体和纹样上也基本一致，那么这些瓦当中部分遗物应该是好太王时期的产物，整体上来看丸都山城发现的莲花纹瓦当、忍冬纹瓦当和兽面纹瓦当的出现时间应不晚于好太王十七年(407)，下限为迁都平壤之时(427)。

东台子遗址为早年日本学者发现，关野贞较早对其进行了报道^[75]，解放前部分遗址已被破坏。1958年吉林省博物馆对东台子遗址进行了发掘^[76]，认为是高句丽时期一处重要的建筑遗址。1982年方起东先生^[77]通过对东台子遗址规模和格局等的研究认为其是故国壤王九年(392)三月修建的国社和宗庙遗迹。2010年韩国学者姜贤淑^[78]通过对东台子遗址出土遗物等的研究，认为东台子遗址的时代在5世纪末以后，渤海灭亡之前。笔者在对东台子遗址出土遗物、相关遗迹和文献等系统梳理后认为东台子遗址是故国壤王八年(391)^[79]三月下令修建的国社和宗庙，但是当年五月故国壤王就已去世，可能由于当时的建筑并未最终完成，也就没有使用瓦当，如果故国壤王时期修建的国社和宗庙使用瓦当，我们认为应是与千秋墓上发现的卷云纹瓦当类似的瓦当^[80]。那么东台子遗址出土的大量莲花纹瓦当、忍冬纹瓦当和兽面瓦当并非故国壤王时期的遗物，应是好太王时期在修缮时使用的瓦当，部分瓦当与丸都山城官殿址发现的瓦当纹样相同或类似，甚至两个遗址之间还存在着同范瓦当，所以说东台子遗址部分莲花纹瓦当的年代应与丸都山城的同类出土品一致^[81]。

2003年在千秋墓出土一件刻有“永乐”铭文的筒瓦^[82]（图六，1、2），泥质灰陶。残长13、宽15.5、厚1.5厘米。筒瓦凸面残留两列铭文，共计8个字。《集安高句丽王陵》报告给出了释文，右列：(乐)浪赵将军，左列：口未在永乐。但是也有学者释为：(乐)浪赵将军，口夫任永乐^[83]。从筒瓦上所留的字形和文义来看，报告给出的释文较为可信，而且报告还认为这是好太王时期为千秋墓修陵所用的瓦件，并根据好太王在位年代(391—412年)推断左侧的铭文为：(乙或丁)未在永乐。我们通过对高句丽的葬俗及筒瓦上“未”字上一字残存字形等的研究认为其铭文为“(乐)浪赵将军”、“(丁)未在永乐”^[84]。好太王碑第四面第7—9列有“自上祖先王以来，墓上不安石碑，致使守墓人一烟户差错，惟国是上广开土境好太王尽为祖先王墓上立碑。铭其烟户不令差错。又制：守墓人自今以后，不得更相转卖，虽有富足之者，亦不得擅买，其有违令，卖者，刑之。买人，制令守墓之”。说明好太王时期不但制定了一系列与守墓制度有关的律令，而且还曾经在“祖先王墓”上立碑，在立碑的同时对部分陵墓进行修缮也在情理之中。千秋墓出土的瓦当中既有高句丽卷云纹最晚阶段的无铭文卷云纹瓦当，又有莲花纹瓦当。千秋墓发现的双界格线六瓣莲花纹瓦当与太王陵、将军坟的同类瓦当相比较，表现出较早的特点^[85]。因此在集安地区的王陵中千秋墓是高句丽卷云纹瓦当消失、莲花纹瓦当出现的具有分界线性质的陵墓。由于在千秋墓上发现了可能为“丁未”的铭文筒瓦，所以我们认为好太王在丁未年(407)修缮了父亲故

国壤王的陵墓，使用了双界格线六瓣莲花纹瓦当，那么这些瓦当的年代也应该不晚于407年。

通过上述分析，我们认为集安地区当时高句丽的王宫遗址(丸都山城宫殿址)、国社和宗庙遗址(东台子遗址)和王陵(千秋墓)这些高等级遗迹上发现的莲花纹瓦当出现时间应不晚于好太王时期的丁未年(407)。集安地区的其他遗址和墓葬发现的莲花纹瓦当，其出现时间也不会早于上述三个遗迹的莲花纹瓦当的年代。因此我们认为高句丽最早的莲花纹瓦当首先出



图六 千秋墓发现“永乐”铭文筒瓦照片及拓片



图七 大黑山山城出土瓦当、当沟与集安地区发现瓦当、当沟
1. 大黑山山城发现莲花纹瓦当 2. 东台子遗址出土莲花纹瓦当
3. 大黑山山城发现当沟 4. 丸都山城宫殿址发现当沟 5. 将军坟西南建筑址出土当沟

现于集安地区，包括当时高句丽的国社和宗庙、官殿和王陵等遗迹，其重要的原因之一是太元之末(约390—396年)后秦僧人昙始将佛教传入高句丽地区。佛教的传入对高句丽人的社会生活产生了重要影响，此后高句丽墓葬壁画中的莲花纹作为一种具有佛教含义的装饰纹样开始“爆炸式”的出现，一直使用到高句丽灭亡。

而大黑山山城发现的莲花纹瓦当和斜方格纹当沟也可以为我们上述的推测提供佐证。大黑山山城位于大连市金州区大黑山山顶，平面呈不规则形，周长约5000米，城内曾采集到“卑沙”“毕奢”等铭文陶片^[86]。城内还发现有高句丽莲花纹瓦当和斜方格纹当沟，现收藏于旅顺博物馆。莲花纹瓦当(图七，1)^[87]的纹样和莲瓣形态等与东台子遗址出土的莲花纹瓦当(图七，2)^[88]较为相似。斜方格纹当沟(图七，3)^[89]与丸都山城宫殿址(图七，4)^[90]、将军坟西南建筑址(图七，5)^[91]发现的同类器物具有很大的相似性。瓦在高句丽时期是一种具有身份和等级象征的标志物，《旧唐书·卷一百九十九上·高丽传》有：其所居必依山谷，皆以茅草葺舍，唯佛寺、神庙和王宫、官府乃用瓦^[92]。大黑山山城发现的莲花纹瓦当和当沟在某种程度上可能反映了好太王对高句丽占领辽东地区的一种宣示。高句丽最初占据辽东地区始于故国壤王二年(385)六月对辽东郡和玄菟郡的侵占，但是同年十一月就被后燕将领慕容农收复^[93]。至400年时，后燕尚有势力大举进攻高句丽，曾拔高句丽新城、南苏二城，拓地七百余里^[94]。402年，高句丽进攻宿军，导致后燕平州刺史慕容归逃走^[95]。404年，高



图八 冬寿墓莲花纹及大王陵莲花纹瓦当
1. 冬寿墓墓主人坐輶 2. 冬寿墓坐輶上的莲瓣形莲瓣 3. 太王陵出土莲瓣形莲瓣的莲花纹瓦当

句丽攻燕^[96]。金毓黻先生认为在这一年高句丽最终占领辽东，在《东北通史》中有：考高句丽于晋太元十年六月，初陷辽东、玄菟二郡，至是年十一月底，燕复二郡，是即高句丽故国壤王二年（385）也。又后十九年为晋元兴三年，而辽东再陷，玄菟郡亦同时沦陷，是即广开土王之十四年（404），而终至于不能复，直至唐高宗总章元年（668）灭高句丽之日，辽东之故地始复，然已沦陷二百六十五年，可谓久矣^[97]。大黑山山城莲花纹瓦当和当沟的出现同样也为金毓黻先生的说法提供了考古学证据，这些器物的年代应是在高句丽占领辽东之后不久，其上限则晋元兴三年（好太王十四年，404）以后的一段时间，但是不应早于好太王时期。

的丁未年(407)，下限则是高句丽迁都平壤之时(427)。

大黑山山城作为目前发现的辽东半岛最南端的一座高句丽山城，雄踞大黑山山巅，扼守大连湾地区，是高句丽在这一地区的重要军事据点。隋唐时期进攻高句丽，从山东半岛浮海而来的隋唐军队在这一地区首选的进攻地点就是大黑山山城^[98]。好太王作为高句丽中期的一代国王，武功赫赫，功勋弥高，当然会意识到大黑山山城的重要性，一方面在城中使用瓦当和当沟这样的器物来表明山城的地位，一方面也不排除暗含着向先王、先祖乃至后燕彰显武功的含义。

冬寿墓中发现的莲花纹特别是冬寿坐帐两角出现的莲瓣形莲花^[99](图八、1、2)与太王陵上发现的莲瓣形莲花纹瓦当^[100](图八、3)的莲瓣形态比较接近，这也成为诸多学者认为太王陵发现的此类瓦当是高句丽最早莲花纹瓦当的重要依据。冬寿夫妇的坐像均位于帷帐之内，以帷帐作为随葬品的习俗，从战国一直延续到南北朝时期^[101]。墓主人坐于帐中的形象则流行于两汉至南北朝时期的墓葬壁画中，以莲花、龙头和流苏等装饰帐盛行于十六国北朝时期，《邺中记》有：石虎御床，辟方三丈。冬月施熟锦流苏斗帐，四角安纯金龙头，头衔五色流苏。帐顶上安金莲花，花中悬金箔，织成囊。南北朝时期的佛教石窟也发现帐角用龙装饰的现象^[102]。冬寿墓的坐帐，帐顶装饰莲花，帐角装饰莲花、璜和流苏，与辽阳上王家晋墓^[103]发现的男主人坐帐十分相似。因此我们认为冬寿墓墓主人位于坐帐内的形象实际上是利用辽西地区魏晋壁画中的某些片段为粉本，同时还存在着根据墓主人身份等对粉本进行选择、组合和改造的情况，冬寿墓出现的莲花纹并不代表当时佛教已经传入高句丽，只是代表一种装饰和纹样，一个粉本的重要组成部分^[104]。

3. 三燕、高句丽莲花纹瓦当的关系

关于三燕莲花纹瓦当和高句丽莲花纹瓦当的关系，虽然各国学者都认为二者存在着密切的联系，但是对于影响与被影响的主体和客体却存在两种截然不同的观点。一是高句丽莲花纹瓦当是在三燕莲花纹瓦当的影响下产生的，以中国学者李新全^[105]、王飞峰^[106]等，日本学者桃崎祐辅^[107]等为代表；二是三燕莲花纹瓦当的产生受到了高句丽莲花纹瓦当的影响，以韩国学者姜贤淑^[108]等为代表。本文分析了三燕、高句丽莲花纹瓦当产生的时间和背景，我们发现从时间上来看，三燕莲花纹瓦当产生的时间明显早于高句丽莲花纹瓦当的出现时间，可能在北燕时期(407—436年)莲花纹瓦当被文字瓦当取代；高句丽莲花纹瓦当的产生时间不晚于好太王十七年(407)，一直使用到高句丽灭亡；因此从事物发展的逻辑顺序而言，高句丽莲花纹瓦当不会影响到三燕莲花纹瓦当的产生和发展，而三燕莲花纹瓦当则会影响到高句丽莲花纹瓦当的产生和发展。从瓦当的系谱来看，三燕莲花纹瓦当中，既存在有界格线的莲花纹瓦当，也有无界格线的莲花纹瓦当，而且从这两类莲花纹瓦当的演变规律来看，莲瓣数量和界格线数量随着时代的发展表现出越来越多的趋势，这些特征与国内城时期高句丽

莲花纹瓦当中有界格线的莲花纹瓦当、无界格线的莲花纹瓦当发展演变的特点完全一致。从三燕和高句丽遗物的关系来看，高句丽墓葬壁画的纹样和布局、武器、马具和甲胄等诸多方面均受到三燕文化的强烈影响。某些器物如用于战争的铁镞、防护装备的甲胄、驾驭马具的衔镳和装饰用的步摇形云珠，高句丽遗物均受到三燕同类器物的影响，甚至达到了难分彼此的程度。从当时的人员交往情况来看，二者之间交往频繁，前燕时期高句丽曾臣服于前燕，而且从前燕时期开始，就有前燕人如冬寿、郭充等逃往高句丽。因此我们认为从事物发展的逻辑顺序、瓦当的系谱、三燕和高句丽交流等情况来看，高句丽莲花纹瓦当的产生和发展均受到了三燕莲花纹瓦当的影响。

4. 结语

三燕莲花纹瓦当作为目前东北地区发现的最早的莲花纹瓦当，其产生于前燕迁都龙城（341年）后不久，在营造龙城的过程中大量被使用，北燕时期可能被文字瓦当（“富貴萬歲”）取代。高句丽莲花纹瓦当产生于国内城地区，首先在王陵和高等级遗迹中开始使用。其产生时间应不晚于好太王十七年（407）。值得注意的是好太王时期高句丽实际控制了辽东半岛以后，位于辽东半岛南端的大黑山山城也出现了高句丽早期莲花纹瓦当和当沟，显示了大黑山山城的特殊意义。三燕莲花纹瓦当、高句丽莲花纹瓦当均是在佛教传入上述地区之后在佛教的直接影响下出现的，高句丽莲花纹瓦当的产生和发展受到了三燕莲花纹瓦当的影响，特别是三燕莲花纹瓦当中的无界格线莲花纹瓦当和有界格线莲花纹瓦当，成为以后高句丽莲花纹瓦当的重要类型。

附记：本文系国家社科基金2016年度重大课题（16ZDA149）阶段性成果。

注

- [1] 唐·房玄龄等(撰)：《晋书·卷一百九·慕容皝载记》，中华书局，1974年，第2825—2826页；时有黑龙白龙各一。见于龙山，皝亲率群僚观之，去龙二百余步，祭以太牢。二龙交首嬉翔，解角而去。皝大悦，还宫，赦其境内。号新宫曰和龙，立龙翔佛寺于山上。此事即345年慕容皝在今辽宁省朝阳市建立龙翔佛寺，史称“龙见立寺”。本文所用正史均为中华书局点校本，不再赘述。
- [2] 刘庆柱：《关于中国古代莲花纹瓦当图案渊源考古研究》，《고대 동아시아의 기와》，한국기와학회，2008년。
- [3] 戈父(编著)：《古代瓦当》，第179页，中国书店，1997年。
- [4] 万雄飞、白宝玉：《朝阳老城北大街出土的3—6世纪莲花纹瓦当初探》，《东北亚考古学论丛》，第61—66页，科学出版社，2010年。
- [5] 朝阳市北塔考古勘探队、朝阳市北塔维修办公室：《朝阳北塔1986—1989年考古勘察纪要》，《辽海文物学刊》，第15—23页，1990年第2期。辽宁省文物考古研究所、朝阳市北塔博物馆：《朝阳北塔—考古发掘与维修工程报告》，文物出版社，2007年。
- [6] 辛岩、付兴胜：《金岭寺魏晋建筑群址为研究三燕文化提供重要线索》，《中国文物报》，2001年1月31日。

- 日第1版。辛岩、付兴胜、穆启文：《辽宁北票金岭寺魏晋建筑遗址发掘报告》，《辽宁考古文集》（二），198—224页，科学出版社，2010年，本文所用金岭寺相关材料均出自该报告。
- [7] 焦智勤：《邺城瓦当分期研究》，《殷都学刊》，第43—54页，2007年第2期。其中第52页图二十一、二十二的莲花纹样和瓦当整体布局与金岭寺遗迹出土材料有一定的相似之处，笔者认为是前燕都邺城时期的瓦当。
- [8] 辛岩、付兴胜、穆启文：《辽宁北票金岭寺魏晋建筑遗址发掘报告》，《辽宁考古文集》（二），科学出版社，2010年。
- [9] 王飞峰：《三燕瓦当研究》，《边疆考古研究》，第12辑，科学出版社，2012年。
- [10] 田立坤：《金岭寺建筑址为“庵庙”说》，《庆祝张忠培先生八十岁论文集》，科学出版社，2014年。
- [11] 本文图二：2引自辽宁省文物考古研究所（编）：《三燕文物精粹》，第122页，图166，辽宁人民出版社，2002年。
- [12] 本文图三：1引自焦智勤：《邺城瓦当分期研究》，《殷都学刊》，第43—54(52)页，图二十九：1，2007年第2期。
- [13] 本文图三：2引自高桥匡四郎：《蘇子河流域に於ける高句麗と後女眞の遺跡》，《建国大学研究院研究期報》，第三一四，1941年第2号。
- [14] 本文图三：3、4引自渡邊三三、斎藤武一：《満洲國撫順の古瓦に就て》，《考古學雜誌》第二十九卷第一——號，第667—690(670)，第二圖：2、6，1939年。
- [15] 徐家国：《辽宁新宾县永陵镇汉城址调查》，《考古》，第1049—1051页，1989年第11期。
- [16] 李新全、苏继力：《辽宁新宾永陵南城址》，《中国考古学年鉴》（2008），第187—188页，文物出版社，2009年。
- [17] 《晋书·卷六·元帝纪》，第151—155页：(大兴)二年(319)……八月，肃慎献楨矢石砮……十二月乙亥，大赦，诏百官各上封事，并省众役。鲜卑慕容廆袭辽东、东夷校尉、平州刺史崔毖奔高句丽。三年……三月，慕容廆奉送玉玺三组。……四年……十二月，以慕容廆为持节，都督幽平二州东夷诸军事、平州牧，封辽东郡公。通过以上史料可以知道大兴二年(319)慕容廆袭击辽东成功，导致当时的东夷校尉、平州刺史崔毖逃亡高句丽，此时慕容鲜卑已经实际控制了包括今水陵南城在内的辽东地区，至大兴四年(321)，慕容廆占领辽东地区最终得到了东晋朝廷的认可。
- [18] 《晋书·卷一百九·慕容皝载记》（第2821—2822页）：使阳裕、唐柱等筑龙城，构宫庙，改柳城为龙城县……咸康七年，皝迁都龙城。
- [19] 《晋书·卷一百九·慕容皝载记》（第2822页）：皝躬巡郡县，劝课农桑，起龙城宫阙。
- [20] 魏存成：《高句丽考古》，第74页，吉林大学出版社，1995年。李裕群：《高句丽佛教造像考——兼论北朝佛教造像样式对高句丽的影响》，《4—6世纪的北中国与欧亚大陆》，第233页，科学出版社，2006年，以下称《高句丽佛教造像考——兼论北朝佛教造像样式对高句丽的影响》。李乐营：《佛教向高句丽传播路线的探析》，《社会科学战线》，第124—126页，2008年第11期。陈明华：《韩国佛教美术》，第20页，文物出版社，2009年。国内学者、朝鲜半岛学者及日本学者也多持此观点。
- [21] 梁志龙：《高句丽儒释道三教杂论》，《北方文物》，第88—94页，2004年第2期。
- [22] 吴焯：《从向邻国的政治关系看佛教在朝鲜半岛的初传》，《中国史研究》，2006年第1期。
- [23] 温玉成：《集安长川一号壁画墓》，《北方文物》，第32—38(70)页，2001年第1期。李海涛：《佛教在高句丽、百济和新罗传播足迹考》，《全球化下的佛教与民族》（第三届两岸四地佛教学术研讨会），第501—511页，光明日报出版社，2011年。
- [24] 日·木村宣彰（著）、姚义田（译）：《昌始与高句丽佛教》，《博物馆研究》，第38—44页，2002年第2期。
- [25] 王飞峰：《冬寿墓莲花纹研究》，《边疆考古研究》，第14辑，科学出版社，2013年。
- [26] 梁·释慧皎（撰）、汤用彤（校注）：《高僧传》，中华书局，1992年。
- [27] 唐·释道世（撰）、周叔迦、苏晋仁（校注）：《法苑珠林校注·卷三十一·昌始传》，第956页，中华书

- 局。2006年：宋伪魏长安有释县始，关中人。自出家以后，多有异迹。晋孝武太元之末，贾经律数十部，往辽东宣化，显授三乘，立以归戒，盖高句丽闻道之始也。又熙初，复还关中，开导三辅。
- [28] 唐·神清(撰)、宋·慧宝(注)、宋·德珪(注解)、富世平(校注)：《北山录校注·卷三·县始传》，中华书局，第203页。2014年：晋县始，孝武末(东晋也)，帝临位，深奉佛法，苻坚兵至，谢玄破之也(辽东，高丽开导始也。后还三辅，咸阳县，昔秦皇于此置殿观)，三辅人宗仰之。
- [29] 元·无名氏(撰)：《神僧传·卷二·县始传》：释县始，关中人。自出家以后多有异迹。晋孝武太元之末，贾经律数十部，往辽东宣化，显授三乘，立以归戒。又熙初，复还关中，开导三辅。
- [30] 本文图四：1、2 分别引自성균관대학교 박물관：《新羅金石文拓片展》，성균관대학교 박물관，第121页图、第119—120页图，2008年。
- [31] 龙德为后梁末帝朱友贞的年号，仅仅使用了三年，即921—923年，此碑的龙德四年笔者暂定为924年。
- [32] 周绍良(主编)：《唐代墓志汇编》(上)，第984页，上海古籍出版社，1992年。
- [33] 唐·道宣(撰)、郭绍林(点校)：《续高僧传》，第993页，中华书局，2014年。
- [34] 《高句丽佛教造像考—兼论北朝佛教造像样式对高句丽的影响》，第233页。
- [35] 温玉成：《高句丽“相之国”》，《北方文物》，第67(112)页，2004年第3期。
- [36] 本文图五：1 引自吉林省文物考古研究所、集安市博物馆(编著)：《集安出土高句丽文物集萃》，第101页，科学出版社，2010年。以下称《集安出土高句丽文物集萃》。
- [37] 小泉顯夫：《平壤清岩里廢寺址(概報)》，《昭和十三年度古蹟調査報告》，朝鮮古蹟研究會，1940年。
- [38] 小泉顯夫：《泥佛出土地元五里廢寺址の調査》，《昭和十二年度古蹟調査報告》，朝鮮古蹟研究會，1938年。
- [39] 本文图五：2 引自菊竹淳一、吉田宏志(编)：《世界美術大全集·東洋編10·高句麗·百濟·新羅·高麗》，小學館，图版81，1997年。
- [40] 本文图五：3 引自國立中央博物館：《三國時代佛教形刻》，國立中央博物館，第121页，图102，1990年。
- [41] 《高句丽佛教造像考—兼论北朝佛教造像样式对高句丽的影响》，第235页。
- [42] 金元龍：《蘆島出土金銅佛坐像》，《歷史教育》，1961年제 5집。
- [43] 吉林省文物考古研究所、集安市博物馆：《丸都山城》，文物出版社，2004年。
- [44] 田村見一：《楽浪と高句麗の考古学》，同成社，2001年。
- [45] 東潮：《高句麗考古学研究》，吉川弘文館，1997年。
- [46] 裴柱：《4 세기 고구려 연화문와당의 개시연대에 대한 고찰》，《韓國思想과文化》 제45집，2008년。
- [47] 벽종오：《고구려 기와의 성립과 왕권》，주류성，2006년。
- [48] 千田剛道：《瓦からみた高句麗古都集安》，《青丘学术論集》，1994年第5集。
- [49] 吉林省文物考古研究所、集安市博物馆：《集安高句丽王陵》，文物出版社，2004年。以下称《集安高句丽王陵》。池内宏：《通溝》(上)，日蘭文化協會，1938年。以下称《通溝》等。
- [50] 集安市博物馆：《集安洞沟古墓群禹山墓区2112号墓》，《北方文物》，2004年第2期。吉林省文物考古研究所、集安市博物馆：《集安禹山M2112墓室清理简报》，《吉林集安高句丽墓葬报告集》，第292—299页，科学出版社，2009年。
- [51] 耿铁华、尹国有：《高句丽瓦当》，吉林人民出版社，第158页，2001年。以下称《高句丽瓦当》。
- [52] 集安县文物保管所：《集安县上、下和龙高句丽古墓清理简报》，《文物》，1984年第1期。
- [53] 吉林省文物考古研究所、集安市博物馆：《国内城》，文物出版社，2004年。
- [54] 吉林省文物考古研究所、集安市博物馆：《丸都山城》，文物出版社，2004年。以下称《丸都山城》。
- [55] 《集安县文物志》编写组：《集安县文物志》，吉林省文物志编委会，1984年。《高句丽瓦当》等。
- [56] 王洪峰等：《辽源市文物志》，吉林省文物志编辑委员会，1988年。
- [57] 延边博物馆《延边文物简编》编写组：《延边文物简编》，延边人民出版社，1988年。

- [58] 渡邊三三、斎藤武一：《満洲國撫順の古瓦に就て》、《考古學雜誌》第二十九卷第一號、1939年。
- 徐家國、孙力：《辽宁省抚顺高爾山城發掘簡報》，《遼海文物學刊》1987年第2期。三上次男、田村晃一：《北開山城·高爾山山城：高句麗新域の調査》，中央公論美術出版社，1993年。辽宁省文物考古研究所、抚顺市博物馆：《辽宁省抚顺市施家墓地發掘簡報》，《考古》，2007年第10期。《中國文物地圖集·遼寧分冊》編輯委員會：《中國文物地圖集·遼寧分冊(上)》，第258—259頁，西安地圖出版社，2009年。以下稱《中國文物地圖集·遼寧分冊(上)》或《中國文物地圖集·遼寧分冊(下)》。
- [59] 佟達：《新賓五龍高句麗山城》，《遼海文物學刊》，1994年第2期。
- [60] 周向永：《西丰城子山城始建年代再考》，《東北史地》，2009年第2期。周向永、許超：《鐵嶺的歷史與考古》，遼海出版社，2010年。
- [61] 《中國文物地圖集·遼寧分冊(下)》，第301頁。
- [62] 苏鵬力：《灯塔市燕州城址》，《中國考古學年鑑》(2010)，第195—196頁，文物出版社，2010年。
- [63] 《中國文物地圖集·遼寧分冊(上)》，第249—250頁。
- [64] 崔玉寬：《鳳凰山城發掘簡報》，《遼海文物學刊》，1992年第2期。李龍彬、華玉冰、崔麗萍：《辽宁丹東鳳凰山城首次發掘取得重大收穫》，《中國文物報》，2007年3月23日。李龍彬、司伟伟、崔麗萍：《辽宁丹東鳳凰山城考古新收穫》，《中國文物報》，2008年2月15日。《中國文物地圖集·遼寧分冊(上)》，第255頁。
- [65] 杨水芳、楊光：《岫岩境內五座高句麗山城調查簡報》，《遼海文物學刊》，1994年第2期。
- [66] 郭富純、趙錫金(主編)：《大連古代文明圖說》，第248頁，吉林文史出版社，2010年。
- [67] 中国社会科学院考古研究所、辽宁省文物考古研究所、盖州市文物局(王飞峰等)：《辽宁省盖州市青石岭山城的調查與發掘》，《考古》，2017年第12期。
- [68] 김일성종합대학 고고학및민족학강좌：《대성산 일대의 고구려 유적에 관한 연구》，김일성종합대학출판사，1973년。
- [69] 石光藩：《高句麗考古學の新しい成果》，《古代朝鮮の考古と歴史》，雄山閣，2002年。
- [70] 김일성종합대학：《동명왕릉과 그 부근의 고구려유적》，김일성종합대학출판사，1976년。
- [71] 崔鐘澤、李秀珍列：《紅蓮峰第1堡壘—發掘調查綜合報告書—》，高麗大學校考古環境研究所，2007年。
- [72] 2016年9月7日在峨嵋山城的發掘中發現與紅蓮峰第1堡壘出土瓦當紋樣相同的蓮花紋瓦當，見姜泰煥(기자)：《아차산성서 고구려 유품 “연화문화당” 발견》，《동아일보》，2016年9月8日。
- [73] 삼강주와 :《鍾川瓠盧古壘III》(第2次發掘調查報告書)，韓國도지공사 도지박물관，2007년。
- [74] 王飞峰：《九淵山城宮殿研究》，《考古》，2014年第4期。
- [75] 關野貞：《滿洲撫安縣及び平壤附近に於ける高句麗時代の遺跡》(二)，《考古學雜誌》第五卷第四號，1924年。
- [76] 吉林省博物館：《吉林省集安高句麗建築遺址的清理》，《考古》，1961年第1期。
- [77] 方起東：《集安東台子高句麗建築遺址的性質和年代》，《東北考古與歷史》第一輯，文物出版社，1982年。
- [78] 姜賢淑：《中國吉林省集安東台子遺蹟再考》，《한국고고학보》제75집, 한국고고학회, 2010년。
- [79] 《三国史記·卷第十八·故國墳王本紀》(第223頁)：九年(392)……三月，下教，崇信佛法求福命有司立國社。修宗廟。由於《三国史記》所記故國墳王年代為384—392年，實際上依據好太王碑資料故國墳王年代為384—391年，因此筆者傾向於東台子建築為故國墳王八年(391)高句麗的國社和宗廟遺迹。由於《三国史記》在故國墳王紀年問題上多出一年，因此本文在引用故國墳王及好太王年代時均做了調整。
- [80] 王飞峰：《關於千秋墓、太王陵和將軍塚的幾個問題》，《邊疆考古研究》，第10輯，科學出版社，2011年。

- [81] 王飞峰：《吉林集安东台子遗址研究》，《北方文物》，2016年第3期。
- [82] 本文图六：1、2分别引自《集安高句丽王陵》，图版七二：1、第194页，图一五六。
- [83] 井上直树：《集安出土文字資料からみた高句麗の支配体制についての一考察—安岳三号墳・德興里古墳にみえる被葬者の職位の再検討と府官制—》，《朝鮮學報》第二百三輯，2007年4月。
- [84] 王飞峰：《关于集安高句丽碑的几个问题》，《集安麻线高句丽碑》，文物出版社，2014年。
- [85] 王飞峰：《高句丽卷云纹瓦当研究》，《高句丽与东北民族研究》（2014），吉林大学出版社，2014年。
- [86] 《中国文物地图集·辽宁分册（下）》，第73页。
- [87] 本文图七：1引自郭富纯、赵锡金（主编）：《大连古代文明图说》，第248页，吉林文史出版社，2010年。
- [88] 本文图七：2引自《集安出土高句丽文物集萃》，第56页。
- [89] 本文图七：3为笔者拍摄。
- [90] 本文图七：4引自《九都山城》，图版八七：2。
- [91] 本文图七：5引自吉林省文物考古研究所（王志刚等）：《集安将军坟西南建筑遗址的考古发掘》，《边疆考古研究》，第10辑，科学出版社，2011年。图版四：5。
- [92] 《旧唐书》（第5320页）。
- [93] 《资治通鉴·卷一百六·晋纪二十八》（第3379—3407页）：（太元十年，385年）六月，高句丽寇辽东。佐遣司马郝景将兵救之。为高句丽所败。高句丽遂陷辽东，玄菟……（十一月）慕容农至龙城……进击高句丽，复辽东，玄菟二郡。
- [94] 《资治通鉴·卷一百一十一·晋纪三十三》（第3562页）：（隆安四年，400年，春正月）高句丽王安事燕礼慢；二月，丙申，燕王盛自将兵袭之。以领军大将军熙为前锋，拔新城，南苏二城，开境七百余里，徙五千余户而还。
- [95] 《资治通鉴·卷一百一十二·晋纪三十四》（第3599页）：（元兴元年，402年，五月）高句丽攻宿军，燕平州刺史慕容归弃城走。
- [96] 《资治通鉴·卷一百一十三·晋纪三十五》（第3633页）：（元兴三年，404年，十二月）高句丽侵燕。
- [97] 金毓黻：《东北通史》，第233—234页，（台湾）乐天出版社，1971年。
- [98] 《隋书·卷九八·来护儿传》（第1515—1516页）：来护儿字崇善，江都人也……（大业）十年，又帅师度海，至卑奢城，高丽举国来战，护儿大破之，斩首千余级。《资治通鉴·卷一百九十七·唐纪十三》（第6332页）：（贞观十九年四月）张亮帅舟师自东莱渡海，袭卑沙城，其城四面悬绝，惟西门可上。程名振引兵夜至，副总管王度先登。五月，己巳，拔之。获男女八千口。《旧唐书·卷一百九十九上·高丽传》（第5323页）：五月，张亮副将程名振攻沙卑城，拔之，虏其男女八千口。
- [99] 本文图八：1、2引自国립한국재민구소，남북역사학자협의회：《남북공동 고구려벽화고분 보존 실태 조사 보고서》（제2권 도판），国립한국재민구소，2006년，第31页，图27。
- [100] 本文图八：3引自《集安高句丽王陵》，图版一〇九：5。
- [101] 卢兆荫：《略论两汉魏晋时期的帷帐》，《考古》，1984年第5期。
- [102] 易水（杨泓）：《帐与帐构》，《文物》，1980年第4期。
- [103] 李庆发：《辽阳上王家晋代壁画墓清理简报》，《文物》，1959年第7期。
- [104] 王飞峰：《冬寿墓莲花纹研究》，《边疆考古研究》，第14辑，科学出版社，2013年。
- [105] 李新全：《三燕瓦当考》，《辽海文物学刊》，1994年第4期。
- [106] 王飞峰：《三燕瓦当研究》，《边疆考古研究》，第12辑，2012年。王飛峰：《高句麗瓦當研究》，高麗大學校大學院博士學位論文，2013年。
- [107] 桃崎祐輔：《高句麗太王陵出土瓦・馬具からみた太王陵說の評價》，《海と考古學》，六一書房，2005年。
- [108] 姜賢淑：《中國吉林省集安東台子遺蹟再考》，《한국고고학보》 제75집，한국고고학회，2010년。

三燕高句麗蓮華文瓦当の出現およびその関係

王飛峰

三燕考古学と高句麗考古学は長きにわたり、東北アジアにおける学術界の関心の的であり、三燕と高句麗、両国の蓮華文瓦当の出現およびその関連研究もまた、その重要な研究課題の一つである。これは三燕と高句麗が長時間にわたり境を接していたからというわけではなく、両者の蓮華文瓦当が密接な関係を示しているからである。現在のところ、三燕と高句麗の蓮華文瓦当の出現に関して、とくに高句麗における出現時期については、各研究者間になお一定の意見の相違がある。そしてその影響関係についても、学界では異なる見解が示されている。そこで本稿では、三燕と高句麗の蓮華文瓦当の出現およびその関係について、筆者の見解を述べる。

1. 三燕における蓮華文瓦当の出現

仏教は後漢末年に西域より中国に伝わり、三国・西晋期に一定の発展をみせ、そして東晋・十六国期に急速な発展期へといたった。中国東北地区における仏教の伝播時期は明確ではないが、遼くとも前燕初期には、仏教はすでに中国東北地区である程度発展していた。永和元年（345）、前燕の慕容皝は龍城附近の龍山に龍翔寺⁽¹⁾を建てた。これは現在、東北地区でもっとも古い仏教寺院として知られ、仏教が前燕領域内で統治階級に許されていた重要な証左である。仏教の重要な装飾文様のひとつである蓮華文は、中国伝播後、とくに中国古典建築と結びつき、蓮華文に関する一連の文様と建築部材等を創出した。蓮華文瓦当はすなわち、そのなかの代表的なものである。現在の考古出土資料では、蓮華文瓦当は早くも戦国時代の建築において、すでに使用が確認される。そして南北朝およびその後、流行した蓮華文瓦当は、蓮華の特徴、瓦当面の蓮華の配置、中房の変化などの面において、いずれも秦漢瓦当の影響がみられる⁽²⁾。またある研究者は、蓮華文瓦当は早くも戦国期秦の瓦当において、すでに出現しているが、写実的手法によって現実世界の蓮華を題材として芸術的に彫ったもので、南北朝期の仏教の影響を受けて生み出された蓮華文瓦当とは形態と起源が異なるだけではなく、さらに重要なのは、そこに込められた思想観念であり、両者には天地の違いがあると指摘する⁽³⁾。十六国期が始まり、とりわけ南北朝と隋唐期の蓮華文瓦当は疑いなく仏教の影響を受けて出現したものである。三燕における蓮華文瓦当の出現はこれと同様に、仏教の影響下で出現したものであり、その出現を論じる前に、蓮華文瓦当の認定と編年について説明をする必要がある。

三燕の都城が置かれた龍城、薊城、鄆城、中山は、三燕以降も何度も城市が建設され、三燕の遺跡、とりわけ宮殿址の特定はかなり難度が高い。三燕の宮殿などの建築遺跡に関する考古調査は多くなく、くわえて十六国期の比較可能な瓦当資料が多くないなどの要因が、三燕の瓦当の認定および編年を困難にしている。三燕瓦当の認定は龍城、薊城、鄆城、中山の4ヶ所の地とその付近地区から着手し、すでに発掘によって出土した三燕と関連する遺物のなかから探さなければならないと考える。三燕都城の龍城およびその周囲の朝陽北大街⁽⁴⁾、朝陽北塔⁽⁵⁾および北票市金嶺寺建築遺跡⁽⁶⁾などから、三燕と関係する瓦当資料が出土している。薊城（350～357年）と中山（385～397年）が前燕と後燕の都城であった時間は長くなく、現在のところ前燕と後燕に関係する瓦当資料はみつかっていない。鄆城遺跡の報告済みの瓦当資料のなかには、朝陽と北票に所在する金嶺寺建築遺跡で出土した瓦当と似た資料があり⁽⁷⁾、我々は三燕期の資料であると考えている。

三燕蓮華文瓦当の類型および年代について、筆者はかつて論文「三燕瓦当研究」の中で整理したことがあり、ここではこの論考をもとに、三燕蓮華文瓦当の類型、変遷、年代について簡単に述べたい。現在、龍城遺跡からはA型I式蓮華文瓦当（図一-1）とBa型蓮華文瓦当（図一-5）がいずれも発見されており、その形態から前燕期（341～350年）の遺物と判断できる。A型II式蓮華文瓦当（図一-2）とBb型蓮華文瓦当（図一-9～14）は龍城遺跡と北票市金嶺寺建築遺跡等からも発見されており、その時期は後燕中山期（385～397年）と考えられる。A型III式瓦当（図一-3）とA型IV式瓦当（図一-4）は龍城遺跡と金嶺寺建築遺跡等で発見されており、その時期はそれぞれ後燕慕容熙期（401～407年）、北燕期（407～436年）となるだろう。幾何学文瓦当（図一-6）とC型蓮華文瓦当（図一-7）はともに鄆城遺跡で発見されており、その時期は前燕鄆城期（357～370年）であろう。D型蓮華文瓦当（図一-8）は龍城遺跡でのみ発見されており、その時代は前燕の鄆城遷都前（357年）と考えられる。

ここで注意すべきは、金嶺寺建築遺跡の性格と年代は三燕瓦当の時期区分において非常に重要な意義を有しているが、目下学界ではこの遺跡の性質と年代の認識について、なお若干の相違が存在する点である。金嶺寺建築遺跡の発掘概報は、この建築群は慕容部が遼西大凌河流域に居を定めて久しく述べ前燕および前燕以前の時期で、初期の格式の高い建築址であるとする⁽⁸⁾。筆者は、この遺跡は後燕期の慕容垂「宗廟、社稷を繕う」と関係し、網状地文のある蓮華文瓦当は後燕中山期、輻線のある蓮華文瓦当は慕容熙期の遺物であると考える⁽⁹⁾。田立坤は、おそらくこの建築は前燕慕容熙期に修築した「慕容廟」であろうと述べるが、金嶺寺建築遺跡で出土した2種類の瓦当の時期についてはいまだ説明をしていない⁽¹⁰⁾。後燕建国時の首都である中山（現・河北省定州市）からは三燕期の瓦当あるいは遺物が出土していないために、金嶺寺建築遺跡の性格と年代は、今後、定州市

で出土する後燕期の瓦当によって決まるところが非常に大きい。すなわち、もし定州で出土する瓦当が網状地文の蓮華文瓦当と類似するのであれば、金嶺寺建築遺跡の創建年代は後燕慕容垂期であるので、網状地文のある瓦当は後燕慕容垂期とすべきで、幅線のある蓮華文瓦当は後燕慕容熙期である。反対に、もし定州で出土する瓦当が幅線のある蓮華文瓦当と類似するのであれば、金嶺寺建築の創建年代は前燕慕容皝期であり、網状地文のある蓮華文瓦当は前燕期とすべきで、幅線のある蓮華文瓦当は後燕慕容垂期であろう。この他に、金嶺寺建築遺跡で発見されたいくつかの遺物が、この建築群が北燕期まで使用され続けたことを示している。遺跡からは、かつて1点の薄い灰色の細砂岩質の礎石（図二-1）が出土した。礎石の頂部は八弁蓮華文を飾り、側面は波状文を陰刻するが、この波状文が馮素弗墓出土の石製硯（図二-2）側面の文様と似ているだけでなく^{〔11〕}、両者の素材はともに細砂岩で、さらに彫刻技法もほぼ一致する。

上述の分析を通じて、前燕期にはすでに蓮華文瓦当が出現していることが分かる。蓮華文瓦当のなかにはすでに網状地文の蓮華文瓦当があり、また幅線のない蓮華文瓦当と幅線のある蓮華文瓦当があり、とくに後二者はのちの高句麗における蓮華文瓦当の主要型式となつた。A型I式とBa型蓮華文瓦当の蓮弁の間には小さく短い線があり、これと類似する蓮弁は後趙期の「大趙萬歳」瓦当^{〔12〕}（図三-1）にみられる。このため三燕蓮華文瓦当のうち、初期の蓮華文瓦当は、後趙期のこのタイプの文様の影響を受けた可能性がある。後趙期は仏教が盛行し、後趙地区で出現した蓮華文に関係する瓦当は、疑いなく仏教文化の影響を受けた結果である。これにくわえて、後趙はかつて前燕と直接、境を接し、往来は密接であったため、この時期に仏教が後趙より前燕に伝來したであろうと推測される。そして前燕地区で伝播が始まり、345年に慕容皝が龍翔寺を建立した時には、仏教は前燕域内ですでに発展段階に入っていた。

東北地区の三燕と類似する幅線のある蓮華文瓦当は、さらに新賓県の永陵南城で出土した双幅線四葉文瓦当^{〔13〕}（図三-2）、日本統治期に撫順市永安公園を改修した時に出土した漢代の「千秋萬歳」瓦当（図三-3）、卷雲文瓦当^{〔14〕}（図三-4）がある。このうち、卷雲文瓦当の瓦当面はさらに四つの花葉文で飾っており、これと似た半瓦当が1980年代の遼寧省文物考古研究所による永陵城調査中にも発見されている^{〔15〕}。この調査では、「千秋萬歳」瓦当と双幅線四葉文瓦当（報告では瓦当图案を魏晉期の蓮華文瓦当としている^{〔16〕}）が出土した。このため永陵南城出土の双幅線四葉文瓦当は、当地の文字瓦である「千秋萬歳」瓦当と花葉文を飾る卷雲文瓦当が結合した产物であると考え、仏教の影響を受けて生み出された伝統的な意味をもつ蓮華文瓦当ではなく、その年代上限は上述の漢代「千秋萬歳」瓦当と卷雲文瓦当より後と考えた。永陵南城出土の双幅線四葉文瓦当は規格がそろい、比較的高温で焼成されており、三燕瓦当と比べて明らかに違う。このタイプの瓦当は三

燕瓦当に属さないだけでなく、慕容鮮卑の侵攻前に当地で製作されたものであり、そのためその年代の下限は慕容鮮卑の遼東占領、すなわち東晋の太興二年（319）以降になることはない⁽¹⁷⁾。したがって、三燕蓮華文瓦当中の幅線のある蓮華文瓦当の創出は、永陵南城の双界幅四葉文瓦当の影響を受けているに違いない。

それゆえ三燕蓮華文瓦当の出現は、前燕の龍城遷都前後（341年）、あるいはやや遅い時期と考えられ、仏教が前燕地区に伝來した直接の産物ではないが、慕容皝の龍城遷都や新都建設等の活動と関係する。例えば、咸康七年（341）、慕容皝は龍城に遷都する前、陽裕と唐柱らを充てて龍城宮殿と宗廟等を建設している⁽¹⁸⁾。龍城遷都後、郡県を巡回して農業の発展を促すほか、慕容皝はさらに龍城宮闈を修繕している⁽¹⁹⁾。

2. 高句麗における蓮華文瓦当の出現

現在の研究状況からみて、高句麗における蓮華文瓦当発生の主要条件は以下の2点が含まれる。第1点目は仏教の高句麗伝来、第2点目は三燕蓮華文瓦当の影響である。そのうち三燕蓮華文瓦当が高句麗蓮華文瓦当に与えた影響に焦点をあて、以下に論述する。ここで重点的に論じるのは、仏教が高句麗に伝わった時期、および高句麗蓮華文瓦当の発生等である。

仏教がいつ高句麗に伝わったのかについて、研究者の意見は一致しているとはいはず、主要なものを概括すると次のとおりである。一つ目は『三国史記』の記載にもとづき、372年に仏教は前秦の僧順道によって高句麗へ伝わったとする見解である⁽²⁰⁾。二つ目は、冬寿墓に描かれる蓮華文から、357年以前の4世紀中葉に仏教はすでに高句麗に伝わっており⁽²¹⁾、さらには冬寿本人が仏教信徒であったであろうと考える見解である⁽²²⁾。三つ目は、『高僧伝』中の支道林（314～366年）と“高麗道人書”的記載から、“高麗道人”を当時の高句麗の仏教徒と考え、366年以前に仏教がすでに高句麗に伝わっていたとするものである⁽²³⁾。四つ目は、『高僧伝』や『鳳岩寺智証大師寄照塔碑』等の曇始関連の記載から、東晋太元二十年（太元は東晋孝武帝の年号で、376～396年である。太元二十年はすなわち395年にあたる）に仏教が東晋の僧曇始によって高句麗に伝わったとする見解である⁽²⁴⁾。五つ目は、『高僧伝』や『鳳岩寺智証大師寄照塔碑』等の曇始関連の記載ならびに朝鮮半島と高句麗で発見された仏像資料等から、仏教は東晋太元年間末期（約390～396年）に後秦の僧曇始によって高句麗に伝わったとする⁽²⁵⁾。このうち第一番目の観点が目下、学界での主要な見解である。以上の各観点は、現在、目にすることのできる文献史料を基礎としている。実際の考古学的証拠は多くないため、まず関連する文献史料に対して整理することとする。

現在、目にすることのできる高句麗への仏教伝来に関する記録のうち最古のものは、南

梁の僧惠皎（497～554年）が撰寫した『高僧伝』で、『高僧伝』卷10 曇始伝に「积曇始は閻中人なり。出家自り以後、多く異迹有り。晋孝武太元之末、經律數十部を賣り、遼東に往きて宣化し、三乘を顯授し、以て帰戒を立てり。蓋し高句麗道を聞く之始なり。義熙初、復た閻中に還り、三輔を開導す。」⁽²⁶⁾とある。惠皎撰『高僧伝』から元代に至るまで、中國歴代文献の『法苑珠林』⁽²⁷⁾、『北山錄』⁽²⁸⁾、元代の『神僧伝』⁽²⁹⁾等の曇始に関する記録は、いずれも『高僧伝』を基礎にするか、あるいは直接援用、あるいはやや要約をくわえていいるが、大きな相違はない。

朝鮮半島の史料のなかで、仏教が高句麗に伝來したという最古の記録は、統一新羅末期の著名な学者である崔致遠（857～？年）が撰寫した『鳳岩寺智証大師寄照塔碑』（正式名称は『大唐新羅國故鳳岩寺教證智証大師寄照之塔碑銘并序』）である。『鳳岩寺智証大師寄照塔碑』⁽³⁰⁾（図四-1・2）は韓國慶尚北道聞慶市加恩邑院北里の鳳岩寺にあり、韓國宝物第138号である。碑高2.73m、幅1.64m、厚さ0.23mを測る。螭首亀趺を備え、碑背面末文に「龍德四年歲次甲申六月□□竟建」の題記がある。龍德は五代後梁の年号で、龍德四年はすなわち924年で⁽³¹⁾、この碑文の開始部分は仏教が朝鮮半島に伝わった過程を叙述している。

第3列末部～第4列上部：「昔、當東に鼎峙之秋表れ、百濟に蘇塗之儀有り、甘泉の金人之祀の若し。厥の後西晉の曇始を貊に始める、撫摩の東して入るが如く、句麗の阿度我に渡る、康会の南行するが如し」。崔致遠は曇始のいた時代を誤って西晉とするが、かえって曇始が高句麗に入つて法を伝えた事実を記録している。碑文中の「曇始之を貊に始める、撫摩の東して入るが如し」は、後漢明帝期に洛陽にいたった西域僧の撫摩騰、竺法蘭と同様に、曇始が高句麗にいたり、仏教を高句麗に広めはじめたことを述べている。唐代の高句麗人はまた、高句麗を貊と自称した。この点は高句麗滅亡後に唐に居住した泉男生の子、泉獻誠墓誌（大足元年（701））のなかで証明されている。すなわち、「君、諱は獻誠、其の先高句麗人なり。……公即ち襄公の嫡子なり。小貊之郷に生まれ、早く大成之用有り、地榮門寵、一国に備罕なり。」⁽³²⁾。

唐の道宣（596～667年）撰『続高僧伝』卷26 积僧意伝に、「积僧意、……元魏中、泰山朗公谷の山寺に住み、徒を聚めて教授し、暮齒に迄るまで精誠にして倦まず。寺に高麗像、相国像、胡國像、女國像、吳國像、昆侖像、岱京像有りて、此くの如き七像并せて是れ金銅、俱に寺堂に陳び、堂門常に開く。而れど鳥獸敢えて入る者无く、今に至まで猶爾のごとし」⁽³³⁾とある。一部の研究者はここで述べる高麗像とは高句麗仏像で、この仏像は前秦期（351～394年）に高句麗が竺僧朗に贈ったものとする⁽³⁴⁾。またある研究者は、ここで述べる高麗像、相国像はともに高句麗仏像で、このうち相国像は好太王期（391～412年）に高句麗「相國」が竺僧朗に贈ったものであろうと指摘している⁽³⁵⁾。目下、高句麗の仏

像資料は、中国・北朝鮮・韓国内でいざれも発見されている。中国人研究者は1985年に國內城で一尊の金銅仏⁽³⁶⁾（図五-1）を発見した。北朝鮮で発見された仏像資料は比較的多く、一部は1945年以前の日本人研究者による高句麗仏寺発掘（平壤清岩里土城内の清岩里庵寺址⁽³⁷⁾や平安南道平道郡德山面の元五里庵寺址⁽³⁸⁾等）の出土品あるいは採集品である。韓国で発見された高句麗仏像⁽³⁹⁾（図五-2）は多くが採集品である。朝鮮半島で発見された高句麗地区の仏像の年代は、ソウル市蘿島で発見された一尊の金銅仏像⁽⁴⁰⁾（図五-3）以外は、大体において5世紀初めを上らないものである。またある研究者は、蘿島金銅仏は高句麗仏像に属すが、5世紀初めに中国北方地域で製作されたと推測する⁽⁴¹⁾。韓国人研究者の金元龍も、蘿島仏像は中国から舶載した可能性が非常に高いと考えている⁽⁴²⁾。しかし仏像出土地の周囲はいずれも百濟墓制と遺跡が位置し、高句麗と関連する遺跡や遺物は発見されていないことから、この仏像はおそらく高句麗仏像ではない。

したがって惠皎『高僧伝』のなかの中国史料、崔致遠撰写『鳳岩寺智証大師寄照塔碑』および高句麗から発見された仏像資料等を参考に、仏教は東晉太元末年（約390～396年）に後秦の閻中の僧曇始によって高句麗へと伝えられたと考えられ、曇始は当時、おそらく閻中を出發して陸路で遼西に到り、遼東を経て高句麗へ入ったのであろう。

現時点での考古資料で言えば、高句麗の瓦当は卷雲文瓦当から出現し、卷雲文瓦当が消失した後に蓮華文瓦当、忍冬文瓦当、獣面文瓦当などが出現する。高句麗蓮華文瓦当が出土する遺跡は、主に生活遺跡と古墳の両者があり、このうち生活遺跡で出土する蓮華文瓦当は赤褐色が多く、瓦当面には基本的に幅線がない。墓葬上で出土する蓮華文瓦当は基本的に灰褐色で、瓦当面に幅線があるものが多い。蓮華文瓦当の色調の違いと幅線の有無が遺跡の性質と密接に相関するという特徴は、国内城期の蓮華文瓦当削出後に比較的顕著であり、平壤遷都後にはみられない。

2004年出版の報告書『九都山城』⁽⁴³⁾では、九都山城宮殿址は342年に前燕慕容皝が九都山城を攻め落とした戦火で毀損したとし、発掘担当者は342年の高句麗すでに蓮華文・忍冬文・獣面文瓦当が出現していたと述べている。日本人研究者の田村晃一⁽⁴⁴⁾、東潮⁽⁴⁵⁾等、韓国人研究者の金希燦⁽⁴⁶⁾、白種伍⁽⁴⁷⁾等は、高句麗蓮華文瓦当は冬寿墓にみられる蓮華文の影響を受けて生み出されたものであるとし、最古期の蓮華文瓦当は、太王陵で発見された蓮弁上にY字形（すなわち蓮の蕾形の蓮弁：筆者註）の双幅線六弁蓮華文瓦当で、4世紀中後期頃に比定している。またある研究者は、高句麗蓮華文瓦当のうち、幅線のある瓦当の出現年代は比較的早く、4世紀後半に発生し、幅線のない蓮華文瓦当の上限年代は6世紀初めから前半とする⁽⁴⁸⁾。現在、中国と朝鮮半島の高句麗遺跡からは、ともに高句麗蓮華文瓦当が発見されており、このうち集安と平壤地区で発見された蓮華文瓦当は数は多くないものの、形態は複雑である。国内城期の集安地区において蓮華文瓦当が出土し

た墓は、主に千秋墓、太王陵、將軍塚⁽⁴⁹⁾、禹山2112号墓⁽⁵⁰⁾、長川2号墓⁽⁵¹⁾、上活龍5号墓⁽⁵²⁾等があり、蓮華文瓦当が出土した遺跡には、国内城⁽⁵³⁾、丸都山城⁽⁵⁴⁾、東台子遺跡と梨樹園子南遺跡⁽⁵⁵⁾等がある。その他の地域の遺跡として、吉林省遼源市の龍首山山城⁽⁵⁶⁾、延辺朝鮮族自治州の溫特赫部城⁽⁵⁷⁾、遼寧省撫順市の高爾山山城とその付近にある施家墓地⁽⁵⁸⁾、新賓県の五龍山城⁽⁵⁹⁾、西豐県の城子山山城⁽⁶⁰⁾、遼陽市の金銀庫遺跡⁽⁶¹⁾と燕州城⁽⁶²⁾、丹東市の懿河尖古城⁽⁶³⁾、鳳城市的鳳凰山山城⁽⁶⁴⁾、岫岩県の娘娘山城⁽⁶⁵⁾、大連市の大黑山山城⁽⁶⁶⁾、蓋州市の青石嶺山城⁽⁶⁷⁾等がある。北朝鮮領内の高句麗蓮華文瓦当が発見された遺跡は多くが平壤地区に分布しており、主なものとして平壤城、大城山城⁽⁶⁸⁾、長寿山城⁽⁶⁹⁾、定陵寺⁽⁷⁰⁾等がある。韓国内において高句麗蓮華文が出土した遺跡には、ソウル市の紅蓮峰1号墳⁽⁷¹⁾と嵯峨山城⁽⁷²⁾、京畿道漣川市の瓠蘆古墳⁽⁷³⁾等がある。

現在、発見されている蓮華文瓦当の形態と製作技法等からみて、集安地区的高句麗蓮華文瓦当はその他の地区的高句麗遺跡から発見された蓮華文瓦当よりも古相をみせる。このため、高句麗最古の蓮華文瓦当は、集安地区的上位階級の遺跡である丸都山城宮殿址や東台子遺跡、千秋墓等の出土品の中にあるに違いないと考えられる。

丸都山城宮殿址は、その年代の下限を342年と報告されているが、現在発掘された宮殿区はおそらく慕容皝が丸都山城を攻め落とした後、好太王十七年（407）に再び基址を選んで「宮闈を増修」（『三国史記』卷18 広開土王本紀：「十七年春二月、增修宮闈」）した結果であると考えられる。そうであれば、丸都山城の早期宮殿址および慕容皝が焼き払った宮殿址の搜索もまた、国内城期の高句麗考古学の重要な研究課題となる⁽⁷⁴⁾。丸都山城の瞭望台と各門址で発見された瓦当は、宮殿址出土瓦当と色調・胎土・文様において基本的に一致する。したがって、これら瓦当の一部は好太王期のもので違いなく、丸都山城で発見された蓮華文瓦当・忍冬文瓦当・獸面文瓦当の出現年代は好太王十七年（407）より後ではなく、その下限は平壤遷都（427年）であるとみることができる。

東台子遺跡は、高句麗遺跡のなかでは早い時期に日本の研究者によって発見され、さらに閩野貞によって報告され⁽⁷⁵⁾、解放前には遺跡の一部がすでに破壊されていた。1958年に吉林省博物館が東台子遺跡を発掘し⁽⁷⁶⁾、高句麗期の重要な建築遺跡であると報告した。1982年には方起東⁽⁷⁷⁾が東台子遺跡の規模と配置等について研究をおこない、故国墳王九年（392）三月に造営された國社と宗廟遺跡であると発表した。2010年には韓国人研究者の姜賢淑⁽⁷⁸⁾が東台子遺跡出土遺物などの研究から、その年代を5世紀末以降、渤海滅亡前とした。筆者は東台子遺跡の出土遺物と関連遺跡、文献史料等について系統的な整理をおこない、東台子遺跡は故国墳王八年（391）⁽⁷⁹⁾三月に造営が命じられた國社と宗廟と考えたが、同年五月に故国墳王は世を去り、おそらく当時の建築は結局完成しなかつたため

に瓦当も使用されることはなく、もし故国墳王期に造営した国社と宗廟が瓦当を使用したとすれば、千秋墓上で出土した卷雲文瓦当と類似する瓦当であったに違いないと考えた⁽³⁰⁾。そうであれば、東台子遺跡出土の大量の蓮華文瓦当・忍冬文瓦当・獸面文瓦当は故国墳王期の遺物ではなく、好太王期の修繕時に使用した瓦当であるはずで、一部の瓦当は丸都山城宮殿址で発見された瓦当と文様が同一あるいは類似し、さらには両遺跡間で同范瓦当が存在するため、東台子遺跡の一部の蓮華文瓦当の年代は、丸都山城の同型式の出土品と一致するはずである⁽³¹⁾。

2003年に千秋墓で「永樂」銘文を刻んだ丸瓦⁽³²⁾（図六-1・2）が1点出土した。泥質灰陶で、残長13.0cm、幅15.5cm、厚さ1.5cmである。丸瓦凸面に2行にわたる銘文がみられ、全部で8文字が残る。「集安高句麗王陵」が発表した訣文は、右行「(樂)浪趙將軍」、左行「□未在永樂」と釈読する。しかし、「(樂)浪趙將軍、□夫任永樂」と読む研究者もいる⁽³³⁾。丸瓦上に残った字形と文意からみて、「集安高句麗王陵」が示す訣文がより信頼でき、かつそこでは、これは好太王期に千秋墓を造営するのに用いた瓦であるとしており、好太王の在位年代（391～412年）にもとづいて左列の銘文を推測すると、「(乙あるいは丁)未在永樂」となる。筆者は高句麗の葬俗および丸瓦上の「未」字の上一字の筆体等の検討から、この銘文は「(樂)浪趙將軍」、「(丁)未任永樂」と考える⁽³⁴⁾。好太王碑第4面第7～9行に「上祖先王自り以来、墓上に石碑を安ぜず、守墓人烟戸をして差錯せしむに致り、惟れ国岡上広開土境好太王、尽く祖先王墓の上に碑を立てるを為し、其の烟戸を銘し、差錯せしめず。又制するに、守墓人自今以後、更に相転売するを得ず。富足之者有ると雖も、亦た擅に買うを得ず。其の令に違う有らば、売者は之を刑し、買人は制して之を守墓たらしむ。」とある。好太王期には守墓制度と関係する一連の律令が制定されており、さらにかつて「祖先王墓」上に碑を立てたと碑文中にあることから、立碑と同時に一部陵墓に対して修繕を行ったことはまた、道理にかなっている。千秋墓出土の瓦當中にはすでに高句麗卷雲文の最終段階の無銘文卷草文瓦当があり、また蓮華文瓦当がある。千秋墓で発見された双幅線六弁蓮華文瓦当は太王陵、將軍塚の同型式の瓦当と比べてやや古い特徴が表れている⁽³⁵⁾。このため、集安地区の王陵において、千秋墓は高句麗卷雲文瓦当が消失し、蓮華文瓦当が出現する過渡期の陵墓であるといえる。千秋墓上で「丁未」と推定される銘文丸瓦が発見されたことから、千秋墓は好太王が丁未年（407）に修繕した父親の故国墳王の陵墓であると考えられ、双幅線六弁蓮華文瓦当を使用していることから、これら瓦当の年代は407年前後であるはずである。

以上の分析から、集安地区の当時の高句麗王宮遺跡（丸都山城宮殿址）、国社と宗廟遺跡（東台子遺跡）と王陵（千秋墓）という上位階級の遺跡から発見された蓮華文瓦当の出現年代は、好太王期の丁未年（407）より遅くないと考えられる。集安地区的その他の遺跡か

ら発見された蓮華文瓦当は、その出現年代は三遺跡の蓮華文瓦当の年代より遅及しえない。よって、高句麗最古の蓮華文瓦当は集安地区で出現し、当時の高句麗の国社と宗廟、宮殿、王陵等の遺跡から出土するが、その重要な要因のひとつは、太元末（約390～396年）に後秦の僧曇が仏教を高句麗地区に伝えたことである。仏教伝来は高句麗人の社会生活に重要な影響をおよぼし、この後、高句麗墓壁画中の蓮華文が一種の仏教的意味を含んだ装飾文様となって“爆發的”に現れはじめ、高句麗滅亡まで描かれていた。

そして大黒山山城で発見された蓮華文瓦当と斜格子文面戸瓦が上述の推測を裏付ける。大黒山山城は大連市金州区大黒山山頂に位置し、平面は不規則形で、周間長は約5000m、城内ではかつて「卑沙」、「畢奢」等の銘文のある土器片が採集されている^[86]。城内ではさらに高句麗蓮華文瓦当と斜格子文面戸瓦が出土しており、現在、旅順博物館に収蔵されている。蓮華文瓦当（図七-1）^[87]の文様と蓮弁形態などは、東台子遺跡で出土した蓮華文瓦当（図七-2）^[88]と比較的似ており、斜格子文面戸瓦（図七-3）^[89]は丸都山城宮殿址（図七-4）^[90]、將軍塚西南建築址（図七-5）^[91]で発見された資料と非常に類似する。瓦は高句麗期において一種の身分と階級を象徴する表示物であり、「旧唐書」卷199上 高麗伝に「其の居る所必ず山谷に依り、皆茅草を以て舎を葺くも、唯仏寺、神廟及び王宮、官府乃ち瓦を用いる」^[92]とある。大黒山山城で発見された蓮華文瓦当と面戸瓦は、好太王の高句麗による遼東地区占領の公示を反映しているだろう。高句麗がはじめて遼東地区を占拠したのは故国境王二年（385）六月の遼東郡と玄菟郡に対する侵攻によるが、同年十一月に後燕の将の慕容農に取り戻された^[93]。400年になると、後燕はなお勢力を有しており大挙して高句麗を攻撃し、高句麗の新城・南蘇の2城を破り、700余里の地を拓いた^[94]。402年、高句麗は宿軍城を攻め、後燕の平州刺史慕容帰を逃走させた^[95]。さらに404年、高句麗は燕を攻めた^[96]。金毓黻はこの1年が高句麗が遼東を占領した最後であると考え、「東北通史」において「高句麗が晋の太元十年六月に初めて遼東・玄菟の二郡を陥落させ、この年の十一月末に燕が二郡を回復した。これはすなわち高句麗故国境王二年（385）である。また19年後の晋元興三年になると、遼東は再び陥落し、玄菟郡もまた同時に陥落したが、これは広開土王十四年（404）である。そしてついに再び回復することはできず、唐高宗の永徽元年（650）の高句麗が滅亡した日に、遼東の故地ははじめて復したが、然るにすでに陥落して265年、久しきと言ふべきである」と述べた^[97]。大黒山山城の蓮華文瓦当と面戸瓦の発見は金毓黻の見解とも一致し、考古学的証拠を与えた。これら資料の年代は高句麗の遼東占拠後、間もなくであるに違なく、その上限年代は東晋元康三年（好太王十四年（404））以降のある時期だが、好太王期の丁未年（407）よりも前とみることはむずかしく、下限は高句麗の平壤遷都（427年）である。

大黒山山城は遼東半島最南端に位置する高句麗山城で、大黒山山頂に泰然と座して大連

湾地区を守備する、高句麗のこの地域における重要な軍事拠点であった。隋唐期の高句麗侵攻時、山東半島から海を渡ってやってきた隋唐軍がこの地域で最初に攻めた場所は大黒山山城であった^[98]。好太王は高句麗中期の王の一人で、輝かしい武功で勲功極めて高く、当然、大黒山山城の重要性を認識していたとみられる。城内での瓦当と面戸瓦の使用には山城としての位置づけが表わされているが、その一方で先王や祖先、ないしは対後燕の武勲顕彰の意が込められていることも排除できない。

冬寿墓内で発見された蓮華文、特に冬寿の座帳の両角に現れた蓮華形蓮華^[99]（図八-1・2）は、太王陵上から発見された蓮華形蓮華文瓦当^[100]（図八-3）の蓮華形と類似し、これはまた多くの研究者が、太王陵で発見された瓦当が高句麗最古の蓮華文瓦当であるとする重要な根拠である。冬寿夫婦の坐像は共に帳帷の内にあり、帳帷を副葬品とする習俗は戦国から南北朝期まで連続とつづいた^[101]。墓主人が帳の中に坐した形象は前・後漢から南北朝期の古墳壁画で流行し、蓮華・龍頭・流蘇（房飾り）等で帳を装飾することは十六国北朝期に盛行した。『鄆中期』に「石虎の御床は、辟方三丈。冬月は熟錦流蘇斗帳を施し、四角は純金龍頭を安き、頭は五色流蘇を衝む。帳頂上は蓮花を安き、花中は金箔を懸け、織は施糞を成す。」とある。南北朝期の仏教石窟でも帳の四隅に龍の装飾を用いたものがみられる^[102]。冬寿墓の座帳は帳頂を蓮華で装飾し、四隅を蓮華、璜、流蘇で装飾し、遼陽の上王家晋墓^[103]で発見された男性墓主人の座帳ととてもよく似ている。このため、冬寿墓の墓主人が座帳内に坐す図像は、実際には遼西地区的魏晋壁画のうちのいざれかを粉本として利用したと考えられる。そしてさらに、墓主人の身分等にもとづいて粉本を選択し、組み合わせて、改変をおこなった状況がみられることから、冬寿墓で出現した蓮華文は当時、仏教がすでに高句麗に伝来していたことを表すのではなく、一種の装飾と文様で、粉本の重要な構成部分であるにすぎない^[104]。

3. 三燕蓮華紋瓦当と高句麗蓮華文瓦当の関係

三燕蓮華文瓦当と高句麗蓮華文瓦当の関係について、各国研究者はみな、両者の間には密接な関係があると考えているが、どちらがどちらに影響を与えたかという主体と客体については見解が明確に分かれる。ひとつは、高句麗蓮華文瓦当は三燕蓮華文瓦当の影響下に生まれたとするもので、中国の李新全^[105]、王飛峰^[106]、日本の桃崎祐輔^[107]らを代表とする。もうひとつは、三燕蓮華文瓦当の発生は高句麗蓮華文瓦当の影響を受けたとするもので、韓国の姜賢淑^[108]らを代表とする。本稿は三燕と高句麗の蓮華文瓦当の出現時期とその背景について分析をおこなった。すなわち、年代のうえでは三燕蓮華文瓦当の出現時期は明らかに高句麗蓮華文瓦当より早く、おそらく北燕期（407～436年）に蓮華文瓦当は文字瓦当にとって代わられた。そして、高句麗蓮華文瓦当の出現時期は好太王十七年

(407) 以降ではなく、高句麗滅亡まで一貫して使用された。そのため、事物発展の論理にしたがって整理すると、高句麗蓮華文瓦当は三燕蓮華文瓦当の発生と発展に影響を与えることはできないが、三燕蓮華文瓦当は高句麗蓮華文瓦当の発生と発展に影響を与えることはできる。瓦当の系譜からみると、三燕蓮華文瓦当中には幅線のある蓮華文瓦当も、幅線のないものも存在し、なおかつこの両者の変遷からみると、蓮弁の数と幅線の数は時代が下るにつれてますます多くなる傾向がある。これらの特徴は、国内城期の高句麗蓮華文瓦当中の有幅線蓮華文瓦当と無幅線蓮華文瓦当の発展・変化の特徴と完全に一致する。三燕と高句麗の遺物の関係からみると、高句麗墓の壁画の文様と配置、武器、馬具、甲冑などの諸要素がみな三燕文化の強烈な影響を受けており、戦争用の鉄鎚、防護装備である甲冑、馬を御すための馬具である轡と装飾用の歩描形雲珠などの器物は、いずれも三燕の影響を受けており、さらには両者の違いを区別するのが難しいほどである。当時の人のびとの往来の様子から、両者の間の往来は頻繁で、前燕期に高句麗はかつて前燕に臣服しており、なおかつ前燕期以降、冬寿や郭充などの前燕人が高句麗に逃亡している。よって、事物発展の論理的順序、瓦当の系譜、三燕と高句麗の交流などの状況からみて、高句麗蓮華文瓦当の発生と発展はともに三燕蓮華文瓦当の影響を受けたと考える。

4. おわりに

三燕の蓮華文瓦当は現在、中国東北地区で発見された最古の蓮華文瓦当である。その発生は前燕の龍城遷都（341年）後、間もなくであり、龍城の造営過程で大量に使用され、北燕期におそらく文字瓦当〔『富貴萬歳』〕にとって代わられた。高句麗における蓮華文瓦当は国内城地区で生み出され、まず王陵と上位階級の遺跡で使用が始まり、その出現時期は好太王十七年（407）以降ではない。注意すべきは好太王期の高句麗は実際に遼東半島をその後、支配したことによって、遼東半島南端に位置する大黒山山城でもまた、高句麗早期の蓮華文瓦当と面戸瓦が発見されており、大黒山山城の特殊な意義を示している。三燕蓮華文瓦当と高句麗蓮華文瓦当はともに仏教の伝播後、その直接的影響下に出現したもので、高句麗蓮華文瓦当の発生と発展は三燕蓮華文瓦当の影響を受け、とくに三燕蓮華文瓦当のなかの無幅線蓮華文瓦当と有幅線蓮華文瓦当はその後、高句麗蓮華文瓦当の重要な型式となった。

付 記 本稿は国家社会科学基金2016年度重大課題（16ZDA149）の成果の一部である。

註

- (1) 唐・房玄齡等〔撰〕『晉書』2825~2826頁、中華書局、1974年。
- 『晉書』卷107 慕容皝記：「時有りて黒龍白龍各一龍山に見れ、號親ら群寮を率いて之を觀、龍を去ること二百余歩、太牢を以て祭る。二龍、交首蟠廻し、解角面して去る。號、大いに悦ぶ。宮に還りて其の境内を較し、新宮を号して和龍と曰い、龍理仏寺を山上に立てる。」これはすなわち、345年に慕容皝が現在の遼寧省朝陽市に龍理仏寺を建立したということで、史書は「龍見立寺」と称している。(以下、本文が用いる正史はいずれも中華書局版である。)
- (2) 劉慶柱「關於中國古代蓮華紋瓦當圖案淵源考古研究」「고대 동아시아의 가와」한국기와학회、2008年。
- (3) 戈父(編著)『古代瓦当』179頁、中国書店、1997年。
- (4) 万雄飛・白宝玉「朝陽老城北大街出土的3~6世紀蓮華紋瓦當初探」「東北亞考古學論叢」61~66頁、科學出版社、2010年。
- (5) 朝陽市北塔考古勘探隊・朝陽市北塔維修辦公室「朝陽北塔1986~1989年考古勘探紀要」「遼海文物學刊」15~23頁、1990年第2期。
遼寧省文物考古研究所・朝陽市北塔博物館：「朝陽北塔—考古發掘與維修工程報告」文物出版社、2007年。
- (6) 辛岩・付興勝「金嶺寺魏晉建築群址為研究三燕文化提供重要線索」「中國文物報」2001年。
辛岩・付興勝・穆啓文「遼寧北票金嶺寺魏晉建築遺址發掘報告」「遼寧考古文集」2、科学出版社、2010年。
以下、本稿が使用する金嶺寺に関する資料はすべてこの文献から引用した。
- (7) 焦智「鄆城瓦當分期研究」「殷都學刊」43~54頁、2007年第2期。
そのなかの52頁 図21、22の蓮華文様と瓦当全体の構造は金嶺寺遺跡で出土した資料と類似する点が一定程度あり、筆者は前燕の都が鄆城にあった時期の瓦当と考える。
- (8) 同註(6) 辛岩・付興勝・穆啓文2010年、198~224頁。
- (9) 王飛峰「三燕瓦當研究」「邊疆考古研究」第12輯、科学出版社、2012年。
- (10) 田立坤「金嶺寺建築址為“瘦廟”說」「慶祝張忠培先生八十歲論文集」科学出版社、2014年。
- (11) 本文図二-2は、以下の文献から引用した。
遼寧省文物考古研究所(編)『三燕文物精粹』122頁の図166、遼寧人民出版社、2002年。
- (12) 本文図三-1は、以下の文献から引用した。
智勤：「鄆城瓦當分期研究」「殷都學刊」43~54(52)頁の図29-1、2007年第2期。
- (13) 本文図三-2は、以下の文献から引用した。
高橋匡四郎「蘇子河流域における高句麗と後女真の遺跡」「建國大学研究員研究期報」第31回、1941年第2号。
- (14) 本文図三-3・4は、以下の文献から引用した。
渡辺三三・齊藤武一「満州國の撫順の古瓦に就て」「考古学雑誌」第29卷11号、667~690(670)頁、第2回-2・6、1939年。
- (15) 徐家国「遼寧新賓縣永陵鎮漢城址調査」「考古」1049~1051頁、1989年第11期。
- (16) 李新全・蘇鵬力「遼寧新賓永陵南城址」「中國考古年鑑2008」187~188頁、文物出版社、2009年。
- (17) 『晉書』卷6 元帝紀、151~155頁(大興)二年(319年)、……八月、肅慎桔矢石器を獻じる。……十二月乙亥、大赦、百官に詔し各封事を上げ、並びに衆役を省く。鮮卑慕容廆遼東を襲い、東夷校尉平州刺史崔茲高句麗に奔る。三年……三月、慕容廆玉璧三組を奉送す。……四年……十二月、慕容廆を以て持節都督幽平二州東夷諸軍事平州牧と為し、遼東郡公に封ず。」以上の史料から分かることは、大興2年(319)に慕容廆が遼東を襲撃することに成功し、当時の東夷校尉平州刺史崔茲が高句

- 麗へ逃亡した。この時すでに、慕容鮮卑は現在の永陵南城を含む遼東地区を実際に支配しており、大興4年（321）になって最終的に、慕容廆の遼東地区占領が東晉朝廷の許可を得たということである。
- (18)『晉書』卷109 慕容皝載記、2821～2822頁「陽裕、唐柱等をして龍城を築かしめ、宮廟を構え、柳城を改め龍城県と為す。……咸康七年、號、都を龍城に遷す。」
- (19)『晉書』卷109 慕容皝載記、2822頁：「號、躬ら郡县を巡り、農桑を勸課し、龍城宮闈を起こす。」
- (20) 麥存成『高句麗考古』74頁、吉林大学出版社、1995年。
- 李裕群「高句麗佛教造像考—兼論北朝佛教造像樣式對高句麗的影響」「4～6世紀的中國與歐亞大陸」233頁、科學出版社、2006年。以下、「高句麗佛教造像考—兼論北朝佛教造像樣式對高句麗的影響」という。
- 李樂當「佛教向高句麗伝播路線の探析」「社會科學戰線」124～126頁、2008年第11期。
- 陳明華「韓國佛教美術」20頁、文物出版社、2009年。
- 中国、朝鮮半島、ならびに日本の研究者もまた多くがこの觀点を持つ。
- (21) 梁志龍「高句麗懶枳道三教雜論」「北方文物」88～94頁、2004年第2期。
- (22) 吳焯「從向隨國的政治關係看佛教在朝鮮半島的初傳」「中國史研究」2006年第1期。
- (23) 溫玉成「集安長川一號壁畫墓」「北方文物」32～38（70）頁、2001年第1期。
- 李海湧「佛教在高句麗、百濟和新羅傳播尾迹考」「全球化下的佛教與民族」（第3屆兩岸四地佛學術研討會）501～511頁、光明日報出版社、2011年。
- (24) 木村宣影（施義田訳）「曇始與高句麗佛教」「博物館研究」38～44頁、2002年第2期。
- (25) 王飛峰「冬寿墓蓮華紋研究」「邊疆考古研究」第14輯、科學出版社、2013年。
- (26) 親忠峻〔撰〕、湯用彤〔校注〕「高僧伝」中華書局、1992年。
- (27) 乾道世〔撰〕、周叔迦・蘇晋仁〔校注〕「法苑珠林校注」956頁、中華書局、2006年。「法苑珠林校注」卷31 曇始伝「宋の偽魏の長安に曇始有り、閻中人なり。出家より以後、多く異迹有り。晉孝武太元之末、經律數十部を賣り、遼東に往きて宣化し、顕授三乘、以て帰戒を立て、蓋し高句麗道を開く之始めなり。義熙の初、復び閻中に還り、三輔を開導す。」
- (28) 神清〔撰〕、惠宝〔注〕、德珪〔注解〕、富世平〔校注〕「北山錄校注」203頁、中華書局、2014年。「北山錄校注」卷3 曙始伝：「晉の曇始、孝武末（東晉也、帝位に臨み、深く佛法を奉り、苻堅の兵至り、謝玄破る也）、遼東に適き、高麗開導の始也。後に三輔に還り（三輔、咸陽縣、昔秦皇此に殿觀を置く）、三輔の人、之を宗仰す。」
- (29) 摂者不詳「神僧伝」卷2 曙始伝「积曇始、閻中人なり。出家より以後、多く異迹有り。晉の孝武の太元之末、經律數十部を賣り、遼東に往きて宣化し、三乘を顕授し、以て帰戒を立てり。義熙の初、復び閻中に還り、三輔を開導す。」
- (30) 本文図四、1、2は以下の文献から引用した。
성균관대학교박물관『新羅金石拓片展』121頁、119～120頁、2008年。
- (31) 龍德は後梁末帝朱友貞の年号で、921～923年のわずか3年のみ使用された。この碑の龍德4年を、筆者は暫定的に924年とする。
- (32) 周紹良〔主編〕：『唐代墓誌匯編』上、984頁、上海古籍出版社、1992年。
- (33) 道宣〔撰〕、郭紹林〔点校〕：『統高僧伝』993頁、中華書局、2014年。
- (34) 同註（20）、「高句麗佛教造像考—兼論北朝佛教造像樣式對高句麗的影響」233頁。
- (35) 溫玉成：「高句麗“相之國”」「北方文物」67（112）頁、2004年第3期。
- (36) 本文図五、1は、以下の文献から引用した。
吉林省文物考古研究所・集安市博物館：『集安出土高句麗文物集萃』101頁、科学出版社、2010年。
以下、本書は「集安出土高句麗文物集萃」と記載する。

- (37) 小泉顯夫「平壤清岩里廬寺址（概報）」『昭和十三年度古蹟調査報告』朝鮮古蹟研究会、1940年。
- (38) 小泉顯夫「泥仏出土地元五里廬寺址の調査」『昭和十二年度古蹟調査報告』朝鮮古蹟研究会、1938年。
- (39) 本文図五、2は、以下の文献から引用した。
菊竹淳一・吉田宏志〔編〕『世界美術史大全集』東洋編10、高句麗・百濟・新羅・高麗、図版81、小学館、1997年。
- (40) 本文図五、3は、以下の文献から引用した。
国立中央博物館『三国時代仏教形刻』121頁、図102、国立中央博物館、1990年。
- (41) 同註(20)、「高句麗佛教造像考—兼論北朝佛教造像様式對高句麗的影響」235頁。
- (42) 金元龍「雞島出土金銅佛坐像」『歷史教育』5、1961年。
- (43) 吉林省文物考古研究所・集安市博物館『丸都山城』文物出版社、2004年。
- (44) 田村晃一「楽浪と高句麗の考古学」同成社、2001年。
- (45) 東潮『高句麗考古学研究』吉川弘文館、1997年。
- (46) 김희관「4 세기 고구려 연화문과 당의 개시연대에 대한 고찰」『韓國思想과 文化』第45集、2008年。
- (47) 백종오「고구려 기와의 성립과 燭光」주성유、2006年。
- (48) 千田剛道「瓦からみた高句麗古都集安」『青丘學術論集』第5集、1994年。
- (49) 吉林省文物考古研究所・集安市博物館『集安高句麗王陵』文物出版社、2004年。以下、「集安高句麗王陵」と記載する。
- 池内宏『通講』上、日暮文化協会、1938年。以下「通講」と記載する。
- (50) 集安市博物館：「集安洞溝古墓群禹山墓區212号墓」『北方文物』2004年第2期。
- 吉林省文物考古研究所・集安市博物館「集安禹山M2112墓室清理簡報」「吉林集安高句麗墓葬報告書」292~299頁、科学出版社、2009年。
- (51) 歐鉄華・尹国有「高句麗瓦當」158頁、吉林人民出版社、2001年。以下「高句麗瓦當」と記載する。
- (52) 集安縣文物保管所「集安縣上、下龍高句麗古墓清理簡報」「文物」1984年第1期。
- (53) 吉林省文物考古研究所・集安市博物館『国内城』文物出版社、2004年。
- (54) 吉林省文物考古研究所・集安市博物館『丸都山城』文物出版社、2004年。以下「丸都山城」と記載する。
- (55) 「集安縣文物志」編寫組「集安縣文物志」吉林省文物志編輯委員會、1984年。
- 同註(51)、「高句麗瓦當」等。
- (56) 王洪峰ほか「遼寧省文物誌」吉林省文物誌編輯委員會、1988年。
- (57) 延辺博物館「延辺文物簡編」編寫組「延辺文物簡編」延辺出版社、1988年。
- (58) 渡辺三三・齊藤武一「満洲國撫順の古瓦に就て」『考古學雑誌』29卷11号、1939年。
- 徐家國・孫力：「遼寧省撫順高爾山城發掘簡報」「遼海文物學刊」1987年第2期。
- 三上次男・田村晃一「北開山城：高爾山山城高句麗「新城」の調査」中央公論美術出版、1993年。
- 遼寧省文物考古研究所・撫順市博物館「遼寧省撫順市施家臺地發掘簡報」「考古」2007年第10期。
- 国家文物局主編「中國文物地圖集」遼寧分冊（上）、258~259頁、西安地圖出版社、2009年。以下「中國文物地圖集」遼寧分冊（上）あるいは「中國文物地圖集」遼寧分冊（下）と記載する。
- (59) 修達「新賓五龍高句麗山城」『遼海文物學刊』1994年第2期。
- (60) 周向永「西豐城子山山城始建年代再考」「東北史地」2009年第2期。
- 周向永・許超：「鉄嶺の歴史世考古」遼海出版社、2010年。
- (61) 同註(58)、「中國文物地圖集」遼寧分冊（下）、301頁。
- (62) 蘇鵬力「燈塔市燕州城址」『中國考古學年鑑』（2010）、195~196頁、文物出版社、2010年。
- (63) 同(58)、「中國文物地圖集」遼寧分冊（上）、249~250頁。
- (64) 崔玉寬「鳳凰山山城調查簡報」「遼海文物學刊」1992年第2期。

- 李龍彬・華玉冰・崔麗萍「遼寧丹東鳳凰山山城首次發掘取得重大收穫」『中國文物報』、2007年。
- 李龍彬・司偉偉・崔麗萍「遼寧丹東鳳凰山山城考古新收穫」『中國文物報』2008年。
- 同註(58)、「中國文物地圖集」遼寧分冊(上)、255頁。
- (65) 楊永芳・楊光「鵝巖境內五座高句麗山城調查簡報」『遼海文物學刊』1994年第2期。
- (66) 郭富純・趙錦金〔主編〕『大連古代文明圖說』248頁、吉林文史出版社、2010年。
- (67) 中国社会科学院考古研究所・遼寧省文物考古研究所・蓋州市文物局(王飛峰ほか)「遼寧蓋州市青石嶺山城的調查與發掘」『考古』2017年第12期。
- (68) 김일성종합대학 고고학 및 민속학강과 「대성산 일대의 고구려 유적에 관한 연구」 김일성종합대학출판사, 1973年。
- (69) 石光濟「高句麗考古学の新しい成果」『古代朝鮮の考古と歴史』雄山閣、2002年。
- (70) 김일성종합대학 「동명왕릉과 그 부근의 고구려유적」 김일성종합대학출판사, 1976年。
- (71) 崔鍾澤・李秀珍ほか「紅蓮峰第1堡塁-1発掘調査総合報告書」高麗大學校考古環境研究所、2007年。
- (72) 2016年9月7日に、嵯峨山城の発掘中に紅蓮峰第1堡塁出土瓦当文様と同じ蓮華文瓦当が発見されている。(参照) 강승철(기자)「이차산성서 고구려유물 “연화문와당” 발견」『동아일보』2016年9月8日。
- (73) 심광주・정나리・이형호「漣川孤壠古墓III」(第2次発掘調査報告書)、한국고고학회지、2007年。
- (74) 王飛峰「九郡山城宮殿址研究」『考古』2014年第4期。
- (75) 関野真「満州輯安県及び平壤附近に於ける高句麗時代の遺跡(二)」『考古学雑誌』第5卷4号、1924年。
- (76) 吉林省博物館「吉林省安高句麗建築遺址の清理」『考古』1961年第1期。
- (77) 方起東「集安東台子高句麗建築遺址の性質と年代」『東北考古與歷史』第1輯、文物出版社、1982年。
- (78) 姜賢潤「中國吉林省集安東台子遺蹟再考」『한국고고학회지』제75집、韓國高麗大學、2010年。
- (79) 『三国史記』卷18 故国境王本紀、223頁「九年(392年)、……三月、教を下して仏法を崇信し福を求める。有司に命じて国社を立て宗廟を修めしむ。」『三国史記』に記載される故国境王の年代は384~392年であるが、好太王碑によれば故国境王の年代は、実際は384~391年である。このため筆者は、東台子遺跡の造営を故国境王八年(391)の高句麗の国社と宗廟遺跡とすることに賛成する。『三国史記』に依拠すると故国境王の紀年は1年多いという問題があるため、本文で故国境王と好太王の年代を引く際にはいずれも調整している。
- (80) 王飛峰「關於千秋墓、太王陵和將軍墳的幾個問題」『邊疆考古研究』第10輯、科學出版社、2011年。
- (81) 王飛峰「吉林省集安東台子遺址研究」『北方文物』2016年第3期。
- (82) 本文図六-1・2は、それぞれ註(49)の『集安高句麗王陵』図版72-1、194頁の図156を引用した。
- (83) 井上直樹「集安出土文字資料からみた高句麗の支配体制についての一考察—安岳三号墳・德興里古墳にみえる被葬者の職位の再検討と府官制」『朝鮮學報』第203輯、2007年。
- (84) 王飛峰「關於集安高句麗碑的幾個問題」『朝鮮麻線高句麗碑』文物出版社、2014年。
- (85) 王飛峰「高句麗卷雲紋瓦当研究」『高句麗與東北民族研究』吉林大學出版社、2014年。
- (86) 同註(58)、「中國文物地圖集」遼寧分冊(下)、73頁。
- (87) 本文図七-1は、以下の文献から引用した。
- 郭富純・趙錦金〔主編〕『大連古代文明圖說』248頁、吉林文史出版社、2010年。
- (88) 本文図七-2は、同註(36)の『集安出土高句麗文物集萃』56頁より引用した。
- (89) 本文図七-3は著者撮影。

- (90) 本文図七-4は、同註(54)の「丸都山城」、図版87-2より引用した。
- (91) 本文図七-5は、以下の文献から引用した。
吉林省文物考古研究所（王志剛等）「集安将军墳西南建築遺址的考古发掘」『辽疆考古研究』第11輯、
図版4-5、科学出版社、2010年。
- (92) 「旧唐書」、5320頁。
- (93) 「資治通鑑」卷106 晋紀28、3379~3407頁、「(太元十年(385年))六月、高句麗進東を寇す。…
佐遣司馬懿景兵を將いて之を救へど、高句麗の為に敗れる所、高句麗遂に遼東、玄菟を陥とす。…
…(十一月)慕容農、龍城に至り、……進みて高句麗を撃ち、遼東、玄菟二郡を復す。」
- (94) 「資治通鑑」卷111 晋紀33、3562頁、「(隆安四年(400年)春正月)高句麗王安、燕に事えるに札慢たり。二月、丙申、燕王盛、自ら兵を將い之を襲い、驃騎大将军熙を以て前鋒と為し、新城、南蘇二城を抜き、境を開くこと七百余里、五千余戸を徴し而して還る。」
- (95) 「資治通鑑」卷112 晋紀34、3599頁、「(元興元年(402年)五月)高句麗宿軍を攻め、燕平州刺史慕容帰、城を棄て走る。」
- (96) 「資治通鑑」卷113 晋紀35、3633頁、「(元興三年(404年)十二月)高句麗燕を侵す。」
- (97) 金城蘭「東北通史」233~234頁、(台湾)楽天出版社、1971年。
- (98) 「隋書」卷96 來護兒伝、1515~1516頁、「來護兒、字は崇善、江都人なり。……(大業)十年、又師を帥いて度海し、卑奢城に至る。高麗、国を擧げて來戦し、護兒、大いに之を破り、斬首千余級。」「資治通鑑」卷197 唐紀13、6332頁、「(貞觀十九年四月)張亮、舟師を帥いて東萊より渡海し、卑沙城を襲い、其城四面懸絕、惟西門のみ上る可し。程名振、兵を引き夜至り、副總管王文度、先ず登る。五月、己巳、之を抜く。男女八千口を獲る。」「旧唐書」卷199上 高麗伝、5323頁「五月、張亮、副将程名振、沙卑城を改め、之を抜く。其の男女八千口を虜とす。」
- (99) 本文図八-1・2は、以下の文献から引用した。
국립문화재연구소·남북역사학자원의회「남북공동고구려벽화고분 보존실태조사 보고서」제2권
도판, 31頁、図27、参考は韓國文化財研究所、2006年。
- (100) 本文図八-3は、同註(49)の「集安高句麗王陵」図版109-5より引用した。
- (101) 虚兆蓀「略論西漢魏晉時期的帷帳」『考古』1984年第5期。
- (102) 易水(楊泓)「帳與帳構—家具談往之二」『文物』1980年第4期。
- (103) 李慶發「遼陽上王家晋代壁画墓清理簡報」『文物』1959年第7期。
- (104) 王飛峰「冬寿墓莲草纹研究」『辽疆考古研究』第14輯、科学出版社、2013年。
- (105) 李新全「三燕瓦当考」『遼海文物学刊』1994年第4期。
- (106) 同註(9)。
王飛峰「高句麗瓦当研究」高麗大学校大学院博士学位論文、2013年。
- (107) 桃崎祐輔「高句麗太王陵出土瓦・馬具からみた太王陵説の評価」『海と考古学』六一書房、2005年。
- (108) 同註(78)。

金嶺寺遺跡出土瓦の研究

清野孝之 川畠 純 今井晃樹 石田由紀子 森先一貴

1. 調査の経緯

(1) 調査の概要

遼寧省文物考古研究所との国際共同研究事業「遼西地域の東晉十六国期都城文化の研究」の一環として、遼寧省北票市の金嶺寺遺跡から出土した瓦の調査をおこなった。調査は2011年11月、2012年3月、2013年11月、2015年3月の4回にわたり、清野孝之、川畠純、今井晃樹、石田由紀子、森先一貴が瓦の観察、実測、拓本を、栗山雅夫が写真撮影をおこなった。その概略は一度紹介したところである（小池・川畠・清野・森先・諫早2014）。本稿ではその後の調査成果を含め、われわれが調査した金嶺寺遺跡出土瓦について、製作技法を中心に論じ、注目される点などを検討する⁽¹⁾。

(2) 金嶺寺遺跡の概要

中国東北地方の遼河以西、現在の遼寧省西部は遼西地域と呼ばれ、五胡十六国時代に該当する4世紀前半から5世紀前半にかけての約100年間、慕容鮮卑族や漢族によって建国された前燕（337～370）、後燕（384～407）、北燕（407～436）の中心地の一つとなった。これら三国は三燕と総称され、遼西地域の当該期は三燕時代と呼ばれている。

金嶺寺遺跡は、遼寧省北票市の南、大板鎮金嶺寺村の近郊に所在する。同じ大凌河南岸の南西には、田立坤氏が大棘城（294年から龍城へ遷都する349年までの慕容鮮卑の本拠地）に比定している北票章吉營子鄉三官營子村の三官營子遺跡（田立坤1996）、その対岸に慕容鮮卑の4世紀初～5世紀の墳墓群である喇嘛洞墓地がある（図1）。

金嶺寺遺跡は、1992年に白石ダム建設とともに発見され、2000～2002年に9000m²の発掘調査がおこなわれた。その調査成果は2010年に辛岩氏、付興勝氏、穆啓文氏によって「遼寧北票金嶺寺魏晉建築遺址発掘報告」としてまとめられた（辛岩・付興勝・穆啓文2010。以下、「報告」と呼ぶ。以下、金嶺寺遺跡の概要是「報告」の文章記載および挿図による）。その結果、南北と東を濠に囲まれた（西は大凌河に削られ不明）やや不整形な長方形の区画内に、整然と並ぶ3つの建物群（「院落」）が確認された（図2）。

このうち、残りの良い東北部の建物群（「第一組建築」）は、区画濠に囲まれ南に門が開く南北26.5m×東西10m前後の長方形の区画が5組、東西に連結し（全体の東西幅52.8m）、

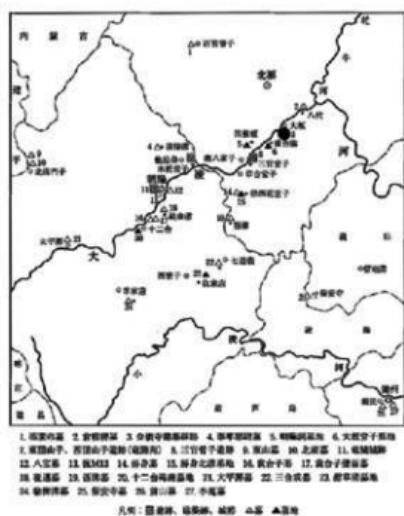


図1 金嶺寺遺跡の位置

た東西に長い長方形の区画が、南北に3組連続する。門は西辺に開き、建物は南北に長い基壇上に、 2×1 間の南北棟を配する。基壇の西辺には斜路がとりつく。建物基壇の北東と南東、西辺の門からみて建物の背面側に板石組の石槽を配する。

西北部の建物群〔「第二組建築」〕は、東北部の建物群〔「第一組建築」〕の西側に若干の間隔を空け、東西軸をほぼ崩して配される。配置は東北部の建物群に似るが、西側が大凌河によって大きく削られ不明な点が多い。

各区画の建物基壇や門の周囲から大量の瓦が出土しており、建物や門などが瓦葺きであった可能性を示唆する。一方で土器の出土量は非常に少ない。

金嶺寺遺跡の年代と性格について、「報告」では、出土遺物から晋代後半には下らず、魏・晋の境ごろの時期とされている。また、石槽内から焼土、炭、灰と焼けた獸骨が出土したことから、金嶺寺遺跡は何らかの祭祀に関連する施設と推定している。

なお、本遺跡の年代と性格について、王飛峰氏は、「晋書」慕容垂載記にみえる、慕容垂が「繕宗廟社稷」したとの記事に関連する建築群と推定する（王飛峰2012）。田立坤氏は、1996年の論考において、「十六国春秋」前燕錄にみえる、慕容鮮卑の莫護跋が景初二年（238）に司馬懿の公孫淵討伐に協力し、その功により率義王を任命し、棘城の北に建国した〔「始建国于棘城之北」〕との記事にある「棘城之北」と関係する遺跡と推定した（田立坤1996）。そして2014年の論考では、金嶺寺遺跡を「晋書」慕容垂載記にみえる、前燕で最

それぞれの区画内には、一辺6.5m前後の正方形の基壇上に 1×1 間（柱間寸法3.0~3.9m）の建物を配する。基壇の南辺には長さ約3m、幅1.1~1.4mの斜路がとりつく。建物の柱穴には礎石がなく、柱を直接据え、堅く突き固めながら埋め戻す〔「疊礎」〕。建物基壇の北西側、南辺の門からみて建物の背面側には、板石を組み合わせた石槽を配する。石槽内から、焼土、炭、灰と焼けた獸骨が出土している。

東部の建築群〔「第三組建築」〕は、北辺、西辺の区画塀が、それぞれ、東北部の建物群の南辺、東辺の区画塀と一連になっている。塀に囲まれ

初に皇帝を称した慕容偊が昌黎に営んだ祖父、慕容廆の廟に比定している（田立坤2014）。

（3）金嶺寺遺跡出土瓦に関する先行研究

三燕時代や金嶺寺遺跡出土の瓦に関する先行研究は多くない。

李新全氏は、三燕時代の軒丸瓦

瓦について文様の分類や年代比定をおこなっている（李新全1996）。三燕時代の軒丸瓦について、北魏や高句麗集安地域の類例との比較を踏まえ、本格的に検討しただけでなく、三燕時代の都城である龍城に比定される、遼寧省朝陽市内などで出土しないし採集された貴重な資料を数多く取り上げており、重要な研究である。ただし、その分析対象は瓦当文様であり、製作技法の分析はおこなわれていない。

万雄飛氏、白宝玉氏は、朝陽市の朝陽北大街から出土した軒丸瓦について、金嶺寺遺跡出土瓦とまったく同じものがあることを指摘している（万雄飛・白宝玉2006）。そしてその瓦の年代を前燕代または後燕代としている。

桃崎祐輔氏は、高句麗の蓮瓣文軒丸瓦の祖型として、龍城の三燕時代の蓮瓣文軒丸瓦を取り上げ、龍城建設の341年を上限とし、焼成の436年を下限とする三燕時代の宮殿瓦はすべて蓮瓣文軒丸瓦であったと推定している（桃崎2005・2009）。その中で金嶺寺遺跡出土軒丸瓦も紹介しており、「6弁に蜘蛛の巣状の意匠を複合した蓮華瓣文瓦」が出土し、「三燕（後燕～北燕か）の宮殿瓦」（桃崎2005：104頁）と説明している。しかし、これらの製作技法については触れていない。

中村亜希子氏は、金嶺寺遺跡出土軒丸瓦の製作技法に触れ、模骨によって成形した粘土円筒に瓦当部粘土を接合し、円筒不要部を切り取る技法（中村氏の「模骨成形技法+A接合技法」）で製作された軒丸瓦が金嶺寺遺跡で大量に出土することから、これが遼寧一帯に特有の技法と位置づけている（中村2012）。また、高句麗の蓮瓣文軒丸瓦との関係については、「遼寧省出土の蓮瓣文軒丸瓦が古式で、4世紀半ばから後半頃に高句麗にもたらされた」としている（中村2012：103頁）。

王飛峰氏は、三燕時代の軒丸瓦について、文様、製作技法を含め分析、検討をおこなった（王飛峰2012）。金嶺寺遺跡についても分析対象としており、瓦当文様の分類は、『報告』を踏襲する。ただし、遺跡の年代については、出土した土器を後燕の建興十年（395）の石刻墓表が出土した崔通墓出土品に近いものとし、395年かやや遅れる時期に位置づけ

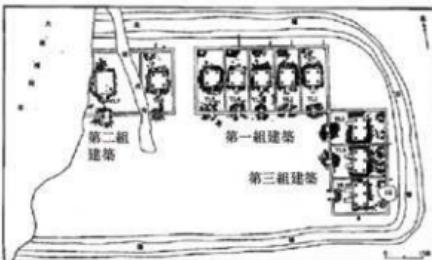


図2 金嶺寺遺跡平面図

る。これを踏まえ、金嶺寺遺跡を「晉書」慕容垂載記にみえる、慕容垂が皇帝を称し建興に改元して「建宗廟社稷」などの記事に關する建築群と想定している。

王氏は、三燕時代の軒丸瓦の製作技法について詳細な検討をおこなっている。その内容はわれわれの調査成果と共通する部分が多いものの、一部、異なる部分がある。そこで、まず、われわれの調査成果を説明した後に、あらためて王氏による製作技法の検討内容について触れたい。

田立坤氏は、金嶺寺遺跡出土の瓦当面を四分割する軒丸瓦と、6分割し地紋を飾る軒丸瓦の2種類が、いずれも五胡十六国時代の前燕龍城から出土していることから、金嶺寺遺跡の年代は、龍城造営を開始する東晉咸康七年（341）を上限とすると推定する（田立坤2014）。また、金嶺寺遺跡では瓦当面を6分割する軒丸瓦が絶対多数を占めるが、龍城では4分割のものの方が多いこと等を指摘した。このほか、金嶺寺遺跡出土の小磯石と土器についても類例と比較検討し、金嶺寺遺跡の年代は341年を上限とし、下限を後燕時期と推定した。また、金嶺寺遺跡の年代観と立地が「晋書」慕容儁載記にみえる昌黎に慕容廆の廟を營んだとする記述に合致すること、遺構、遺物の特徴から特殊な礼制建築であり、廟と推定して矛盾がないことを指摘した。金嶺寺遺跡の年代と性格について文献と遺構・遺物から検討した重要な研究である。

2. 金嶺寺遺跡出土瓦の検討

われわれが調査した金嶺寺跡出土瓦は58点で（このほかに未調査の軒丸瓦が2点、丸瓦が1点、ヘラ書き瓦が2点ある）、その内訳は軒丸瓦46点、丸瓦9点、平瓦2点、軒平瓦1点である。軒平瓦以外はいずれも三燕時代のものと考えられ、焼成が良好で、灰色から灰褐色を呈し、胎土は精良で直径0.2cm以下の白色粒を少量含むなど、胎土、焼成、色調の

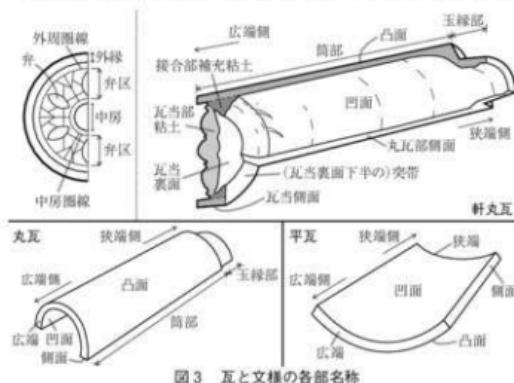


図3 瓦と文様の各部名称

特徴がほぼ共通する。軒平瓦は明らかに時期が異なるもので、遼代ごろのものであろう（国版4-3）。

以下、金嶺寺遺跡出土の三燕時代の瓦について、文様と製作技法の特徴を説明し、製作技法の復元をおこなう。ただし、ここで示すの

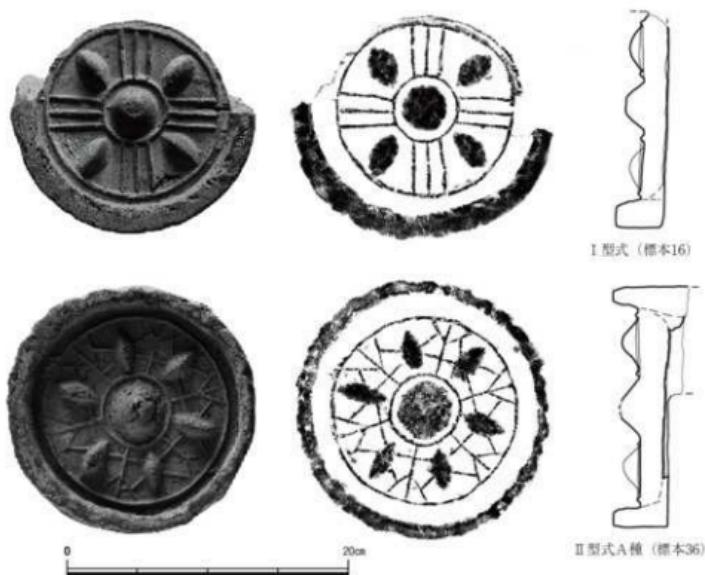


図4 I型式・II形式A種(縮尺1/4)

は瓦の標準的な技法であり、工程を一部省略したものなど少數の例外も存在する。瓦と文様の各部名称は図3のとおりである⁽²⁾。以下の記述では、基本的に軒丸瓦、丸瓦、平瓦とともに長軸に平行する方向を縱、長軸に直交する方向を横と表現する。また、半截前の丸瓦部を粘土円筒として呼び分けることとする。

(1) 軒丸瓦

軒丸瓦は46点、このうち瓦当部粘土が完全に剥離するもの2点、瓦当外縁のみの破片1点の計3点は瓦当文様が不明で、残る43点はいずれも蓮瓣文軒丸瓦である。これらは一定方向に範傷や範割れを生じており、いずれも木製范によって施文されたことが明らかである。

さて、蓮瓣文43点中の1点は、3条1組の幅線によって弁区を4分割し、各1弁の蓮瓣文を配する四弁蓮瓣文で、「報告」では、「三欄四界格四弁蓮瓣文」と呼んでいる。残る39点は六弁蓮瓣文で、1本の幅線によって弁区を6分割し、「報告」では「単欄六界格六弁蓮瓣文」と呼んでいる。この六弁蓮瓣文は、幅線と共に、そこから派生する複雑な幾何学的文様を配し、「報告」では幾何学的な葉文をもつ「幾何蓮弁文」と表現している。「報告」では、この幾何学文様によってAからD類に分類し、C類をさらにC1からC3類に細

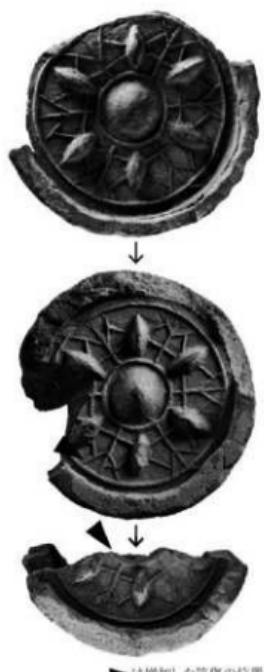


図5 II型式A種の范傷進行
(上:標本25、中:標本8、下:標本35)

る。範は瓦当外縁の内側（外周圓線外側の0.3~0.5cm程度）までおよぶが、外縁にはかぶらない。

② II型式 (42点)

六弁蓮瓣文軒丸瓦。1本の幅線で弁区を6分割し、各1弁の蓮瓣文を配する。中房の断面形はいずれも頂部に丸みをもつ半球形気味の円錐形であるが、粘土の詰めが不十分なためか、形が崩れ気味のものもある。I型式と同じく中房周囲には圓線（中房圓線）をめぐらせ、弁区の外側にも外周圓線がめぐる。範もI型式と同じく、瓦当外縁の内側（外周圓線外側の0.5cm程度）までおよぶが、外縁にはかぶらない。幅線から派生する蓮瓣文間の幾何学文によりAから仮Jの10種に分類する。

A種 (14点) (図4下、図版1-2) 「報告」のA類に該当する。蓮瓣文間の幾何学文の外側が「M」字状を呈する。蓮瓣文間を直線で繋ぎ、中房圓線の外側で六角形をなす。瓦当面に多数の范傷を生じているが、一部の范傷について、ないものからあるものへの范傷進

分している。

今回のわれわれの調査では、「報告」の分類を踏まえつつ、金嶺寺遺跡出土軒丸瓦を范單位で分類した結果、10種類に細分することができた（未調査の1点は異范の可能性が高く、金嶺寺遺跡出土軒丸瓦は使用された範單位で11種に分けることができると思われる）。そこで、弁数によりI型式（四弁）、II型式（六弁）に大きく分け、II型式を範ごとにA種からJ種（未調査の仮J種を加え10種）に細分する。

なお、II型式A種をII Aと略称し、他種もこれに倣う。以下、この分類にしたがい、各型式・種の特徴と製作技法等を説明する。各型式・種に該当する個体の標本番号（「報告」では「BDO」と表現されている番号）、法量、そのほかの事項は、文末の表1にまとめて記載する。

a. 文様による分類

① I型式 (1点) (図4上、図版1-1)

四弁蓮瓣文軒丸瓦。3条1組の幅線で弁区を4分割し、各1弁の蓮瓣文を配する。中房は半球形気味の円錐形であるが、頂部にはわずかに平坦面をもつ。中房周囲に圓線をめぐらせ、弁区外側にも外周圓線がめぐら

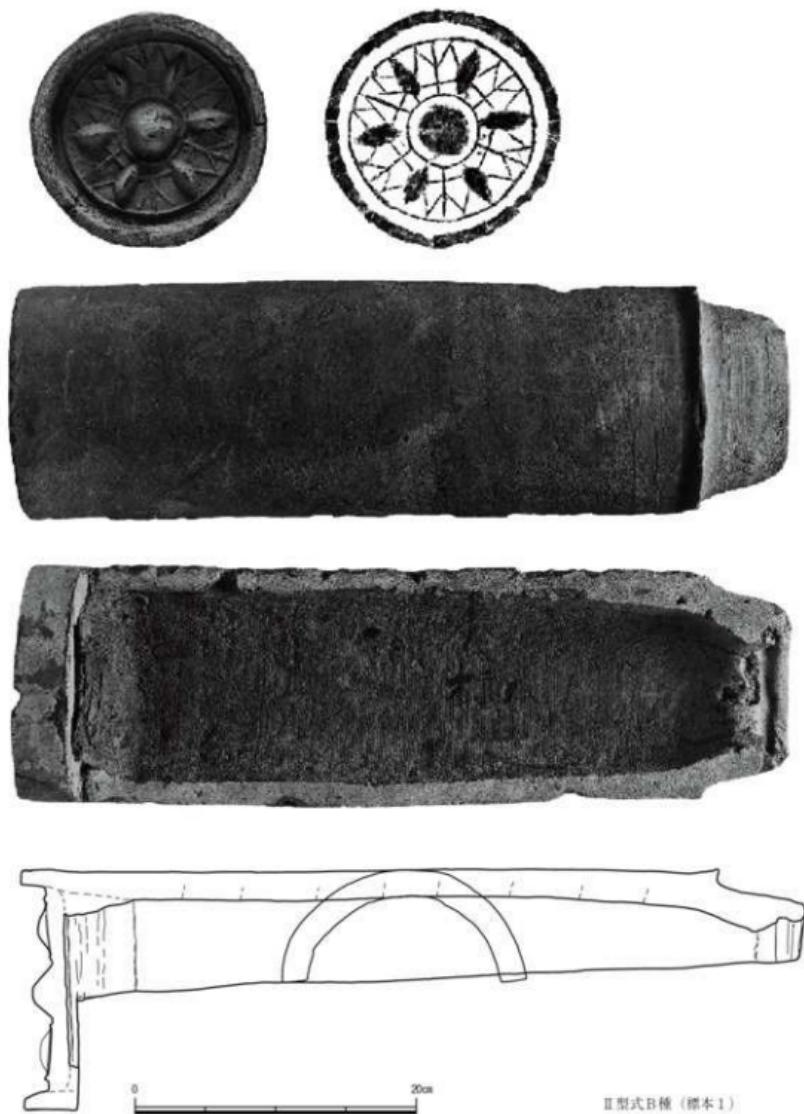


図6 II型式B種（1）（縮尺1/4）

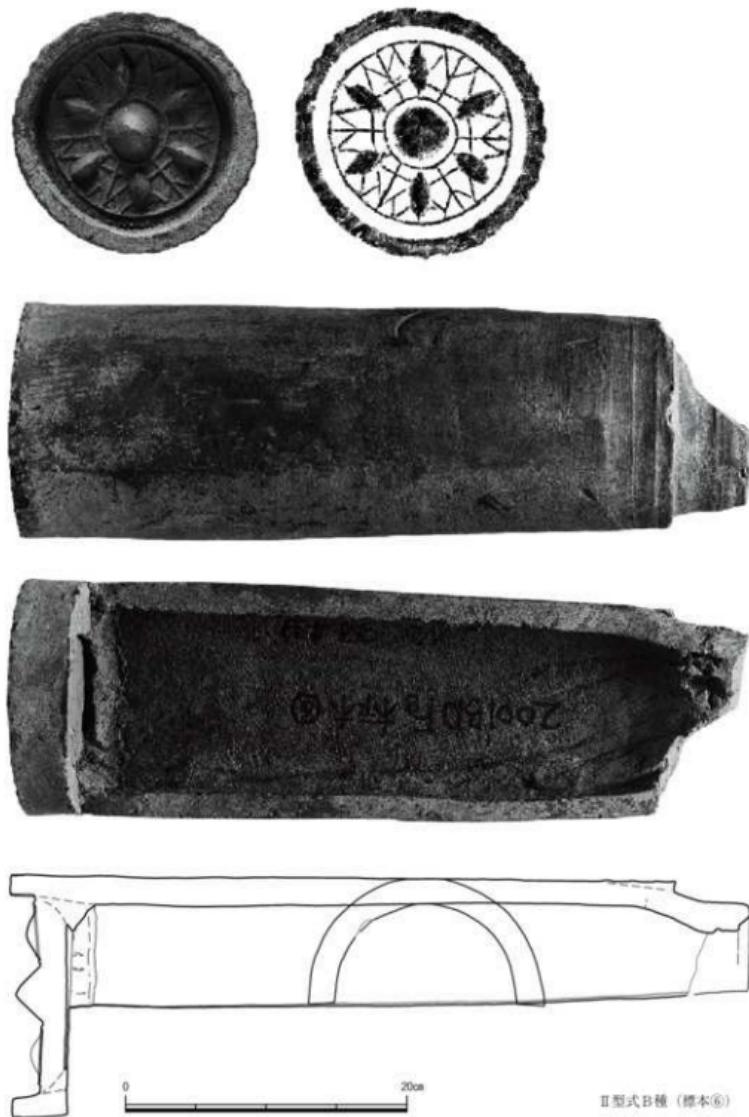


図7 II型式B種(2) (縮尺1/4)

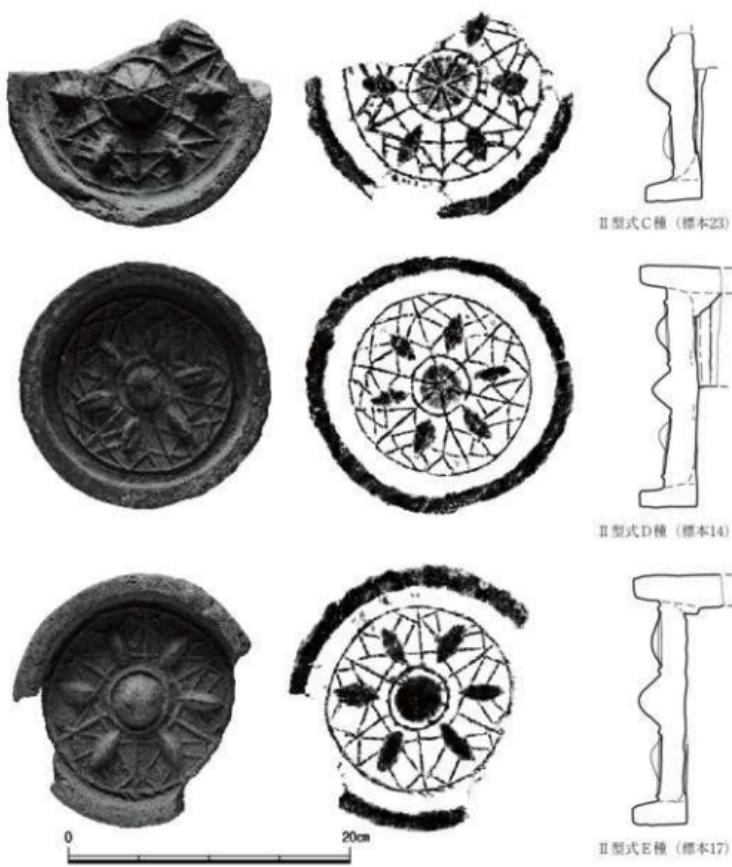


図8 II型式C種・II型式D種・II型式E種（縮尺1/4）

行が観察できた(図5)。しかし、范傷進行の前後で製作技法等の変化は特に認められない。

B種(12点)(図6・7、図版1-3)『報告』のB類に該当する。蓮唐文間の幾何学文の外側はA種に似るが、1カ所のみ、「M」字の中央に三角形を置き「山」字状に配列する。范傷を多数生じており、一部の范傷について、ないものからあるものへの范傷進行が観察できた。しかし、范傷進行の前後で製作技法等の変化は特に認められない。

C種(2点)(図8上、図版2-1)『報告』のC3類に該当する。蓮唐文間の幾何学文の外側は、すべて「M」字の中央に三角形を置き「山」字状に配する。中房に8本の区画線を

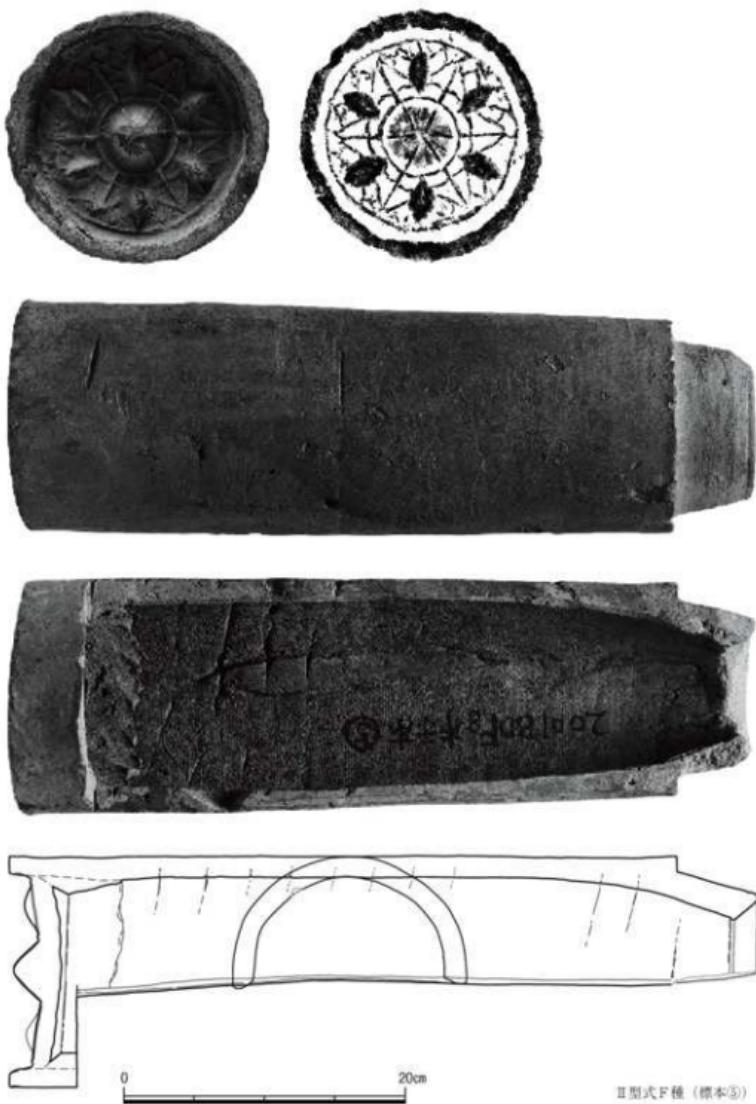


図9 II型式F種 (縮尺1/4)

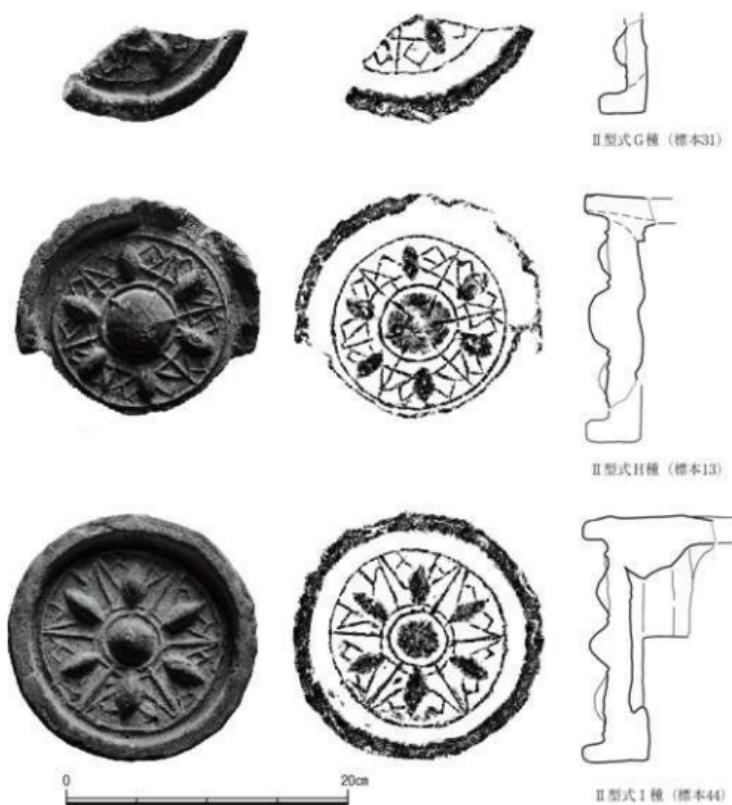


図10 II型式G種・II型式H種・II型式I種 (縮尺1/4)

配するが幅線と対応しない。蓮瓣文間をつなぐ直線が中房周線外側で六角形をなす。

D種 (7点) (図8中、図版2-2) 『報告』のD類に該当する。蓮瓣文間の幾何学文が他種に比べ乱れており複雑である。中房はやや小ぶりである。中房に幅線と対応する6本の区画線を配する。蓮瓣文間をつなぐ直線を欠き、中房周線外側の直線が星形をなす。

E種 (1点) (図8下、図版2-3) 蓮瓣文間の幾何学文の外側は、すべて「M」字の中央に三角形を置き「山」字状に配する。蓮瓣文間をつなぐ直線が中房周線外側で六角形をなす。

F種 (1点) (図9、図版3-1) 『報告』のC2類に該当する。蓮瓣文間の幾何学文の外側は、すべて「M」字の中央に三角形を置く「山」字状に配する。蓮瓣文間をつなぐ直線がやや曲線気味になり、中房周線外側で円形に近い六角形をなすが、範の傷みによって文様

が不鮮明になったためかもしれない。

G種（1点）（図10上、図版3-2） 小片のため文様構成は不明。蓮瓣文間の幾何学文の外側が1カ所のみ残存し、すべて「M」字の中央に三角形を置く「山」字状に配する。

H種（2点）（図10中、図版3-3） 蓮瓣文間の幾何学文の外側は、すべて「M」字の中央に三角形を置く「山」字状に配する。中房は多種より大きく断面形は頂部がややつぶれた半球形で丸みが強い。中房に幅線と対応する6本の区画線を配するが、頂部が途切れる。この途切れは中房頂部が摩滅したためか、範の傷みによるものかもしれない。蓮瓣文間をつなぐ直線が中房周縁外側で六角形をなすが、一部に乱れがある。

I種（1点）（図10下、図版4-1） 「報告」のC1類に該当する。基本的な構成としては、蓮瓣文間の幾何学文の外側は、すべて「M」字の中央に三角形を置く「山」字状に配するが、一部で文様が乱れ、「M」字にならない部分がある。中房はやや小ぶりである。蓮瓣文間をつなぐ直線がやや曲線気味となり、中房周縁のすぐ外側に配されるため、中房周縁に二重の周縁をめぐらせるように見える。

仮J種（1点）（図11、図版4-2） 本例は他種と実物での比較検討をおこなえていないため、他種と異範であるとは確定できない。ただし、写真から判断する限り、異範である可能性がきわめて高いため、「仮J種」としておく。

蓮瓣文間の幾何学文の外側はすべて「M」字の中央に三角形を置く「山」字状に配する。蓮瓣文間をつなぐ線が曲線気味のため、中房周縁外側の六角形はやや円形に近い。

b. 製作技法の特徴

出土した軒丸瓦は瓦当部の一部のみの破片や、丸瓦部の大半を欠くものが多いものの、乾燥、焼成以前の生瓦段階の製作痕跡は基本的に共通した特徴をもち、ほぼ同じ製作技法によって作られたと考えられる。以下、各部位で観察される特徴、製作技法を復元するうえで必要な点を説明する。なお、軒丸瓦は丸瓦と比べ丁寧な調整がほどこされているため、それ以前の製作痕跡が消されてしまっていることが多い。しかし、表面の形状や残された痕跡から、丸瓦部の製作技法は基本的に丸瓦と共通したものと考えられるため、適宜、丸瓦に認められるさまざまな痕跡を参照することにより、不明な部分を補うこととする。

① 丸瓦部の特徴

いずれも筒部狭端に玉縁部がつく有段式である。以下、筒部と玉縁部に分けて説明する。

筒部 凸面は、回転を利用した横ナデをほどこしたのち、広端（瓦当外縁上面）から約1/2程度の範囲まで縱またはやや斜め方向のナデないしケズリをほどこした痕跡が残る。これらの調整の結果、凸面に繩目を残すものは認められないが、丸瓦の凸面には、完全に消されずに縱ないし斜めの繩目を残すものがあるため（図17下・18下、図版9-2・3など）、軒丸瓦の丸瓦部も同様に、縱ないし斜め繩叩きをほどこしたのちにナデないしケズリによ

りその痕跡を完全に消した可能性が高い。

筒部凹面はほぼ全面に布压痕を残し、凹面の形状は凹凸が少なく均整が取れていますから、布をかぶせた模骨に粘土を巻き付けて筒部を製作したことは明らかである。筒部凹面の形状は、広端（瓦当部側）から狭端（玉縁部側）に向けてわずかに内径を減じるが、狭端付近で内径のすばまり具合が若干きつくなり、玉縁部先端にいたる。玉縁部先端付近の形状は後述するが、先端から3～5cm程度は凹面に布压痕がなく形状にばらつきがある。玉縁部凹面には模骨の端の压痕が認められないため、模骨先端付近の形状は不明である。以上から、使用した模骨は、丸瓦部凹面に接する部分については、狭端側には向かってわずかに、狭端付近では若干きつく直径を減じ、肩部には稜をもたない砲弾形（牛乳瓶形、先端の形状は不明）と考えられる。凸面の形状も狭端付近を除けば凹面とほぼ対応しており、筒部広端（瓦当部側）から狭端（玉縁部側）に向かってわずかに細くなり、明瞭な段をもって玉縁部にいたる。

凹面には粘土の継ぎ目を観察できないものもあるが、横方向の粘土紐継ぎ目を残すものがあること（標本①・⑤：図9、図版3-1、6-1）、粘土板作りを示す痕跡は全く認められること、丸瓦の場合、すべての個体で凹面に横方向の粘土紐継ぎ目が観察できること（標本53：

図12など）から、軒丸瓦もすべて粘土紐作りである可能性が高い。粘土紐継ぎ目を観察できる個体では、粘土紐の幅は3～4cm程度である。粘土紐継ぎ目は、円筒主軸にはほぼ直交するもののほか、やや左上がり気味になるものも存在し（標本⑤：図9、図版3-1）、粘土円筒の成形は粘土紐積み上げによるものか、あるいは粘土紐巻き上げによるものか、いずれとも特定しがたい。なお、粘土紐接合の傾きは、軒丸瓦の丸瓦部ではほとんど観察できないが、丸瓦には凹面側が高く、凸面側に低くみえるものがあるので、粘土紐を巻き付ける工程は模骨の直径が大きい面を下（粘土円筒の広端側を下、玉縁部側を上）にして、模骨を立てた状態でおこなった可能性が高い。

丸瓦部側面にはヘラケズリをほどこし、分割截面、分割破面といった粘土円筒半截の痕跡を残さない⁽³⁾。なお、側面の凸面側や凹面側に、幅の狭い面取りをほどこすものが数



図11 II型式仮J種（標本9）



図12 丸瓦凹面の痕跡（標本53）

点あるが、特に規則性を見出しがたい。

このほか、後述するように、丸瓦部側面のうち瓦当部付近については、凹面側にわずかに分割破面を残し、外側から切り込んだと考えられるもの（標本⑤：図13下、図版3-1）や、瓦当部側に向かって粘土円筒の外側から浅く切り込んだ痕跡を残すものが数点ある。丸瓦については、側面の凹面側に分割截面、凸面側に分割破面が残り、広端側から玉縁部側に向かって粘土円筒の内側から切り込み、乾燥後に半截したことが分かる（図12）。軒丸瓦の丸瓦部の半截も、これと同様であった可能性もある。なお、丸瓦部側面のヘラケズリは、瓦当部側から玉縁部側に向かってほどこされているものが多い。

玉縁部 凸面には、筒部凸面と同様に回転を利用した横ナデをほどこす。凸面調整の特徴が筒部と玉縁部ではほぼ共通しており、一連の工程でおこなわれた可能性もある。側面についても、筒部側面と一連のヘラケズリをほどこし、粘土筒半截の痕跡を残さない。

凹面には布压痕を残すが、先端部は幅1.0~1.5cm程度の範囲に回転を利用した横ナデをほどこし、丸みをもたせて取める。さらにその内側（瓦当部側）には、回転を利用した指ナデツケによる幅1.0cm程度の凹線をもつものがある（標本1：図6、図版5-1）。このナデツケは玉縁部先端の横ナデと連続しており、一連の工程とみられる。なお、この資料は玉縁部先端の横ナデとナデツケ凹線の上に、瓦当部側から盛りあがった粘土がかぶり、さらにその盛りあがった粘土を幅1.5cm程度、横ケズリしている。この粘土の盛り上がりは、粘土円筒の内部で、瓦当部側から玉縁部先端に向かって何かを動かした際に当たった痕跡のように見える。この動きは、粘土筒を半截する際の切り込み方向と一致しており、軒丸瓦の半截も同じ向きにおこなったとすれば、粘土円筒半截時の痕跡とも想定される^[4]。こう考えた場合、玉縁部先端の横ナデ・ナデツケが粘土円筒半截以前、横ケズリが半截後の仕上げの調整となる。なお、玉縁部先端に同様の、幅1.0~2.5cm程度の横ケズリの痕跡を残すものは他にもあるが、粘土円筒半截の工程との前後関係は不明である（標本①・⑥・50：図版5-2、6-1）。

② 瓦当部粘土、接合部の特徴

瓦当部粘土、範の形状 瓦当部粘土の形状は、丸瓦部の一部が剥離し瓦当部粘土の断面形状が分かるものからみて、直径13~14cm、厚さ1~2cm程度の平坦な円盤で、側面はやや丸みをもしながら瓦当裏面から瓦当面に向かって若干開く形状を呈していたと考えられる（標本10・16・25：図13上、図版7-1・2・3）が、側面が開かない円柱状を呈するようみえるものが1点ある（標本17：図13中）。瓦当裏面には指頭によると思われる圧痕による微妙な凹凸が多数残るため、文様面を上に向いた範の上に粘土を手で押し込んで瓦当部粘土を成形したと考えてよい。後述するように範と瓦当部粘土が粘土円筒の内側に嵌め込まれたと考えられることから、範は円形を呈し、直径は瓦当部粘土とはほぼ同じく13~14cm、

端部の厚さは瓦当外縁の高さと同じ1~2cmに復元される。ただし、瓦当面の形状が中房に向かって中凹み気味になるものがあるため、范の文様面が若干中高であった可能性もある（標本⑤・14：図8）。范は瓦当外縁内側までおよんでおり、外周圍線の外側に范傷が多く認められる（図版8-2・7）。

接合部の特徴 瓦当裏面下半には、土手状の高まりが突帯として残存する（図13下）。突帯上面にはヘラ切りの痕跡が明瞭に残る。また、瓦当部粘土全体が剥がれた丸瓦部が2点出土しており（標本①・2：図版6-1・2）、丸瓦部広端が瓦当外縁となっていたことがわかる。これらの状況から、半截前の粘土円筒広端の内側に円盤状の瓦当部粘土を嵌め込んで接合した後に、粘土円筒を半截して円筒不要部を切り取ったことは確実である。同范の軒丸瓦では瓦当外縁の高さに大きな差がない。瓦当部粘土を横、あるいは上から粘土円筒に嵌め込んだ場合、瓦当外縁の高さには個体差が生じると考えられるが、そのような違いはみられない。

したがって、粘土円筒へ瓦当部粘土を嵌め込む際には、范が瓦当部粘土の下に残ったままの状態で、玉縁部を上にして粘土円筒を立て、上からかぶせるように嵌め込んだ可能性が高い。

円筒不要部切り取りの工程を示す痕跡 粘土円筒の不要となる半分を切り取る工程は、a) 粘土円筒の半截（円筒長軸に平行し、丸瓦部側面を形成する切り込み）、b) 円筒不要部先端の切り離し（瓦当裏面に平行し、瓦当裏面下半の突帯上面を形成する切り込み）の二つの工程からなる。a) は、すでに説明したとおり、丸瓦部側面のヘラケズリにより痕跡が完全に消されたと考えられ、半截の工程は不明である。

ただし、瓦当部付近には半截時のものと思われる浅い切り込みを残すものがあり（標本8）、一部はb）の切り込みを超えて、さらに瓦当側面に切り込みがおよぶものがある（標

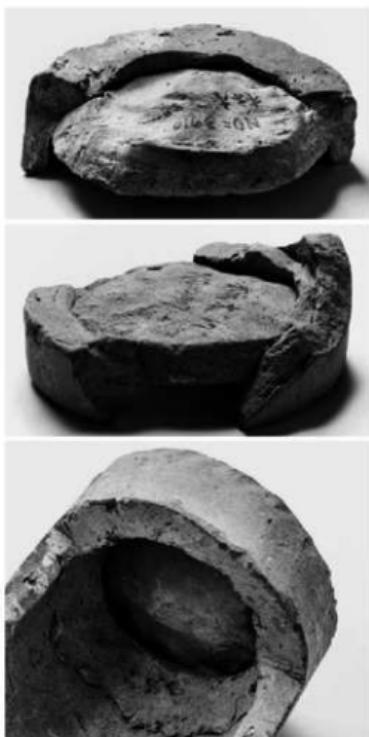


図13 瓦当部粘土と接合部の形状
(上: 標本5、中: 標本17、下: 標本5)

本18・19：図版7-6）。これらの浅い切り込みは、玉縁部側から瓦当部側に向かってほどこされている。

b) の切り込みは、瓦当裏面下半の突帯上面に痕跡が明瞭に残る。切り込みはヘラ状工具により複数回に分けておこない、上面をほぼ平坦に仕上げる（標本23：図版7-7）。このヘラ切りの痕跡が瓦当裏面の一部におよぶものがある（標本45・L-01：図版7-8）。砂粒の動きなどから、b) の切り込みの向きは、時計回りと反時計回りのいずれも存在するが、丸瓦部側面付近では瓦当裏面下半に向かう方向に切られている。

b) の切り込みについても、a) と同様に浅い切り込みが、丸瓦部側面のa) の切り込みを超えて丸瓦部凸面におよぶものがある。a) とb) の浅い切り込み同士に切り合いが生じているものが5点あり、a) → b) の順になっているものが4点（標本8・13・38・44：図版7-5）、逆にb) → a) の順が1点ある（標本18：図版7-6）。a) → b) が基本的な切り込みの順序であり、b) → a) が例外であった可能性もあるが、a) の浅い切り込みは半截部を示す下書きや目印であった可能性も残る。

なお、切り離された円筒不要部は丸瓦として使用されたと考えられるが、法量や調整痕跡からみて、今回調査した丸瓦の中に切り離された円筒不要部と特定できるものはない。

接合部補充粘土 瓦当裏面と丸瓦部凹面の接合部分には、紐状の粘土が貼り付く。これは、瓦当部と丸瓦部の接合を調整・補強する目的で補充されたものと考えられるので、以下、接合部補充粘土と呼ぶ。瓦当部粘土に押されて玉縁部側に向かって盛り上がった状況を呈するものがあること、円筒不要部先端切り離し、先述のb) の工程の際に、瓦当裏面下半の突帯とともに接合部補充粘土も切っていることから、接合部補充粘土は、粘土円筒に瓦当部粘土を嵌め込む前に、粘土円筒の内側に貼り付けられたものである。

接合部補充粘土の断面形は、おおむね三角形を呈するものが多い（図版6-1・2）。これは、瓦当部粘土の側面形状に対応した形状と考えられ、瓦当部粘土との接合部を密着させる工夫であろう。接合部補充粘土の玉縁部側の端は粘土円筒の広端から6~8cm程度までおよび、端を斜めになでつけたり（標本⑤・21：図9、図版3-1）、横ナデをほどこしたり（標本2・11・13：図版6-2）して密着させる。この付近の丸瓦部凹面には、右上がりの斜め刻み目（標本⑤・3・50：図9・13下、図版8-8）や、「X」字状に交差した刻み目がみえるもの（標本21）があり、接合部補充粘土を貼り付ける前に、粘土円筒内側にヘラ刻みを入れたことがわかる。接合部補充粘土を粘土円筒内側に密着させ、剥がれにくくするための工夫であろう。

一方で、瓦当裏面と接合部補充粘土の接合部については、両者が密着したものが少数存在するものの、ほとんどの個体で接合部に若干の隙間があり、中には大きな隙間が生じているものもある（標本7・20・21・39など：図13中、図版6-3）。円筒不要部切り取り後で

あれば、接合部にナデツケをほどこすなどしてこの隙間を埋め、瓦当裏面と接合部補充粘土をさらに強く密着させ、剥がれにくくする加工をほどこすことも可能であったと考えられる。また、こうした加工をすれば、瓦当部粘土の固定に大きな効果を發揮したと予測される。しかし、金嶺寺遺跡出土の軒丸瓦を製作した工人们は、そうした工夫をおこなわなかつたようである。この隙間を埋めるナデツケなどをほどこそうとすれば、瓦当部粘土を裏面から圧迫することとなり、瓦当部粘土の下に范が残った状態でなければ、瓦当部粘土が外れるおそれがある。逆にいえば、接合部補充粘土と瓦当裏面の隙

間を埋める工夫をしなかつた理由として、円筒不要部切り取りの際には、范はすでに取り外されていた可能性が考えられよう。

接合部補充粘土を貼り付けた目的は、嵌め込まれた瓦当部粘土を裏（玉縁部側）から押さえて固定するとともに、粘土円筒の内径を狭め、瓦当部粘土と粘土円筒の間に隙間を作らないためと考えるのが妥当であろう。瓦当部粘土嵌み込みの工程において、瓦当部粘土の直径と粘土円筒の内径が適合するか否かはきわめて重要であり、最も気を遣う点であったと考えられる。瓦当部粘土の直径は范により、粘土円筒の内径は模骨により規定されることから、両者にそれほど大きな齟齬は生じなかつたと推測されるが、接合部補充粘土を内側に貼り付け、粘土円筒の内径を微妙に調整することにより、瓦当部粘土嵌み込みの工程をいっそう確実にしたのであろう。

瓦当外縁上面および内側 瓦当外縁内側には、瓦当部粘土を嵌め込んだ際の痕跡、つまり縱方向の擦痕や押し潰されたような痕跡などが残ると想定されるが、実際にはそうした痕跡がすべてに認められる訳ではない（標本1・⑤：図版4-4）。瓦当外縁内側には横方向のナデ、ナデツケの痕跡が残るものがあり（標本29：図版8-1）、これによって瓦当部粘土嵌み込みの痕跡が消されたと考えられる。この横ナデないし横ナデツケが、外周圓錐外側の范傷にかぶるようみてあるものもある（標本44：図版8-2）。この横ナデないし横ナデツケは、瓦当部粘土嵌み込みによって乱れた瓦当外縁内側を整えるとともに、瓦当部粘土を固定する効果も果たしたかもしれない。

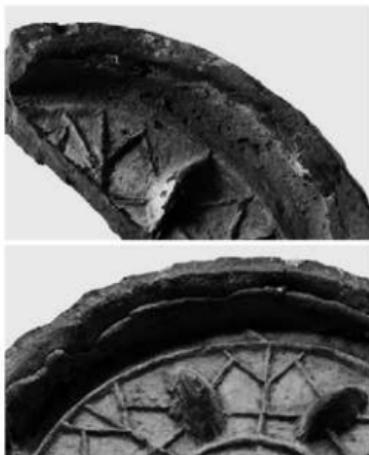


図14 瓦当外縁上面と内側の状況
(上：標本29、下：標本25)

また、瓦当外縁の上面および内側には粘土継ぎ目が認められるものが多い（標本11・13・15・25など：図14下、図版8-3・4・5）。この継ぎ目の外側は丸瓦部の広端であるが、その内側は、a）粘土円筒の内側に貼り付けた接合部補充粘土が広端までおよんでいるか、b）瓦当部粘土を粘土円筒に嵌め込んだ際に、圧迫された瓦当部粘土または接合部補充粘土の一部がはみ出したものであろう。このほか、c）瓦当部粘土嵌み込みの際などに形状が崩れた瓦当外縁を整形するために、粘土を貼り足したものもあるかもしれない。

瓦の状況からはいずれとも判断しがたいが、いずれの場合もあった可能性がある。常に起こりえるc）はさておき、a）、b）については、瓦当部粘土嵌み込みの具合による可能性が考えられる。b）の場合、瓦当部粘土の直径に比べ、やや内径が小さめの粘土円筒に瓦当部粘土を無理に押し込んだため、瓦当部粘土や接合部補充粘土の端が瓦当部側にはみ出す結果になったと考えられる。一方、a）の場合には、瓦当部粘土の直径に比べ、粘土円筒の内径がやや大きかったため、瓦当部粘土嵌み込みの際に、粘土円筒の内側に接合部補充粘土を多めに貼り付けて調整したと考えることも可能である。瓦当部粘土と丸瓦部凹面との間に接合部補充粘土が入り込み、瓦当面におよんでいると考えられるものがあるので（標本①・10など：図版6-1、7-3）、さらに瓦当外縁内側までおよぶ場合もあったのかもしれない⁽⁵⁾。

なお、いずれの個体においても、丸瓦部側面の厚さと比べ瓦当外縁は薄い。丸瓦については、広端から数cmの範囲にナデないしきズリをほどこすことにより、布圧痕が消されるとともに器壁が薄くなっているものが多い（標本49・52など：図12、図版9-1・3）。軒丸瓦にも同様な調整がおこなわれた結果、粘土円筒広端付近が薄くなった可能性が考えられよう。丸瓦部凹面の接合部付近には、布圧痕を消した痕跡は認められないことから、この加工がおこなわれた範囲は、接合部補充粘土で完全に覆われていると考えられる。

③ 丸瓦部の押圧痕

中国では、前漢代以来、平瓦広端の凸面側に押圧波状文をほどこす事例が知られている（向井2005、大脇2005、今井2010）。後述するように、金嶺寺遺跡出土平瓦にも同様の押圧波状文が認められる。

ところが、金嶺寺遺跡出土瓦には、この押圧波状文とよく似た指頭によるとみられる押圧痕が、軒丸瓦の瓦当外縁上面の凸面側、2点の軒丸瓦の丸瓦部側面の凸面側にも認められ（標本5・39：図15上）、さらに不明瞭であるが、玉縁部先端の凸面側にも存在する可能性がある（標本①：図15下）。瓦当外縁上面の押圧痕は、およそ1～2cmおきに隙間なくほどこされ、瓦当外縁に対して右上がりの傾斜をもっているものが多い。中には、凸面側の押圧痕にはば対向する位置にあたる凹面側（瓦当外縁内側）にも、同様の押圧痕が残るものがある（標本15・25：図版8-5）ため、おそらく、范取り外し後に外縁を親指と人差し

指で挟んでねじるようにほどこしたのであろう。

瓦当外縁上面の凸面側の押圧痕は、瓦当外縁上面に残る、押しつぶされたような痕跡によってつぶれ、瓦当外縁上面は平坦になっている。したがって、この指頭押圧は瓦当部嵌め込み、範取り外し後にほどこされ、その後、瓦当外縁上面を下、玉縁部を上にして丸瓦部を立てて置く工程があったと考えられる。

つぎに、丸瓦部側面の凸面側に残る押圧痕については、3~4cmおきにはほどこされ、凹面側にはこれに対応する押圧痕が不明瞭である。押圧痕の部分は丸瓦部側面に凹凸が認められることから、丸瓦部側面のヘラケズリ後に押圧をほどこしたと考えられる。玉縁部先端については、一部欠損もありはっきりしない。

これらの押圧痕には、装飾以外の機能を見出しがたく、文様の一種と考えるのが妥当である。しかし、丸瓦部側面や玉縁部先端については、普通に屋根に葺いた状態でこの押圧痕がみえたとは考え難い。きわめて特殊な場所に使われた可能性もあるが理解に苦しむ。いずれにせよ、瓦の端部に押圧をほどこすことに対する工人のこだわりが感じられる。

④ 粘土円筒の向き

ここまで説明したさまざまな痕跡と、そこから復元される工程は、粘土円筒をどのように向きにしておこなったのか、検討しておく。

瓦当外縁上面には、押しつぶされたような痕跡が全面に明瞭に残る。これは、瓦当外縁(粘土円筒広端)を下に、玉縁部を上にして丸瓦部(粘土円筒)を立てた段階が確実に存在し、瓦当外縁上面を最終的に調整することがなかったことを示している。また、粘土円筒および玉縁部凸面、玉縁部先端付近には回転ナデがほどこされており、回転台上に粘土円筒広端を下にして粘土円筒を立てた状態で、一連の工程としておこなった可能性が高い。このほか、粘土円筒が同様の向きとなる工程は、瓦当部粘土の嵌め込み、粘土円筒成形のための粘土紐積み上げないし巻き上げなども考えられ、粘土円筒を半載するための縱方向の切り込みも同様であった可能性がある。

ところが一方で、粘土円筒広端付近の内側を調整し、刻み目を入れ、接合部補充粘土を



図15 丸瓦部の押圧痕
(上：丸瓦部側面：標本39、下：玉縁部先端：標本①)

貼り付けるという工程は、模骨を取り外した後、細い玉縁部側から手を入れておこなったとは考えがたく、粘土円筒広端側からおこなった可能性が高い。つまり、この工程は、粘土円筒を横に寝かせるか、玉縁部を下にして粘土円筒を立てた状態でおこなったと推測される。このほか、範の取り外し、瓦当外縁内側のナデツケ、瓦当外縁上面の押圧の工程も同様である。また、円筒不要部先端の切り離しについては、粘土円筒広端を下にして立てた状態で切り込むことも可能であるが、粘土円筒の自重により工具が圧迫され、困難が予想される。

しかし、丸瓦部凸面、玉縁部先端のいずれも丁寧に調整されており、これらの工程をおこなった際の粘土円筒、あるいは円筒不要部切り取り後の軒丸瓦の向きを示す根拠は見当たらない。ただし、玉縁部を下にして立てた状態があったとすれば、玉縁部先端に自重がかかり、玉縁部先端に何らかの変形が生じることが予想され、玉縁部の凹凸両面に丁寧な調整をおこなう必要がある。日本の民俗例では、丸瓦用の四型台が存在し、丸瓦を横向きに寝かせて粘土円筒の切り離しをおこなった事例が報告されている（京都泉涌寺例、奈良瓦宇例。大脇1991：36頁、図版I-8・9）。こうした四型台等の道具を利用し、横向きに寝かせてこれらの工程をおこなったと考えるのも一案であろう。

c. 製作技法の復元

ここまで説明した観察結果から推測される、金嶺寺遺跡出土軒丸瓦の標準的な製作技法は以下のとおりである（図16）。

① 粘土円筒の製作

砲弾形（牛乳瓶形、先端の形状は不明）の模骨に布をかぶせ、直径が大きい方の面を下にして回転台上に模骨を立て、周囲に幅3～4cm程度の帯状の粘土紐を巻き上げないし積み上げて、粘土円筒を成形する（図16-1）。粘土円筒外側の狭端から5～6cm程度の部分に粘土を貼り足して肩部を作り、筒部と玉縁部に段差をもつ有段式とする。その後、粘土円筒の外側に継ないし斜め縄叩きをほどこしたものと推測されるが、その痕跡が完全に消されているため、肩部貼り足しとの前後関係や縄叩きをほどこした範囲は不明である。さらに粘土円筒および玉縁部の凸面全体、玉縁部先端に回転を利用して横ナデをほどこしたのち、広端から1/2程度まで縦方向のナデないしケズリをほどこすが、これらの調整がどの段階でほどこされたのかは不明である。これらの調整はきわめて丁寧にほどこされ、凸面のほとんどの痕跡を消すことから、回転ナデは円筒不要部切り取りの直前、縦方向のナデないしケズリはさらに後におこなった可能性も考えられる。

続いて、模骨から粘土円筒を外す（図16-2）。日本や韓国の民俗例のように、内側に布が貼り付いた状態の粘土円筒を模骨から外し、つぎに粘土円筒内側から布をはがすのであろう（大脇1991：34-36頁）。



図16 金嶺寺遺跡出土軒丸瓦の製作技術復元模式図

② 粘土円筒広端付近の内側の加工

粘土円筒広端付近の内側を調整し(図16-3)、粘土円筒広端からおおよそ8cm程度の範囲に斜めないし「X」字状に交差するヘラ刻み目を入れる(図16-4)。つぎに、ヘラ刻み目を入れた部分に接合部補充粘土を貼り付け、横ナデないし横ナデツケをほどこして断面三角形状に整える(図16-5)。これらの工程は、粘土円筒を横に寝かせるか、玉縁部側を下にして立てておこなったと考えられる。

③ 瓦当部粘土の製作

直径13~14cm、厚さ1~2cmの円盤形を呈する木製の范を、文様面を上向きにして置き、范の上に粘土を押し付け、瓦当部粘土を作成する。瓦当裏面には指頭によると思われるナデないし押圧をほどこして厚さ1~2cm程度の円盤状とし、側面は瓦当面側に向かって若干開くやや丸みのある斜面をなす截頭円錐形風に仕上げる(図16-6)。この③の工程と①・②の工程はまったく別に進めることができ、前後関係は不明である。

④ 瓦当部粘土嵌め込み

范を下に敷き、瓦当裏面が上を向いた状態、つまり③の瓦当部粘土製作時のままの状態の瓦当部粘土に、粘土円筒の広端側を上からかぶせるようにして、瓦当部粘土を粘土円筒広端の内側に嵌め込む(図16-7)。瓦当部粘土の側面が接合部補充粘土と密着し、瓦当裏面側では、接合部補充粘土の一部が玉縁部側に押し込まれる。瓦当面側では、接合部補充粘土または瓦当部粘土の一部が瓦当外縁内側にはみ出す場合があったと考えられる。

⑤ 范取り外し

瓦当外縁内側から范を取り外す。范を取り外すための工夫の痕跡は瓦にまったく残っていないため、どのようにして范を取り外したのか不明である。范の裏側に何らかの加工があったのか、あるいは台上に范を固定する加工があったのかもしれない。

⑥-1 瓦当外縁の押圧施文

瓦当外縁の押圧施文(⑥-1)と瓦当外縁内側の調整(⑥-2)の先後関係は不明であるが、押圧施文を先に説明する。

瓦当外縁の先端に押圧をほどこす(図16-8)。瓦当外縁の先端を指で挟み込み、ひねるようにしてほどこした可能性が高い。この工程は范取り外し後であればいつでも可能であり、粘土円筒を横に寝かせるか、玉縁部側を下にして粘土円筒を立てておこなわれたと考えられる。

⑥-2 瓦当外縁内側の調整

瓦当外縁の内側に横ナデツケをほどこして表面の凹凸を調整し、瓦当外縁が直立線を呈するように形状や厚さを整える(図16-9)が、この調整を省略する場合もある。この工程は、粘土円筒を横に寝かせるか、玉縁部側を下にして粘土円筒を立てておこなわれたと

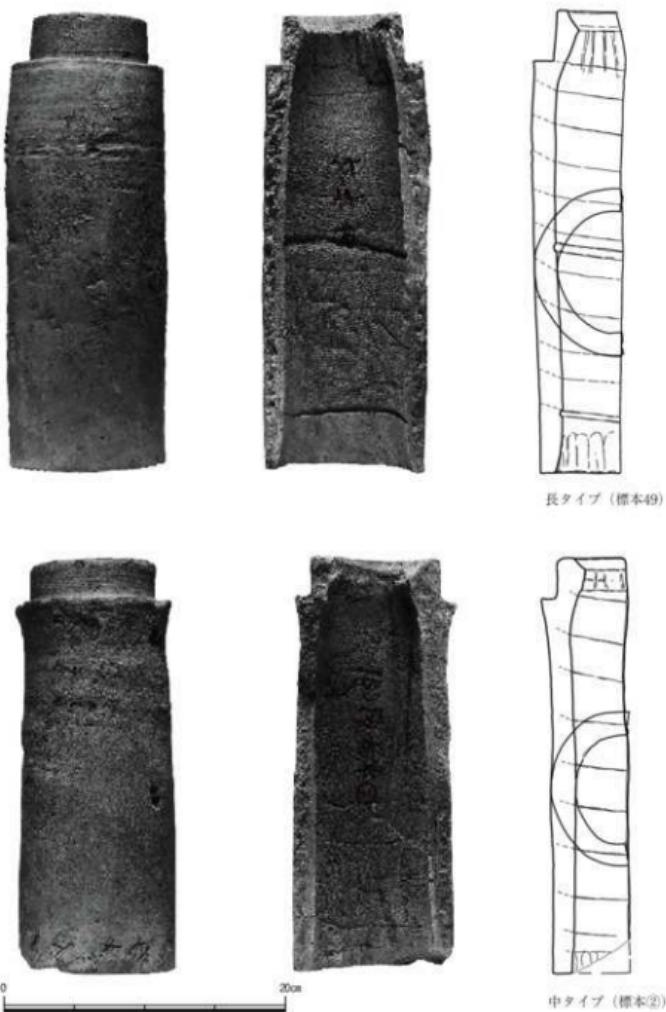


図17 丸瓦長タイプと中タイプ (上: 標本49、下: 標本②) (縮尺1/4)

考えられる。

⑦ 円筒不要部切り取り

粘土円筒のうち不要となる半円筒を切り取る工程は、a) 粘土円筒を縦方向に半裁し、

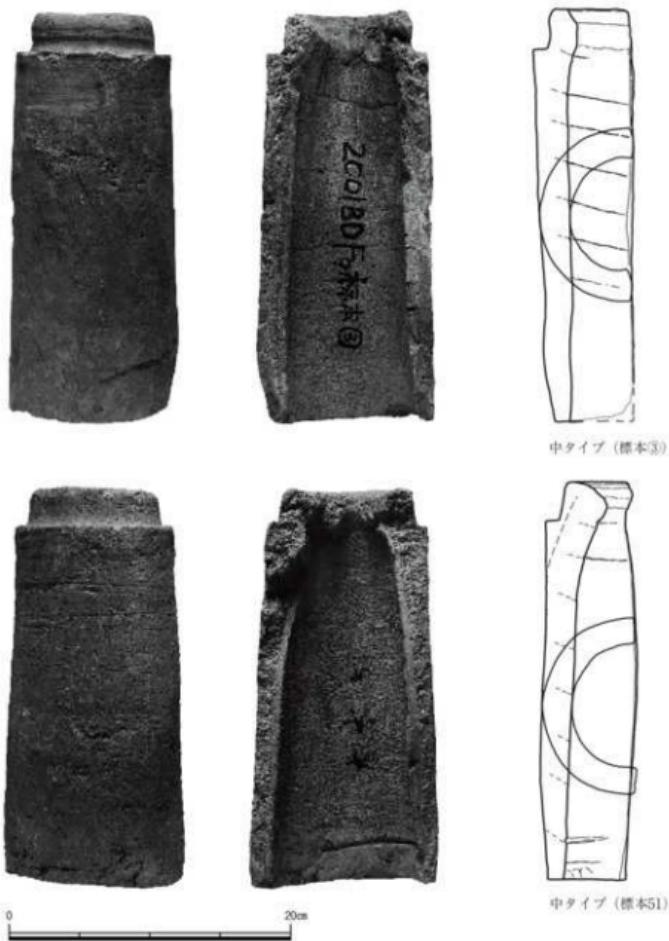


図18 丸瓦中タイプ（上：標本③、下：標本51）（縮尺1/4）

b) 不要な半円筒の先端を瓦当裏面の高さで切り離す、という2つの工程からなり、多くの場合、a) → b) の順であったと考えられる（図16-10）。

a) の粘土円筒半截については、丸瓦部側面のヘラケズリによって痕跡が消されているため、どちらに向かってどこから切り込んだかの詳細は不明である。しかし、瓦当部付近では、ヘラ状工具により瓦当裏面側に向かって粘土円筒の外側から切る場合があった可能



図19 丸瓦短タイプ（上：標本56、下：標本54）（縮尺1/4）

性がある。その後、丸瓦部側面のヘラケズリをおこない、切り込みの痕跡を消す。このヘラケズリは粘土円筒を立てた状態でも、横に寝かせた状態でも可能である。

b) の切り離しは、瓦当外縁上面から3～5cm程度、瓦当裏面の高さ付近で、凸面側（外側）から数回に分けてヘラ状工具による切り込みを入れることによりおこなわれ、取り除かれた円筒不要部の先端の切り残しが瓦当裏面下半に突帯として残る。切り込みの向



図20 丸瓦短タイプ (標本47)

きは、丸瓦部側面付近では丸瓦部側面側から瓦当裏面下半側に向かっているが、それ以外の部分では、時計回りと反時計回りの双方が認められる。この工程は、粘土円筒を横に寝かせた状態であった可能性も考えられる。

なお、この円筒不要部切り取りの工程は、範取り外し（⑤）、瓦当外縁の押圧施文と内側の調整（⑥）より先におこなわれた可能性がある。また、丸瓦部側面に押圧施文する工程は、円筒不要部切り取り、丸瓦部側面のヘラケズリ後であればどの段階でも可能である。

最後に、再び瓦当外縁を下にして立てる工程があると考えられる。この状態で乾燥させた可能性もある。その後、生瓦を乾燥、焼成して完成にいたる。

（2）丸瓦

調査した丸瓦は9点である。軒丸瓦に比べ点数が限られ、十分な分析は困難である。おおむね、軒丸瓦の丸瓦部と共にした特徴をもつが、法量、製作技法の一部などが異なる。

法量は文末の表2にまとめて記す。軒丸瓦は法量がほぼ一定しているが、丸瓦は全長により、長、中、短の3タイプに分けることが可能である。基本的な製作技法はどのタイプも共通するが、タイプごとに若干の特徴がある。

まず、3タイプに共通する特徴をあげる。筒部の成形は軒丸瓦と共通し、布をかぶせた砲弾形（牛乳瓶形、先端の形状は不明）の模骨の周間に幅3~5cmの粘土紐を積み上げないし巻き上げて成形する。狹端から3.5~6cm程度の部分に粘土を貼り足して肩部を作り、筒部と玉縁部に段差をもつ有段式とする。凸面の調整もほぼ軒丸瓦と共通し、玉縁部を含

め回転を利用した横ナデをほどこした後、継ないし斜め方向のナデをほどこし、凹面は布压痕が残るが、凹面全面に布压痕を残すもの、広端付近のみナデにより布压痕を消すもののほか、広端付近のわずかな段から広端側には布压痕がないものもあり、このわずかな段が布端の可能性もある（標本49・51・56：図17上・18下・19上）。

広端と玉縁部先端についても軒丸瓦と同じく、広端には未調整で押しつぶされたような痕跡が残り、玉縁部の先端はナデにより丸く収め、内側に削りをほどこす。ただし、広端にナデをほどこしたもののが1点ある（標本56：図版9-5）。ナデをほどこしたのち、さらに押しつぶされた痕跡はみえないため、乾燥直前の最終段階で広端にナデをほどこした可能性がある。側面の調整痕跡は軒丸瓦と異なり、凹面側からヘラ状工具で切り込んだ分割截面が、筒部広端から玉縁部先端付近まで連続して残り、凸面側に分割破面を残す。分割截面には広端側から玉縁部側に向けて工具を動かした痕跡が残る。

つぎに、各タイプの特徴を説明する。

長タイプ（2点） 全長が49cmを超えるものである（49.0～51.3cm）（標本49・52：図17上、図版9-1）。筒部長は43.8～45.5cm、筒部の厚さは1.6～3.0cm、筒部外径は17.0～17.2cmである。軒丸瓦の丸瓦部に近い法量で、形状が整い作りも丁寧で軒丸瓦の丸瓦部に近い。凸面は丸瓦部と同じく筒部から玉縁部にかけて回転を利用した横ナデをほどこした後、広端から2/3程度の範囲に斜めケズリないしナデをほどこすものと、広端から10cm程度の範囲に丁寧なタテナデをほどこすものがある。粘土紐の幅は3～4cm程度で、玉縁部を上にした場合、凹面側が高く凸面側に低い、いわゆる外傾接合にみえるものがある（標本52：図版9-1）。凹面は布压痕を残すが、広端から幅6～7cm程度の範囲にナデをほどこして布压痕を消す。側面に残る分割截面は幅が狭く、広いところでも1.0cm以下である。

中タイプ（4点） 全長が43cm前後のものである（42.0～43.6cm）（標本②・③・51・53：図12・17下・18、図版9-2）。筒部長は38.5～39.5cm、筒部の厚さは2.0～3.9cm、筒部外径は17.0～19.7cmである。厚手のものがやや多い。

凸面の調整は全長が長いタイプと類似点が多いが、広端付近にわずかに繩目がみえるものが1点ある（標本②）。凹面は布压痕を残すが、広端から幅3cm程度の狭い範囲にナデをほどこして布压痕を消す（標本②・53：図12・17下）。

短タイプ（3点） 全長が40cm以下のものである（39.2～40.0cm）（標本47・54・56：図19・20）。筒部長は34.5～36.0cm、筒部の厚さは1.9～3.3cm、筒部外径は18.0～18.6cmである。凸面は他のタイプと基本的に共通するが、ナデ調整がやや粗く、広端縁から3.5～5.0cm程度の範囲に斜め方向の繩叩き痕が薄く残る。2点はよく似た特徴をもち、分割截面の幅が広めで、広端から1/2程度の範囲は凸面側までほとんど側面全体を切り込み分割破面が残らない部分がある（標本47・56：図19上・20）。未調査の丸瓦1点もこれらと共に通する特徴

をもつため、短タイプと考えられる（標本48：図版9-3）。残りの1点は分割截面の幅が1.5cm程度で分割破面を残す（標本54：図19下）。

標準的な製作技法は以下のように復元される。基本的に軒丸瓦の丸瓦とほぼ共通するので、詳細は省略する。

① 粘土円筒の成形

布をかぶせた砲弾形（牛乳瓶形、先端の形状は不明）の模骨に、3~5cm程度の幅の粘土紐を積み上げないし巻き上げ、粘土円筒を成形する。直径が大きい面を下にして模骨を立てた状態で製作したものと考えられる。次に肩部を貼り足し、玉縁部を作る。凸面の調整、玉縁部先端の調整は、軒丸瓦の丸瓦部と同じく、肩部貼り足し後、粘土円筒半截前のどの段階でおこなったか不明である。そして模骨から内側に布がついたままの粘土円筒を外し、布を粘土円筒の内側からはずしたものと考えられる。

② 粘土円筒半截

粘土円筒内側にヘラ状工具を入れ、広端側から玉縁部側に向かって工具を動かして切り込む。この後、分割截線を入れた粘土円筒を一定程度乾燥させる。広端につぶれたような痕跡が残ることから、乾燥時には、広端側を下にして立てた可能性を考えられる。一定程度乾燥した後、粘土円筒を分割し、丸瓦側面の凹面側に分割截面、凸面側に分割破面が残る。

その後、生瓦を乾燥、焼成して完成にいたる。

（3）平瓦

調査した平瓦は2点である（標本55・57：図21、図版10-1・2）。法量は表3の通り。いずれも凹面には横方向に幅3~5cmの粘土紐縦ぎ目、縦方向に幅3.0~3.5cm程度の枠板を横に連ねた圧痕が残り、枠板連結棒を使用した粘土紐桶巻きづくりである。凸面には横ナデ、広端から10cm程度の範囲に縦ナデの痕跡が残るが、わずかに縦方向の縫目がみえる部分がある。凹面はほぼ全面にわたり布压痕が残るが、広端から幅5.0cm程度の範囲に横方向のヘラケズリの痕跡が残る。広端付近は、凹凸両面からの調整によって若干薄くなっている。

側面の凹面側には、工具による幅0.5~1.0cm程度の分割截面があり、工具を広端側から狭端側に向かって動かした痕跡が残る。側面の凸面側には分割破面が残る。ただし片側の側面のみ、側面全体が破面となっているものがある（標本57）。側面全体が破損した可能性もあるが、粘土円筒分割時に切り込みを入れた部分で割れなかった、あるいは屋根に葺く際などに平瓦の幅を調節するために人为的に割った、などの可能性も残る。横断面の形状から、粘土円筒を4分割した可能性が高い。狭端は横方向のナデないしケズリ、広端は横ケズリをほどこす。

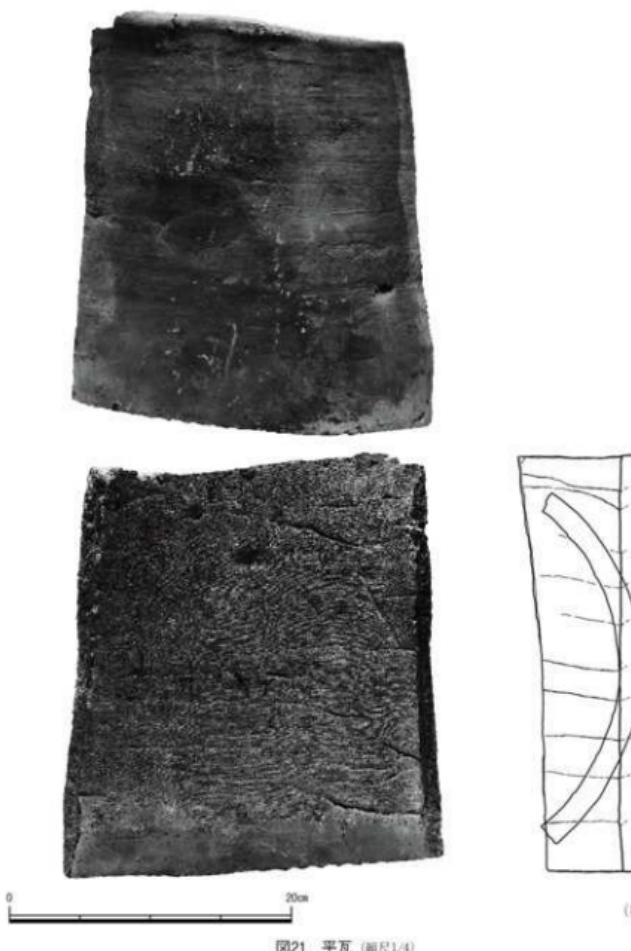


図21 平瓦 (面尺1/4)

広端の凸面側には、幅1.0~1.5cm程度の指頭によると思われる多数の押圧痕、押圧波状文が認められる。うち1点は押圧痕がほぼ隙間なく残り（標本55：図版10-3）、もう1点は1.5~2.0cm程度の間隔を空け、押圧痕が薄く残る（標本57）。押圧痕は広端凸面側のはば全体におよぶが、分割によって分断されたものはない。したがって、施文は粘土円筒を分割した後におこなわれた可能性が高い。施文の際、平瓦の狭端を下に向か固定したか、

あるいは成形台上に横向きに置いたかのいずれかの状態であったと考えられるが、痕跡が残らないため不明である。

復元される標準的な平瓦の製作技法は以下のようなものである。

① 粘土円筒の成形

細い枠板を列ねた桶状の枠板連結模骨に布をかぶせ、粘土組を積み上げないし巻き上げて粘土円筒を作る。凸面には縦繩叩きをほどこしたのち横ナデ、さらに広端付近にタテナデをほどこして表面を調整し、繩叩きの痕跡を消す。粘土円筒の内部に布が付着した状態で模骨を取り除き、つぎに布を粘土円筒からはがす。

② 粘土円筒の分割

粘土円筒内部にヘラ状工具を入れ、広端側から狭端側に向かって切り込みを入れる。一定程度乾燥させた後、粘土円筒を4分割する。分割後、広端に指頭押圧による押圧波状文を施す。

その後、生瓦を乾燥、焼成して完成にいたる。

なお、凸面の付着物には注目すべきものがある。1点の平瓦凸面には、広端から11.0cm付近に白色の付着物が認められ、ほぼ同じ位置に幅1.0cm弱の横方向の赤い線が長さ16cmにわたって付着し、一部、白色付着物の上にのる（標本57：図版10-4）。この赤い線は、その位置や範囲からみて、日本の軒平瓦凸面の頸部付近に認められる、いわゆる「朱線」と同じく、瓦座や茅負などの建築部材に塗られた赤色顔料が瓦に付着したものと考えられる。すなわち、この平瓦は押圧波状文をほどこした広端を軒先に向けて軒平瓦として使用され、広端側を11.0cm程度、瓦座の役割を果たす部材から出して葺かれたことを示している。また、白色付着物は建物の壁に塗られた漆喰などの可能性もある。これらの付着物は、金嶺寺遺跡の建物のなかに、白壁で朱塗りの建物が存在した可能性を示しており、建物の格、性格を知るうがかりになるものと考えられる。これらの付着物に対して、蛍光X線分析などの理化学的な材料分析がおこなわれることを期待したい。

（4）そのほか

このほか、文字瓦が2点、軒平瓦が1点出土している。文字瓦のうちの1点は、平瓦凸面の狭端ないし広端付近にヘラ状工具で文字を刻したヘラ書き瓦である（図版4-5）。端部側を下に向ける場合、まず、左から右へ平行に4本の横画を入れる。一番上の横画が一番長く、2番目、3番目の横画は徐々に短くなるが、一番下の横画を長く延ばし、ちょうど、「三」の一番上に最も長い横画を足したようになる。つぎに、4本の横画を貫くように、上から下（端部側）に向かって縦画を入れている。平瓦としての特徴は他の平瓦と共通しており、凸面に横ナデをほどこし、凹面に布压痕を残す。模骨痕や粘土離ぎ目は認め

られない。端部は横ナデをほどこし、凹凸両面との間に狭い面取りをほどこす。

このほか、「報告」には「令使」のヘラ書きを刻む瓦が記載されているが、未見である。

軒平瓦は瓦当面に三ないし四重弧文をほどこしたのち、上から2番目の弧線上に櫛状工具を用いた右上がりの刻みをほどこし、瓦当下部を下から押しつぶしたような、いわゆる「コイル状」とよばれる圧痕が残る（図版4-3）。段頸風で頸部裏面は緩やかな曲面をなす。「報告」には未掲載である。遼代ごろまで下がるものであろう。

3. 先行研究との比較

王飛峰氏により、三燕時代の軒丸瓦の詳細な研究がおこなわれていることは冒頭で触れたとおりである（王飛峰2012）。王氏は軒丸瓦の製作技法についても詳細に検討しているので、ここでその内容を説明し、われわれの調査成果と比較検討したい。

王氏は、軒丸瓦の製作技法の分析に当たり、遼寧省文物考古研究所の協力により三燕時代の軒丸瓦の標本を調査したと記しており、その成果に基づき製作技法の分析、製作工程の復元をおこなったとしている。調査対象とした資料について具体的な記載がないため、金嶺寺遺跡出土軒丸瓦のみを対象としたのか、それ以外の資料も対象としているのかなどに関しては不明であるが、その製作技法に関する記載内容はわれわれの調査成果とほぼ共通しているといってよい。

王氏は、三燕時代の軒丸瓦の製作技法の主な特徴として、瓦当嵌め込み（「套接法」）により瓦当部粘土を接合すること、円筒不要部切り離しにより軒丸瓦を作成することを示した後、以下のような工程を復元する。なお、内容を理解しやすく、かつ検討しやすくするため、王氏の記載の順に箇条書きにして番号を付ける等の変更をおこなった。この変更により王氏の論の意図がかえって正確に伝わらないようであれば、筆者の責に帰する。

（1）粘土の選択（「選料和泥」）

胎土、色調、焼成は「泥質灰陶」で大きい砂粒を含まず、均質なものを選択する。在地の土質と一致し、地元で取れた粘土を選択している。

（2）瓦当部粘土製作（「制作当面」）

① 篦を使って施文する。瓦当部粘土は外縁以外の円形部分（「圓餅部分」）である。瓦当裏面に手の圧痕が残ることから、瓦当部粘土製作時は篚が下、粘土が上の向きである。

② 瓦当裏面に叩き（「拍泥法制」）をほどこす。不均等に圧力がかかり瓦当面にヒビや割れが生じたものがある。

（3）瓦当嵌め込み（「套接筒形器」）

① 「泥条盤築」^⑥によって製作した粘土円筒に瓦当部粘土を篚ごと嵌め込む。このと

き、すでに玉縁部（「瓦舌」ないし「瓦唇」）が作られている。

- ② 范ごと嵌め込むため、瓦当外縁の高さは基本的に范の厚さと同じになる。
 - ③ 粘土円筒の製作は、麻布をかぶせた模骨の周囲に粘土紐を巻き付ける（「平行盤築」）。
 - ④ 粘土円筒の広端と玉縁部を除く狭端の直径はほぼ同じである。
- （4）円筒不要部切り離し（「切除筒形器」）
- ① 粘土円筒完成後、模骨を取り外し、円筒不要部を切り離す。切り離した半円筒は単独の丸瓦に、瓦当部粘土が連接したもう一方の半円筒は、軒丸瓦の丸瓦部になる。
 - ② 円筒不要部切り離しには、竹、木ないし金属製のヘラ状工具（「刀具」）を用いる。
 - ③ 粘土円筒半截は、円筒の内側からおこなう。
 - ④ 粘土円筒半截の切り込みと瓦当裏面下半の突帯上面切り離しの切り合い関係は、両方がある。工人の習慣によって異なる。
 - ⑤ 粘土円筒半截は瓦当部側からおこなう。
 - ⑥ 瓦当裏面下半の突帯上面切り離しの切り込み方向は、左右両方がある。工人と切られた円筒の相対位置による。右手で切ったか、左手で切ったかの違いである。
 - ⑦ 粘土円筒半截の切り込みの深さは、器壁の1/2、1/3程度。瓦当裏面下半の突帯上面切り離しは、全体を完全に切る。
 - ⑧ 円筒不要部切り離しは、粘土円筒の一定程度乾燥後で、完全に乾燥する前におこなう。

（5）乾燥、焼成（「晾干焼制」）

これらの検討を踏まえ、王氏は、三燕時代の軒丸瓦の突帯上面切り離しに竹・木ないし金属製のヘラ状工具を用いる技法は、従来の技法と明確に異なり、三燕時代の軒丸瓦に独特なものである、とする。

王氏が指摘する製作技法の痕跡、それを基に復元された製作工程は、おおむねわれわれの調査成果と一致しており、王氏の分析の正確さを物語っている。しかし、われわれの調査成果と異なる点もあるので、以下に列挙する。

（1）、（2）-②について、金嶺寺遺跡出土のそれぞれの瓦の胎土がほぼ一致することは確認したが、地元の粘土の情報をもっていないので不明である。瓦当裏面の叩き（「拍泥法制」）については意味を解しがたい。われわれの調査では、瓦当裏面には指頭によると思われる圧痕による微妙な凹凸が多数残ることから、指頭によるナデないし押圧によって瓦の上に粘土を押し付けて瓦当部粘土を形成した、と考えた。

（3）-④について、すでに説明したとおり、われわれが調査した資料は、粘土円筒の広端から玉縁部に向かってわずかに直径が細くなっていくものが多く、王氏の指摘とは異なる。

(4) - ①については、誤読かと思い何度も原文を読み返したのであるが、王氏は、(3) 瓦当嵌め込みの工程と、(4) 粘土円筒から模骨を外し、円筒不要部を切り離す工程を明確に分けて (3) → (4) の順に記述しており、工程の先後関係としては、模骨が中に残ったままの粘土円筒と瓦当部を接合し、粘土円筒を半截しない状態で模骨を外す、と理解するしかない。王氏の復元案の根拠となる資料がどこかに存在し、われわれはその資料を調査していない、と考えるしかないので、これ以上のコメントは差し控えたい。

(4) - ③・⑤・⑦については、金嶺寺遺跡出土軒丸瓦の筒部側面にはヘラケズリがほどこされ、分割截面、分割破面のいずれも残らないため、軒丸瓦については、粘土円筒半截の切り込みの方向、深さは不明である。筒部側面に残るヘラケズリ痕跡を、一度に円筒を切断した分割截面と考えた場合、切り込みの深さは側面全体を完全に切断する深さとなることや、粘土円筒外側から切り込んだ痕跡を残すものがあることから、王氏の説明とは異なる。王氏が説明する切り込みの深さに近いものとしては、瓦当側面に残る浅い切り込み痕跡があるが、これは粘土円筒外側から、瓦当部側に向かってほどこされている。

なお、王氏が三燕時代の軒丸瓦の独特な方法とした、突端上面をヘラ状工具によって切り離す方法であるが、こうした技法は楽浪城出土軒丸瓦にも認められることが指摘されており（井内潔1976。中村氏による軒丸瓦の接合技法分類のA3a式。中村2012）、三燕時代の独特な方法とは言い難い。このことは、後述するように、金嶺寺遺跡出土瓦の技法が楽浪地域の影響を受けた可能性を示唆するてがかりとなる。

以上のように、王氏による三燕時代の軒丸瓦の製作技法復元案は、われわれの調査成果と異なる部分がある。しかし、王氏が調査対象とした三燕時代の軒丸瓦の標本の内容が不明である以上、われわれが調査していない資料を根拠としている可能性も考えられる⁽⁷⁾。ぜひとも、王氏には調査対象とした瓦を具体的に明らかにされることを希望したい。今後、機会があればさらに類例の調査をおこない、以上にあげたような疑問点についてさらに検討を加えたい。

4.まとめ

(1) 金嶺寺遺跡出土軒丸瓦の位置づけ

軒丸瓦の出土点数からみて、金嶺寺遺跡所用の主な軒瓦がII A・II Bであることはほぼ確実である。また、軒丸瓦、丸瓦については、製作技法がほぼ同じであり、平瓦についても基本的な製作技法は共通する。また、胎土、焼成、色調の特徴も一致する。したがって、これらの瓦の製作に当たったのは同じ系譜を引く技術をもつ工人集団であり、單一もしくはごく少数の工房による製品である可能性が高い。おそらく、製作期間もそれほど長くなく、短期間に生産されたものであろう。全ての軒丸瓦において范傷が相当進行しているこ



図22 朝陽古城北大街出土Ba型（上）と
金嶺寺遺跡出土II A（下：標本36）

とも注目され、金嶺寺遺跡のために新たに作られた范ではなかったことが推測される。おそらく、范傷が少ない段階の同范瓦の供給先が別に存在するものと考えられる。

先述のとおり、遼寧省文物考古研究所が2003～2004年に実施した、朝陽古城北大街の発掘調査では、三燕時代の龍城宮城南門と推定される遺構を検出するなど大きな成果があり、3～6世紀の軒丸瓦が出土した。まだ正式な報告書が刊行されていないため、詳細な情報は不明であるが、出土した3～6世紀の蓮華文軒丸瓦の一部について、2006年に万雄飛氏、白宝玉氏が報告をおこなっている（万雄飛・白宝玉2006）。この報告によれば、「朝陽北票の金嶺寺建物跡でB型からE型に分類される蓮華文軒丸瓦のうちのB型については、「朝陽北票の金嶺寺建物跡でB型と完全に一致する蓮華文瓦当が出土している」（万雄飛・白宝玉2006:310頁）とされている。

掲載されている写真から判断する限り、朝陽古城北大街で出土した軒丸瓦の「Ba型（04CL③:3）」は本稿におけるII Aと極めてよく似ており、一部の范傷の位置も一致するので、同范である可能性がきわめて高い（図22）。ただし、掲載されている写真では、金嶺寺遺跡出土のII Aのすべての個体に認められる范傷が生じていないようにもみえる。同范関係および范傷進行の確定には实物照合による詳細な調査が必要であるが、もし、これが事実であれば、朝陽古城北大街出土Ba型は金嶺寺遺跡出土II Aより確実に古い段階の製品となる。少なくともII Aについては、范傷の少ない段階の供給先の一つが龍城であった可能性が考えられ、本来は龍城への供給を目的として范が作成された可能性もある。

万雄飛氏、白宝玉氏によれば、龍城における大規模な築城活動はおもに3回あり、前燕の341年に龍城築城、後燕の397年から407年にかけて龍城の大規模な改修と拡張、さらに北魏の熙平二年（517）に大規模な補修がおこなわれたとされている。このうち、「B型」は前燕あるいは後燕の時代のものとされている。金嶺寺遺跡出土軒丸瓦のII Aは、龍城へ供給された「Ba型」と大きく隔たらない時期に製作されたと考えられ、范傷進行が確定できれば、その前後関係も把握可能である。II Aは金嶺寺遺跡出土軒丸瓦のうち主要な種の一つであり、その製作年代は、金嶺寺遺跡の時期をうかがう上で重要な位置を占める。朝陽古城北大街の正式な調査報告書の刊行が俟たれる。

(2) 金嶺寺遺跡出土軒丸瓦の特徴

金嶺寺遺跡出土軒丸瓦の製作技法について分析をおこなってきたが、注目される点や特徴的な部分のみ、列挙しておく。

① 文様、範について

- ・文様を彫りつけた円形の木製範によって施し、多数の範傷が生じていること。
- ・範は瓦当外縁内側まで瓦当外縁にはかぶらないこと。
- ・文様は、六弁蓮唐文を1本の幅線で区画し、幅線から派生した複雑な幾何学文を配するものがほとんどであるが、四弁蓮唐文を3条1組の幅線で区画するものも混じること。
- ・瓦当外縁の外側、丸瓦部側面（および玉縁部先端）に指頭によると推定される押圧をおこない施すこと。
- ・龍城に比定される朝陽古城北大街から、同范品である可能性の高い資料が出土していること。

② 製作技法について

- ・丸瓦部の成形は、模骨を使用した粘土紐巻き付けないし積み上げによること。
- ・基本的な製作は、模骨を取り外した粘土円筒に瓦当部粘土を接合した後に、粘土円筒を半截し不要部分を切り取る円筒不要部切り取り式によること。
- ・瓦当部の接合は、瓦当部粘土を粘土円筒に嵌め込んでおこない、瓦当外縁は丸瓦部広端で作ること。瓦当部粘土の下に范が残ったままの状態で、上から粘土円筒をかぶせるように嵌め込んだと考えられること。
- ・粘土円筒内側の広端付近にヘラ刻みをほどこすなどして加工し、瓦当部粘土嵌め込み前に接合部補充粘土を貼り付けること。
- ・接合部補充粘土を瓦当裏面側に密着させるための加工はおこなわれず、隙間が空くものが多いこと。
- ・瓦当外縁上面に粘土継ぎ目が認められるものが多いこと。
- ・瓦当部粘土嵌め込み後、瓦当外縁内側にナデツケをほどこすものがあること。
- ・円筒不要部切り取りには、粘土円筒半截、円筒不要部先端切り離しのいずれにもヘラ状工具を用いること。

この瓦が龍城造営の4世紀中頃以降に製作されたとすると、中国のはとんどの地域の軒丸瓦はすでに、半截した丸瓦部に瓦当部粘土を接合する半截丸瓦接合式を採用している。井内潔氏、井内功氏、谷氏、中村氏らは、楽浪郡には円筒不要部切り取り式が存在するとし、中村氏は、313年の楽浪郡滅亡後、魏晋期にも在地土器工人により技術が存続したと想定している（井内潔1976、井内功1977、谷1984、中村2012）。また、瓦当部粘土嵌め込みの

製作技法についても井内潔氏、井内功氏、谷氏は樂浪郡に存在することを指摘している（井内潔氏による「瓦当嵌め込み法」。井内潔1976。谷氏によるA2技法。谷1984）⁽⁸⁾。金嶺寺遺跡出土軒丸瓦の製作技法は、樂浪郡と何らかの関係が推定されよう。しかし、瓦当部粘土嵌め込み前に粘土円筒内側に接合部補充粘土を貼り付け、嵌め込み後に瓦当裏面の隙間を密着させるための工夫をおこなわない点は、いまのところ類例を見出すことができず、きわめて特徴的なものといえる。この点は三燕時代の遼西地域の瓦製作技術の系譜を考えるうえで貴重な点がかりとなる。

軒丸瓦の文様については、蓮瓣文が高句麗に多くみられ、遼西地域から高句麗に伝わったとする説と、その逆の流れを想定する説がある。この点については、遼西地域の軒瓦の事例が増加した段階で検討することしたいが、少なくとも、金嶺寺遺跡出土軒丸瓦のように、蓮瓣文間に複雑な幾何学的文様を加えたものは、現時点では遼西地域に限定されるようである。製作技法と同じく、この文様の特徴も遼西地域の瓦の系譜を考えてがかりとなる。

平瓦凸面の付着物が注目されることはすでに説明したとおりである。平瓦の広端に押圧波状文をもつ瓦は、軒平瓦として使用された可能性が指摘されてきたものの、具体的にどの位置に使用されたのか明らかではなかった。今回、凸面に建物の一部に塗布したと考えられる付着物を確認した。押圧波状文をもつ広端を軒先に向かって、軒平瓦として使用されたことを具体的に示す物的証據となる。

なお、金嶺寺遺跡の区画塀周囲や石槽から「紅彩白灰」が出土しており、田立坤氏は「彩絵」（壁画？）が存在した可能性を指摘する（田立坤2014）。「紅彩白灰」の状態や出土量などが詳らかでないため「彩絵」の有無については不明であるが、少なくともその一部は、建築部材に塗られた顔料や壁に塗られた漆喰などである可能性がある。

以上、金嶺寺遺跡出土軒丸瓦について、その製作技法を中心に検討をおこなった。その後の検討にも耐えるよう、写真、模式図を極力多用し、製作技法を復元した根拠となるべく具体的に示すよう心がけたつもりである。一方で、遼西地域やその周辺地域の資料数が少なく類例との比較検討が不十分であるため、從来から指摘されている高句麗の蓮瓣文軒丸瓦との関係や、遼西地域における軒丸瓦の製作技法や文様の系譜の追求、瓦の生産と供給の実態などは明らかにできなかった。また、瓦当文様を範ごとに分類し、範傷進行も確認できたのであるが、製作技法の変化がみられなかしたことや、他遺跡出土の同範例の確認ができなかったことから、分類を十分に活かすことができなかつた。積み残した課題はまだまだ多い。しかし、本稿が今後の遼西地域や周辺地域における瓦研究に幾許かでも寄与することができれば、望外の喜びである。

謝 辞 本稿をなすに当たっては、遼寧省文物考古研究所の李向東前所長、吳炎亮所長、李新全副所長、李龍彬副所長をはじめ、多くの方々のご協力を得た。末筆ながら、深甚の謝意を表したい。

註

- (1) 本稿は共同執筆者による遺物観察に基づく検討結果を清野がとりまとめたものである。
- (2) 高句麗で多く出土する、弁形が杏仁形や水滴形を呈する蓮華文について、安岳3号墳など高句麗壁画の壁面にみられる蓮華文の表現と比較し、蓮の蕾を横からみた状態をモチーフにした文様とみなして蓮華文とよぶことが一般的である。遼寧から出土する同様の弁形の蓮華文も、日本では蓮華文と称されている。本稿でも、既往研究との混亂を避けるため、仮にこの文様を蓮華文とよぶことにすると、遼寧の事例を蓮華文とよぶのが妥当であるかどうかは、本来、別途の検討が必要であると考える。また、弁がそれぞれ蓮の蕾を表すならば、そもそも「弁」と表現すべきではないが、本稿では説明の便宜上、「弁区」、「六弁蓮華文」などとよぶことにする。
- (3) 丸瓦部舞面全体が実は分割断面で、分割断面を残さず舞面を完全に切り離した可能性も残る。ただし、その場合、わずかな失敗もなく、すべての軒丸瓦について、粘土円筒をほぼ1回で半裁し、その後の調整の必要もほとんどなかったことになり、その可能性は低い。
- (4) 布を玉縁部側から抜いても、同様の痕跡を残すことがあり得る。しかし、布は口の広い広縁側から抜いた方がはるかに楽であり、合理的であると考えられる。
- (5) このほか、瓦当外縁の外側にも粘土を薄く貼り足したような継ぎ目が認められるものもある（標本11：図版8-4）瓦当外縫付近には複雑な調整がおこなわれたようである。
- (6) 王氏は「泥条盤築」と表現しているが、土器の製作技法と同様の技法、すなわち、模倣を用いて粘土糰を巻き上げつつ明き板と当て具を用いて表面を調整し、粘土円筒を成形する技法ではない。
- (7) 王氏の分析が金嶺寺遺跡出土瓦の観察に基づいているとすれば、軒丸瓦の丸瓦部と丸瓦を一部、混同している可能性があるのではないかとの印象を受ける。
- (8) 中村氏は、楽浪郡の軒丸瓦で谷氏A2技法と分類したものは、「緻密には別作りした丸瓦に瓦当を嵌め込んだものではない」とする（中村2012：98頁）。

引用・参考文献

〈日本文〉

- 井内功 1977「樂浪郡時代の造瓦に関する覚書」『井内古文化研究室報』18。
- 井内潔 1976「樂浪郡時代の標識的造瓦技法」『井内古文化研究室報』16。
- 今井見樹 2010「湖東式開連瓦2—中国における軒平瓦の変遷—」『古代瓦研究V』奈良文化財研究所。
- 大脇潤 1991「丸瓦の製作技術」『研究論集Ⅴ』奈良国立文化財研究所学報第49冊。
- 大脇潤 2005「老北京故宮甕紀行 東アジアにおける軒平瓦の変遷」『古代拱河泉寺院論叢集』第2集。
- 小池伸彦・川畠純・清野孝之・森先一貴・諫早直人 2014「遼寧省北票市金嶺寺遺跡及び大板營子出土遺物の調査」『奈文研紀要2014』。
- 谷豊信 1984「西晋以前の中国の造瓦技法について」『考古学雑誌』第69卷第3号。
- 中村亜希子 2012「瓦の東方伝播—樂浪瓦の再検討—」『中国考古学』第12号。
- 向井佑介 2005「押庄波状文平瓦の源流」『待兼山考古学論集一都出比呂志先生退任記念一』。
- 桃崎祐輔 2005「高句麗太王陵出土瓦・馬具からみた好太王陵説の評価」『海と考古学』海交史研究会考古学論集刊行会編、六一書房。
- 桃崎祐輔 2009「高句麗王陵出土瓦・副葬品からみた編年と年代」『高句麗王陵研究』東北亞研究財团企

画研究20。

遼寧省文物考古研究所編 2004『三燕文物精粹（日本語版）』奈良文化財研究所。

（中国文）

王飛峰 2012「三燕瓦当研究」『辽疆考古研究』第12輯。

辛岩・付興勝・穆啓文2010「遼寧北票金嶺寺魏晉建塔遺址發掘報告」『遼寧考古文集（二）』遼寧省文物考古研究所編。

田立坤 1996「襄城新考」『遼海文物學刊』1996年第2期。

田立坤 2014「金嶺寺建築址為“廟廟”說」『慶祝張忠培先生八十歲論文集』吉林大學遼疆考古研究中心編、

科學出版社。

万雄飛・白宝玉 2006「朝陽北大街出土の3～6世紀蓮華瓦當初探」『東アジア考古学論叢—日中共同研究論文集一』奈良文化財研究所・遼寧省文物考古研究所。

李新全 1996「三燕瓦當考」『遼海文物學刊』1996年第1期。

挿図出典

図1：遼寧省文物考古研究所編2004

図2：辛岩・付興勝・穆啓文2010

図3：著作作成

図4・6～10・17～21：写真－栗山雅夫撮影 図－著作作成

図5・11～14、巻末図版：写真－栗山雅夫撮影

図15：著作撮影

図16：著作作成

図22：上写真－万雄飛・白宝玉2006 下写真－栗山雅夫撮影

図23：著作作成

（図4、6～10、17～21はいずれも縮尺1/4）

表1 軒丸瓦各部計測表

型式	a.瓦当 直径	b.脊区 直径	c.中房 直径	d.外縁幅	e.外縁高	f.瓦当側 面幅	g.全長	h.玉縁長	重量	標本番号
I	171	123	44	14~17	15	30			0.707	標本16
II A		126	47	13					1.465	標本4
II A	174	127	47	15	15	27			1.328	標本8
II A	175	127	46	10~17	16	33			0.787	標本15
II A			43	13	14	39			0.781	標本18
II A	(175)	(124)	43	11	19	49			0.750	標本25
II A									0.332	標本26
II A									1.010	標本35
II A	169	129	46	15	18	30			1.107	標本36
II A				15	17	45			0.267	標本38
II A				16	18				1.406	標本39
II A				16	19	32			0.259	標本40
II A				15~17	18	38			0.326	標本42
II A				12	17				0.343	標本43
II A	162	128	44	10	13	39			1.041	L-02
II B	172	124	46	12~14	16	41	528	55	4.957	標本⑤
II B	170	125	48	8	16	35	557	61	4.936	標本1
II B	175			12	20	35			2.280	標本3
II B	176	126	51	16	19	32			1.471	標本7
II B	179	125	48	16	17	35			1.758	標本11
II B			(43)	15	18				0.546	標本20
II B			(46)	14	18				1.166	標本21
II B		131	48	12~14	17	25~32			0.693	標本24
II B				15	20	35			0.413	標本29
II B				20	18	31			0.213	標本41
II B				15	19	36			0.406	標本45
II B	178	125	48	15	19	30			0.721	L-01
II C	(174)	(135)	48	13	19	39			0.618	標本23
II C		137	48	13	20	43			0.714	標本32
II D	171	123	37	11	16				1.686	標本5
II D	173	123	39	12	15				1.557	標本10
II D	170	124	35	13	17	38			1.221	標本14
II D	(170)	123	39	11	18	40			0.839	標本22
II D	175	123	38	12	18	38			0.939	標本27
II D			38	15	14	32			0.428	標本33
II D	(172)	118	39	15	19	(43)			4.699	標本50
II E	175	126	(40)	13	19	35			0.824	標本17
II F	163	125	49	12~14	11	49	535	59	4.929	標本⑤
II G				13~15	19	33			0.241	標本31
II H	(173)	123	54	10~13	15				1.061	標本13
II H	(170)	123	54	11	17	35			0.519	標本19
II I	168	124	49	12	14	43			1.690	標本44
II J	170	123	52	9	19	38			1.702	標本9
不明							559	65	4.652	標本①
不明							543	47	4.704	標本2
不明				15	20	43			0.236	標本30

凡例: 型式名は「II型式A種」を「II A」のように表記。単位はmm、重量のみkg。()は復元推定値。

各部位の計測位置は次ページ下の図20参照。

表2 丸瓦各部計測表

型式	a.全長	b.筒部長	c.玉縁長	d.広端直徑	e.狭端直徑	f.厚さ	重量	標本番号
長	490	438	52	172	167	19~30	4.547	標本49
長	513	455	58	170	110	16	3.253	標本52
中	436	395	41	170	168	20~26	3.952	標本②
中	436	396	40	181	165	24~31	5.299	標本③
中	420	385	35	197	170	23~30	5.004	標本51
中	438	395	43	180	125	33~39	5.518	標本53
短	400	360	40	187	169	20~31	4.094	標本47
短	380	345	48	180	169	21~33	4.116	標本54
短	392	347	45	186	171	19~32	3.904	標本56

凡例：型式名は「長タイプ」を「長」のように表記。単位はmm、重量のみkg。各部位の計測位置は本ページ下の図23参照。

表3 平瓦計測表

a.全長	b.広端幅	c.狭端幅	d.厚さ	重量	備考	標本番号
441	400	351	19~25	7.729	押圧波状文が明瞭	標本55
461	392	350	24~29	8.020	凸面に赤・白色付着物	標本57

凡例：単位はmm、重量のみkg。各部位の計測位置は本ページ下の図23参照。

表4 ヘラ書き瓦計測表

残存長	残存幅	厚さ	重量	備考	標本番号
100	217	22	0.577	凸面狭端寄りにヘラ書き「奉」	標本46

凡例：単位はmm、重量のみkg。

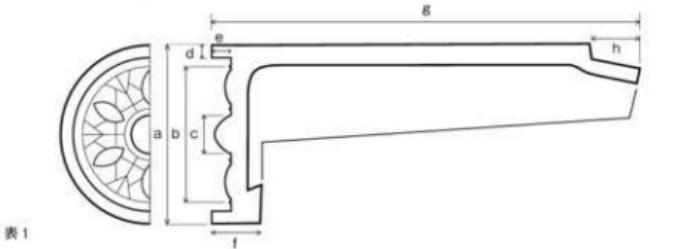


表1

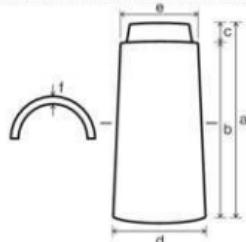


表2

表3

図23 瓦の各部位計測位置



1. I 型式 (標本16)



2. II 型式 A種 (標本L-02)



3. II 型式 B種 (標本11)

図版 1 金嶺寺遺跡出土 軒丸瓦 1



1. II型式C種（標本32 [標本34と接合]）



2. II型式D種（標本14）



3. II型式E種（標本17）

図版2 金蓮寺遺跡出土 軒丸瓦2



1. II型式F種（標本⑤）



2. II型式G種（標本31）



3. II型式H種（標本13）

図版3 金嶺寺遺跡出土 軒丸瓦3



1. II型式1種 (標本44)



3. 軒平瓦 (遠代か)

2. II型式仮J種 (標本9)



4. 瓦当外縁内側の状況 (標本⑤)



5. ヘラ書き瓦 (標本46)

図版4 金嶺寺遺跡出土 軒丸瓦4、軒平瓦、ヘラ書き瓦



1. 丸瓦部完存 (II型式B種: 標本1)

2. 丸瓦部完存 (II型式D種: 標本50)

図版5 金嶺寺遺跡出土 軒丸瓦 5



2. 丸瓦部完存、瓦当部剥離（型式不明：標本 2）



1. 丸瓦部完存、瓦当部剥離（型式不明：標本①）

3. 瓦当裏面、接合部の状況（標本 7）

図版 6 金剛寺遺跡出土 軒丸瓦 6



1. 瓦当部粘土の形状、瓦当裏面の痕跡（標本25）



2. 瓦当部粘土の形状、瓦当裏面の痕跡（標本16）



3. 瓦当部粘土の形状、瓦当裏面の痕跡（標本10）



4. 接合部補充粘土、丸瓦部凹面の加工（標本14）



5. 円筒不要部切り離し痕跡（標本44）



6. 円筒不要部切り離し痕跡（標本18）



7. 瓦当裏面下半の突堤上の切り離し痕跡（標本23）



8. 瓦当裏面と突堤上の切り離し痕跡（標本L-01）

図版7 金嶺寺遺跡出土 軒丸瓦7



1. 瓦当外縁内側と瓦当面のナデツケ（標本29）



2. 瓦当外縁内側のナデツケと范傷（標本44）



3. 瓦当外縁上面の粘土継ぎ目（標本25）



4. 瓦当外縁上面の粘土継ぎ目（標本11）



5. 瓦当外縁内側の指頭圧痕（標本15）



6. 接合部補充粘土の状況（標本⑥）



7. 外周囲線外側の范傷（標本17）



8. 瓦当裏面、接合部の状況（標本50）

図版 8 金様寺遺跡出土 軒丸瓦 8



1. 丸瓦完形（長タイプ：標本52）



2. 丸瓦完形（中タイプ：標本②）



3. 丸瓦完形（短タイプ：標本48）



4. 丸瓦部側面と凹面の状況（標本3）



5. 丸瓦広端の調整（標本56）

図版9 金嶺寺遺跡出土 丸瓦



1. 平瓦（標本55）



2. 平瓦（標本57）



3. 平瓦広端の凸面側の指頭押圧痕（標本55）

4. 平瓦凸面の付着物（標本57）

図版10 金峯寺遺跡出土 平瓦

三燕の金工品と倭の金工品

諫早直人

1. はじめに

金や銀を用いた金工品が、日本列島に本格的に出土しはじめるのは古墳時代中期、およそ5世紀のことである。金工品の出現自体は、福岡県三雲南小路遺跡出土の金銅製四葉座飾金具や山口県稗田地藏堂遺跡出土金銅製蓋弓帽など弥生時代中期にまで遡り、奈良県東大寺山古墳の金象嵌中平銘鉄刀や奈良県新山古墳から出土した金銅製晋式帶金具など古墳時代前期にも散見されるが、それらはいずれも中国からの舶載品と考えられている。それが古墳時代中期に入ると、出土量が急増し、その中には形態的特徴からみて舶載品とは考えがたいものが含まれるようになる。この時期に、単に製品の流入が活発化するだけなく、金工品を製作する技術自体が大陸から移転されたことについては、衆目の一一致するところであろう。しかし、それらの多くは大陸からも同じようなものが出土しており、古墳時代中期に本格的に出土しはじめる初期の金工品（以下、初期金工品と呼ぶ）のどこまでが舶載品で、どこからが国産品⁽¹⁾かの基準は、研究者によって異なる。一定数出土し、形態的特徴から多くの研究者が国産と考えるものは、眉庇付背くらいではなかろうか。

いすれにせよ古墳時代中期に始まったとみられる初期金工品生産に携わったのは、その高度な専門性からみて、この時期に大陸から海を渡ってきた渡来工人であったとみられる。彼らの故郷、ひいては技術移転の経緯を考える上で、初期金工品の品目が、人体に着装する服飾品（武器・武具を含む）と、馬体に着装する装飾馬具には限定されることは、重要である。現在の考古資料にもとづく限り、このような品目が一定数出土している地域は、周辺では東北アジア、すなわち中国東北部から朝鮮半島にかけてのほかに見出すことができない。金工品というモノやそれをつくる技術だけでなく、それが担った社会的役割（最終的に墳墓に副葬することまで含む）の共通性を踏まえれば、これらの地域で展開した金工品生産が、日本列島における初期金工品生産に直接的な影響を与えた可能性は、高い。

遼寧省文物考古研究所を中心に長年にわたって進められてきた発掘調査・研究は、この服飾品と装飾馬具を基調とする金工品文化が、三燕（慕容鮮卑）で最初に花開いたことを明らかにしてきた（田立坤・李智1994、遼寧省文物考古研究所2001など）。その成果は奈良文化財研究所との共同研究などを通じて日本にも紹介され（奈良文化財研究所ほか2006、飛鳥資料館2009など）、日本列島から出土する初期金工品の一部を三燕製とみる意見も提起され

ている（董高1995、桃崎2004、藤井2014：115–124頁、土屋2015など）。

ただ、離れた地域から出土した資料の比較には様々な障害があり、とりわけそれぞれの地域で別個に構築された暦年代観は、彼我の直接の比較を困難なものとしている。そこで本稿では、まず両地域から出土した金工品を共通の時間軸で議論するための年代的枠組みについて筆者の考え方改めて提示する。その上で、三燕の金工品を分析する際の視点として、筆者がこれまでに日本と韓国で進めてきた金工品製作技術、中でも彫金技術に対する調査成果を紹介する。そして最後に、現在までに公表されている資料から両地域の金工品の相違点と共通点を浮き彫りにしてみたい。今後、両地域の金工品を本格的に比較していくための基盤を整えることが、本稿の主たる目的である。

2. 年代的枠組み

複数の国が屹立した東北アジア各地の考古資料を横断して分析する際に、常に障害となるのが彼我の年代観の不一致である。細かな暦年代観を一致させることは難しいとしても、各地域で組み立てられた相対編年を併行させる作業は、必要不可欠と考える。筆者は以前、4・5世紀の東北アジア出土馬具の広域編年網を構築し、三燕の紀年墓出土資料をもとに暦年代を付与したことがある（諫早2008）。馬具は東北アジアの広範な地域から一定数出土し、その中に技術的・機能的発達という方向性で形態変化を把握できるものが含まれていることから、共通の指標で編年することが可能である。筆者は三燕の馬具を2段階、倭

の初期馬具を3段階に分けたが、それらの併行関係の鍵となるのは轡と木心輪鎧である。

まず轡についてみると、街の製作技法が、街身を複数の鉄棒を握ってつくる2條握り技法ないし3條握り技法から、1本の鉄棒でつくる無握り技法ないし1條握り技法へ変化していくことが日朝両地域で明らかくなっている（諫早2005）。前二者は鍛接をせずとも環部を成形できるのに対し、後二者は環部をしっかりとつくるためには鍛接する必要がある（図1）。すなわち前二者から後二者へという変化は、基本的に鉄加工

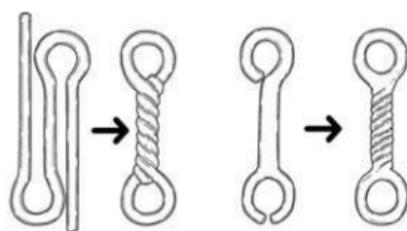


図1 3條握り技法（左）と1條握り技法（右）

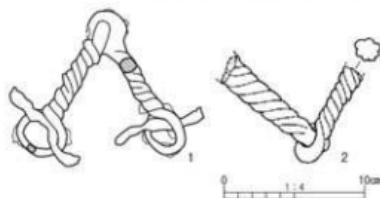


図2 三燕の轡（S=1/4）
1：南陽洞ⅢM101号墓 2：高素帝墓



図3 東北アジア出土馬具の製作年代 (S=1/16, 6-8は1/4)

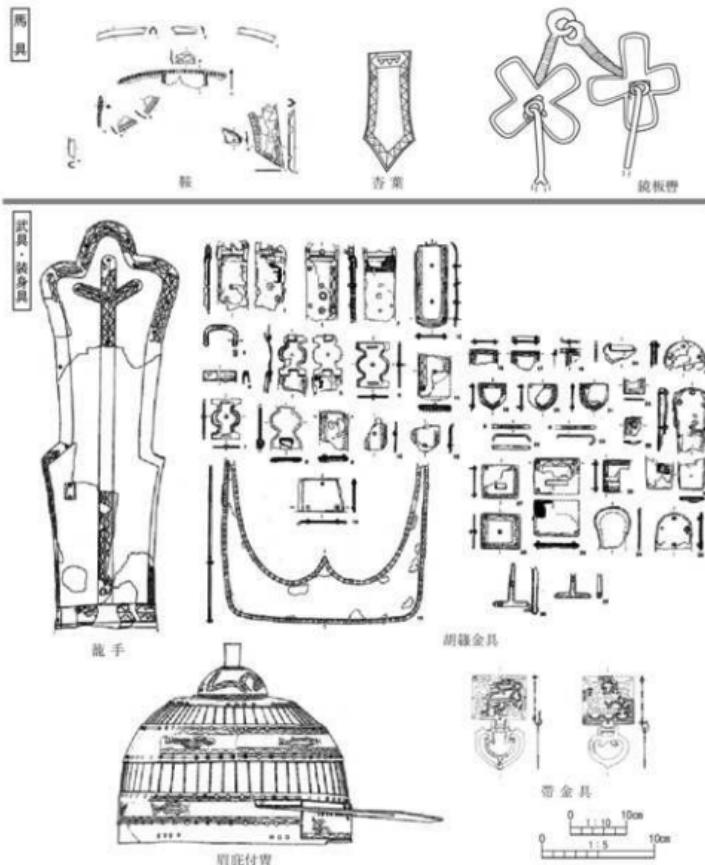
1・2：孝民毛154号墓 3・4：高素弗墓 5・6：禹山下3319号墓 7：七星山296号墓 8・9：太王陵
10・11：万宝町78号墓 12：禹山下20号木都墓 13：月城路か13号墳 14・15：皇南洞109-3・4号墳
16・17：皇南大塚南墳 18：行者塚古墳 19・20：七経古墳 21：瑞王寺古墳

技術の向上という観点で理解することが可能である。

このような変化は中国北方全体で普遍的に確認できるわけではないが、北票喇嘛洞墳墓群など三燕（慕容鮮卑）墓から出土する轡が基本的に前二者の技法でつくられていること（図2-1）、確実に北燕代に位置づけられる唯一の馬具出土墓である北票馮素弗墓（415年）から1條捩り技法でつくられたとみられる街⁽²⁾が出土していることは（図2-2）、日朝両地域との併行関係を考える手がかりとなる。

次に木心輪鏡についてみる。日本や韓国では、5世紀の木心輪鏡は柄部の短いものから長いものへと変遷することが早くから指摘されてきたが（小野山1966、申敬澈1985など）、三燕（慕容鮮卑）や高句麗では4世紀代からすでに長柄が存在し、短柄は馮素弗墓出土例（図3-4）のみである。韓国には短柄の鏡と長柄の鏡について、時期差ではなく系統差と捉える意見もあり（李熙濬1996など）、少なくとも東北アジア全体で同じように柄部の長さが変化するわけではないことは確かである。それよりも筆者が編年指標として注目したいのが、踏込部に滑り止めのために打ち込まれた踏込鉄（スパイク）の有無である。すなわち高句麗以東では、柄部の長短にかかわらず踏込鉄をもたないものとつものがあり、前者が先行して出現するのに対し、三燕（慕容鮮卑）では踏込鉄をもつものはまだ一例も確認されていない。

三燕馬具についての情報は依然断片的ではあるものの、これまでに公表された資料に関しては、日朝両地域の馬具に比べて、三燕（慕容鮮卑）の馬具が相対的に古い特徴を持っており、両地域の初期の馬具と対比される資料群であるということはいえそうである。こ

図4 月岡古墳出土品 ($S=1/5$ 、鞍は $S=1/10$ 、鏡板帯は縮尺不同)

のような広域で確認されるモノの変化、具体的には銜製作技法の違いや踏込鉄の有無などに基づいて設定した併行関係に、紀年墓出土資料によっておおよその暦年代を与えたものが図3である。

3. 倭の初期金工品生産

日本列島に金工品が本格的に出現するのは、馬具の出現に若干遅れる古墳時代中期中葉、上述の年代観にもとづけば5世紀前葉頃のことである。その品目に出現当初から日本列島

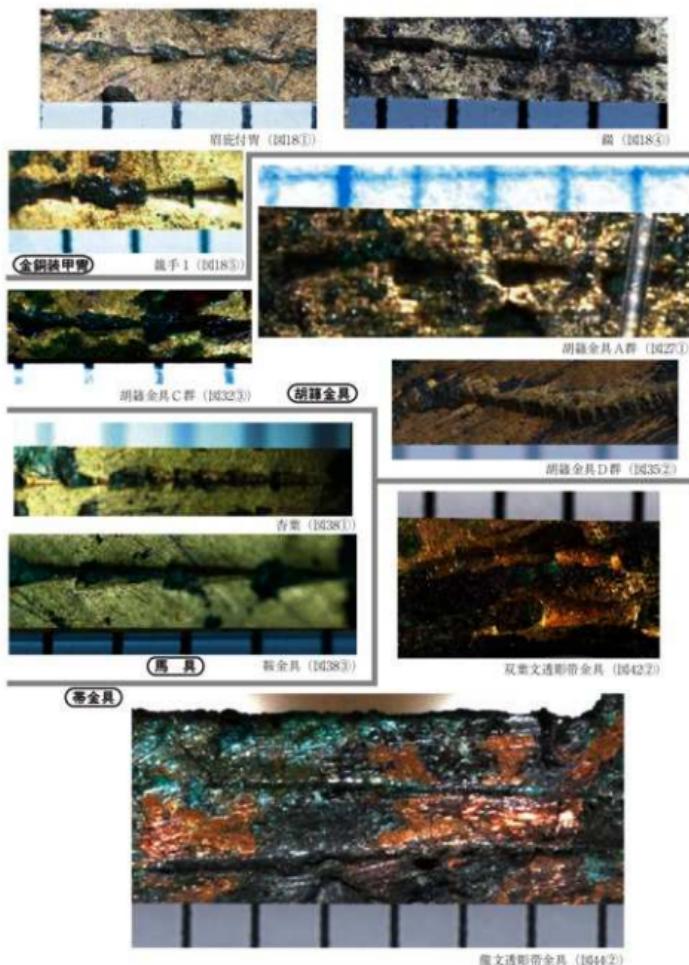


図5 月岡古墳出土品彫り一覧（約12倍、（ ）は報告書番号）

で製作されたと考えられる眉庇付冑（図4左下）を含むことから、舶載品の本格的流入と、工人の渡来を前提とする国産開始時期は、ほぼ同時であったようである。筆者らは初期金工品生産の実態を明らかにするため、最近、眉庇付冑をはじめとする初期金工品の一括資料である福岡県月岡古墳出土品（図4）（吉井町教育委員会2005）の彫金技術について詳細

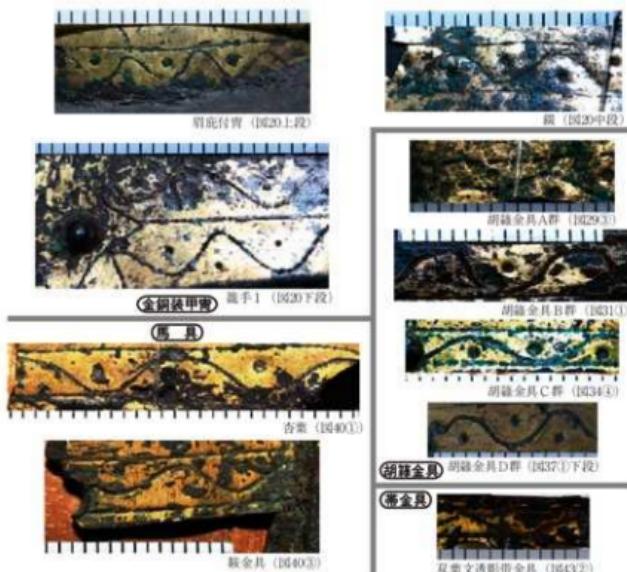


図6 月岡古墳出土品波状文一覧(約2倍、()は報告書番号)

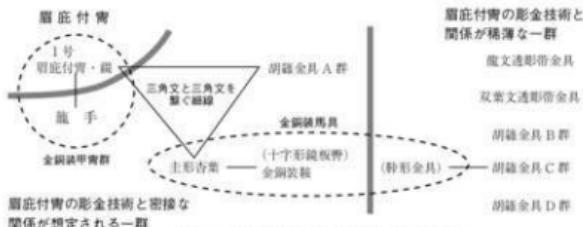


図7 月岡古墳出土金銅製品の生産体制

な調査をおこなったところ、各種金工品の彫金技術には精粗を含む「個性」があることがわかった(図5・6)(諫早・鈴木2015)。それらは、眉庇付冑を基準にすると「眉庇付冑の彫金技術と密接な関係が想定される一群」と、「眉庇付冑の彫金技術と関係が稀薄な一群」に大別できる(図7)。前者の間にも微細な差異はあり、一人の工人がそのすべてをつくったとは考えられないものの、眉庇付冑と近い製作環境で製作され、日本列島で製作された可能性が高いと判断される一群である。これに対し、後者は日本列島で製作されていないとは言いきれないものの、少なくとも前者とは異なる工房でつくられたと考えられる一群である。直接的な類例が新羅などからも出土していることをふまえれば、舶載品の

可能性も十分念頭に置く必要がある一群といえる。いずれにせよ古墳時代中期中葉に始まった初期金工品生産は、眉庇付冑のみをつくるような限定的な生産ではなく、生産規模はともかくとして、当初から多様な器物の生産をおこなっていた可能性が、極めて高い。

またここでは詳細な説明は省略するが、5世紀中葉頃の新羅王陵とみられる慶州皇南大塚南墳出土金工品などについても同様の分析をおこなったことがある（諫早2016）。皇南大塚南墳出土金工品も基本的には武器・武具を含む服飾品と装飾馬具からなり、両者の一部には同じ彫金技術が用いられている。倭と地理的にも近い新羅は、日本列島の初期金工品生産開始に直接的な影響を与えていた可能性が高く、今後、上述の観点で両地域出土金工品を比較することで当該期に起こった技術移転の実態が明らかとなることが期待される。

4. 三燕の金工品と倭の金工品—相違点と共通点—

三燕の金工品については、まだ上述の分析と同一水準の観察をおこなえていないが、彫金の施された金工品の一括資料は多数あり、それらを分析することで三燕における金工品生産体制を復元することはもちろん、他地域と比較することも可能である。ここでは現状で公開されている情報にもとづき、三燕と倭の金工品の相違点と共通点について整理し、今後の課題を明確にしておきたい。

まず相違点についてである。4世紀代を中心とする三燕と5世紀代の倭、という地理的懸隔に加えて時間差もある両地域の金工品の間には、組成はもちろん、同一器種間の形態や文様、製作技術、様々なレベルにおいて相違点を見出すことができる。ここでは、日本列島における金工品生産の始まりを考える上で、特に看過できない違いを二つだけ指摘しておきたい。その一つは「波状列点文」という彫金文様であり、もう一つは「毛彫り」という彫金技術である。

前者は古墳時代の金工品の主要な文様パターンとして、5・6世紀代を通じて盛行する彫金文様である。初期金工品の蹴り彫りは、蹴り彫りたがねによって波状文と直線文を、点打ちたがねによって列点文を施文する（図8）。この波状列点文は、日本列島と新羅や加耶、百濟など朝鮮半島南部で盛行するものの、中原には認められない「非漢的モチーフ」である（東1997：428）。高句麗ではまだ確認されておらず、三燕でも喇嘛洞墳墓群1988年採集品（田立坤・李智1994）に一例確認されるのみで盛行していた様子はうかがえないものの（図9-4）、類似した波状の周縁文様が散見され（図9-1～3）、東潮





図9 三燕の波状列点文とその類例 ($S=1/4$)
1:西瀬村採集品 2:孝民屯154号墓 3・4:南嶽洞墳墓群1988年採集品

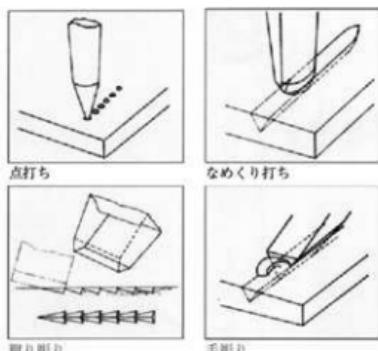


図10 線彫りの諸技法

である。日本列島の初期金工品の系譜を追究するにあたっては、これまで一部の金工品にみられる龍文表現などが注目されてきたが、今後はより広範な製品に施用されている波状列点文についても考慮する必要があることは確かであろう。

後者は日本列島では6世紀後半以降に普及する彫金技術である(鈴木2004)。過去には「蹴り彫り」と混同、あるいは一緒に扱われることもあったが、同じ線彫りでも「毛彫り」は素材を削りとる切削加工であり、素材を凹ませる塑性加工である「蹴り彫り」とは厳密に区別する必要がある(図10)。ただし、鎧に覆われた遺物から実際にそれを駆別することは容易でない。

も指摘するように波状列点文へと至る型式組列を想定することも可能である⁽³⁾(東1997:425頁)。

日本列島の龍文透彫帶金具を検討した藤井康隆は、波状列点文が製作技術や鉄具形状の異なる帶金具に横断して認められる文様であることから「時代・時期や製作地とは必ずしも直接関係しない」とみているが(藤井2015)、現状の分布をみると、東北アジアの金工品に特徴的な文様であることは、否定しがたい事実

たとえば晋式带金具の彫金については、もっぱら蹴り彫りとみる所見もあるが（藤井2014：99頁）、奈良県新山古墳から出土した金銅製晋式带金具（図版1～5）をみると⁽⁴⁾、鈴木勉がすでに指摘するように、鉤具や帶先金具、鉢板の線彫りは蹴り彫りであるのに対し、鉢板に伴う垂飾の線彫りは毛彫りである（図11）（鈴木2004：37頁）。本論からそれるため詳細な分析は別稿に譲るとして、今回改めて撮影をおこなった高精細の細部写真には新山古墳の晋式带金具に用いられた蹴り彫りたがね、毛彫りたがね、円文たがねという3つの工具の痕跡がはっきりと写っている（図版5）。

話を再び三燕に戻そう。藤井康隆は三燕墓から出土する晋式带金具の線彫りについてもすべて蹴り彫りとみるのに対し（藤井2014：119頁）、花谷浩は三燕の馬具の中に毛彫りを用いたものがあるとする（花谷2006）。同じ遺物に対する観察結果ではないため、どちらも成立する余地はあるが、それぞれの観察結果を客観的に検証しうる証拠⁽⁵⁾は提示されていない。

なお日本の出土事例ではあるが、三燕で製作された可能性の高い（桃崎2004など）岡山県伝柳山古墳出土龍文透金具（図版6）について、報告者である土屋隆史は鋳造後に文様を彫りくずし、鍍金をした上で毛彫りによって細部文様を表現しているとみており（土屋2015：159頁）、高精細の細部写真からもそのような観察結果をおおむね追認することができる（図12）。まだ実見を果たせていないが、同じような龍文透金具は北票倉釋密幕からも出土しており、その製作技術をうかがい知る貴重な知見といえる。三燕の金工品に蹴り彫りだけでなく毛彫りが用い



図11 新山古墳出土帶金具の毛彫り（10倍）



図12 伝柳山古墳出土龍文透金具の彫金

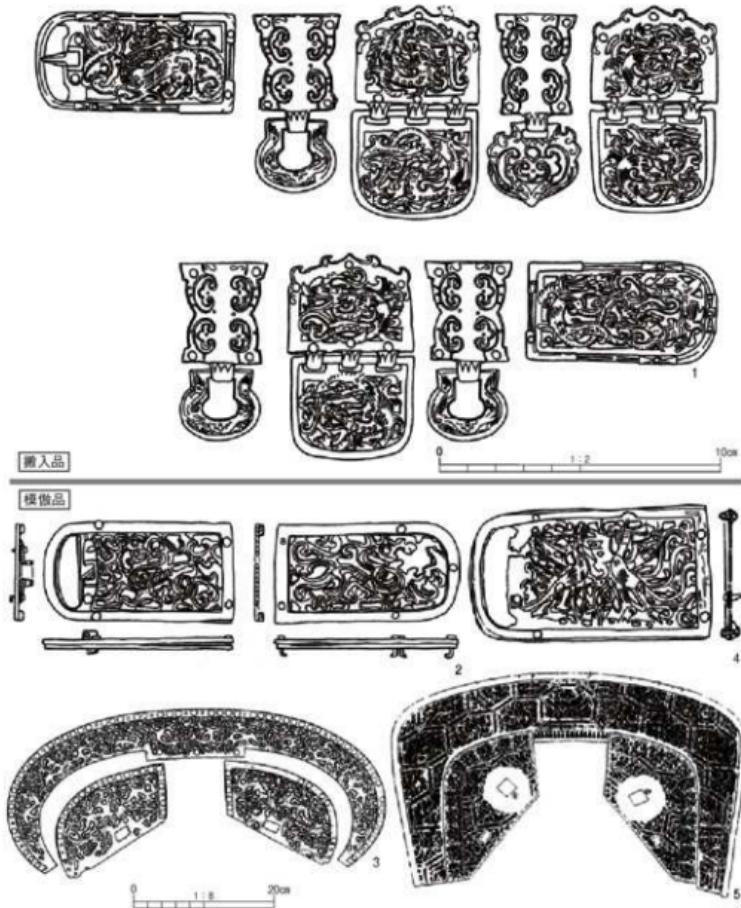


図13 三燕の番式帶金具と鞍（帶金具：S=1/2、鞍：S=1/8）
1：南麻洞II M275号墓 2・3：南麻洞II M101号墓 4・5：十二台郵便局SSM1号墓

られていたかどうかは、東北アジアにおける金工品の技術移転を考える上で非常に重要な問題であり、個々の遺物に対する基礎的な事実を検証可能なかたちで共有する必要がある。

共通点についても日本列島の金工品生産の始まりを考える上で特に重要な点だけ指摘しておきたい。一つは「同じ文様、同じ彫金技術でつくられた服飾品と裝飾馬具」の存在であり、もう一つは「鉄地金銅張」という技法の存在である。前者は直接的には人体を装飾

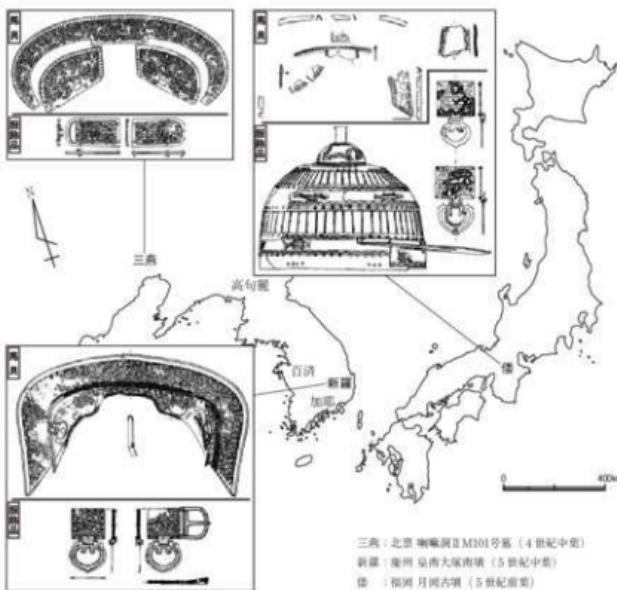


図14 東北アジア各地の着装型全工品と装飾馬具（縮尺不同）

する服飾品と飾馬に対する装飾馬具が同じ意図のもと、おそらくは同じ工房で製作されたことを示唆し、ひいては両者が一体となって表象する身分秩序の存在を暗示するものである。前燕建国前後の三燕（慕容鮮卑）で現れたこのようなり方は、少なくとも副葬品による限り、同時期の中原では確認できない。すなわち、町田章が西晋からの搬入品とみた帶金具は装飾馬具と共にせず、三燕で模倣製作されたとみた帶金具は同じ材質、意匠、装飾技法でつくられた装飾馬具をしばしば伴うのである（町田2006、諫早2012）（図13）。

また、彼らがもともと住んでいたとされるシラムレン川の北方から大興安嶺周辺にかけての鮮卑墓からも金銀装の装飾馬具は出土しておらず（宿白1984、魏堅2004、孫危2007）、装飾馬具（及びその副葬）は鮮卑の固有の文化でもなかつたようである。大谷育恵によれば三燕の服飾品は①三燕独自のもの、②六朝と共通するもの、③後漢以来の東北平原のもの、④内蒙高原側の系譜をひくものに大別されるが、上述の带金具はその中でも②に該当する（大谷2011）。中原（西晋）で成立し、将军号などの中国的官位制度と関わると考えられている晋式带金具に、騎馬遊牧民のアイデンティティたる騎乗用馬具を加えた、この胡漢融合の金工品様式を「三燕様式」とでも呼ぶならば、日本列島はその広がりの末端に位置する（図14）。

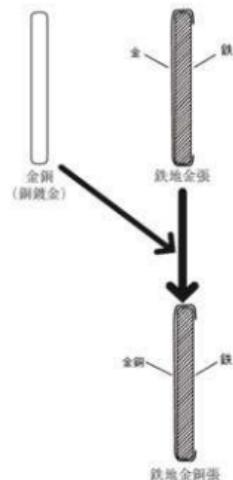


図15 鉄地金張技法の出現

後者は漢代に長城以北で散見される鉄地金張技法をベースとし、三燕における金銅製品の生産開始と軌を一にして出現したとみられる技法である（図15）。堅固な鉄を構造体しながら金張よりも遥かに少量の金で装飾することができる鉄地金張技法は、実用性と経済性を兼ね備えた装飾技法として、朝鮮半島や日本列島でも盛行するが、その創案地および出現時期は、桃崎祐輔が指摘するように前燕建国前後の三燕であったとみられる（桃崎2004）。

これらの共通点については日本列島の初期金工品と併行する時期の朝鮮半島にも確認できるため、ただちに三燕から倭へ直接伝わったと考えることは難しい。また、三燕ではまだ確認できない飾りや、盛行した様子のうかがえない装飾大刀などの存在からみて明らかのように、朝鮮半島および日本列島のすべての金工品の系譜が三燕に求められるわけではない。さらには百濟のように服飾品は卓越するものの装飾馬具は盛行しない地域もあり、各地域の様相は決して一様ではない。ただ、上述の共通点が三燕の故地である中国北方はもちろん、中原でもまだ確認されていない事実は、もっと強調されてよいように思われる⁽⁶⁾。東北アジア各地の金工品の地域性は、あくまで三燕を起点とする上述の共通性を前提とするのである。

5. おわりに

本稿では筆者のこれまでの研究を紹介しつつ、倭の金工品と三燕の金工品の相違点と共通点を整理した。倭を含む東北アジア各地の金工品は、決して一括りに論じることはできない多様性をもっているが、東アジア、さらにはユーラシアを巨視的に眺めれば、「三燕様式」とでも呼ぶべき一つの金工品様式圏として設定するだけのまとまりをもっている。それは服飾品と装飾馬具をセットでつくる点において、中原など周辺地域における金工品のあり方とははっきりと区別される。これまでに出土した考古資料による限り、三燕はその起点であり、倭はその終点である。

この三燕を起点とし、倭を終点とする技術移転の実態を明らかにするためには、出土資料から各地における初期金工品生産を復元し、比較する必要がある。本稿ではその際の重要な視点として彫金技術を取りあげた。報告書の写真や実測図からは読みとことのできない彫金技術の個性は、基本的には工人一人一人の用いる工具の違いや、作業姿勢、習慣などに起因し、製作所の明らかでない金工品の生産を議論する上で最も基礎的な単位とな

る。三燕（慕容鮮卑）墓出土金工品の徹底的な観察と記録、そして得られた知見を学界で共有する努力がこれまで以上に求められよう。すべては今後に残された課題である。

註

- (1) 本稿では倭の領域外からもたらされたものを舶載品、倭の領域内で製作されたものを国産品と呼ぶ。
- (2) 最近、刊行された報告書には「純状に握っている」という記述と実測図（図2-2）が示されるのみで、写真は掲載されていない（遼寧省博物館2015）。
- (3) 穴沢咲光（1990）や田立坤（1991）によって前燕の慕容儕が冉魏の首都鄆城を陥落させた352年、ないし鄆城に遷都した357年以降につくられた前燕墓と考えられていて、370年の前燕滅亡を下限とする安陽孝民屯154号墓出土杏葉の波状文が、典型的な波状列点文ではないことは（図9-2）、波状列点文の成立年代を考える上で一つの指標となる。
- (4) 新山古墳から出土した晋式帶金具は、今回宮内庁書陵部において栗山雅夫と調査・撮影をおこなった1886年出土品のはかに（梅原1921）、山中次郎氏田藏で、現在京都大学総合博物館が所有する勝形鈎が知られる（梅原1965）。
- (5) 彫金の工具痕（たがね痕）は1mmにも満たない場合が往々にしてある。客観的な証拠の提示には高倍率の写真が最も有効であろう。
- (6) 田立坤（2006）や町田章（2011）が想定するように、中原にも三燕の装飾馬具の痕跡となるような装飾馬具が存在した可能性は十分考慮されるべきである。ただ、皇帝が臣下に「金梁鞍橋」を下賜するという南宋代の記事などからみて（田立坤2006）、中国社会において装飾馬具は下賜の対象となる奢侈品であったとしても、「朝服武冠」のような身分制と直結するものではなかったとみられる。

謝 辞 本稿をなすにあたって、大谷育恵氏、金字大氏、栗山雅夫氏、鈴木勉氏、土屋隆史氏、向井佑介氏よりご教示をえた。また新山古墳出土帶金具、伝柳山古墳出土龍文透金具の調査・撮影に際しては、宮内庁書陵部の横田真吾氏に大変お世話になった。記して感謝したい。なお本稿には平成26~29年度科学研究費（若手研究B）「東北アジアにおける金工品の生産と流通に関する考古学的研究」の成果を一部含む。

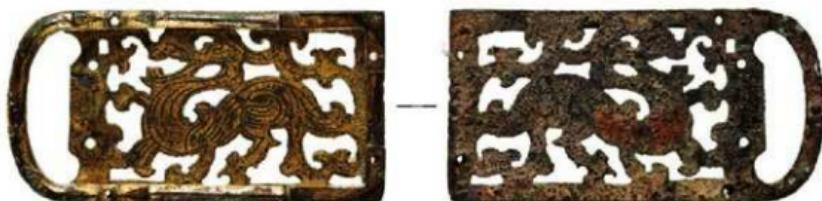
引用・参考文献

- 飛鳥資料館 2009『三燕文化の考古新発見 北方騎馬民族のかがやき』。
- 東湖 1997『高句麗考古学研究』吉川弘文館。
- 穴沢咲光 1990『五胡十六国の考古学・上』『古代学評論』創刊号、古代を考える会。
- 諫早直人 2005『朝鮮半島南部三国時代における轡製作技術の展開』『古文化談叢』第54集、九州古文化研究会。
- 諫早直人 2008『古代東北アジアにおける馬具の製作年代—三燕・高句麗・新羅—』『史林』第91卷第4号、史学研究会。
- 諫早直人 2012『東北アジアにおける騎馬文化の考古学的研究』、雄山閣出版。
- 諫早直人 2016『新羅における初期金工品の生産と流通』『日韓文化財論集Ⅲ』、奈良文化財研究所・韓国国立文化財研究所。
- 諫早直人・鈴木勉 2015『古墳時代の初期金銅製品生産—福岡県月岡古墳出土品を素材として—』『古文化談叢』第73集、九州古文化研究会。
- 梅原末治 1921『佐味田及新山古墳研究』、岩波書店。
- 梅原末治 1965『金洞透影龍紋帶金具に就いて』『考古学雑誌』第50卷第4号、日本考古学会。
- 大谷育恵 2011『三燕金属製装身具の研究』『金沢大学考古学紀要』Vol.32、金沢大学人文学類考古学研究室。

- 小野山節 1966「日本発見の初期の馬具」『考古学雑誌』第52巻第1号、日本考古学会。
- 魏堅（編） 2004『内蒙古地区鮮卑墓相の発現与研究』、科学出版社。（中）
- 申敬澈 1985「古式證子考」「釜大史学」第9輯、釜山大学校史学会。（韓）
- 鈴木勉 2004「ものづくりと日本文化」、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館。
- 孫危 2007「鮮卑考古学文化研究」、科学出版社。（中）
- 中国社会科学院考古研究所安陽工作隊 1983「安陽孝民屯晋墓發掘報告」「考古」1983年第6期、中国社会科学院考古研究所。（中）
- 田立坤 1991「三燕文化遺存の初步研究」「遼海文物学刊」1991年第1期、〈遼海文物学刊〉編集部。（中）
- 田立坤 2006「高橋鞍の復原及有關問題」「東アジア考古学論叢—日中共同研究論文集一」、奈良文化財研究所・遼寧省文物考古研究所。（中）
- 田立坤・李智 1994「朝陽発現の三燕文化遺物及相關問題」「文物」1994年第1期、文物出版社。（中）
- 土屋隆史 2015「伝柳山古墳出土の龍文透金具と鉤について」「千足古墳—第1～第4次発掘調査報告書一」、岡山市教育委員会。
- 薦高 1995「公元3～6世紀 蔡容鮮卑、高句麗、朝鮮、日本馬具之比較研究」「文物」1995年第10期、文物出版社。（中）
- 奈良文化財研究所・遼寧省文物考古研究所 2006「東アジア考古学論叢—日中共同研究論文集一」。
- 花谷浩 2006「三燕地域出土馬具について—鞍金具と轡を中心にして」「東アジア考古学論叢—日中共同研究論文集一」、奈良文化財研究所・遼寧省文物考古研究所。
- 藤井康隆 2014「中国江南六朝の考古学的研究」、六一書房。
- 藤井康隆 2015「志段味大塚古墳の帶金具」「平成27年度「歴史の里」シンポジウム 志段味大塚古墳の副葬品の調査・研究」、名古屋市教育委員会文化財保護室。
- 町田章 2006「鮮卑の帶金具」「東アジア考古学論叢—日中共同研究論文集一」、奈良文化財研究所・遼寧省文物考古研究所。
- 町田章 2011「前燕高橋鞍の検討」「勝部明生先生喜寿記念論文集」、勝部明生先生喜寿記念論文集刊行会。
- 桃崎祐輔 2004「倭国への騎馬文化の道—蔡容鮮卑三燕・朝鮮半島三国・倭国との比較研究—」「考古学講座 講演集」（『古代の風』特別号No.2）、市民の古代研究会・関東。
- 吉井町教育委員会 2005「若宮古墳群Ⅲ 月岡古墳」。
- 遼寧省博物館 2015「北燕馮素弗墓」、文物出版社。（中）
- 遼寧省文物考古研究所 2001「三燕文物精粹」、遼寧人民出版社。（中）
- 遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館・北票市文物管理所 2004「遼寧北票喇嘛洞墓地一九九八年発掘報告」「考古学報」2004年第2期、考古雑誌社。（中）
- 李熙瀧 1996「慶州 皇南大塚の年代」「嶺南考古学」第17号、嶺南考古学会。（韓）
- *中国語文献には（中）、韓国語文献には（韓）を末尾に付した。
- 挿図出典
- 図1・15：筆者作成
- 図2：遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館・北票市文物管理所2004、遼寧省博物館2015をもとに作成
- 図3：諫早2008を改変
- 図7・8：諫早・鈴木2015より転載
- 図5・6：諫早・鈴木2015を改変
- 図9：田立坤・李智1994、中国社会科学院考古研究所安陽工作隊1983をもとに作成
- 図10：鈴木2004より転載
- 図11・12：宮内庁書陵部所蔵（栗山雅夫撮影）
- 図4・13・14：諫早2012より転載



1. 晋式帶金具集合



2. 鉸具（等倍）



3. 帶先金具（等倍）

図版1 新山古墳出土晋式帶金具1



1. 鑄 1 (等倍)

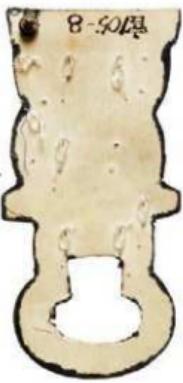
2. 鑄 2 (等倍)



3. 鑄 3 (等倍)

4. 鑄 4 (等倍)

圖版2 新山古墳出土晉式帶金具2



1. 鎏 5 (等倍)

2. 鎔 6 (等倍)



3. 鎔 7 (等倍)

4. 鎔 8 (等倍)

図版 3 新山古墳出土晋式帶金具 3



1. 銅9（等倍）

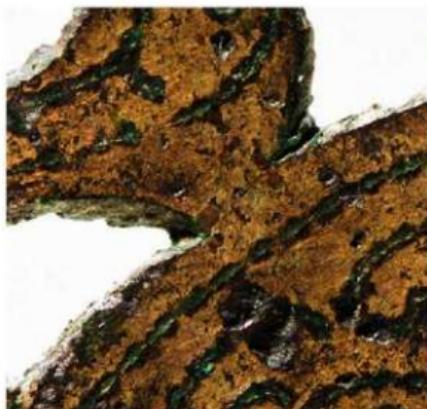
2. 銅10（等倍）



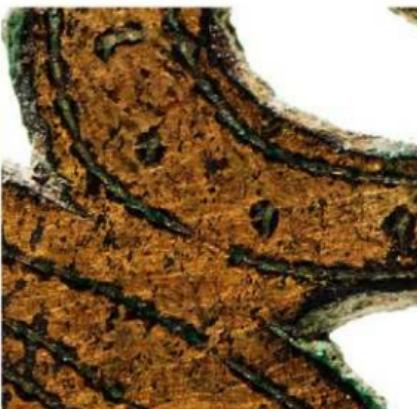
3. 銅11（等倍）

4. 銅12（等倍）

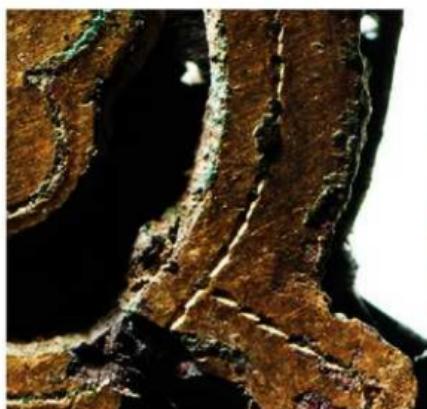
圖版4 新山古墳出土晉式帶金具4



1. 鉸具 跡影細部 (10倍)



2. 帯先金具 跡影細部 (10倍)



3. 鍛5 (鍛板) 跡影細部 (10倍)



4. 鍛5 (垂飾) 毛影細部 (10倍)



5. 鉸具 円文細部(10倍)



6. 帯先金具 円文細部(10倍)



7. 鍛5 (鍛板) 円文細部(10倍)



8. 鍛5 (垂飾) 円文細部(10倍)

図版5 新山古墳出土晋式帶金具5



1. 龍文透金具（等倍）



2. 龍1細部（左：頭部 右：体部）



3. 龍2細部（左：頭部 右：体部）

図版6 伝柳山古墳出土龍文透金具

漢～唐代の遺跡で出土した指輪とその出現背景

大谷 育恵

1. はじめに

今回の共同研究が対象とする東晋十六国期という時代について考えてみると、一時的に再統一を果たした西晋が再び八王の乱を契機に崩壊したことに始まる南北間の分断に加えて、華北地域では北から流入した北方諸民族を交えて政権が乱立し、興亡を繰り返した時期といえる。政治的には分裂期であり、新たな統合を模索した時期といえるが、物質文化の点からはどのような様相を窺うことができるかが興味である。筆者はこれまで金属を素材とした装身具を分析資料とし、現中国国内の資料を広域的あるいは時代横断的に集成することで淵源関係や新たな型式が出現する画期について考えてきた（大谷2011・2012）。前稿では服飾の観点から装身具を頭飾、耳飾、頸部飾、帯飾、牌飾の5種類に分類して考察したが、その際に考察していなかったのが指輪である。

先行研究をみると、指輪は異なる2つの着眼点から研究対象となっている。一方は指輪がどのような意義をもって使用されていたのかについて当時の風習、風俗に主眼をおいて考察したもので、文献史料中にみられる事例から婚姻などとの関係を考察した論考（黄正建2006）や、服飾研究の観点から漢代の出土資料を集めた考察（林巳奈夫1976）がある。もう一方は東西文化交流の観点から考古資料として考察したもので、貴石印信と呼ばれる画像を彫り込んだ宝石を象嵌した指輪が考察対象となっている（張慶捷・常一民2003、張慶捷2010、岩本2005a・b・2006）。したがって出土資料である指輪を考察する場合、外米の特殊資料としての位置づけがある貴石印信指輪については検討されたことがあるものの、中国⁽¹⁾における指輪にどのようなものがあったのかについては、全体像が示されていない。そこで本稿は中国が分裂する以前の漢から再度統合された後の唐にわたる長い期間を設定して考察する。該当時期の指輪を集成した後には、非中国系資料の貴石印信指輪の特殊性や流入に関連する時代画期も明らかになるはずである。

以下本稿で対象とする指輪はその形態から指輪であると判断できるものに限定する。すなわち金属線を環状に形作っただけの小環は耳飾にもあり、出土状況が分からなければ判断できないためである。

2. 指輪の分類

指輪は装飾が施される部位の違いから2種類に大別した。指輪Aは指にはめる環の表面全体を装飾した指輪である。それに対して指輪Bは輪の特定の位置に装飾部が付き、見せるべき中心位置が決まっている指輪である。

(1) 指輪A

環の外側の表面全体を装飾した指輪Aは、その装飾文様に刺突文と龍文の2種類がある。前者をaとc、後者をbとして分類した。

Aa型（指貫形の指輪） 指輪表面に刺突文を規則的あるいはランダムに施文しており、報告中でしばしば「頂針」（指貫）と呼称される指輪である（図1-1）。実年代の推定できる初出資料は江蘇省揚州市の宝女墩104号墓で、1周の刻み目列を入れた幅の細い指輪が出土している。この墓は広陵王墓と推定されており、下葬年代は居攝二年（7）以降である^{〔2〕}（揚州博物館ほか1991）。指貫形の指輪の場合は、陝西省華陰県の劉崎墓で出土した資料に後漢の陽嘉三年（135）以降の年代を与えることができる^{〔3〕}（杜葆仁ほか1986）。管見の限りでは、盛行期は後漢中晚期～三国期のようである。

Ab型（龍文指輪） 江蘇省南京市の上坊1号墓から出土した1点が該当する（図1-2）。報告では「2匹の首を交えて向き合う龍文を外側に彫影りし、龍眼内の象嵌は失われている」と記述されているが、写真では龍の額部分に各1点の象嵌があるように見える。上坊1号墓は築造されてから間もなく盗掘に遭っていたため出土遺物は多くなかったが、その規模は前室後室共に左右耳室を有する大墓で、設えも虎形の石棺座を備えるなど豪華であることからみて、呉末期の宗室諸王クラスの墓と考えられている（南京市博物館ほか2008）。

Ac型 全面を粟粒文で飾る点はAa型とした指貫形の指輪に似るが、幅広の部分がある指輪で、また環状につながっていないものが多い（図1-3）。Aa型よりは年代的に後出であるとみられる。

(2) 指輪B

環の1ヶ所に正面ともいべき装飾部が付いた指輪を指輪Bとした。装飾部の形状と嵌

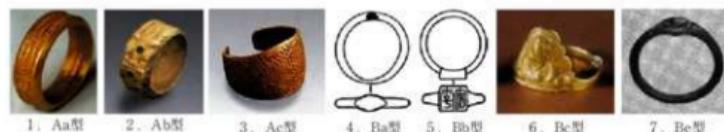


図1 中国出土の指輪（Aa～Ac型、Ba～Bc、Be型）

石の有無に従って、a～c、e～jの合計9型式に分類した⁽⁴⁾。

Ba型 環の一部に面を作り出した指輪である（図1～4）。面の内側がやや窪む指輪や、平坦面に小さな装飾を刻んだ指輪もある。管見の限りにおいて最も早い時期の資料は、広西壮族自治区貴港市の深釘嶺43号墓が前漢晚期（広西壮族自治区文物工作隊ほか2006）、広東省广州市の恒福路銀行療養院2期工地21号墓が前漢（馮永駿2005）とする。後漢～魏晋期の遺跡で出土例が多い。

Bb型（漢字印章指輪） 装飾部に漢字が刻まれた印章指輪である（図1～5）。

後漢の3ヶ所の遺跡で各1点が出土している。

Bc型 環の片側に突出する山形の装飾部がある指輪で、結跏趺坐する人物の表現がある（図1～6）。江西省の南昌火車站6号墓で4点（江西文物考古研究所ほか2001）、安徽省的盆山1号墓で1点（馬鞍山市文物管理所1990）が出土している。資料が出土した遺跡の年代は三国～兩晋である。

Be型 装飾部に小さな石を嵌めた指輪である（図1～7）。この指輪が出土した遺跡のうち最も年代が早いのは湖南省耒陽市の白陽渡29号墓で、後漢中期である〔衡陽市文物處ほか2008〕。良く知られている資料としては、8面体のダイヤモンドを象嵌した象山7号墓の指輪がある。男性を中央にして左右に女性の像が安置されており、指輪は男性像の中部で出土している（南京市博物館1972）。

Bf型 獣面形の装飾を持つ指輪である。内蒙古烏蘭察布盟的小壙子灘窖藏で1点が出土した（張景明2002）（図2）。キツネのような動物を正面から見た顔の形をしており、両目の象嵌のうち右眼のみに緑色の石が残っている。

Bg型 遼寧省北票県の房身村2号墓で出土した指輪をBg型とした（陳大為1960）（図3）。装飾部には角のとれた長方形の石1点を半円形の石2点で挟みこんだ構成を3つ並べている。またこの指輪は装飾部と環が接する指輪腕部が三角形に幅広くなっている。



小壙子灘窖藏
図2 Bf型指輪



房身村2号墓
図3 Bg型指輪



1. 美岱村1955年
北魏墓



2. 呼和浩特市郊



3. Pierre Uldry
collection

図4 Bh型指輪



481年
定県石函
図5 Bi型指輪



図5 Bi型指輪

にも菱形1つと三角形2つを組み合わせた象嵌が入る。この指輪の象嵌枠の周囲は金粒で装飾されている。指輪の石は5か所で残っており、長方形の石のみが緑色で、その他4ヶ所は藍色である。長方形の石の表面には刻み線があり、何らかの表現があった可能性もある。

Bh型 立体的な羊の造形が装飾部上に乗った指輪である。腕の部分はBg型と同じく三角形に幅広く、象嵌が入る。Bh型の指輪は3点あり、このうち2点は共に内蒙古呼和浩特市近郊の北魏墓で出土している。1点は1955年に同市郊外の美岱村北魏墓が破壊を受け発見された際の回収遺物である（李逸友1957）（図4-1）。2点目は美岱村北魏墓から東に約200mの所で1961年に発見された墓の回収遺物である（内蒙古文物工作隊1962）。報告では記述のみで図がないが⁽⁵⁾、呼和浩特市郊出土として展覧会図録に掲載されている指輪が存在し、この墓出土の指輪に該当するとみられる（図4-2）。

Bi型 河北省定州市⁽⁶⁾の華塔址で石函が出土し、その中から5657件の遺物が発見された。その中には2点の指輪が含まれており、Bi型とした。この定県石函の蓋には北魏太和5年（481）に孝文帝がこの地を行幸し塔を建てた事が刻まれており、これら遺物は舍利とそれを納めた石函であったことが分かる（河北省文物局文物工作隊1966）。指輪は共に装飾部に円形の石1点を嵌め、象嵌枠の周囲は菊花状である。環の表面も転彫りで装飾されており、1点は1列の円文列の両側を内傾する斜線文列で挟んだ文様構成、別の1点は三つ編み状の文様を刻んでいる（図5）。

Bj型 大きな宝石1点を中心とした指輪である。大きな宝石を支えるために腕部も太く、相対的に指輪は大型である。石には人物や動物の画像を刻んだものが多く、それについては貴石印掌指輪と呼ばれている。このBj型指輪については、以下出土遺跡ごとに詳細に見てゆく。

（3） Bj型指輪の諸例

苗圃20号墓 遼寧省遼陽市に所在する磚室墓である。男性1体を挟んで女性2体が埋葬されており、男性の遺体付近で銀製の指輪1点が出土した（遼寧省文物考古研究所2014b）。中央には透明度の高い石を象嵌する。両腕部上にも象嵌があり、この枠の周囲を金粒1列を並べて装飾している。その片方にはトルコ石が残っている（図6-1）。報告では前漢中晚期の墓としている。

湖東北魏墓 山西省大同市の南東に位置する湖東墓地において、2005年に調査された北魏墓より指輪1点が出土したという（張慶捷2010）。象嵌された石は残存していなかったが、窪みは長さ13mm、幅9mm、深さ4mmあり、楕円形の石が嵌められていたらしい（図6-2）。

呂達墓（北魏：正光五年（524）卒葬）呂達墓は黄河北岸の河南省洛陽市吉利区で発見され

た（洛陽市文物工作隊2011）。青色の石を嵌めた指輪（C9 M315：51）が出土している。石には片足を後に90°跳ね上げ、両手も肘から先を上に向かた人物が刻まれている。嵌石の周囲には金粒を1列並べている（図6-3）。

李希宗・崔氏合葬墓（東魏：武定二年（544）葬） 李希宗・崔氏合葬墓は河北省石家莊市に所在する（石家莊地区革委会文化局文物发掘組1977）。出土した指輪1点は藍灰色の石を嵌めた指輪で、嵌石枠の周囲は2周の金粒列で囲んでいる。報告では石に刻まれた文様を鹿1匹としているが、四足獸と三叉の枝の先に蓄のついた植物のモチーフとすべきであろう（図6-4）。

李賢・吳輝合葬墓（北周：天和四年（569）合葬） 李賢・吳輝合葬墓は寧夏回族自治区固原市に所在する。青色の石を嵌めた指輪1点が出土した（寧夏回族自治区博物館ほか1985）（図6-5）。石に彫られた人物は両手を挙げて、両端に袋状の物がついた弧線をつかんでいる。報告では出土位置から妻の吳輝の所用物とする。

徐顯秀墓（北齊：武平二年（571）卒葬） 徐顯秀墓は山西省太原市に所在する。金製と銀製の指輪が各1点出土しており、銀製の指輪（資料414）がBa型、金製の指輪（資料413）がBj型の指輪である（太原市文物考古研究所ほか2003）。象嵌された宝石はトルマリンと鑑定されている。宝石には歩行しているかのような人物の側視像を刻んでおり、人物は両手に1つずつ持ち物を持つ。前側の手には下側に2本棒を貫いたようなもの、後方の手は下端に尖る表現のある棒をつかむ。象嵌枠の周囲には金粒列が一周巡っている。嵌石台を支える両腕は獅子のような獸頭だが、頭部以下は鱗状の表現である（図6-6）。

史君・康氏合葬墓（北周：大象二年（580）葬） 史君墓は陝西省西安市に所在する。指輪に象嵌された石はトルコ石（緑松石）で、長方形の上辺を斜めに広く切り落としたバゲットカットである。石を嵌める嵌石台の両側面にV字状の陰刻がある（図6-7）（西安市文物保護考古所2005、西安市文物保護考古研究院2014）。

李靜訓墓（隋：大業四年（608）卒葬） 李靜訓墓は陝西省西安市に所在する。墓誌の記載から李靜訓の外祖母は楊堅の長女にして北周宣帝皇后の楊麗華で、彼女に養育されていたが幼くして亡くなったことが判明する（唐金裕1959）。この墓からはトルマリンをペンダントトップとする豪華な首飾りが発見されており、その留金具は指輪の転用ではないかと推測されている。青色の宝石には鹿の画像が彫られている（図6-8）。

史射勿墓（隋：大業六年（610）葬） 史射勿墓は寧夏回族自治区固原市に所在する。指輪1点が出土したが石は欠失しており、金製の本体部分のみが残っている。穴の形状から円形に近い平面形の石を嵌めていたと思われる（図6-9）（寧夏文物考古研究所他1992、羅農1996）。

史訶耽・張氏合葬墓（唐：咸亨元年（670）葬） 史訶耽は史射勿の子であり、同じ小馬庄

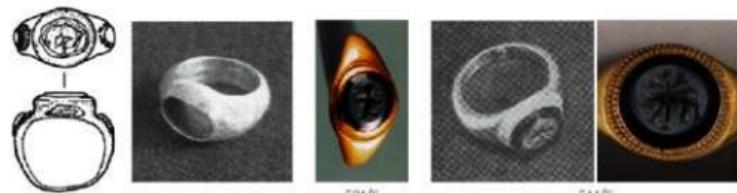


図6 BJ型指輪

村の史氏墓地中にある。出土したのは藍灰色の石のみである（図6-10）（羅豈1996）。平面には獅子1頭と、獅子の背上位置に三叉の枝の先に蕾のついた植物が刻まれている。外周にはパフラヴィー語の銘文が刻まれており、様々な仮説案が示されている^[7]。

美岱村北魏墓 内蒙古呼和浩特市郊外の美岱村北魏墓で貴石1点を象嵌した指輪が出土したという（張慶捷2010）^[8]。指輪の両腕部分は獸頭形で、緑色の石を嵌めた嵌石枠の周囲は連珠紋で装飾されているという（図6-11）。

畢克齊鎮北朝墓 内蒙古土默特左旗で工事中に人骨と共に金銀器が出土し、回収された遺物のうち2点が指輪であった（内蒙古文物工作隊ほか1975）。2点共にBj型の指輪で、1点は黒に近い深紫色の厚みのない石が面から突き出るような形で嵌められている（図6-12）。別の1点は画像のある黒色の石を象嵌した指輪である（図6-13）。画像は歩行しているかのような人物の側視像で、一方の手は前方に伸ばし、背後に何かを担いでいる。同時に出土した金銀器の中には東ローマのレオI世期（457～474）の金貨があることから、文成帝の太和三年（474）以降の年代を与えることができる。しかし同時に回収された遺物の中には高足銀杯と翼状の頭部飾もあり、総体的に考えると6世紀以降の北魏末～北朝期の墓とするのがふさわしい。

杏園1902号墓 河南省偃師市の杏園1902号墓から指輪1点が出土した。指輪の出土位置は被葬者右手であった。石はやや不整形な椭円形の紫水晶で、パフラヴィー語で「pd」（abd：驚愕、驚嘆の意）と刻まれている（図6-14）（中国社会科学院考古研究所河南二隊1996、森本1996）。

朱倉1号墓 河内省洛陽市孟津県の北魏墓群のうちの1基で、銀製の指輪が出土した。石は失われている。

3. 各型式指輪の出現とその文化的背景について

以上において、漢から唐代の遺跡で出土した指輪について資料を集め、分類を行った。合計12型式に分類したことになるが、このうちいくつかの型式の指輪については出土する遺跡の分布に偏りがある。

Aa型指輪は後漢～魏晋期の墓で出土する指輪のうち、最も一般的な指輪である。それに対してBa型指輪は、遼寧省遼陽市の馬圈子3号墓のように遼東でも出土例があるが（大連市馬圈子漢魏晋墓地考古隊1993）、特に後漢頃の早期の資料が東シナ海に面した広西、広東省、あるいは湖南省に多い傾向が見られる。同様の傾向は小さな石を1点象嵌したBe型指輪においてもみられる。これら型式の指輪の発生起源を華南周辺とするか外來とするかは意見の相違があると思われるが、同地域での分布は南海を通じた交易に関係するとみられる。東晋においては、Be型の指輪で有名な資料に、江蘇省南京市の象山7号墓で出

土した8面体のダイヤモンドを象嵌した指輪がある。象山墓地は東晋の有力豪族の一角である琅琊王氏の墓地であり⁽⁹⁾、同7号墓からはガラス杯2点、象山1号からは鸚鵡貝に金鉢を施した杯が出土しており（南京市文物保管委員会1965）、東晋貴族の奢侈品の中に南海を通じた交易によって入手したとみられる資料があることが注目されている。

Bbとした漢字印章指輪については、長江中流域の後漢の遺跡に資料が集中する。

そしてBc型の指輪については、長江中下流域の両晉期の遺跡で出土している。この指輪については、後漢頃から四川省以下長江流域一帯で指摘されている、神仙図像と混淆した仏教図像、そして仏教の南伝ルートとの関わりが指摘できる（大谷2015）。

これに対して、Bf～Bj型の指輪は華北以北の遺跡でいずれも出土している。1点を1型式とした場合も多く、これらについては淵源や分布を考察することはできないが、三燕の遺跡である房身村2号墓で出土した指輪と呼和浩特市近郊の北魏墓で出土したBh型の指輪をみると、大型化や太い腕部上の象嵌などに同時代的な共通する要素もみられる。

Bj型指輪については、先行研究で指摘したとおり、張慶捷と岩本篤志の論考がある。張慶捷は発掘を担当した徐顥秀墓の貴石印章指輪について当初検討しており（張慶捷・常一民2003）、後に資料を増補し加筆している（張慶捷2010）。張慶捷はまず徐顥秀墓の指輪について詳細に観察し、連珠文、腕の2匹の向かい合う獸、宝石に刻まれた画像は中原の伝統様式でなく、いずれも西域由来の要素とみた。そして新疆を含む現中国国内の遺跡から出土した大型の宝石を象嵌した指輪を集め、これらの指輪についてソグド商人の手を介して中央アジア・シルクロードを経由して流入したものと指摘している。また宝石に刻まれた画像については、徐顥秀墓の指輪の画像はヘタクレスなどギリシャ・ローマ神話の登場人物と関係がある可能性、バクトリア銀貨やスキタイ国王の銀貨肖像にあるゼウスの特徴との類似を指摘し、製作年代が比較的古いのではないかとした。そしてこのような指輪をギリシャ文明が中央アジアに伝わり、ソグド藝術と結合したのち東伝してきた証拠として位置づけた。これに対して岩本は、徐顥秀墓の指輪の入手経路、すなわちソグド商人の手を介して中央アジア・シルクロードを経由して流入したという張慶捷の見方については妥当なところとする。しかし貴石に刻まれた画像の来源と位置づけは張慶捷と意見を異にしている。氏は、北朝隋唐期の貴石印章のはばすべてがササン朝領域内で発見された印章と「同じ」画像を用いており、その多くがゾロアスター教の神像であるとの見解を示した（岩本2005a・b・2006）。すなわち氏の見解は、張慶捷のギリシャ・ローマの貴石印章を用いる文化がユーラシア大陸を長時間かけて東漸してきたという見方を否定し、同時代に西アジアで用いられていた印章もしくはほぼ同等のものが流入しているというものである。画像と神像の同定については今後の課題であるものの、筆者は最も自然な解釈である岩本の見解に同意する。



図7 北魏墓と西方の要素のある出土資料

Bj型とした指輪のうち、画像をもつ貴石印章指輪については以上のような見解があるが、Bj型指輪の中には画像を持たない指輪も存在する^[30]。画像を持たないBj型指輪についても、史君墓で出土していることからみてソグド人との関連が指摘される。Bj型指輪を非中国的要素を持つ資料と仮定した場合、いつの段階から中国へ流入しているのかという点が問題となる。現在のところ、Bj型指輪の最古例は遼寧省瀋陽市の苗圃20号墓である。墓の年代については前漢中晚期と報告されているが、追葬の影響を含めて前漢末以降に下がる可能性を検討すべきと考える。この指輪については、腕部に粒金を施す点などから非中国的な要素を指摘できるが、類例を指摘できない。漢代の粒金を施した資料としては、

打出し式の龍文帯鉢具があり、新疆焉耆県のカラ・シャールや遼寧省大連市の營城子76号墓、朝鮮平壤の石巖里9号墓と、漢の領域内外縁地で出土している。苗圃20号墓出土のBj型指輪については、これら後漢代の粒金製品との関連の検討が重要である。

次に古いBj型指輪は山西省大同市の湖東北魏墓出土の指輪である。山西省大同市は拓跋珪が皇始三年（398）に盛樂から平城に遷都して以来、孝文帝による太和18年の洛陽遷都まで約100年間都が置かれていた。そのため大同市近郊には多くの北魏墓地が分布し、これら北魏平城期の墓から金銀器、ガラス器、耳飾など、中央ユーラシアから伝來した遺物が出土することが明らかになってきている（図7）。その理由としては、延和三年（433）に北涼の沮渠蒙遜が死亡して以降、北魏は北涼に対する支配を強めており、太延五年（439）には北涼を滅ぼして西域へと通じる河西回廊を支配下に置いたことが大きいと考えられる⁽¹¹⁾。

4. おわりに

本稿は中国で出土した漢から唐代にかけての指輪について考察した。指輪は指輪Aと指輪Bの2種類に大別した後、前者を3型式、後者を9型式に分類した。そしてその後、各型式の指輪の分布にみられる特徴と、各型式の指輪が出現する背景等について考察した。Bc型、Be型の指輪については、海のシルクロードともよばれる南海の交易と関連する可能性を指摘した。そして、Bc型指輪については蜀から長江下流域あるいは南海を通じた仏教伝来に関連する資料であることを指摘した。これらが漢から魏晉期にかけての現中国南半でみられた現象であったのに対して、Bf～Bj型は中国北半でみられる動向と関連する。1点については後漢代の資料であるが、2点目のBj型指輪は北魏平城期に出現しており、この時期に開始し、以降隋唐へとつながってゆく中央ユーラシアとの交易に関連することを指摘した。

以上散漫ではあるものの、中国出土の指輪について検討した。指輪を資料とした研究としては、今後は新疆以西の草原地帯に分布する、いわゆる民族移動期の資料の位置づけが課題であると考えている。

註

- (1) 本稿において中国と言う場合には、西域にあたる新疆維吾爾自治区を含めない。新疆出土の指輪に関する著者はotani (2015) 参照。また、本稿では漢～唐代の資料について検討するが、唐代の資料については前代より継続する型式の指輪のみをとり上げている。
- (2) 宝塚104号墓からは紀年銘のある漆器が出土しているが、上限年代は大泉五十が鋳造された居振二年（7）である。広陵國は新の始建国元年（9）に廢されている。
- (3) 墓からは「劉崎之印」「司徒之印章」が出土し、被葬者は『後漢書』卷6、孝順孝沖孝質帝紀などに記載のある劉崎と推定されている。劉崎は陽嘉三年（135）に司徒の職を辞しており、没年はそれ以後

- 降となる。
- (4) Bd型については欠番とする。
- (5) 「金指輪 1点。上にトルコ石を嵌め、表面は被損しており、元は動物形の装飾であったようだ。1955年に発見された北魏墓出土の指輪に似る」(内蒙古文物工作隊1962)。
- (6) 報告当時は定県であったが、定州市に改変されている。
- (7) 銘文の訳説については、林梅村(1997)、羅豐(2004)、郭物(2015)があり、意見が一致していない。意味の方を各案列記すると、林梅村は中国語で「自由、繁榮、幸福」、羅豐は中国語で「世界寛容！世界寛容！」(訳説：山内和也)、郭物は英語で「pious」の3回繰り返し(訳説：Rezaaibaghbidi, M. B. Vosooghi, Amuzegarの3名)とする。ただし山内によると、「世界寛容！」と訳説したもの、二度の繰り返しは認められても、三度繰り返すには1文字足りないという。
- (8) 張慶捷は、この美岱村北魏墓の指輪に関する出典として内蒙古文物工作隊(1962)と内蒙古文物工作隊編(1964)を挙げている。後者は前者を再収録しているため前者原報告の記述が重要だが、内蒙古文物工作隊(1962)の金製指輪1点の記述は上記註5の通りであり、Bh型指輪と思われる。実際に呼和浩特市郊出土というBh型指輪もある(図4-2)。したがって美岱村北魏墓出土というこの指輪については出土遺跡に関する典拠が不明である。
- (9) 象山墓地のうち、墓誌の出土から以下7基は被葬者と埋葬上限年代が判明する。象山1号墓は王興之・宋和合葬墓(永和四年(348)合葬)、象山5号墓は王闢之(升平二年(358)葬)、象山3号墓は王丹虎(升平三年(359)葬)、象山8号墓が王允之(太和二年(367)葬)、象山9号墓は王建之・劉昭子合葬墓(成安二年(372)葬)、象山11号墓は王康之・何法登合葬墓(太元十四年(389)葬)、象山6号墓は王彬の繼室夫人の夏金虎(太元十七年(392)卒)。被葬者不明の象山7号墓の年代は東晉早期である。
- (10) 画像のある資料と画像のない資料でBj型指輪を二分するという考え方もあるが、石を欠失している場合には判断できないため、一括するのが妥当と考えている。
- (11) 太延元年(435)2月には蠕蠕に加えて初めて西城の烏賛と車駕諸国が北魏に対して遣使朝獻しており、同年6月には高麗と部善國、同年7月には粟特國が同じく初めて遣使朝獻している。(『魏書』卷4上世祖太武帝肅)
- (12) 題名は「沙子灘」になっているが、文中で遺跡名は「砂子灘」と記載されている。
- (13) この論考は張慶捷・常一民(2003)を再録したと書かれているが、実際には新たに図版を加えて書き直されている。

引用・参考文献

<日本語・中国語>

岩本篤志2005a「北朝隋唐期の貴石印章とその用途—ソグド人・ササン朝との関係をめぐって—」『東アジア:歴史と文化』第14号、新潟大学東アジア学会。

岩本篤志2005b「徐顯秀墓出土貴石印章と北齊政権」『史論』27号、早稲田大学東洋史懇談会。

岩本篤志2006「中国・北朝隋唐期の貴石印章とソグド人(補章)ユーラシア大陸における印章と東西交流」『環東アジアセンター年報』1。

内蒙古文物工作隊1962「内蒙古呼和浩特美岱村北魏墓」『考古』1962年第2期。

内蒙古文物工作隊編1964「呼和浩特市美岱村北魏墓」『内蒙古文物資料選輯』内蒙古人民出版社。

内蒙古文物工作隊・内蒙古博物館1975「呼和浩特市附近出土の外国銀鏡」『考古』1975年第3期。

大谷育志2011「三燕金銅製装身具の研究」『金沢大学考古学研究室紀要』32号、金沢大学人文学類考古学研究室。

大谷育志2012「漢・北魏期における耳飾の展開とその画期—中国北辺を対象とした金属製装身具の研究

- (1) —「山口大学考古学論集」中村友博先生退任記念事業会。
- 大谷育恵2015「仏像が表現された金属製装身具」「金沢大学考古学紀要」36号、金沢大学人文学類考古学研究室。
- 郭物2015「固厚史洞耽夫妻合葬墓所出宝石印章图案考」「考古與文物」2015年第5期。
- 河北省文物研究所2009「河北考古重要发现：1949-2009」化学出版社。
- 河北省文物局文物工作隊1966「河北定縣出土北魏石函」「考古」1966年第5期。
- 韓立森・朱岩石・胡春華・岡村秀典・廣川守・向井佑介2013「河北省定州北魏石函出土遺物再研究」「考古学集刊」19、科学出版社。
- 黃正建2006「唐代の指輪」「7・8世紀の東アジア：東アジアにおける文化交流の再検討」、大阪経済法科大学出版部。
- 江西省文物考古研究所・南昌市博物館2001「南昌火車站東晉墓群發掘簡報」「文物」2001年第2期。
- 廣西壯族自治区文物工作隊・貴港市文物管理所2006「廣西貴港深釘儲漢墓發掘報告」「考古學報」2006年第1期。
- 衡陽市文物處・耒陽市文物局2008「湖南耒陽白洋渡漢晋南朝墓」「考古學報」2008年第4期。
- 国家文物局主編2002「中国文物地图集」内蒙古自治区分册、西安地图出版社。
- 国家文物局主編2006「中国文物地图集」山西分册、中国地图出版社。
- 湖南省博物館1965「長沙南郊沙子塘漢墓」「考古」1965年第3期。⁽¹²⁾
- 湖南省博物館1984「湖南資興東漢墓」「考古學報」1984年第1期。
- 山西大學歷史文化學院・山西省考古研究所・大同市博物館2006「大同南郊北魏墓群」科学出版社。
- 西安市文物保護考古研究院2014「北周史君墓」文物出版社。
- 西安市文物保護考古所2005「西安北周涼州龐寶史君墓發掘簡報」「文物」2005年第3期。
- 石家庄地区革命委员会文化局文物发掘組1977「河北贊皇東魏李希宗墓」「考古」1977年第6期。
- 曾布川寛・岡田健責任編集2000「世界美術大全集」東洋編3三国・南北朝・小学館。
- 太原市文物考古研究所・山西省考古研究所2003「太原北齊徐顯秀墓發掘簡報」「文物」2003年第10期。
- 中国社会科学院考古研究所河南二隊1996「河南偃師杏園村唐墓的發掘」「考古」1996年第12期。
- 中国社会科学院考古研究所洛陽發掘隊1963「洛陽西郊漢墓發掘報告」「考古學報」1963年第2期。
- 張慶捷2010「北齊徐顯秀墓外來宝石戒指及其社會背景」「民族匯聚與文明互動—北朝社會的考古學觀察」商務印書館。⁽¹³⁾
- 張慶捷・常一民2003「北齊徐顯秀墓出土的藍色寶石金戒指」「文物」2003年第10期。
- 張景明2002「內蒙古涼城縣小壩子灘金銀器窖藏」「文物」2002年第8期。
- 陳萬雄主編1996「中國地域文化大系 草原文化—遊牧民族的廣闊舞台」商務印書館。
- 大広編集2006「中国古美の十字路展」図録。
- 大同市考古研究所2006「山西大同迎賓大道北魏墓群」「文物」2006年第10期。
- 大連市馬圈子漢魏晉墓地考古隊1993「遼寧瓦房店馬圈子漢魏晉墓地發掘」「考古」1993年第1期。
- 唐金裕1959「西安西郊隋李靜訓墓發掘簡報」「考古」1959年第9期。
- 杜葆仁・夏振英・呼林貴1986「東漢司徒劉崎及其家族墓的清理」「考古與文物」1986年第5期。
- 南京市博物館1972「南京象山五号、六号、七号墓清理簡報」「文物」1972年第11期。
- 南京市博物館2002「南京象山11号墓清理簡報」「文物」2002年第7期。
- 南京市博物館2009「南京市東漢建安二十四年龍桃枝墓」「考古」2009年第1期。
- 南京市博物館・南京市江寧區博物館2008「南京江寧上坊孫吳墓發掘簡報」「文物」2008年第12期。
- 南京市文物保管委員會1965「南京人台山東晉齊之夫婦墓發掘報告」「文物」1965年第6期。
- 南京市文物保管委員會1965「南京象山東晉王丹虎墓和二、四号墓發掘簡報」「文物」1965年第10期。
- 寧夏文物考古研究所1992「寧夏固原隋史勿射墓發掘簡報」「文物」1992年第10期。

- 宁夏固原歷史博物館2004「固原歷史文物」科学出版社。
- 宁夏回族自治区博物館・寧夏固原博物館1985「寧夏固原北周李賢夫婦墓發掘簡報」「文物」1985年第11期。
- 馬鞍山市文物管理所1990「馬鞍山市盆山發現六朝墓」「文物研究」総6期、153-157頁（再収：王侯主編『馬鞍山六朝墓葬發掘與研究』科学出版社2008）。
- 林巳奈夫編1976「漢代の文物」京都大学人文科学研究所。
- 馮永駿主編2005「銅精土累（広州考古十年出土文物選萃）」文物出版社。
- 香港区域政府・内蒙古自治区博物館1995「鞍馬文化—中国古代北方遊牧民族」香港区域市政局。
- 百橋明誠・中野徹責任編集1997「世界美術大全集・東洋編4隋・唐・小字館」。
- 森本公誠1996「偃師杏園1902号唐墓出土金指環の銘文」「考古」1996年第12期。
- 洛陽市文物考古研究院2012「洛陽市孟津朱倉北魏墓」「文物」2012年第12期。
- 洛陽市文物工作隊2011「河南洛陽市吉利区兩座北魏墓的發掘」「考古」2011年第9期。
- 羅豐主編1996「固原南郊隋唐墓地」文物出版社。
- 羅豐2004「胡漢之間—絲綢之路與西北歷史考古」文物出版社。
- 李逸友1957「關於內蒙古土默特旗出土文物狀況的補正—蒙答靜宜同志」「考古通訊」1957年第1期。
- 陸大為1960「遼寧北票房身村西漢墓發掘簡報」「考古」1960年第1期。
- 劉金友・王飛峰2015「大連營城子漢墓出土金帶扣及其相關研究」「北方文物」2015-3期。
- 劉洪元2011「内蒙古烏蘭察布陳武溝墓葬群」「中國考古新發現 年度記錄2010」（中国文化遺產2011年增刊）中国文物出版社。
- 遼寧省文物考古研究所編2002「三燕文物精粹」遼寧人民出版社。
- 遼寧省文物考古研究所2014a「遼海記憶—遼寧考古六十年重要發現（1954-2014）」遼寧人民出版社。
- 遼寧省文物考古研究所2014b「遼寧遼陽苗圃墓地西漢磚室墓發掘簡報」「文物」2014年第11期。
- 林梅村1997「固原梁特墓所出中古波斯文印章及其相關問題」「考古與文物」1997年第1期。
- 熊存瑞1987「隋李靜訓墓出土金項鍊、金手鐲的產地問題」「文物」1987年第10期。
- 揚州博物館・邗江縣圖書館1991「江蘇邗江縣楊壽鄉寶女墩新莽墓」「文物」1991年第10期。
- 《歐文》
- Museum Rietberg Zürich. 1994. Chinese Gold und Silber : die Sammlung Pierre Uldry, Zürich : Museum Rietberg.
- Otani Ikue. 2015. Inlaid rings and East-West interaction in the Han-Tang era. 「中国北方及蒙古、貝加爾、西伯利亚地区古代文化」科学出版社

挿図出典

- 図1：1 - 南京市博物館2009 図版10-5 2 - 南京市博物館・南京市江寧区博物館2008 16頁 図44 3 - 遼寧省文物考古研究所編2002 図版29 4 - 中国社会科学院考古研究所洛陽発掘隊1963 34頁 図26-8
5 - 湖南省博物館1984 107頁 図49-7 6 - 江西省文物考古研究所・南昌市博物館2001 封裏（左より3番目） 7 - 湖南省博物館1965 図版4-8
- 図2：陳萬雄主編1996 pl.126
- 図3：遼寧省文物考古研究所2014a 260頁
- 図4：1・2 - 香港区域政府・内蒙古自治区博物館1995 77頁 3 - Museum Rietberg Zürich 1994 pl.106
- 図5：1・2 - 韓立森・朱岩石・胡春華・閻村秀典・廣川守・向井佑介2013 彩版18-5・18-6
- 図6：1 - 遼寧省文物考古研究所2014b 12頁 図18-10 2 - 張慶捷2010 423頁 図8 3 - 洛陽市文物工作隊2011 図版13-3 4 左 - 石家莊地区革委会文化局文物発掘組1977 図版6-5 4 右 - 河北省文物研究所2009 238頁 下 5 - 寧夏回族自治区博物館・寧夏固原博物館1985 12頁 図25 6 - 太原市

- 文物考古研究所・山西省考古研究所2003 15頁 図19 7 - 西安市文物保護考古所2005 28頁 図46・
47 8上 - 百橋明徳・中野徹責任編集1997改变 8下 - 熊存瑞1987 77頁 図1改变 9 - 寧夏固原
歴史博物館2004 pl.123上 10 - 寧夏固原歴史博物館2004 pl.126上 11 - 張慶捷2010 425頁 図13
12 - 著者撮影 13 - 内蒙古文物工作隊・内蒙古博物館1975 図版8-5 14左 - 中国社会科学院考古
研究所河南二隊1996 図版3-2 14右上 - 同 6頁 図13-4、14右下 - 同24頁 図2 15 - 洛陽市文物
考古研究院2012 48頁 図25-9
- 図7 : 著者作成 (大同市の地図 : 山西大学歴史文化学院・山西省考古研究所・大同市博物館2006 写真:
3 - 大広編集2005 pl.92 6 - 大同市考古研究所2006 59頁 図27 12上 - 曾布川寛・岡田健責任編
集2000 pl.149 中 - 同pl.148、下 - 大広編集2005 pl.97上 14左 - 山西大学歴史文化学院・山西省
考古研究所・大同市博物館2006 229頁 図105d 14右 - 同241頁 図107c上半 37 - 劉洪元2011 p.97
頁 左上)

喇嘛洞墓地出土铜人面饰的再考察

郭 明 王 爽

喇嘛洞墓地位于辽宁省北票市四家板村喇嘛洞村民组，是目前发现规模最大的三燕文化墓地，发掘清理墓葬数百座，出土了相当数量的陶器、金银饰品和马具等，本文所要研究的铜人面饰也发现于此墓地。

铜人面饰造型整体较为狭长，多有鎏金，可见人面的眼、鼻、口等主要特征，在造型上与后世常见的金属覆面较为相似，仅尺寸上略有差异。喇嘛洞墓地出土了数十件铜人面饰，部分材料已发表。根据墓葬规模的差异，发掘者将喇嘛洞墓地的墓葬分为大、中、小三型。从已发表的材料来看，出土铜人面饰的 I M5、I M17皆属于大型墓葬^[1]。由于铜人面饰并非墓地中最为常见的器物，而迄今为止辽西地区发现的年代较早或相近的墓葬中并未发现此类遗物，受考古发现及信息发表的限制，少见对于此类器物的专门研究，但对于其功能、作用等的探讨却已为学者所关注。

发掘者根据其出土时多位于墓葬底部靠近侧棺板位置的特征，提出其可能钉在棺的侧壁板上使用^[2]。虽然在尺寸上与后世流行的覆面有所差异，但在整体特征上较为相似，有学者提出可对其与覆面的渊源关系进行讨论^[3]。

辽宁省文物考古研究所与日本奈良文化财研究所合作进行三燕文化研究期间，根据观察到的材料，黑崎直^[4]对喇嘛洞墓地出土的铜人面饰的分类、用途及意义进行了研究。根据五官、发式及髭须的表现特征将铜人面饰分为4类，并根据不同类别铜人面饰的共存关系提出这4种造型略有差异的铜人面饰可能与其墓主所属的家族特征有关，即墓主应是喇嘛洞墓地可能存在的4个家族的族长或家长；并根据铜人面饰内壁残存的丝织物痕迹及其出土位置提出其可能是用以固定装殓时覆盖于死者头面部的盖布，通过此类器物将盖布的两端固定于侧棺板上，保证盖布可以不直接与死者身体相接触。

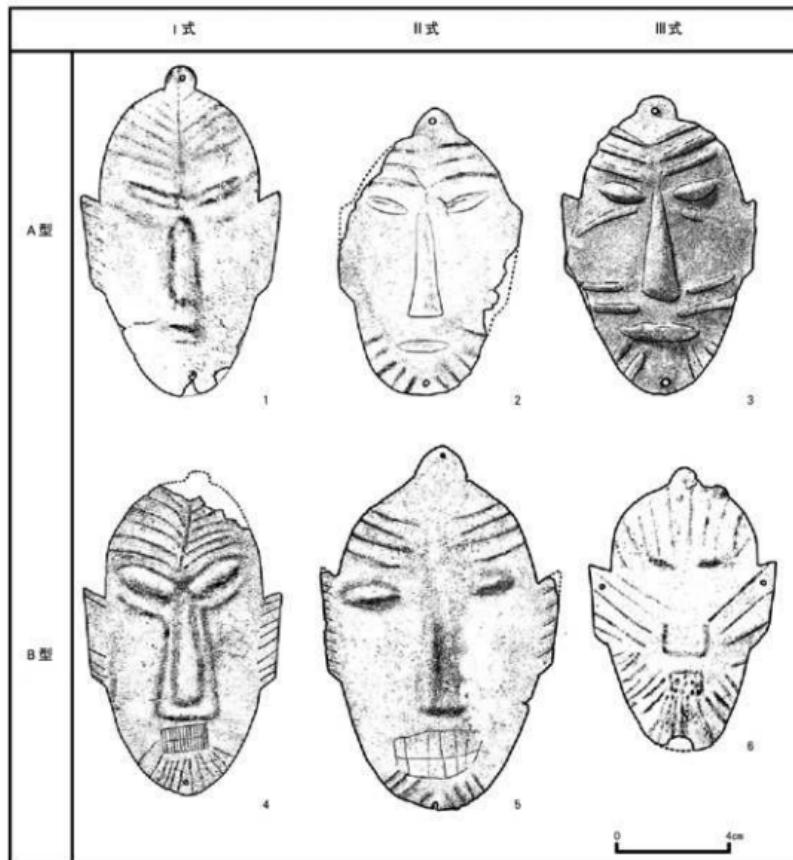
由于出土铜人面饰的墓葬相对较少，且目前仅见于喇嘛洞墓地，对于此类器物的造型特征来源、功能等的分析都受到了明显的局限。由于工作关系，笔者可以有机会对这批器物进行深入的观察，在此试图通过对铜人面饰进行类型学分析，结合其他地点发现的较为相似的器物的比较研究，对铜人面饰的造型来源、用途等进行初步的探讨，以为抛砖之作就教方家。

1. 类型学分析

喇嘛洞墓地出土铜人面饰造型简单，皆为较薄铜片剪成的较为狭长的人面造型，从整体

造型上来看都包括以下几个部分：顶端外凸的半圆形突起，左右两侧凸出的尖角四边形以及中部模具压出外凸的眼、鼻及口部造型。由于制作工具及制作时间的不同，细部特征存在不同程度的差异，除口、鼻、眼的具体造型的差异外，在眼部以上、面颊及下颌部分用以表示毛发的凸棱的分布情况也有不同，造型相近的器物在尺寸方面也较为接近。根据器物特征的差异可以将铜人面饰分为两组。

甲组器物造型较为规整，面部狭长，上端保留明显的半圆形突起，眼、鼻突出，面部特征清晰完整；乙组器物则有明显变形，耳部特征较为夸张，器表纹饰也较为模糊。



图一 剥蠛洞墓地出土铜人面饰形制演变示意图

1. 1M17:22-3 2. 1M16:12-1 3. 1M10:37-1 4. 1M5:7-1 5. 1M6:10 6. 1M17:22-10

其中甲组器物数量相对较多，根据口部造型及器表纹饰特征的差异可以分为两型（图一）。

A型 口部紧闭，为模具从背面锤出口部的造型，不见牙齿。根据器表装饰特征的差异可以分为三式：

I 式，眼部上侧凸棱以中部凸棱为中心左右对称，耳上可见斜向小凸棱，顶部半圆形突起下端及下颌部分可见钉孔，见于 I M17：22-3；

II式，眼部上侧凸棱分左右横向对称排列，不见中部凸棱但分界明显，耳部凸棱不见或不明显，口部以下下颌部分可见以口部为中心放射状排列的小凸棱，顶部半圆形突起下端及下颌部分可见钉孔，见于 I M16：12-1；

III式，整体特征与 II式较为相近，眼部上侧凸棱部分左右对称排列，不见中部凸棱，除下颌部分凸棱外，口鼻之间两颊上对称排列两组横向凸棱，耳部不见凸棱，钉孔位于顶部半圆形突起的下端及下颌部分，见 I M10：37-1；

根据器表纹饰特征的变化可以初步推测可能存在着从中缝明显到逐渐消失，面部装饰逐渐增多的变化过程。

B型 口部可见明显的牙齿的特征，却不见明确的唇线，根据口部具体特征及面部毛发特征的差异也可以分为三式：

I 式，口部为长方形框，内填长横线及多组短竖线用以表示牙齿，眼部上侧可见以中部凸棱为中心左右对称排列的横向凸棱，口部位置下侧下颌部分可见以口部为中心放射状排列的短凸棱，耳部装饰斜向短凸棱，见 I M5：7-1；



图二 喇嘛洞墓地出土乙组铜人面

II式，整体造型与I式相同，仅眼部以上凸棱装饰中不见中部凸棱，见IM6：10；

III式，口部采用方形框内填圆点标示，除口、鼻、口外置之外，器表遍布短凸棱，眼部以上凸棱以眼部为中心放射状排列，面颊、下颌等部分的凸棱则以口、鼻为中心呈放射状排列，见IM17：22-10，除顶端半圆形突起下侧及下颌部分的钻孔之外，部分器物在两耳中也可见小孔。

从器物特征来看，B型存在着与A型较为相似的变化，即存在中缝特征逐渐消失，面部装饰逐渐增多的变化过程。

乙组铜人面饰根据造型特征的差异也可以分为两型(图二)。

A型 上端圆弧，不见顶部圆凸，双耳尖突明显，器表纹饰不清晰，仅隐约可见眼、鼻、口的形制，不见器表有凸棱等其他装饰，孔4个，分别在头顶部、下颌及两耳上，见IM5：41-1。

B型 则保留了较为突出的顶部圆凸和双耳外凸的造型，但器表纹饰模糊，口部为两组外凸短凸棱，见IM25：10-1。

整体而言，乙组铜人面饰变形较为明显，从器物的逻辑变化上来说，其造型过于简略而渐趋缺乏明确的面部特征要素，根据器物从具象到抽象的逻辑变化过程，推测其可能属于较晚出现的遗物。

喇嘛洞墓地墓葬排列规整，少见叠压打破关系，地层关系没有为我们提供关于器物形制演变的信息。由于喇嘛洞墓地中仅有8座墓葬中出土了铜人面饰，对不同造型的铜人面饰的共存关系的统计(表一)没有发现明显的规律，即器物的共存关系无法为器物特征的演变提供时间上的验证，但装饰特征的差异及渐变性表明在喇嘛洞墓地出土的装饰特征各异的铜人面饰可能在制作时间上存在差异，即此类器物造型在逻辑上的存在演变关系。

两种制作特征略有差异的铜人面饰在装饰特征方面的一致变化表明喇嘛洞墓地中发现的装饰特征略有变化的铜人面饰可能存在着制作时间上的差异。

表一 喇嘛洞墓地出土铜人面饰共存关系统计表

	IM17	IM5	IM10	IM3	IM16	IM9	IM6	IM25	合计
甲 A I	1		1	1					3
甲 A II					7				7
甲 A III			1		7	1			9
甲 B I		1	11						12
甲 B II							14		14
甲 B III	14	11							25
乙 A		8							8
乙 B								9	9
不详			1	3					4
合计	15	20	14	4	14	1	14	9	91

2. 造型特征及来源

铜人面饰虽然基本采用了人面的特征，其中眼、鼻、口、耳的特征较为明显而容易确认。器表装饰多采用短凸棱，因其分布位置的不同可以认为其可能代表面部的主要毛发特征。而顶部的半圆形突起应是与发式有关的特征，所表示的应为发髻部分，而器物上侧眼部以上部分则是需要进一步讨论之处。上文分析已经发现了铜人面饰眼部以上特征存在的差异及可能的变化，我们分别从处于演变序列两端的B I 和 B III 的特征入手加以讨论。以人的正面像来看，眼部以上发式以下部分应为上额部分，其上装饰线可能表示皱纹，但 B I 在眼部以上的装饰部分存在明显的中部纵向凸棱，凸棱接于人面饰的顶部边缘，其分布则与头顶发式更为接近；B III 式则显示为以眼部为中心呈放射状排列的凸棱，其特征则与上额部皱纹的特征相差更远。即从整体特征上来看，眼部以上的纹饰特征所反映的皆为头顶发式的特征。而其造型则更近似为人面部正视图与头顶俯视图在一件器物上的整合。

目前辽西地区仅在喇嘛洞墓地中发现了铜人面饰，同地区未在年代更早的鲜卑墓中发现铜人面饰，所以我们只能在更远的范围内寻找与其具有相似特征的遗物。以人面为装饰特征的器物在高句丽城址中频频发现，最为常见者为车舆上的装饰。造型较为立体，顶端为椎状突起，面部特征清晰。而高句丽为夫余人所建立的王国，在高句丽城址中出现的此种人面形装饰也可能来源于夫余。

目前确属夫余的墓葬群中没有发现人面饰器物出土，但在吉林省相近器物的发现则为我们讨论此类器物的造型来源和功能等提供了更多的信息。

目前吉林省发现的此类器物共3件：

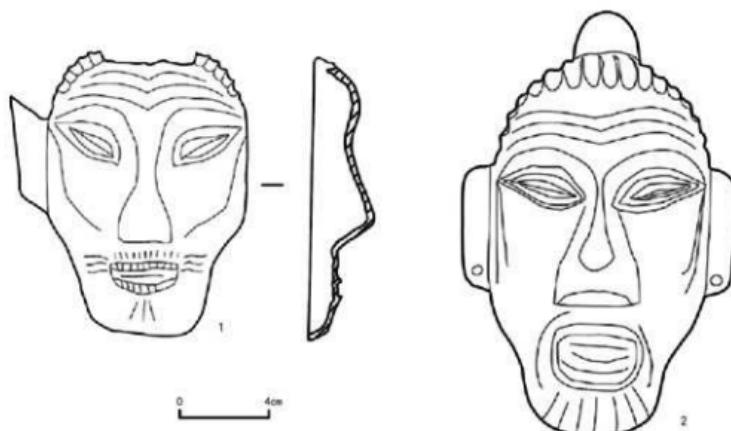
一件为李文信先生在吉林帽儿山调查^[5]中发现，与喇嘛洞墓地出土者在基本造型特征上较为一致：面部狭长，顶端椎髻及左耳残失，可见额顶梳发特征。上额较宽，其上可见线条标示的皱纹，眼部狭长，鼻子外凸，面颊中部略内收，口部长方圆形，内里以方格纹表示牙齿。口部上下皆可见髭须，耳部略向上尖突，内侧有环鼻，可系绳索，长13.8、宽9.3厘米(图三、1)。

一件为东团山调查^[6]发现，造型与李文信发现者极为相似，顶部残失，背面眉眼之际有环形穿鼻。

一件为旅顺博物馆收藏品^[7]，传吉林高丽城出土，整体面部特征与前两件较为相似，顶部椎髻保存完好，耳部长圆，耳垂部有圆孔，未见尖状突起，长18、宽11.45厘米(图三、2)。

从造型上来看，吉林省发现的这3件器物在造型上更为相近，研究者推测其可能为夫余遗存。

喇嘛洞出土者与此三者有着较为相似的特征：皆采用椎髻，多尖耳，口部可见髭须及以



图三 吉林地区调查发现的铜人面

1. 吉林帽儿山 2. 吉林高丽城

方格纹标示牙齿，在尺寸上也较为相似，约为人面的二分之一左右。

但从细部特征来看，两地发现的遗物也存在一定程度的差异：吉林省发现的3件器物皆为较为标准的人面正视图，而喇嘛洞墓地出土者则略有差异，虽然整体特征也接近人面正视特征，但可见明显的头顶发式特征，而不见额部特征。从造型上更像是正视和俯视特征的组合。

喇嘛洞墓地出土者在椎髻和下颌部分皆可见钉孔，而吉林省发现的3件器物则不见钉孔痕迹，且器形也相对厚重。帽儿山发现者在人面饰的背侧有弧形穿扣，这表明两地发现的类似遗存在使用方式上应当存在着一定的差异。从造型特征的变化上来看，吉林省出土的几件器物与人面部形态完全吻合，而喇嘛洞出土者则出现了不同程度的变异，结合前文所确定的铜人面饰的逻辑演变关系，吉林省出土者可能年代略早。

田立坤先生曾指出喇嘛洞墓地主体的人群应为被慕容鲜卑掠到当地的夫余人^[8]。墓地出土的铜人面饰似乎也可以从夫余遗存中找到线索，即喇嘛洞遗址出土的铜人面饰可能是受到了来自夫余的影响。但由于二者在造型及使用方式上的差异，并不排除二者可能存在一定的时间差异或者并非直接交流而形成的产物。

3. 功能及使用方式

铜人面饰在造型上与辽代流行的覆面较为相似，皆保留了较为清晰的眼目等特征，但在尺寸上存在明显的差异，铜人面饰长度多为10厘米左右，且在墓葬中多为多件同时发现，其



图四 喇嘛洞墓地出土铜覆面与辽代覆面对比图

1. 喇嘛洞墓地 M5 2. 小喇嘛洞辽墓 M1

造型意义可能相差甚远。

喇嘛洞墓地M5中与铜人面饰共出的铜面具，在造型、制作方式和面部特征等方面（图四）皆与辽代墓葬中出土的铜覆面更为相近。器物边缘皆可见等距钻孔，可能二者在功能和用途上存在一定的承继关系。

从器物在墓葬中的出土位置来看，虽然铜人面采用人面的造型，但在使用过程中与人的面部并没有明显的关联，不能将其作为后世流行的覆面的前身。

通过前文对铜人面饰的分析可知，喇嘛洞墓地出土的铜人面饰并非作为面具或者面部饰品使用。但在器物边缘保留的钻孔可能与使用方式有关。从部分器物内壁保留的纺织物印痕则表明这类器物应在纺织物上使用，即这类器物是缝制在纺织物上使用的。

前文分析表明，铜人面饰在器表装饰特征上存在变化。而从遗物的共存关系上来看，出于不同逻辑序列点上的铜人面饰存在着一定程度的共存，即同一墓葬中既可以发现造型较早的器物，也可以发现造型较晚的器物，从数量上来看，造型特征较早的器物数量相对较少，这也符合器物在使用过程中逐渐损毁而渐趋更替的特征，即同一墓葬内造型的差异是由于不同时期的制作增补造成的。这表明铜人面饰并非作为随葬明器而专门制作的，而可能作为生活中使用的器具在墓主人死后作为随葬品使用的。

虽然出土铜人面饰90余件，但皆集中出土于东区的几座墓葬之中，且只见于规模较大的墓葬，这表明随葬铜人面饰的墓主可能具有较为特殊的身份或者地位。

这类器物出土位置并不一致，这在一定程度上影响了我们对其功能的判断。在同时期的



图五 I M5出土鹿形饰



图六 铜鹿形饰出土位置

遗存中并没有发现类似的遗存可以帮助我们判断其使用方式，但民族学调查的结果为我们提供了可兹比较的信息。

研究表明，萨满教曾是北方民族中较为广泛流行的原始宗教，现代的萨满仍保持了在衣物上缝制各类金属物品的习俗，虽然未曾在其使用物品中发现铜人面饰，但在其“神衣”上缝制的铜镜，位置与铜人面饰在人体附近的位置相当，推测铜人面饰的使用可能与此相似。“神衣”上的配饰的多少受萨满品级的影响^[9]，不同墓葬中出土铜人面饰的数量也存在明显的差异，这表明二者也具有相似特征。与铜人面饰共出的铜或铜鎏金的鹿形饰也显示出较为相近的特征。鹿形饰在墓葬中出土的位置多靠近墓主身体部分，而远离其他随葬品，这类较为特殊的器物表明，其可能为特殊人群所有。在喇嘛洞墓地中出土此类器物的墓主，可能为该群体中的“神职”人员(图五、六)。

“萨满”一词源自通古斯语系，有知晓、通晓的意思，专门研究萨满的学者认为萨满即是氏族中的智者。文献中关于萨满的明确记载见于南宋徐梦莘的《三朝北盟会编》，其中提到“珊瑚”，“珊瑚者，女真语巫婆也，以其通变如神”^[10]。虽然笔者没有发现这一时期有关此类特殊人群的记载，但在稍晚时候的新唐书中则提到了北方少数民族中的一种名为“甘”的巫者，“祠神惟主水草，祭无时，呼巫为甘”^[11]。根据学者的研究此“甘”(Qam)在突厥语中的含义应为“萨满”即巫^[12]。虽然我们没有在墓葬同时期的文献中发现关于此类特殊人群的记载，但在稍晚的文献中所提到的“珊瑚”与后期的“萨满”应属同一类人，现代的萨满可能在一定程度上保持了其原始形态的特征。

喇嘛洞墓地中出土的铜人面和铜鹿形饰等器物与后代萨满的饰物相近，其功能可能也较为相似，由此可以推测，喇嘛洞墓地中的随葬铜人面饰的墓主可能为族群中萨满一类的神职人员。

4. 小结

本文通过对铜人面饰的类型学分析，结合其出土情况及临近地区出土的同类遗存的分析，可以初步获得如下认识：

- ① 铜人面饰可能并不是简单的随葬明器，虽然造型较为简单，但应为在现实生活中具有实际功能，且为所有者经常使用的器物，在器物损毁之后需要随时予以补充；
- ② 铜人面饰的功能与后世流行的覆面并不相同；
- ③ 喇嘛洞墓地中发现的铜人面饰的造型可能是受到了来自东部地区夫余文化的影响，这也必将为探讨喇嘛洞墓地人群的组成提供线索；
- ④ 采用铜人面饰随葬的墓主应是具有某种特殊的身份或地位的人群，可能为萨满一类的“神职”人员。

由于发现材料的限制，笔者仅对相关问题进行了初步探讨，不足之处，请多指正。

附记：本文为中日合作“辽西地区东晋十六国时期都城文化研究”项目的仓促之作，文章构思及写作过程中得到了辽宁省文物考古研究所李新全、万维飞研究员的指导和帮助，同事万欣、王宇提供了喇嘛洞出土铜人面饰的线图、照片，在此一并表示感谢。

注

- [1] 辽宁省文物考古研究所编：《三燕文物精粹》，辽宁人民出版社，2002年。
- [2] 同注[1]
- [3] 田立坤：《朝阳发现的三燕文化遗物及相关问题》，《文物》，1994年第11期。
- [4] 黑崎直：《北票喇嘛洞墓地出土鎏金铜人面饰考》，《东北亚考古学论丛》，科学出版社，2006年。
- [5] 李文信：《吉林龙潭山遗迹报告》，《李文信考古文集（增订本）》，辽宁人民出版社，2009年。
- [6] 马德谦：《谈谈吉林龙潭山、东团山一带的汉代遗物》，《北方文物》，1987年第4期。
- [7] 刘立丽：《旅顺博物馆藏辽代面罩的分类与研究》，《辽宁师范大学学报》，2013年第1期。
- [8] 田立坤：《朝阳发现的三燕文化遗物及相关问题》，《文物》，1994年第11期。
- [9] 吕大吉：《中国各民族原始宗教资料集成》，228页，中国社会科学出版社，1995年9月。
- [10] 徐梦莘：《三朝北盟会编》，上海古籍出版社，1987年。
- [11] 《新唐书·回鹤传》黠戛斯条。
- [12] 孟慧英：《中国北方民族萨满教》，社会科学文献出版社，2000年。

喇嘛洞墓地出土人面飾金具の再考察

郭 明 王 爽

喇嘛洞墓地は遼寧省北票市四家板村喇嘛洞村民組に位置し、現在までに発見された三燕文化の墓地の中では最大規模の遺跡である。発掘調査された墓葬は数百基を超え、相当数の陶器、金銀装飾品、馬具などが出土した。本稿で検討する人面飾金具も当墓地から発見されたものである。

人面飾金具は全体的にやや狭長で、多くは鍍金が施され、眼・鼻・口など人面の主要な特徴が認められる。形態上は後世によくみられる金属製の仮面に比較的類似するが、大きさがやや異なる。喇嘛洞墓地からは数10点の人面飾金具が出土し、その一部については既に報告されている。発掘担当者は、喇嘛洞墓地の墓葬をその規模によって大中小の三型に分類している。すでに公表された資料によると、人面飾金具が出土したIM5とIM17とともに大型墓葬に属する⁽¹⁾。このことから、人面飾金具は当墓地において普遍的な遺物では決してないことがわかる。また、現在のところ、遼西地区で発見された古い時期の墓葬、もしくは同時期の墓葬からの出土例はない。考古学的な発見や情報公表の制限のため、この種の遺物に対する専門的な研究は少ないが、その用途・機能などの解明は研究者の注目するところである。

発掘担当者は、出土位置が墓葬底部の木棺側板近くという特徴から、人面飾金具は棺の側板上に釘で打ちつけて使用された可能性を指摘している⁽²⁾。また、後世に流行した仮面と大きさは異なるものの、全体的な特徴は比較的類似することから、人面飾金具と仮面との淵源関係に関する検討もなされている⁽³⁾。

遼寧省文物考古研究所と奈良文化財研究所による三燕文化の共同研究において、黒崎直⁽⁴⁾は喇嘛洞墓地出土人面飾金具の分類と、用途および意義について検討をおこなった。黒崎は、五官や髪型、髭の表現にみる特徴により、人面飾金具を4種に分類した。さらに、4種の人面飾金具とそれが出土する墓葬との対応関係にもとづき、これら各型式の違いは、人面飾金具がその墓主が属する家族の特徴と関連する可能性を指摘した。すなわち、墓主は喇嘛洞墓地に存在した4家族の族長もしくは家長であったと想定した。また、人面飾金具裏面に残存する紡織物の痕跡とその出土位置から、納棺時に死者を覆った布を固定するためにそれが使用された可能性を指摘した。人面飾金具を用いて掛け布の両端を木棺側板上に固定することで、掛け布が死者の体に直接触れないようにしたということである。

人面飾金具の出土例は相対的に少なく、現在のところ喇嘛洞墓地からのみの発見である。

ため、これらの形態的な起源や機能などに対する検討は資料数のうえで規制を受ける。仕事の関係上、筆者はこれらを仔細に観察する機会を有することから、本稿では人面飾金具の型式学的分析をおこなったうえで、他地域における類似資料との比較検討をおこなうことと、人面飾金具の源流や用途などに関する基礎的な検討を試みる。拙文をなして大方のご教示を仰ぐ次第である。

1. 型式学的分析

喇嘛洞墓地から出土した人面飾金具の造形は簡素で、いずれも薄い銅片を切断し、やや幅狭で面長の人面形を呈する。全体的な形態をみると、いずれもつぎに挙げる諸特徴を有する。まず、頂部外面には上方に向かって突出した半円形の突起がある。左右両側には一辺が鋭角をなす長方形状の突起があり、そして中央には型で押し出した凸状の眼・鼻・口の造形がある。製作工具や時期が異なるため、細部に差異が認められる。口・鼻・眼の形状に違いがあるほか、眼より上の部分や、頬、下顎部分に毛髪をあらわす突線の範囲にも違いがみられる。形態的に類似する遺物は、大きさも比較的近しい。その特徴により、人面飾金具は2組に大別できる。

甲組は、面部は幅狭で長く、頂部には半円形の突起を明確に作り出す。眼・鼻は突出し、人面の表現は明瞭かつ整っている。いっぽう、乙組のものは明らかに変形しており、耳の特徴はやや誇張され、表面の文様装飾も不明瞭である。

これらのうち、資料の多い甲組をみると、口の形状および表面の文様装飾の特徴から次の二型に分けられる（図一）。

A型 口をきつく閉じ、裏面から型で押し出して口を形づくり、歯は認められない。表面装飾の特徴から3つに分けられる。

I式 眼の上の突線は中央の突線を中心に左右対称をなす。耳には斜方向に短い突線がみられる。頂部の半円形突起の下端および下顎部分には釘孔がみられる。このような特徴はIM10:37-2、IM17:22-3に確認できる。

II式 眼の上の突線は横方向に左右に分かれて配される。中央に突線はないものの、左右対称をなす。耳の突線は認められない、もしくは明瞭ではない。下顎部分には口を中心として放射状にのびる短い突線がみられる。頂部の半円形の突起下端および下顎部分に釘孔がある。IM16:12-1が該当する。

III式 II式と全体的な特徴が類似する。眼の上の突線は左右対称に配され、中央に突線は認められない。下顎部分の突線のほか、口と鼻の間の両頬上に、対称に配された二組の横向きの突線がある。耳に突線はみられない。釘孔は頂部の半円形の突起下端および下顎部分に位置する。このような特徴はIM16:12-8、IM10:37-1に確認できる。

表面の文様装飾から、中央の境界は明確なものから次第に消失し、面部の装飾は次第に増加するという変遷が推測できる。

B型 口に歯の表現が明確に認められるが、口唇線はむしろ曖昧である。口と面部の毛髪の特徴によって3つに分けられる。

I式 口は長方形の枠状をなす。内部を横線と短い縦線を組み合わせて充填し、歯を表現する。眼の上には、中央の突線を中心として横方向にのびる突線が左右対称に配される。下顎部分には、口を中心として放射状にのびる短い突線がある。耳は斜方向の短い突線で装飾する。このような特徴はIM10:37-4、IM5:7-1にみられる。

II式 全体的な形態はI式と同様であるが、眼の上の突線装飾に中央の突線が認められない。IM6:10が該当する。

III式 口は方形の枠内を円点で充填する。表面には口・鼻・口外側を除き、短い突線が全体的に広がる。眼上の突線は、眼部から放射状に配される。頬や下顎などの部分は、口と鼻を中心として突線が放射状に配される。このような特徴はIM17:22-10にみられる。頂部の半円形突起の下側および下顎部分に孔を穿つほか、両耳の中央にも小孔が認められるものもある。

以上の特徴から、B型はA型と同様に、中央の境界が次第に消失し、面部の装飾が次第に増加するという変遷がみてとれる。

乙組の人面飾金具は、形態的特徴からやはり2つに分類できる（図二）。

A型 上端が円弧を描き、頂部に丸い突起はみられない。両耳は鋭く尖り、上方へ突出する。表面の文様装飾は不明瞭で、眼・鼻・口の形がかすかに認められるのみである。表面には突線など、その他の装飾は認められない。孔は4つあり、頭頂部、下顎、両耳上に穿たれる。IM5:41-1が該当する。

B型 頂部の円形の突起および両耳が外側に突出する形状をわずかにとどめる。ただし、表面の文様装飾は不明瞭である。口は2つの外線と短線の突線の組み合せからなる。IM25:10-1が該当する。

以上をまとめると、乙組の人面飾金具の変形は明らかである。器物の論理的变化からいえば、その造形は次第に簡略なものとなり、明確な面部の特徴をなす要素が乏しくなっていく。具象から抽象に向かうという器物の形態変化にもとづき、乙組は甲組よりもやや後出する可能性が考えられる。

喇嘛洞墓地の墓葬配列は整然としており、重複・破壊関係もほとんどなく、層位から遺物の形態変化を検討するのは難しい。また、喇嘛洞墓地中、人面飾金具が出土したのはわずかに8基の墓葬であるため、各型式の墓葬間の共存関係（表1）に明確な規則性は見出せない。つまり、遺物の形態変化について、その共存関係から時間的検証をおこなうこと

はできないのである。しかし、各型式にみられる装飾の差異や漸移性は、喇嘛洞墓地から出土した人面飾金具に製作時期の違いがあること、すなわちこれらは時間的に前後関係にあることを示している。

また、製作上の特徴にわずかな違いがある人面飾金具が、装飾においては一致した変化をみせることも、両者の製作時期の違いを示すものと考えられる。

表1 喇嘛洞墓地出土人面飾金具の共存関係統計表

	I M17	I M5	I M10	I M3	I M16	I M9	I M6	I M25	合計
甲A I	1			1					3
甲A II					7				7
甲A III			1		7	1			9
甲B I		1	11						12
甲B II							14		14
甲B III	14	11							25
乙A		8							8
乙B								9	9
不明			1	3					4
合計	15	20	14	4	14	1	14	9	91

2. 形態的特徴および起源

人面飾金具は基本的に人面の特徴を有しているが、そのうち眼・鼻・口・耳といった特徴は比較的明確で、容易に確認できる。また、表面装飾には短い突線を多用し、その突線が施される位置の違いから、面部の主要な毛髪の特徴をあらわしていると考えられる。さらに、頂部の半円形の突起は髪型に関連する特徴と考えられ、髪をあらわしているとみられる。ただ、遺物の上側、眼より上の部分についてはさらなる検討が必要である。先述した分析により、各型式間の違いと、そこに想定される変化を明らかにしたが、変遷の両端に位置するB I式とB III式について、さらに検討してみたい。人の正面観からすると、眼部以上、髪型以下の部分はおそらく額に相当し、当該部分の装飾線は皺文をあらわしていると考えられる。しかしB I式では、眼より上の装飾部分において、中央にはっきりと縦方向の突線がみられ、突線は人面飾金具の頂部辺縁に接し、その範囲は頭頂の髪型にまで及びる。B III式では、眼部を中心として放射状に配された突線が認められ、両者の額の皺文は大きく異なる。全体的な特徴からすると、眼より上に施された文様装飾の特徴はいずれも頭頂部の髪型の特徴を反映しているといえる。しかもその形状は、ひとつの器物上に人面の正面観と頭頂部の俯瞰視を調整して組み合わせたものにより近いといえる。

現在、遼西地区では喇嘛洞墓地においてのみ人面飾金具が出土している。未だ同地区の先行する墓葬である鮮卑墓からの出土はないため、範囲を広げて類例を探すほかない。人

面をもつて装飾となす特徴を有する器物は、高句麗城跡においてしばしばみられ、もっともよくみられるのは車馬具の装飾である。これらはやや立体的な形態で、頂端は椎状に突起し、面部の特徴は明瞭である。高句麗は夫余人が建てた王国であることから、高句麗城跡から出土するこの種の人面装飾も、その起源は夫余に求められる可能性がある。

現在のところ、夫余に属することが明らかな墓葬群のなかで人面飾金具の出土は確認されていないが、吉林省において類似する遺物が出土しており、この種の遺物の起源や機能などを検討するうえで大変参考となる。

これまで、吉林省からは類似する遺物が3点出土している。

1点は、李文信が吉林帽兒山の調査⁽⁵⁾中に発見したもので、基本的な形態上の特徴は喇嘛洞墓地出土品と一致する。面部は幅狭で長く、頂部の椎髻と左耳は欠損する。前頭面には髪を結った表現がみられる。額はやや広く、そこに皺文をあらわす線文が施されている。眼は細長く、鼻は突出し、頬の中央はわずかに窪む。口は長方円形で、内部に格子文で歯をあらわす。口の上下には髭がある。耳はやや上向きに突出する。内側に環状の留め具があり、紐でくくることができる。長さ13.8cm、幅9.3cm(図三-1)。

2点目は東團山の調査⁽⁶⁾で発見された。形態は帽兒山のものと非常に近い。頂部は欠損し、裏面には眉と眼の間の位置に環状の留め具を有する。

3点目は旅順博物館の収蔵品⁽⁷⁾である。伝吉林高麗城出土とされる。全体的な形態は他の2点と類似し、頂部の椎髻は完存する。耳は長く隅丸で、耳たぶに円孔を有し、尖状突起は認められない。長さ18cm、幅11.45cm(図三-2)。

吉林省で発見されたこの3点の遺物は形態的に共通することから、研究者は夫余の遺物である可能性を推測する。

喇嘛洞出土品とこの3点は類似した特徴をみせる。いずれも椎髻の髪型で、多くは耳が尖り、口には髭が認められ、格子文で歯をあらわす。また、大きさも比較的近く、おおよそ人の額の1/2前後の大きさである。

しかし、細部の特徴に着目すると、両地の出土品には一定の違いがある。吉林省出土の3点はみな標準的な人面の正面観であるが、喇嘛洞墓地のものはそれとはやや異なる。先に指摘したように、喇嘛洞墓地出土品は全体的には人面を正視した特徴に近いが、頭頂部の髪型が明確に表現されるのに対し、額の表現はなされない。その造形は正面観と俯瞰観を組み合わせたものにより近い。

喇嘛洞墓地出土品はいずれも椎髻と下顎部分に釘孔がみられるが、吉林省の3例には釘孔の痕跡がなく、器形も相対的に重厚である。また、帽兒山発見品は裏面にアーチ状の留め具がある。このことは、両者には使用方法に一定の違いがあることを示している。形態的特徴の変化をみると、吉林省出土品は人面の形態と完全に符合するが、喇嘛洞墓地出土

品にはその形態に変化が生じている。これを上述した人面飾金具の変遷にあてはめると、吉林省出土品の年代は喇嘛洞よりもやや先行する可能性がある。

田立坤は、喇嘛洞墓地の主体は慕容鮮卑に掠奪されて当地にいたった夫余人であると指摘する⁽⁸⁾。当墓地出土の人面飾金具も夫余の遺物中に系口を求めることができる。つまり、喇嘛洞墓地出土の人面飾金具は夫余からの影響を受けた遺物の可能性がある。ただし、両者の形態および使用方法にみる差異から、両者の間に一定の時期差がある可能性は排除できず、あるいは、直接的な交流によって形成された産物とも言いきれない。

3. 機能および使用方法

人面飾金具は、遼代に流行した仮面と形態的に類似する。両者ともに眼などの特徴を明瞭にとどめているが、大きさの上で明らかに異なる。人面飾金具の多くは長さ10cm前後で、なおかつ、墓葬中で複数が同時に発見されていることから、おそらく両者の形態的意味は大きく異なると考えられる。

喇嘛洞墓地M5において人面飾金具とともに発見された銅製仮面（図四）は、形態や製作方法、面部の特徴などから、遼代の墓葬から出土する銅製仮面に類似する。端部には等距離に釘孔が穿たれ、両者の機能や用途には一定の継承関係があったと考えられる。

墓葬中の出土位置からみると、人面飾金具は人面の造形を採用してはいるものの、使用的上での人面と関係はないため、それを後世に流行した仮面の前身とみなすことはできない。

これまでの分析から、喇嘛洞墓地出土の人面飾金具は仮面もしくは顔の装飾に使用したものでないことは明らかである。しかし、端部にのこる釘孔はその使用方法と関係するものと考えられる。また、一部の遺物の裏面にのこる織物の痕跡は、これが織物の上で使用されたこと、すなわち、織物の上に縫い付けて使用されたことを示している。

前項で、人面飾金具の表面装飾には時期的变化がみられることを明らかにしたが、各型式の共存関係をみると、異なる型式の人面飾金具が一定程度共存して出土しているのがわかる（表1）。すなわち、同一墓葬において、形態的にやや古相のものとやや新相のものが共存するということである。数量としては形態的特徴がやや古相を示す遺物が相対的に少ないという点は、使用過程で破損したために新しいものに交換されたという特徴に合致する。すなわち、同一墓葬のなかでの形態上の差異は、異なる時期に製作され、補填されたことを示しているということである。このことは、人面飾金具が副葬品として製作されたのではなく、生活のなかで使用されていた器物が墓主の死後に副葬品として用いられたことを推測させる。

出土した人面飾金具は90余点におよぶものの、いずれも東区の数基に集中し、なおかつ、規模の比較的大きな墓葬にしかみられない。このことは、人面飾金具が副葬された墓主は

やや特殊な身分や地位を有していた可能性を示しているといえよう。

人面飾金具の出土位置は墓葬によって異なるため、その機能の復元がむずかしい。使用方法を考える上で参考となるような類例は、同時期の遺跡から出土していないが、一方で、民族学的調査の成果が参照となる。

民族学研究により、シャーマニズム（薩滿教）はかつて北方民族のなかで広く流行した原始宗教であり、現代のシャーマンは今なお衣服の上に各種の金属製品を縫い付けるという習俗を残すことが知られている。シャーマンが使用する金属製品のなかから人面飾金具が発見されているわけではないが、その「神衣」の上に縫い付けられた銅鏡の位置と人面飾金具の出土位置は、身体にかなり近い位置にあることから、人面飾金具もこのように用いられたと推測することができる。「神衣」上の装飾品の配置はシャーマンの等級を少なからず反映するとされるが⁽⁹⁾、異なる墓葬より出土した人面飾金具の数量にも明らかな差異が認められ、この点でも両者は類似した特徴を備えているといえる。また、人面飾金具と共に伴する銅ないし銅鍍金の鹿形装飾（図五）も類似した特徴をみせる。鹿形装飾は墓主の身体に近い地点から出土するが多く、他の副葬品とは離れて出土する（図六）。このような特殊な器物は、特殊な人々が所有したことを示していると思われる。喇嘛洞墓地においても、このような器物の出土から、墓主は当該グループ内の「神職」であったとみられる。

「薩滿【現代中国語の発音でsa-man】」の語源はツングース語系にあり、「さまざまな物事をよく知っている」、「精通する」という意味をもつことから、研究者はシャーマンを氏族のなかの智者と位置づける。文献において、シャーマンに関する明確な記載は南宋の徐夢莘による『三朝北盟会編』にみることができる。そこでは「瑣蜜【現代中国語の発音でshan-man】」について、「瑣蜜者、女真語巫也、以其通變如神」とある⁽¹⁰⁾。喇嘛洞墓地とは時期が異なるが、『新唐書』では北方少数民族中の「甘」と称される巫者に言及しており、「祠神惟主水草、祭无時、呼巫為甘」とある⁽¹¹⁾。猛慧英の研究によれば、この「甘(Qam)」は突厥語における「薩滿」、すなわち巫者であるという⁽¹²⁾。喇嘛洞墓地と同時期の文献中にこのような特殊な人々に関する記載は見いだせていないものの、それよりも新しい時期の文献に記される「瑣蜜」と後の「薩滿」は同義であるとみるべきで、現代のシャーマンは原始的な特徴をある程度とどめていると思われる。

喇嘛洞墓地から出土した人面飾金具や鹿形装飾などの遺物と、後世のシャーマンの装飾品は類似しており、その機能もまた比較的近いものとみられる。したがって、喇嘛洞墓地のなかで人面飾金具が副葬された墓主は、おそらく同グループ内におけるシャーマンのような神職であったと推測される。

4. 小結

本稿では、人面飾金具の型式学的分析と、その出土状況および近隣地域の類例との比較をおこない、基礎的な検討として以下の点を指摘した。

- ① 人面飾金具は単に副葬品とはいえない。その形態は比較的簡素であるが、実生活において実用的な機能を有していた。所有者がしばしば使用した器物で、破損時には隨時補われる必要のあるものであった。
- ② 人面飾金具の機能と後世に流行した仮面のそれは同一ではない。
- ③ 喇嘛洞墓地から出土した人面飾金具の形態は、おそらく東部地区的夫余文化からの影響を受けている。このことは、喇嘛洞墓地の人員組成を探究するうえでの糸口にもなる。
- ④ 人面飾金具を副葬品に採用した墓主はある種の特殊な身分や地位にあった人物たちであり、おそらくシャーマンのような「神職」であった。

人面飾金具は出土資料が限られており、筆者は関連する問題に対して基礎的な検討をおこなったに過ぎない。検討不足な点についてはご叱正を賜りたい。

付 記 本稿は遼寧省文物考古研究所と奈良文化財研究所が共同で進める「遼西地域の東晉十六国期都城文化の研究」のために忽卒に作成したものである。文章の構想や記述の過程で、遼寧省文物考古研究所の李新全、万雄飛両研究員よりご指導とお力添えを賜った。また、同僚の万欣、王宇両研究員には喇嘛洞出土人面飾金具の実測図と写真をご提供いただいた。ここに記して感謝申し上げる。

註

- (1) 遼寧省文物考古研究所編『三燕文物精粹』遼寧人民出版社、2002年。
- (2) 同註(1)。
- (3) 田立坤「朝陽発現の三燕文化遺物及相關問題」「文物」1994年第11期。
- (4) 黒崎直「北票喇嘛洞墓地出土「人面飾金具」考」「東北亞考古論叢」科学出版社、2006年。
- (5) 李文信「吉林龍潭山遺跡報告」「李文信考古文集(増訂本)」遼寧人民出版社、2009年。
- (6) 馬德謙「談談吉林龍潭山、東团山一体的漢代遺物」「北方文物」1987年第4期。
- (7) 劉立麗「旅順博物館遼代面罩の分類與研究」「遼寧師範大學學報」2013年第1期。
- (8) 同註(3)。
- (9) 呂大吉「中国各民族原始宗教資料集成」228頁、中国社会科学出版社、1995年。
- (10) 徐夢莘『三朝北盟会編』上海古籍出版社、1987年。
- (11) 『新唐書』回鶻伝、黠戛斯条。
- (12) 猛慧英「中国北方民族薩滿教」社会科学文献出版社、2000年。

辽宁北票市喇嘛洞墓地 I M17铁甲堆积的室内清理

万 欣 白云燕 赵代盈 肖俊涛

1. 铁甲堆积出土情况

I M17位于喇嘛洞墓地东区中部偏北处，1996年6月13日开始发掘。该墓为长方形土圹竖穴木棺墓，墓圹长5.2、宽4、深4.8米，是整个墓地中规模最大的一座墓葬，与其东侧的随葬甲骑具装的大墓I M5相距不足10米。墓圹内共有两层二层台，距地表分别为1.1和3.5米，填土为五花土和石块。原木棺长3.6、宽1.3、存高0.9米，墓向53°。入骨似为成年男性，葬式为单人仰身直肢葬，头向东北，面向上(图一)。

该墓铁甲堆积是在7月4日的发掘过程中发现的，随葬位置与I M5相同，即位于棺内墓主人足下，出土编号为96BL I M17：21。在堆积的表层上散布有诸多马具铜饰件，如铜泡套管摇叶等。8月4日用套箱法打包起出封存。

与该铁甲堆积伴出的随葬器物多达230多件，较为重要者有铁剑、铁环首刀、铁矛、铁带扣、铜、铜魁、铜鎏金人面饰以及金耳坠等，反映出该铁甲堆积的拥有者同随葬有大量铜铁器物的I M5的墓主人一样，在当时的鲜卑社会和军事集团中享有较高的身份和地位^[1]。

2. 室内清理过程

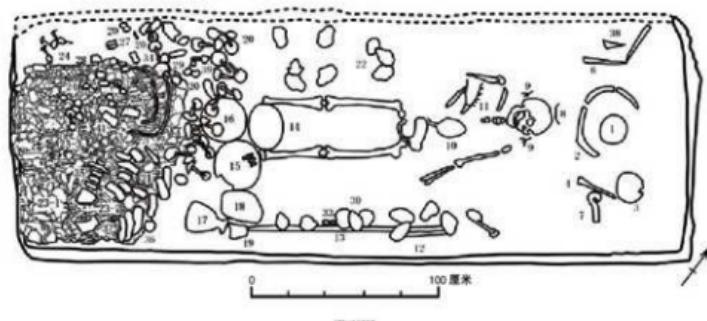
2008年5月下旬，在白荣金先生的具体指导下，我们开始对I M17铁甲堆积进行室内清理。全部铁甲堆积被存放在长112、宽108、高30厘米左右的套箱内，分布范围约90平方厘米，堆积厚度18厘米左右。其四周边缘附近规格较大的甲片保存较好，但多数已散乱，中部甲片除了锈结成的残块之外，大多残碎严重，几乎看不出任何有序排列的迹象(图二)。兜鍪原位于堆积的东南部，虽已残破解体，但多为易于修复的较大的残片，已先行起出作了复原(下详)。

室内清理的首要工作是对堆积中的甲片的科学提取。同以前经过室内清理的I M5铁甲堆积比较，I M17的铁甲堆积范围和厚度与前者虽大致相仿，但铁甲片的残损破碎程度较前者更甚，甲片拼对和整体复原的难度也相对较大^[2]。有鉴于此，在借鉴以往室内清理的经验的同时，对甲片提取过程中的某些操作步骤作了进一步的细化，主要是在铁甲堆积的轮廓图上标明提取的各组甲片所在的部位，以便于考察各组甲片之间的横向位置关系和纵向叠压关系。

此次清理确定和依循的基本原则为分区定位、分组编号、确定范围、逐层提取。其基本工作流程为：



全景



平面图

图一 喇嘛洞 I M17全景与平面图

- 1、2. 铜器 3. 陶腹沿壶 4、6. 铁矛 5. 不詳 7. 铁环首器 8. 铅钗 9. 金耳坠 10. 铜鎏金鹿形饰，铜鎏金片？
11. 铜鎏金鹿首饰 12. 铁环首刀 13. 铁剑 14. 铜 15. 铜瓢 16. 铜魁 17. 铜 18. 铁犁镜 19. 铁矛
20.21. 铜旗，铜“工”字形片，铜鎏金片？铜鎏金带钩管摇叶 22. 铜鎏金人面饰 23-1. 铁兜鍪 23-2. 铁马胄（铁甲下）
23-3. 铁甲堆积 24. 铜鎏金带钩管摇叶 25. 铜鎏金翼形片 26. 铜鎏金铠尾 27. 铜带扣 28. 铜鎏金长方形器
29. 铜鎏金主形摇叶 30. 鎏金嵌木大胸泡 31.32. 陶小口罐 33. 铜条形片、圆主形片、铜圆形片，铜四叶形镂空摇叶
34. 铜魁，铜“工”字形片 35. 铜带扣，铜“工”字形片？ 36. 铜带扣 37. 铁、铜带扣 38. 铜环？铁环
39. 铁摇叶？铅带扣 40. 铁履钉？ 41. 铁带？铜“工”字形泡？ 42. 铜鎏金主形摇叶？铜鎏金带钩管摇叶？铁条状器？
43. 铁涓？铜鎏金翼形片？ 44. 不詳 45. 铁削？（带“？”者均为出土位置不詳）



图二 I M17铁甲堆积
1. 套箱内的铁甲堆积原貌 2. 铁甲堆积分区平面图

以套箱的四个边框为基准，量定分区网格→分组(A、B、C…)贴号(流水号1、2、3…)→数码相机水平拍照(放上比例尺)→打印黑白图像(A4纸)→上机建档(每天设一个文件夹，标明日期，将当日拍的照片存入并编号)→黑白图像核对并划定提取范围→填写提取登记表→标注提取部位示意图→典型甲片(块)的筛选、拼对及土锈清除→拍照(或扫描)、绘图→甲片的连缀形式、编排结构的考察→甲片的纸板仿制与连缀→复原报告的编写。

在清理过程中，对将要提取的每一组甲片，都要绘制两张图和填写三张表格，即《各组甲片排列、分布平面图》(以打印的黑白图像为依据)、《各组甲片提取部位示意图》(实测手绘)、“甲片提取登记表”、“典型甲片(块)登记表”(包括序号、提取时间、区间、组号、片号、重量、面向、叠压、保存状况、提取范围、图号、照像号、备注)和“甲片提取拍摄记录表”，以便尽可能多地发现并保存铁甲堆积的原始信息。

3. 甲片分型

根据编号，在I M17铁甲堆积的清理过程中，提取各类甲片共2233片(绝大多数为残片)，104组。从这些甲片的基本形制来看，可将其分为圆首片(即上圆下方形片)、方首片(即长方形片)和异形片三类。综合考察其片形、片孔和规格差异，参照I M5甲片形制划分，可将这三类甲片分为十七型。其中圆首片分十二型，方首片分为三型，异形片分为二型，诸型片孔一般为7-15个。单片规格和重量差别较大，小型片宽和长为3-5厘米左右，大型片可达3.5-17厘米以上；最轻者5.5克，最重者达66.2克。甲片分型情况可参见图三和表一。

4. 相关遗物

与 I M17铁甲堆积共存的其他相关遗物共17件。其中铁兜鍪已于此次清理之前先行起出修复，余者则是在清理过程中陆续发现的。

a. 兜鍪 1 件

I M17 : 21-1 残，已修复，后详。

b. 马胄 1 件

马胄：I M17 : 21-2 已破碎成100多片，后详。

c. 带扣共 9 件 皆锻制。可分两种：一种计 8 件，形制相同。多为“U”形圆柱体(个别似为四棱体)扣环，扣环两端扁平处穿孔贯轴并串联扣舌。

X1712 扣环和横轴均残，扣舌残失。扣环残长3.1、宽约2.9，截面直径0.6厘米左右(图四，5)。

L104 残。扣环残长2.6、宽3.1，扣舌残长2.1，截面直径约0.7厘米(图四，8)。

s763 扣舌残。扣环有粘连。扣环残长3.4、宽约3.4，截面直径0.7，扣舌残长2.1厘米(图四，3)。

j555 扣舌残失。锻制。扣环长3.7、宽2.5，截面直径0.6厘米(图四，2)。

I M17 : 21-01 基本完整。扣环残长3.2、宽约2.6，扣舌长3.1，截面直径0.6厘米左右(图四，9)。

o12078+1 扣环残，近四棱体其一端尚存残轴。扣环残长3.1、宽约2.3，截面和宽0.7厘米左右(图四，4)。

s790 断为三段，扣舌残脱。扣环残长3.9、宽不详，截面直径约0.6，扣舌残长3.3厘米(图四，6)。

y943 扣舌残失，折页锈残严重。铜制“U”形圆柱体扣环，铁制折页。扣环残长2.7、宽约2.4—2.8，截面直径0.3厘米(图四，7)。

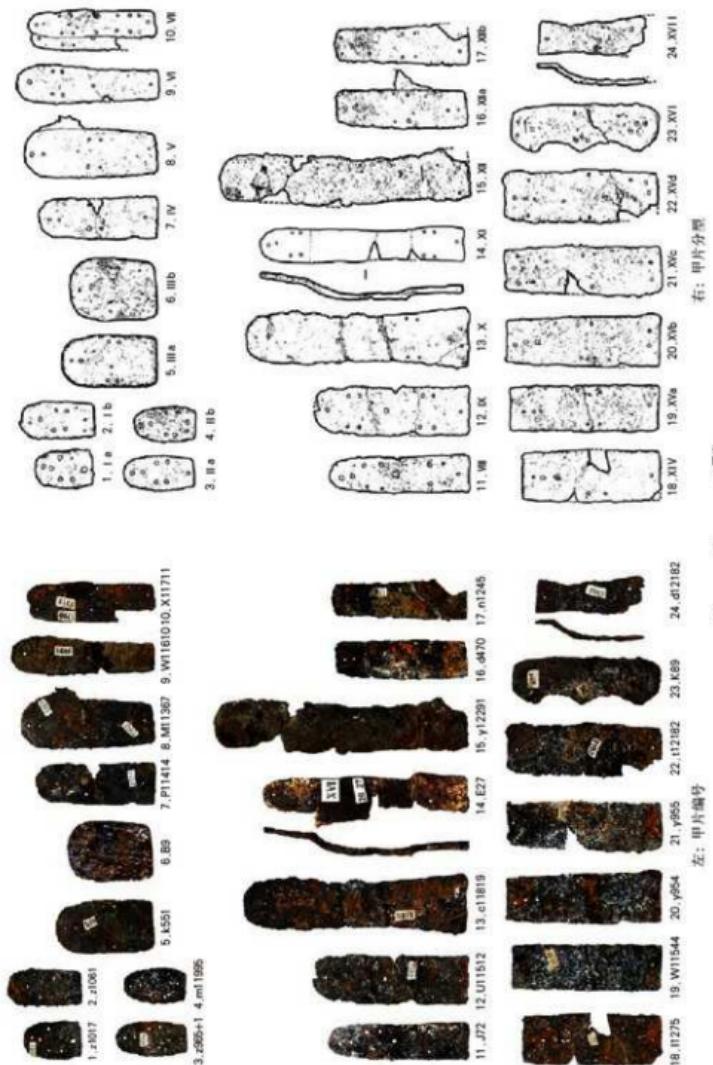
另一种仅 1 件。残。个体较大。

e1883 扣环一端和折页均残，两面有残片粘连。锻制。“U”形四棱体扣环，扣环两端略宽扁并各对穿二孔，在对应的二孔内再分别插装“T”形圆柱体扣舌和横轴，横轴串联折页。扣环残长6.7、宽约4.1，扣舌长5.3，截面直径0.7厘米左右(图四，1)。

d. 带镣 2 件

d1874 板、环均残。锻制。圆形□板正面有铆钉痕，背面有黄褐色皮革痕，一侧残鼻衔环。直径3.1-3.3、厚0.2厘米左右；鼻残长0.5，宽0.4-0.7厘米(图四，10)。

D1148 环残失。锻制。圆形板正面有三个铆钉，一侧有残鼻。直径3.1、厚0.3厘米左右(图四，11)。



图三 M17典型甲片编号与分型示意图

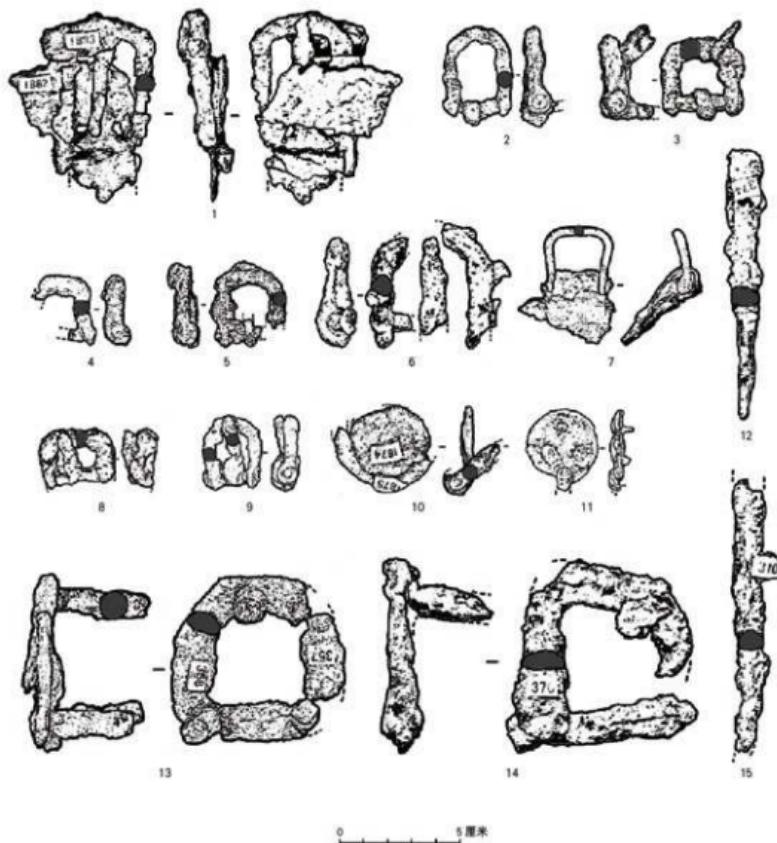
表一 IM17典型甲片分型简表

序号	编号	型别	规格(厘米) 长×宽(宽)×厚	孔数	重量	保存状况	片形	备注
1	z1017	Ia	4.2×2.8-0.2	7	5.5	完整	圆首	
2	z1061	Ib	5.5×2.7-0.2	7	8.4	完整	圆首	
3	z965+1	IIa	5.2×2.6-0.2	7	7.1	完整	圆首	
4	m1995	IIb	4.5×2.5-0.2	8	5.7	完整	圆首	
5	k551	IIIa	6.9×3.9-0.2	9	14.9	完整	圆首	
6	B9	IIIb	5.9×4.2-0.3	8	?	完整	圆首	有残片粘连
7	P1414	IV	8.7×(2.8-3.1)-0.3	7	21.1	残	圆首	
8	M1367	V	9.6×(2.9-3.5)-0.2	8	24.5	完整	圆首	有残片粘连
9	W1610	VI	10.2×(2.0-2.8)-0.3	7	19.5	略残	圆首	
10	Y1711	VII	9.1×1.9-0.3	15	?	完整	圆首	无单片
11	J72	VIII	10.1×2.6-0.2	12	16.5	完整	圆首	
12	T1512	IX	11.1×3.4-0.2	11	26.1	残	圆首	
13	c1819	X	15.9×(3.2-4.3)-0.4	12?	66.2	完整	圆首	
14	E27	XII	14.3×2.5-0.3	11	?	残	圆首	无单片
15	y2291	XII	17.6×3.5-0.3	?	?	残	圆首	无单片
16	d470	XIIIa	9.4×2.9-0.2	9	22.9	完整	方首	有残片粘连
17	n1245	XIIIb	9.6×(2.3-2.6)-0.2	11	15.8	残	方首	
18	l1275	XIV	9.8×3.9-0.2	8	24.4	残	方首	
19	W1544	XVa	10.7×3.3-0.3	8	28.2	完整	方首	
20	y954	XVb	11×(3.0-3.8)-0.2	9	29.2	略残	方首	
21	y955	XVc	11.4×(3.0-3.6)-0.3	11	29.9	残	方首	
22	t12182	XVd	11.1×3.9-0.3	13?	33.1	残	方首	
23	K89	XVI	11×3.5-0.3	9?	30.5	完整	异形	有残片粘连
24	d1868	XVII	7.9×(2.4-2.8)-0.2	3?	10.9	残	异形	

e. 履钉 2件

a370 锈蚀严重，二齿残失。锻制。仅存扁四棱体环，环上残存一齿。环长7.1、宽6.9、截面宽1.2-1.8、均厚0.8厘米左右；齿钉残高3.6、截面直径1.2厘米(图四、14)。

Z358 锈蚀严重，环残。锻制。扁四棱体环上直立三个圆柱体齿钉。环长6.6、宽5.6、截面均宽1.5、厚0.8厘米左右；齿钉均高3.5、截面直径0.8厘米左右(图四、13)。



图四 其他伴出器物

1-5. 带扣 (e.1883, j555, n763, o. 2078+1, x.1712) 6-9. 带扣 (n790, y943, L104, I M17 : 21-1)
10, 11. 带 (d.1874, D.1148) 12, 15. 带 (b374,V'310) 14, 13. 链钉 (Z308, a370)

f. 镰 2件

编号分别为b374和v'310。其中1件较完整，为苗式，窄平刃，铤作椎状，有朽木痕，长11.3、刃宽1.5、均厚0.8厘米左右；另件两端均残，残长11.5、宽0.8-1.4厘米(图四，12、15)。

5. 讨论

(1) 甲片的分组与分布

在 I M17铁甲堆积的清理过程中，我们按照编号顺序，将2233片甲片分为104个组，每组分别以大写和小写的26个英文字母按序表示。其中前52组分别标为A、B、C组和a、b、c等组；后52组标为A₁、B₁、C₁和a₁、b₁、c₁等组，个别情况下则在字母的右上方加注一撇，诸如k'、Y'等。除了残损过甚和清理中未见的7组甲片之外，其余97组甲片简况如图五、六、七和表二所示。由该图和该表可知：

在圆首片中，数量较多者有I型（包括Ia、Ib、Ic、Id诸亚型）甲片，即片型较小的鱼鳞片，主要见于一至四区和六区中的p、v、z-z'、K₁、L₁、S₁、a₁等组（表二，38、44、48、57、58、64、72）；VII型甲片主要见于五、八区的X₁组（表二，69）；VIII型甲片主要见于一、二、四、五、六、八区中的I、J、Q、X、Y-Y'、R₁、W₁、Z₁、r₁、z₁等组（表二，9、10、17、23、24、63、68、71、89、97）。

在方首片中，数量较多者有XIII型（包括XIIIa、XIIIb）甲片，主要见于四、五、七、八区中的C、T、c、k-k'、n-n'o、Y₁等组；XV型（包括XVa、XVb、XVc、XVd）甲片主要见于一至四区中的M、F₁、o₁、v₁、x₁等组。可见，从分布情况来看，主要集中在一、二、四、五和八区内。

在表二所列97组甲片中，片型单一且每组甲片在30片以上（以甲片编号为准，下同）者共有7组，即Y-Y'组（八、九区，43片，VIII型）、k-k'组（四、七区，77片，XIIIb型）、p组（六区，30片，Ib型）、z组（四区，84片，I型）、h组（五、八区，113片，XIV型）、S₁组（一、二区，36片，Ib型）、X₁组（五、八区，96片，VII型）（表二，24、33、38、48、56、65、70栏）。可见，从片型来看，以属于圆首片的I、VII、VIII型和属于方首片的XIIIb、XIV型为多。

含两种以上片型且每组甲片在30片以上者，除了C₁组（35片，片型不详）、e₁组和k₁组（各30片，片型皆未定）之外，共有8组，即T组（四区，38片，XIIIa、XVI?型）、q组（六区，48片，Ib?、II型）、s组（二、三区，46片，XVI型和其他片型未定片）、v-v'组（四区，48片，Ia、XIIIb?型）、R₁组（二、三区，36片，VIII、XVb?、XVI?型）、W₁组（四、五区，63片，VI、VII、VIII型）、s₁组（一、二区，33片，VIII型、XVI）、w₁组（一、二区，33片，VI?、VIII型）（表二，19、39、41、44、63、68、90、94栏）。综而观之，这8组甲片主要分布在一至四区，片型以VIII型甲片为最多。

需要说明的是，在对甲片进行分组编号提取的过程中，为便于整理，应尽量以片形相同的甲片为一组。至于造成一组甲片含有多种片型的原因，除了甲衣的某一局部单元可能由两种以上片型的甲片连缀而成之外，还由于甲片锈蚀严重、片型难辨和夹带粘连的缘故。

以上由表二所列各组甲片（块）的标本，除了片首残缺者之外，其他如图版一至图版四所示。

表二 喇嘛洞 I M17甲片起取一览表

序号	期别	号	编号	片数	起取范围 (厘米)	类别	编号	类别	单片 重量	片形	片孔	片数	面向	叠压状况	保存状况	简图	备注	其他
1	A	七	1-7	7	长10.5 宽6.5	块	1-7	1b		圆首	8	7	±	右压左	3片较完整	图十三、 图十四	两面有包边 痕和连缀痕	无
2	B	七	8-10	3	长6 宽5.5	块	8-10	11		圆首	8	3	±	右压左	1片较完整	略		无
3	C	七	11-22	12	长16 宽9	片 块	14 19-22	XIIIA XIIIB	13.6	方首 方首	8	1	±	右压左	少半残 2片较完整	图九、 图九	未见	
4	D	四	23-25	3	长8.5 宽5	块	23-25	XIIIB		方首	?	3	+	右压左	2片较完整	图九、 图九	无	
5	E	四、五	26-38	13	长17 宽7-12	块	26-33 34-38	XI XIIIA		圆首	12	8	+	右压左 右压左	4片较完整 无片完整	图十三、 图十三	无单片、背 面有连缀痕	无
6	F	五	39-47	9	长10 宽6	块	39-44	VII		圆首	12	6	±	右压左	少半残 1片完整	图六、 图九、 图九	55、57号板 为1片	未见
7	G	四	48-57	10	长16 宽15	块	55-56 48-50	XII XIIIA		方首 圆首	9	2	±	右压左 右压左	半残 1片完整	图六、 图九、 图九	55、57号板 为1片	未见
8	H	四	58-63	7	长10 宽9	块	59-62	XIIIA		圆首	12	4	+	左压右	2片较整	图六、 图六	两面有连缀 和包边痕	未见
9	I	—	64-70	7	长11 宽7	块	64-69	XIIIA		圆首	12	6	±	右压左	3片较完整	图六、 图六	两面有连缀 和包边痕	未见
10	J	—	71-82	12	长14 宽7-13	片	71 79-82	XIIIA XIIIB	16.5	圆首	12	1	±	右压左	1片完整	图六、 图六		未见
11	K	—	83-103	21	长18.5 宽12	片 块	98 91+92 101-104	XIV XIVC XIIIA	30.5 33	异形 方首 圆首	?	1	±	右压左	完整 较完整 2片较完整	图三、 图六、 图九、 图九	底缘有包边 痕	无

序号	组别	区号	编号	片数	起取范围 (厘米)	类别	编号	型别	单片重量	片形	片数	面向	叠压状况	保存状况	简图	备注	其他
12	L	—	104-116	13	长24 宽11	片	107 112	XVI ?	16.5	异形 块状	9 ?	1 1	— —	较完整 两面残	图十一、 图九。	104号为带扣 无完 片	二片 合一 带扣
13	M	—	117-134	18	长20 宽10	块	123-124 130-133	VII XIV	圆首 方首	12. 9	2 4	— —	右压左 右压左	1片较整 2片完整	图六、 图九。	边缘有包边 5 5	圆5 尾1
14	N	—	135-147	13	长16.5 宽13	块	135-136 XIIa?	方首	9.	2	石压左	1片完整	图九。	6	137-138- 140-143为马 背残片		
15	O	—	148-158	11	长8 宽7	片	155	VIII	17.7	圆首	12	1 —	—	较整	图六、 图九。	有粘连	
16	P	四	159-185	17	长27 宽14	块	168-169 ?	方首?	?	2	—	右压左	片首残失	略	块底边有包 边残	方4 尾4	
17	Q	四	186-201	16	长18 宽15	片	186	VIII	14. 1	圆首	12. 1	—	—	完整	图六、 图九。	7	有粘连
18	R	四	202-208	7	长8 宽7	片	203	XIIa?	14.6	方首	1	—	—	较完整	图九。	7	圆5 尾4
19	T	四	215-252	38	长45 宽5-24	片	215 226+228	XVI? XIIa	27. 14.6	异形 方首	6. 9	1 1	— —	较完整 较整	图九。 图九。	8 9	有残片粘连
20	U	四	253-271	19	长20 宽18	片	256+263 XII	圆首	?	1	—	—	少平残	图六、 图九。	9	圆4 尾1	
21	V	四	272-310	29	长23 宽13.5 长39 宽8-14	块	291-295 305-307 XIIa?	圆首 方首	7. ?	5 3	右压左 右压左	2片完整 较完整	图六、 图九。 图九。	10 10	272号为马嘴 残片。310号 残片	圆2 尾1	

续表二

序号	期别	号	编号	片数	起取范围 (厘米)	类别	编号	类别	单片 重量	片形	片孔	片数	面向	叠压状况	保存状况	简图	备注	其他
22	W	四	311-329	19	长10 宽17.4	片	319	VII	?	圆首	1	1	—	右压左	2片完整	图六、11	340号为连解	尾6 尾7
23	X	四	330-345	16	长28 宽7.5	片块	330-332	VII	?	圆首	12	3	—	右压左	少平残	图六、12		
24	Y	八、九	416-458	43	长48.3 宽6-12	片块	438	VII	18.3	圆首 圆首	12	1	—	右压左	4片完整	图六、15 图十三、3	有度量和连 续	方2 尾8
25	Z	八	346-360	15	长16.5 宽11	片块	360	111	429-435	圆首 异形	6?	1	—	左压右	较完整	图六、13 图十一、2	306为号属打	方2 尾2
26	a	八	361-392	10	长17 宽5	片块	362	XVI	?	异形 圆首	1	—	右压左	重残 较整	图十一、3	370为号属打		
27	b	九	371-392	22	长45 宽4-15	片块	384-386	XVa?	?	方首	7	3	—	左压右	2片较完整	图九、11	有包边和包 角痕	方3 尾2 374 号为 锁
28	c	八	393-415	23	长18 宽4 长13 宽4	片块	410	XIIIa	22.3	方首	?	1	—		完整	图九、12	有残片相连	方8 尾3
29	d	八、九	459-495	28	长47 宽5-12	片块	470	XIIa	22.9	方首	9	1	—		完整	图九、13	有耗连	方2 尾4
30	e	九	486-490	5	长8 宽3-6	片块	481-482	XIIa?	?	方首	9?	2	—		皆重残			圆2 尾1
31	f	五、六	491-516	22	长25 宽3-13	片块	540	?	?	狭长 圆首	?	3	—	右压左	两端残 1片完整	图六、16	有连缀痕	

序号	组别	区号	编号	片数	起取范围 (厘米)	类别	编号	型别	单片重量	片形	片孔	片数	面向	叠压状况	保存状况	简图	备注	其他
32	j	九	544-560	17	长24 宽4-26	片 块	551 545-547	11 XIV	14.0 23.8	圆首 方首?	11 13?	1 1	±			有包边痕		555 号为 带扣 尾19
33	k, k'	四、七	561-637	59-18	长12 宽13 长48 宽7-28	片	611	XIIIb	13.3	方首	11?	1	±			少半残	图九、14	方12 尾6
34	l	五、六	668-688	21	长40 宽11	片 块	668-669	?		方首?	?	?	±			重残	略	方1
35	m	五	731-746	16	长27 宽5	片 块	732-737	VII		圆首	12?	6	+	右压左	4片完整	图七、4	背面有连痕 尾3	
36	n-n'	五、八	1239-1260	22	长17 宽10 长13.5 宽8.5	片 块	1245	XIIIb	17.3	方首 圆首	11?	1	±			残	图三、17	图3
37	o-o'	五、八	1211-1238 1261-1273	28	长15 长36 宽12	片 块	1235 1271 1267-1268	XIIb XIV	20.1 20.3	方首 方首 方首	11? 9 9	1 1 1	±	右压左	较完整 较完整 2片断缺	图十、3、 4、5	有残片粘连	方2 尾11
38	p	六、九	658-667	30	长26 宽11	片 块	660 638-641	lb	9.1	圆首 圆首	7 7	1 4	±	右压左	较完整 2片完整	图七、1 图六、17	有粘连 有连痕 尾5	方2 尾4 尾5
39	q	六	689-730	48	长23 宽7-17	片 块	723 707-708	lb?		圆首 圆首	?	2	±	右压左	重残 1片残	图七、3、 2	有包边痕	方1 尾9
40	r	五、八	747-761	15	长23 宽5-12	片 块	759-760	XVI		异形	?	2	+	右压左?	少半残	图十一、4	均为异形片	

续表二

序号	期别	号	编号	片数	起掘范围 (厘米)	类别	编号	型别	单片 重量	片形	片数	面向	叠压状况	保存状况	简图	备注	其他
41	s-e'	二、三	762-607	46	长39 宽4-13	片	765-767 769-771 806-807	?	方首? 异形?	?	2 3 2	上 上 上	左压右 右压左 左压右?	少半残 重残 少半残	图十一、 图十二、 图十三	5 763、790号 为带扣	方2 圆2
42	t	三	808-815	18	长15 宽12	片	808+809 XII(a)	?	方首?	?	1	上	半残	图九、 图十	二残片合一		方1 圆2
43	u	五、六	1309-1315	7	长13 宽5-9	片	1313	VII(?)	16.7	圆首	12	1	上	较完整	图七、 图八		
44	v	四	826-835 876-909	48	长41 宽36	片	838 887-888 XII(b)	6.2	圆首 方首	7 12	1 2	上 上	右压左 右压左	完整 1片完整	图七、 图九、 图十	含马首残 片, 876和 908号为连销	方2 圆5 尾10
45	w	一、四	910-925	16	长30 宽3-10	片	920-921 922-923 XII(b)	?	方首 圆首	10	2	上 上	右压左 右压左	较完整 1片完整	图九、 图七、 图八		方2 圆1 尾1
46	x	—	926-942	17	长25 宽6-23	块	934-935	?	圆首?	?	2	上	左压右?	残	路	939号为马首 残片	圆4 尾4
47	y	四、七	943-959	17	长26 宽5-12	片	948 956-957 954 951-952 XII(b)	1b V V VII XII(b)	9.2 29.2 9 10.7	圆首 圆首 圆首 圆首	7 7 2 2	上 上 上 上	右压左 右压左	完整 1片完整 完整 完整	图七、 图八 图三、 图四	944、945号 为马首残 片; 943号为 带扣	
48	z	四	960-1062	84	长31 宽12-25	片	1017 965+1 1061	1a 1c 1b	5.5 7.1 ?	圆首 圆首 圆首	7 7 7	上 上 上	完整 完整 完整	图三、 图二、 图一	圆29 尾9 宽20		
49	A ₁	五	1063-1080	18	长27 宽3-12	片	1066+1	1b	8.6	圆首	7	1	上	完整	图七、 图八	其中1065号 为连销	方2 圆4 尾2

续表二

万承 白云湖 侯代路 当俊涛

序号	组别	区号	编号	片数	起取范围 (厘米)	类别	编号	型别	单片重量	片形	片数	面向	叠压状况	保存状况	简图	备注	其他
50	C	六	1096-1130	35	长20 宽4-14	片 块	1126	?	?	圆首	7	±		少平残	图七、10		方7 圆8
51	D	九	1131-1152	22	长26 宽3-26	片 片	1131 1138 1139	XVI 11 VIII?	?	异形 圆首	?	±	?	半残	图十一、6 图七、11. 12.	带铸	方3 圆5
52	E	三	1153-1177	25	长18 宽9-16	片 片	1153 1156	XVI XIV?	?	异形 方首	7	1	?	重残	图十一、7 图九、18		方2 尾3
53	F	一	1178-1181	4	长13 宽7	块	1178-1181	XIIIB		方首	10	2	±	右压左	1片完整		
54	G	二	1182-1193	12	长21.5 宽5-14	片	1184	?			?		?	未见	略	多为马首残 片	方1 圆3 尾2
55	H	—	1194-1210	17	长28.5 宽3-9	块 片	1194-1198 1207-1209 1210	XIIIA? XIV? XIV	?	方首 方首 异形	9 3 ?	±	左压右 左压右	2片完整 1片完整 少平残	图十、1 图十一、8 图十、6	背面上有包边 痕	方5 尾1 尾2
56	I	五、八	1274-1286	113	长38 宽10.5	片 块	1275 1282	XIV XIV	24.4 29.5	方首 方首	9	±		较完整	图三、18 图十、6		方2 尾4
57	K	五、六	1316-1341	26	长21 宽18.5	片	1335	Ia	8.3	圆首	7	1	±	完整	图七、14	有粘连	圆9 尾5
58	L	六	1342-1363	21	长20 宽15	片 块	1359 1356-1357	Ia	11.2	圆首	7	1	±	右压左	1片完整	图七、15. 16.	圆7 尾8
59	M	六	1363-1376	14	长18 宽11.5	片 片	1367+1371 1369 1369+1370	V 11 IV?	24.5 14.9	圆首 圆首 圆首	8 1 1	±		完整 完整 少平残	图七、17. 18.	有粘连	方1 圆5 尾2

续表二

序号	期别	号	编号	片数	起取范围 (厘米)	类别	编号	类别	单片 重量	片形	片数	面向	叠压状况	保存状况	简图	备注	其他
60	Q	五、六	1393-1402	10	长15 宽12	片 块	1394-1395	XIIa XIVa	?	方首 方首	1	±	完整 略残	图十、7	二片相连	尾2	
61	P	六、九	1403-1416	14	长22 宽17	片 块	1414 1416	XV VIII	21.1	圆首	7	±	完整 半残	图三、7	圆2 尾5		
62	Q	三	1417-1432	16	长19.5 宽14	片	1425	XV	?	圆首	?	?	残	图七、20	方1 圆1		
63	R	二、三	1423-1468	36	长39.5 宽19	片 块	1447 1462 1452-1454	XVb VII XVI	22.5 18.7	方首 圆首 异形	10 12 7	± ± ±	右压左) 完整 两面残	图十、8 图七、21 图十一、9	方1 圆3 尾4		
64	S	一、二	1469-1502	36	长31 宽9	片	1484	1b?	8.9	圆首	7	±	较完整	图七、22	方3圆9		
65	T	二	1505-1508 1517-1525	4+9	长19 宽16	片 片	1507	XVIc IX	?	方首	11?	1	±	少半残	略	方1 尾4	
66	U	二、三	1509-1516	8	长31 宽18.5	片	1512	IX	26.3	圆首	12	±	完整	图三、12	圆5 尾4		
67	V	二、三	1523-1553	21	长37 宽17.5	片 块	1544+1 1535-1540	IX XIV	?	圆首 方首	11 8	± ±	右压左 少半残 3片完整	图七、23 图十、9	与2225- 2227合并 含3种片型别		
68	W	四、五	1554-1616	63	长42 宽27.5	片 块	1553 1559-1560 1610 1612-1613	VII VII VI VI	17.9 19.5	圆首	12	1	右压左 右压左 较完整 较完整	图八、1 图七、24 图三、9 图八、2	圆4 嘴6 尾8		
69	X	五、八	1617-1712	96	长45 宽21	片	1710-1711	VII	?	圆首	14?	2	±	1片完整, 有包边痕	图三、10 扣	圆30 尾38 完2	

序号	组别	区号	编号	片数	起取范围 (厘米)	类别	编号	型别	单片重量	片形	片数	面向	叠压状况	保存状况	简图	备注	其他
70	Y ₁	五, 八	1713-1773	61	长45.5 宽21.5	片 块	1715	XIIa	16.5	方首	9?	?	?	较完整	图十, 10	方2 圆3	
71	Z ₁	八	1774-1792	19	长21.5 宽11	片 块	1779	VIII	15.2	圆首	12	?	?	较完整	图八, 3	方1 圆4 尾4	
72	a	二, 三	1793-1816	24	长31.5 宽9.5	片 块	1793-1795	Ib		圆首	7?	3	?	左压右	1片完整	图八, 4	圆1 尾4
73	b	六	1822-1846	25	长44.5 宽17	片 块	1831	VIII	25.1	圆首	8?	?	?	完整, 有 粘连	图八, 6	圆6 尾10	
74	c	六, 九	1817-1821 1847-1858	5	长33 宽16	片 块	1819 1820-1821 1858-1- 1858+3	X X?	96.2	圆首 圆首?	12 12?	2	?	左压右 左压右	1片完整 重残	图三, 13 图八, 5	方1 尾1
75	d	六, 九	1859-1875	16	长23.5 宽4-8	片 块	1868	XVII	10.9	异形		?	?	少半残	图三, 24	1874号为带钩	
76	e	九	1876-1905	30	长76 宽23	片 块	1884+1	X?	?	圆首	?	1	?	?	重残	图八, 7	1883号为带 扣
77	f	八, 九	1906-1930	25	长27.5 宽12	片 块	1912	VIII?	?	圆首	?	?	?	?	重残	图八, 8	圆2 尾9
78	g	八	1931-1942	12	长19.5 宽10	片 块	1942	?	?	圆首	?	?	?	?	重残	图八, 9	余残碎
79	h	二, 三	1943-1952	10	长18.5 宽1.4	片 块	1952	XVI	?	异形	?	1	?	?	半残	图十一, 10	
80	i	二	1953-1966	19	长10 宽12	片 片	1965 1961	XVb XIIa	20.4	方首 方首	10	?	?	较完整 少半残	图十一, 11. 图十二	方5 尾1	

续表二

序号	朝代	器物号	片数	起取范围 (厘米)	类别	编号	型别	单片 重量	片形	片数	面形	叠压状况	保存状况	简图	备注	其他
81	P	八、九	1967-1880	14	长21 宽14	片	XVI?		方首	9	—		少半残	图十、13		方1 尾2
82	K	五、六	2031-2660	30	长39 宽11	片	2052	18?	圆首	?	—		重残	图八、11	有包边或 尾5	
83	L	三	1981-1994	14	长19.5 宽12.5	片	1881+1984 +1985	XVI	33.7	方首	B?	—	较完整	图十、14	三片合—	方1 器3 尾4
84	M	二、五	1995-2017	23	长26 宽15	片	1986 1985+1	II VII	5.7 22	圆首	9	—	完整	图三、4	有残片粘 连	
85	N	四	2018-2030	13	长25 宽12	片	2024	?	?	?	—		重残	略	仅存片尾	圆4 尾4
86	O	四	2061-2078	18	长28.9 宽15	片	2068 2072	XVb XVe?	15 23.2	方首	9?	—	较完整	图一、15、 图16	2078+1号 为带扣	方4 尾10
87	P	二、三、 五、六	2079-2100	22	长33 宽7-13	片		?	圆首	?			多残片	略		圆5
88	Q	一、二	2101-2125	25	长25 宽15	片	2125 2106-2107 2115-2116	Ib Ib XVI	11.7 ?	圆首 圆首 异形	7 7 ?	—	左压右 左压石?	1片完整 半残	图八、13。 图十一、11。 2121为异 形片	圆3 尾3
89	R	—	2126-2145	20	长30 宽8-21.5	块	2128-2129 2134-2135	VIII VIII		圆首	?	2	—	左压右 左压石?	图八、14	有包边和 连体残 尾5
90	S	—、二	2146-2178	33	长38 宽10-17	片	2156-2157	XII VII	?	圆首	12?	1	—	右压左 半残	图十一、12。 图八、15	2150- 2154为异 形片
91	T	—、二	2179-2198	20	长20 宽8-13	片	2182	XIV	331	方首			较完整	图三、22		方3 尾3 ?

续表二

序号	类别	区号	编号	片数	起取范围 (厘米)	类别	编号	类别	单片 重量	片形	片孔	片数	面向	叠压状况	保存状况	简图	备注	其他
92	w	二	2199-2116	18	长24 宽5.9	片				圆首?						略		
93	w	二	2217-2330	14	长31.5 宽7.1	片	2217-2206	Xlb	26.8	方首	9?					较完整	图十、17	二片合一
94	w	—, 二	2231-2363	33	长48 宽8-18	片	2240-2251	VII VIII		圆首	8?	4	—	右压左	1片完整	图八、14,	片尾有包边	图三 尾6
95	w	二, 三	2264-2383	20	长28.5 宽16.5	片	2268-2278	Xla	24.1	方首 方首?	9?	3	—	左压右	较完整	图十、18	略	图四 尾3
96	y	二, 三	2284-2396	12	长19 宽24	片	2284-2285	VIIa	?	圆首	?	2	—	左压右	有钻孔	图三、15		方一 尾4
97	z	五, 六, 八	2296-2323	28	长47 宽10-16	片	2318-2300	VII VIII	32.0	圆首	12	1	—	左压右	少手残	图八、16		方2
												12	6		2片完整	图八、17,	有少量粘连	图二 尾2

注：1. 图B517-2525号（91件）、图1538-533号（16件）、图1536-535号（12件）、图1536-1065号（15件）和图1526-1398号（22件）单片皆破碎甚，片型未定。未列入表中；图B269-241号（6件）和图1526-1392号（16件）单片皆破碎未见。另有一组186-1858号（261组）下部微片。

2. 带“*”处表示两个不同编号的碎片合为一片。

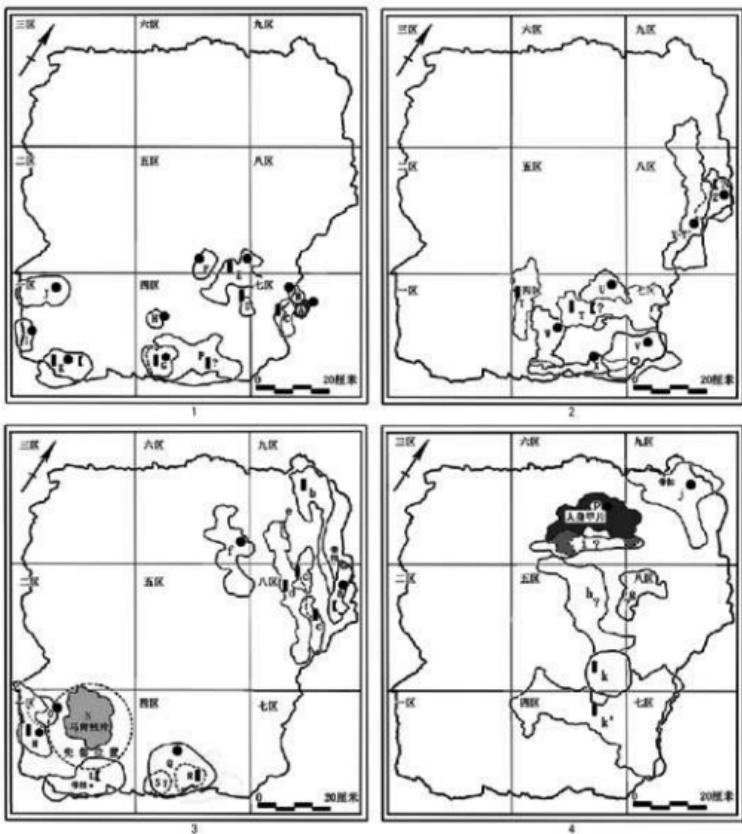
3. “面何”栏内的“—”表示单片正面向上，“—”则表示正面向下。

4. “右压左”表示右侧片在左侧片之上时，右侧单片的左端压在左侧单片的右侧之上，余同。

5. “保存状况”栏中的“完好”、“半残”和“破碎”。分别表示该片为完整片或部分缺损片或碎石。

6. “表中号？”处表示“是真”或“可疑”。

7. “其他”栏内“万”字前面2尾4足2分则表示方首影片3片，圆首影片2片，片尾4片，完整的完整片2片，余同。

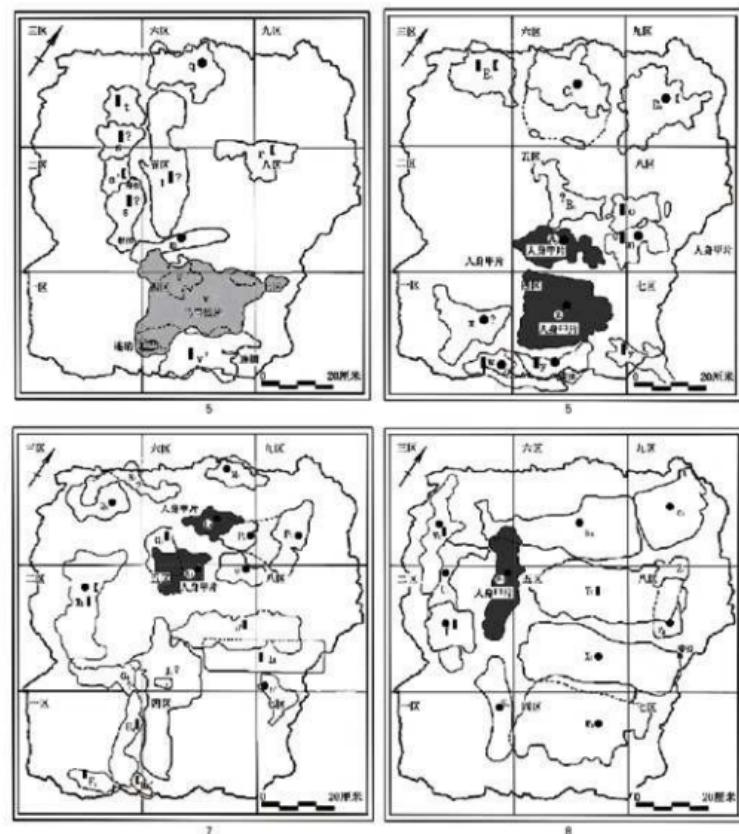


图五 喇嘛洞 I M17铁甲堆积各组甲片提取部位示意图
(说明: 图中标“●”者为方首片; 标“●”者为圆首片; 标“□”者为异形片; 标“?”者为片型未定。)

(2) 甲片的排列、叠压和连缀

关于这方面的情况, 可以选定的“典型块”来说明。所谓“典型块”, 即指由形制相同的甲片组成并保持原始叠压状态的若干甲片的组合。在选定的由圆首片组合成的三组典型块(A4-7号、Y'429-434号和F39-47号)中, 均为右压左, 即在圆首向上时, 左侧甲片的右边叠压在右侧甲片的左边之上, 如此依次由左向右叠压, 构成一个横排, 反映了I b、XI和VIII型甲片的叠压状况, 其连缀痕迹和连缀示意可参见图八。

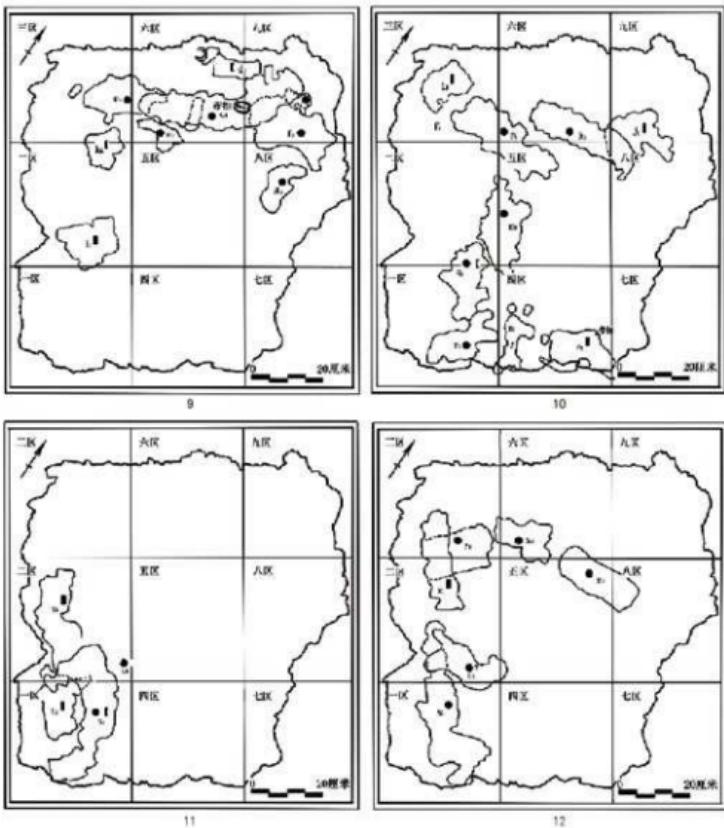
在选定的由方首片组合成的两组典型块中, 以带有纵向三孔的一端为方首的片首, 带有



图六 利家洞 I M17铁甲堆积各组甲片提取部位示意图
(说明:图中标“■”者为方片片;标“●”者为圆片片;标“|”者为异形片;标“?”者为片型未定。)

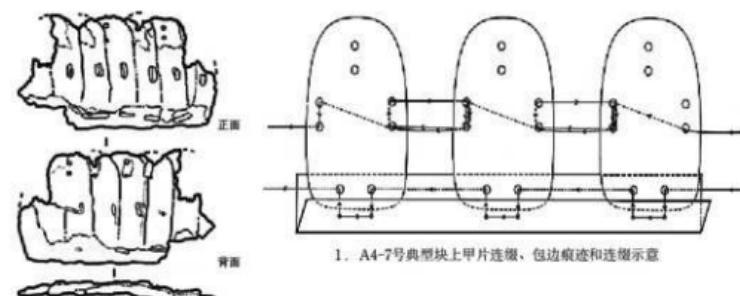
横向并列二孔的一端为其片尾。叠压情况与圆首片相同,其典型块可以C19-22为例,代表了XIIIfa型甲片的叠压情况。至于连缀情况,虽然保存的相关痕迹很少,但还可从典型块E34-38上窥见端倪(图九、5、6)。

如果将甲片与甲片之间的叠压视为一种横向叠压的话,那么,在由数排甲片连缀成的若干甲衣局部之间的叠压则是一种纵向叠压,这种叠压关系可从图五至图七上的标示予以说明。图上的双重边缘线即为套箱的四个边框;边框内侧的加重线为铁甲堆积的轮廓线;图中的网格即为在套箱开口上拉出的“井”字形基线,其作用是将套箱内铁甲堆积的平面大致等

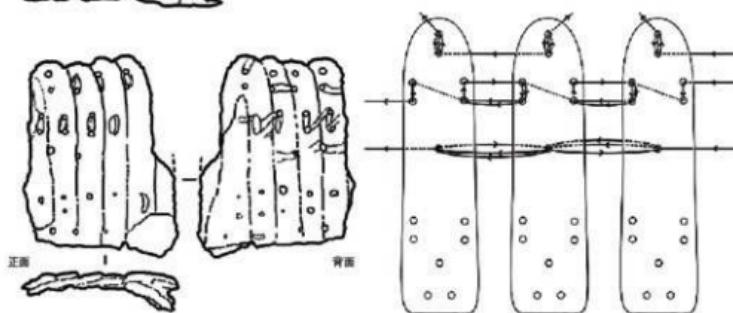


图七 喇嘛洞 I M17铁甲堆积各组甲片提取部位示意图
(说明:图中标■者为方音片;标●者为圆音片;标△者为异形片;标?者为片型未定。)

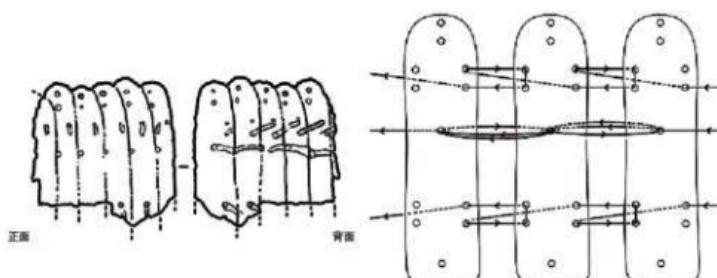
分为一至九个网格区，以便确定铁甲堆积中各个甲片组之间的相互位置和叠压关系。图上标有英文字母的诸多不规则形图案，则表示不同甲片组在铁甲堆积平面上的位置和分布范围。由于图中的诸甲片组的位置和范围大致是按照由上至下的清理层次标示出来的，因此，可客观地反映出某不同区内各组甲片之间以及同一区内不同组甲片之间的纵向叠压(即上一层甲片组与下一层甲片组)关系。如图中的四区是各组甲片叠压较为集中的一个区。在该区内，计有T组(XVI?、XIIa型片)、U组(XI型片)、K'组(XIIib型片)、v组(Ia、XIIib?型片)、z组(Ia、Ic型片)、J1组(?型片)、W1组(VIII、VII、VI型片)、X1组(VII型片)共8组甲片具有



1. A4-7号典型块上甲片连缀、包边痕迹和连缀示意



2. Y'429-434号典型块上甲片连缀痕迹和连缀示意



3. F39-47号典型块上甲片连缀痕迹和连缀示意

0 5厘米

图八 I M17铁甲推积中典型块上的连缀和包边痕迹

直接的上下叠压关系，即 $T \rightarrow U \rightarrow K' \rightarrow v \rightarrow z \rightarrow J_1 \rightarrow W_1 \rightarrow X_1$ 组。如果以每组甲片为一层甲衣残骸的话，则 I M17铁甲堆积至少是由 8 层甲衣的局部(单元)叠压而成的(图五，2—图六，8)。其他如五区和八区的 $T \rightarrow k-k' \rightarrow n-o \rightarrow o' \rightarrow l \rightarrow X_1$ 组、四区和五区中的 $A_1 \rightarrow J_1 \rightarrow W_1 \rightarrow X_1$ 组、六区和九区的 $b_1 \rightarrow c_1 \rightarrow k_1 \rightarrow j_1$ 组等均为四层叠压之例(图六，6、7；图六，图七，8—10)。

(3) I M17与 I M5甲片形制的比较

在 I M5甲骑具装复原研究中，曾将编号统计的3156片甲片共分为23型^[3]。在 I M17铁甲堆积清理中，我们将编号统计的2323片甲片分为17型。两相比较，在 I M17中，

共有10种片型与 I M5的相应片型相同或相似(图十)。

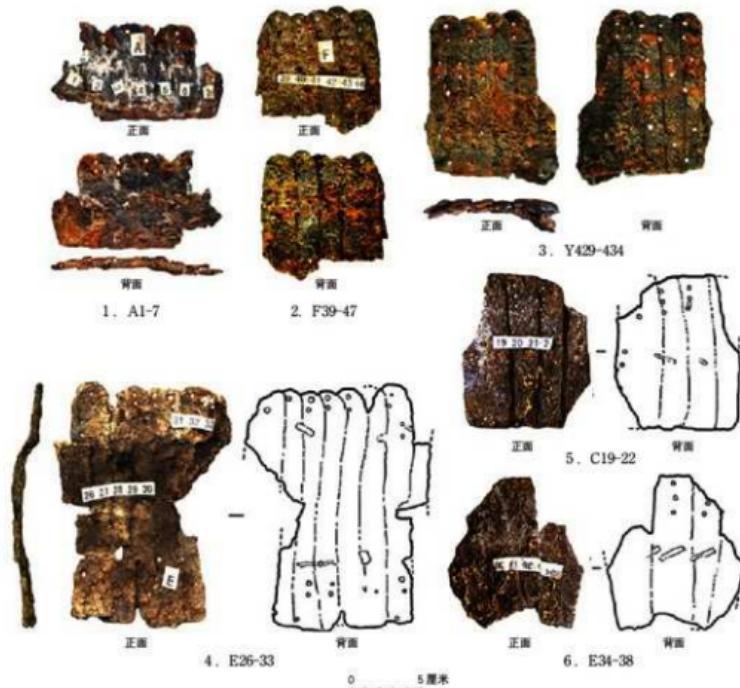
如上所述，在 I M17的圆首片中，I型和VIII型是其主要片型。这两种片型分别与 I M5的I、II型和V型相同。I M17的I型片，包括 I a 和 I b 两个亚型，又称“鱼鳞片”，亦属常见片型之一，在 I M17的方首片中，XIII型和XV型是其主要片型。其中XIII型包括XIIIa 和XIIIb两个亚型，这两个亚型分别与 I M5的XIII型和XX型基本相似。I M17的XV型中包括四个亚型，其中仅有XVd型与 I M5的XVII略似。

此外，还有以下两种片型值得注意。

一是XI型甲片。此型虽属于圆首片，但片形狭长，侧面弯弧，是形制比较特殊的一种，仅见于四、五区的E组和U组中(图三，14；表二，5、20)。此型片虽与 I M5 中的III型片相同，但在 I M5铁甲复原报告中对此型片的用途未作交代，姑存疑。不过，在 I M5的铁甲堆积中曾见与这种侧面弯弧的甲片相似的片型，平均长12、宽2.8-3.3厘米，虽明显短于长达14.3厘米的 I M17 XI型片，但其用途(被复原为甲衣的腰际缀片)可资参考^[3]。以这种较长大的弯弧甲片作为人甲腰际的甲片的做法，在日本大阪长持山古坟出土的5世纪挂甲上亦可找到相同的例子^[4]。

二是XVI型甲片。此类异形片与 I M5中的XIX型甲片相同，分别见于一、二、三、五、八区中的K、L、a、ri、Di、E₁、hi、l₁、s₁等组中，数量较少且多与其他片型混杂一处。其中位于五、八区的r组(15片)和二、三区的h₁组(10片)为含有单一XVI型片的两个甲片组。从保存状况来看，不仅锈残较重，而且排列形状也不规则(图六，5；图七，9)。K、L、q₁、s₁组中的异形片均见于兜鍪残片所在的一区及附近，似乎与甲衣上的颈甲有关。其中的典型块R₁1452-1454号侧面弯弧：Z354-355号中的355号甲片形制独特，似应分别属于颈甲后部中间合拢处的收口甲片(图版四，2)。果如是，则为 I M5颈甲的复原提供了一个新的佐证。通过以上初步比较，不难看出以下两点：

其一，与 I M5相比，I M17同前者一样，其圆首甲片虽仍占主体，但方首甲片的数量明显增多。在表二中所列的97组甲片中，可确认由单一的方首片构成的甲片组共20组，由单



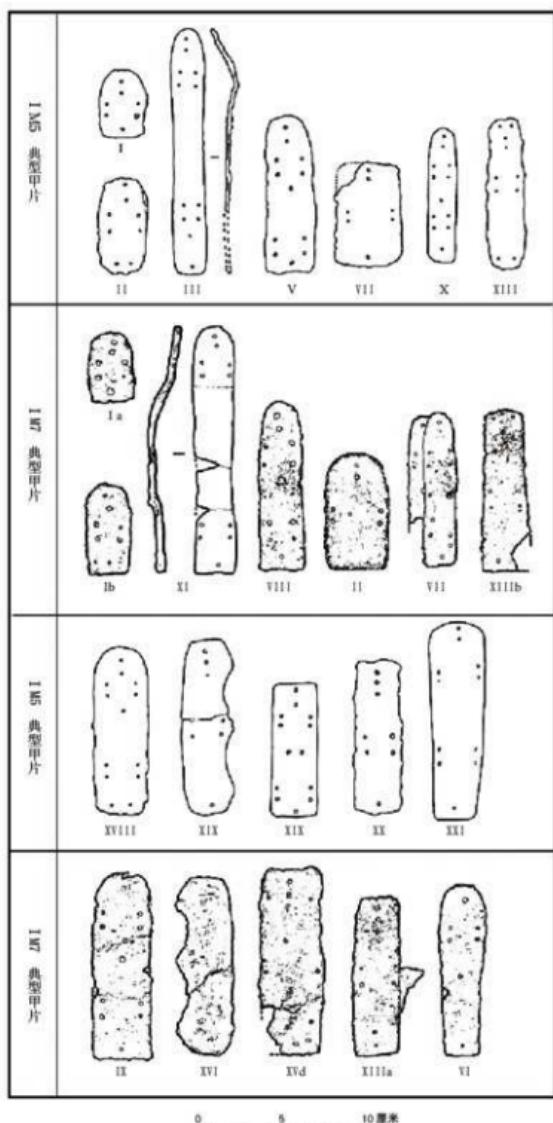
图九. I M17铁甲堆积中典型块上的连缀和包边痕迹

一的圆首片构成的甲片组共39组。二者分别占全部甲片组总数的21%和40.2%。I M5的甲片虽未曾做过这方面的统计，但在其23型典型片中，除了XVII型甲片之外，几乎不见像I M7的XIII、XIV和XV型那样棱角分明的方首甲片。

其二，图十中所列I M17和I M5的12种可资比较的典型片中，形制相同者仅占一半左右。I M5的X至XVIII型等片型基本不见于I M17的甲片中；而在I M17的片型中，除了那种棱角分明的方首片之外，像X型、XI型那样的长大厚重甲片均属前所未见。因此，就二者的甲片群的总体形态而言，其间的差异性大于相似性。

(4) 甲骑具装的局部复原推测

与I M5甲骑兵具装的甲片相比，虽然I M17铁甲堆积中的甲片锈残更甚，其片型也多有不同，但兜鍪和马胄伴出、人甲（以I型甲片为代表的“鱼鳞片”）和马甲（以X型、XII型和方



图十 I M5与I M17典型甲片比较示意图

首片为代表的比较长大的甲片)共存的现象都说明了其甲骑具装的性质。从 I M5 甲骑具装复原研究的基本方法来看, 可分为实证复原和推测复原两种。实证复原的要件包括片型、叠压关系、片数和排数(依据同型甲片的分布范围、排列面积)、连缀痕迹(横向的片与片、纵向的排与排)。其中片数决定复原对象的宽度, 排数决定复原对象的长度, 而纵向连缀方式决定其结构特点(板块结构或伸缩结构)。推测(想象)复原则在上述要件不足的情况下, 以复原对象的残骸遗构为依据, 参照其他相关或相似的资料(已发表的有关图像、模型和其他复原研究成果等)所进行的局部复原。

鉴于 I M17 甲片的残损和锈解程度较 I M5 严重, 故试做以下局部重点复原。

a. 甲骑, 包括兜鍪和人身甲两部分

① 兜鍪 铜制。该项兜鍪原位于 I M17 中死者足下西南角处的铁甲堆积之上, 出土时已残破, 无完整片。经修复, 可知此件兜鍪共由 9 片上窄下宽的狭长梯形包片组成, 侧面近圆台状。铁片平面为纵向狭长梯形, 纵截面近“~”形。兜鍪正面铁片底缘呈双联弧形眼窗, 并布有大致等距的七孔。以此片为中心, 其左右两侧的铁片自前向后依次叠压围拢, 近底缘处横布二至三个小孔。兜鍪后面收口处则以另一铁片在内侧承托接合, 各片铁片叠压处一般加铆三钉。高 19.9, 底直径 23.6-24.2, 顶口直径 7.6-8.9, 均厚 0.4 厘米左右。试以兜鍪正面的中间包片为起点, 按顺时针方向将诸包片依次编为 1-9 号片(图十一, 右上)。诸包片的形制、规格和叠压情况如下:

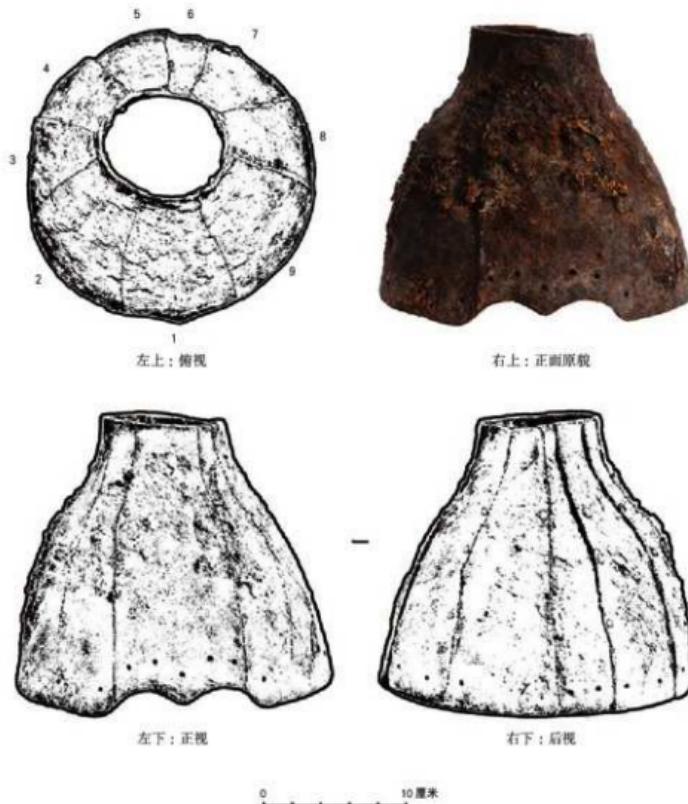
1 号片片形上窄下宽, 底缘留有双联弧形眼窗和五个钉孔, 长 20.5, 宽 4.2-11, 均厚 0.3 厘米。

2、3、4、5、7、8、9 号片, 分列于 1 号片两侧, 其中 2、3、4、5 号片在其左, 7、8、9 号片在其右。在叠压关系上, 1-5 号片为左压右; 1、9、8、7 号片则为右压左。此外, 与 1 号片叠压的 2 号和 9 号片底边于眼窗处均抹一角。诸片之间的边缘叠压处以纵向排列的 3 个铆钉铆合。诸片均长 21.5, 上宽 4.0-4.2, 下宽 8.5-11.5, 均厚 0.25 厘米。

6 号片大致位于与正面 1 号片相对应的兜鍪背面中间处。片体明显较窄, 为从 1 号片两侧依次叠压过来的两组包片的接口片, 长 21.5, 宽 3.5-7.0 厘米。

此外, 与该副兜鍪伴出者, 还有 Ia 和 Ib 型甲片 22 片, 应为其垂缘甲片的一部分。王振江先生曾将该垂缘部分复原为横向三排排列, 甲片圆形片首一律向下, 上排压下排。其中一、二排皆 25 片, 下排为 23 片, 每排以中间甲片为基准, 左半部排列为右压左, 右半部则为左压右。全长 52, 均宽 10.7 厘米。复原结果与 I M5 兜鍪垂缘基本相同^[5](图版五)。

在迄今所见经考古发现并复原的十六国时期的 3 副铁制兜鍪中, I M5 和朝阳十二台乡 88M1 所出者均为封顶式, 唯 I M17 所出者为“透顶式”, 这一特点与河北临漳县邺南城出土的北朝时期的 II 铁胄相同^[6]。这种特型设计或与某种盔顶装饰有关, 亦即这种“透顶”可

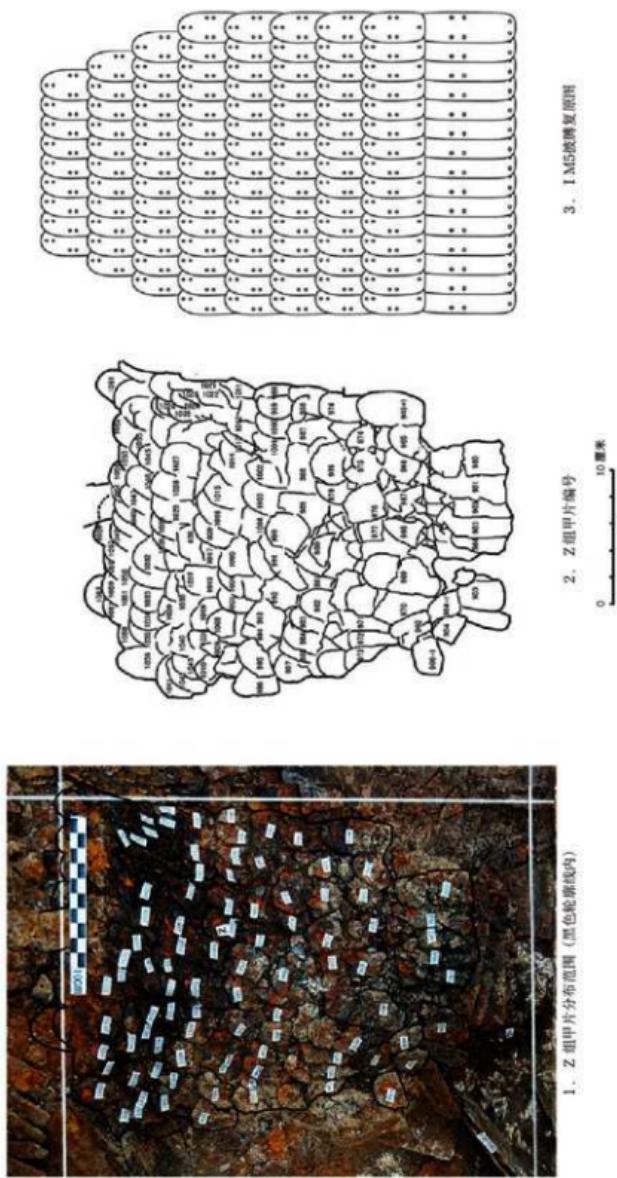


图十一 铁兜鍪 (IM17: 21-1)

能是为某种盔顶装饰而预留的。

(2) 人身甲 从 I M5 甲骑具装的复原结果来看，片型较小的圆首甲片(即该墓的 I、II 型甲片，亦即所谓“鱼鳞片”)是构成人甲的最主要的片型。在 I M17 铁甲堆积中，与 I M5 的 I、II 型片基本相同的 I 型片数量较少，主要见于六区 p 组、五区的 A₁ 组、四区的 z 组、六区和七区的 K₁、L₁ 组、二区和三区的 a₁ 组中，另有一些 I 型片则散见于含有其他片型的 v-v' 组、y 组和 q₁ 组中(图五，4；图六，6、7、8)。

在这些 I 型甲片组中，以四区的 z 组的甲片数量为最多，编号共计 84 片，甲片标本见图三，1-3。该组甲片位于铁甲堆积的南部，人胃右侧，直接叠压在马胄残片层之下，作鱼



图十二 IM7 铁甲堆积 Z 组甲片分布图(黑色轮廓线) 1. Z组甲片分布图(黑色轮廓线)

3. M5组甲片复原图

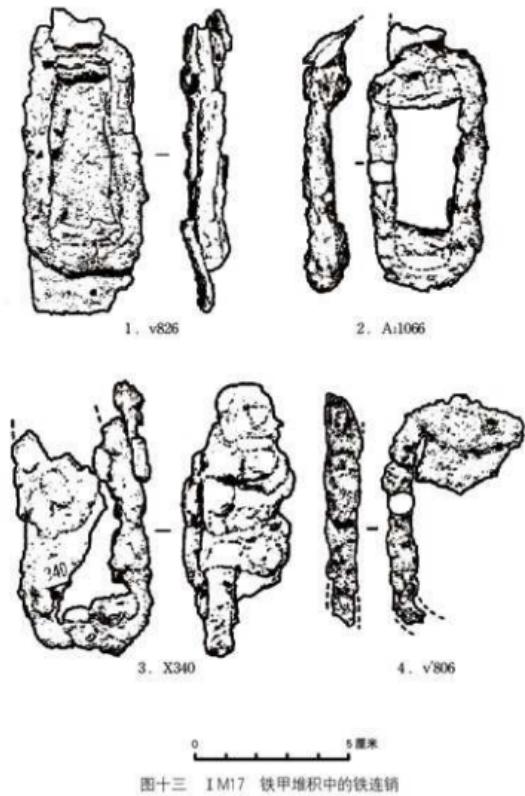
2. Z组甲片编号

0 10厘米

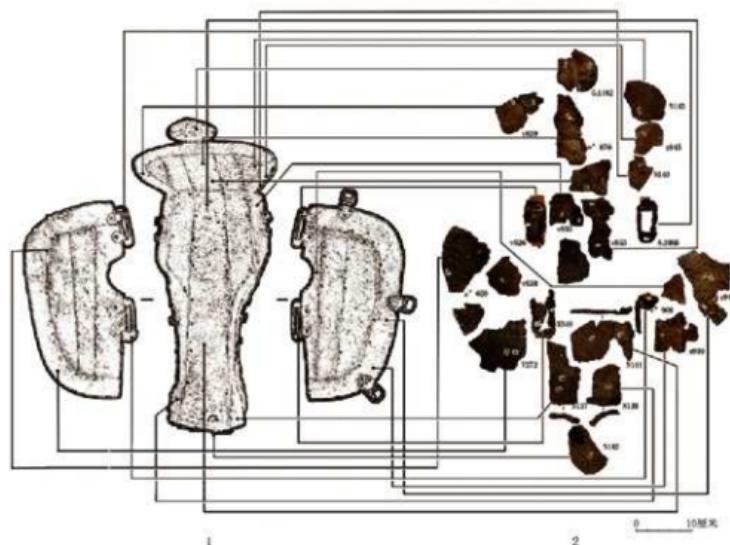
鳞状排列，计约12个横排。最长横排计有甲片12片左右，分布范围长31、宽12—25厘米左右（图六，5、6；图十二，1、2；表二，48）。从连缀情况来看，在圆形片首向上时，片与片之间为左压右，亦即横排一律由右向左压；各横排之间的纵向关系则为下排压上排，亦即由下向上叠压。该组甲片排列密集且较规整，周围边际亦较清楚，应是一个相对独立的甲衣单元。根据其片型、编排特点（鱼鳞状）和整体形状可初步判断，此组甲片似为甲衣上的披膊部分，其原形或如 I M5 的披膊复原之状（图十二，3）。至于其他各组I型甲片不仅分布零散，形状也不规则，应为被拆散的人身甲局部的残骸。

b. 具装，包括马胄和马身甲两部分

① 马胄 铜制。编号 I M17 : 21-2，破碎成百余片。这些残片分别位于一区和四区，分属N和v-v'两组，编号分别为N133-147、v826-873和v'874-909号，且分别叠压在兜鍪和



图十三 I M17 铁甲堆积中的铁连销



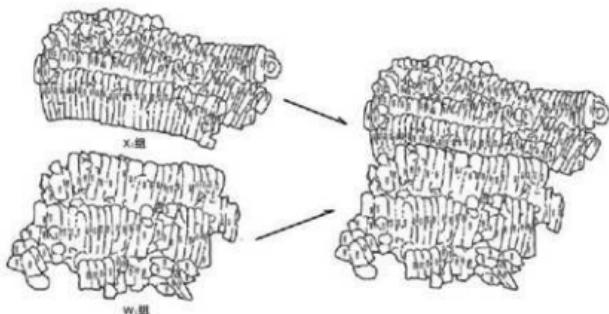
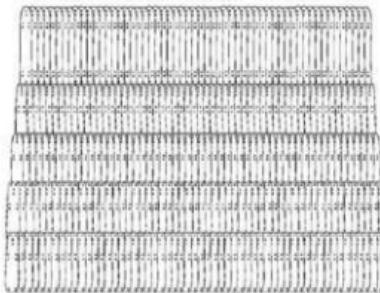
图十四 IM17马胃残片复原示意图
1. IM马胃 (IM5:49) 2. IM17马胃残片 (IM17:21-2)

k'组甲片之下(图五、3；图六、5)。两组残片虽然相邻，但彼此没有衔接关系，故推测原马胃可能是被打破成残片之后再随葬于墓内的。此外，还有一些散见于k'、G₁等组中的形状不规则形残片，似亦应与马胃有关。在这些残片中，个体较大(包括后经拼对者)或带有一定形制特点的残片计40片左右。除了片体较小、不能拼对且形状不规则的残片之外，根据马胃残片上保留的原形边缘、弯折和弯弧、铆接等加工现象，可将其分为三类：

一类作扣环状，平面近长方形，多有残片粘连。共四件，编号X340、s806、v826、A1066，后两件保存较好，均以圆柱体铁条弯制成近长方形的闭合式扣环状，一端略宽而一端略窄；其中的X340(与s891号合并为1件)在粘连的残片上还有铆接的穿鼻残迹。一般长7.5、宽3.6、截面直径0.8厘米左右。这些扣状器应为连接面罩和护颊板的铁连销(图十三)。

二类为边缘弯折或弯弧的残片。如N141+146，具二直边，其中一条直边附近弯折带有铆钉痕迹，片残长6.9、宽9.8-10.4厘米；N137，具二直边和一孔，其中较短的直边折叠加厚并向背面弯弧，残长10.9、残宽5.2厘米。这些残片似为位于马首鼻梁处的马胃中部的平脊残片。

三类为带有弧边，或背面有铆接痕迹的残片。如K'620，两侧有弧边，其中内侧弧边，背面有残片粘连(铆接？)。残长11.2、残宽7.4厘米。类似的残片还有V272和Y944。从其形

1. W₁组和X₁组甲编号和叠压关系示意2. W₁组和X₁组甲片分布范围（黑线轮廓内）

3. I M5马身甲复原图

0 10厘米

图十五 I M17 W₁、X₁组甲片和 I M5马身甲复原图比较示意

制特点上推测，似为位于马胄两侧的护颊板边框上的弯弧部分。还有某些弯弧弧度较大的残片，如G1182-1183、N142等，可能分别为马胄额部残片和马胄末端的护唇片。

在这些马胄残片中，值得注意的是前述四件一组的铁连销。在以往发现并得以修复的两副比较完整的马胄中，无论是朝阳十二台出土者(88M1：56)，还是北票喇嘛洞出土者(I M5：49)，在其面罩和护颊板之间，皆未见有这类比较完整的铁连销出土。其中前者的铁连销仅存少量残迹，而后者的铁连销则是复制上去的。因此，I M17马胄虽未能复原，但其铁连销的发现则具有填补空白的意义。

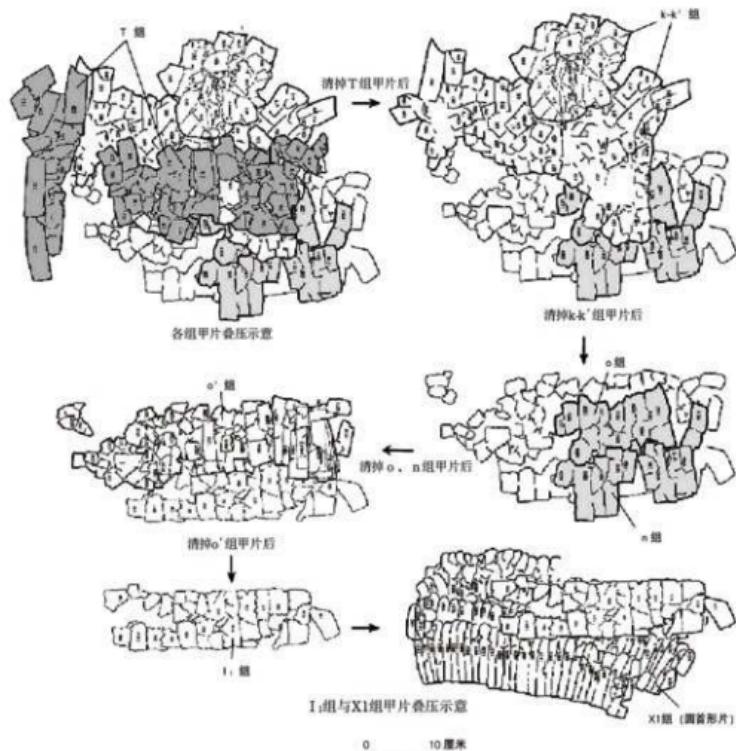
总的看，该马胄以均厚0.4厘米左右的铁板为原料，裁切、铆接和锻制而成，其整体形状和结构应与喇嘛洞I M5出土的马胄(I M5：49)基本相同。以复原后的I M5马胄为参照，可推测前述I M17马胄残片在原马胄上的部位大致如图十四所示。

② 马身甲 一般为长大而宽的甲片。试以若干保存较好的W₁和X₁组甲片为依据：

W₁组位于铁甲堆积南部的四区，大部分直接叠压在马胄残片层之下，是甲片数量较多

且编排原貌保存较好的一组甲片之一，编号W11554-1616。共计63片。片型包括VI、VIII型两种。甲片标本如图所示(图七，9，10；图三，9)。该组甲片现存3个横排，最长横排计23片，分布范围长42、宽27.5厘米左右(图十五，1；表二，68)。从连缀情况来看，在圆形片首向上时，片与片之间为右压左，亦即横排一律由左向右叠压；各横排之间的纵向关系则为下排压上排，亦即由下向上叠压。

X₁组位于铁甲堆积中部的五区和八区，其南缘直接叠压在W1组甲片之下，是片型单一且数量最多、编排原貌较好的一组甲片，编号X11617-1712，共计96片，均属VII型(图三，左10)。该组甲片现存3个横排，最长横排计36片，分布范围长45、宽21厘米左右(图十五，1；表二，69)。其中最上一排的右边缘还遗有1件带扣(图四，7)。从连缀情况来看，在圆形片首向上时，片与片之间为左压右，亦即横排一律由右向左叠压；各横排之间的纵向关系与



图十六 四、五和七、八区各组方首形片纵向叠压示意图

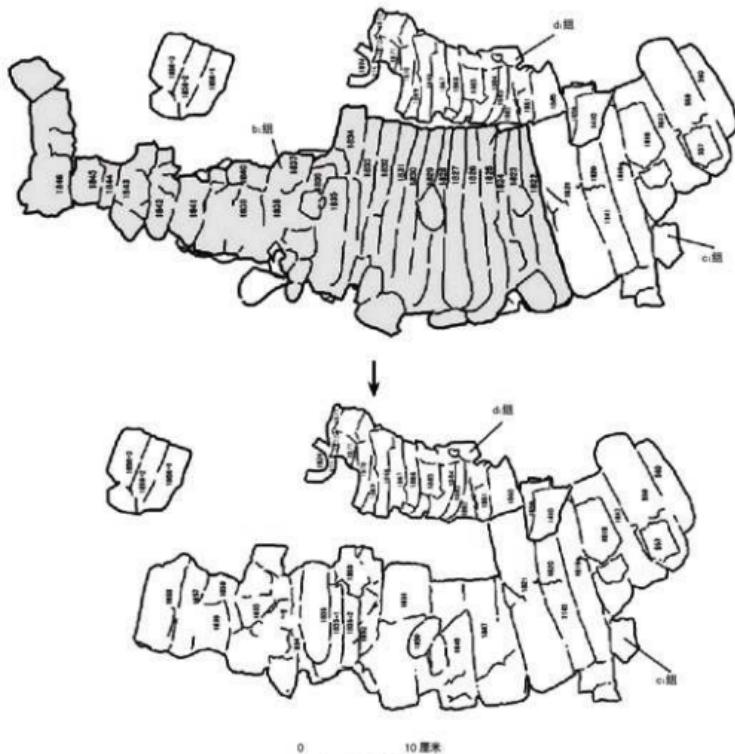
W1组相同。

以上两组甲片连缀一起，组成一个在 I M17铁甲堆积中排列最为规整、分布面积也最大的甲衣单元。其横向展长45、纵向6排宽46厘米左右。根据其片型、编排特点(三排较窄的VII型片与三排较宽的VI、VIII型片连缀组合)和整体形状可初步判断，此组甲片似为具装甲——马身甲的一部分，其原形或如 I M5的马身甲复原之状(图十五，3)。

(5) 其他相关问题

a. 关于方首片

如前所述，较多的方首甲片的出现是 I M17铁甲堆积的一个显著特点。从各方首甲片组在铁甲堆积上所在位置来看，由片型比较单一、数量较多且分布相对集中的若干方首甲片组



图十七 b组、c组与d组甲片关系示意

组成的组群主要有八、九区的b、c、d组，四、五、七区的k-k'、T、v'组，五和八区的o'、I_i、Y_i组。一至三区的t_i、v_i、x_i组。此外，在互联的二、三、五、六区内，还有含疑似方首甲片的l、s、t组（图五、3、4；图六、5、7、8；图七、11、12）。从各甲片组之间的纵向叠压状况来看，可以位于五区和八区的T→k-k'→no→o'→I_i→X_i组为例，共有6组甲片分6层叠压，其中最后一组叠压在一组圆首片（X_i组）之上（图十六）。在这些组甲片中，片型基本皆为规格较小的XIII型片，一般长9.5、宽2.5厘米左右，由于铁甲堆积中的各层甲片锈蚀严重，各组甲片之间很少见有直接的衔接关系。

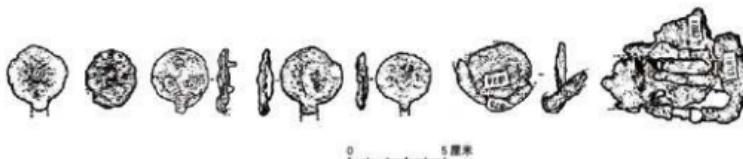
从已发表的相关资料来看，与 I M17铁甲堆积中的这类方首甲片相似且年代亦较相近者，唯有内蒙古呼和浩特二十家子西汉城址出土铁甲的甲片^[7]。在二十家子铁甲中，由这类方首甲片（即原报告所称的长方形片）所构成的是一领较完整的人用衣甲。这领衣甲的长方形片长10.5、宽3.4厘米左右^[8]，其规格与 I M17的XIII型片相近（一般长9.5、宽2.8厘米左右），但片孔较多，为18-20孔，而 I M17的方首甲片仅9-11孔。此外，在咸阳杨家湾陶俑上也见有这种方首甲片，属于用以防护胸和背部的礼甲^[9]。鉴于属于I型和II型的人身甲甲片在 I M17铁甲堆积中所见较少，故而推测，这类较小的XIII型方首片是否亦应为人身甲甲片的一部分尚未可知。

b. 关于XVII型甲片

一是位于铁甲堆积东北边缘处六区和九区的d_i组XVII型甲片。是一种不见于 I M5铁甲堆积中的新片型（图三、24）。此型甲片共16片，呈带状排列，一端有一环（编号1875，整理中未见），分布面积长23.5、宽4-8厘米左右。这些甲片的片首虽均已残失，但片尾平齐并有包边痕迹。片体皆向上弯弧，片与片之间的侧缘多有重叠。该组异形片的片尾与b_i组中部分保存较好且与排列齐整的VIII型圆首甲片的片尾相“对接”。b_i组甲片之下又叠压着一层c_i组X型圆首甲片（图十七）。从d_i组异形片的原始形态来看，好似人身甲上的“短领”部分。不过，如果将个体较大的d_i组和c_i组甲片视为马身甲甲片的话，则这些异形片又似与马身甲有关。至于d_i组异形甲片属于马身甲中哪一部位上的特殊结构，目前虽尚不能确指，但在以后的相关发现和复原研究中却是一个值得注意的新例证。

c. 关于带扣和带

在清理 I M17铁甲堆积的过程中，共发现带扣、带等15件。另有8件与之相类的遗物虽



图十八 I M17带扣和带扣组合示意

是在此次清理之前发现的，但从其出土位置来看，均在铁甲堆积范围内，故均应属于与该堆积有关的遗物。在这些遗物中，除了两件铁扣之外，其他诸如带扣、带、履钉等，无论在数量上还是在种类上都与 I M5随葬的甲骑具裝件出的相关器物相近。

在 9 件带扣中，唯有 e1883 号规格较大，形制特殊，在用途上亦应不同于其他规格较小的带扣。带 2 件，编号分别为 d1874 和 D1148。从出土位置来看，二者均见于这件个体较大的 Ab 型带扣附近，即 e1883 所在的六区和毗连的九区。另在田野发掘 I M17 时于铁甲堆积范围内也曾出土 4 件带（编号 I M17：41-1、2、3、4）。这些带应与带扣 e1883 组合为 1 套，其与 I M4 和 I M13 等墓出土的带扣和带组合是一致的^[10]（图十八）。

其他 8 件带扣均较小，且形制一致，均属 Da 型。在这些带扣中，除了 I M17：21-01 之外，其他带扣均发现于不同的甲片组中，如位于四区南部的 y943、八区中南部的 X1712 和六、九区交界处的 e1883 等（图五，3、4；图六，5、6、8；图七，9、10）。其中 y943 为铜环铁带扣，与 y944 号马胄残片相连（可拼接），X1712 位于成排的 X1 组 VII 型甲片侧缘处。至于其他带扣，虽尚未发现与甲片直接相连者，但如果仔细查对一下与之共存的甲片型的话就会发现，几乎所有的带扣都见于圆首片的甲片组中，而不见于方首片的甲片组中。此外，在铁马胄的护领板上使用铜环铁带扣的现象，也为十六国时期马具工艺的研究提供了一个新的例证。

d. 关于履钉

在 I M17 共发现 3 件，其中 2 件分别见于八区的两个甲片组 a 组和 Z 组中，其形制已如前所述（图四，13、14）。由于其齿环的平面形状与人腿后跟部相同，规格也相近，只是齿环上皆有柱状钉齿，故不妨暂将其称之为“履钉”。除了 I M17 之外，在喇嘛洞墓地其他大型墓葬中，这种履钉也仅在 I M5 中才有发现^[11]。可见这种履钉似乎并非一般的随葬之物，而是拥有甲骑具装的死者墓内才能够随葬它。两墓随葬的履钉形制基本相同，只是前者均为三齿，而后者既有三齿的，也有五齿的；齿环的合拢处虽均作重叠状，但合拢的部位又有所不同。从这类履钉的随葬位置来看，似应与甲骑具装有关，至于其作何用途还有待探讨。

6. 小结

以往对 I M5 甲骑具装的复原研究结果表明，墓内的铁甲堆积似在将人甲和马甲拆散后堆在一起形成的，并非完整的一套。这其中也可能有战时损毁和所谓“毁器”习俗影响的因素。关于这一点，在此次 I M17 铁甲的清理过程中再次得到证明。如分布在同一区间内的马胄残片和疑似颈甲的异形片，成片状保存下来的甲衣局部很少见，多呈带状和不规则形状分布等。

在考古发现的各类遗物中，铁甲堆积可谓是最难清理的一类，以往在这方面因束手无策或处理不当曾造成诸多遗憾和教训。所幸的是，以白荣金先生为代表的老一辈修复专家对各

地出土的古代铁甲进行了一系列的卓有成效的复原研究，逐步形成了一套比较成熟的经验、相对固定的工作流程和较为完善科学的处理方法。此次对 I M17铁甲堆积进行的清理，是继 I M5甲骑具装的复原研究之后，借鉴和参照这些经验和方法，对喇嘛洞墓地出土的铁甲堆积进行的第二次科学、系统的室内整理。虽然由于其锈蚀程度之重和保存状况之差均甚于 I M5，未能对 I M17甲骑具装的原貌进行整体复原，但通过此次对堆积的大量甲片进行科学的考察和系统地提取，相信仍然能够对以后的相关复原研究提供一些有益的参考和借鉴。

附记：I M17的发掘领队为时任辽宁省文物考古研究所副所长的张克举同志；铁兜鍪和垂缘的整理、复原者为中国社会科学院考古研究所技术室资深修复专家王振江先生。在此次室内清理开始时的2008年5月，中国社会科学院考古研究所技术室退休老专家白荣金先生曾亲临现场予以指导。在此后的整理过程中，又通过电话联系的方式多次得到白荣金先生的具体指教、释疑和解难，使清理工作和本报告的编写得以最终完成。本文由万欣执笔，摄影、绘图由穆启文、白云燕、万欣完成。铁甲拼复与保护处理由万欣、赵代盈、肖俊涛完成，在此一并特致忧谢！

注

- 〔1〕辽宁省文物考古研究所编：《北票喇嘛洞墓地》，待刊。
- 〔2〕关于 I M5铁甲堆积情况和复原研究结果，参见白荣金等：《辽宁北票喇嘛洞十六国时期甲骑具装复原研究》，《文物》，2008年第3期。
- 〔3〕同注〔2〕。
- 〔4〕《世界考古学大系3·日本》，85页，平凡社，1960年。
- 〔5〕据辽宁省文物考古研究所档案资料。
- 〔6〕白荣金著：《河北临漳县邺南城出土的北朝铁甲胄》，《中国传统工艺全集·甲胄复原》，273页，图18-41，大象出版社，2008年9月第1版。另见《考古》，1996年第1期。
- 〔7〕陆思贤：《呼和浩特二十家子古城出土的西汉铁甲》，《考古》，1975年第4期。
- 〔8〕原报告甲片数据有误，此数据根据图上比例尺换算所得。
- 〔9〕陕西省文物管理委员会等：《陕西咸阳杨家湾出土大批西汉彩绘陶俑》，《文物》，1966年第3期。
- 〔10〕同注〔1〕。
- 〔11〕同注〔1〕。这类履钉在IIM196中也曾有发现，然而形制不尽相同。该墓虽未见有甲骑具装出土，但却随葬有鎏金铜带具，表明死者的身份亦不一般。参见《辽宁北票喇嘛洞墓地1998年发掘报告》，《考古学报》，2004年第2期。



图版一 M17铁甲堆积中各组圆首甲片(块)标本



图版二 IM17铁甲堆积中各组圆首甲片(块)标本



图版三 M17铁甲堆积中各组方首甲片(块)标本



图版四 I M17铁甲堆积异形甲片（块）标本



图版五 I M17铁兜鍪与垂缘的分解和连缀示意图

遼寧北票市喇嘛洞墓地 I M17号墓における 鉄製甲冑堆積の室内整理

万 欣 白雲燕 趙代盈 肖俊涛

1. 鉄製甲冑堆積の出土状況

I M17号墓は喇嘛洞墓地東区の中央北寄りに位置し、1996年6月13日から発掘調査がおこなわれた。この墓は、長さ5.2m、幅4.0m、深さ4.8mを測る長方形土坑竪穴木槨墓で、墓地の中で最大規模の墓である。この東側の重装騎兵装備を副葬したI M5号墓とは東へ10m足らずの距離にある。墓壙内には2層に段をつけて掘った二層台があり、地表からそれぞれ1.1m、3.5m、埋土は五花土【攢乱された埋戻土】と石塊であった。想定される木棺規模は、長さ3.6m、幅1.3m、残存高0.9mで、頭位は53°である。被葬者は成年男性とみられ、埋葬方式は単人仰臥伸展葬で、頭向は東北、顔は上を向いていた（図一）。

この墓の鉄製甲冑堆積は7月4日の発掘中に発見されたもので、副葬位置はI M5号墓と同じく棺内主被葬者の足下で、出土資料番号は96BL I M17 : 21である。堆積の表面層上には、青銅製垂飾付飾金具など多くの金銅製馬具類が散乱していた。8月4日に箱で囲って切り取る套箱法を用いて取り出し、密封保存した。

この鉄製甲冑堆積と共に出土した副葬品は230点以上に達し、注目される副葬品としては、鉄剣、環頭刀、鉄矛、鉸具、銅鏡、青銅製魁、鍍金人面飾金具、金製耳飾が挙げられる。この鉄製甲冑堆積の所有者は、同じく大量の青銅・鉄製品を伴うI M5号墓の被葬者と同様に、当時の鮮卑社会と軍事集團の中で比較的高い身分と地位を有していたと考えられる⁽¹⁾。

2. 室内整理の過程

2008年5月下旬、白榮金先生の指導の下、我々はI M17号墓鉄製甲冑堆積に対する室内調査を開始した。全鉄製甲冑堆積は長さ112cm、幅108cm、高さ30cmほどの箱内にあり、その範囲は約90cm、堆積の厚さは18cm前後である。四隅の大きな小札片の状態は比較的良好だったが、多くはすでに散乱しており、中央の小札片は錆び固まり合った残塊を除いて多くがひどく破損し、具体的な配置がわかる状態ではなかった（図二）。胄は東南部にあり、すでに破損し破片となっていたものの多くは状態は良好で、比較的大きな破片であったため、すでに取り上げて修復をおこなっている（以下詳述）。

室内整理の主な作業は、堆積中の小札片を科学的に取り上げることである。以前室内整

理を行ったIM5号墓鉄製甲冑堆積と比べ、IM17号墓の堆積は前者と大体同じとはいえる。小札片の破損および残存度は前者よりひどく、小札片の接合・復元難度もまた、より大きい⁽²⁾。このことから、既往の室内整理の経験を参考とするとともに、小札片の取り上げ工程をさらに細かくした。主に、鉄製甲冑堆積の輪郭図上にセットとなる小札片の部位を書き入れることで、各組小札片間の横方向の平面位置関係と縦方向の重複関係を考察しやすくした。

今回の整理における基本原則は、堆積を区に分けて位置を記録、組に分けたナンバリング、範囲の確定、層を追った取り上げである。その基本作業の過程は以下の通りである。

箱の四辺の枠を基準とし、グリッドを設定して区に分割→組（A、B、C…）に分割し、番号（通し番号1、2、3…）を付与→デジタルカメラで俯瞰撮影（スケールを上に置く）→モノクロ図の打ち出し（A4用紙）→パソコンでのデータ整理（各日1つのファイルを作成し、日付を明示し、その日撮影した写真を入れて番号をふる）→モノクロ図と照合かつ取り上げ範囲を決定→取り上げ登録表に記入→取り上げ部の略図を書き入れる→典型小札片（塊）の選別、接合、土や鏽のクリーニング→写真撮影（あるいはスキャン）、図化→小札片の綴じ方、配列構造の検討→小札片を板紙で模造し、綴り合わせる→復元報告の執筆編集。

整理過程の中で、取り上げをおこなう1組の小札片すべてに対して2枚の図と3枚の表、すなわち「各組小札片の配列、分布平面図」（印刷したモノクロ図を元にする）、「各組小札片の取り上げ位置の略図」（手書き実測）、「小札片の取り上げ登録表」、「典型小札片（塊）登録表」（番号、取り上げ時間、区、組番号、小札片番号、重量、裏表の向き、堆積状況、保存状態、取り上げ範囲、図番号、写真番号、備考を含む）、「小札片取り上げ写真登録表」を作成した。そして、可能な限り多くの発見と鉄製甲冑堆積の一次情報を保存することを目的とした。

3. 小札片の型式分類

IM17号墓鉄製甲冑堆積の整理過程で取り上げた各種鉄製甲冑片は、全部で2233片（大多数は残片）、104組である。これら小札片の形態は、円首片（すなわち上円下方形の小札片）、方首片（すなわち長方形の小札片）、特殊片の3類に分けることができる。これらを形・孔・規格の違いを考察し、IM5号墓小札片の型式分類を参考にすると、これら3類の小札片を17型式に分類することができる。そのうち円首片は12型式、方首片は3型式、特殊片は2型式に分かれ、各型式小札片の孔は一般的に7~15個である。1枚の小札片の規格と重量の個体差はやや大きく、小型片は幅と長さが3~5cm前後で、大型片は3.5~17cm以上に達する。もっとも軽いものは5.5g、もっとも重いものは66.2gである。小札片の型式分類を整理したものが図三と表1である。

4. 関連遺物

I M17号墓鉄製甲冑堆積の共伴遺物は全17点である。このうち胄は小札片の整理に先行して修復しており、その他が整理過程中に次々と発見された。

a. 胴 1点

I M17 : 21-1 破損資料で、修復済みである。詳細は後述する。

b. 馬冑 1点

馬冑 I M17 : 21-2 100片以上の細片に破損していた。詳細は後述する。

c. 鉄具 計9点

いずれも鍛造。2種類に分けることができる。1つは計8点で、形と構造は同一である。多くは平面がU字形、断面円形（まれに稜角の立つ方形もある）を呈する縁金で、縁金両端の扁平な部分に穴をあけて軸を通し、刺金をつなげている。

X11712 縁金と横軸は共に一部欠損、刺金は消失する。縁金の残存長3.1cm、幅約2.9cm、厚さ0.6cm前後（図四-5）。

L104 一部欠損。縁金の残存長2.6cm、幅3.1cm、刺金の残存長2.1cm、厚さ約0.7cm（図四-8）。

s763 刺金が一部欠損。縁金に付着物あり。縁金の残存長3.4cm、幅3.4cm、厚さ0.7cm、刺金の残存長2.1cm（図四-3）。

j555 刺金欠損。縁金の長さは3.7cm、幅2.5cm、厚さ0.6cm（図四-2）。

I M17 : 21-01 ほぼ完形。縁金の残存長3.2cm、幅約2.6cm、刺金の長さは3.1cm、厚さ0.6cm前後（図四-9）。

o12078+1 縁金は一部欠損。断面は稜角の立つ方形に近く、その一端には軸が残存する。縁金の残存長3.1cm、幅約2.3cm、断面長・幅0.7cm前後（図四-4）。

s790 3段に裂け、刺金が外れている。縁金の残存長3.9cm、幅は不明、厚さ約0.6cm、刺金の残存長3.3cm（図四-6）。

y943 刺金は欠損し、帶板の腐食が著しい。断面円形の青銅棒をU字形に曲げて縁金を作り、鉄板を折り返して帶板を作る。縁金の残存長2.7cm、幅約2.4~2.8cm、厚さ0.3cm（図四-7）。

もう1つは1点のみである。一部欠損するが、他と比べてやや大きい。

e11883 縁金の一端と帶板はともに一部欠損し、両面に残片の付着がある。縁金は平面U字形で断面円形を呈する。縁金両端はやや幅広く扁平で、そこに2つの孔を穿ち、外形T字形・断面円形の刺金と横軸を挿し入れ、横軸は折り返した帶板につながる。縁金の残存長6.7cm、幅約4.1cm、刺金の長さは5.3cm、厚さ0.7cm前後（図四-1）。

表1 IM17の典型甲片分類表

番号	整理番号	型式	大きさ(cm) 長さ×幅(幅)-厚さ	孔の数	重量	残存状況	形状	備考
1	z1017	Ia	4.2×2.8-0.2	7	5.5	完形	円首	
2	z1061	1b	5.5×2.7-0.2	7	8.4	完形	円首	
3	z965+1	IIa	5.2×2.6-0.2	7	7.1	完形	円首	
4	m:1995	IIb	4.5×2.5-0.2	8	5.7	完形	円首	
5	k551	IIIa	6.9×3.9-0.2	9	14.9	完形	円首	
6	B9	IIIb	5.9×4.2-0.3	8	?	完形	円首	残片の付着 あり
7	P:1414	IV	8.7×(2.8-3.1)-0.3	7	21.1	欠損有	円首	
8	M:1367	V	9.6×(2.9-3.5)-0.2	8	24.5	完形	円首	残片の付着 あり
9	W:1610	VI	10.2×(2.0-2.8)-0.3	7	19.5	やや欠損有	円首	
10	Y:1711	VII	9.1×1.9-0.3	15	?	完形	円首	単体片では ない
11	J72	VIII	10.1×2.6-0.2	12	16.5	完形	円首	
12	T:1512	IX	11.1×3.4-0.2	11	26.1	欠損有	円首	
13	C:1819	X	15.9×(3.2-4.3)-0.4	12?	66.2	完形	円首	
14	E27	XI	14.3×2.5-0.3	11	?	欠損有	円首	単体片では ない
15	y:2291	XII	17.6×3.5-0.3	?	?	欠損有	円首	単体片では ない
16	d490	XIIIa	9.4×2.9-0.2	9	22.9	完形	方首	残片の付着 あり
17	n1245	XIIIb	9.6×(2.3-2.6)-0.2	11	15.8	欠損有	方首	
18	H275	XIV	9.6×3.9-0.2	8	24.4	欠損有	方首	
19	W:1544	XVa	10.7×3.3-0.3	8	28.2	完形	方首	
20	y954	XVb	11×(3.0-3.8)-0.2	9	29.2	やや欠損有	方首	
21	y955	XVc	11.4×(3.0-3.6)-0.3	11	29.9	欠損有	方首	
22	t12182	XVd	11.1×3.9-0.3	13?	33.1	欠損有	方首	
23	K89	XVI	11×3.5-0.3	9?	30.5	完形	特殊形	残片の付着 あり
24	d1868	XVII	7.9×(2.4-2.8)-0.2	3?	10.9	欠損有	特殊形	

d. 帯鈎 2点

d1874 鋳板、環ともに一部が欠損する。鍛造。円形の鋳板表面には銅の痕跡があり、背面には黄褐色の皮痕が残る。一方の端には舌【鋳板下縁から突出し、折り曲げて遊環をとめた部分】で留めた遊環が残っている。直径3.1~3.3cm、厚さ0.2cm前後。舌の残存長0.5cm、幅0.4~0.7cm (図四-10)。

D1148 遊環が消失する。鍛造。円形の銅板表面に3個の鉢があり、一方の縁に舌が残る。直径3.1cm、厚さ0.3cm前後（図四-11）。

e. 履釘 2点

a370 腐食が著しく、歯釘〔スパイクの釘〕2つが消失する。鍛造。四角形に近い環のみが残り、環の上に歯釘1つが残る。環の残存長7.1cm、幅6.9cm、断面幅1.2~1.8cm、平均的な厚さは0.8cm前後である。歯釘の残存高3.6cm、厚さ1.2cm（図四-14）。

Z358 腐食が著しく、環は一部欠損。鍛造。四角形に近い環の上には3個の円柱形の歯釘が垂直にのびる。環の長さ6.6cm、幅5.6cm、断面の平均的な幅1.5cm、厚さは0.8cm前後である。歯釘はいずれも高さ3.5cm、厚さ0.8cm前後（図四-13）。

f. 鉄鎌 2点

遺物番号はb374とv310である。このうち1点は完形に近く、先端は鰐状を呈する。茎は錐状に作られ、木質が残る。長さ11.3cm、刃の幅1.5cm、平均的な厚さ0.8cm前後。別の1点は両端が共に欠損し、残存長11.5cm、幅0.8~1.4cm、厚さ0.8~1.4cm（図四-12・15）。

5. 検討

(1) 小札片のグルーピングと分布

I M17号墓鉄製甲冑堆積の整理過程において、我々は整理番号順に2223片の小札片を104組に分け、各組を大文字と小文字26個のアルファベットを順に並べて区別した。その前半の52組はそれぞれA、B、C組とa組、b組、c組と表記し、後半52組はA₁、B₁、C₁とa₁、b₁、c₁組と表記し、個別の状況に応じてアルファベットの右上方にアポストロフィーを加え、k'、Y'などのように表記した。破損が極めてひどいものと、整理中で観察できない7組の小札片を除き、その他97組の小札片の概況は図五、六、七と表2に示した。それら図表をもとに整理すると、以下の通りである。

円首小札片の中で数が比較的多いのはI型（Ia、Ib、Ic、Idの諸形式を含む）小札片で、やや小型の魚鱗状を呈する資料で、主に1~4区と6区中のp、v、z-z'、K1、L1、S1、a1などの組でみられる（表2-38・44・48・57・58・64・72）。VII型小札片は主に5、8区のX1組でみられる（表2-69）。VIII型小札片は主に1、2、4、5、6、8区中のI、J、Q、X、Y-Y'、R1、W1、Z1、r1、z1などの組でみられる（表2-9、10、17、23、24、63、68、71、89、97）。

方首小札片の中で数が比較的多いものにはXIII型（XIIIa、XIIIbを含む）小札片があり、主に4、5、7、8区中のC、T、c、k-k'、n-n'、Y'などの組でみられる。XV型（XVa、XVb、XVe、XVdを含む）小札片は、主に1~4区中のM、F1、o1、v1、x1などの組でみられる。以上から、これらは主に1、2、4、5、8区内に集中していることが分かる。

表2に示した97組の小札片のうち、小札片の型式が单一かつ組の小札片が30片以上（以下、小札片番号にしたがう）であるものは全部で7組ある。すなわちY-Y'組（8・9区、43片、VIII型）、k-k'組（4・7区、77片、XIIIB型）、p組（6区、30片、Ib型）、z組（4区、84片、I型）、II組（5・8区、113片、XIV型）、S1組（1・2区、36片、Ib型）、XI組（5・8区、96片、VII型）である（表2-24、33、38、48、56、65、70）。小札片の型式からみると、円首小札片のI、VII、VIII型と方首小札片のXIIIB、XIV型が多いことが分かる。

2種類以上の型式の小札片かつ組内の小札片が30片以上であるものは、C1組（35片、小札片型式不明）、e1組とk1組（共に30片、小札片型式は全て未確定）を除くと全部で8組ある。すなわちT組（4区、38片、XIIIA,XVI?型）、q型（6区、48片、Ib?、II型）、s組（2・3区46片、XVI型とその他型式未確定の小札片）、v-v'組（4区、48片、Ia、XIIIB?型）、R1組（2・3区、36片、VIII、XVb?、XVI?型）、W1組（4・5区、63片、VI、VII、VIII型）、s1組（1・2区、33片、VIII型、XVI）、w1組（1・2区、33片、VI?、VIII型）である（表2-19、39、41、44、63、68、90、94）。全体的にみて、この8組の小札片は主に1～4区に分布しており、小札片型式はVIII型小札片がもっとも多い。

ここで言及しておかなければならぬのは、小札片を組に分割して番号を付し、取り上げる過程において、整理しやすくするために、できるだけ形が同じ小札片を一組にすべきであったことである。一組の小札片に多くの小札片型式が含まれる原因を作ることになったのは、甲のある部位が2型式以上の小札片からなる可能性以外に、小札片の錯がひどかっただけに、小札片型式の識別が難しく、また破片同士が付着していたことによる。

以上、表2に示した各組小札片（塊）は、頭部が破損したものを除き、図版1から図版4にすべて掲載した。

（2）小札片の配列、重なり、綴じ方

これらの点については、「典型塊」から説明できる。「典型塊」とは、形と構造が同一の小札片からなり、さらには本来の縫りを維持する複数の小札片の組成を指す。選別した円首小札片からなる3組の典型塊（A4-7、Y'429-434、F39-47）では、いずれも右が左の上に載る。すなわち小札頭部を上にした場合、左側小札片の右縁は右側小札片の左縁の上に重なる。このような順次左から右への重なり合いは一つの横列を構成し、Ib、XI、VIII型小札片の綴り方に反映される。その綴り合わせの痕跡と綴り方を復元したものが図八である。

選別した方首小札片からなる2組の典型塊のうち、縱方向に3孔並ぶ側が頭部であり、横方向に2孔が並列する側が小札下端である。綴り方は円首小札片と同じである。C19-22を代表例とし、XIIIA型小札片の綴り方の代表例でもある。威し方についてはその痕跡

が非常に少ないものの、典型塊E34-38でうかがいみることができる（図九-5・6）。

もし小札片と小札片間の重なりがある種の平面的な横方向の重なりとみると、数列の小札片を縫った甲の一部位の重なりはある種、縦方向の重複関係であり、これらの重なり方は図五から図七の図に示したとおりである。図の二重線は取り上げ時の箱の四辺である。その内側の太線は、鉄製甲冑堆積の輪郭線である。図中のグリッドは、箱上側にひいた「井」字形の基準線で、套箱内の鉄製甲冑堆積の平面を1～9区に等分し、鉄製甲冑堆積中の各小札片組間の相互位置と重複関係を確定しやすくするものである。アルファベット表示のある、多くの不規則形の図形は、各小札片組の鉄製甲冑堆積平面上における位置と分布範囲を示している。諸小札片組の位置と範囲は、上から下へ整理した順序に沿って示したことによって、異なる区内の各組小札片間および同一区内の異なる組小札片間の縦方向の重複関係（すなわち上層小札片組と下層小札片組）を客観的に示すことができた。例えば、4区は各組小札片の重なりが比較的集中する区である。この区内には、T組(XVI?、XIIIa型)、U組(XI型)、K'組(XIIIb型)、v組(Ia、XIIIb?型)、z組(Ia、Ic型)、J1組(?)、W1組(VIII、VII、VI型)、X1組(VII型)という、計8組の小札片が直接的な重複関係、すなわちT→U→K'→v→z→J1→W1→X1組の関係にある。もし組ごとの小札片を1領の甲の残骸とするのであれば、I M17号墓鉄製甲冑堆積は少なくとも8領の甲堆積からなるということである（図五-2～図六-8）。そのほかにも、5区と8区のT→K-k'→n-o→o'-I1→X1組、4区と5区のA1→J1→W1→X1組、6区と9区のb1→c1→k1→j1組は4層が重なった例である（図六-6・7、図六-10）。

(3) I M17号墓小札片と I M5号墓小札片の形の比較

I M5号墓における重装騎兵装備の復元に関する研究では、番号を付して数えた3156片の小札片を23型式に分類した^[3]。I M17号墓鉄製甲冑堆積の整理では、我々は番号をふって数えた2323片の小札片を17型式に分類した。両者を比較すると、I M17号墓中には、I M5号墓と型式が同一あるいは類似する型式が10種類ある（図十）。

上述のように、I M17号墓の円首小札片は、I型とVII型がその主要な型式である。両者はそれぞれI M5号墓のI、II、V型式と同じである。I M17号墓のI型式はIaとIbに細分される。これはまた、「魚鱗片」と呼ばれるもので、よくみられる型式の一つである。I M17号墓の方首小札片は、XIII型とXV型がその主要な型式である。このうちXIII型はXIIIaとXIIIbに細分され、これらはそれぞれI M5号墓のXIII型、XX型と基本的に同じものである。I M17号墓のXV型は4つに細分でき、このうちXVd型のみがI M5号墓のXVII型とやや類似する。

これ以外に、注意すべき型式がある。

一つ目はXII型である。この型式は円首小札片に属するが、小札片は細長く、側面は湾曲するやや特殊な形状で、4・5区のE組とU組中のみにある（図三-14、表2-5・20）。これはIM5号墓中のIII型と同じだが、IM5号墓鉄鉢復元報告の中でこの型式小札片の用途を説明しておらず、疑問である。IM5号墓のような、側面が湾曲する小札片と良く似た小札片は平均で長さ12cm、幅2.8~3.3cmあり、長さが14.3cmあるIM17号墓XII型より明らかに短いものの、その用途（甲の腰付近に復元されている）は参考になる⁽³⁾。このように、長大な湾曲する小札片を腰付近の小札片とする製作法は、大阪長持山古墳出土の5世紀の挂甲で同様の例がみられる⁽⁴⁾。

二つ目はXVI型である。この特殊形片はIM5号墓のXIX型と同一であり、それぞれ1、2、3、5、8区のK、L、a、r1、D1、E1、h1、l1、s1組中にみられる。数は比較的少なく、かつ多くがその他型式の小札片と1ヶ所に混在する。このうち5・8区のr組（15片）と2・3区のh1組（10片）は、XVI型のみからなる2つの小札片組である。保存状態からみて、鋒がひどいだけでなく、配列もまた、不規則である（図六-5、図七-9）。K、L、q1、s1組中の特殊形小札片はいずれも冑残片が位置する箇所および付近でみられ、頭甲と関係するようである。そのうち典型塊R1452-1454の側面は湾曲し、Z354-355の中の355番小札片の形状は独特で、それぞれ頭甲の背面中央の合わせ目部分の小札片であるようだ（図版四、2）。もしかするとIM5号墓の頭甲の復元に新たな証拠を提供したのかもしれない。

以上の基礎的な比較を通じて、以下の2点を指摘することができよう。

その一は、IM5号墓と比べてIM17号墓は前者と同様に、円首小札片が主体を占めるといえ、方首小札片の数が明らかに多い。表2に列記した97組の小札片のうち、方首小札片のみで構成された組は全部で20組、円首小札片のみで構成された組は39組を確認することができ、両者はそれぞれ全小札片組の21%と40.2%を占める。IM5号墓小札片では、このような統計をとったことがないが、23型式の典型片のうち、XVII型小札片を除いて、IM7号墓のXIII、XIV、XV型のような後が明瞭な方首小札片はみられないようだ。

その二は、図十中に示したIM7号墓とIM5号墓の比較可能な12種の典型例のうち、形状が同じものは半分ほどを占めるだけである。IM5号墓のX~XVIII型は、基本的にIM7号墓にみられない。そしてIM7号墓小札片中では、後が明瞭な方首小札片以外に、X型やXII型のような長大で重厚な小札片もまた同様にみられない。このため、両者の小札片群の全体的な形態においては、その相違性は共通性よりも大きい。

（4）重装騎兵防御具の一部復元

IM5号墓重装騎兵防御具の小札片と比べて、IM17号墓鉄製甲冑堆積中の小札片の錯

はさらにひどく、その小札片型式も異なるものが多いが、胄と馬冑の共伴、甲（I型小札片に代表される「魚鱗片」）、馬甲（X型、XII型、方首小札片を代表とする比較的長大な小札片）が共存する現象は、いずれもその重装騎兵装備の性質を物語っている。I M5号墓重装騎兵甲冑の復元研究の基本的な方法は、実証復元と推定復元の両種に分けることができる。実証復元の重要な条件には、甲の型式、重なり合い関係、片数と列数（同型小札片の分布範囲と配列面積にもとづく）、綴り合わせ痕（横方向の片と片、縦方向の列と列）がある。このうち片の数は復元対象の幅を決定し、列の数は復元対象の長さを決定し、縦方向の廻し方はその構成の特徴（板状の構造かあるいは伸縮する構造か）を決定する。推定復元はすなわち、上述の条件が欠けるなかで、復元対象の残骸遺構に基づいてその他関連あるいは類似資料（すでに発表された関連図像、模型、その他復元研究の成果等）を参照して行った部分復元である。

I M17号墓小札片の欠損と腐食度はI M5号墓より深刻で、そのため以下では特定部分に限った復元を試みた。

a. 胄と甲の両部分を含む騎兵甲冑

① 胄 新留。原位置はI M17号墓の被葬者足下西南隅の鉄製甲冑堆積上にあり、出土時にはすでに破損しており、完形片ではなかった。修復を経て、この胄は全部で9片からなり、上部は幅広く、下にいくほど広くなる台形状の鉄板片によって構成され、側面觀は円錐台状に近いことが分かった。鉄板の平面形は縦方向に細長い台形で、縦断面は緩くS字形に湾曲する。胄正面の下端は2つの弧が連なる目出し窓状をしており、等距離に7つの孔が穿たれる。この鉄板を中心として左右両側の鉄板は後ろに順次重ねて丸くおさめ、下端付近に2~3個の小孔が横に並ぶ。胄背面の閉じ口は別一片を内側からあてて繋ぎ合わせ、鉄板が重なり合う箇所は基本的に3個の鉢で留めている。高さ19.9cm、底部直径23.6~24.2cm、頂部開口部の直径7.6~8.9cm、厚さ0.4cm前後。胄正面中央の鉄板を起点として、時計回りに全片を順次1~9号片とした（図十一右上）。各鉄板の形状、規格、廻し方は以下の通りである。

1号片は上部が狭く、下部は幅広く、下端には2つの弧が連なった目出し窓と5個の鉢孔がある。長さ20.5cm、幅4.2~11cm、厚さ0.3cm。

2、3、4、5、7、8、9号片はそれぞれ1号片の両側に並び、このうち2、3、4、5号片が左、7、8、9号片が右である。廻し方は、1~5号片は左が右の上になり、1、9、8、7号片は右が左の上になる。この他に、1号片と重なる2号片と9号片の下端はいずれも、目出し部分の角を丸くしている。各鉄板の側縁同士は縦方向に3個の鉢で留めている。各鉄板の長さは21.5cm、上幅4.0~4.2cm、下幅8.5~11.5cm、厚さ0.25cm。

6号片はおよそ正面1号片と対応する胄背面真中の位置にある。片は明らかに幅が狭く、

1号片両側から綴じてきた2組の片の合わせ目の片である。長さ21.5cm、幅3.5~7.0cm。

この他に、共伴資料としてIa型とIb型小札片22片があり、その鍍小札片の一部であろう。王振江はかつて、各小札は円形部分を下に向かって、上に順次重ねて綴じあわせた3列からなる綴甲に復元した。このうち1、2列は共に25片、下の列は23片、各列は中間の小札片を基準として、左半分は右小札片が左小札片の上に重なり、右半分は左小札片が右小札片の上に重なる配列を考えた。全長52cm、幅はいずれも10.7cm。復元結果はIM5号墓の鍍と基本的に同じである⁽⁵⁾（図版五）。

これまでに復元された十六国期の3点の鉄冑のうち、IM5号墓と朝陽十二台郷88M1号墓で出土したものは頂部の閉じた封頂式で、唯一IM17号墓のもののみが塞がっていない「透頂式」で、この特徴は河北省臨漳県の鄆南城で出土した北朝期のII鉄冑と同じである⁽⁶⁾。このような独特な形は冑の頂部装飾と関係しており、IM17号墓の冑のような形態は、おそらく何らかの頂部装飾のために開いていた可能性がある。

② 甲 IM5号墓重装騎兵防御具の復元結果からみて、小札片型式がやや小さな円首小札片（すなわちIM5号墓のI、II型小札片で、いわゆる「魚鱗片」）は人甲を構成する最も主要な小札片の形である。IM17号墓鉄製甲冑堆積中では、IM5号墓のI、II型小札片と基本的にI型小札片の数は比較的少なく、主に6区p組、5区A1組、4区z組、6・7区K1、L1組、2・3区ai組でみられるが、それ以外では、その他の型式のv-v'組、y組、q1組の中で散見される（図五-4、図六-6・7・8）。

これらI型小札片組のうち、4区z組の片の数がもっとも多く、全部で84片を数える。小札片は図三、1~3を参照されたい。この組の小札片は鉄製甲冑堆積の南部分にあり、冑の右側で馬冑残片層の下で押し潰されている。魚鱗状に並び、全部で約12列の横列があり、最も長い横列は小札片12片前後であり、分布範囲は長さ31cm、幅12~25cm前後である（図六-5・6、図十二-1・2、表2-48）。綴り合わせの状況からみて、円形片首が上を向く時、小札片同士は左片が右片の上に載り、すなわち横列は一律に右から左へと重なる。各横列間の上下関係は下列が上列の上に載り、すなわち下から上へと重なっている。この組の小札片排列は密集かつ整然としており、周囲の縁もまたかなり明瞭で、ひとつの独立した甲単位であったのだろう。その小札片の型式、配列の特徴（魚鱗状）、全体形をもとに判断するならば、この組の小札片は甲上の上腕を覆う部分であったよう、その原形はIM5号墓の袖の復元のようであったかもしれない（図十二-3）。その他各組のI型小札片は分布がまばらであるだけでなく形状もまた不規則で、散乱した甲の残骸であろう。

b. 馬冑と馬甲の両部分を含む防御具

① 馬冑 鍍留。IM17:21-2は、破損により100余片を数え、これら残片はそれぞれ1区と4区に堆積していた。N組とv-v'組に属し、番号はそれぞれN133~147、v826~

873とv'874~909で、それぞれ背とk'組小札片の下で押し潰されていた（図五-3、図六-5）。両組残片は隣り合うといえども接合資料はなく、このため本来の馬冑はおそらく破壊を受け残片となった後に墓内に副葬されたと推定される。また、形状が不規則な残片がk'、Gi組中に散見される。これらはおそらく馬冑と関係するだろう。これら残片の中には、個体が比較的大きかったり（接合後資料を含む）、あるいは特徴的な形態の破片が40片前後ある。片が比較的小さく、接合不能かつ形状が不規則な残片を除くと、馬冑残片上にみられる形態の復元ライン、破片の形状、銛留め等の加工状況にもとづき、それを3類に分けることができる。

1類は環状で、平面は長方形に近く、付着物が多くみられる。計4点で、X340、s806、v826、A11066である。後者2点は保存状態が比較的良好く、いずれも円柱状の鉄棒を曲げて長方形に近い環状に作り、一端はやや幅広く、一端はやや狭い。このうちX340（891と接合して1点になる）は、付着した残片上にさらに銛留めした鉤痕がある。平均して、長さ7.5cm、幅3.6cm、厚さ0.8cm前後である。これら環状製品は面覆い部と頬当を連結するための鉸具であろう（図十三）。

2類は縁の折返しあるいは湾曲の残片である。例えばN141+146は2つの直辺をもち、このうち1つの直辺付近の折返し帯には鉤痕がある。片の残存長6.9cm、幅9.8~10.4cm。N137は2つの直辺と孔1つがあり、このうち比較的短い直辺を折りたたんで厚みを加えると共に背面に向かって弯曲する。残存長10.9cm、残存幅5.2cm。これら残片は馬の鼻面鼻梁部分にあたる馬冑面覆い部の残片のようである。

3類は弧状の辺をもつか、あるいは背面に銛の痕跡のある残片である。例えばK'620は、両側辺が弧辺で、その二辺の間も弧辺で、背面には残片の付着（銛留めか）がある。残存長11.2cm、残存幅7.4cm。類似する残片にはさらにV272とy944がある。その形と構造の特徴から推測して、馬冑両側の頬当の縁にあたる湾曲部分であろう。さらに湾曲度がかなり強い残片にG11182~1183、N142などがあり、おそらくそれぞれ面覆い部の額部残片と端部の護唇部であろう。

これら馬冑残片のうち、注目に値するのは前述した4点1組の鉸具で、以前発見されかつ修復されていた2セッテの比較的完全な馬冑のうち、朝陽十二台出土資料（88M1:56）だけでなく北票喇嘛洞出土資料（I M5:49）でもまた、このような面と頬板を連結する金具が完形で出土することはなかった。このうち前者はごくわずかに少量の痕跡が残っていたが、後者は復元したものである。このため、I M17号墓では馬冑の全体形は復元できなかつたが、その発見は馬冑各部位の空白をうめる意義を有していた。

全体的に見て、この馬冑は厚さ0.4cm前後の鉄板を材料として、裁断、銛留め、鍛打によって形成され、その全体形と構造は喇嘛洞 I M5号墓出土馬冑（I M5:49）と基本的に

同じである。復元後のIM5号墓馬冑を参照すると、前述したIM17号墓馬冑残片から推測される本来の馬冑上の部位は、図十四に示すとおりである。

② 馬甲 一般的に長大かつ幅広い小札片である。保存状態の比較的良好なW₁とX₁組小札片にもとづき、言及する。

W₁組は鉄製甲冑堆積南部の4区にあり、大部分が馬冑残片層の下で潰れていた。小札片の数が比較的多く、かつ配列の原形が比較的よく保存されていた組の1つであり、番号はW₁:1554~1616、合計63片である。小札片型式はVI、VIII型の両種を含む（図七-9・10、図三-9）。この組の小札片は横3列が現存しており、もっとも長い横列は全部で23片、その大きさは、長さ42cm、幅27.5cm前後である（図十五-1、表2-68）。縦り合わせの状況からみて、頭部を上にする場合、小札片同士は右片が横の左片の上になり、すなわち横列は一律に左から右へと重なっている。各横列間の上下関係は、下例が上例の上になり、すなわち下から上へと重なっている。

X₁組は鉄製甲冑堆積中部の5区と8区にあり、その南端はW₁組小札片の下にあって重なっている。配列の原形が比較的よく保存された一組の小札片で、番号はX₁:1617~1712、計96片とともに多く、すべてVII型の単一型式である（図三-左10）。この組の小札片は横3列が現存しており、もっとも長い横列は全部で36片、その大きさは長さ45cm、幅21cm前後である（図十五-1、表2-69）。このうち最上一列の右端には、さらに鉤具1点が残っていた（図四-7）。縦り合わせの状況からみて、頭部を上にした場合、小札片同士は左片が右片の上になり、すなわち横列は一律に右から左へと重なっている。各横列間の上下関係は、W₁組と同じである。

この2組の小札片を一つに縦り合わせると、IM17号墓鉄製甲冑堆積の中で配列がもっとも整然とし、その大きさもまた最大の甲の一単位で、横方向の長さは45cm、縦方向6列の長さは46cm前後である。小札片型式、配列の特徴（3列のやや幅の狭いVII型片と3列のやや幅の広いVI、VIII型片を縦り合わせる）、全体形から復元すると、この小札片は具装、つまり馬甲の一部で、IM5号墓出土馬甲と同様の形態であったと考えられる（図十五-3）。

（5）その他、関連した問題

a. 方首小札片について

前述したように、比較的多くの方首小札片の出土がIM17号墓鉄製甲冑堆積の一つの顯著な特徴である。各方首小札片組の鉄製甲冑堆積中の位置からみて、小札片型式が比較的単一に揃い、数も比較的多く、かつ分布が相対的に集中する方首小札片からなる組群は、8・9区のb、c、d組、4・5・7区のk-k'、T、v'組、5・8区のo'、l'、Y'組、1～3区のt'、y'、x'組である。この他に、関連する2、3、5、6区内では、さらに方首

小札片組の可能性のある l、s、t 組がある（図五、3、4：図六、5、7、8：図七、11、12）。各小札片組間の縦方向の重複状況からみて、5・8 区に位置する $T \rightarrow k-k' \rightarrow n, o \rightarrow o' \rightarrow l_1 \rightarrow X_1$ 組を例に挙げることができるように、全 6 組の小札片が 6 層に分かれて重なっており、このうち最後の一組は円首小札片（X1 組）の上に重なる（図十六）。これらの組の小札片のうち、基本的な小札片型式はいずれも規格が比較的小さな XIII 型片で、長さ 9.5cm、幅 2.5cm 前後のものである。鉄製甲冑堆積中の各層小札片の銷がひどいため、各組小札片間で直接的な接合関係が見えることは極めて少ない。

既存資料のなかでは、I M17号墓鉄製甲冑堆積の方首小札片と類似し、かつ年代もかなり近いものは、内蒙古呼和浩特の二十家子前漢城址で出土した鉄製甲冑の小札片があるのみである⁽⁷⁾。二十家子の鉄製甲冑において、方首小札片（報告では方形片と称している）は一領のほぼ完全な人間用の甲を構成する。この甲の小札片は長さ 10.5cm、幅 3.4cm 前後⁽⁸⁾、その規格は I M17号墓の XIII 型片（一般的に長さ 9.5cm、幅 2.8cm 前後）に近いが、威孔がやや多く 18~20 孔あり、I M17号墓の方首小札片はわずか 9~11 孔である。この他に、咸陽の楊家湾の陶俑上でもまた同様の方首小札片がみられ、防護胸と背部に用いられた小札片である⁽⁹⁾。I 型と II 型の人身甲の小札片が I M17号墓鉄製甲冑堆積中では比較的少なかったことから推測すると、この種の比較的小さな XIII 型方首片は、人間用の甲の小札片の一部であるか分からぬ。

b. XVII型小札片について

鉄製甲冑堆積東北縁に位置する 6 区と 9 区の d₁ 組 XVII 小札片で、I M5 号墓鉄製甲冑堆積中ではみられなかった、あらたな型式である（図三~24）。この型式の小札片は全部で 16 片あり、帶状の配列をなし、一端には一つの跨環（1875. 整理中のため未見）がある。堆積中の分布面積は長さ 23.5cm、幅 4~8cm 前後である。これら小札片の頭部はいずれも欠損があるものの、下端部は直線的で、縁を包んでいた痕跡がある。小札片はいずれも上向きに湾曲し、片と片の間の側縁は多くが重なり合う。この組の特殊形片の片尾は b₁ 組中部分と共に比較的よく残っており、かつ配列の整った VIII 型円首小札片の片尾と互いに「接続」する。b₁ 組小札片の下にはまた 1 層の c₁ 組 X 型円首小札片が重なっている（図十七）。d₁ 組特殊形片の本来の形態からみて、甲の「短鎖」部分によく似ている。しかしながら、もし個体が比較的大きな d₁ 組と c₁ 組小札片を馬甲の小札片とみると、これら特殊形片もまた馬身甲と関係するだろう。d₁ 組特殊形小札片が馬甲のどの部位にあたるかについては、現在のところ正確に指摘することはできないが、今後、関連資料の発見と復元研究において、注目に値するあらたな資料である。

c. 銃具と帶鉢

I M17号墓鉄製甲冑堆積の整理過程中に、銃具と帶鉢を計 15 点発見した。この他に、こ

れと類似する遺物が今回の整理前に8点発見されていた。その出土位置はいずれも鉄製甲冑堆積内にあるため、いずれも本堆積と関係する資料であるに違いない。これらのうち、2点の鉄鎌を除くと、その他に鉗具、帶鉤、履釘等があり、数だけでなく種類の上でも、いずれもIM5号墓に副葬された重装騎兵装備と共に伴した関連遺物とみられる。

9点の鉗具のうちe1883のみ規格が比較的大きく、形状は特殊で、用途上もまた他の比較的小さい鉗具と異なっている。帶鉤2点は、それぞれd1874とD1148である。出土位置からみて、両者はいずれも比較的大きなAb型鉗具の付近、すなわちe1883のあった6区と隣の9区で発見された。この他にIM17号墓発掘時に鉄製甲冑堆積範囲内で4点の帶鉤が出土している（IM17：41-1、2、3、4）。これら帶鉤は鉗具e1883と一組になり、IM4号墓とIM13号墓等で出土した鉗具と帶鉤の組成と一致する⁽¹⁰⁾（図十八）。

その他8点の鉗具はいずれも比較的小さく、かつ形状と構造も一致し、すべてDa型に属す。これらはIM17：21-01を除き、いずれも異なる小札片組の中から発見されている。4区南部にy934、8区中南部にX1712、6区と9区の境界箇所にe1883があった（図5-3・4、図6-5・6・8、図7-9・10）。このうちy934は縁金が青銅製で刺金が鉄製の青銅環鉄鉗具で、y944馬胃残片と連なり（つながり合うといえる）、X1712は列に並んだX1組VII型小札片の側縁にあった。その他の鉗具についてはいまだ小札片と直接連結するものがみつかっていないが、共伴する小札片型式を詳細に検討すると、すべての鉗具はいずれも円首片の小札片組の中で発見されており、方首片の小札片組の中で発見されていないことが分かった。この他に、馬胃の頬当上で銅製鉗具を使用する状況はまた、十六国期馬具工芸の研究のためにあらたな実例を提供した。

d. 履釘について

IM17号墓から合計3点が発見され、このうち2点はそれぞれ8区のa組とZ組の両小札片組中でみつかっており、その形と構造は前述したとおりである（図四-13・14）。その歯釘をもつ環状の平面形は靴のかかと部と同じであり、サイズもまた近いが、環上には柱状の釘がある。そのためそれをひとまず「履釘」と呼ぶことに異論はないだろう。IM17号墓を除くと、喇嘛洞墓地のそのほかの大型墓の中で、このような履釘はIM5号墓でのみ発見されている⁽¹¹⁾。履釘は一般的な副葬品ではなく、重装騎兵装備を有する死者の墓内にのみそれを副葬できたかのようにみえる。両墓に副葬された履釘の形態と構造は基本的に同じだが、前者はいずれも歯が3本、そして後者は歯が3本のものもあれば5本のものもある。歯環の合わせ目部分は重なるように作っているが、その接合部位は同じ位置ではない。このような副葬位置からみて、履釘は重装騎兵装備に関係すると思われるが、それがどのような用途をはたしたのかについては、さらなる検討が待たれる。

6. 小結

I M5号墓重装騎兵装備の復元研究の結果、墓内の鉄製甲冑堆積は人甲と馬甲を壊した後に一緒に積み重なって形成されたようだということであった。これは決して完全な一セットではなく、その中にはまた戦時の破損といわゆる「毀器」習俗の影響した要素がおそらくあったということがあきらかとなった。この点に関しては、今回のI M17号墓鉄製甲冑の整理過程において再び証明された。例えば、同一区内に分布する馬冑残片と頭甲と思われる特殊形片は、小札片が連なった状態にある場合は非常に稀で、多くが帶状で不規則な形状分布を示していた。

考古学的調査を経て発見された各種遺物において、鉄製甲冑堆積はもっとも整理が難しい種類のものということができ、この遺物の前で手をこまねいて無策であったり、あるいは処理が不適当であったりしたことから、多くの遺憾と教訓を生んできた。幸いなことに、白榮金先生を代表とする熟練修復専門家が各地で出土した古代鉄製甲冑に対して一連の著しい成果と復元研究を進め、一步一步かなり成熟した経験と定着した作業過程、比較的完全かつ科学的な処理方法を作り上げてきた。今回のI M17号墓鉄製甲冑堆積に対しておこなった整理は、I M5号墓重装騎兵防御具の復元研究を継ぐもので、それら経験と方法を手本として参照し、喇嘛洞墓地で出土した鉄製甲冑堆積に対して第二回目の科学的かつ組織的な室内整理をおこなった。その腐食度の深刻さと保存状態の悪さはI M5号墓をうわまわり、I M17号墓重装騎兵装備の本来の姿を復元することは出来ていないが、大量の小札片に対する科学的考察と系統的な取り上げを通じて、今後、関連する復元研究に対して有益な参考と手本例を提供することができたと信じている。

付 記 I M17号墓の発掘隊長は、当時遼寧省文物考古研究所副所長であった故・張克羣先生である。鉄製冑と小札の整理・復元者は、中国社会科学院考古研究所技術室のベテラン修復専門家である王振江先生である。この度の室内整理開始時の2008年5月には、中国社会科学院考古研究所技術室を退職された専門家の白榮金先生もまた、現場を訪れてご指導くださいました。その後の整理過程においても、電話等の方法で何度も先生からご教示いただき、疑問・難問を解決することができたことで、整理・執筆作業をへて本報告の完成へといたった。ここに深謝いたします。

なお、本文は万欣が執筆し、撮影・作図は穆啓文、白雲燕、万欣が分担した。また、鉄製甲の接合修復と保存処理は万欣、趙代盈、肖俊清がおこなった。

註

- (1) 遼寧省文物考古研究所編『北票喇嘛洞墓地』(未刊行)
- (2) I M5号墓鐵製甲冑堆積の状況と修復に関する研究の結果については、以下などを参照した。
白榮金・万欣・雲燕・俊涛「遼寧北票喇嘛洞十六國墓葬出土鐵製甲冑復元研究」『文物』2008年第3期。
- (3) 同註(2)。
- (4) 『世界考古学大系』第3巻、日本III、85頁、平凡社、1960年。
- (5) 遼寧省文物考古研究所保管資料。
- (6) 白榮金「河北臨漳縣鄆南城出土的北朝鐵製甲冑胄」『中國伝統工芸全集・甲冑復元』273頁、図18-41、大象出版社、2008年。
他に『考古』1996年第1期を参照した。
- (7) 陸思賢「呼和浩特二十家子古城出土的西漢鐵製甲冑」『考古』1975年第4期。
- (8) 原報告の小札片の数値には誤りがあることから、この数値は図上の縮尺から計算した。
- (9) 陝西省文物管理委員会等「陝西咸陽楊家溝出土大批西漢彩繪陶俑」『文物』1966年第3期。
- (10) 同註(1)。
- (11) 同註(1)。

このような腰釦はかつてIIM196号墓からも発見されていたが、形状や構造はまったく同じというわけではない。ここからは重装騎兵装備の出土はないが、金銅製帶金具が出土しており、一定の身分をもつ被葬者であることを示している。

(参照) 遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館・北票市文物管理所「遼寧北票喇嘛洞墓1998年发掘報告」『考古学報』2004年第2期。

表2 喇嘛洞 I M17の甲片一覧表

番号	組	区番号	通し番号	片の 数	取り上げ範囲 (長×幅, cm)	種類	通し番号	型	重 量	鉄片 孔	片形	片の 面の 向き	小札の重なり	残存状況	略図	備考	その他	
1	A	7	1-7	7	10.5×6.5	塊	1-7	I b		円筒	8	7	土	石が左の上	3片が完形 に近い	図13-1	両面に縫を 包んだ痕跡 と連結部が ある	無
2	B	7	8-10	3	6×5.5	塊	8-10	II		円筒	8	3	土	石が左の上	1片が完形 に近い	略		無
3	C	7	11-22	12	16×9	片 塊	19-22	XIIia	13.6	方筒 方筒	8	1	土	石が左の上	半分弱が欠 損	図9-1		未見
4	D	4	23-25	3	8.5×5	塊	23-25	XIIib		方筒	3	3	土	石が左の上	2片が完形 に近い	図9-2		無
5	E	4, 5	36-38	13	17×7-12	塊 塊	36-33 34-38	X XIIia	12.7 8?	円筒 方筒	8?	8	土	石が左の上	4片が完形 に近い	図13-4	粗片ではな く、背面に 連結部があ る	無
6	F	5	39-47	9	10×6	塊	39-44	VII		円筒	12?	6	土	石が左の上	半分弱が欠 損	図13-2	両面に縫結 部がある	未見
7	G	4	48-57	10	16×15	塊	55-56	XII		方筒	9?	2	土	石が左の上	半分遺存 1片完形	図6-1 図9-3	55-57は回 一組の甲片 と思われる	未見
8	H	4	58-63	7	10×9	塊	59-62	XII		円筒	12?	4	土	石が右の上	2片比較的 よく遺存	図6-2		
9	I	1	64-70	7	11×7	塊	64-69	XII		円筒	12	6	土	石が左の上	3片が完形 に近い	図6-3	両面に縫を 包んだ痕跡 と連結部が ある	未見
10	J	1	71-82	12	14×7-13	片	71 79-82	XIIII	16.5	円筒 円筒	12?	1	土	石が左の上	1片完形	図6-4		未見
11	K	1	83-103	21	18.5×12	片	89 91-92 101-104	XV XVI XIII	30.5 33	特殊形 方筒 円筒	?	1	土	石が左の上	完形 2片が完形 に近い	図3-23 図6-5 図9-4	下縁に縫を 包んだ痕跡 と連結部が ある	未見

番号	組	区番号	通し番号	片の 数	取り上げ範囲 (長×幅、cm)	種類 通し番号	型	单片 重量	片形	孔 数	面の 向き	小札の重なり	残存状況	略図	備考	その他	
12	L	1	104-116	13	24×11	片	XVI ?	16.5 16.5 特徴形 鉄長	9 3	1 1	↑ ↑	104は鉄具 片面に近い 両端欠損	図11-1	104は鉄具 片面に近い 両端欠損	2片横 合、完 成形なし		
13	M	1	117-134	18	20×10	塊	123-124 130-133	VIII XVb	円直 方直	12? 9	2 4	↓ ↓	右が左の上 右が左の上 右が左の上	片完形 2片完形 片完形	図6-6 図9-5 図9-6	縁を包んだ 縁を包んだ 縁を包んだ	
14	N	1	135-147	13	16.5×13	塊	135-136	XIIa?	方直	9?	2	↑	右が左の上	片完形	図13-138	140-143は 馬骨残片	
15	O	1	148-158	11	8×7	片	155	VIII	17.7	円直	12	1	↓	比較的よく 保存	図6-7	付着物あり	
16	P	4	159-185	17	27×14	塊	168-169	?	方直?	?	2	↑	右が左の上	片首次失 完形	図6-8	縁の底辺に 縁を包んだ 紙鋸がある	
17	Q	4	186-201	16	18×15	片	186	VIII XIIa?	14.1 14.6	円直 方直	12?	1	↓	↑	完形	図9-7	付着物あり
18	R	4	202-238	7	8×7	片	203	XIIa?	14.6	方直	?	1	↑	↑	完形に近い	図3-4	付着物あり
19	T	4	215-252	38	45×5.24	片	215 226-228	XVI?	27.1 14.6	特徴形 方直	8?	1	↓	右が左の上 右が左の上	完形に近い 比較的よく 保存	図9-8 9	残片の付着 あり
20	U	4	253-271	19	20×18	片	256-263	XI	円直	?	1	↑	↑	半分割が欠 損	図6-9	付着物あり	
21	V	4	272-310	29	23×13.5	塊	291-295 305-307	IV?	円直 方直	7?	5	↑	右が左の上 右が左の上	2片完形 完形に近い	図6-10 図9-10	272は馬背 残片、310 は縁	
22	W	4	311-329	19	10×17.4	片	319	VIII	?	円直	1	1	↓	半分割が欠 損	図6-11	付着物あり	
23	X	4	330-345	16	28×7.5	片	330-332	VIII	円直	12	3	↑	右が左の上	2片完形	図6-12	340は体状 に適する	
24	Y	8, 9	416-458	43	48.3×6.12	片	458 429-435	VIII VIII	円直 円直	12 12	1 6	↑ ↑	右が左の上 左が右の上	完形 4片完形	図6-15 図13-3	單と織り合 わせ張り合	
25	Z	8	346-360	15	16.5×11	塊	360 354-356	III XVI?	円直 特徴形	6?	1	↓	右が左の上 右が左の上	完形に近い 1片完形	図6-13 図11-2	358は縁町 方2、	
26	a	8	361-392	10	17×5	塊	362 369-370	XVI II	円直	?	2	↓	右が左の上	ひどく欠損 比較的よく 保存	図11-3	370は縁町 方2、	

番号	組	区番号	通し番号	片の 取り上り範囲 (長×幅, cm)	種類	通し番号	型	用片 重量	片形	孔 数	面の 向き	小札の重なり	残存状況	略図	備考	その他		
27	b	9	371-392	22	45×4.15	片 塊	384-386	Wia?	方首?	3	±	左が右の上 に近い	2片が完形 に近い	図9-11	棒と角を留 んだ頭部が ある	方3, 12.2°, 374.4 度		
28	c	8	393-415	23	18×4 13×4	片 塊	410	XIIla	22.3	方首?	1	±	左が右の上 に近い	完形	図9-12	残片の付着 あり	方8, 尾3	
29	d	8, 9	459-465	28	47×5.12	片 塊	470	XIIla?	22.9	方首?	9	1	左が右の上 に近い	半分欠損 いずれも頭 部がひどく 損壊	図9-13	付着物あり	方2, 尾4	
30	e	9	486-490	5	8×3.6	片 塊	481-482	XIIla?	9?	円首?	2	±	左が右の上 に近い	半分欠損 頭部がひどく 損壊	図9-14	付着物あり	尾2, 尾1	
31	f	5, 6	491-516	22	25×3.13	片 塊	500	?	鉛長?	?	1	±	右が左の上 に近い	半分欠損 1片完形	図6-16	頭部を包んだ 頭部がある	555.4 度	
32	j	9	544-560	17	24×4.26	片 塊	551	III?	円首?	11	1	±	右が左の上 に近い	半分欠損 頭部が欠 損	図6-16	頭部を包んだ 頭部がある	555.4 度	
33	k, k'	4, 7	561-637	590+18	12×13 48×7.28	片 塊	545-554?	III?	円首?	14.0	円首?	13?	1	±	半分欠損 頭部が欠 損	図9-14	頭部を包んだ 頭部がある	方12, 尾19
34	l	5, 6	668-688	21	40×11	片 塊	668-680	?	方首?	?	?	±	右が左の上 に近い	ひどく欠損 頭部を包んだ 頭部がある	図7-4	頭部を包んだ 頭部がある	方1, 尾6	
35	m	5	731-746	16	27×5	塊	732-737	VIII	円首?	12?	6	±	右が左の上 に近い	4片完形	図7-4	頭部を包んだ 頭部がある	尾3	
36	n-n'	5, 8	1229- 1260	22	17×10	片 塊	1245	XIIlb	17.3	方首?	11?	±	右が左の上 に近い	欠損	図3-17	頭部を包んだ 頭部がある	方3	
37	o-o'	5, 8	1211- 1238	28	15×8.12 36×12	片 塊	1235	XIIlb	20.1	方首?	11?	1	±	右が左の上 に近い	完形に近い 2片や欠 損あり	図10-3, 4.5	付着物あり	方2, 尾11
38	p	6, 9	638-667	30	26×11	片 塊	1271	XIIlb	21.3	方首?	9	3	±	右が左の上 に近い	2片完形	図6-17	頭部を包んだ 頭部がある	方2, 尾5
39	q	6	689-730	48	23×7.17	片 塊	1267- 1268	XIV	1b	9.1	円首?	7	4	右が左の上 に近い	2片欠損 頭部を包んだ 頭部がある	図7-3, 2	頭部を包んだ 頭部がある	方1, 尾10,
40	r	5, 8	747-761	15	23×5.12	片 塊	723	1b?	円首?	9?	2	±	右が左の上 に近い	半分欠損 頭部を包んだ 頭部がある	図11-4	全て特殊形 片	尾9	

番号	組	区番号	通し番号	片の 数	取り上げ範囲 (長×幅, cm)	種類 通し番号	型	单片 重量	片形	孔	片の 数	面の 向き	小札の重なり	残存状況	略図	備考	その他
41	s-g'	2, 3	762-807	46	39×4-13	片	765-767 769-771 806-807	?	方貫?	?	2	↑ ↓ ±	半分鏡が欠 損ひどく欠損 半分鏡が欠 損	図11-5	763, 79044 枚其	方2	
42	t	3	808-825	18	15×12	片	808-809 XIIIa?	?	方貫	?	2	↑ ↓ ±	左が石の上 右が左の上? 左が石の上?	半分鏡が欠 損ひどく欠損 半分鏡が欠 損	図9-15	2片撮合	方1, 円2
43	u	5, 6	1309- 1315	7	13×5-9	片	1313 887-888	?	方貫	?	1	↑	完形に近い	図7-13			
44	v	4	826-825 876-909	48	41×36	片	829 XIIIb?	?	方貫	12?	1	↑ ↓ ±	右が先の上 右が左の上?	完形 1片完形	図7-5 馬骨帽片全 て含む、826 と908は棒 状に連なる	方2, 円5, 尾10	
45	w	1, 4	910-925	16	30×3-10	塊	920-921 922-923	XIIIb VIII	方貫	?	2	↑ ↓ ±	右が先の上 右が左の上?	完形に近い	図9-17 図7-6	方2, 円1, 尾1	
46	x	1	926-942	17	25×6-23	塊	934-945	?	円貫?	?	2	↑ ↓ ±	左が石の上?	欠損	939は馬骨 残片	方4, 尾4	
47	y	4, 7	943-959	17	26×5-12	片	948- 956-957 954- 951-952	V VII VIIb	1b 1a 1c 1b 1b	9.2 9.2 7 7 ?	1 1 1 1 1	↑ ↓ ↑ ↓ ±	右が先の上 右が左の上?	完形 1片完形 完形	図7-7- 8 図3-20	944, 94512 馬骨帽片、 943は鉄片	
48	z	4	960-1062	84	31×12-25	片	1017- 965+1 1061	1a 1c 1b 1b	5.5 7 7 ?	1 1 1 1	↑ ↓ ↑ ↑	完形	図3-1, 2, 3		円29, 尾9, 尾20		
49	A)	5	1063- 1080	18	27×3-12	片	1066+1	1b	8.6	円貫	7	1	↑	完形	図7-9	このうち 1066は棒狀 に連なる	方2,
50	C)	6	1096- 1130	35	20×4-14	片	1126	?	円貫	7	?	±	半分鏡が欠 損	図7-10	方4, 尾2		
51	D)	9	1131- 1152	22	26×3-26	片	1131 1138 1139	XVI II VIIII?	特殊形 円貫 円貫?	?	1 1 1	↑ ↑ ?	半分鏡が欠 損ひどく欠損 ひどく欠損	図11-6 図7-11, 12	方7, 円8		
52	E)	3	1153- 1177	25	18×9-16	片	1153 1156	XVI XVIb?	特殊形 円貫?	1	↑ ↑	?	ひどく欠損	図11-7	方2, 尾3		

番号	組	区番号	通し番号	片の 数	取り上り範囲 (長×幅, cm)	種類	通し番号	型	用片 重量	片形	孔 数	面の 向き	小札の重なり	残存状況	略図	備考	その他
53	F1	1	1178- 1181	4	13×7	塊	1178- 1181	XIIIf		方首	10	2	±	右が左の上	1片完形	図9-18	
54	G1	2	1182- 1193	12	21.5×5-14	片	1184	?			?	?	?	未見	略	多くは馬首 残片	方1, 円3, 尾2
55	H1, H1'	1	1194- 1210	17	28.5×3-8	塊 片	1194- 11968- 1207- 1209	XIIIfa? XIV? XVI	方首 特殊形	9	5	±	左が右の上 左が右の上	2片完形 1片完形 半分钟が欠 損	図10-1 図11-8	背面上に縫を 包んだ痕跡 がある	方1- 尾1, 完2
56	I1	5, 8	1274- 1286	113	38×10.5	片	1275- 1282	XIV	24.4	方首	9	±	?	完形に近い, 完形に近い,	図3-18 図10-6		方2, 尾4
57	K1	5, 6	1316- 1341	26	21×18.5	片	1335	Ia	8.3	円首	7	1	±	?	完形	図7-14	付着物あり 円9, 尾5
58	L1	6	1342- 1363	21	20×15	片	1339- 1356- 1357	Ia	11.2	円首	7	1	±	右が左の上	1片完形	図7-15, 16	
59	M1	6	1363- 1376	14	18×11.5	片 片 片	1367-1371 1369 1368-1370	V	24.5	円首	8	1	±	?	完形 完形 半分钟が欠 損	図7 17, 18 -	付着物あり 円1, 尾2
60	O1	5, 6	1393- 1402	10	15×12	片	1394- 1395	XIIIfa? XVa?	?	方首	2	1	±	?	完形 やや欠損	図10-7	2片が接合 尾2
61	P1	6, 9	1403- 1416	14	22×17	片	1414	IV	21.1	円首	7	?	?	?	完形 半分欠損	図3-7	円2, 尾5
62	Q1	3	1417- 1432	16	19.5×14	片	1425	IV?	?	円首	?	?	?	?	欠損	図7-20	方1, 円1
63	R1	2, 3	1433- 1468	36	39.5×19	片 片 塊	1447 1462 1452- 1454	XIIIfb? VIII XVI	22.5	方首 特殊形	10?	3	±	右が左の上	完形 完形 両端欠損	図10-8 図7-21 図11-9	方1, 円3, 尾4
64	S1	1, 2	1469- 1502	36	31×9	片	1484	Ib?	8.9	円首	7	?	?	14は完形	図7-22	円3, 円9	

番号	組	区番号	通し番号	片の 数	取り上げ範囲 (長×幅, cm)	種類 通し番号	型 片 单 片 重 量	片形 孔 乳 頭	片の 面の 向き	小札の重なり	残存状況	略	備考	その他	
65	T ₁	2	1506- 1508	4+9	19×16	片	1507 IXC IX	? 方首	11?	1 +	1	半分斜が穴 損		方1, 尾4	
			1517- 1525			片									
66	U ₁	2, 3	1509- 1516	8	31×18.5	片	1512 IX	26.3 円首	12	—		完形	図3-12	円5, 尾4	
67	V ₁	2, 3	1533- 1563	21	37×17.5	片 塊	1544+1 XIV 1535- 1540	? 方首 8?	11? 5	1 +	右が左の上 —	半分斜が穴 損	図7-23 図10-9	2225-2227 方4, 尾6, と並ぶ	
68	W ₁	4, 5	1554- 1616	63	42×27.5	片 片 塊	1583 VIII 1559- VI 1610 VI	17.9 円首 19.5 円首 7 円首 8	12 1 1 2 2	1 +	右が左の上 右が左の上 — — —	完形	図8-1 3種の型式 図7-24 の異なる片 図3-9 を含む	円19, 尾4, 完4	
69	X ₁	5, 8	1617- 1712	96	45×21	片	1710- VII 1711	? 円首	14?	2	—	右が左の上 —	1片完形、 縁を包んだ 隙がある	図3-10 1712+1713	P30, 尾38, 完2
70	Y ₁	5, 8	1713- 1773	61	45.5×21.5	片 塊	1715 XIIla	16.5 方首	9?	—	?		14片完形	図10-10	方2, 円3
71	Z ₁	8	1774- 1792	19	21.5×11	片	1719 VIII	15.2 円首	12	—	?	14片完形	図8-3	方1, 尾4	
72	a ₁	2, 3	1793- 1816	24	31.5×9.5	片 塊	1793- 1795	1b VIII	7?	3	—	左が右の上 —	1片完形	図8-4	円1, 尾4
73	b ₁	6	1822- 1846	25	44.5×17	片 塊	1831 VIII	25.1 円首	8?	—	—	完形、付着 物あり	図8-6	円6, 尾10	
74	c ₁	6, 9	1817- 1821	5	33×16	片 塊	1819 1829- 1831	X X?	66.2 円首 ?	12 2 3	— — —	完形 1片は欠 形 ひどく欠損	図3-13 図8-5	方1, 尾1	
			1847- 1858	12			1858+1- 1858+3								
75	d ₁	6, 9	1859- 1875	16	23.5×4-8	片 塊	1868 VIII	10.9 特形		—		半分斜が穴 損	図3-24	1874+1875	
76	e ₁	9	1876- 1946	30	76×23	片 塊	1884+1 IX	?	円首	?	1 —	ひどく欠損	図8-7	1883+1884 方1, 尾5	

番号	組	区番号	通し番号	片の 取り上り範囲 (長×幅, cm)	種類	通し番号	型	重量	片形	孔 数	面の 向き	小札の重なり	残存状況	略図	備考	その他
77	f	8, 9	1966- 1930	25 27.5×1.2	片 塊	1912	VIII?	?	円筒 ? ?	?	?	ひどく欠損	図8-8		円2, 尾9	
78	g	8	1931- 1942	12 19.5×10	片 塊	1912	?	?	円筒 ? ?	?	?	ひどく欠損	図8-9		砂けた破片 が残存	
79	h	2, 3	1943- 1952	10 18.5×1.4	片 塊	1912	XVI	?	特殊形 ? ?	1	?	半分欠損	図11-10			
80	i	2	1953- 1966	19 10×12	片 片	1965 1961	XVb XIIia	20.4 方筒 ? ?	方筒 ? ?	10 ?	?	12は完形 半分筒が欠 損	図10-11, 2		方5, 尾1	
81	j	8, 9	1967- 1980	14 21×14	片	1970	XVI?	?	方筒 ? ?	?	?	半分筒が欠 損	図10-13		方1、 尾2	
82	k	5, 6	2031- 2060	30 39×11	片	2052	IX?	?	円筒 ? ?	?	?	ひどく欠損	図8-11		縁を包んだ 鉄錆がある	
83	l	3	1981- 1994	14 19.5×12.5	片	1981-1984 +1985	XVI	33.7	方筒 ? ?	?	?	12は完形	図10-14		3片複合 円1, 尾4	
84	m	2, 5	1995- 2017	23 26×15	片	1995 1995+1	11 VIII	5.7 22	円筒 ? ?	9 12?	?	完全形 やや欠損	図3-4		残片の付着 あり	
85	n	4	2018- 2030	13 25×12	片	2024	?	?	?	?	?	ひどく欠損	図8-10		片尾のみ残 る	
86	o	4	2061- 2078	18 28.9×15	片	2068 2072	XVb XIIe?	15 23.2	方筒 ? ?	9?	?	12は完形	図10-15,		2078+1は 段其	
87	p	2, 3, 5, 6	2079- 2100	22 33×7-13	片	?	?	?	円筒 ? ?	?	?	大部分が欠 損	図11-12		2112-2121 円5	
88	q	1, 2	2101- 2125	25 25×15	片 塊	2125 2106- 2107 2115- 2116	Ib Ib ?	11.7 21.6 ?	円筒 ? ?	?	?	左が右の上? 左が右の上?	図8-13, 12 図11-11		は特殊形片 縁を包み隠 り合わせた 鉄錆がある	
89	r	1	2126- 2145	20 30×8-21.5	塊	2128- 2129 2134- 2135	VIII VIII	?	円筒 ? ?	?	?	半分筒が欠 損	図8-14		円2-2154 尾5	
90	s	1, 2	2146- 2178	33 38×10-17	片 塊	2155 2156- 2157	XVI VIII	?	特殊形 ? ?	12?	1 3	石が左の上? 半分筒が欠 損	図11-12 図8-15		円6	

番号	組	区番号	通し番号	片の 数	取り上げ範囲 (長×幅, cm)	種類 通し番号	型	单片 重量	片形	孔 数	面の 向き	小札の重なり	残存状況	略図	備考	その他
91	t	1, 2	2179- 2198	20 20	20×8-13 20×8-13	片 塊	2182 XIV	方首 331	方首				14は完形	図3-22		
92	m	2	2199- 2216	18 18	24×5-9 片 塊	片 塊	2217-2266 XVb	26.8	方首	9?	-		14は完形	図3-22		
93	v1	2	2217- 2230	14 14	31.5×7-11 片 塊	片 塊	2240- VII	円首 12	円首	8?	4	-	右が左の上 半分欠損 1片完形	図8-14. 15	片尾に縫を 込んだ直跡 がある	図3-22 尾3
94	w1	1, 2	2231- 2263	33 33	48×8-18 片 塊	片 塊	2249- VIII	2348- VII	円首 12	円首	12	-	右が左の上 半分欠損 1片完形	図8-14. 15	片尾に縫を 込んだ直跡 がある	図3-22 尾3
95	x1	2, 3	2264- 2283	20 20	28.5×16.5 片 塊	片 塊	2298 XVa?	2275- XVa?	方首 9?	方首 9?	3	-	左が右の上 半分欠損	図10-18 尾3		図3-22 尾3
96	y1	2, 3	2284- 2295	12 12	19×24 片 塊	片 塊	2291 VIIa	2284- VII	円首 9?	円首 9?	2	-	左が右の上 半分欠損	図3-15 尾3		図3-22 尾3
97	z1	5, 6, 8	2296- 2323	28 28	47×10-16 片 塊	片 塊	2318 VIII	2296- VIII	円首 12	円首 12	1	-	左が右の上 完形 2片完形	図8-17. 18	少量の付着 物がある	図2- 尾2

表註

(1) g組517-525 (9片)、i組538-543 (6片)、h組526-537 (12片)、B組1081-1095 (15片)、J組1287-1308 (22片) の小札はいずれも鰓が著しく、型式が未確定のものは表に入れていない。S組209-214 (6片) とN組1377-1392 (16片) 小札は整理中のため、観察できていない。

このほかに、1846-1858はhi組の下層駆片である。

(2) “+”のある表示は、2片の異なる遺物番号の小札片が1つの小札に接合したことを示す。

(3) “面の向き”欄内の“-”は小札片正面が上を向くことを示し、“+”は正面が下を向くことを示す。

(4) “右が左の上”は2枚の重なり合う小札片が片首を上に向けたとき、右側小札片の左側が左側小札片の右側の上に載る。その他も同様。

(5) [保存状態] 欄内の“半分欠損”、“半分欠損”、“ひどく欠損”は、その小札片が完形の2/3、1/2、1/3などであることを示す。

(6) 表中の“?”は“ようだ”あるいは“不確定”を示す。

(7) 「その他」欄内の“方3、円2、尾4、完2”はそれぞれ 方首影片 3片、円首影片 2片、方尾4点、完形あるいはほぼ完形の片2片 を示す。その他も同様。

喇嘛洞铁器整理随笔四则

万 欣

1. 墓葬铁器的“民族性”刍议

喇嘛洞墓地是国内迄今发现的规模最大的一处以三燕文化墓葬为主的墓地，年代为3世纪末至4世纪中叶^[1]。该墓地出土铁器数量之大、种类之多、随葬之普遍均为目前国内仅见。就目前所知，在东北地区可与之并列提及者，只有位于辽宁地区丘陵地带的西岔沟墓地（西汉武帝至昭帝初期，约当前140年至前80年）和位于吉林北部松嫩平原的老河深墓地中层墓葬（西汉末期至东汉初期，约当前1世纪后期至1世纪初）^[2]。从已发表的有关这两处墓地的铁器资料来看，它们均属于中原地区文化因素与地域性、民族性因素共存的铁器文化。在相对年代上，喇嘛洞墓地与前两者之间存在着三四百年的时隔。在铁器文化面貌上，同前两者相比较，喇嘛洞墓地铁器群表现出了在汉文化因素进一步增多的同时，其地域性和民族性因素更加明显的特点。亦即在铧、铲等农具和斧、锛等手工工具这些汉式生产工具大量出现的同时，以鞍桥包片和马胄、人胄为代表的铁制马具和防护装备系统也同期形成。

综观这三处墓地出土的铁器，其地域性和民族性特征主要表现在：

在铁工具类中，环首小刀和锥类均占相当比重，其中西岔沟墓地出土铁工具250余件，老河深墓地出土小刀97件、锥65件。这类小型工具的大量出现和使用，显然应与肉食加工和各种皮裘、皮具的制作有关，反映出北方游牧民族生产和生活特点。喇嘛洞墓地出土的包括这种小刀在内的削类近250件，虽几乎不见有锥，却新出现一种渔猎工具——冰镩。此外，西岔沟墓地出土的1件铁斗斧（战斧？）则十分罕见，从其形态上看，显然与习见于北方草原地区的青铜鹤嘴锄有着直接的继承关系。

在铁兵器中，西岔沟和老河深出土的铜柄铁剑、老河深和喇嘛洞出土的形态多样化和个性化的铁鎛最为显著。

在马具类中，老河深出土的人胄和马衔、喇嘛洞出土的鞍桥包片以及包括人胄和马胄在内的甲骑具装等皆为骑马民族文化的典型遗物（图一）。

此外，从这3处墓地铁器的出土数量、在整个墓地随葬器物总数中所占的比重以及每座墓随葬铁器的平均数量来看，铁器在与之共存的其他各类器物中都属于不可小觑的一类。据统计，喇嘛洞墓地的416座三燕文化墓葬中，计有310座随葬铁器，共出土各类铁器2740多件（副、套、枚、组），约占随葬品总数的35%以上，平均每墓随葬铁器8.4件；老河深中层墓葬共127座，其中随葬铁器的墓葬计90座，出土铁器520件左右，占随葬品总数（4200余件）的



图一 东北地区两汉十六国时期墓葬出土铁器（比例不等）
 1-4. 剑 5-12. 横 13.14. 锥 15. 刀 16. 刀环 17-19. 针 20. 环首器 21. 鞍钉 22. 鞍桥包片
 (1, 2, 16. 西岔沟墓地出土 3-15. 老河深墓地出土 17-22. 嘴嘛洞墓地出土)

12.4%，平均每墓随葬5.8件；西岔沟墓地共清理墓葬63座，出土铁器430多件，占随葬品总数(2247件)的19.1%，平均每墓随葬6.82件^[3]。

由此可见，汉晋时期在东北地区的少数民族墓地中，均具有以较多铁器随葬的丧葬习俗和文化传统。其中从每座墓葬随葬的数量来看，又以喇嘛洞墓地为最奢，这或许又是其一个地域性和民族性的特征。

总之，相对于年代相当或相近的城址、居址、窖藏等出土的铁器而言，从这3个墓地随葬的铁器以及由此所反映出的考古文化面貌来看，它们都属于一种以中原地区铁器文化因素为主的并带有鲜明的地域性和民族性特点的东北地区汉晋时期的墓葬铁器文化^[4]。如果说在中原地区同东北地区铁器文化之间尚有一定差别的话，那么城址、居址等出土的铁器所表现的文化差别是一种地区性差别，而在墓葬铁器文化方面，这种文化差别则主要表现为一种

民族性差别。

这三处墓地均属于北方地区古代少数民族墓地，尽管其族属尚存争议，诸如喇嘛洞墓地的“扶余说”、“宇文鲜卑或慕容鲜卑说”，西岱沟墓地的“匈奴说”、“乌桓说”和老河深墓地的“鲜卑说”、“扶余说”等^[5]，然而，就其中的喇嘛洞墓地死者的族属而言，如历史地看则不难想见：经过东汉末年至东晋中期一个多世纪的民族迁徙、杂居和融合，前燕时期的慕容鲜卑或已演变为一个由本族、鲜卑化的汉、扶余和高句丽等族组成的具有一定血缘关系的民族共同体。喇嘛洞墓地人骨标本的鉴定结果也恰恰证明了这一点：墓地死者的遗传学构成并不单纯，而是一个“多源性同种系”的人群，即其体质特征的复杂性显示了其种系来源的多源性^[6]。因此，那种试图将其判定为某个单一种族墓地的观点似乎都有偏颇。

墓葬出土的铁器同居址、城址、冶铁址和窖藏址等出土的铁器一样，为东北地区铁器时代考古学文化研究提供了重要信息。然而，前者较后者具有如下优势：

首先是信息的多样性。在由遗迹和遗物构成的各类考古遗存中，墓葬是汇集有关古代社会的历史和文化信息最为丰富的一类遗存。一座古墓的规格可能不大，然而它却可以通过自身遗构、死者残骸和随葬的各种遗物，将墓内铁器所涉及的上下逾千年、广袤数百里的历史文化浓缩于“方寸”之间。而由此所体现出的多样性信息更有利于进行考古学和金相学等多学科综合研究。

其次是信息的相关性。人类是创造铁器文化的唯一主体。作为重要随葬品之一的铁器，与已化为人骨残骸的死者共存一处。为我们直观地考察这些铁器的随葬方式、与死者的位置关系、各种铁器之间的组合及与陶器和其他器物的共存关系等，进而探讨铁器时代的葬制、不同地区的葬俗以及死者的族属问题等提供了不可多得的第一手资料。

其三是信息的统计学意义。每一座墓葬都是一个相对独立的遗存单位。在一处包括数十座乃至数以百计的墓葬的墓地中，随葬的铁器在数量、种类、形态、组合及金相的检测分析等方面，均可以为统计学研究提供难得的大样本数据资料。

2. “葬铁之奢” 随想

在整理喇嘛洞铁器的过程中，面对摆在铁架子上的这些密密麻麻、跨越千年的历史馈赠时，其铁的来源问题又几乎无时无刻不在我们的脑海萦绕。已发表的相关报告虽曾对此问题稍作探讨，但终觉言犹未尽^[7]。毋庸置疑，对一个久居塞外，既缺少铁矿资源又尚未掌握冶铁技术的中国古代北方少数民族来说，在经济落后、战乱频繁的历史条件下，实用性的铁工具、铁兵器和铁马具是多么的必需和宝贵！而尽可能地延长这些铁器的使用寿命同样是那么的必要和重要！然而，他们为何毫不吝啬地将其作为随葬品大量地送入墓中，埋入地下？反观在既拥有铁矿资源又拥有冶铁基地以及掌握冶铁技术的人力资源的中原地区，又有哪一处汉人墓地的死者能够像喇嘛洞墓地的死者那样如此慷慨地“以铁为葬”，将当时大量

的实用铁器通过随葬的方式遗留给今天的我们？

探讨这一问题，除了要充分考虑到互市交易、汉廷馈赠及战争劫掠等因素之外，恐怕还得从慕容氏集团通过武力兼并的手段在北方地区实现短暂局部统一这个主因上说起。

如果打开历史地图就会发现，慕容鲜卑于337年所建立的前燕，其版图的北半部几乎包括今辽宁全境，南半部包括今河北、河南和山西大部，西抵今之晋陕交界的黄河一线，东部则包括了整个山东半岛，其南界已达今河南南阳至安徽蚌埠之间的淮河一带。这在当时中国北方地区的十六国中，可算是一个南北纵贯千里、东西横联漠海的“超级大国”之一了^[8]。慕容氏燕国的这一辽阔版图不仅囊括了位于最北部的辽东地区唯一的一处汉置铁官故地——平郭（今盖州市南），也囊括了位于冀西北、豫中、鲁中和苏北地区的诸多铁官故地（图二）^[9]。因此，慕容氏集团进行的这种军事扩张，很难不让人怀疑其是否带有以武力攫取汉置铁官故地为目的的意图。这也难怪使人联想到在先秦时期，曾有夏商周三代为寻求铜矿资源而频繁迁都之举，其后又有齐国联合韩、魏攻取楚国宛、叶以北之地以及秦国为占宛、邓之地而举兵伐韩之例^[10]。其中的宛（今河南南阳境内）即是当时最重要的产铁和冶铁基地之一。时隔千百年之后，历史的某种相似性在十六国时期的慕容氏集团东征南伐的过程中再次重现。前燕自337年慕容皝称燕王始，至370年被前秦所灭，前后历经33年。在此期间，慕容氏集团以占有者和统治者的身份，在尽享辽东平郭铁官故地之利28年的同时，又尽享今之河北、河南乃至山东境内诸铁官故地之利18年。在前秦灭亡之后，慕容氏集团又乘机复国，于384年在前燕故地建立了后燕。其版图面积虽不及前燕，但仍囊括了曾为前燕所占据过的大部分铁官故地。这样，后燕继前燕之后，又尽享中原地区铁官故地之利25年，直到409年为北魏所灭。试问：在群雄并起争霸的十六国时期，在与东晋汉廷并立称王的诸多北方少数民族政权中，又有哪一个国家能够最早一统中原地区的铁官故地并曾两度占有之？没有，唯慕容氏的前燕和后燕而已。

前燕这一庞大帝国的建立，使得慕容氏集团在尽占天时（历经西晋末年的“八王之乱”，继之而起的东晋实力大减，仅偏安江南一隅，无心北顾）与人和（在慕容廆至慕容儁时期长达数十年的兼并战争中，慕容氏集团通过招抚流民的政策和人口掠夺的手段来吸纳中原士族，网罗汉族工匠）



图二 前燕境内汉置铁官故地分布示意图

的同时，通过强势的东征和南伐，兼并高句丽，灭掉冉魏，进而达到吞并其境内的汉代铁官设置故地之目的，最终又尽占了铁器自给之“地利”。

显然，只有在这种短暂的局部统一的历史背景下，辽东铁官故地所产铁器的频繁西调和今之冀鲁豫境内诸多铁官故地所产铁器和板材的大量北输才会成为可能。这也许是喇嘛洞墓地的死者们所具有的对铁器进行如此“挥霍性消费”的“底气”和“资本”的由来。因此，地处辽西地区大凌河流域的喇嘛洞墓地随葬的大量铁器的来源，只有放在这一历史背景下去考察才能予以比较合理的解释和理解。

除了上述铁器来源的因素之外，致使其以大量铁器随葬者，似乎还有以下两个因素。

一是入主中原后的慕容氏贵族的某种“土豪心态”。铁器的大量应用不仅促进了屯垦经济的发展，而且在对外进行军事扩张中也起到了重要作用。同时，在政治上也大大推动了以慕容氏部族为主体的鲜卑社会的封建化进程。作为封建私有制下的一种重要财富，铁器在经济和军事上重要性的彰显、铁器来源后顾之忧的消除以及铁器供应上的相对稳定和充裕，所有这些均不可避免地会对处在社会转型期中的慕容氏集团的铁器消费观念产生影响，进而滋蔓出某种通过大量随葬铁器这种“挥霍性消费”来炫富的“土豪心态”，并引起了鲜卑社会的普遍仿效。于是，在喇嘛洞墓地随葬铁器的300多座墓葬中便可看到这种情景——贵族大墓内自然是铁器充盈，数量可达数10件以上；略为富有的死者也不惜倾其所有，将生前使用过的铁器悉数入葬，墓内铁器多在十件左右，其中不乏有以残器或制作草率，没有什么实用价值的铁明器来凑数的随葬者；贫者随葬不过1-2件，而在更加“赤贫化”的上百座墓葬中竟无1件铁器随葬——这确然有些出乎我们的意料！在此，铁器随葬数量的多寡，已使得当时鲜卑社会的两极分化和贫富差别加大的现象更加突出和明显。

二是鲜卑社会的“贵兵死”习俗。从年龄上看，铁器主要随葬于处在24—35岁和36—55岁两个年龄组内的死者墓葬中。在这两个年龄组中，计有男性墓葬130座，随葬铁器共1600多件，约占铁器总数的58.4%，平均每座随葬12.4件。若以随葬20件以上铁器的25座墓葬为例，则除了I M5为56岁以上男性、II M209和II M370为女性墓葬之外，其余22座均为24—55岁的男性墓葬，其中又以24—35岁的青壮男性为最多，共12座。可见，在鲜卑社会生产和军事活动中，男性青壮年及55岁以下的中老年是铁器使用的主体。他们生前从军，死后又不惜以铁厚葬。在这里，对铁器的占有和铁器随葬的多寡，又从一个侧面反映了史籍中所记载的当时鲜卑社会普遍存在着的那种“贵少而贱老，其性悍勇”“俗贵兵死，敛尸以棺，有哭泣之哀，至葬则歌舞相送”“宠少壮，尚勇武，厚殓战死者的丧葬习俗和观念^[1]”。如前所述，从两汉时

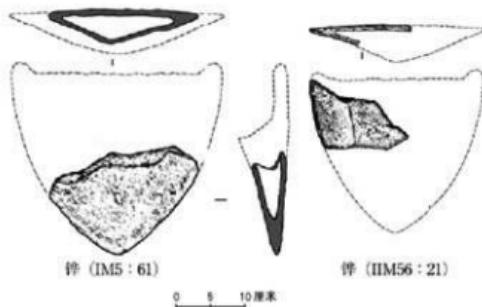
期的西岱沟墓地和老河深墓地到十六国时期的喇嘛洞墓地，以铁器厚葬战死者似乎已成为东北地区古代少数民族的一种遗俗而得到保留和传承。

3. 残铧之谜试解

在考古发现的铁质文物中，铁铧无疑是规格最大的铸铁件。在经过金相鉴定的39件喇嘛洞铁器中，有2件铁铧标本值得注意，其出土编号（实验编号）分别为I M5：61（7136）和II M56：21（7151）^[12]。这两件标本皆为残损的铸铁件，其金相组织均为亚共晶白口铁。从残损程度来看，以铧II M56：21为最，平面形状不规则，仅存一小部分边刃和銎口。残长17.7、残宽10.8、厚0.5—0.9厘米；I M5：61为局部残损，舌状锋，边刃外弧，正面中间略起一道纵向凸棱。正面中部略起脊，銎口呈三角形。残长14.5、残宽19.5、残高4.2、壁厚0.4—0.7厘米（图三）。这类残损的铁铧在I M10、I M22、II M49和II M218等墓中也有发现。此外，在与铁铧伴出的犁镜这类大型铸铁件中也有残损现象。由此产生的一个疑问，从这些残损的铁铧和犁镜上打下来的铸铁残块都哪里去了？

对这一现象，我们似乎也可以用“毁器”习俗来解释。但问题是，如果在死者下葬时，一定要用损毁的铁器来满足当时的生者对死者的某种祭奠心理需求的话，那么除了利用更易于损毁的规格较小的铸铁件诸如刀、铲等之外，为何一定要不惜“血本”（可以想见，像铁铧这样大型的铸铁件，对其拥有者来说，在当时不能不算是一笔重要财富），费尽蛮力地将铁铧这种最为硕大厚重的铸铁件砸残甚至砸毁呢？也许，将其砸毁为若干残块的目的是为了便于在自用作明器的同时再分送给别的死者做随葬之用吧？然而，在其他墓内并未见有可与之拼复的相应残块。因此，问题的答案似乎只有一个，即这些被有意损毁的铁铧的一部或大部，可能已被用作了炒钢的原料。

据研究，在两汉时期的铁器管理方面，汉廷实行“限治供铁”的政策，即在铁官治下，在禁止边远地区私营冶铸的同时，由中原地区南阳一带的大铁官向周边地区以“均输”的方式外供铁器或制作铁器的板材^[13]。当然，其中的铁器成品只会限于农具和生活用品，而冷



图三 铁铧残片复原示意图

兵器这种类似于“军火”的产品当会在严禁之列的，以避助生边患之虞。显然，这种供铁政策对于塞外北疆地区，尤其是处在兵燹四起、战乱不断的十六国时期的鲜卑等少数民族来说是远远不能满足其需求的，特别是对各种兵器的需求更是如此。从喇嘛洞墓地出土的铁器来看，兵器的种类虽不及生产工具，但其数量却多于前者，达860多件，其中刀、剑、矛这类长大兵器近300件。

就这些为数众多的兵器而言，在不可能通过正常的贸易途径来获得的情况下，其来源无非有两个：一是通过战争途径从敌方缴获，二是“自力更生”仿制生产。对所需重要原料——炒钢，除了可能通过“均输”或互市等途径获得一部分板材之外，另一可行的方法就是在板材有限时去毁犁取铁，再由迁徙或劫掠过来的掌握炒钢技术的汉族工匠反复加热锻打进行炒炼制作所需的各类兵器。喇嘛洞墓地铁器的金相鉴定结果也表明，在39件铁器标本中，以炒钢制品为最多，共16件，明显多于铸铁脱碳钢；而在16件炒钢制品中又以兵器为多。这表明炒钢技术已成为主要的制钢技术，并被广泛应用于兵器制作上^[14]。成语中有“铸剑为犁”一说，意为息战兴农，化战争为和平。与此相反，慕容鲜卑的这种求得炒钢原料的方法则明显属于一种“毁犁锻剑”的行为。或许，这是在当时汉廷实行的“限治供铁”政策的限制与北方少数民族对冷兵器的大量需求之间的矛盾比较突出时所采取的一种不得已行为吧！当然，这种现象的产生似应在慕容氏集团尽占中原地区铁官故地的前燕建立之前，炒钢原料的供应相对比较紧张之时，而不应是在此时以后。

此外，需捎带提及的是，作为一部正式出版的考古报告书，《榆树老河深》的一个缺陷是铁器形态与金相之间缺少必要的对应性，亦即经过金相鉴定的铁器往往不见有相应的表现铁器外观形态的线图或照片，由此所反映的铁器信息还只是一种“只窥一斑，难见全貌”的碎片化信息。这一现象的产生，一方面是受考古发掘报告体例、篇幅所限，一方面是受检测取样技术所限——为避免对完整铁器的破坏，有损检测只能尽量选择残损铁器取样，而这些经过检测的残损铁器又往往会被报告的编写者所忽略。关于这一点，还需合作的双方能够予以适当的注意和改进。

4. 一点感言

在历史长河中，人类从匍匐于地到直立前行，经历了三个既漫长而又短暂的难忘时代。C. 汤姆逊提出的著名的“三期说”虽已被学界所公认，但在实际上，人类社会的这一发展过程无非经历了两个“大时代”，即漫长的石器时代和短暂的金属时代。这两个“大时代”又分别包括了考古学对考古学文化所划分的四个“小时代”，即分别属于石器时代的旧石器时代和新石器时代，分别属于金属时代的青铜时代和铁器时代。在这四个时代中，铁器时代是一个最为短暂且又最为重要的时代。以生铁冶炼和柔化锻打为重要特点的中国古代钢铁制造技术的发明以及应用这一技术制作出来的大量铁器，对人类社会的政治、经济、军事和文

化的巨大影响，这都是其他三个时代的新、旧石器和青铜器所不能比拟的。因此，在对整个人类社会发展史的研究中，铁器无疑应是我们研究铁器时代的最主要和最重要的实物资料，铁器及铁器研究应该占有其应有的重要地位。时至今日，石器时代和青铜器时代皆已真正成为古老的过去，似乎只有铁器时代的铁器还在穿越过去并通过当今之钢铁时代执着而又普遍地关联着我们。为我们默默地承担着无所不在而又无所不能的“工具”这一重要角色。然而，多少有些令人遗憾的是，在中国，经过近百年来的考古学偏爱，已使得石器和青铜器皆分别在各自时代的研究领域中独占鳌头。相比之下，只有铁器时代的铁器还仍然在“享受”着一种久被轻慢的不公正待遇。

古代铁器的最大特性是什么？它既是一种矿藏最大、成品数量最多、硬度最高、应用最广的金属文物，同时，由于它易于锈蚀，且面目“丑陋”，因而也是一种最为脆弱、最不受待见的金属文物。迄今为止，同其他金属文物相比，铁器的保护和研究还仍只是一种为数不多者的专业行为。人们对古代铁器的态度，似乎仍难以完全摆脱“铜贵铁贱”这种如同破烂王一样的认识水准的局限，自觉或不自觉地为“值钱与不值钱”这种世俗化的价值观所左右，对发掘出土的铁器或整理不及时、或保护不到位，对其中的残破者则不编号、不登记甚至随意弃之的轻慢之举也时有所见。

在当今科技高度发达的时代，我们似乎还仍然想象不出在未来世界中能够完全取代人类所赖以生存的钢铁的新材料会是什么，更不能想象的是，现代人类文明大厦如果离开钢铁的支撑将会变得何等脆弱。有鉴于此，如果我们能够在津津乐道于金银铜、瓷玉陶这些“古董”之余，拿出一点热心和耐心去了解和善待一下古代铁器的话，那实在是一件学术幸事。因为学术的可贵之处，不在于其如何高深，令常人景仰，而在其不容世俗，没有偏爱，一切以研究对象所具有的科学价值为准。只有了解古代铁器，才能进一步了解现代钢铁文明的过去，只有了解这一过去，才能更好地期待和把握现代钢铁文明的未来，真正做到善待创造这一文明的人类自己。

注

- [1] 辽宁省文物考古研究所等：《辽宁北票喇嘛洞墓地1998年发掘报告》，《考古学报》，2004年第2期。原发掘报告将喇嘛洞墓地的相对年代推定在3世纪末至4世纪中叶，现在看来或许略为偏早，似应将其推定在4世纪初至晚期为宜，即其上限在前燕建国前后不久，下限可能晚至后燕。
- [2] 孙守道：《匈奴西岱沟文化》古墓群的发现，《文物》，1960年8、9期（合刊）；吉林省文化考古研究所编：《榆树老河深》，文物出版社，1987年4月第1版。
- [3] 有关喇嘛洞墓地的数据系待出版的考古发掘报告书《喇嘛洞三燕文化墓地》中的统计资料，其中出土器物的总数尚未最后确定。如略有变动，则以正式发表者为准。老河深和西岱沟的统计数据参见注[2]，其中后者的铁器数量不详，故未计入。
- [4] 有一种观点认为，三燕文化的上限应在352年慕容廆灭掉冉魏，创建燕国之时，而不应是始于慕容皝自立燕王时的337年。因此，若以352年为界，则其前的慕容鲜卑文化应属于东晋文化范畴，其后才可以是与东晋文化并列的三燕文化。参见孙进已主编：《东北历史地理》（第二卷）102页。黑龙江人民出版

- 社, 1989年9月第1版。
- [5] 同注[1]。另参见田立坤:《关于北票喇嘛洞三燕文化墓地的几个问题》,辽宁省文物考古研究所编:《辽宁考古文集》(二),科学出版社,2010年7月第1版;陈平:《江西三燕墓葬论述》,《内蒙古文物考古》,1998年第2期;曾庸:《辽宁西丰西岔沟古墓群为乌桓史迹论》,《考古》,1961年第6期;刘景文等:《吉林榆树老河深墓葬群族属探讨》,《北方文物》,1986年第1期。
- [6] 陈山:《喇嘛洞墓地三燕文化居民人骨研究》,158页及朱泓所撰序言部分,科学出版社,2013年3月第1版。
- [7] 同注[1]。
- [8] 谭其旗主编:《中国历史地图集》(第四册),9-10页,中国地图出版社,1982年10月第1版。
- [9] 本文中的图二参照《中国古代科技史·矿冶卷》(韩汝玢主编,科学出版社,2007年5月第1版)506页,图8-3-1绘制而成,特予说明。
- [10] 高蒙河:《铜器与中国文化》,109页,汉语大词典出版社,2003年5月第1版;杨宽:《战国史》,上海人民出版社,1980年。参见陈建立:《从铁器的金属性研究看中国古代东北地区铁器和冶铁业的发展》,《北方文物》,2005年第1期。
- [11] 《后汉书·乌桓鲜卑列传》卷九十。乌桓,又作乌丸,在《三国志·乌丸鲜卑列传》卷三十裴松之注中也有同样记载。
- [12] 北京科技大学冶金与材料史研究所等:《北票喇嘛洞墓地出土铁器的金相实验研究》,《文物》,2001年第12期;陈建立等:《汉晋中原及北方地区钢铁技术研究》,75页,表5.1,北京大学出版社,2007年1月第1版。
- [13] 李京华:《中国秦汉冶铁技术与周围地区的关系》,《中原古代冶金技术研究》201页,中州古籍出版社,1994年6月第1版。
- [14] 同注[12]。

喇嘛洞墓地出土鉄器整理隨筆四題

万 欣

1. 墓葬鉄器の「民族性」議論

喇嘛洞墓地は国内でこれまで発見された最大規模の三燕文化墓葬を中心とした墓地で、年代は3世紀末から4世紀中葉である⁽¹⁾。出土鉄器量の多さ、豊富な種類、鉄器副葬の普遍性は、いずれも現在のところ国内では稀な事例である。東北地区において、今まで発見されている遺跡のうち、この墓地と直接比較できる墓葬は、遼北地区丘陵地帯の西岱溝墓地（前漢武帝～昭帝初期、紀元前約140年～前80年）と吉林北部松嫩平原の老河深墓地中層墓葬（前漢末期～後漢初期、紀元前約1世紀後期～紀元後1世紀初）があるのみである⁽²⁾。すでに発表されている上記二遺跡の関連鉄器資料をみると、いずれも中原地区的文化要素と地域性・民族性要素が共存する鉄器文化に属しているのがわかる。相対年代において、喇嘛洞墓地は上記2遺跡との間に3、400年の開きがある。鉄器文化の様相では、喇嘛洞墓地の鉄器群は2遺跡よりも漢文化の要素が一層強く現れるとともに、その地域性・民族的要素がさらに明確な特徴として加わっている。すなわちそれは犁、鍤などの農具、斧、手斧などの手工具であり、このような漢式生産工具が大量に出現するとともに、鞍金具、馬冑、甲冑といった鉄製馬具と防具系統もまた、同時期に形成された。

これら3カ所の墓地出土鉄器を総覧すると、その地域的・民族的特徴は主に以下のとおりである。

鉄製工具類のうち、素環頭刀子（環首小刀）と錐類の比重はともに大きく、西岱溝墓地からは鉄製工具が250余点、老河深墓地からは刀子97点、錐65点が出土している。このような小型工具の大量の出現と使用は、明らかに食肉加工と各種皮革製品の製作と関係があり、北方遊牧民族の生産と生活の特徴を反映している。喇嘛洞墓地では削を含む刀子類は約250点が出土しているが、錐は存在しないようで、そのかわりにあらたに一種の漁撈具－氷用穿孔具が出現する。このほか、西岱溝墓地から出土する闘斧は出土自体が稀で、その形態は北方草原地域でよくみられる青銅製鶴嘴と直接的な系譜関係にあるのはあきらかである。

武器は、西岱溝、老河深出土の青銅柄鉄剣、老河深、喇嘛洞出土の多様化ならびに特殊化した形態の鉄鎌がもっとも主要な器種である。

馬具類は、老河深墓地出土の甲冑と銜、喇嘛洞墓地出土の鞍金具および甲冑と馬冑を含

む重装騎兵の防御武具などがあり、いずれも騎馬民族文化の典型的な遺物である（図一）。

このほか、上記三墓地から出土した鉄器の量、これらが全墓地の副葬品に占める割合、および各墓における副葬鉄器の平均量からみて、鉄器は共伴する各種副葬品のなかでも軽視できない一群である。統計をみると、喇嘛洞墓地416基の三燕文化墓葬のうち、310基が鉄器を副葬し、各種鉄器が合計2740点（セットを含む）あまり出土している。これは副葬品総数のおよそ35%以上を占め、1基あたりの鉄器副葬数は平均で8.84点となる。老河深中層墓葬は計127基あり、このうち鉄器を副葬する墓は90基、出土鉄器は520点前後である。これは、副葬品総数（約4200点）の12.4%を占め、1基あたり5.8点が副葬されていた。西岱溝墓地では調査された計63基の墓から出土した鉄器は430点で副葬品総数（2247点）の19.1%を占め、1基あたり6.82点を副葬していた⁽³⁾ことがわかる。

以上より、漢晋期における東北地区の少数民族墓地では、いずれも比較的多くの鉄器を副葬する埋葬習俗と伝統文化があり、このうち、各墓に副葬された数量からみると喇嘛洞墓地がもっとも豪奢で、これは彼らの地域性や民族的特徴とみることができるかもしれない。

つまり、同時期あるいは近接する時期の城址、集落址、土坑などから出土した鉄器と比較すると、上記3墓地の副葬鉄器およびそこに反映される考古文化の様相からみて、それらはいずれもある種、中原地区的鉄器文化要素を主とする鮮明な地域性と民族的特徴を帯びた東北地区漢晋墓にみられる鉄器文化に属している⁽⁴⁾ことがわかる。中原地区と東北地区の鉄器文化の間になお一定の違いがあるとすれば、城址や集落址等における出土鉄器が示す文化の差は、一種の地域性の違いであり、墓地における鉄器文化の差はすなわち、一種の民族性の差の表出といえる。

この三墓地はいずれも北方地区の古代少数民族墓地であり、その民族については今も論争がついている。すなわち、喇嘛洞墓地の「扶余説」、「宇文鮮卑あるいは慕容鮮卑説」、西岱溝墓地の「匈奴説」、「烏桓説」、老河深墓地の「鮮卑説」、「宇文説」⁽⁵⁾等である。このうち、喇嘛洞墓地被葬者の民族についていえば、歴史的にみて推察は難しくない。すなわち、後漢末年から東晋中期にかけておこなわれた、1世紀以上の民族移動、雜居と融合をへて、前燕期の慕容鮮卑は本族、鮮卑化した漢人、扶余や高句麗等の人びとが形成した一定の血縁関係のある民族共同体にすでに変化していた。喇嘛洞墓地における人骨の鑑定結果からも、まさにこの点が証明されている。すなわち、被葬者の遺伝学的構成は単純ではなく「多源的同種系」集団であり、形質学的特徴の複雑性は、その起源が多源的であることを示している⁽⁶⁾。鑑定結果からも、ある單一種族の墓地であると判定する觀点は不適切であることがわかる。

墓葬出土鉄器は、集落址、城址、製鉄遺跡、土坑などから出土した鉄器と同様に、東北

地区的鐵器時代の考古文化研究において重要な資料である。しかし、前者は後者よりも以下の点で有益である。

まず、情報の多様性がある。遺構と遺物が構成する各種考古遺跡のなかで、墓葬は関係する古代社会の歴史・文化情報がもっとも豊富に集まつた種類の遺跡である。1基の墓の規模は大きくないとはいえ、遺構自体が、被葬者、各種副葬遺物を通じて、墓内の鉄器が関係した上下千年を超え、広さ数百里におよぶ歴史文化を墓内平方メートルのなかに凝縮させたものであり、ここに表れる多様な情報は、考古学や金相学など、多分野の総合研究に一層有利である。

次に情報の相間性がある。人類は鉄器文化を作り出した唯一の存在である。重要副葬品のひとつである鉄器は、すでに人骨と化した被葬者と同所にあり、我々にこれら鉄器の副葬方式、被葬者との位置関係、各種鉄器の組み合わせ、および土器とその他遺物との共伴関係などを直接的に考察する機会をあたえ、さらには鉄器時代の葬制、異なる地域の葬俗および被葬者の民族問題などを研究するための貴重な第一次資料を提供する。

第三に、情報の統計学的意義がある。1基の墓はいずれもひとつの独立した遺構単位である。数10基ないし100基を数える墓を含む墓地において、副葬された鉄器は量、種類、形態、組み合わせ、および金相分析などの面で、統計学分析をおこなう上での貴重な基礎資料を提供する。

2. 「葬鉄の奢」隨想

喇嘛洞墓地出土鉄器の整理過程で、収蔵庫のスチールラック上に隙間なく並ぶ、千年の時を超えた歴史の贈り物と対面するたびに、これら鉄がどこから来たのかという来源問題は、我々の頭のなかから片時も離れないかのようであった。すでに発表された報告では、この点に関して若干研究されているとはいえ、十分とはいえない⁽⁷⁾。長く塞外に居住し鉄鉱資源が欠如、または治鉄技術を掌握していない古代北方少数民族からすると、経済的に遅れ、戦乱が頻繁におこる環境下で、実用的な鉄製工具、武器、馬具がいかに必需品で貴重であったか。可能な限り、鉄器の使用寿命を延ばすことが、鉄器の入手と同様にいかに必要で重要であったかは、疑う余地はない。けれども彼らはなぜ、惜しむことなくそれらを副葬品として大量に墓中に納め、地下に埋めたのだろうか。すでに鉄鉱資源を擁し、また治鉄基地および治鉄技術を通じた人的資源を擁した中原地域にあっても、どの漢人墓地の被葬者も喇嘛洞墓地の被葬者のように気前よく「鉄を以て葬を為す」ことはできていない。喇嘛洞墓地の集團は、當時大量の実用鉄器を副葬するという方法を通して今日の我々になにを残したのだろうか。

この点について、慕容氏集團が短期間で北方地区の統一を実現させた主要因は、互市で

の交易、朝廷からの下賜、そして戦争による略奪等の諸要素に加え、武力をともなった手段であったであろう。

歴史地図を開くとすぐわかるように、慕容鮮卑が337年に建てた前燕は、その版図の北半部が現在の遼寧省のほぼ全域、南半部は現在の河北、河南、山西省の大部分を含んでいた。西は現在の山西省と陝西省の境である黄河ライン、東は山東半島全体を覆い、南の境は河南省南陽から安徽省蚌埠の間の淮河一帯まで達していた。これは当時、中国北方地区の十六国において、南北は千里を貫き、東西はゴビから海に繋がる「超大国」のひとつに数えられる⁽⁸⁾。慕容氏燕国この広大な版図は、最北部の遼東地区唯一である漢鉄官故地の平郭（現在の蓋州市南）を含むだけでなく、河北北部、河南中部、山東中部と江蘇北部地区の多くの鉄官故地を含んでいた⁽⁹⁾（図二）。このため、慕容氏集団が進めた軍事拡張は、武力で漢の設置した鉄官故地を奪うことを目的とする意図があったことは想像にかたくない。これはまた、先秦期に夏商周三代が銅鉱資源を求めて遷都をおこなったこと、その後もまた齊が韓、魏と連合して楚国の宛、葉以北の地を攻略したこと、秦が宛、鄭の地を得るために挙兵して韓を討った例などを想起させる⁽¹⁰⁾。そのなかの宛（現在の河南省南陽）は当時もっとも重要な鉄生産基地のひとつであった。千百年の時をへた後、歴史のある種の相似性を、十六国期の慕容氏集団の東征南伐過程にみてとれる。前燕は337年に慕容皝が燕王を称して始まり、370年に前秦に滅ぼされるまで33年間続いた。この期間、慕容氏集団は占領者と統治者の身分で遼東平郭の鉄官故地の利を28年間享受し続けるとともに、現在の河北、河南、さらには山東域内の諸鉄官故地の利を18年間享受した。前秦滅亡後、慕容氏集団は再び機に乗じて復国し、384年に前燕故地に後燕を建てた。その領土面積は前燕におよばなかったものの、かつて前燕が占領した大部分の鉄官故地を有するものであった。このように、後燕は前燕を継いだ後、409年に北魏に滅ぼされるまで、中原地域の鉄官故地の利を25年間享受した。群雄が割拠し禍を争った十六国期において、東晋朝廷と並び王を称した多くの北方少数民族政権のうち、もっとも早く中原地区の鉄官故地を支配下に置ことができ、しかも二度、その地を占有した国があつただろうか。それはただ、慕容氏の前燕と後燕があつたのみである。

前燕というこの巨大帝国の建国は、慕容氏集団に時機（西晋末年の八王の乱をへて成立した東晋は、国力が大いに低下し、江南の片隅に甘んじて北を顧みなかつた）と人の和（慕容廆から慕容皝期の数十年にわたる戦乱のなかで、慕容氏集団は流民を宣撫する政策や人間略奪という手段を用いて中原士族を取り込み、漢工人を集めた）を掌握した。と同時に、強力な東征南伐で高句麗を併合して冉魏を滅ぼし、さらにはその領域の漢代鉄官が設置された故地を併合するという目的を果たし、最終的には鉄器自給の「地の利」を独占した。

このような短期間での局地的な統一という歴史背景があつたからこそ、遼東鉄官故地で

生産された鉄器の頻繁な西への移動、そして冀魯豫域内（現在の河北省、山東省、河南省）の多くの鉄官故地で生産された鉄器と板材の北への大量移動が可能となったのである。これはまた、もしかしたら、喇嘛洞墓地の被葬者たちが有する鉄器に対して「濫費型消費」をする「意気」と「資本」の由来なのかもしれない。それゆえ、遼西地区大凌河流域の喇嘛洞墓地に副葬された大量の鉄器の由来は、このような歴史背景下で考察してこそ、合理的な解釈と理解が可能となるのである。

上述した鉄器の由来という要因以外に、その大量の鉄器副葬の背景には、さらに以下の二つの要因があったようだ。

ひとつは、中原の主となった後の慕容氏貴族の、ある種の「土豪精神」である。鉄器の大量使用は屯田開墾経済の発展を促進するだけでなく、対外軍事拡張を進めるうえでもまた、重要な影響をおよぼした。同時に、政治上でもまた、慕容氏部族を主体とする鮮卑社会の封建化を大いに促進させた。封建私有制下の重要な財産として、鉄器の経済・軍事上における重要性、鉄器生産源に憂慮がないこと、および鉄器供給における相対的な安定と豊富さというこれらはすべて、いずれも社会転換期にあった慕容氏集団の鉄器消費観念に対して不可避の影響を与えた。さらには、蔓延する大量鉄器副葬による「濫費型消費」が絢爛な「土豪精神」を生み、そしてまた鮮卑社会の普遍的模倣を引き起こした。よって、喇嘛洞墓地において、鉄器副葬のある300基以上の墓からは次のような光景がみられるのである。貴族の大型墓は基本的に鉄器で満ちており、その副葬量は10点以上におよぶ。やや裕福な被葬者もまた、その副葬を惜しまず、生前に使用した鉄器をことごとく副葬するため、墓内の鉄器は10点前後を数えるものが多い。そのなかで少なくないものが完形ではないか、いい加減な作りのもので、実用価値のない明器鉄器で数を合せた副葬であった。貧しい者は1～2点を副葬するにすぎず、さらに「赤貧化」した100基にのぼる墓では、ひとつの鉄器の副葬もない。これは明らかに我々の予想外であった。よって、副葬鉄器数の多寡は、すでに当時の鮮卑社会における両極分化と貧富の差が拡大した現象をより強調し、かつ明示している。

2つ目は、鮮卑社会の「兵死を貴ぶ」習俗である。年齢からみて、鉄器は主に24～35歳と36～55歳の2つの年齢グループの墓に副葬されていた。この2つのグループのうち、男性墓は130基あり、副葬鉄器は全部で1600点以上で鉄器総数量の58.4%を占め、1基あたりの平均は12.4点である。20点以上の鉄器を副葬する25基の墓を例にすると、I M 5号墓が56歳以上の男性、II M209号墓とII M370号墓が女性であることを除き、残りの22基はいずれも24～55歳の男性の墓であった。また、このうち24～35歳の青壯年が最多で合計12基を数える。以上より、鮮卑社会の生産と軍事活動において、男性の青壯年および55歳以下の中・老年が鉄器使用の主体であるといふことができる。彼らは生前、開墾と軍事に従事

し、死後もまた、鉄を惜しげもなく副葬し、厚葬をおこなった。このような鉄器の所有と副葬鉄器の多寡には、史籍中に記載された当時の鮮卑社会に普遍的に存在した習俗と觀念をみてとることができる。すなわち、「少きを貴び而して老を賤しみ、其の性悍塞」、「俗、兵死を貴び、戸を敵むに棺を以てし、哭泣の哀有り、葬に至らば則ち歌舞し相送る」とあり、そこには若く壯健であることと武勇を貴び、戦死者を厚く葬る葬俗と觀念が反映されている^{〔11〕}。前述のように、鉄器によって死者を厚く葬ることはすでに東北地区古代少数民族の一種の習俗であり、両漢期の西岱溝墓地と老河深墓地から十六国期の喇嘛洞墓地にいたるまで、それが保存・継承されていたのである。

3. 犁残片の謎に関する試論

考古学的調査を経て発見された鉄資料のうち、犁は間違いなく鋳鉄製品のなかで最大のものである。金相鑑定した39点の喇嘛洞鉄器のうち、2点の犁資料は注目に値する。その出土資料番号（実験番号）はそれぞれIM5:61(7136)とIM56:21(7151)である^{〔12〕}。この2点の資料はともに破損した鋳鉄品で、その金相組織はいずれも亜共晶白鋳鉄であった。残存度からみると、犁IM56:21が最たるもので、平面形は不定形で一部の側刃と袋部のみ残る。残存長17.7cm、残存幅10.8cm、厚さ0.5~0.9cmである。IM5:61は先端部片で、舌状に尖り、側刃は弧状をえがき、正面中央には一本の縱方向の凸線がのび、全体的にやや突出する。袋部断面形は三角形を呈する。残存長14.5cm、残存幅19.5cm、残存高4.2cm、厚さ0.4~0.7cmである（図三）。このような破損した犁はIM10、IM22、IM49、IM218などの墓内からも発見されている。このほか、犁とともに出土した犁鏡（泥除）という大型鋳鉄製品もまた、破損した状況であった。これによって生まれる疑問は、一部が破損するこれらと接合する残りの鋳鉄残片はどこへ行ったのかである。

この現象については、「毀器」習俗から解釈できるだろう。しかし問題は、もし死者を埋葬する際に破壊した鉄器を用いることで、生者が死者に対する供養の気持ちを満たす必要があったのであれば、破壊しやすい鋤や鍬、鏟といった小型品をもちいればよいのにもかかわらず、「元手」（犁のような大型鋳鉄製品はその所有者からすると、當時重要財産であったことは明らかである）を惜しまず、犁というこの種のなかでもっとも大きく重厚な鋳鉄製品を荒々しく破壊さえしたのだろうか。もしそれを壊していくつかの破片にすることが目的ならば、自身のものを明器とするとともに、別の被葬者に分配して副葬に用いるのが好都合なのではないだろうか。しかし同一個体に接合できる破片はほかの墓からもいまだ出土していない。このことから、問い合わせはただひとつである。つまり、このように故意に壊された犁の一部あるいは大部分は、炒鋼の原料として用いられた可能性がある。

これまでの研究によると、両漢期の鉄器管理では、朝廷は「生產を制限して鉄を供給す

る」政策をおこなっていた。すなわち、鉄官のコントロールのもと、辺疆地域での私鉄を禁止するとともに、中原地区の南陽一帯の大鉄官から周辺地域に「一元供給」する方式で鉄器、あるいは鉄器を製作する板材を供した^[3]。そのうちの鉄製品は農具と生活用品に限られ、武器に類する製品は当然嚴禁であり、辺疆地域における反乱が生じるのを防いだ。このような鉄供給政策は塞外北疆地域、とりわけ戰禍が四方に広がり戦乱が続いた十六国期の鮮卑など少数民族からすると、とてもその需要を満たすものではないのは明白で、とくに武器類に対する需要は到底十分なものではなかった。喇嘛洞墓地出土の鉄器からみて、武器の種類は生産工具に及ばないとはい、その数量はかえって前者よりも多く、860点以上に達し、そのなかで刀、劍、矛といった大型の長兵類は300点近くある。

これら数多くの鉄製武器が出土することから、正常な貿易経路では獲得できない状況下では、その供給源は2つしかない。ひとつは戦争を通して敵から獲得すること、もうひとつは「自力で再生」する模造生産である。必要とする重要な原料、つまり炒鋼は「一元供給」あるいは互市などからのルートで獲得できた一部の板材をのぞくと、板材が手に入らない場合は鉛を壊して鉄を得て、遷徙あるいは略奪してきた、炒鋼技術を有する漢人工人によって再び加熱鍛打、溶融製鍊して必要な各種鉄器が製作された。喇嘛洞墓地鉄器の金相鑑定結果もまた、39点のうち、炒鋼法による鉄製品が16点ともっと多く、鑄鉄脱炭鋼よりも上回ることが明らかとなっている。そして16点の炒鋼製品のなかではまた、武器が多くを占める。これは炒鋼技術がすでに主要な鋼製作技術となっており、かつ武器製作に広く応用されていたことを示している^[4]。成語に「劍を鉄で鉛と為す」という記述がある。戦をやめて農を振興し、戦争から平和へ変わるという意味である。これとは逆に、慕容鮮卑の炒鋼原料を得ようとする方法はある種「鉛を壊して劍を鍛える」行為であった。もしかしたら、これは当時の漢朝廷がおこなっていた“生産を制限して鉄を供給する”政策と北方民族の武器に対する大量需要の間の矛盾がかなり大きくなったときに採られた、やむを得ない行為であったかもしれない。当然ながら、このような現象の発生は慕容氏集團が中原地域の鉄官故地を占領する前燕建国前、炒鋼原料の供給が相対的に逼迫していたときであったに違いない、建国以降ではないだろう。

このほかに言及しておかねばならないのは、考古報告書として正式出版された『榆樹老河深』についてである。この報告書のひとつの難点は、鉄器の形態と金相の間の必ずしも高くない対応性である。すなわち、金相鑑定をした鉄器は往々にして実測図あるいは写真が掲載されておらず、このため鉄器に反映される情報はただ「一点のみをのぞき見て、全貌を把握しがたい」細片の情報なのである。このような状況となってしまった要因としては、ある面では考古発掘報告に体裁と紙幅の限りがあるためであり、またある面では測定サンプルの採取法による制限、つまり完形鉄器の破壊を避けるために、破損測定はできる

だけ破損資料を選んでおこなわれた。そしてこのように測定された破損鉄器はまた往々にして、報告書執筆者に粗末に扱われるのである。この点に関しては、共同研究を行う双方が適切に注意し改善する必要がある。

4. 若干の思い

歴史の長い流れのなかで、人類は地を這う状態から直立歩行し、三つの長期あるいは短期の忘がたい時代をへてきた。C.トムセンが提示した有名な「三時期法」はすでに学界の公認するところとなつたが、実際には人類社会のこのような発展過程には二つの「大時代」、すなわち長期間の石器時代と短期間の金属時代をへたにほかならない。この二つの「大時代」はまた、考古学が考古学文化に即して区分した四つの「小時代」、すなわち石器時代に属する旧石器時代と新石器時代、金属時代に属する青銅器時代と鉄器時代を含んでゐる。この四つの時代のうち、鉄器時代はもっとも短く、またもっとも重要な時代である。鍛冶煉治と鍛打柔化を重要な特徴とする中国古代の鋼鐵製造技術の発明、およびこの技術で製作された大量の鉄器は、人類社会の政治・経済・軍事・文化に対して巨大な影響を与えた点で、いずれもその他、新石器・旧石器・青銅器時代とは比べものにならない。このため、全人類社会の発展史の研究において、鉄器は我々が鉄器時代を研究するもっとも主要で重要な実物資料であることは間違ひなく、鉄器および鉄器研究は重要な位置にある。今日になって石器時代と青銅器時代はいずれも眞に遠い過去となつてゐるが、鉄器時代と鉄器は過去を通り抜けて現在の鋼鐵時代へといたる。また普遍的に我々に関係しており、我々のために黙々と、いたるところで万能の「工具」という重要な役割を担つてゐる。しかし多少残念なのは、嗜好が偏つてゐるためか、中国では約100年の考古学のなかで、すでに石器と青銅器はともに各時代の研究領域において首位を独占しているのに対し、鉄器時代の鉄器のみは依然、ぞんざいで不公正な扱いを「享受」し続けていることだ。

古代鉄器の最大の特徴はなにか。それは埋蔵量が最大で、製品の数がもっとも多く、硬度は最高で、もっとも応用幅の広い金属製品であることである。と同時に腐食しやすく、見た目が「醜い」ことからもまた、もっとも脆弱で顧みられることのない金属製品でもある。現在にいたるまで、そのほかの金属製品と比べて鉄器の保護と研究は今なお数の少ない専門調査である。人々の古代鉄器に対する態度は、まるでまだ「銅を貴び鉄を嫌しむ」というようなばら屑同然の認識水準の範囲を完全には脱却しがたいようで、意識的あるいは無意識的に「金になるのか、金にならないのか」という世俗的な価値観に左右されている。そのため、出土した鉄器に対しては整理が迅速でないか、あるいは保護が一定水準に達しておらず、さらには破損したものは遺物番号を与えられることもないまま出土遺物としても登録されず、極端な場合には、適宜これを棄てるという傲慢なおこないも時にみら

れる。

科学技術が高度に発達した時代において、我々は依然、未来世界において人類が生きるために頼ってきた鋼鉄に完全に代替しうる新材料が何なのかイメージできていない。さらには、現代の人類文明がもし鋼鉄の支えから逸脱したら、いかに脆弱に変わらのかイメージできない。よって、もし我々が金銀銅・堺玉陶というこれら「骨董」の類に興味津々であるように、熱心かつ辛抱強さをもって古代鉄器を理解し大切にしたならば、それは本当に学術の幸事である。学術の貴ぶべきところは、それがいかに高度であり、普通の人々に景仰の念を抱かせるかにあるのではなく、それが世俗に受け入れられなくとも偏愛することなく、すべては研究対象が有する科学価値を基準とすることである。古代鉄器に理解があつてこそ、現代の鋼鉄文明の過去をさらに一歩進んで理解することができ、この過去を理解してこそ現代鋼鉄文明の未来をよりよいものとして期待し、なおかつ把握でき、まさにこの一文明を大切に創造する人類となることができるといえよう。

註

- (1) 遼寧省文物考古研究所・朝陽市博物館・北票市文物管理所「遼寧北票喇嘛洞墓地1998年发掘報告」『考古学報』2004年第2期。原報告は喇嘛洞墓地の年代を3世紀末～4世紀中葉と推定しているが、現在の見解では4世紀初め～後期とすべきで、すなわちその上限は前燕建国前後間もなく、下限はおそらく後燕に達しているだろうという理解である。
- (2) 孫守道「匈奴西岱溝文化」古墓群の発見』『文物』1960年第8・9期(合刊)。吉林省文物考古研究所:『榆樹老河深』文物出版社、1987年。
- (3) 喇嘛洞墓地に関するデータは刊行が待たれた考古発掘報告書『喇嘛洞三燕文化墓地』内の統計資料であるが、出土遺物の総数はまだ最終的に確定していない。もし変動があれば、正式発表をもって正とする。老河深と西岱溝の統計データは註2を参照。このうち後者の鉄鏡の数は不明であるため、カウントしていない。
- (4) ある認識では、三燕文化の上限は352年に慕容皝が冉魏を滅ぼして燕国を創建した時で、慕容皝が燕王に自立した337年に始まるすべきではないとする。このため、もし352年を境とするならば、その前の慕容鮮卑文化は東晉文化的範疇となり、その後、ようやく東文化と並列する三燕文化とみなすことができる。
(参照) 孫進己主編『東北歴史地理』第2巻、102頁、黒龍江人民出版社、1989年。
- (5) 同註(1)。
田立坤「關於北票喇嘛洞三燕文化墓地的幾個問題」『遼寧考古文集』2、科学出版社、2010年。
陳平「遼西三燕墓葬論述」『内蒙古文物考古』1998年第2期。
曾庸「遼寧西岱溝古墓群為烏桓史述論」『考古』1961年第6期。
劉景文「吉林榆樹老河深墓群族属探討」『北方文化』1986年第1期。
- (6) 陳山「喇嘛洞墓地三燕文化居民人骨研究」158頁、科学出版社、2013年および朱泓の序言部分。
- (7) 同註(1)。
- (8) 譚其謙主編『中国歴史地図集』第4冊、9～10頁、中国地図出版社、1982年。
- (9) 本文中の図二是、以下の文献を参照して作成した。
韓汝玢主編『中国古代科技史』歯山礦治卷、506頁、図8-3-1、2007年。

- (10) 高蒙河「銅器與中國文化」109頁、漢語大詞典出版社、2003年。
- 楊寬「戰國史」上海人民出版社、1980年。
- 陳建立「從鐵器的金屬學研究看中國古代東北地區鐵器和冶鐵業的發展」「北方文物」2005年第1期。
- (11) 「後漢書」卷90 烏桓鮮卑列伝。
- 烏桓はまた烏丸と書かれ、「三国志」卷30 烏丸鮮卑列伝の裴松之注のなかにも同様の記載がある。
- (12) 北京科學技術大学冶金與材料史研究所・遼寧省文物考古研究所「北票喇嘛洞墓地出土鐵器的金相實驗研究」「文物」2001年第12期。
- 陳建立ほか「漢晉中原及北方地區鋼鐵技術研究」75頁、表5.1、北京大学出版社、2007年。
- (13) 李京華「中國秦漢冶鐵技術與周圍地區的關係」「中原古代冶金技術研究」201頁、中州古籍出版社、1994年。
- (14) 同註 (12)。

彫金技術を資料化するMacro撮影

栗山 雅夫

1. はじめに

考古遺物を撮影する際に重要なのは、材質感と立体感を表現することである。この表現は実測図と異なり、カメラのアングルやライティングを駆使することで表すことができる。平面的なものと考えがちな俯瞰撮影においてもこれらの表現は重要であり、本稿で取り上げる微細な彫金技術を撮影する際にも念頭に置いて撮影することが大切である。

さて、諫早直人は金工品の彫金技術に注目し、古墳時代中期に始まったとされる日本の初期金工品生産と、それに先行する中国からの舶載品の相違点と共通点を、本書所収の論考で整理している。さらに、倭や新羅の初期金工品についても同様の視座で検討を行なっており（諫早・鈴木2015、諫早2016）、東北アジアの枠組みの中で金工技術の伝播に関する研究が近年進みつつある。その学術的な意義は諫早論考に任せるとして、本稿ではこれらの金工品の製作技法を研究する際に写真が重要な役割を果たすことを確認し、比較研究を可能にする資料化を目指した撮影方法を提示するものである。具体的には、時代性や地域性、さらには工人の個性を読み取ることができる金工品の彫金技術を、精緻な写真として記録するために必要な機材と撮影方法を紹介する。

彫金技術研究の現状について諫早は、「離れた地域から出土した資料の比較には様々な障害があり、とりわけそれぞれの地域で別個に構築された暦年代観は、彼我の直接の比較を困難なものとしている。」ことを指摘し、「報告書の写真や実測図からは読み取ることのできない彫金技術の個性は、(中略) 金工品の生産を議論する上で最も基礎的な単位となる。」(本書293・304頁) ものと考えている。そして金工品研究の流れについて、「形態や文様、装飾など‘かたち’を基準に分類していた段階から、製作技術や彫金など‘かたち’をつくりだす‘技術’にもとづいて、既存の分類体系を再構築する段階へと移行しつつある」(諫早2016) ととらえている。したがって、客観的な比較検証を可能とする細部写真を、一貫した撮影技術により資料写真として蓄積することは、金工品研究の前進に欠かせないものといえるだろう。

なお、豊島直博は、遼寧省文物考古学研究所が調査した喇嘛洞遺跡出土の三燕時期鉄製刀剣などを取り上げ、三燕と日本の共通点や相違点を整理して、東アジア流入の画期と背景を検討するにあたって、細部写真の重要性を強調している（豊島2006・2010）。豊島は刀

劍の研究視座について、「刀剣装具の材質、部品の組み合わせ方、鉄本体への装着方法、装具の穿孔方法などに細かな年代差や地域性が表れる」(豊島2010)とする一方で、研究成果を提示するには既報告書の実測図や写真図版では事足りない場合が多いことを述べている。なかでも写真図版に関しては、全体像のみを掲載している報告書が多いため、自身で撮影した細部写真を多用したことを明記している。ちなみに、その細部写真はスケールアウトで掲載されているが、概ね数cm～十数cmの範囲を観察対象とするものである。

一方、本稿が対象とする彫金技術では、1mmに満たない痕跡まで視野に入れて記録する必要がある。さらに客観的な資料化を考えるなら、比較検討をスムーズにするため、スケールを持たせる必要もある。このような視点の研究が普及するには、筆者のような写真担当者がいない多くの研究機関や行政機関はもとより、中国をはじめとする海外の研究機関でも同じように撮影されることが重要である。今回の撮影では、そうしたことを行なう機材・方法により撮影を行なって欲しいとの要請もあり、機材選択では市販されているものや、簡単に準備できるものを用いて、撮影方法も原理的で簡便なものになるよう心掛けた。

2. 機材の選択

遺物の比較研究を行なう際は、現物を確認して詳細な観察を行なった上で、実測図や写真で記録する作業が基本となる。ところが、遺物が遠隔地に収蔵されており、大量にある場合には、報告書に記載された図や写真、報告文をもとに研究を進めることになる。国を跨いだ遺物を広域的に論じる研究では、尚更そうした形をとることが多くなるだろう。その際に、研究視点が細部におよんだり、あるいは新たな視点で検討する必要が生じた場合、従来の報告書に記載された内容では情報が不足することになる。研究の流れが、精緻なものへと進むのは当然の成り行きであろうが、近年の研究の深化は、従来の報告書が想定する図版の精度ではカバーしきれないものが出てきているようだ。前述した諫早や豊島の指摘は、こうした研究の現状を示したものであろう。

この状況に対して写真を資料化する観点から、出来るだけ簡易な方法で対処できるMacro撮影の方法を撮影機材と撮影方法から提示するのが本稿の役割である。下記の機材は、筆者が実際に使っている撮影システムで、印刷までを念頭におきつつ可視化できるサイズは最大10倍程度、0.5mm以下の細部調整痕跡も視認することを想定したものである。

使用機材

Camera : Nikon D5 (2082万画素) ※2000万画素以上のフルサイズセンサーであればよい。

Lens : Nikon AF-S VR Micro Nikkor ED 105mm F2.8 G (IF)

三脚 : BENRO ネオフレックスC2980T、

雲台 : Manfrotto 3way雲台 MHXPRO-3W

光源 : Main Light…aurora ORION400 ※JINBEI DM-5等モノブロックストロボでよい。
 (COMET CTアンブレラナイロン N-35装着…通常撮影)
 (COMET ハニースポットL装着…高精度Macro撮影)

Back Light…Nikon Speed Light SB-800 (Godox Softbox装着)

Stand : Manfrotto LIGHT BOOM35 (100cm長)
 Lowel KS Jr Stand

背景紙 : Superior Back paper Snow white (75cm幅)

撮影台 : 自作俯瞰台 (B4size)

PC : mac book air (Nikon camera Control Pro2によるリモート撮影)

その他 : COMET 無線シンクロ装置RS発信器・受信機 (シンクロコード直結でも可)

こうした基本的な撮影機材に加えて、レフ板の役割を果たすノリバネや鏡、余分な光をカットする黒紙、遺物を正位置で立たせるための消しゴムや木片といった撮影小物もいくつかある。小物については、撮影意図にあわせてその都度組み合わせるものであり、撮影者の創意工夫で必要な役割を果たせばよいので、ここでは詳述しない。

ここに挙げた機材は、筆者が海外調査撮影時にも持参しているもので、様々な撮影場所に出向く中で、かさばる機材を切り詰めながら到達した現時点での最小ユニットである。もちろん、多数の遺物集合写真や大型の遺物単体写真などの場合は、別途機材を追加する必要があるが、単体遺物を中心とする俯瞰撮影が主体であれば、レンズを選択することで大抵は事足りる。アオリ操作を必要とする立面写真についても、PC-E Micro Nikkor 85mmレンズを持ち込んで、撮影している。これらの機材は、①カメラ・レンズやPC類を入れるバックパック、②三脚やスタンド類を入れる径23cm×90cm長のバッグ、③ストロボや俯瞰撮影ガラスと撮影小道具を入れる40×30×30cmのバッグと計3つの荷物にまとめられる。自分の荷物も含めると2人で持ち運びした方が体に優しいが、キャスター付のケースを使用すれば1人で運搬可能である。これは、立面撮影や小物の集合写真撮影も念頭に置いた道具立てなので、今回紹介するような俯瞰撮影に限定すれば、さらに機材を少なく、小さくすることが可能である。

3. 主要機材について

前述した機材の中には、ライトスタンド等代用品で全く支障がないものもある。だが、中国の三脚メーカーであるBENRO社のネオフレックス三脚は、センターポールを抜き出して倒立してサイドアームに切り替えできる機能が秀逸で気に入っている。カーボン製も安価で機材のコンパクト化に貢献している。同様の観点では、光源として使っているORION400は、韓国のメーカーであるaurora Lite Bank社のモノブロックタイプストロボが便利だが、近年では中国メーカーで安価・良質のものが発売されている。デジタル撮影では回折現象の影響を大きく受けるため、銀塩写真のように絞り込むことは解像性の低下に直結する。画質を求めるなら、絞りはF8~11、どんなに絞っても16までに留めるべきである。さらに、最近のデジタルカメラの高感度特性は著しく向上している。こうしたことから、光源の出力は以前よりも少なくて済むようになった。ORION400は、400Wsから12Wsまで1/10EVステップで調光でき、デジタル撮影で過不足のない光量を持ちながら、価格も日本製の同等品より4割程安価である（※中国製はさらに安価）。

図1、2はこうした機材を用いた撮影風景である。図1のカメラ三脚とストロボライトームを御覧頂きたい。カメラの反対側、ストロボの反対側に袋がぶら下がっているのが見えるだろうか。これはカメラのブレ防止とライトスタンドが倒れないように袋に重りを入れて荷重をかけたものである。少人数の調査体制で重りを持ち運ぶのは負担以外のなものでもないので、訪問先で袋に入る重量物を入手するようにしている。本や石などいくらでも重いものは転がっている。袋も日本のスーパーのレジ袋は、小さく折り畳め、非常に丈夫なのでオススメだ。

必要な機能を持ちながら、安価でコンパクトなものを求めた結果がこれらの機材である。そうは言うものの、高精度の画質を得るために注意を払うべきものがある。それは、カメラボディーとレンズ、そして撮影手法である。



図1 倒映撮影風景（全体像撮影）



図2 ハニースポットを使用したMacro撮影

(1) カメラの選択

カメラボディについては、フルサイズの一眼レフカメラが携帯性と画質、レンズバリエーション、価格の面で最適である。とはいっても、フルサイズの一眼レフカメラのカテゴリー一つをとっても、これまでに多くの機種が発売されてきた。Nikon派、Canon派といった好みや所有するレンズの縛りもあると思われるが、どのメーカーが優れているかまで踏み込めないが、できるだけ新しい画像処理エンジンを搭載したカメラが望ましい。また、最近ではフルサイズミラーレス一眼も発売されている。

デジタルカメラの性能は今も進化の途中にあり、新しい画像処理エンジンはノイズの低減や撮像素子の性能を引き出す要となるものである。また、画素の多寡も高倍率・高精度を目指すMacro撮影では、鍵となる。結論からいえば10倍以内の拡大率であれば、2000万画素程度のものが、使い勝手も良く高画質に結びつくだろう。なお、Macro撮影に限っていえば、撮像センサーの小さいカメラは被写界深度が深いのでピントの合う範囲が広く、被写体に対する最短撮影距離もより短くなるので優位な点がある。しかし、凹凸を出すライティングを行なうには遺物とカメラの間に一定の距離は必要で、画質を考えるとRAWデータ撮影が欠かせない。さらに今回のようにMacro撮影以外の撮影も同時に行なうことも踏まえると、フルサイズ一眼レフでの撮影が最も汎用性に優れるものとなる。

より高倍率な画像が必要なら、クローズアップレンズの併用も考えられるが、新たに収差の問題も発生し画質の低下は否めない。となると、Nikon D850（4575万画素）やCanon EOS 5Ds（5060万画素）のような高画素モデルも選択肢に加わるが、画質を左右する画素ピッチが相対的に小さくなり、細部の描写力を低下させることが懸念される。もちろん新型の画像エンジンを搭載したカメラを使用することで以前より解像性は向上しているだろうが、フルサイズという撮像サイズの絶対的な制約からは逃れようがない。

さらに高画素化にシフトするなら、中判デジタルカメラが候補に挙がるが、必要機材の大型化と機材費の高騰を招く。一貫した機材・方法で多くの機関に同種の撮影を求める本稿の趣旨とも離れてしまう。また、後述するようにMacroレンズのラインナップは35mm一眼レフタイプの方が充実しており、極端な部分拡大や大きくプリントアウトする必要がなければ、フルサイズ一眼レフタイプのデジタルカメラが最適な機材と考えている。

奈良文化財研究所写真室では、一眼レフタイプのデジタルカメラとしてCanonとNikonを保有しているが、筆者の所属する飛鳥藤原地区ではNikon製品を使用している。今回の撮影では、被写体の大きさや必要な写真について事前に資料を準備し、必要な画質を検討した。その結果、現有機材で候補にしたのは、D3x（2008年発売・2450万画素・EXPEED）とD4（2012年発売・1620万画素・EXPEED3）である（※2015年当時）。両者の解像力を確認するため、スプーンの柄を撮影したところ、文様の輪郭や表面の擦痕、付着した塵など

D4の方がうまく解像していた。これは画像処理エンジンの新旧と、画素の少なさからくる画素ピッチの大きさが相乗した結果と思われる。D810やD4sといった高画素・後継機種モデルを保有しておらず推測になるが、解像性の優れた写真を撮る際、必要最小限の画素数で新しい画像処理エンジンを持つモデルが良い結果に繋がることを示唆している。

(2) マクロレンズの選択

次にレンズについて述べる。現在発売されているNikon FXフォーマットのMacroレンズは60mm（新旧）、105mm、200mmの4本である。これにアオリ機構持つレンズを加えると、45mm、85mmのものが加わる。今回の被写体は、1mmにも満たない彫金痕跡を写し撮ることを目指すものであり、拡大率から必然的に105mmに絞り込まれることになる。

なお、今回使用した105mmレンズは、2006年発売のモデルでデジタルカメラに対応した新しい設計のものである。銀塗フィルムカメラ用のレンズも使えないことはないが、撮像素子が平面であるというデジタルの特性や写した画像をピクセル等倍で観察する機会が増えたことで、シャープネスや解像性能を求めるハードルはデジタルカメラ用の方が高くなっている。また、新しいレンズコーティング技術やレンズ補正機能も加わっており、Macro撮影の精度を高める上でデジタル設計されたMacroレンズは欠かせない。

参考までに、中判デジタルカメラのMacroレンズを紹介しておく。Pentax社の645マウントレンズでは、デジタル設計の90mm（35mm判換算で71mm）と銀塗設計の120mm（35mm判換算で94.5mm）がラインナップされている。また、Phase One社の645カメラシステムのMacroレンズは、120mmのみである。

このことから、細部を大きく写しとる必要がある撮影では、35mmフルサイズ一眼レフカメラに、デジタル設計されたMacroレンズを使用するのが、汎用性も高く効果的である。

(3) ライティングの要点

最後に、撮影手法を紹介しておきたい。諫早論文の図版（307～312頁）を御覧いただければわかるが、今回の金工品は全体像を等倍で、細部彫金痕跡を10倍で掲載している。これは、同時に写し込んだスケールを元にリサイズ調整したものである。そして、全体像と彫金痕跡では、表現すべき内容が異なるため、ライティングを変えている。図3は、俯瞰で全体像を撮影したもので、彫金文様が失われない程度に光を回しつつ、文字通り遺物全体を観察できるように



図3 全体像撮影



図4 彫金痕跡Macro撮影（コントラスト強）



図5 彫金痕跡Macro撮影（コントラスト弱）

光を調節している。具体的には、径65cmの小アンブレラを使用して、高さ3cm程のこれまた小さいレフ板で光を返している。図4は、彫金痕跡のみを狙ったものである。光源に図6のハニースポットを装着して光を直線的にし、それを図2のように鋭角にあてている。この結果、陰影が強調され、彫りの種別や切り合い関係はもちろん、表面の擦痕も観察することができるだろう。

ここで注意を払うのはレフ板の使い方である。遺物に対して直線的な志向性を持つスポット光を当てているので、レフ板の大きさや角度を微調整しないと、図5のように光が回りすぎてしまう。被写体の部位にもよるが、この場合は撮影台下面からの光もあるので、レフ板無しでもいいだろう。この加減は、細部のどこまでを写し撮るのか考えて、その都度取捨選択することになる。全体像を写す写真と細部を写す写真では目的とする役割が異なるので、写し撮る内容やそれに応じたライティングに意識を向けるのが大切である。

この細部撮影時に細心の注意を払わなければいけないのは、カメラブレ・ピントズレとホコリの付着である。撮影している時点では、遺物に付着した糸くずやホコリを見逃すこ



図6 陰影を強調できるハニースポット



図7 自作俯瞰撮影台

こうした撮影に際して使用しているのが、自作の俯瞰撮影台（図7）である。これはB4サイズのファイルケースに、3mm厚のガラスと脚部にあたるノリバネや光を拡散するフィルムを一体的に収納したものである。脚部には建具に使うプラスチック製レールを切断して張り付けて、その溝にノリバネを嵌めて固定している。俯瞰撮影台の背景光源には、スピードライトを使っている。スピードライトの発光部には、これも中国Godox社製のアクセサリーキットに含まれていたsoftboxを装着し、光を拡散させている。同梱品にはハニカムグリッドも含まれており、今回の撮影で用いたスポット光を簡便に作り出せそうだが、それはまだ試していない（図6右）。

4. おわりに

mm単位の彫金技術の資料写真化を念頭において、高精細高倍率を目的とするMacro撮影機材と撮影方法を紹介した。諫早が指摘するように、考古遺物の研究が「かたち」から「かたちを作り出す技術」に移行しているとすれば、金工品以外の遺物についても従来の報告書に記載された図や写真からは読み取れなくなる事例が今後増えていくことが予想される。デジタルカメラの登場と進化は、そうした高精度化を実現する上で大きな助けとなるものである。デジタル技術進歩の恩恵は、国際共同研究のような国を跨いだ広域研究でも大きな力となる。私は今回の機材で日本と中国で撮影を行っているが、本稿の試みを実

とがある。筆者は視力1.0、45歳を越えたが老眼もなくこの仕事をする上で恵まれていると思うが、視認できなかった微細なホコリを撮影後のモニターで発見してガックリすることがある。保管状況によっては、事前にプロアード吹き飛ばすことも必要だろう。また、カメラブレとピントズレは致命的である。これらを回避するためには、三脚を重く頑丈にするとともに、カメラに触れずモニターで拡大してピント合わせをするライブビュー機能が不可欠である。実際の現場ではUSBでPCとカメラをつなぎ、Nikon Camera Control Pro2のソフトを使って精密にピントを合わせ、PCからシャッターを切るリモート撮影を行なっている。

践するにあたり、少なくとも機材装備の壁は乗り越えられる印象を抱いている。したがって東アジアの遺物研究を進める際に、相互比較を可能にするレベルの写真資料を各地で蓄積していくことが今後重要になりそうだ。

今回提示したような機材選択や撮影手法が、各地の研究者の同意を得られるものであれば、これを基準点として広がってほしい。要点さえ押さえておけば、写真専門の者でなくても、撮影できるようなシステムを提示できたと今は思っているが、機材の進歩は止まることを知らない。より洗練されたシステムに更新されながら、記録として使える写真が撮られていくことを願っている。最後に、汎用性を併せ持つ高精度・高倍率を目指したMacro撮影方法の要約を記して、終わりとしたい。

- ・出来るだけ新しいモデルで2000万画素程度の35mmフルサイズ一眼レフカメラを使う。
- ・デジタル設計されたMacroレンズ（焦点距離100mm以上）を使い、絞りはF8～11に設定する。
- ・PCを介してピント合わせとシャッターを切るリモート撮影を行う。ミラーアップ併用。
- ・ライティングは、全体像と細部痕跡で表現する内容を分けて考える。微細な凹凸は、鋭角にスポット光を当てた撮影を行う。
- ・カメラブレ、ピントズレとホコリの付着には細心の注意を払う。

謝 辞 本稿の作成は、遼寧省との国際共同研究に関する類例調査として宮内庁所蔵品の金工品撮影に諒早氏と行う際に、日中両国で相互比較できる写真を撮る必要性があることを説かれ、その為の撮影技術を紹介する原稿を書くことを勧められたことによる。また、遼寧省文物考古研究所の穆啓文氏には、この共同研究に関わる写真撮影業務を進めるにあたって、写場使用の便宜を図って頂き、かつ親交を深めることができた。記して謝意を表します。

本稿で紹介した撮影技術が架け橋となって中国の彫金技術資料や日中両国の間を取り持つ韓国や北朝鮮の資料も蓄積され、将来それらが相互比較されることで東アジア文化史の解明にいくらかでも寄与することに繋がれば、望外の喜びです。

引用・参考文献

- 諒早直人・鈴木勉 2015「古墳時代の初期金銅製品生産—福岡県月岡古墳出土品を素材として—」『古文化談叢』第73集、九州古文化研究会。
- 諒早直人 2016「新羅における初期金工品の生産と流通」『日韓文化財論集Ⅲ』奈良文化財研究所・韓国国立文化財研究所。
- 豊島直博 2006「三燕および日本鉄製刀剣の比較研究」『東アジア考古学論叢—日中共同研究論文集一』奈良文化財研究所・遼寧省文物考古研究所。
- 豊島直博 2010「東アジアの鉄製武器」『鉄製武器の流通と初期国家形成』奈良文化財研究所。

2020年3月17日印刷
2020年3月27日発行

東アジア考古学論叢 II

—遼西地域の東晉十六国期都城文化の研究—

奈良文化財研究所学報 第98冊

著 作 権 独立行政法人 国立文化財機構
所 有 者 奈良文化財研究所

編集・発行 独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所
奈良市二条町9番1号
TEL 0742-30-6751（速拂推進課）

印刷・製本 岡村印刷工業株式会社

ISBN 978-4-909931-21-4